

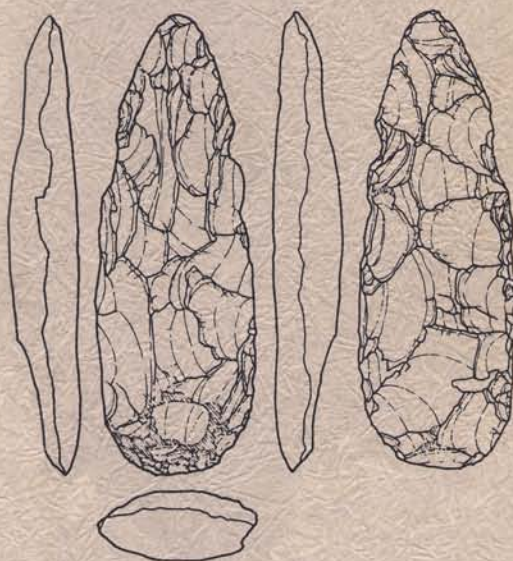
近畿自動車道(久居～勢和)

埋蔵文化財発掘調査報告

第 1 分 冊 1

上ノ広遺跡
大原堀遺跡
花ノ木遺跡
浅間山北遺跡

浅間山南遺跡
积尊寺遺跡
下村A遺跡
下村B遺跡



1989・3

三重県教育委員会



上ノ広遺跡（南東から）



花ノ木遺跡（東から）



上ノ広遺跡出土石器

高田 健司氏 撮影

序

近畿自動車道関・伊勢線第8次区間（久居～勢和）の建設予定地は、県下でも屈指の埋蔵文化財が密集する地域を貫いています。

全長26.1kmの路線内で、発掘調査の対象となったのは41遺跡約15万㎡におよび、膨大な遺跡が記録として残されました。

ここに報告する10遺跡は、昭和59年度から61年度にかけて調査されたものうち、松阪市、多気町、勢和村に所在するもので、古くは先土器時代から中世にわたる各時期の貴重な資料であります。

これらは言うまでもなく、それぞれの地域に根ざした先人たちの固有の文化を受け継いだものであり、地域の歴史を考える上で重要な資料となりましょう。

調査を終えて工事が進行する今、すでにこれらの遺跡は姿を消してしまい、もはや見ることはできませんが、この報告書が地域の歴史理解のための文化遺産として、十分活用されることを願ってやみません。

調査に際しては日本道路公団、県土木部、三重県住宅供給公社（現三重県土地開発公社）、及び松阪市、多気町、勢和村の各関係機関、また地元の方々のご理解とご協力を得られましたことについて、心より感謝の意を表します。

1989年3月

三重県教育委員会

教育長 中 林 博

例 言

1. 本書は三重県教育委員会が、日本道路公団名古屋建設局から委託を受けて実施した、近畿自動車道関・伊勢線第8次区間（久居～勢和）建設予定地内に所在する埋蔵文化財発掘調査のうち、昭和59年度から61年度に実施した櫛田川流域に所在する10遺跡についての発掘調査報告書（第1分冊）である。
2. 調査にかかる費用は、日本道路公団の全額負担による。
3. 調査は三重県教育委員会が主体となり、同事務局文化課が担当した。
4. 本書作成にかかる遺物整理および報文執筆について、下記の方々から指導、助言を賜わった。また西村康、広岡公夫、三辻利一、磯部 克の四氏からは玉稿も賜わった。記して謝意を表す。（順不同、敬称略）

西 村 康（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター発掘技術研究室長）

大 脇 潔（奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官）

広 岡 公 夫（富山大学教授）

井 上 喜久男（愛知県陶磁資料館）

三 辻 利 一（奈良教育大学教授）

藤 沢 良 祐（瀬戸市歴史民俗資料館）

稲 垣 晋 也（皇学館大学教授）

磯 部 克（三重県立津西高等学校教諭）

奥 義 次（度会町教育委員会）

石 黒 立 人（愛知県埋蔵文化財センター）

5. 本書の執筆分担は後述のとおりである。基本的には調査を担当した者が執筆したが、事情によりできなかった遺跡もある。それぞれ文末にも執筆者名を記し、編集を田村が行った。なお、上ノ広遺跡の遺物のうち石器の実測および報文は、鈴鹿市教育委員会の新田剛、田中智子の両氏による。
6. 本書掲載の10遺跡については、すでに刊行している『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』（1985）および『同Ⅱ』（1986）、『同Ⅲ』（1987）において調査概要を公表したが、それらと本書で記述に若干の相違があるが、本書をもって最終的な報告とする。
7. 本書で報告した各遺跡の記録および出土遺物は、三重県教育委員会で保管している。
8. 本書に使用した遺構表示記号は下記のとおりである。また、遺構実測図作成にあたっては、日本道路公団の工事用杭（主として道路中心杭）を用い、調査担当者が測量を行い、国土座標を算出した。調査対象地域は第Ⅵ系に属し、方位の表示は座標北を用い、標高は道路公団工事用中心杭を基準とした。

S B 竪穴住居、掘立柱建物

S D 溝

S A 柵、塀

P 柱穴、ピット

S K 土坑

S E 井戸

S X 墓、その他の遺構

9. スキャニングによるデータ取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

執 筆 者

I. 前 言

1. 調査に至る経過 新 田 洋
2. 調査および整理の方法 田 村 陽 一
3. 調査の体制 /

II. 位置と環境

1. 自然的環境 田 村 陽 一
2. 歴史的環境 河 瀬 信 幸

III. 調 査 報 告

1. 上ノ広（森下池西方）遺跡 田 村 陽 一
 石製遺物 新 田 剛、田 中 智 子
2. 花ノ木（山崎）遺跡、浅間山北遺跡 田 村 陽 一
3. 釈尊寺（中牧）遺跡 田 村 陽 一
4. 下村A遺跡 河 北 秀 実
5. 第一次調査遺跡（大原堀遺跡、浅間山南遺跡、下村B遺跡） 田 村 陽 一

(付 篇)

- 櫛田川中流域の地質と岩石 磯 部 克

目 次

I. 前 言

1. 調査に至る経過	1
2. 調査および整理の方法	5
3. 調査の体制	7

II. 位置と環境

1. 櫛田川中流域の自然的環境	9
2. 櫛田川中流域の歴史的環境	13

III. 調査報告

1. 上ノ広（森下池西方）遺跡	21
2. 花ノ木（山崎）遺跡、浅間山北遺跡	75
3. 釈尊寺（中牧）遺跡	119
4. 下村A遺跡	137
5. 第一次調査遺跡	143

（付 篇）

櫛田川中流域の地質と岩石	153
--------------------	-----

	S X55	P L. 3-2	調査後全景
P L. 2-16	S D 1	P L. 3-3	S B 1
	S D21		S B 2, S A 5
	S D12	P L. 3-4	S K 3
P L. 2-17	S D34・35		調査風景
	S D34・35断面	P L. 3-5	S K 4
P L. 2-18	浅間山北遺跡遠景	P L. 3-6	S X 6
	浅間山北遺跡調査後全景		S X 7
P L. 2-19	出土遺物	P L. 3-7	S X 8
P L. 2-20	出土遺物	P L. 3-8	出土遺物
P L. 2-21	出土遺物	P L. 3-9	出土遺物
P L. 2-22	出土遺物	P L. 3-10	出土遺物
P L. 2-23	出土遺物	P L. 3-11	出土遺物
P L. 2-24	出土遺物	P L. 3-12	出土遺物
P L. 2-25	出土遺物		
P L. 2-26	出土遺物		下村 A遺跡
P L. 2-27	出土遺物	P L. 4-1	調査後遠景
P L. 2-28	出土遺物		調査後全景
P L. 2-29	出土遺物	P L. 4-2	出土遺物
	积尊寺遺跡	P L. 4-3	出土遺物
P L. 3-1	遺跡遠景	P L. 4-4	出土遺物
	調査前全景		

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	2
第2図	本書所収遺跡位置図	8
第3図	地形分類図	11
第4図	周辺遺跡分布図	14
	上ノ広遺跡	
第5-1図	遺跡地形図	21
第5-2図	発掘区位置図	22
第5-3図	発掘区土層図	24
第5-4図	遺構平面図、発掘区土層図	25~26
第5-5図	発掘区土層図	27
第5-6図	S K 2, 4, 5, 6, 7, 10, 15実測図	29
第5-7図	S K 8, 9実測図	30
第5-8図	S K 11実測図	31
第5-9図	S K 12, 13, 16実測図	32
第5-10図	S D 3, 17実測図	33
第5-11図	出土縄文土器実測図、拓影	35
第5-12図	出土石器実測図1	37
第5-13図	出土石器実測図2	39
第5-14図	出土石器実測図3	41
第5-15図	出土石器実測図4	42
第5-16図	A地区遺物分布図	43
第5-17図	B地区遺物分布図	67~68

第5-18図	S X 1 実測図、出土遺物実測図……69
第5-19図	S X 14実測図、出土遺物実測図……70
第5-20図	S X 14出土遺物実測図……71

花ノ木遺跡

第6-1図	遺跡地形図……75
第6-2図	発掘区位置図……76
第6-3図	発掘区地区割図……76
第6-4図	遺構平面図、東壁土層断面図…77~78
第6-5図	S K 30実測図、出土遺物……79
第6-6図	包含層出土縄文土器……80
第6-7図	包含層出土石器……82
第6-8図	S B 14実測図、出土遺物……84
第6-9図	S B 45実測図……86
第6-10図	S B 45出土遺物 1 ……87
第6-11図	S B 45出土遺物 2 ……89
第6-12図	S B 45出土遺物 3 ……91
第6-13図	S X 22実測図……93
第6-14図	S X 22周溝断面図……93
第6-15図	S X 22西周溝遺物出土状況、 および S X 22出土遺物……94
第6-16図	S K 9 実測図、出土遺物……95
第6-17図	S K 10実測図、出土遺物……95
第6-18図	S K 13実測図、出土遺物……96
第6-19図	S K 15, 16実測図、出土遺物 ……96
第6-20図	S K 17実測図、出土遺物……97
第6-21図	S K 19, 20実測図、出土遺物 ……97
第6-22図	S K 23実測図……98~99
第6-23図	S K 23出土遺物 1 ……100
第6-24図	S K 23出土遺物 2 ……101
第6-25図	S K 24実測図、出土遺物……104
第6-26図	S K 25実測図、出土遺物……105
第6-27図	S K 27実測図……106
第6-28図	S K 27出土遺物……106
第6-29図	S K 28実測図、出土遺物……107
第6-30図	S K 43実測図、出土遺物……107
第6-31図	包含層出土弥生土器……109
第6-32図	S X 54, 55実測図、出土遺物 ……110
第6-33図	包含層出土遺物……111
第6-34図	S B 14実測図……114

浅間山北遺跡

第7-1図	発掘区位置図……117
第7-2図	発掘区東壁土層断面図……117
第7-3図	遺構平面図……118

积尊寺遺跡

第8-1図	遺跡地形図……119
第8-2図	発掘区位置図……120
第8-3図	発掘区地区割図……121
第8-4図	発掘区北壁、西壁土層断面図……121
第8-5図	遺構平面図……122
第8-6図	S B 1 実測図、出土遺物実測図…123
第8-7図	S B 2, S A 5 実測図、 出土遺物実測図……124
第8-8図	S K 3 実測図……126
第8-9図	S K 3 出土遺物実測図……126
第8-10図	S K 4 実測図、出土遺物実測図…127
第8-11図	S K 9 実測図、出土遺物実測図…128
第8-12図	S X 8 実測図、出土遺物実測図…129
第8-13図	S X 7 実測図……130
第8-14図	S D 10, 11出土遺物実測図 ……131
第8-15図	包含層出土遺物実測図……132

下村A遺跡

第9-1図	遺跡地形図……137
第9-2図	発掘区位置図……138
第9-3図	A・B地区出土遺物実測図……139
第9-4図	C・D・E地区出土遺物実測図…140
第9-5図	F地区、その他出土遺物実測図…141

大原堀遺跡

第10-1図	遺跡地形図……145
第10-2図	出土遺物実測図……146

浅間山南遺跡

第11-1図	遺跡地形図……147
第11-2図	発掘区位置図……148
第11-3図	出土遺物実測図……148

下村B遺跡

第12-1図	遺跡地形図……150
第12-2図	発掘区位置図……151

表 目 次

第 1 表 発掘調査遺跡一覧…………… 3～4	第 5-11表 B地区出土遺物一覧表11……………54
第 2 表 実測図等整理番号一覧…………… 6	第 5-12表 “ 12……………55
第 3-1表 周辺遺跡一覧表 1……………15	第 5-13表 “ 13……………56
第 3-2表 “ 2……………16	第 5-14表 “ 14……………57
上ノ広遺跡	第 5-15表 “ 15……………58
第 4 表 A地区出土遺物一覧表……………42	第 5-16表 “ 16……………59
第 5-1表 B地区出土遺物一覧表 1……………44	第 5-17表 “ 17……………60
第 5-2表 “ 2……………45	第 5-18表 “ 18……………61
第 5-3表 “ 3……………46	第 5-19表 “ 19……………62
第 5-4表 “ 4……………47	第 5-20表 “ 20……………63
第 5-5表 “ 5……………48	第 5-21表 “ 21……………64
第 5-6表 “ 6……………49	第 5-22表 “ 22……………65
第 5-7表 “ 7……………50	第 5-23表 “ 23……………66
第 5-8表 “ 8……………51	
第 5-9表 “ 9……………52	
第 5-10表 “ 10……………53	

I. 前 言

1. 調査に至る経過

近畿自動車道関・伊勢線は、三重県鈴鹿郡関町を起点とし、伊勢市楠部町までの全長約68kmの高速自動車国道である。

この路線は、三重県の特に中南勢地域と近畿、及び中京経済圏を結ぶ重要幹線道路の役割を担うものとして重要な位置を占める。また一般国道23号線、42号線の交通混雑の緩和とともに、伊勢湾沿岸や内陸部の産業開発、伊勢志摩や紀州方向への今後とも増大する観光交通面に大きな使命を持っている。

近畿自動車道関・伊勢線のうち、起点である関ジャンクションから久居インターチェンジ間の約21kmは三重国体を契機として昭和50年10月に既に供用されており、今回の建設計画はその延伸である久居～伊勢間約47kmの区間である。

昭和50年の関～久居間の開通後は経済状況等、種々の事情により建設事業は一時中断した形になっていたが、平成5年に伊勢神宮の式年遷宮、また近年ではその翌年に計画されている世界祝祭博覧会などを契機に、伊勢・志摩地方の経済と観光の基幹として、久居～勢和間の建設がさらに具体化し、その第1段階として昭和53年11月に整備計画が決定され、施工命令がだされた。これが近畿自動車関・伊勢線第8次区間（L=26.1km）である。

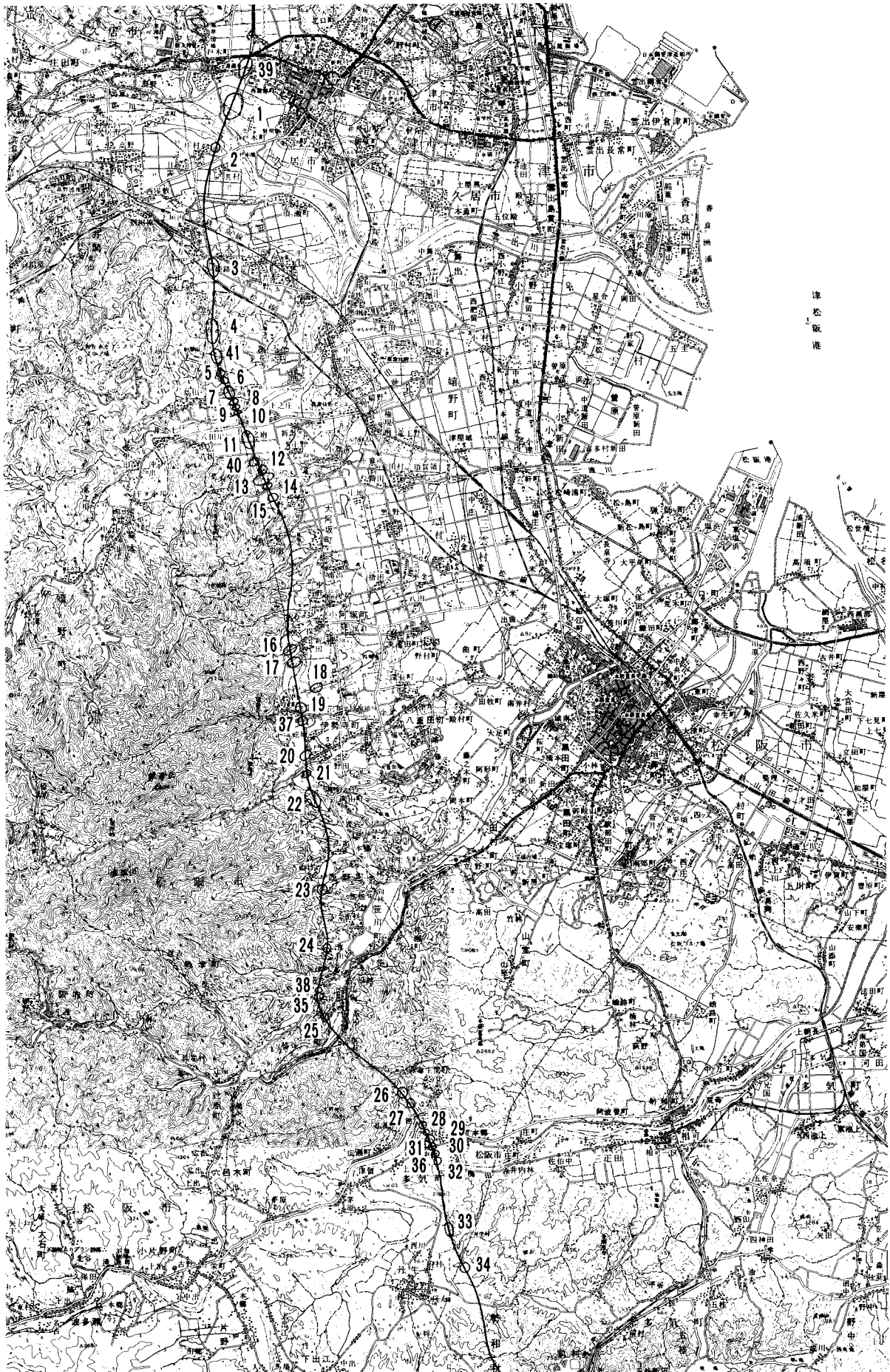
さて、建設計画地内にかかる埋蔵文化財の保護調整、協議は、県道路建設課からの情報を皮切りに、昭和59年9月に久居～松阪間の埋蔵文化財分布調査と、昭和53年の分布調査(松阪～勢和間)を実施することから基本出発し、昭和54年8月に計画地内の埋蔵文化財所在状況を正式に道路公団あて提示した。そして主として日本道路公団、県土木部との間で本格的な協議を開始していった。

先の2年間にわたる分布調査結果では、計画地内に34ヶ所、面積にして計約108,500㎡の埋蔵文化財が所在することが確認された。

経 緯

昭和45年6月	関～久居間基本計画決定
昭和46年6月	関～久居間整備計画決定、及び施工命令（第5次）
昭和47年6月	久居～伊勢間基本計画決定
昭和50年9月	県文化課、計画地内（久居～松阪間）の埋蔵文化財分布調査実施
昭和50年10月	関～久居間供用開始
昭和53年4月	建設省、環境影響評価報告書（久居～勢和間）を作成
昭和53年5月	県文化課、計画地内（松阪～勢和間）の地蔵文化財分布調査実施
昭和53年11月	久居～勢和間の整備計画決定、及び施工命令（第8次）
昭和54年8月	日本道路公団、県道路建設課、県文化課の3者で文化財の保護取り扱いにつき本格的協議を開始
昭和55年2月	日本道路公団松阪調査事務所を設置し調査開始（のち56年に松阪工事事務所に名称変更）
昭和55年5月	計画地内にかかる県指定史跡大河内城（松阪市大河内町）の保護について協議。計画地内から除外することに決定（現状保存）
昭和56年3月	実施計画認可
昭和56年4月	久居～勢和間路線発表
昭和57年3月	勢和～伊勢間整備計画決定
昭和59年3月	久居～勢和間幅杭設置開始
昭和59年10月	久居～勢和間用地買収開始

このような経過を経て、久居～勢和間の供用開始を昭和64年度中に行うとの公式表明がなされた。県



第1図 遺跡位置図 (1 : 100,000)

番号	遺跡名	所在地	調査面積(m ²)	調査期間 (元号は昭和)	担当者	概要	
1	小戸木遺跡	久居市小戸木町	192	計 62.3.3~3.5 62.9.20~9.24	宮田 勝功	遺構・遺物なし	
			240		木許 守	〃	
2	庄村遺跡	一志町庄村	304	62.9.14~9.20	新田 洋	遺構なし・遺物微量	
3	鳥居本(八反田)遺跡	一志町小山、新沢田	8,900	62.9.24~63.3.7 63.5.16~7.27	宮田 勝功	弥生中期方溝形墓など検出	
			2,640		小坂 宣広 河北 秀実	飛鳥時代の井戸検出	
4	西野(天花寺)古墳群	姫野町天花寺	3,400	62.11.9~11.31 63.5.16~9.28	新田 洋	(山林伐開)	
					新田 洋 山崎 恒哉	石剣・車輪石片出土、前期の古墳1基	
5	鹿野(口山田)古墳	姫野町島田	2,010	62.7.11~9.30	山下 雅春	古墳は密寄せによる盛土と判明 石後出土	
6	鹿野(口山田)遺跡	姫野町島田	3,500	62.5.11~8.24	宮田 勝功 新田 洋	奈良時代の住居跡など検出	
7	天保(天保B)遺跡A・B区	姫野町島田	7,200	62.5.7~9.4	田村 陽一	平安時代の竪穴住居など検出	
8	天保(一志西部)遺跡C区	姫野町島田	5,000	62.5.18~6.30	増田 安生	奈良~平安時代の竪穴住居など検出	
9	天保(天保館跡)遺跡D区	姫野町島田	3,800	62.7.1~8.12	増田 安生	〃	
10	天保古墳群 (含、天保遺跡E区)	姫野町島田	5,380	62.8.5~63.7.12	田村 陽一 野田 修久	6世紀中ごろの横穴式石室墳など	
11	堀之内遺跡	A区 姫野町堀之内	1,450	62.2.23~3.13 62.5.6~7.16 62.7.23~10.1 62.9.1~63.3.19 62.10.25~11.20 63.5.18~8.13 62.5.20, 6.29~7.22	新田 洋	(側道部分の調査)	
			2,200		河北 秀実	古墳~平安時代の住居跡など検出	
			2,200		河北 秀実	古墳~平安時代の溝など検出	
			5,400		14,250	増田 安生	弥生後期竪穴、平安の掘立など検出
			700		木許 守	古式土器器出土、ヤナ状遺構検出	
12	中尾遺跡	姫野町薬王寺	93	62.3.4 62.5.6~6.5	河北 秀実	(試掘)	
			507		河北 秀実	掘立柱建物3棟検出	
13	ビハノ谷古墳群	姫野町薬王寺	1,000	62.3.2~3.30 62.5.19~8.12	野原 宏司	(山林伐開、表土掘削)	
			12,000		野田 修久 木許 守	古式土器器出土、後期古墳1基	
14	女牛谷古墳群	松阪市小野町 姫野町薬王寺	4,031	61.12.15~62.2.21 62.5.7~7.11	野原 宏司	(山林伐開、第1次調査)	
			3,140		木許 守 野田 修久 山下 雅春	古式土器器出土 後期古墳4基	
15	平田遺跡	松阪市小野町	228	61.2.18~2.24	田村 陽一	遺構なし、遺物微量	
16	山見(下山見)遺跡	松阪市小阿波町	224	60.11.12~11.20	野原 宏司	遺構なし、遺物微量	
			4,400		野原 宏司	(試掘)	
17	新田遺跡	松阪市小阿波町	288	60.11.15~11.25 60.12.27~61.3.25	野原 宏司	(試掘)	
			4,400		野原 宏司	縄文後期土器出土	
18	垣内田遺跡	松阪市岩内町	428	60.11.26~12.12 59.12.27~61.3.25	野原 宏司	(試掘)	
			5,500		吉本 康夫	横穴式石室を主体とする古墳群	
19	蔵ノ下(阿崎古墳群)遺跡	松阪市岩内町	1,100	61.3.1~3.25 61.6.30~10.3	田村 陽一	(試掘)	
			1,400		田村 陽一	良好な資料となる縄文後期土器多数出土	

第1表 発掘調査遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	調査面積(m ²)	調査期間 (元号は昭和)	担当者	概要
20	覆長遺跡	松阪市伊勢寺町	304	計 60.10.18~10.24 60.11.26~61.3.18	田村 陽一	(試掘)
			2,404		河北 秀実	奈良~平安時代の竪穴住居検出
21	平林古墳群	松阪市伊勢寺町	4,021	61.6.9~10.3	新田 洋 河北 秀実	石室を主体とする古墳群
22	横根(西野)墳墓群	松阪市伊勢寺町、岡山町	5,500	60.7.1~61.2.27 61.5.31~12.5	田原 仁 宮田 勝功	500基におよぶ中世墓群
			2,500		田中喜久雄 吉田 勝功	後期小型内墳(横穴式石室)2基 後期小型方墳(木箱直葬)2基
23	さんざい林遺跡	松阪市西野町	176	60.10.25~10.26	田村 陽一	(試掘)
24	坂東(大河内5号)古墳	松阪市菅川町	180	61.7.23~8.19	野田 修久	中世土器片微量。古墳にあらず
25	大河内城堀切	松阪市大河内町	600	62.1.5~2.25	宮田 勝功	中世北畠氏の平山城大河内城の堀切
26	上ノ森(森下池西方)遺跡	松阪市広瀬町	224	60.3.22~60.3.31 60.7.1~60.10.14	土野 安仁 田原 仁 野原 宏司	(試掘)
			1,136		田村 陽一 野原 宏司	先土器末~縄文時代の石器多数出土
27	大塚堀(大塚堀南方)遺跡	松阪市広瀬町	144	60.10.28~60.10.31	田村 陽一	遺構、遺物微量
28	花ノ木(山崎)遺跡	多気町 牧	52	5,852 60.1.28~60.3.26	田村 陽一 田村 陽一	(試掘)
			5,800		田村 陽一 田村 陽一	弥生時代中期竪穴住居、方形周溝墓など検出
29	浅間山北遺跡	多気町 牧	44	1,044 60.1.28~60.2.23	高見 田村 田原 仁	(試掘)
			1,000		田原 仁	土師器細片、天目茶碗片出土
30	浅間山南遺跡	多気町 牧	470	60.3.25~60.3.31	河瀬 信幸 田村 陽一	遺構なし。遺物微量(弥生前期土器片)
31	牧瓦窯群 1・2・3号窯 4・5・6・8号窯 7号窯	多気町 牧	960	60.7.1~60.10.31 60.11.30~61.3.25 61.6.9~61.8.15	田中喜久雄 河北 秀実	白濁~奈良の瓦専用窯
			200		多気町 牧・鏡形	田中喜久雄 野原 宏司
32	釈尊寺(中牧)遺跡	多気町 鏡形	144	1,144 60.12.5~61.2.28	田村 陽一	(試掘)
			1,000		田村 陽一	掘立柱建物検出、中世土器出土
33	下村A遺跡	勢和村丹生	88	7,588 59.12.6~12.8 60.1.28~3.28	増田 安生 野原 宏司 吉本 康夫 山下 雅春	(試掘)
			7,500		増田 安生 野原 宏司	石鏡・石匙・山茶碗・瓦器片等出土
34	下村B遺跡	勢和村丹生	44	5,440 59.12.8~12.9 61.8.20~62.3.18	増田 安生 野原 宏司	遺構・遺物なし
			4,700		野原 宏司 野田 修久	五輪塔など出土。寺(養徳寺)跡の広場に築つげ。
35	岩谷遺跡	松阪市安津町	740	61.2.27~3.25	田原 仁	(試掘)
36	鏡形(牧)中世墓群	多気町鏡形	520	61.7.1~9.6	野原 宏司	石組の中世墓13基検出
37	横垣外遺跡	松阪市安津町	1,676	61.9.1~10.18	野原 宏司 野田 修久	鎌倉時代の掘立柱建物など検出
38	天神山古墳群	松阪市伊勢寺町、岩内町	1,750	61.9.20~11.4	新田 洋	横穴式石室主体の古墳群
39	久保屋敷(戸木)遺跡	久居市戸木町	12,000	62.9.1~63.3.31	山下 雅春 田中喜久雄	中世後半掘立柱建物、井戸、土器状遺構など検出
40	ビハノ谷遺跡	姫野町薬王寺	1,600	63.4.11~5.31	小坂 宣広	古墳時代竪穴住居。鎌倉時代掘立柱建物検出
41	西野遺跡	姫野町天花寺	600	63.7.12~8.3	野田 修久	古式土器器片出土

※調査総面積は151,715m²、ただし本調査面積に試掘面積が重複する遺跡あり。

教育委員会（文化財行政側）においても、工事工程とのからみ等から早急に組織と人的対応を含めた調査体制を構えることが急務の課題となった。

当初の道路公団要望としては、平成5年の伊勢までの開通計画の中での建設工程ともからめ、昭和59年度後半から昭和61年度までの2カ年半の期間で現地の発掘調査を終了してほしいという旨であった。

昭和59年4月には近畿自動車道発掘調査のための専任調査担当者の増員を図り、その準備を進めつつ、

9月には日本道路公団と三重県教育委員会の間で発掘調査委託契約を締結した。

12月から下村A、下村B、花ノ木（山崎）、浅間山北の4遺跡の第1次調査を実施するに至った。

翌昭和60年1月には松阪市丹生寺町下川原630に発掘調査整理所が完成した。相前後して下村A、花ノ木（山崎）、浅間山北の3遺跡についての第2次調査（本調査）に入り、いよいよ調査はその緒についた。（新田 洋）

2. 調査および整理の方法

1. 現地調査の方法

現地発掘調査は工事計画と調査期間とのかねあいから、昭和59年度から61年度までの3ケ年に現地調査を優先させ、その後の3ケ年で遺物整理、報告書作成を行なうこととなっていた。しかし用地買収の遅れ等のため59年12月からようやく調査に入り、63年10月までの約4年間を要して、41遺跡約150,000 m^2 の調査を終了した。

調査対象の遺跡は先土器時代から中世に及び、遺跡の種類においても集落跡、古墳、瓦窯跡、中世墓、中世城館など多種多様なものがあった。そのために統一的な調査方法をとることはできなかったが、原則的な方法を以下に記す。

地区割

計画路線は松阪市大河内町の国道166号線以南は南東へまがるが、以北ではほぼ南北方向をとる。そのため4m方眼で設定する地区杭は、各遺跡毎に適切な道路センター杭2点を結ぶ延長線方向に、北から南へ数字を、これと直交する方向で西から東へアルファベットを与え、各グリッドの北西の杭をグリッドの名称とした。

遺構カード

遺構カードは原則として4m×4mのグリッド毎に作成する。略図は遺構検出後、掘り下げまでに記入することとし、遺構の重複関係等はこれに明示しておく。

遺構番号はピットについては各グリッドごとに通し番号を付すこととし、土坑・溝・堅穴住居跡等は

遺跡ごとの通し番号とする。

写真撮影

遺構等の写真撮影は原則として6×9cm版（モノクロネガ、カラーリバーサル）及び35mm版（モノクロネガ、カラーリバーサル）による。このほか全景・特殊遺構等は4×5インチ版（モノクロネガ、カラーリバーサル）もあわせて使用する。また35mmデータカメラ（カラーネガ）でも同一カットの撮影をするほか、作業進捗状況にあわせて日誌としての撮影も行なった。

使用したカメラはウイスタSP（6×9センチ版・4×5インチ版）ニコンFG、FE2（35mm版）である。

遺構実測

道路工事計画に関する杭が国土座標に基づくため、将来予想される隣接地での発掘調査との関連が把握できるように、遺構実測は国土座標に基づいて行った。遺構実測は遣り方実測を原則とし、空中写真測量も導入した。なお、遺構実測図には各地区杭も表示するようにした。当地域の座標系は第VI系である。

2. 資料整理の方法

遺構実測図等

遺構実測、断面実測等の図面は、航測図面のような特殊なものを除き、原則として50cm×35cmの方眼紙（2mm方眼）を使用し、各々に6ケタの番号を付す。番号のうち上2ケタは、調査対象遺跡の番号（第1表の一覧表参照）とし、下4ケタを各遺跡ごとの図面の通し番号とする。これらの図面はA2版

の図面ファイルに収納し、図面番号、図面の内容、縮尺等を記入した一覧表を2部作成し、1部を各図面ファイルに貼付、他の1部を綴じ込んで図面台帳とする。なお、各図面ともマイクロ撮影も行い、同様に6ケタの通し番号を付した後ファイルへ整理する。

遺物実測図

出土遺物のうち実測可能なものは、原則としてすべて実測する。そして各々の遺物に6ケタの通し番号を付す。番号のうち上2ケタを調査対象遺跡の番号とし、下4ケタを遺物の通し番号とする。これらの図面はA2版ファイルに収納し、各遺物の番号、種類、名称、法量等のデータを記入した一覧表を作成する。また、遺物実測図はマイクロ撮影を行ない、データを記入した後ファイルする。このマイクロフィルムから原付の2分の1に引き伸ばしたものを貼付し、データを記入したA4版の遺物カードを個々の遺物について作成し、遺物台帳として保管する。また、実測不可能な遺物でも特にピックアップしたものは6ケタの通し番号を与え、一覧表に記載する。なお、6ケタの通し番号の与えられた遺物については遺物及び遺物ラベルにも、その番号を注記する。

遺構写真

モノクロ写真はベタ焼きとともにネガアルバムに貼付整理し、各コマ毎に地区名、遺構名、撮影方向等のデータを記入する。

カラースライドは、図面及び遺物と同様の方法により、各コマ毎にファイル枠に6ケタの通し番号を付す。そして、地区名、遺構名、撮影方向等のデータを記入した一覧表を作成し、1部をスライドファイルへ添付し、1部を台帳として保管する。

遺物写真

モノクロ、カラーとも各遺物に付された6ケタの通し番号によって整理を行なう。整理は遺構写真と同様。

拓本

拓本は、報告書図版等に使用する時はコピーを使用することとし、原本は別に保管する。その際に拓本はA3版の台紙に貼り付け、遺物に付された6ケタの通し番号を明記し、これをA3版のクリアファイルへ収納整理し、検索を容易にする。

本報告書に所収の遺跡についての各図面、遺物に付した6ケタの通し番号は以下の通りである。

遺跡番号	遺跡名	遺構	実測	図	遺物	実測	図
26	上ノ広	26-0001~			石器 土器	26-0001~ 26-5001~	
27	大原堀	27-0001~				27-0001~	
28	花ノ木	28-0001~				28-0001~	
29	浅間山北	29-0001~				29-0001~	
30	浅間山南	30-0001~				30-0001~	
31	牧瓦窯群	31-0001~			土器・石器類（瓦以外の遺物） 瓦1号窯 瓦2号窯 瓦3号窯 瓦4号窯 瓦5号窯 瓦6号窯 瓦7号窯 瓦8号窯	31-0001~ 31-1001~ 31-2001~ 31-3001~ 31-4001~ 31-5001~ 31-6001~ 31-7001~ 31-8001~	
32	积尊寺	32-0001~				32-0001~	
33	下村A	33-0001~				33-0001~	
34	下村B	34-0001~				34-0001~	
36	鍬形中世墓群	36-0001~				36-0001~	

第2表 実測図等整理番号一覧

3. 調査の体制

調査は三重県教育委員会が主体となり、同事務局文化課が担当した。

以下は昭和59・60年度の調査体制である。

昭和59年度

主査	伊藤久嗣	総括
主事	高見宜雄	調整・協議
技師	吉水康夫	下村A遺跡
主事	田阪仁	花ノ木遺跡ほか
〃	河瀬信幸	下村A遺跡
〃	田村陽一	花ノ木遺跡
〃	杉谷政樹	〃
〃	上村安生	下村A遺跡
室内整理員	谷久保美知代	
〃	近藤豊美	
〃	大西友子	
〃	野崎栄子	

昭和60年度

文化財第2係長	伊藤久嗣	総括
技師	吉水康夫	調整・協議
主事	田阪仁	横尾墳墓群
〃	田中喜久雄	牧瓦窯跡群
〃	田村陽一	上ノ広遺跡ほか
〃	河北秀実	牧瓦窯跡群ほか
〃	宮田勝功	横尾墳墓群
技師	野原宏司	上ノ広遺跡ほか
臨時調査員	青木尚根	
〃	御村充生	
〃	沼田茂	
室内整理員	谷久保美知代	
〃	近藤豊美	
〃	大西友子	
〃	野崎栄子	

調査補助員	伊藤裕偉 (関西大学)
	岩崎靖 (松阪大学)
	田村充 (奈良大学)
	半沢幹雄 (〃)
	出口正文 (京都産業大学)
	吉岡貴志 (皇学館大学)
	中瀬恵美 (県立相可高校)
	〃 克之 (〃)

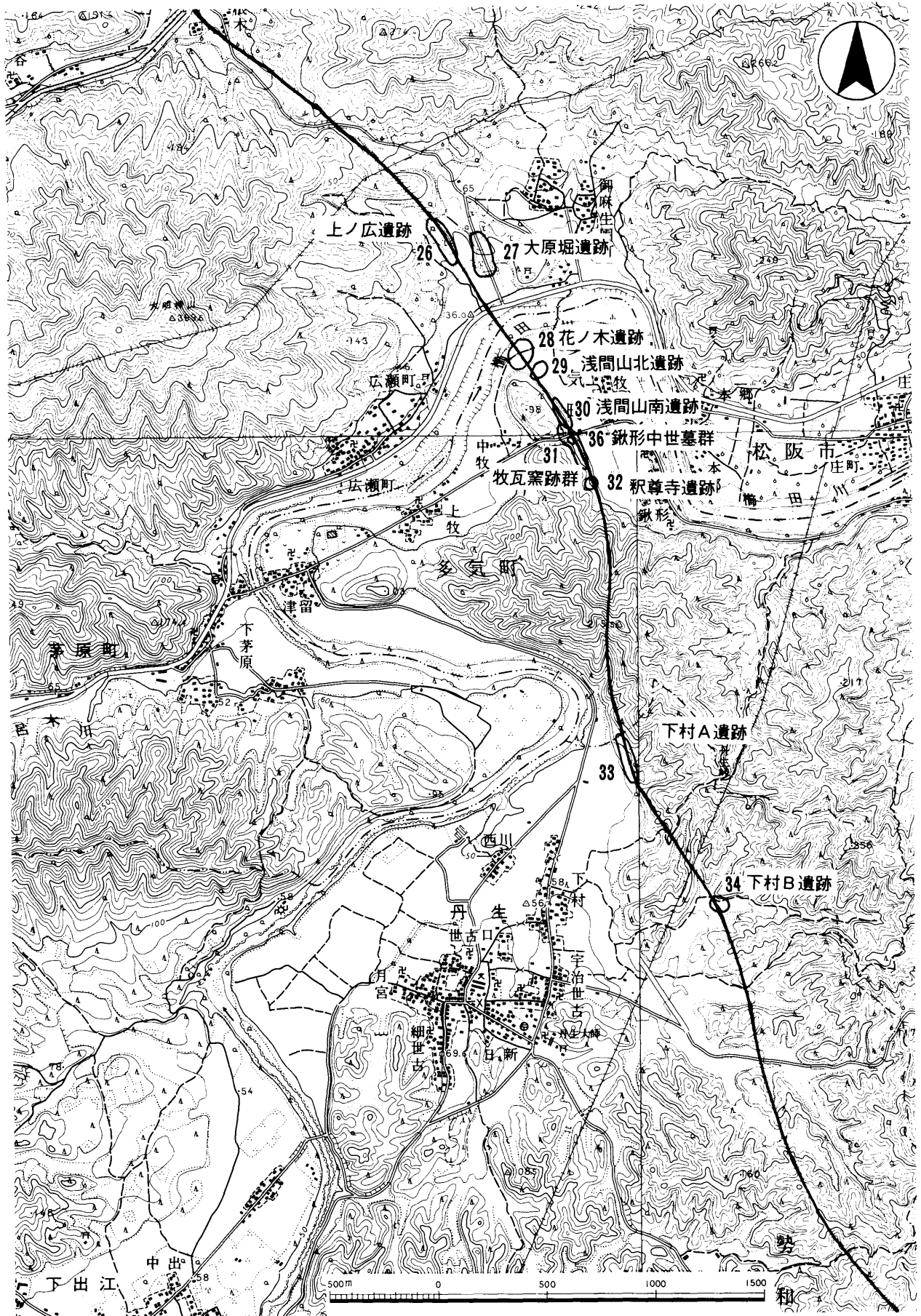
調査指導 (59・60年度、順不同、敬称略)

西村康 (奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター発掘技術研究室長)
服部貞蔵 (三重大学名誉教授)
広岡公夫 (富山大学教授)
八賀晋 (三重大学教授)
水野正好 (奈良大学教授)
森郁夫 (京都国立博物館考古室長)
藤沢一夫 (四天王寺国際仏教大学名誉教授)
山中一郎 (京都大学助教授)
泉拓良 (奈良大学助教授)
奥義次 (県立宇治山田高校教諭)

発掘調査土木工事部門担当

三重県住宅供給公社
堀内信吾
平生憲
浜口安光
中田辰実
田中和美
下地茂

(田村陽一)



第2図 本書報告遺跡位置図 (1 : 25,000)

Ⅱ. 位置と環境

1. 自然的環境

櫛田川は台高山脈の国見山（1.419m）、高見山（1.249m）付近に源を發し東微北流して伊勢湾に注ぐ全長約87km^①、流域面積460km^②、平均河床勾配1/80の県下有数の大川である。行政的には最も上流を占める飯南郡飯高町から、下流の松阪市までの1市4町1村が流域に含まれる。

上流域においては急峻な山地間を今なお激しく下刻を続け、幾度もの曲流を繰り返しつつ諸支流を合わせ東流する。流域面積は多くの支流を集めるため広いが、可耕地となる平坦地は狭く、林業を主体とする生活が長く続いてきた。

中流域^③においては流域面積は狭いが、3段を数える河岸段丘がよく発達し、やはり農林業を主体とした人間の活動が展開している。

この中流域で大きく曲流を繰り返した櫛田川は、多気町相可付近に至り下流の様相を呈しはじめる。兩岸にはかなり広い平坦地（低位段丘面）が展開し、集落が多く立地し水田が開けている。

J R紀勢本線の鉄橋付近で、現在の本流とかつて本流^④であった祓川とが分流し、現本流は北流し、祓川は北東流して肥沃な沖積平野を形成し、伊勢湾に注いでいる。

本書に報告する10遺跡は、このような展開をみせる櫛田川中流域の下流部に位置する。

ここではそれら10遺跡を中心とした地域を主に、遺跡立地の重要な要素である地形について概観してみたい。

さて、この櫛田川河谷地帯を地質的、地形的に特徴づけるものに、西南日本を大きく外帯と内帯に二分する中央構造線の存在がある。

櫛田川は上・中流域においては中央構造線に沿って外帯を流れる。構造谷の性格を有するが、櫛田川の流路は厳密には中央構造線と一致しない。

中流の飯南町粥見付近において、櫛田川は中央構

造線を斜めに切り、構造線から離れて内帯を流れるようになる。

地形はこの中央構造線を境にして、外帯と内帯ではっきりと異なっている^⑤。

また地質についても同様で、外帯では黒色片岩よりなる長瀨変成岩類が、内帯では花崗閃緑岩が主に分布している。なお、地質および岩石については付編を参照されたい。

さて、発掘調査が実施された10遺跡の周辺地域について、空中写真判読^⑥および現地調査によって地形分類をおこなった。（第3図）

対象地域内でも3段の段丘面が確認された。遺跡立地に関係の深いこれら段丘地形を中心として、以下に各地形について略述する。

1. 高位段丘

櫛田川流域にみられる高位段丘面は、中位および低位段丘面に比して規模が小さくまた連続性もない。対象地域では松阪市出江地区から下茅原地区にかけての櫛田川左岸に小規模なものが点在する。段丘面の標高は約90~100m、現河床との比高は約60mである。開析が進み、段丘崖も明瞭でない。

現在は森林となっており、先史遺跡の立地も確認されていない。

2. 中位段丘

高位段丘に比べるとかなり広く発達し、連続的に分布の追えるところもある。中流域で最もよく発達しており、調査対象地付近では勢和村片野、下出江、丹生付近に広く分布している。右岸では丹生、多気町津留付近に分布するが、それより下流域では、山地との傾斜変換線付近では小扇状地や崖錐が発達し、中位段丘は見られない。

一方、左岸には下出江、松阪市下茅原と比較的広い段丘が見られるが、それより下流では広瀬町、御麻生園町に分布するにすぎない。

各段丘面の高度、低位段丘面からの比高、現河床からの比高はおよそ以下の通りである。

下出江	60~90m、10~30m、50m
丹生	60~80m、10~30m、40m
下茅原	50~70m、10~20m、50m
津留	50~70m、10~30m、40m
広瀬	60~80m、20~40m、50m
御麻生園	50~60m、25~35m、30m

これらの段丘面は原表面の保存も良く、崖段崖も明瞭である。当地方の特産である大台茶（伊勢茶）の主産地として茶畑に広く利用されているほか、畑地や果樹園としての利用が多いが、丹生など水田化されているところもある。また下出江の段丘のように、かなり未開発で森林のままのところもある。縄文時代の遺跡の多くがこれら中位段丘面上に立地している。

段丘堆積物の観察できる露頭はあまりない。御麻生園の王子広遺跡付近の土取り跡では、表土として黒色土（いわゆる黒ボク）が30~60cmほど堆積しており、その下に層厚約1.5~2mの黄褐色土が堆積、以下に段丘礫層が見られた。

礫層は厚さ6m以上で、花崗岩類を中心として、チャートなどがある。礫は径3~20cm前後で円磨が進んでおり円礫となっている。

段丘の中には扇状地性堆積物が段丘面を覆っていると考えられるものもある。

3. 低位段丘

中位段丘や高位段丘に比べると非常に広く、しかも連続的によく発達している。

中流域においては小片野、片野、上出江、下出江、丹生、下茅原、津留と幅も広く連続した段丘面が広がっている。これらは河川の屈曲部の滑走斜面側にあたるが、攻撃斜面側は段丘の発達が悪い。

低位段丘は2面に分けた。すなわち、左岸の広瀬集落ののる段丘、出郷（御麻生園）集落ののる段丘や下流の山麓に点在する小規模な段丘を低位Ⅰ面とし、それより下位のものを低位Ⅱ面とした^⑦。低位Ⅰ面は先述の段丘のほか、津留より上流の低位段丘にあたり、津留より下流が低位Ⅱ面^⑧にあたる。

広瀬集落ののる低位Ⅰ面の高度は42~50m、低位Ⅱ面との比高は5~15m、出郷は高度50~56m、低位Ⅱ面との比高が12~15mである。現河床との比高は広瀬で約20m、出郷で約30mである。また低位Ⅱ面は高度36~40mで、現河床との比高は10~14mである。

低位段丘面には縄文、弥生、歴史時代の遺跡が立地しており、現在でも人間の活動の主要な場となっている。土地利用は主として水田であり、一部に茶畑、普通畑が見られる。

4. 扇状地

大規模なものは見られないが、段丘面と山地との傾斜変換地点の谷口には小規模な扇状地が発達している。地形分類図の範囲内において右岸では、丹生、下村A遺跡周辺、上牧、中牧、牧、鋤形において低位丘面を覆って扇状地が形成されている。左岸では下出江、下茅原、広瀬、出郷、本郷に見られる。やはり低位段丘面を覆っているが、低位Ⅰ面を覆っている広瀬、出郷では開析が進んでいる。

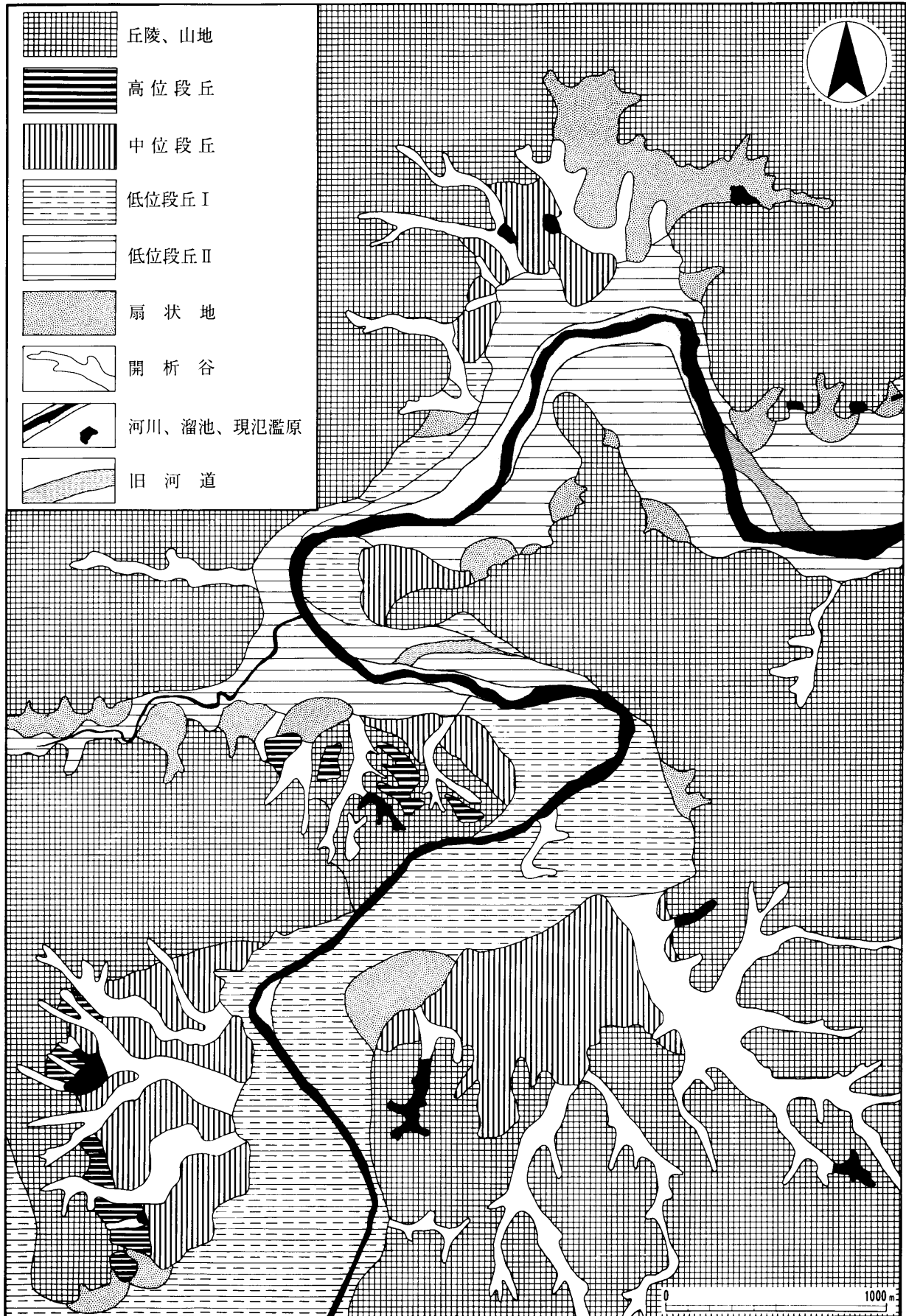
5. 崖錐

支谷の運搬作用のない急傾斜地の山麓には帯状に崖錐が発達して、緩傾斜地を形成している。津留東方の山地南斜面や、中牧と牧の間の浅間山の東西山麓によく発達している。

以上が当地域にみられる主な地形である。今回報告を行う10遺跡について以下に立地する地形をまとめておく。

上ノ広遺跡	中位段丘面
大原堀遺跡	ク
花ノ木遺跡	低位段丘Ⅱ面
浅間山北遺跡	ク
浅間山南遺跡	扇状地
牧瓦窯跡群	崖錐
鋤形中世墓群	丘陵斜面
釈尊寺遺跡	扇状地
下村A遺跡	ク
下村B遺跡	開析谷

（田村 陽一）



第3図 地形分類図 (1 : 25,000)

〔註、参考文献〕

- ① 『宮川流域の自然と文化』
建設省三重工事事務所編，1988
- ② 本稿では飯高町粟野から多気町鯨形、松阪市本郷までを中流域とした。尚、人文地理学や地質学的区分とは異なっている。
- ③ 永保2年（1082年）の大洪水により河道が急変したといわれる。
- ④ 前田昇・市村昌三「櫛田川の段丘地形」『大阪教育大学紀要22』 1973
- ⑤ 使用した空中写真はKK-68-4×C1A-6～9、KK-68-4×C2-4～8、KK-64-2×C5-1～4を主とした。
- ⑥ 中位段丘上に分布し、一部は低位段丘上にも堆積している。
- ⑦ 堀江正治はこの低位Ⅰ面を度会面に対比し、低位Ⅱ面を相可面と呼び、これを明野原面に対比した。
堀江正治「櫛田川中流域の地形」『河谷の歴史地理』 藤岡謙二郎編 1958
- ⑧ 地質図によればこの段丘面は沖積層とされている。
- ⑨ 地質調査所監修「三重県地質産図」縮尺20万分の1、1964
- ⑩ 加藤 清「馬場遺跡付近の地形」『新神馬場遺跡発掘調査報告書』三重県立津高等学校地歴部 1972
- ⑪ 磯部 克『三重県地質図集』三重県高等学校理科研究会、1986
- ⑫ 北村治郎・荒木慶雄「松阪市の地質」『松阪市史』第一巻自然編 1977

2. 歴史的環境

三重県のほぼ中央を東流し、伊勢湾にそそぐ橿田川・宮川は県を代表する二大河川である。両川はともに奈良県境付近に源を發し、上流域では深い谷を刻み、中流域では河岸段丘を發達させ、下流域では肥沃な沖積平野を形成させた。生活の場としての痕跡である遺跡は中流域からその数を増し、河岸段丘の主に低位段丘面及び中位段丘面上に先土器時代から中近世に至るまで展開しているのである。以下、橿田川・宮川中流域を中心として、及びその流域も含め、それら遺跡の分布を概観してみよう。

先土器時代の遺跡は、両川中流域のともに低位段丘面に突き出た丘陵状の中位段丘面上に立地するものが多い。この時代を代表する遺物はナイフ形石器であるが、その出土する遺跡は宮川流域に多く分布し、大台町の出張遺跡（5）がその代表的なものである。出張遺跡は昭和51・52年に発掘調査が行われ、多量の地元産チャートを使用した石器が出土した。出土した石器はナイフ形石器をはじめとしてその種類も豊富で、先土器時代の遺跡では県下最大の規模をもつと考えられている^①。その他、出張遺跡が位置する周辺でナイフ形石器が確認されているのは、中野遺跡（6）や宮野西出遺跡（8）など数カ所が現在まで知られている。しかし、宮川水系の柝原からさほど距離がないのかかわらず、橿田川流域の勢和村や多気町・松阪市などではナイフ形石器が出土している遺跡は少なく、下流域付近の松阪市上寺遺跡^②や対岸の多気町上古遺跡（2）など、そして松阪市内金剛川水系の上出遺跡（10）などを含めても数ヶ所を数えるのみである。その他、橿田川中流域で先土器時代の遺跡としては、勢和村野々尻遺跡（4）や篠山中学校（現勢和中学校）遺跡（3）などが知られているけれども、現在のところナイフ形石器は確認されておらず、今後の詳細な調査が待たれるところである。

先土器時代終末期から縄文時代初頭になると、橿田川中流域でも宮川中流に劣らず遺跡数は増加する。この時期を代表する石器は有茎尖頭器や木葉形尖頭器^③などであり、また神子柴型石斧も同時期に入る石

器であるが、これらの石器は一部を除くと総じて単独に発見されることが多い。両川の中流域は前述の石器類が同時に確認されたり、その他の遺物を伴う遺跡が比較的集中している地域である。しかし前述の石器類は、一部の地域では早期の押型文とも関連が深く、初頭の範囲には草創期・早期をも含め、その分布を見てみることにする。

さて、その分布は宮川中流域では出張遺跡を中心とする地域はもちろんであるが、支流である濁川流域に位置する大間広遺跡（23）や石神遺跡（21）なども代表的な遺跡である。両遺跡は前述の石器類を含み、また大間広遺跡では、早期の押型文土器が採集されている。橿田川流域ではやや下流付近であるが、中位段丘面上に位置する多気町牟山遺跡（18）がある。牟山遺跡は昭和38年試掘調査^④、翌年本調査が実施され、その結果、有茎尖頭器・木葉形尖頭器・神子柴型石斧とともに早期の押型文土器が出土している。その他、勢和村を中心とする橿田川中流域では、松阪市大原堀遺跡（16）、勢和村上広遺跡（37）、松阪市堀木遺跡（17）など、そして柳浦遺跡（20）を含む勢和村丹生地区の遺跡群で、それぞれ前述の石器類などが単独で採集されている。また、阪内川流域でも松阪市焼野遺跡（15）をはじめ数ヶ所で採集されている。その他早期でもやや時期的に新しくなるようであるが、勢和村南新木遺跡（30）が知られている。しかし、総じてこの時期の遺跡は全県的に乏しいと言える。

前期に入ると橿田川・宮川中流域ともに生活は低位段丘面上に展開し始める。このことは河川での漁撈がこれまでの狩猟・採集生活の中に加わって来たことを示すと考えられ、それらに関わる石器も石錘などの出土が目立って来る。橿田川流域での代表的な遺跡としては勢和村アカリ遺跡（34）が挙げられる。アカリ遺跡では前期に属する多様な文様の土器が確認されている。宮川と支流である濁川流域では大台町岡ヶ野遺跡（31）、大間広遺跡などが知られ、橿田川流域と比べると比較的良好的な遺跡が点在している。

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	宝塚	先土器	51	後山西B	縄文一晩期
2	上世古	〃	52	大谷	〃一前・中期?
3	篠山中学校(勢和)	〃	53	分れ谷	〃
4	野々尻	〃	54	平林	〃
5	出張	〃	55	西山	〃
6	中野	〃	56	出郷	〃
7	黒ヶ谷	〃	57	大久保	〃
8	宮野西出	〃	58	西沖	〃
9	往来道下	〃	59	三ヶ野	〃
10	上出	先土器～弥生	60	黒谷	〃
11	黒角	先土器末～縄文初頭	61	中広西	〃
12	塚本	〃	62	ケンソウ	〃
13	せぎ	〃	63	神田	縄文
14	さんざい林	〃	64	ソウダ	〃 大形石棒2点
15	焼野	〃	65	殿垣内	〃
16	大原堀	〃	66	南大谷	〃
17	堀木	〃	67	下出江	〃
18	牟山	〃	68	三ヶ野	〃
19	大曾	〃	69	中新田	〃
20	柳浦	〃	70	天理教会前	〃
21	石神	〃	71	栃原	〃
22	深谷	〃	72	中島	〃
23	大間広	〃 一前・中期	73	大垣外	縄文以降
24	池ノ谷	先土器末～縄文晩期、弥生前～後期	74	松挟間	〃
25	北新木	先土器末～縄文初頭、弥生前～中期	75	中切	〃
26	浜井場	〃、弥生	76	園	〃
27	檜広	〃	77	久保垣内	〃
28	栃木広	縄文一早期	78	大川原	〃
29	山ノ垣内	〃一前・後期	79	西沖	〃
30	南新木	〃一前～晩期、弥生 中～後期	80	道添	〃
31	岡ヶ野	〃一前～後期、弥生 前期	81	磯広	〃
32	後山西A	縄文一早期	82	合道	〃
33	鐘突	〃一〃、弥生・前・後期	83	鎌岩	〃
34	アカリ	〃一前期	84	大久保	〃
35	緑通庵	〃一〃	85	中ノ平西	〃
36	茶屋ノ広	〃一〃・中・後期	86	中ノ平東	〃
37	上広	〃一〃〃〃	87	脇ノセコ	〃
38	寺かいと	〃一中期	88	北垣内	〃
39	新殿木戸	〃一〃	89	西大垣内	〃
40	物見坂	〃一〃	90	太陽園	〃
41	立岡	〃一〃	91	椿垣内	〃
42	新神馬場	〃一後期	92	ワキ田	〃
43	王子広	〃一〃	93	池ノ下	〃
44	奥ホリ	〃一〃	94	トミ子	〃
45	中広	〃一〃	95	西ヲバ	〃
46	月登仿	〃一〃	96	奥ノ広	〃
47	小又	〃一〃	97	夕部	弥生一前期
48	宮切	〃一〃	98	太田	〃一中期
49	下宮前A	〃一晩期	99	相可高校グラウンド	〃一後期
50	小俣道西A	〃一〃 弥生一後期	100	草山	〃一〃

第3-1表 周辺遺跡一覧表1

(番号は第4図の遺跡番号に対応する)

No.	遺 跡 名	時 代	No.	遺 跡 名	時 代
101	上 村	弥生	151	吉野山古墳	〃
102	小 広	〃	152	上池古墳	〃
103	小俣道西B	〃	153	下村古墳	〃
104	上出江	〃	154	上広古墳	〃
105	四疋田銅鐸出土地	〃	155	落人古墳	〃
106	根 後	弥生以降	156	分れ谷古窯跡	古墳
107	井 戸 坂	〃	157	根 後 〃	〃
108	南 古 江	〃	158	中 尾 〃	〃
109	本 郷	〃	159	丹生寺 廢寺	飛鳥～奈良
110	阿 波 曾	古墳以降	160	御麻生 廢寺	〃
111	西 野	〃	161	立野瓦窯跡	奈良
112	藤ノ木新畑	〃	162	神 宮 寺	平安
113	川 原 表	〃	163	近長谷寺	〃
114	は ざ ま	〃	164	口 南 戸	平安以降
115	笹 川	〃	165	赤 松	〃
116	板 東	〃	166	板 廣	鎌倉以降
117	高 畑	〃	167	下 垣 内	〃
118	杉 田	〃	168	橋ノ瀬古	〃
119	山 下	〃	169	秋 丸	〃
120	前 山	〃	170	宮 脇	〃
121	宝塚1号墳	古墳(前期)	171	朱 中	〃
122	〃 2号墳	〃 (〃)	172	下 宮 前 B	〃
123	久保古墳	〃 (〃)	173	堂 ノ 前	〃
124	宝塚古墳群	〃 (前期～後期)	174	川 ノ 上	〃
125	権現山古墳群	古墳(後期)	175	宮 谷	〃
126	西野々広古墳群	〃 (〃)	176	宮 ノ 木	〃
127	田村古墳群	〃 (〃)	177	三 疋 田	〃
128	東山古墳群	〃 (〃)	178	東 片 田	〃
129	立野古墳群	〃 (〃)	179	枯 木 挟 間	〃
130	浅間古墳群	〃 (〃)	180	近津長谷城	南北朝
131	鳥ヶ谷古墳群	〃 (〃)	181	篠 山 城	〃
132	渋山古墳群	〃 (〃)	182	大 河 内 城	室 町
133	丹生寺古墳群	〃 (〃)	183	立 野 城	〃
134	大河内古墳群	〃 (〃)	184	脇 谷 城	〃
135	園 古 墳 群	〃 (〃)	185	六 呂 木 城	〃
136	白山古墳群	〃 (〃)	186	山 室 城	〃
137	川原表古墳群	〃 (〃)	187	上 山 城	〃
138	すご山古墳群	〃 (〃)	188	五 桂 城	〃
139	辰ヶ鼻古墳群	〃 (〃)	189	五箇山織城(ひよどり城)	〃
140	なこう古墳群	〃 (〃)	190	牧 城	〃
141	中尾山古墳群	〃 (〃)	191	西 ノ 城	〃
142	狐山古墳群	〃 (〃)	192	湯 ヶ 谷	室町以降
143	口南戸古墳	〃	193	若 宮	〃
144	椋谷古墳	〃 (後期)	194	畝 ノ 上	〃
145	奥 古 墳	〃	195	柳 原	〃
146	桂 瀬 古 墳	〃	196	丹生水銀坑跡群	奈良～江戸
147	山村古墳	〃	197	大 乘 寺 跡	〃
148	板 東 古 墳	〃	198	下 の 宮	〃
149	矢 津 古 墳	〃	199	田 郷	〃
150	庄 古 墳	〃 (後期)	200	井 戸 谷	〃

第3-2表 周辺遺跡一覧表2

中期は前期に比べ遺跡数が増加し、そしてその分布も拡大する傾向にあるが、遺跡の規模は小さく、分散するようである。その中で代表的な遺跡としては、櫛田川中流域では勢和村浜井場遺跡や松阪市新殿木戸遺跡(39)が挙げられる。宮川・濁川流域では前期から続く勢和村茶屋ノ広遺跡(36)を始め、その分布は櫛田川流域より多い。しかし、出土土器の型式が錯綜することや、遺跡の立地も低位段丘面上の他に、松阪市寺かいと遺跡(38)や分れ谷遺跡(53)のように台地・丘陵上に展開するなどいくつかの特徴も見られる。

後期も中期に劣らず遺跡数が増加する時期であり、良好な遺跡が点在し、比較的櫛田川中流域にまとまっている。松阪市王子広遺跡(43)、勢和村宮切遺跡(48)、新神馬場遺跡(42)などはその好例であるし、また下流域付近には射原垣内遺跡^⑧も挙げられよう。河川に近接した場所に立地する遺跡が多くなり、漁撈に関する石器類もさらに増え、チャートのかわりにサヌカイトの利用が一般化し始めるのもこの時期である。

晩期・縄文終末期には、櫛田川・宮川水系ともにその分布は希薄になる傾向がある。その中で代表的な遺跡としては、濁川流域で早期以降の複合遺跡である勢和村池ノ谷遺跡(24)が挙げられるにすぎず、池ノ谷遺跡では呪術的性格の濃い石棒・石剣類が出土している。その他松阪市内では、王子広遺跡、下宮前A遺跡などが櫛田川流域に分布しているだけである。以上縄文時代の遺跡を概観してきたが、この地域の縄文時代の遺跡は各時期にまたがるものが多く、既述の遺跡はその中で中心的なものと考えられるものである。その中で櫛田川中流域勢和村片野地区は縄文時代各時期の遺跡が密集しており、片野遺跡群として総称されるが、その立地条件などから一体的にとらえるべきであり、さらに詳細な調査が必要とされる地域である。

弥生時代の遺跡分布は、縄文時代と比べその遺跡の立地する地域に差異が認められる。縄文時代が主に両川とも中流域に展開するのに対し、櫛田川流域では台地縁辺や丘陵上に位置するものが若干見られるものの、下流域へ広がりを見せ始める。

前期に属する遺跡は、櫛田川中流域では勢和村北

新木遺跡(25)が、下流域付近では松阪市上寺遺跡^⑨、鐘突遺跡^⑩が挙げられよう。両遺跡とも発掘調査が行われ、鐘突遺跡では堅穴住居址が検出されている。その他宮川水系では濁川流域の池ノ谷遺跡や宮川左岸の浜井場遺跡(26)などが少数点在するだけで、その遺跡数としては少ない。

中期になると前期よりも遺跡数はやや増加するが、その立地条件は共通性が見られる。櫛田川中流域では松阪市太田遺跡(98)や、前期から続く勢和村北新木遺跡などが知られてはいるが、比較的良好な遺跡は下流域付近の地域に分布している。松阪市上寺遺跡^⑪が代表的なもので、堅穴状遺構が検出され、また水系は変わるが松阪市上出遺跡も知られる。宮川水系では下流域に若干の分布が見られるものの、中流域での分布は希薄である。

後期はさらに両水系とも下流域での分布が顕著になる。前述の上寺遺跡^⑫や射原垣内遺跡^⑬、また、いわゆるパレススタイルの土器が出土した多気町相可高校グラウンド遺跡(99)などがあり、射原垣内遺跡では堅穴住居址が検出されている。さらに松阪市内では金剛川右岸の丘陵上に草山遺跡がある。草山遺跡は昭和57～60年に発掘調査が行われ、後期の遺構が多数検出され、遺物が出土している。これらから解るように、後期になるとこの地域にも大集落が低・中位段丘面上や台地・丘陵上に形成されていくのである。なお、多気町には四疋田銅鐸出土地(105)が伝えられており興味深い、詳細は明らかではない。

古墳時代の遺跡分布は、櫛田川・宮川中流域において現在の状態では殆ど空白に近い。古墳もその数はごく少なく、櫛田川流域では遺物散布地も阿波曾遺跡(110)の他数カ所を数えるのみであり、水系も違い立地条件も異なるが松阪市内では比較的前期の土師器がまとまって出土したはざま遺跡(114)などが知られる程度である。これが宮川流域では、下流域までみるべきものの少ないのが現状である。

しかし、両川流域だけでなく、阪内川・金剛川流域でも下流域付近から下流域にかけての丘陵地帯には前期から後期にかけての古墳が広く分布するようになる。櫛田川流域では多気町相可・松阪市中万地区付近から下流域にかけて、平地を見下ろす丘陵地

に後期の古墳群が数多く分布する。特にその多くは多気町側にあり、河田古墳群^⑧をはじめとして数多くの古墳群が分布し、それは前期古墳も含め明和町・玉城町へと広がっているのである。眼を北に向けると阪内川流域では、伊勢国最大の前方後円墳である宝塚1号墳(121)・2号墳(122)^⑨などの前期古墳を含む宝塚古墳群(124)や、後期の古墳群である立野古墳群(129)、東山古墳群(128)、川原表古墳群(137)などが数多く分布している。阪内川流域に比べ、金剛川流域から東にかけての丘陵地帯には、前期古墳を代表する久保古墳(123)を始め大規模な古墳を含む古墳群があるが、後期に入ると古墳群もその数は前述の地域と比べ、その数は著しく減少する。

その他、古墳時代の遺跡としては須恵器生産跡である分れ谷古窯跡(156)、根後窯跡(157)があり、ともに6世紀後半頃に位置づけられる。また、多気町にも7世紀前半頃とされる中尾古窯跡(158)^⑩などがあり、その他7世紀代に入る多くの古窯跡が分布しており、周囲に数多く分布する古墳群との関連から興味深い。

飛鳥～奈良時代の遺跡に関しては、櫛田川・宮川中流域ではその分布が極めて希薄である。下流域では平安時代までも含めると比較的まとまった遺物散布地もあり集落跡と考えられる。しかし、とりわけこの時期を代表する遺跡は寺院跡であろう。寺院跡は松阪市郊外に数カ所確認されている。その中で櫛田川中流域に位置し、川を見下ろす山裾部に立地するのが御麻生菴廃寺(160)である。以前より古瓦片の散布が多く見られ、数多く採集されており、採集された軒平・軒丸瓦の文様からその創建は白鳳期にまでさかのぼり、寺院はその後奈良時代後期頃まで存続したと推定される。御麻生菴廃寺と似通った立地条件を持つ寺院跡に多気町逢鹿瀬廃寺がある。相鹿瀬廃寺も宮川を見下ろす丘陵裾野部にあり、やはり奈良時代の古瓦が数多く採集された所である。逢鹿瀬廃寺はまた伊勢大神宮寺にも比定されている寺院跡である^⑪。御麻生菴廃寺から眼を北北西に向けると、約4km離れた所に丹生寺廃寺(159)がある。丹生寺廃寺も阪内川を南に見る丘陵東麓の台地状の面上に立地しており、多数の古瓦片が採集され、土

壘状遺構などが残っている。採集された軒平瓦などから丹生寺廃寺も御麻生菴廃寺と同じく、その創建は白鳳期に求められる可能性もあり、奈良時代から平安時代初期にまで存続していたと考えられる^⑫。それと関連して阪内川をはさむ南東へ約2kmの地点松阪市高田地区に立野瓦窯跡^⑬(161)がある。丹生寺廃寺出土の軒平瓦の一部は立野瓦窯跡出土の軒平瓦と同範であり、同瓦窯が丹生寺廃寺への瓦供給地であることが判明している。また大雷寺廃寺出土瓦にも同範のものがあり、複数の寺院への供給地であった可能性もある。その他寺院跡として松阪市内では伊勢寺廃寺、貴田寺廃寺などがあり、仏教の興隆と地方への伝播に伴ってこの地域でも奈良時代を中心に寺院の建立が盛んになっていったことを物語っているといえる。

平安時代でも引き続き寺院の建立も盛んで、特に初期から前期にかけて神仏習合思想に基づいて勢和村に丹生成就院神宮寺(162)が、また木造十一面観音菩薩立像(国重文)のある多気町近長谷寺(163)などが建立されている。なお、神宮寺には『伊勢国近長谷寺資財帳』(国重文)が保管されている。両寺院とも近隣の人々の信仰を集め、特に後述するが丹生の名が示すように勢和村丹生にある神宮寺(丹生大師)は丹生の地の水銀による繁栄によって、また女人高野として信仰は高かったようである。

丹生は丹砂(朱砂)を生むということから起った地名と言われ、全国的にも丹生と言う地名と水銀の関係は深い。丹生の水銀に関する記録は、『和名抄』・『続日本紀』・『延喜式』などにも散見し、水銀は奈良時代・平安時代における仏像鑄造による鍍金に欠かせないものであり、伊勢国の特産物として当時の都に献納されていたことが解る。そして、この水銀に因む名を持つ延喜式内社の丹生神社及び丹生中神社も丹生を中心とする地域に鎮座している^⑭。この地方の有力豪族は飯高氏であるが、飯高氏もこの水銀によって栄え、またこの地域も栄えたであろうことは想像にかたくない。水銀の採掘は鎌倉時代から室町～江戸時代へと続いたが、江戸時代中頃までには跡絶えたと言われ、その支配をめぐっては様々な事があったようである。その廃坑跡は今も丹生の山間部に残っている(196)。

多気郡は律令制下において度会郡・飯野郡とともに神三郡と呼ばれ、伊勢神宮の政治的・経済的基盤として重要な位置を占めており、多くの御厨・御園が設置され、また中央権門・寺社の荘園も設置されていた。櫛田川下流域付近の東寺領川合・大国荘はつとに有名だが、中流域においても丹生荘や茅原田御厨・広瀬御園などが挙げられる。さらに古代の耕地整理である条里制は櫛田川流域にも及び、『和名抄』に見える多気郡相可郷に三疋田里・四疋田里など条里制に因む里名が現在でも大字名として残っており、現在でも地割の名残りが観察出来、条里の復元もなされている。

中世以降、殊に鎌倉時代末期から南北朝の動乱は神郡の中にも及び、神宮の組織的な支配体制も解体していき、動乱を象徴するように多気郡を中心とする櫛田川中流域にも中世城館が築かれ始める。代表的なものは南朝方の伊勢神宮外宮祠官度会氏が築いた多気町近津長谷城（180）や、北畠氏家臣野呂氏が築城した勢和村五箇篠山城（181）などが見通の良い山頂部に築かれている。その後多気郡や飯高郡などは、室町時代、或いは戦国時代を通じ南朝方に立った伊勢国司家である北畠氏の支配を受け、各要害の地に城館を築き一族や家臣を配しその支配を強

めた。その中心的なものは松阪市大河内城（182）である。大河内城は北畠氏最後の拠点的な役割を果たしその他阪内川流域には坂内城、脇谷城（184）などが、櫛田川流域には南北朝期から存続して五箇篠山城や、その支城的役割を果たしたのではないかと考えられる五箇篠山羅城（ひよどり城）（189）などが点在し、その興亡を物語っているのである。

古来より畿内・大和地方から伊勢神宮への参宮本街道は初瀬（伊勢）本街道と呼ばれ、賑わいを見せていたと言われ、殊に多気町相可はその宿場町として栄えたと言う。近世に入り幕藩体制が確立されると、この地方はその殆どが紀州和歌山藩領に組み込まれた。それによって和歌山と松阪を結ぶ道が紀州街道として整備され、また熊野街道も整備されている。これらの街道はいずれも相可を通るため、相可宿は殷賑を極め、さらに多気町津留は参宮本街道時代から渡し場として宿場町として賑わった所である。そして櫛田川対岸の松阪市射和も商人の町として栄え、丹生水銀は近世この地で軽粉（白粉）として加工製造・販売され“伊勢おしろい”としてこの地域の特産物となっていくのである。

（河瀬 信幸）

〔註、参考文献〕

- ① 三ツ木貞夫・森田尚宏他 『出張遺跡調査報告書』 大台町出張遺跡調査会 1979
- ② 下村登良男 『上寺遺跡発掘調査報告書』 松阪市教育委員会 1981
- ③ 岡本東三 「神子柴・長者久保文化について」 『奈良国立文化財研究所研究論集』 V 1979 三重県内出土の神子柴型石斧に関しては 奥 義次 「河田古墳群C支群（東谷C遺跡）出土の先土器・縄文時代遺物」（『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』 多気町教育委員会 1985）に、県内出土遺跡地名表を掲げ詳細にまとめている。
- ④ 早川正一・奥 義次 「三重県石神遺跡出土の石器群」 『考古学雑誌』 第50巻第3号 1965
- ⑤ 奥 義次 「相可牟山遺跡試掘調査略報」 『牡鹿』 2号 相可高校郷土クラブ 1963
- ⑥ 谷本鋭次 「上広遺跡試掘調査報告」 上広遺跡調査会 1973
- ⑦ 『新神馬場遺跡発掘調査報告書』 三重県立津高等学校地歴部 1972
- ⑧ 下村登良男 『射原垣内遺跡発掘調査概報』 松阪市教育委員会 1980
- ⑨ 注②参照。
- ⑩ 下村登良男 『鐘突遺跡発掘調査報告書』 松阪市教育委員会 1981
- ⑪ 注②参照。
- ⑫ 注②参照。
- ⑬ 注⑧参照。
- ⑭ 注⑧参照。
- ⑮ 『草山遺跡発掘調査月報』 No.1～10、松阪市教育委員会 1982～1985
- ⑯ 吉水 康夫 『河田古墳群発掘調査報告』 I 1976
山沢 義貴 『河田古墳群発掘調査報告』 II 1975
下村登良男 『河田古墳群発掘調査報告』 III 1986

- 川村輝夫ほか 『河田古墳群発掘調査報告』Ⅳ 1983
以上、多気町教育委員会。
- ⑰ 地区における埋蔵文化財の調査—そのⅠ 松尾・花岡・神戸地区』『ふびと』31号 三重大学歴史研究会原始古代史部会 1970、「松阪市・宝塚2号墳測量調査」『ふびと』32号 三重大学歴史研究会原始古代史部会 1975
- ⑱ 下村登良男 「中尾古窯址発掘調査報告」『河田古墳群発掘調査報告』Ⅲ 多気町教育委員会 1986
- ⑲ 鈴木敏雄 『三重県古瓦図録』 楽山文庫 1933
松永恵一 「逢鹿瀬廢寺」『歩跡』2号 1972
岡田 登 「伊勢大神宮寺としての逢鹿瀬寺について」『史料』第85号 1986
- ⑳ 注⑨の『三重県古瓦図録』
- ㉑ 大西源一 「伊勢立野窯址発掘の古瓦と丹生寺との関係」『考古学雑誌』第14巻第3号 1925
- ㉒ 「和名抄」には伊勢国飯高郡丹生郷の項に「出水銀」（高山寺本）と記され、『続日本紀』には、文武天皇2年9月条に「伊勢国献朱沙雄黄」、和銅6年5月条に「令献伊勢水銀」とある。和銅6年の記事は丹生水銀に関するもっとも早いものである。また『延喜式』によれば、内蔵寮に「伊勢国租税水銀四百斤」、民部省に「交易雑物伊勢国水銀四百斤」、典楽寮に「年料雑物伊勢国水銀十八斤」などの記事が見え、水銀を貢納していたことが解る。その他『今昔物語集』にも水銀に関わる説話がある。
- 『和名抄』は池辺 彌『増訂版和名類聚抄郷名考證』吉川弘文館 1970に拠り、『続日本紀』前篇・『延喜式』前篇とともに新訂増補国史大系本（吉川弘文館 1981）、『今昔物語集』は岩波古典文学大系本（岩波書店 1972）に拠る。
- ㉓ 注②『延喜式』の神名帳による。
- ㉔ 『神鳳抄』 正編群書類従・第1巻神祇部 続群書類従完成会 1987
- ㉕ 注②『増訂版和名類聚抄郷名考證』参照。
- ㉖ 弥永貞三・谷岡武雄編 『伊勢湾岸地域の古代条里制』 東京堂出版 1979
- ㉗ 「三重の中世城館」1976『三重の中世城館補遺』 1981 三重県教育委員会。
- ㉘ 注②参照。
- ㉙ 『初瀬街道・伊勢本街道・和歌山街道—歴史の道調査報告書』 1982 『歴史の道調査報告書—熊野街道—』 1981 三重県教育委員会。
- その他、この項を書くに際し、下記の文献を参照した。
- ① 『松阪市史』第2巻 史料篇 考古 松阪市 1978
- ② 吉田東伍 『大日本地名辞書・上方篇』（増補版） 富山房 1972
- ③ 藤堂元甫 『三国地誌・上』 大日本地誌大系 第8冊 大日本地誌大系刊行会 1916
清水正健編 『莊園志料・上巻』 角川書店 1978
- ④ 『三重県の地名』 日本歴史地名大系24 平凡社 1983
- ⑤ 『角川日本地名大辞典・24 三重県』 角川書店 1983
- ⑥ 松田寿男 『丹生の研究—歴史地理学から見た日本の水銀—』 早稲田大学出版部 1974
- ⑦ 藤岡謙二郎編 『河谷の歴史地理』 蘭書房 1958
- ⑧ 『三重の遺跡』 三重県良書出版会 1978
- ⑨ 奥 義次 『飯高町郷土誌・第二編通史・第一章原始』 飯高町 1986、「三重県度会郡大宮町の先史遺跡」『大宮町史・歴史編』 大宮町 1987、「三重県の先土器時代関連遺跡地名表」『土地山遺跡発掘調査報告書』 玉城町教育委員会 1985、「多気町内の遺跡めぐり」『広報たき』 1974～1976連載 多気町、「飯南町史・第二編沿革・第一章原始』 飯南町 1984、特に先土器～縄文時代全般にかけては以上の文献に負うところが多い。記して謝意を表したい。

うえのひろ
松阪市広瀬町 上ノ広 (森下池西方) 遺跡 (26)

1. はじめに

櫛田川が下流域に近くなり最後の大きな曲流をみせる地域である多気町津留から牧地区（右岸側）、松阪市広瀬町から御麻生園町（左岸側）では、特に左岸側に割合広い面積をもつ河岸段丘が見られる。

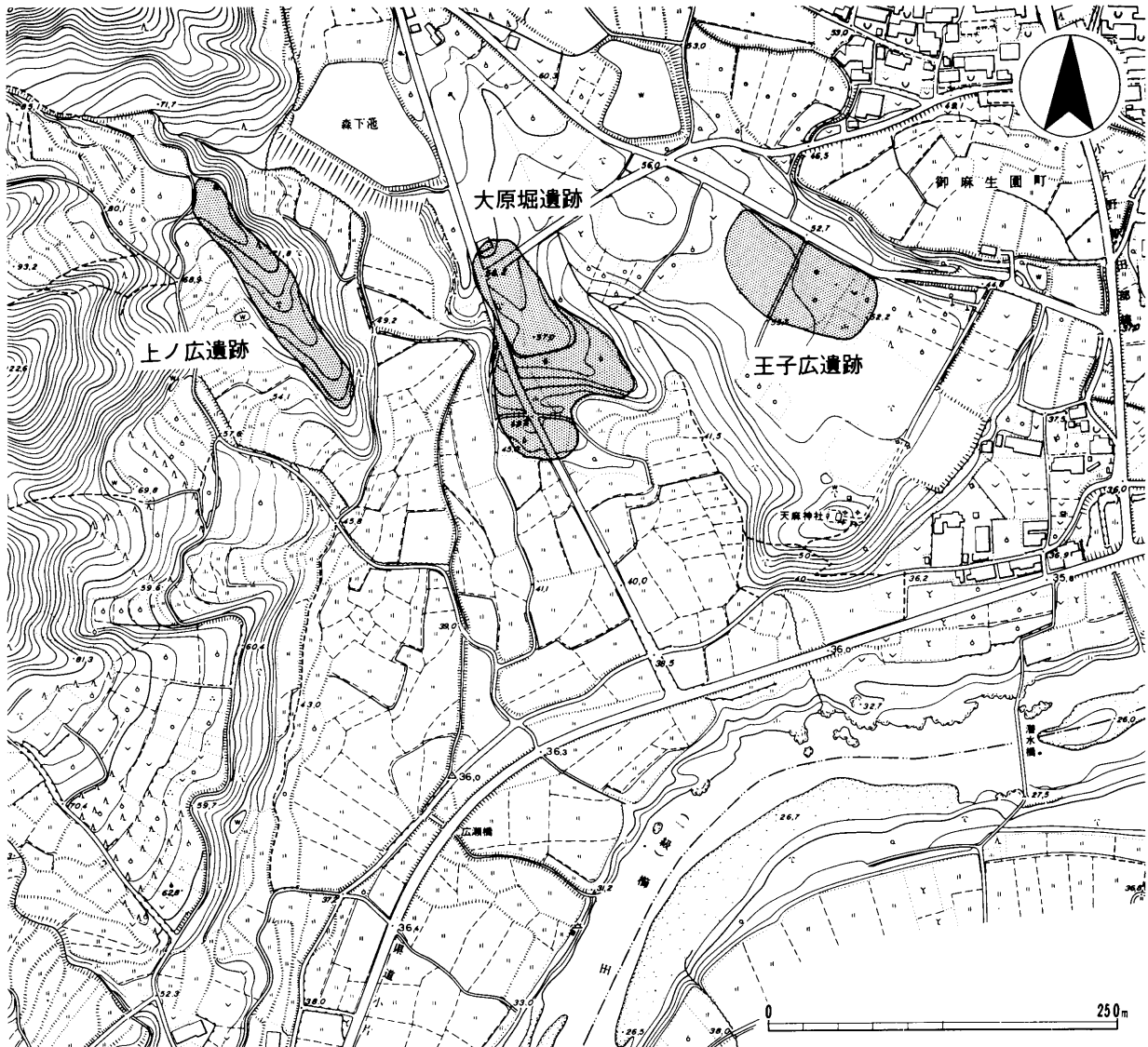
旧伊勢本街道が櫛田川を渡る津留から少し下ると左岸では広瀬の集落をのせる段丘が開ける。この段丘面は、いくつかの小谷によって開析されるため連続はしないが、櫛田川に沿って点々と分布し、御麻

生園町出郷の集落までの間に5カ所ほどの段丘面が存在する。

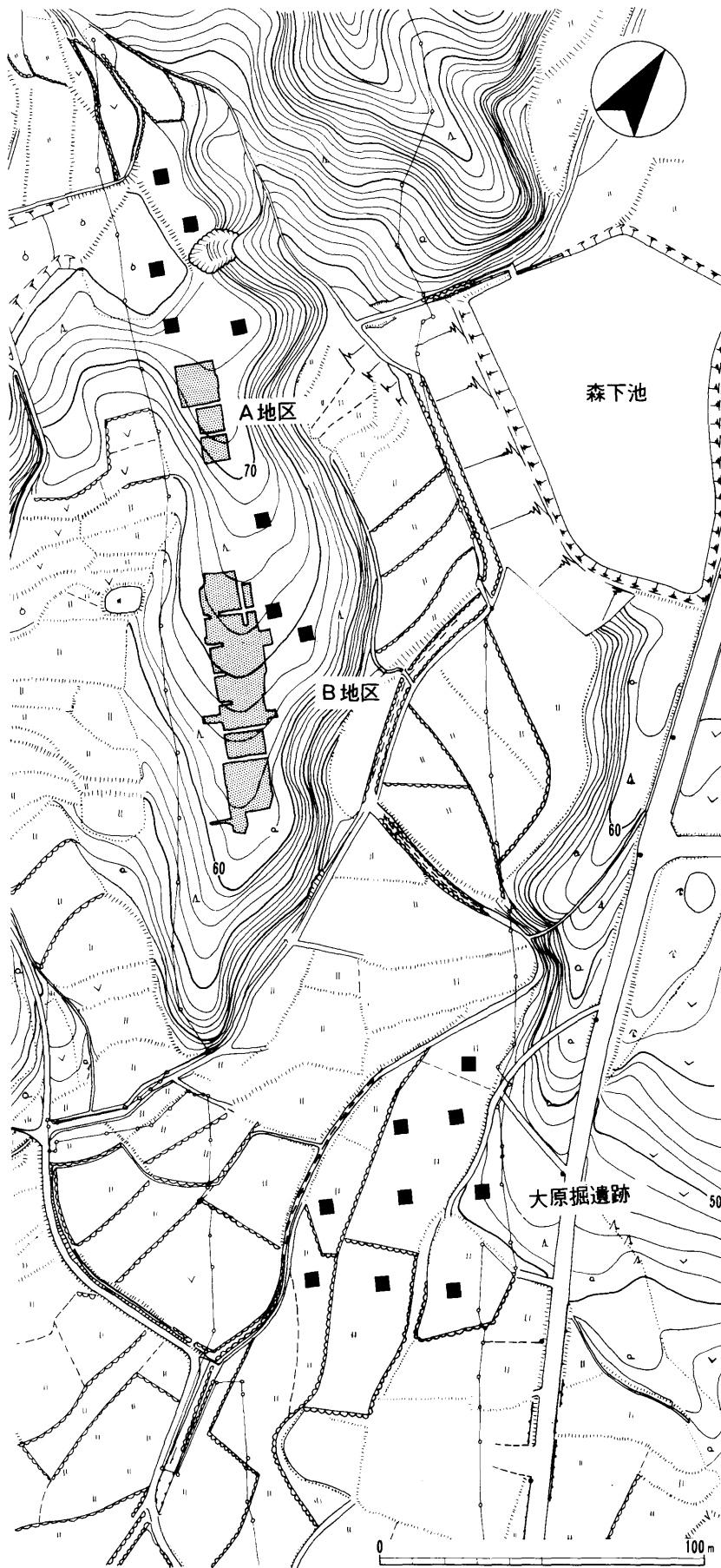
このうち、根木峠を越えて大河内町方面に向う2本の道路に挟まれた段丘が最も広い面積を占める。平坦地は畑地等にも利用されている。

段丘先端部の櫛田川を臨む最高所（58m）には、天麻神社が鎮座している。

この神社北方の畑地一帯には縄文時代後期前葉の



第5-1図 遺跡地形図 (1:5,000)



第5-2図 発掘区位置図 (1:2,000)

遺物が多く出土する王子広遺跡^①がある。1986年に実施された試掘調査^②でも同時期の土器・石器類が出土している。また、小型ながら頁岩製の有茎尖頭器も採集されている^③。

王子広遺跡の西約100mには南から小さな谷が入り込んでいるが、その西方には南向きの緩傾斜地が広がり、現在は栗林となっている。根木峠への道路がこの緩傾斜地西端近くに開削された時、早期押型文土器片が出土した^④。これが大原堀遺跡^⑤である。有茎尖頭器の出土も含め、早期押型文土器文化を考える上での重要な遺跡である。

ところで、上ノ広遺跡はこの大原堀遺跡から、さらに西へ谷ひとつ隔てた段丘上に位置する。北方から緩やかに傾斜しながら高度を減じ、櫛田川に向って舌状に突出する中位段丘面上に立地する遺跡である。平坦地の幅はせいぜい25mで、長さは約200mほどである。標高は62~74m、直下の水田面との比高は東側で約12m、西側で約7m、南端で約14mほどあり、段丘崖は急崖をなしている。特に東側の崖丘崖に顕著である。

当遺跡は行政区画上は、松阪市広瀬町字上ノ広に属する。当初、便宜上つけられた森下池西方という遺跡名を用いたが、遺跡命名の原則に従い小字名を用いることにして、今回ここに上ノ広遺跡と改称する。

対岸の縄文時代遺跡には後期の奥ホリ遺跡^⑥や、本報告書で報告した花ノ木遺跡がある。花ノ木遺跡では早期押型文(ポジ楕円)土器や後期土器などが微量ではあるが

出土している。また浅間山南遺跡でも中期の土器、石器が出土した。

このように当遺跡の周辺には比較的多くの縄文時代遺跡が立地している。

昭和60（1985）年3月22日～31日までの間、第一次調査として段丘面上の13カ所に4m×4mの試掘坑を設定し調査を実施したところ、3カ所からピッ

ト、土坑、溝等が検出され、10カ所から尖頭器片、石鏃、土器片が出土した。

第一次調査の結果に基づき、1,200㎡について第二次調査を実施することとなった。

第二次調査は梅雨明け直後の7月1日より開始し、酷暑にあえぎながら進められ、秋風の吹く10月14日ようやく現地での調査を終了した。

2. 調査の方法

調査は本遺跡の性格から層序発掘が重視されるとともに、遺物の出土地点や絶対高を記録する必要から、表土掘削を行う前に遣り方組んだ。そして表土からすべて人力で、少しずつ面的に削る方法により丁寧に掘り下げた。

発掘区は第一次調査の結果から南北に二分され、北半をA地区、南半をB地区とした。そして原則的には東西12m、南北8mを基本的な一区画とし、幅1mの土層観察用の畦を設けた。この結果A地区はA-I区～A-III区の3区画に、B地区はB-I区

～B-VIII区までの8区画に分割された。また調査途中でB-I区の北側を拡張し、B-0区としたほか、B地区では東西に若干の拡張部分がある。

遺物は出土地点に竹串を刺し、各地区ごとの通し番号を記したラベルをつけた。4m四方に小地区割りされたグリッド毎に北西隅を原点とし、東への距離、南への距離を台帳に記入し、あわせて絶対高を測定した後に取り上げた。しかし、遺構内など一部徹底できなかったところもある。

3. 層序

当遺跡の土層の堆積状況は、立地が狭小な段丘面上であることや開墾、耕作、さらに植樹等により土層が著しく攪乱を受けており、芳しいものではなかった。

A地区では表土下に褐色の砂質土が見られ、サヌカイトの剥片等が近代陶器などと共に極微量出土した。それ以深には花崗岩の亜角礫を中心とした礫を多く含む黄褐色の地山となる。

このA地区は尾根もやせており平坦面が狭い。そのため遺物包含層は東西の谷や南下方に流出したものと考えられる。

B地区は遺跡の立地する尾根のうちで最も幅が広くかつ平坦であるため各所に攪乱を受けながらも、

ある程度包含層が遺存していた。

本遺跡の基本的な層序は下記のように6層から成っている。

第1層……淡褐色砂質土（表土）

第2層……黄褐色砂質土

第3層……褐色土

第4層……黒褐色土（黒ボク）

第5層……橙色粘質土

第6層……段丘礫層

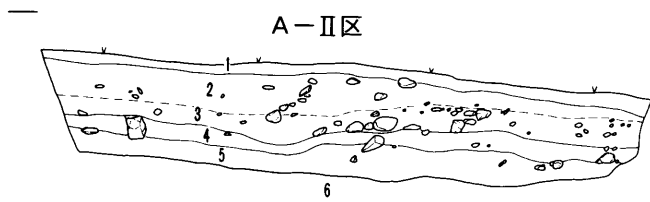
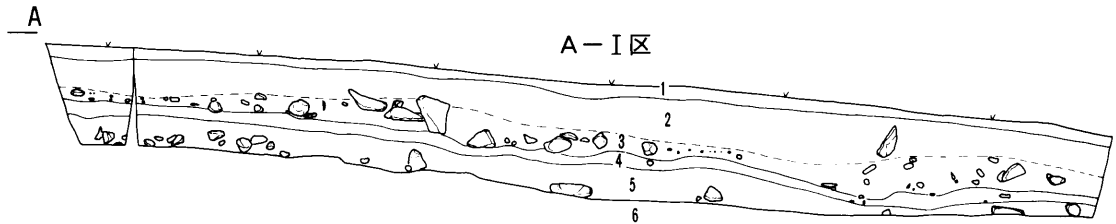
このうち遺物包含層は第2、3、4層である。第3層と4層は発掘区の全域には分布しない。

先土器末～縄文時代の遺物はほとんど原位置を保っていないかった。

4. 遺構と遺物

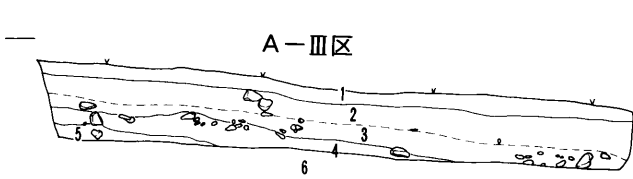
A地区では遺構は全く検出されなかったが、遺物としてはサヌカイト剥片や石鏃、近代陶器片が微量

出土したにとどまる。しかし1点のみではあるが、A-III区の地山直上から先土器時代終末期に属する

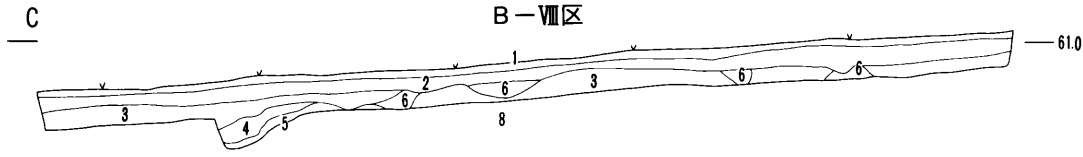


— 71.0

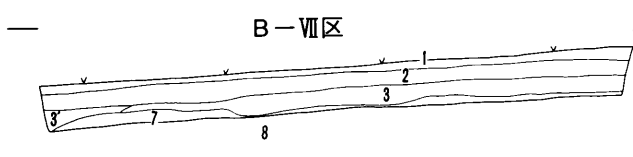
- 1. 淡褐色砂質土
- 2. 褐色砂質土
- 3. 褐色砂質土 (花崗岩礫多く含む)
- 4. 黄褐色土
- 5. 黄灰色砂質土 (花崗岩礫含む)
- 6. 黄褐色粘質土



B
— 70.0



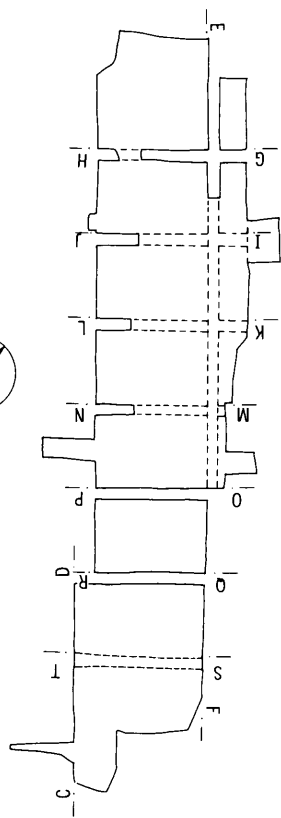
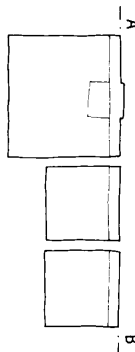
— 61.0



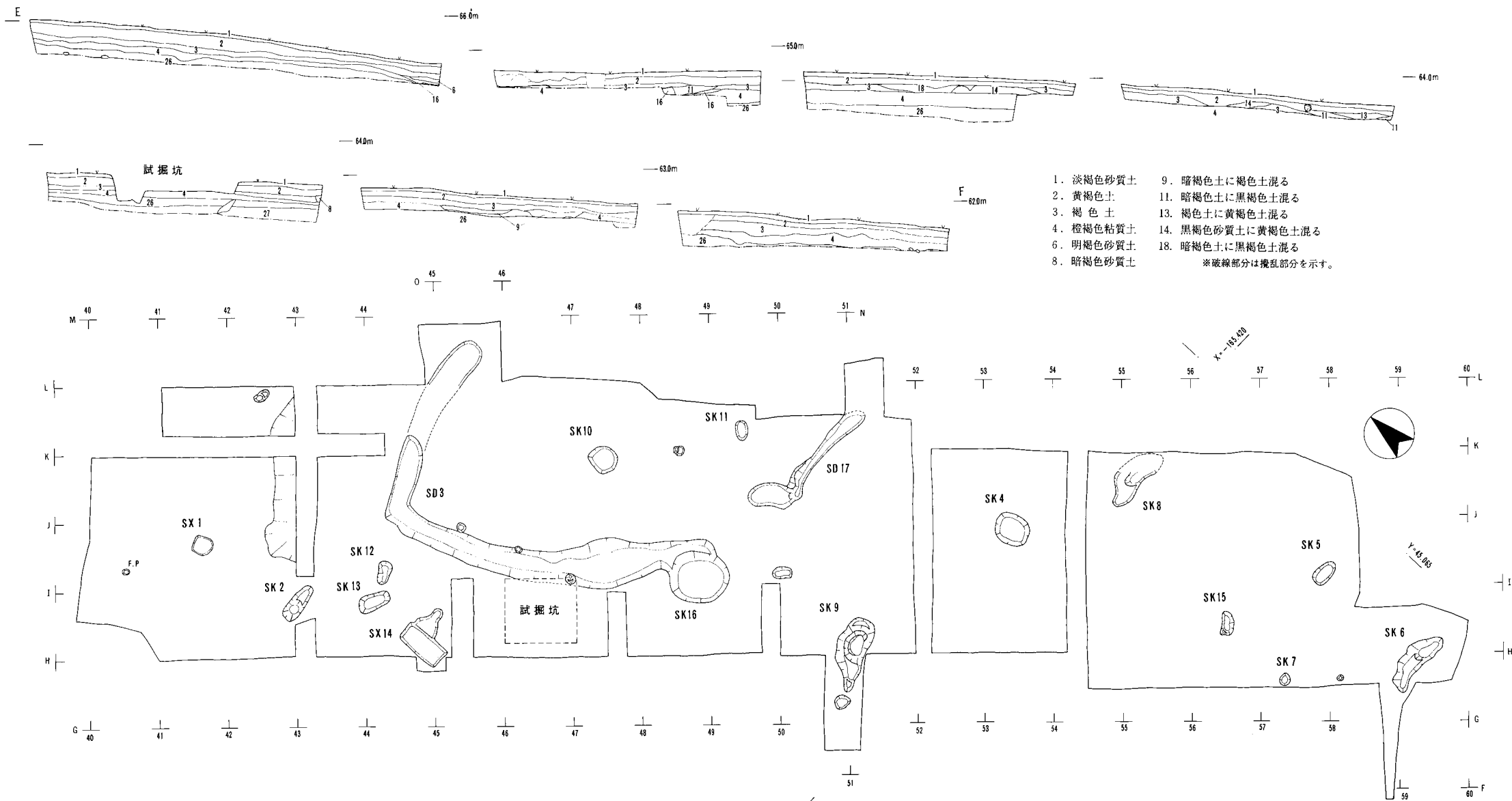
D
— 62.0



- 1. 淡褐色砂質土
- 2. 黄褐色砂質土
- 3. 暗黄褐色土に褐色土混入
- 3'. 3より褐色土が多く混る
- 4. 黒褐色土に褐色土混る
- 5. 暗黄褐色粘質土
- 6. 褐色土
- 7. 暗黄褐色粘質土
- 8. 橙褐色粘質土



第 5 - 3 図 発掘区土層図 (1 : 100)



第5-4図 遺構平面図 (1:200) 発掘区土層図 (1:100)

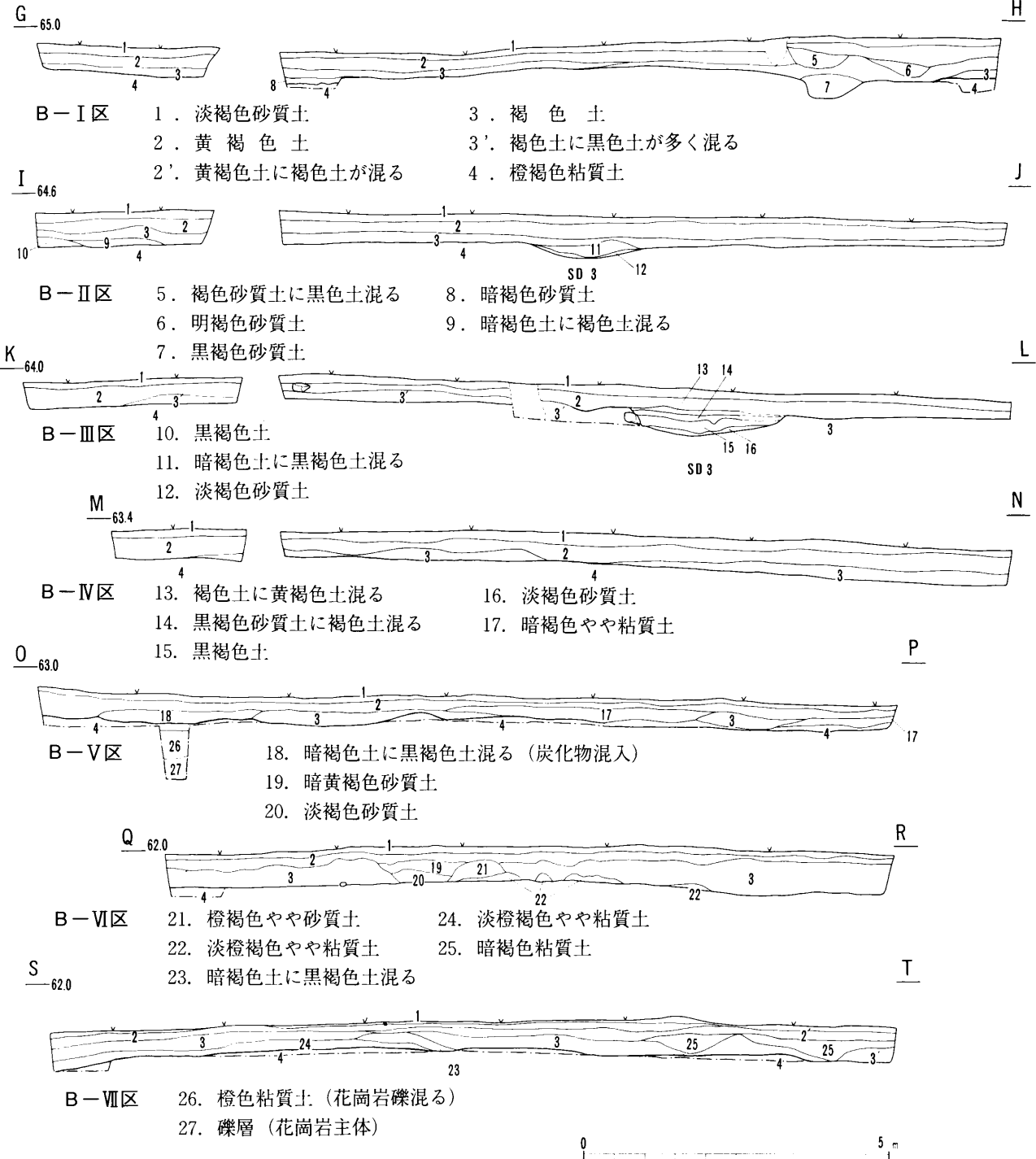
局部磨製石斧 (20) が出土した。

B地区では大小の土坑、集石土坑、溝、ピットが検出された。これらの遺構の所属時期については、遺構出土の遺物が少量にすぎないため時期決定には問題があるかもしれない。しかし、概ね先土器時代最終末から縄文時代早期末までに比定できるであろう。

出土した遺物は約1,000点を数えるが、大多数は石器で、土器は微量である。他に歴史時代の遺物が微量ある。

その他、歴史時代の遺構として平安時代の土坑墓が2基検出された。

石器については先土器時代末期から縄文時代初頭にかけての石器群と、縄文時代の石器群とがある。



第5-5図 発掘区土層図 (1:100)

前者には尖頭器（有茎、木葉形）、搔器、削器、石斧、二次加工のある剝片、石核などがある。また後者には石鏃、石匙、異形部分磨製石器、楔形石器、磨石などがある。

1. 先土器時代末～縄文時代の遺構

A. 土坑

S K 2 B-IとII区間の畦下で検出。

東西が2.35m、南北が0.9mの細長い土坑で、西半部が一段深くなる。検出面からの深さは40cm。埋土は暗褐色に黒色土が混る。遺物は全く出土しなかった。

S K 4 B-VI区の中央部で検出。

1.75m×2.25mのややゆがんだ円形を呈する。検出面からの深さは10～20cmと浅く、底面は皿状に中央部が凹んでいる。

埋土は暗褐色土で、サヌカイトの碎片が出土した。

S K 5 B-VIII区の中央部で検出。

1.55m×1.0mの楕円形状を呈し、検出面からの深さは約40cmである。

埋土は暗褐色土に黒色土の混ったもので、サヌカイトの碎片、石鏃（69）が出土した。

S K 6 B-VIII区の南端に位置する。すでに第一次調査で検出されていたもので、3.9m×1.3mの東西に細長い土坑である。検出面からの深さは西半部で50～53cm、東半部で50～60cmと東半部が一段深くなっており、底面は礫層の上面に達している。

埋土は暗褐色土に黒色土が混るものであるが、非常にしまりの悪い状態で埋っていた。埋土中より時期不明の無文土器の細片、石鏃（63）、サヌカイト碎片などが出土した。

S K 7 B-VIII区の北西端近くで検出。

0.8m×0.6mの不整形円形を呈し、検出面からの深さは約13cmであった。埋土は暗褐色土で、サヌカイトの碎片が出土した。

S K 8 B-VI区の東端近くに位置する。発掘区東壁に沿うサブトレンチの掘削中に検出したため、東半部分は既に掘り抜かれており、規模等に不明な点がある。ただ、発掘区を限る壁にまでは遺構がかからないところからその規模を推定すると、東西約4.0m、南北1.8mほどであろう。検出面からの深さは

約20cmと浅いが、サヌカイトの鱗状の碎片が多数出土しており、石器製作のあとが窺える。

S K 9 B-V区西端で一部検出。拡張して全体を確認した。東西4.5m、南北2.0m、検出面からの深さ100cmの土坑である。しまりの悪い暗黄褐色土が埋っており、埋土中より搔器（45）や石鏃（37,40,46）、剝片などが出土した。

S K 10 後述のSD3、SD17によって囲まれた所には黒色土が厚さ数cmほど堆積しており、焼土なども認められる。当遺跡においては人間の活動の痕跡を最も強く残す場所である。

この中央部でSK10は検出された。直径1.5mの円形を呈する。埋土は黒色土であった。

検出面からの深さは約30cmで、底面はほぼ平坦である。埋土中より剝片が出土した。

隣接して焼土も検出された。

S K 11 SK10の南東約3mに位置する。1.3m×0.9mの楕円形を呈するプランである。

検出面から約50cmほど掘り下げて地山に達した。土坑内の埋土は黒色で、炭化物も混る垂角礫を中心とする拳大から20cm程度までの礫が多く埋っていた。

礫は火熱を受けた痕跡の認められるものもあるが、焼土は認められなかった。炉の可能性も考えられよう。土坑内の遺物の出土はなかった。

S K 12 B-II区の中央部にて検出。

1.5m×0.75m、検出面からの深さ25cmの土坑である。埋土は暗褐色土で、遺物は出土しなかった。

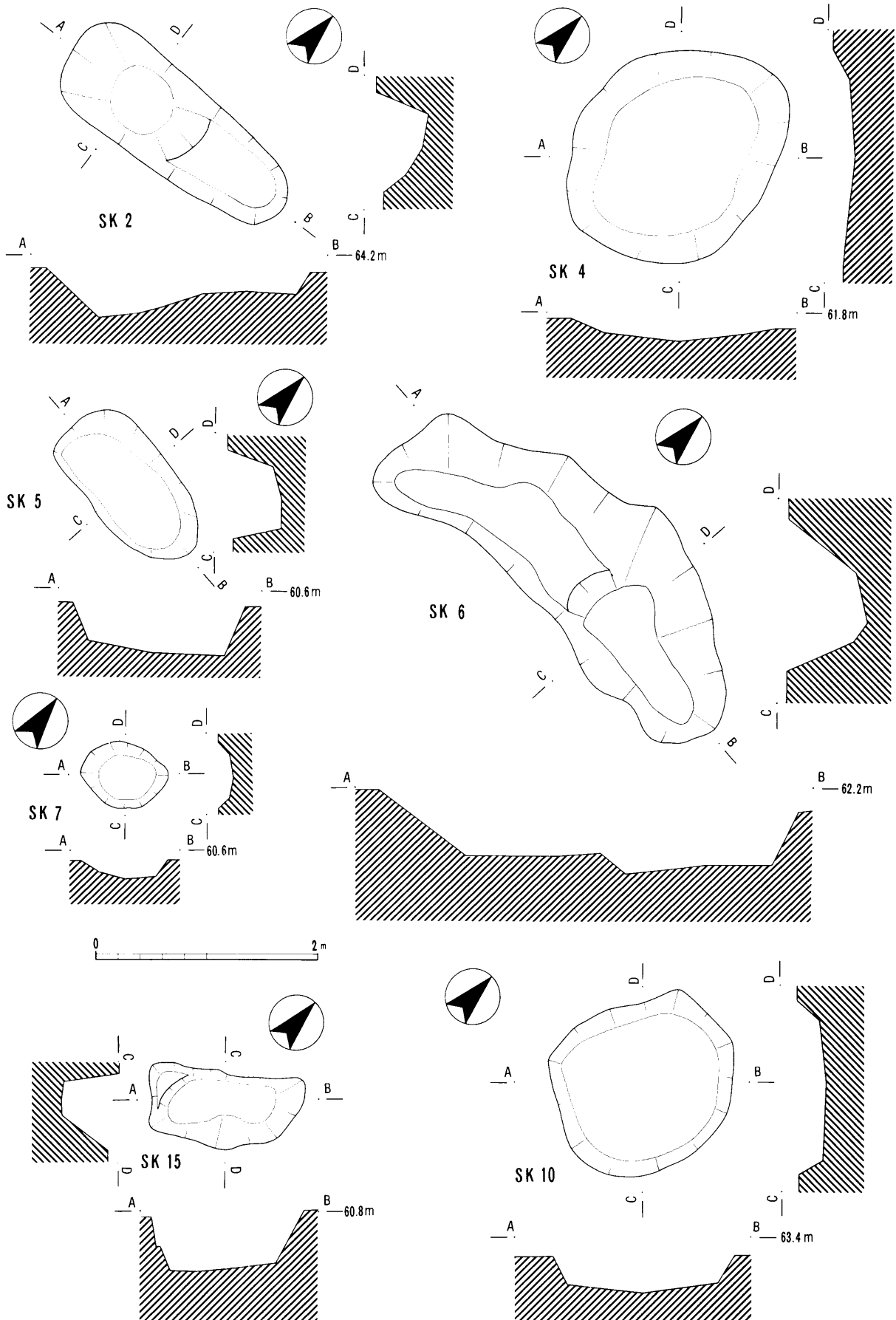
S K 13 SK12の西に隣接する。2.0m×1.0m、検出面からの深さ25cmである。上面に淡い焼土が見られた。埋土は暗褐色で土坑内よりの遺物の出土はなかった。

S K 15 B-VI区とB-VIII区間の畦を除去した時に検出したもので、1.4m×0.45m、深さ約50cmの不整形な土坑である。埋土は暗褐色で、土器片（5,17,20）、剝片が微量出土した。

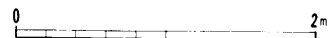
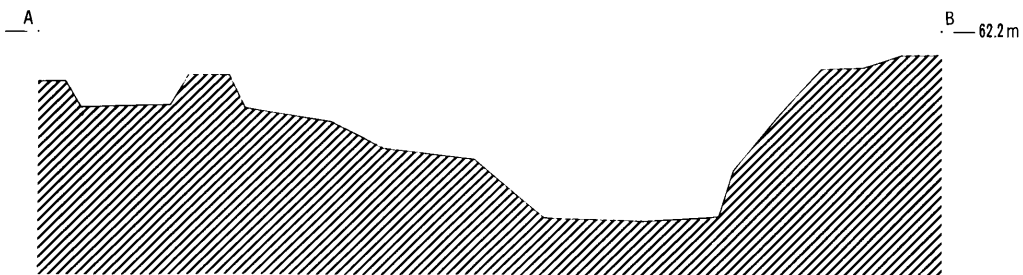
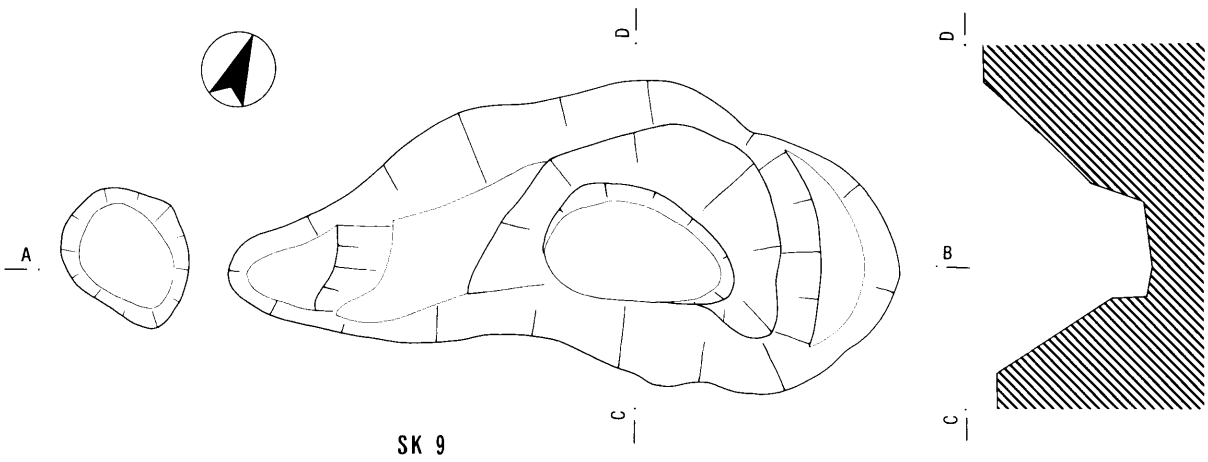
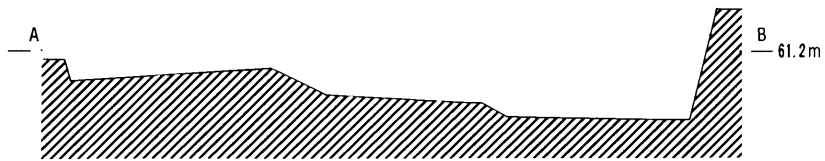
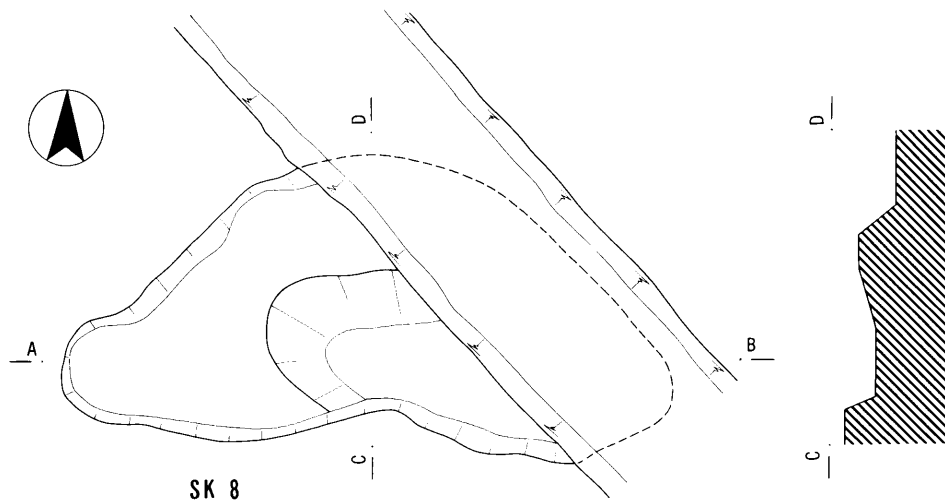
S K 16 B-IV区の中央部やや西寄り検出。

3.0m×3.5mのほぼ円形を呈する土坑である。検出面からの深さは約20～50cmであった。

後述のSD3と一部が重複するが、切り合い関係は埋土が同じ黒色土であったため確認することができず、不明である。またSD3の一部とも考えら



第5-6图 SK 2、4、5、6、7、10、15、实测图 (1:50)



第5-7图 SK 8、9実測図 (1:50)

れるが、底部のレベル差がかなりあるので別の土坑と考えた。

埋土中より時期比定できない縄文土器片、石鏃(38,44,70)、剥片等が出土した。柱穴など検出されなかったけれども、本土坑は縄文時代早期の竪穴住居跡とも考えられよう。

B. 溝

SD3 B-II区からIII区、IV区へ続く浅い溝である。B-II区の中央部分でほぼ直角に折れている。検出面での幅は1.5~2.8mで深さは12~30cmである。肩部から底部にかけての傾斜はゆるやかで底面も平坦でなく中心部ほど深くなる。

B-II区の東壁から発掘区外へ続くため拡張した結果、その延長と思われる浅い溝が検出された。しかしさらに東に延びるものではない。また、この溝の南端はSK16に重複する。

埋土は下部に黒色土が、上部に暗褐色土が堆積していた。

B-II区の溝底から山形押型文土器片(4)、石鏃(30,61)が出土した。

SD17 SD3の南端から東へ約3mの間隔をおいて東へ延びる細い溝が検出された。幅は60~100cm、

深さは25~40cmで、断面形は場所によって異なるが鋭いV字形を呈する部分も見られる。東へ約8m延び、発掘区東壁ぎりぎりのところで確認できなくなった。

埋土は黒色土で、埋土中よりサヌカイトの剥片などが微量出土したにすぎない。SD3と一連のものであろうか。

C. ファイヤーピット

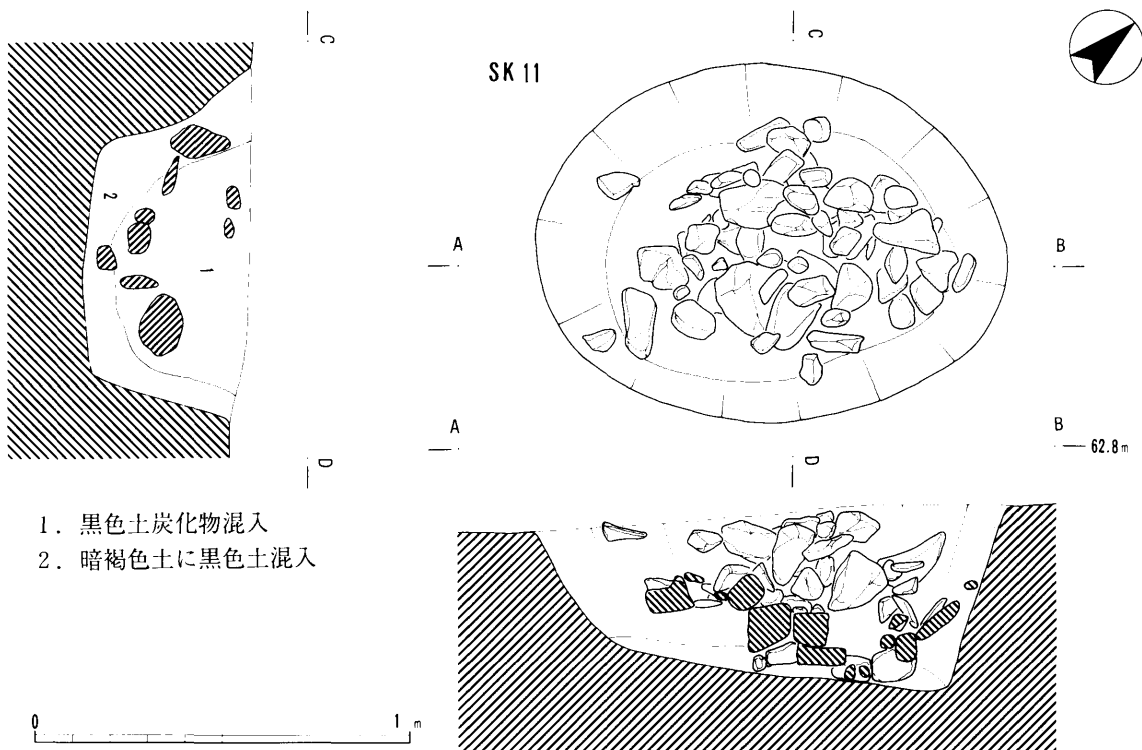
B-I区の北に隣接する試掘坑で検出されたものである。後の拡張によりB-0区に取り込まれた。

直径40cmの円形で、深さは検出面から約15cmであった。埋土は黒色土混りの暗褐色土で、焼土がみられた。

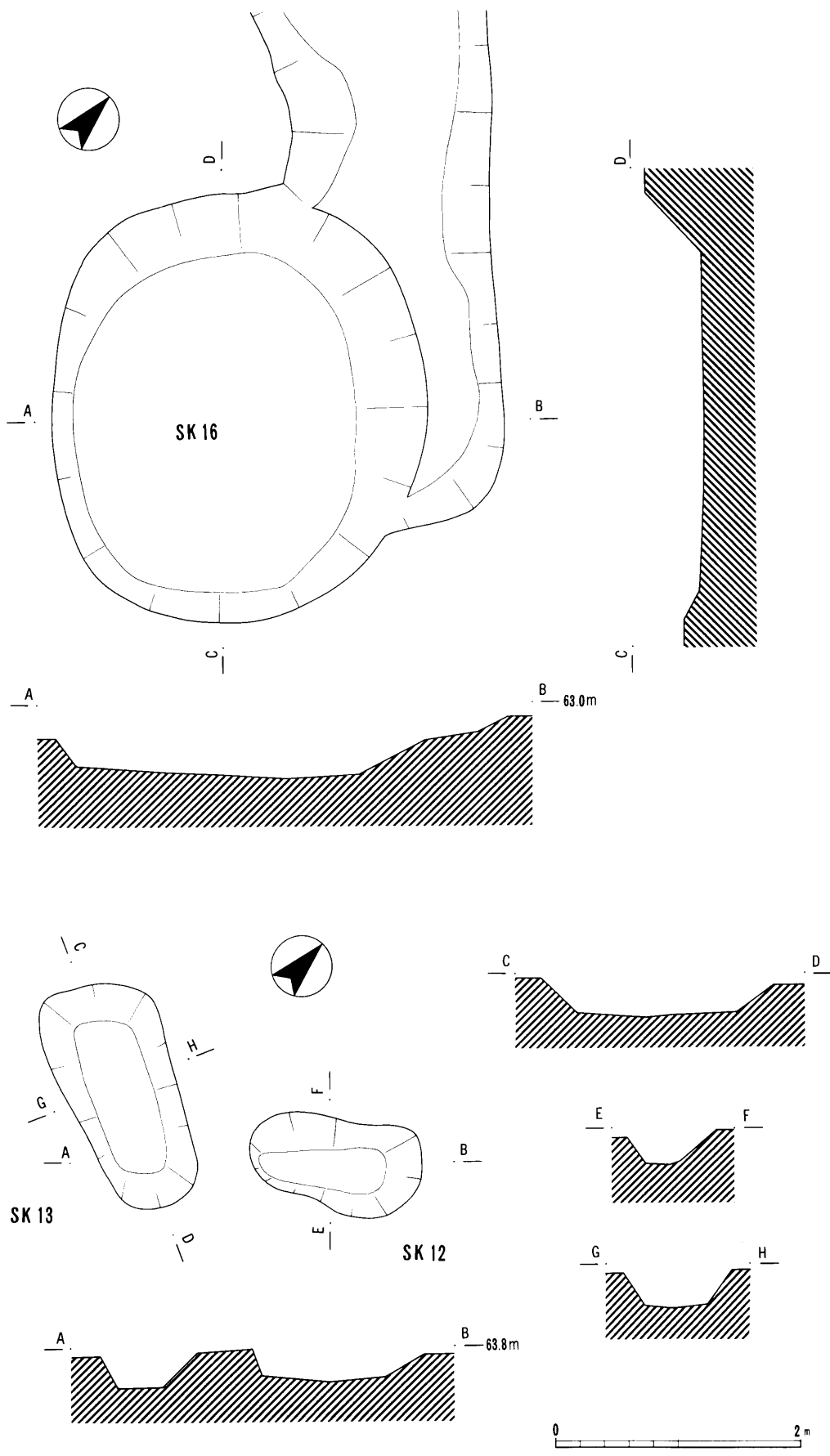
2. 先土器時代末~縄文時代の遺物

A. 土器

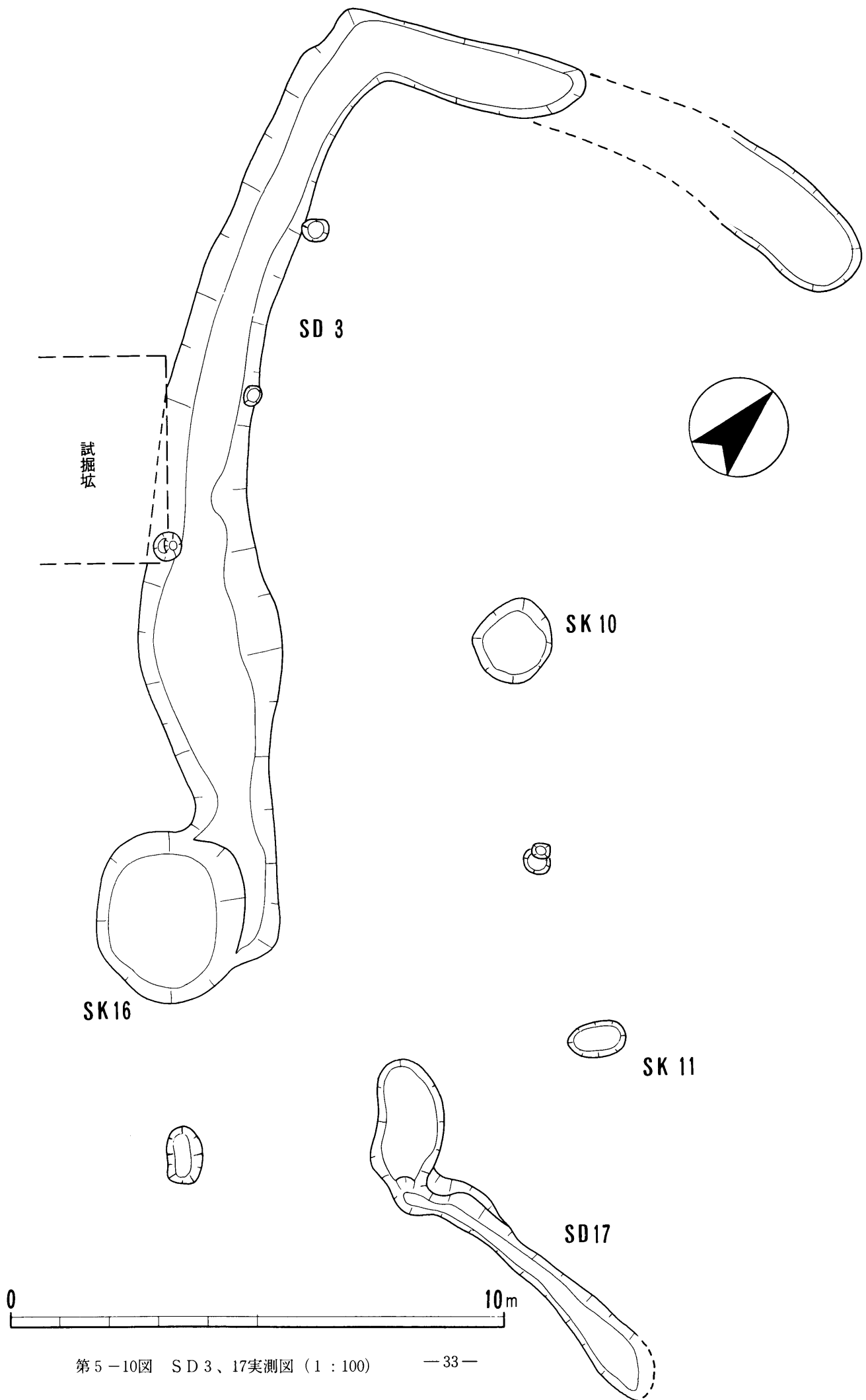
縄文土器片は石器、剥片の出土量に比して極めて少量で、総数で約100片程出土したにすぎない。そしてそのほとんどが小片もしくは細片で、磨耗が著しくもろいものばかりであった。第5-11図には図示できるもののすべてを示した。時代的には早期から晩期までの各期のものが少量ずつ見られる。



第5-8図 SK11実測図(1:20)



第5-9图 SK12、13、16、实测图 (1:50)



第 5 - 10 図 S D 3、17 実測図 (1 : 100)

(1)～(11)は早期の押型文土器である。

(1)はいわゆるネガティブな押型文を施す深鉢の体部片である。原体は長さ約2cmで二条2ないし3単位のを縦位に回転施文している。凹部の平面形が長楕円形を呈し、施文は浅い。また凹部の断面形は弧状である。胎土は良く、長石を主とした細砂粒および金雲母を含み焼成は良、褐色を呈する。内面は粘土接合部にあたり、接合部で剝離している。遺存状態は悪い。当遺跡の約6km下流左岸の段丘上に立地する上寺遺跡出土土器^⑩にちかい。神宮寺式^⑪の新しい部分^⑫に相当する。

(2)～(8)は山と谷がゆるやかな山形の押型文が施される土器片である。このうち(2)および(4)は口縁部片で、内外面に施文されるものである。

(2)は口縁部外面に縦位の刻目が施され、やや間隔をおいて山形文が施されるようである。内面は横位の山形文が施され、口唇部にも刻目が施される。

(4)は口縁端部を欠く。内外面とも横位の山形文が見られるが、内面は口縁部付近に一条施文され、以下は無文帯となっている。施文は内外面とも浅いが、内面に比して外面は非常に浅く、磨滅等も加わって不鮮明となっている。SD3底面の出土である。

(2)(4)とも胎土は並、砂粒を含み焼成は不良である。色調は器表が褐色、内部(断面)は黒色である。

(3)は体部片で外面のみ山形文が施文され、内面はていねいなナデ。胎土はやや粗く細砂粒を含む焼成はやや不良、褐色を呈する。

(5)は磨耗が著しく詳細は不明だが、縦位にやや太めの山形文が施されるようである。胎土は並、砂粒を含み焼成は良い。明褐色を呈する。SK15から出土。

(6)は体部片。磨耗のため外面に横位の山形文がわずかに残る。山と山の間隔は約2.5cmと広いが、山の高さは低い。内面はナデ仕上げ。胎土は並だが1mm前後の石英粒を多く含み、最大4mm大のものも混る。焼成は良く、淡褐色を呈する。

(7)(8)は同一固体で、やはり体部片である磨耗が著しく文様も極めて不鮮明であるが、細くて密な山形文が外面に施されている。胎土はやや粗、

長石の細粒を含み焼成は不良、外面は明褐色を、内面は暗褐色を呈する。

山形押型文はネガティブな楕円押型文とポジティブな楕円押型文に伴うものがあるが、(2)～(8)については(1)に伴うか、もしくは若干後出のものであろう。

(9)～(11)は口縁部内面に大柄な斜行沈線をもつ深鉢形土器の小片である。いずれの外面にも文様は確認できない。胎土は粗く、2～3mm大の砂粒を含み焼成はやや不良である。いずれも磨耗が著しい。高山寺式に比定できよう。

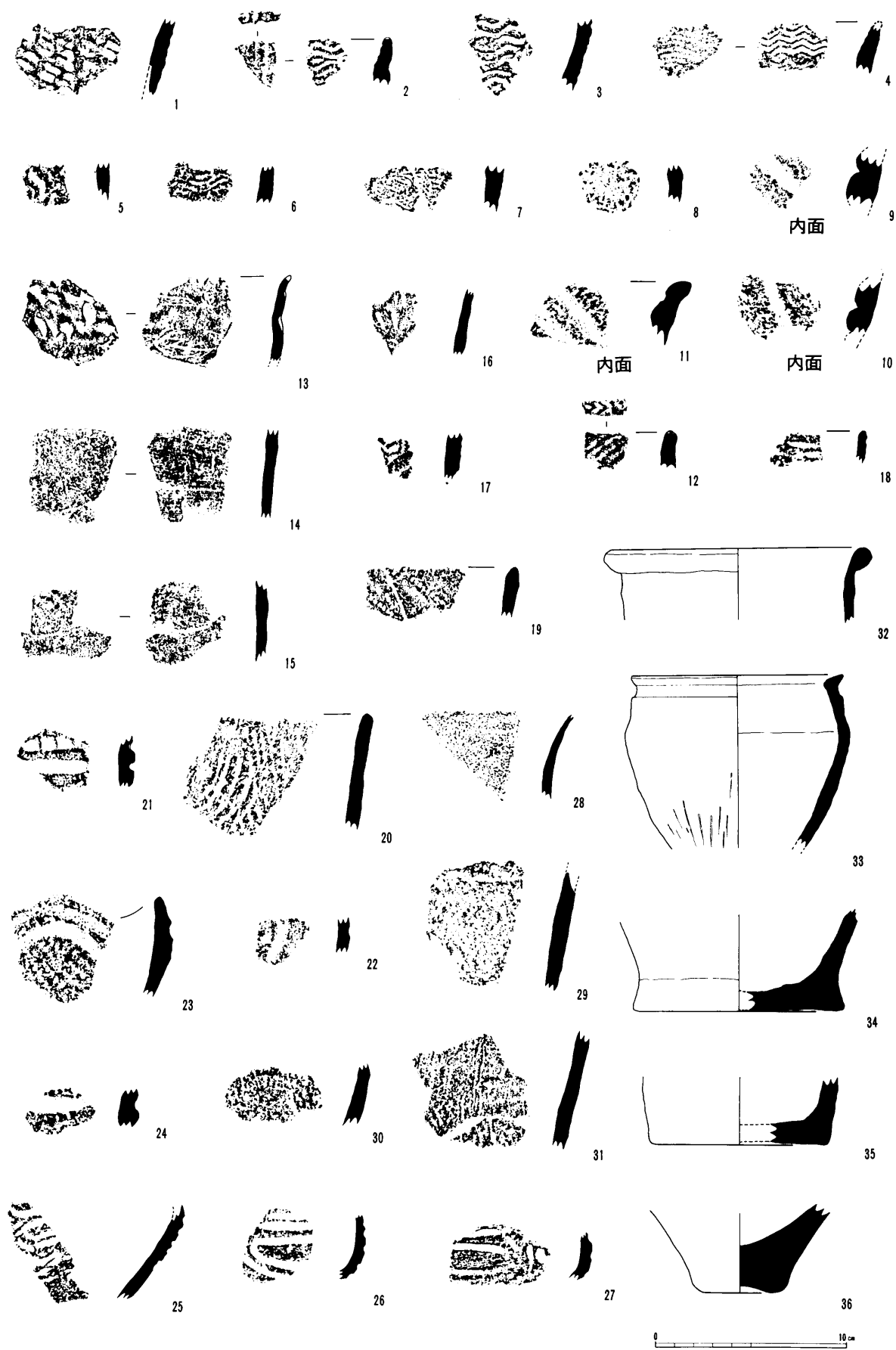
(12)は口縁部の小片。磨耗のため不詳ながら、外面には縄文が施文されている。内面は無文、口唇部は丸味をもちヘラによる鋭い刻みが羽状に施される。胎土は並、繊維は含まないようである。焼成は良く灰褐色を呈する。(1)などに伴うものであろうか。

(13)～(15)は深鉢形土器で同一個体である。口縁端部付近で若干外反する器形の深鉢形土器で、(13)の口縁部片では口唇部にV字形の鋭い刺突がなされ、外面には2段にわたり凹部がD字形の押し引き風の連続刺突文をもつ。器壁は薄く、胎土に繊維を含む。かなり精良な粘土が使用され、内外面ともていねいなナデ仕上げである。(14)の内面には繊維のナデ痕が残るが、内外面とも条痕は認められない。焼成は良く堅緻で淡褐色を呈する。石山式に類似点があるが、条痕がはっきりしないことや器壁が薄い点、押し引き風の施文等、石山式から天神山式への過渡的な要素が窺える。

(16)は細長いD字が刺突された体部小片。胎土は良、石英、長石粒および繊維を含む。焼成は良、淡灰褐色を呈する。

(17)は細片のため上下関係も定かではないが、外面に小さなD字の刺突文が密に残るものである。胎土中の繊維の混入および条痕については不明。胎土良、砂粒を含み焼成は不良。黒褐色ないし暗褐色を呈する。磨耗が著しい。SK15埋土からの出土である。入海Ⅱ式に似る。

(18)は薄手の土器で口縁部の小片である。外面には粗い条痕が横位に施される。胎土はやや粗く、繊維は含まず細砂粒を多く含む。焼成は良、淡灰褐色



第5-11图 出土縄文土器実測図、拓影 (1:3)

を呈する。

(19) も磨耗が著しい。深鉢形土器の口縁部であろう。口縁に沿って縄文を施文した後、約2cmほどの間隔をとって一条ずつ縄文を残し、他の縄文をナデ消している。ナデが強いナデ消されずに残った一条の縄文の部分が、微隆帯のように若干盛り上って見える。胎土は良、繊維を含み焼成は良、淡褐色を呈する。

(20) は体部片。外面には方向が不揃いな粗い条痕が縦位に施される。内面にはかすかに条痕が残る。胎土は良、繊維、1～2mm大の石英・長石粒を含み焼成は良である。淡黄褐色ないし淡褐灰色を呈する。磨耗が著しい。SK15埋土中より出土。

以上(13)～(20)は繊維を含んだ早期末葉に位置づけられる土器である。いずれも小・細片のため、文様構成や器形等が明確でないため一括したが、いくつかに細分できるようである。

(21) は竹管による2条の沈線が横位に施される体部小片である。沈線のうち上の1条は、竹管の押し引きによる結節沈線である。中期に属するものであろうか。SD3埋土(上面)からの出土。

(23) は波状口縁深鉢の波頂部口縁片。口縁に沿って太く浅い沈線が2条平行して施され、以下に縄文が施される。磨耗のため詳細は不明。胎土は粗く1mm前後の砂粒を多量に含む。焼成は良、黄褐色を呈する。中期末ないしは後期初頭のものであろう。

(22) も浅い沈線が見られ、同時期と考えられよう。

(24) は太い沈線が1条横走し、その下が隆帯状となっており、そこに細かな刻みが連続して施されているように見えるが、磨耗が著しく判断が困難である。

(25)～(27)は後期前葉の浅鉢もしくは鉢形土器の体部片と考えられるものである。沈線文主体の文様が見られるが、いずれも磨滅しており細部については不詳である。(25)には沈線による雲形の複雑な文様が見られる。(26)(27)は同一個体と考えられるが、長楕円形の沈線区画が見られる。また(27)には施文原体による刺突文も見られる。度会郡大宮町の大西遺跡^⑧出土遺物に類例がある。

(28)(29)は無文の体部片。(28)は口縁部に近い部分であろうか、器壁が薄い。

(30)(31)は(34)の底部と同一個体と思われる。縦位の条痕が見られる。

(32)は推定口径14cmの小型土器の破片である。口縁部で外側へ粘土を折り曲げ玉縁状にし、内外面ともヨコナデ、体部外面下半は縦位のケズリ調整。胎土は粗く、1～1.5mm大の砂粒を多く含む。焼成は良、色調は明褐色。体部外面に煤が付着している。

(33)も類例のない小型土器である。推定口径11cm。口縁部は端部に面をもち、断面は三角形状で外側に肥厚する。頸部は繊維状のもので強くヨコナデされる。最大径付近までの体部上半は、ユビオサエで成形したのちナデで仕上げ、下半は下から上へのケズリ調整がなされる。

一方内面は口縁部から体部最大径付近までヨコナデ、以下は下から上を基調としたケズリである。

胎土はやや粗、砂粒を含み焼成は不良。灰褐色を呈する。体部外面に煤が付着している。

以上(32)(33)は類例がなく時期決定に苦しむが、後・晩期に属するものと考えたい。

底部は3点ある。平底が2点と凹底が1点である。

(34)は円盤の外側へ体部の粘土を貼りつけるもので、体部は外反ぎみに斜め上方へ開く。(35)は内湾ぎみに上方へ立ち上る。

(36)は小さな凹み底の底部。磨耗著しく調整等不明。淡橙褐色を呈する。(田村 陽一)

B. 石器

尖頭器 (1~8) (1)(2) はともにチャート製の有茎尖頭器である。(1) は9 m離れて出土した2点が接合したものである。一部に礫皮面を残すほかはほぼ前面に精緻な押圧剥離が施される。先端から身中程にかけては緩やかに外弯し、基部側縁はやや内弯する。逆刺部の形態は両側とも欠損しているため不明であるが、折れ面付近の形状から側方にやや突出するものと推定される。長さのわりに分厚い。(2) は基部のみ残存する。二次加工は(1)に比して粗く、やや急角度である。逆刺部から基端部にかけては直線的で、逆刺部は不明瞭である。

(3) はサヌカイト製で、先端部のみ残存する。先端付近の側縁は緩やかに外弯する。

(4)(5) は身部側縁が直線的な資料である。(4) は試掘資料で、サヌカイト製である。身部下半と先端部を欠損する。表裏ともにおおむね右側縁から左下がりの調整を行っている。(5) はチャート製で先端部と身部下半を大きく欠損する。二次加工は粗く階段状剥離がめだつ。

(6) はチャート製で長さに比べて幅の広い木葉形尖頭器の基部と考えられる。調整は粗く、図裏面に素材剥片の主要剥離面を大きく残す。

(7)(8) はともにチャート製で、左右非対称な形態をもつ。(7) は粗い調整による鈍い先端部を有す。図表面に素材剥片の背面の一部を留める。(8) は下半部と先端部を欠損する。調整加工は全面に行き届いており、一部階段状となっている。

搔器 (9~13) (9)(10) は肉厚で比較的小型の資料である。ともにチャート製である。(9) は節理面で割れた平滑な主要剥離面をもつ分厚い剥片を素材としている。粗い急角度の剥離によってやや鋸歯状の刃部に仕上げられている。図正面の稜上にも調整が加えられている。基部はわずかにつまみ状となっている。(10) は節理面にて基部及び一側縁を欠損している。刃部はやや急角度の調整によってゆるやかな弧状に仕上げられている。図裏面の側縁にも細かい調整が加えられている。

(11)(12) はサヌカイト製でやや幅広の剥片を素材として楕円形に作られた搔器である。ともに急角度ともいえない通常の剥離によって刃部を作出し

ている。(11) は背面に礫皮面を有す剥片を素材としてほぼ全周に精緻な二次加工が施されている。基部には素材剥片の切子状打面を留めている。(12) は縁辺を著しく損っているが、大きさ・形態とも(11)と酷似する。(11)から約1 m離れて出土している。素材剥片の末端部分を基部として、打痕部分を中心に刃部が作出されている。

(13) はサヌカイト製で素材の主要剥離面側に刃部が作られている。刃部は浅いやや急角度の調整によってわずかに弧状に仕上げられている。図正面右側縁及び裏面両側縁には粗い調整が加えられている。

削器 (14~18) (14)(15) はともにチャート製で比較的縦長の剥片を素材としている。(14) は図正面の右下部を欠損し、上部は二次加工以前に節理に沿って欠損している。やや緩角度の深い剥離によって弧状の平面感をもつ刃部を作出している。(15) は図上部及び下部の大部分を欠損している。(14)と酷似する石質の素材を用い、刃部は残存部分のみから判断する限り(14)とよく似た弧状の刃部を有すると考えられる。

(16) はサヌカイト製で礫皮面を有す剥片の端部に微細な調整による直線的な刃部が作られている。図上部を大きく欠損する。

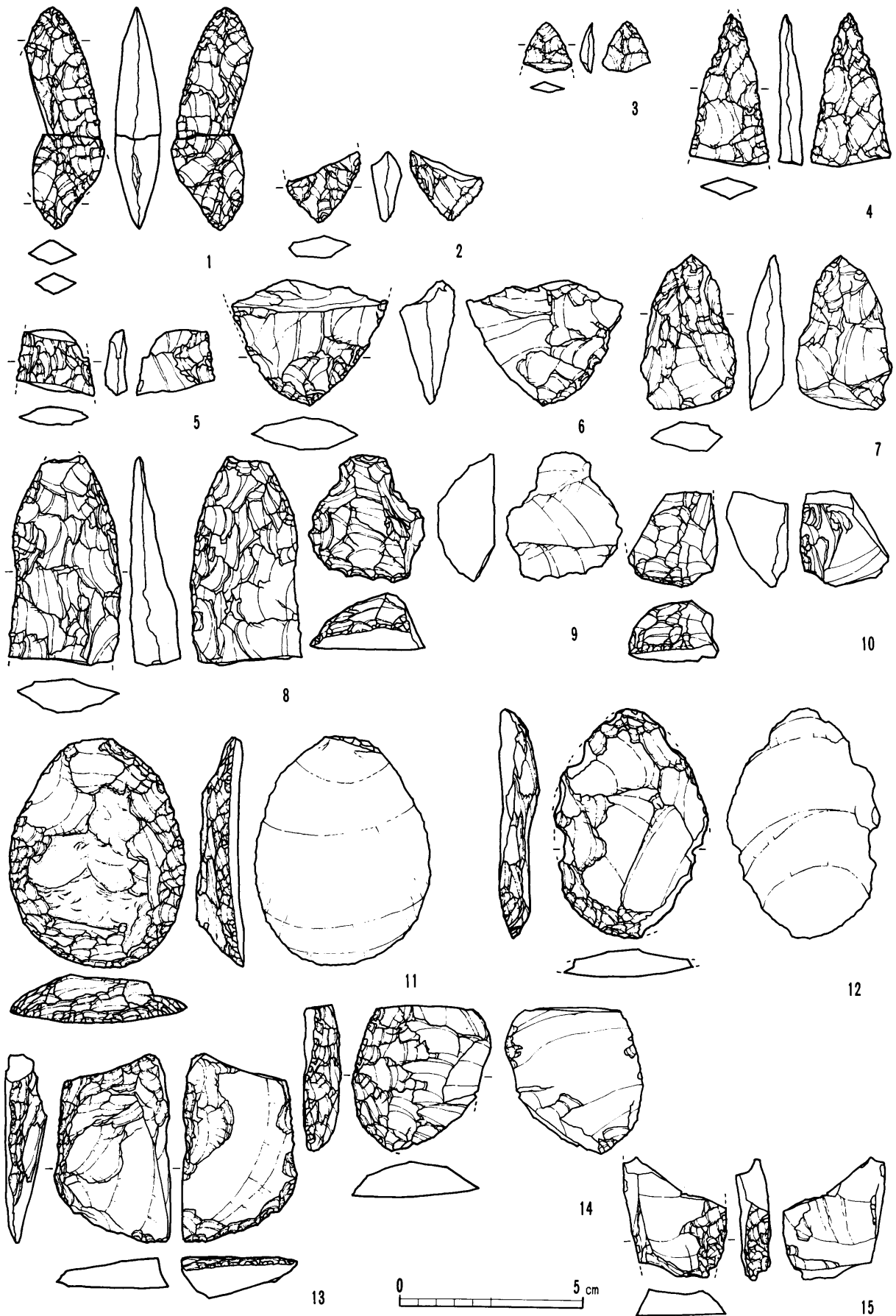
(17) はサヌカイト製で、背面が風化面となる剥片を素材としている。主要剥離面側の一側縁に粗雑な調整を加えている。図上部を欠損する。

(18) はサヌカイト製である。分厚い剥片の側縁に急角度の剥離を加え、直線的な刃部に仕上げている。図上部を欠損する。

斧形石器 (19・20) (19) は粘板岩製である。基部がやや尖る小型扁平の資料で、平面が弧状となる刃部を有す。身の中程から基部にかけての稜は両面ともに着柄のせいか光沢をもつ。刃部は両面ともに軽く研磨されていると考えられる。

(20) は凝灰岩製である。表面の風化が著しく調整痕は不明瞭である。刃部は弧状の平面形を有し、片面が扁平となる片刃状を呈す。身部の横断面形は刃部の形態に対応してD字形に近い凸レンズ状をなす。A区出土である。

二次加工のある剥片 (21~25) 定型的ではないが、二次加工のあるものを一括した。(21) はチャー



第5-12图 出土石器实测图1 (2:3)

ト製で、剥片の鋭い縁辺を残して一部に二次加工を施す石器である。寸詰まりでやや幅広の剥片を素材として、まず背面側からの調整によって打瘤を取り除き、背面の側縁基部付近に急角度の調整を施している。剥片末端部には極めて微細な急角度の剥離がみられる。なお、未加工の縁辺には刃こぼれ状の剥離がみられる。(22)はチャート製である。不整形な剥片の主要剥離面側の端部と背面側の側縁に粗い剥離がみられ、主要剥離面側の側縁の一部分に細かい平坦な剥離が加えられている。調整のない側縁には刃こぼれ状の細かい欠損がみられる。

(23)はチャート製で、基部と下半を大きく欠損する。剥片の主要剥離面側基部にやや急角度の調整を加え、背面の側縁の一部に刃こぼれ状の剥離がみられる。

(24)はサヌカイト製で分厚い剥片を素材とし、背面には一部礫皮面を留める。素材剥片の平坦な面(図裏面)から急角度の調整を加えている。図裏面にあたる面を「甲板面」とすれば粗雑な舟底形石器とすることもできようか。

(25)はチャート製で、不整形な剥片を素材とする。剥片の切断面を打面としてファシット様の剥離を一条加えている。一部に刃こぼれ状の剥離を残す。

細石刃? (26) チャート製である。平坦な打面を留め下半部は欠損している。

石核 (27~29) (27)はチャート製である。礫皮面を残す分厚い断面楔状の剥片を素材としている。数回目的剥片を剥ぎ取ったのち、打面再生を行い、さらに数回剥離を行っている。細石刃核の可能性はある。なお、(26)の細石刃様の剥片は当資料から剥がされたものではない。

(28)は頁岩製である。節理に沿って割れたと考えられる平滑な面を打面として数回剥離を行い、この作業面の反対側の面に打面転位を行って、寸詰まりで幅広の剥片を生産したのち放棄している。目的剥片は検出されていない。適宜打面転位をすることにより理想的な剥片の生産を行う剥片剥離工程の存在が窺える。

(29)は頁岩製である。粗い調整打面から入念に頭部調整を行って剥片を生産し、さらに二方向から剥片を剥ぎ取っている。そののち、図下端が節理面

によって損なわれたためか、(28)ほど剥離が進行しないままうち棄てられている。

石鏃 (30~72) (30)~(35)は正三角形ないしそれに近い平面形態をとるものである。基部はやや内弯するものがあるがおおむね直線的である。

(30)(32)(33)はチャート、(31)(34)はサヌカイト、(35)は頁岩製である。

(36)~(38)は側縁が弧状に外弯するものである。先端部及び逆刺部は鈍い。すべてチャート製である。(36)は片面に素材の主要剥離面を留め、求心的な整然とした調整が施されている。(37)は両面に一時剥離面を残しており、図正面が背面である。

(39)~(42)は身部に対して比較的長い逆刺部をもつ資料である。サヌカイト製である。(39)(40)は先端から逆刺端にかけて緩やかな弧状を呈し、先端は鈍い。器幅が器長を上まわる。(41)(42)は鋭い先端をもち側縁は直線的である。

(43)~(56)は鋭い先端部を有し逆刺部側縁が外弯するタイプである。(44)は両面に一次剥離面を大きく留める周縁加工の石鏃である。(43)(45)

(47)(48)はいずれもよく似た欠損がみられる。

(53)は比較的精緻な例で整った平面形態をもつ。

(55)は厚めの剥片の周縁を加工したものである。

(56)は細い先端部を有し基部の挟り込みは浅い。

(43)(44)(46)~(52)(54)はサヌカイト、(45)

(53)(55)(56)はチャート製である。

(57)~(60)は左右非対称な三叉状の形態をもつ。

(57)(59)(60)はチャート、(58)はサヌカイト

製である。

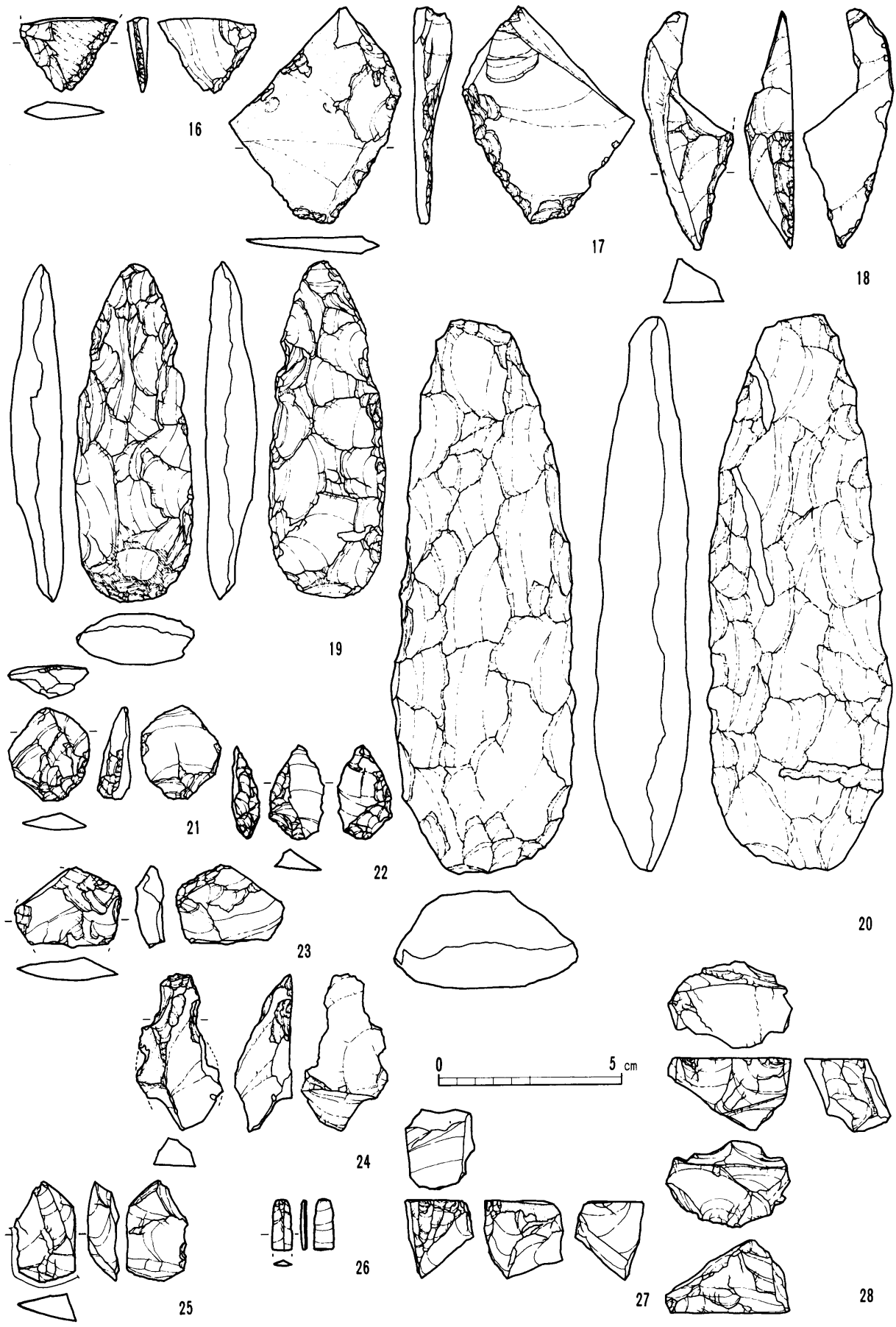
(61)~(67)は鋭い先端部と直線的な側縁を有す比較的細身長身の例である。(61)~(64)はサヌカイト製で、基部の挟り込みは浅い。(65)~(67)は整った平面形態をもつ。(65)(67)はサヌカイト、(66)はチャート製である。

(68)~(70)は逆刺部のみの非完形資料である。

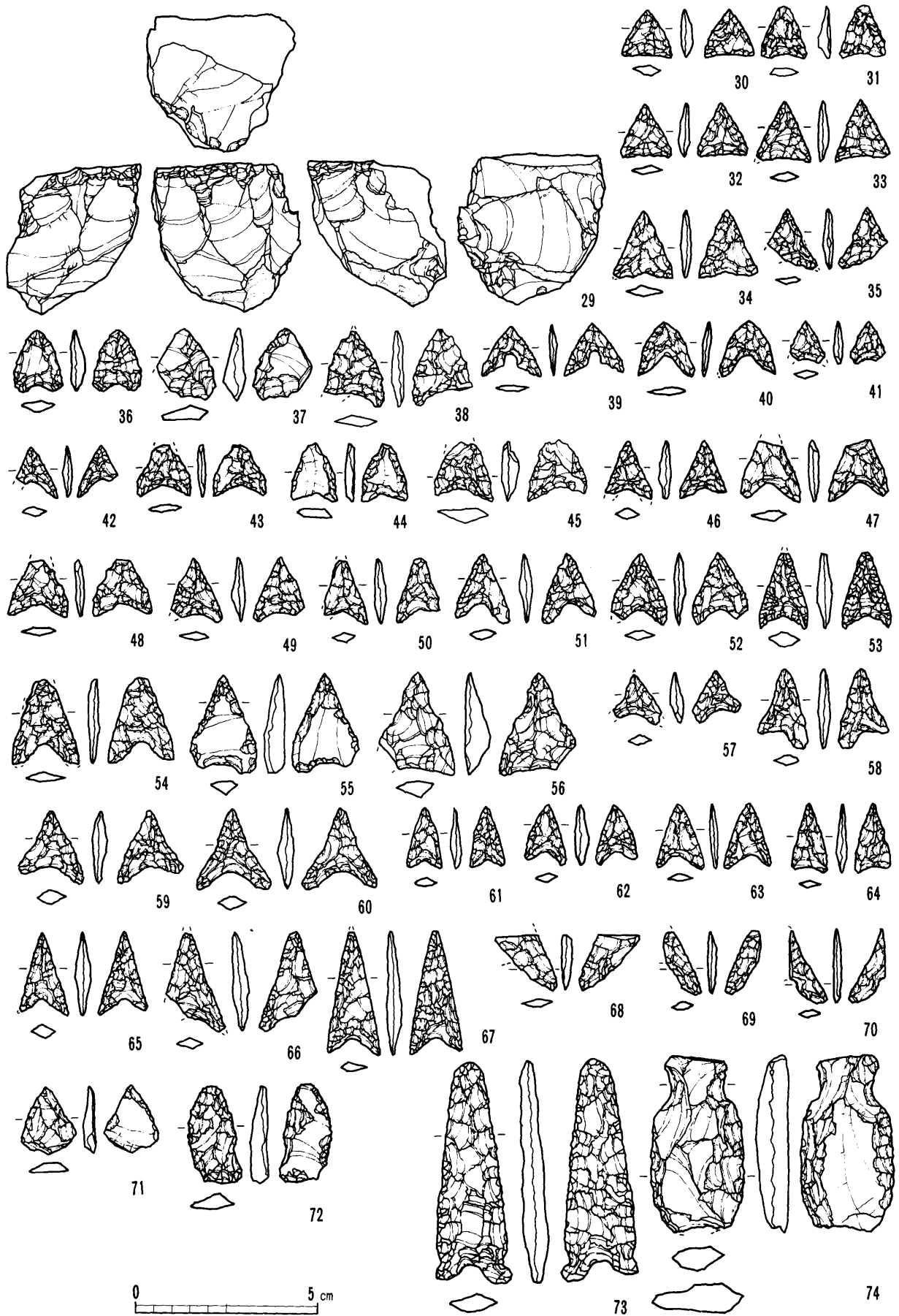
(70)は(39)~(42)のような、身部に対して長い逆刺部をもつ例と思われる。

(71)はサヌカイト製で片面加工の例である。調整は粗く基部には殆ど調整を加えていない。

(72)はチャート製である。一次剥離面を両面に留め素材の主要剥離面側の調整は少ない。先端は丸



第5-13图 出土石器实测图2 (2:3)



第5-14图 出土石器实测图3 (2:3)

く、トロトロ石器の未製品の可能性も考えられる。

トロトロ石器 (73) 異形部分磨製石器とも呼ばれる。チャート製である。「側縁は脚部に向って開くが、先端は尖らず丸味をもつもの」で、比較的長身である。脚部の付け根は弧状に抉られ、脚部は左右非対称となっている。先端部・身部・基部を問わず稜は著しく磨滅している。

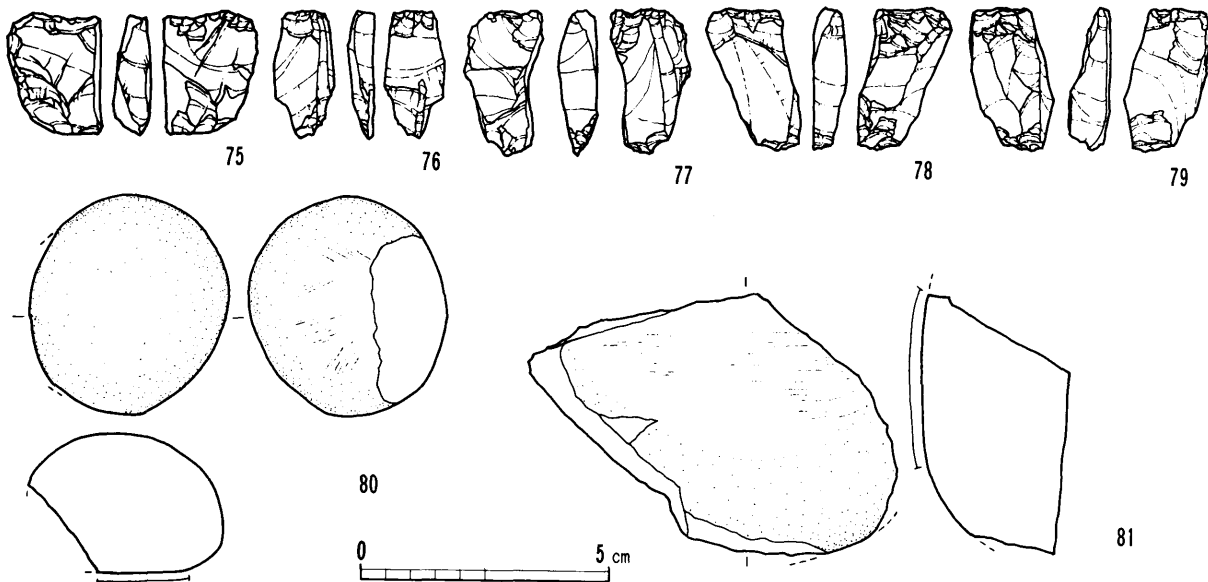
石匙 (74) サヌカイト製である。両面ともに一次剝離面を大きく留める縦型の石匙である。つまみ部の抉りは浅い。先端部を欠損する。

楔形石器 (75~79) ピエスエスキューとも呼ばれる。全て剝片を素材としており、器面に対してはほぼ90度に「截断面(剪断面)」を有す。(75)は4個

2対の刃部を有すものが截断面によって1縁片を失ったものと考えられる。(76)(77)は器面に対して平行する截断面もみられる。(77)の図正面は下半が下縁からの剝離によって覆われている。(78)の図裏面は大部分を上下両縁辺からの剝離によって覆われている。(75)は頁岩、(76)(78)(79)はサヌカイト、(77)はチャート製である。

磨石 (80~81) ともに砂岩製である。(80)は丸い平面形態をもち、片面の平坦な面に磨痕がみられる。一部欠損している。(81)は平面形態が楕円形の礫を用いている。大部分を欠損している。

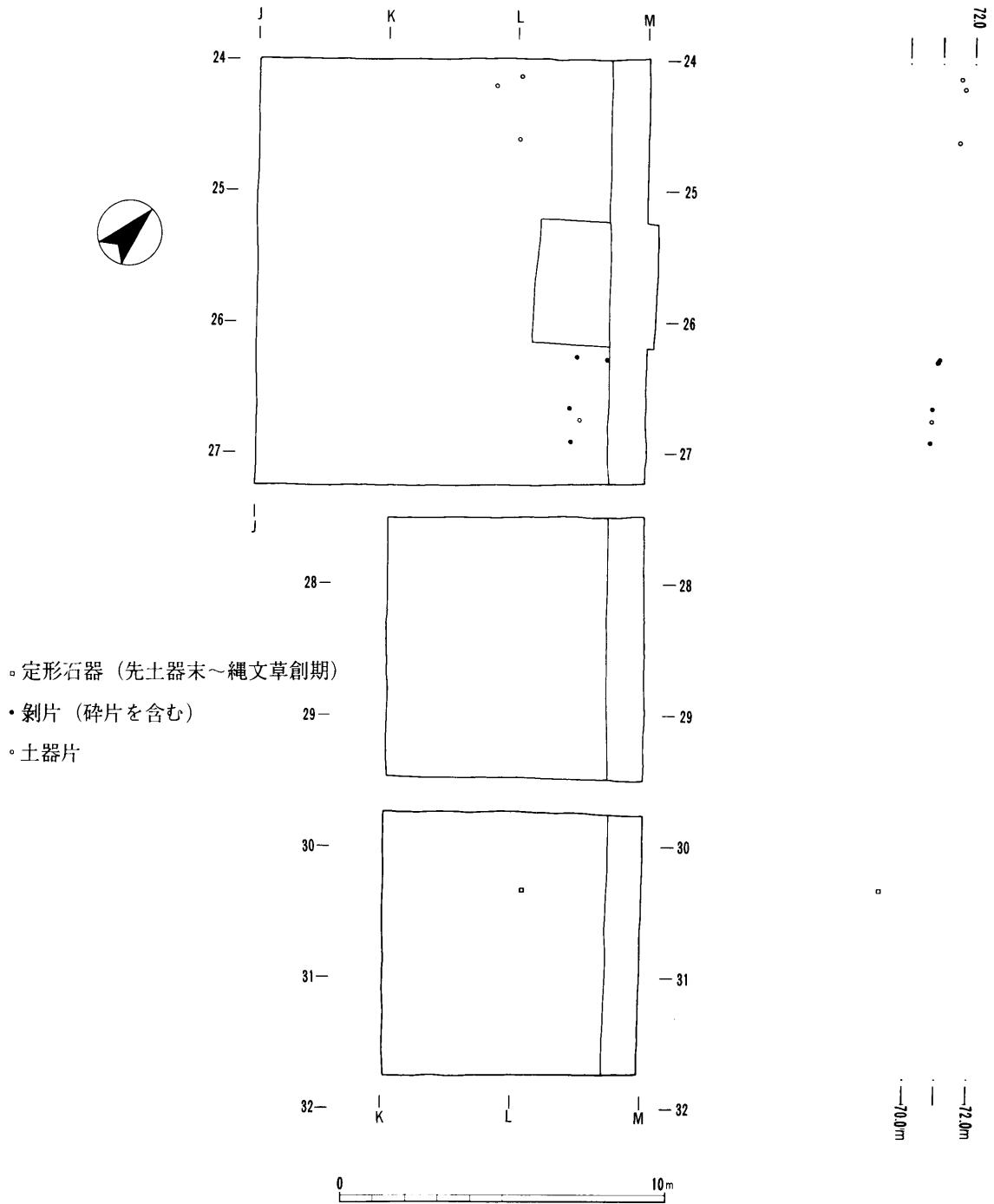
(新田 剛・田中 智子)



第5-15図 出土石器実測図4 (2:3)

整理No.	地区	グリッド	層位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器種	石質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図No.
1	A-I	L24	II	13	55	71,585	土器片						
2	"	"	"	1	248	71,540	"						
3	"	K24	"	335	82	71,680	"						
4	"	L26	"	188	103	70,915	剝片	サヌカイト	3.09	1.48	0.49	1.87	
5	"	"	"	282	116	70,890	"	チャート	4.38	3.54	0.78	13.94	
6	"	"	"	162	262	70,760	"	サヌカイト	2.43	0.91	0.42	0.79	
7	"	"	"	189	300	70,710	土器片						
8	"	"	"	166	367	70,645	剝片	チャート	3.17	2.92	1.10	9.68	
9	A-III	L30	V上	38	137	69,230	石斧	凝灰岩	15.01	5.02	2.58	234.8	20

第4表 A地区出土遺物一覧表 1



第5-16図 A地区遺物分布図 (1:200)

整理No.	地区	グリッド	層位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器種	石質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図No.
1	B-0	J40	II	240	302	65,425	楔形石器	頁岩?	4.60	3.72	0.99	18.18	
2	"	"	"	67	252	65,400	剥片	サヌカイト	1.44	2.87	0.55	1.54	
3	"	I40	"	325	66	65,455	石鎌	チャート	(2.78)	(2.09)	0.68	(2.87)	56
4	"	J40	"	238	57	65,555	剥片	"	2.02	2.62	0.77	2.88	
5	"	I40	"	300	86	65,455	"	サヌカイト	1.60	2.57	0.59	1.69	
6	"	J40	"	148	52	65,510	"	"	1.76	1.38	0.46	0.67	
7	"	"	"	190	170	65,445	"	サヌカイト	1.26	1.48	0.31	0.54	
8	"	"	"	307	28	65,535	"	チャート	1.42	1.62	0.28	0.66	
9	"	"	"	182	78	65,470	"						
10	"	"	"	231	110	65,450	"	サヌカイト	1.28	1.08	0.23	0.26	
11	"	"	"	53	275	65,425	"	"	1.38	1.18	0.19	0.23	
12	"	"	"	297	242	65,320	"	チャート	1.84	2.57	0.45	2.21	
13	"	"	III	266	80	65,385	剥片?	?	3.89	3.18	1.64	19.18	
14	"	"	"	180	19	65,430	剥片	チャート	(1.16)	(2.99)	(0.55)	(1.42)	
15	"	"	"	177	46	65,390	"	サヌカイト	(1.54)	(1.80)	(0.35)	(0.80)	
16	"	"	II	147	201	65,315	"	"	3.03	2.31	1.02	5.13	
17	"	"	"	127	195	65,330	"	玉髓?	3.37	(3.05)	(1.22)	(15.04)	
18	"	"	"	32	300	65,305	"	チャート	(0.80)	(0.80)	(0.12)	(0.07)	
19	"	I40	"	328	285	65,290	"	サヌカイト	(1.84)	(1.24)	(0.34)	(0.83)	
20	"	"	"	193	98	65,370	"	"	1.80	1.81	0.23	0.62	
21	"	"	"	211	78	65,375	楔形石器	"	2.04	2.50	0.99	4.85	
22	"	"	"	162	330	65,280	剥片	チャート	(1.76)	1.94	0.38	(1.23)	
23	"	"	"	160	353	65,280	"	"	2.38	(2.60)	0.78	(4.14)	
24	"	"	III	246	233	65,210	"	サヌカイト	(2.58)	(1.78)	(0.29)	(0.87)	
25	B-I	I41	II	94	97	65,115	"	チャート					
26	"	"	"	33	257	64,970	"	"	0.83	0.27	0.23	0.15	
27	"	H41	"	133	343	64,870	"	サヌカイト	1.34	1.39	0.19	0.35	
28	"	I42	"	37	100	64,730	"	"	(2.35)	1.38	0.45	(1.40)	
29	"	J42	"	167	120	64,655	"	チャート	4.20	6.52	1.14	29.57	
30	"	J41	"	277	284	65,010	"	"	(3.51)	1.36	0.72	(2.73)	
31	"	H42	"	240	51	64,790	"	"	(2.43)	1.88	0.47	(2.09)	
32	"	I42	"	154	157	64,570	"	"	(1.39)	(1.83)	(0.55)	(1.25)	
33	"	J42	"	245	73	64,730	"	"	(1.75)	(2.46)	(0.35)	(1.68)	
34	"	H41	"	192	116	65,000	"	サヌカイト	1.01	0.77	0.13	0.11	
35	"	"	"	85	255	64,905	"	チャート	2.37	1.54	0.41	1.06	
36	"	J41	"	200	13	65,095	"	サヌカイト	1.69	3.70	0.83	5.18	
37	"	H42	"	192	95	64,635	"	"	1.38	0.74	0.14	0.13	
38	"	"	"	187	262	64,455	"	"	(1.34)	(1.55)	0.19	(0.33)	
39	"	I41	"	293	62	65,030	"	チャート	3.69	2.64	0.90	6.13	
40	"	J41	III	8	57	65,025	"	サヌカイト	0.73	1.33	0.31	0.26	

第5-1表 B地区出土遺物一覧表 1

整理No.	地 区	グリッド	層 位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器 種	石 質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図 No.
41	B-I	J41	II	296	147	65,180	敲石	堆積岩	8.25	6.22	3.50	262.55	
42	"	I41	III	363	73	65,000	剥片	サヌカイト	1.93	1.32	0.16	0.25	
43	"	J41	"	145	55	65,025	"	砂岩	2.85	3.64	1.07	11.08	
44	"	"	"	162	53	65,065	"	チャート	(1.49)	(1.30)	(0.15)	(0.26)	
45	"	"	"	210	40	65,095	石鏝	サヌカイト	3.63	0.97	0.82	2.43	
46	"	"	"	355	75	65,045	剥片	チャート	(1.32)	1.76	0.34	(0.65)	
47	"	"	"	372	173	64,945	"	"	3.28	2.22	0.69	2.36	
48	"	"	"	343	208	65,050	"	砂岩	(7.42)	4.09	1.13	(38.18)	
49	"	"	"	344	250	64,895	"	チャート	1.51	2.46	0.24	0.88	
50	"	H42	"	199	356	64,385	"	サヌカイト	1.01	1.07	0.16	0.14	
51	"	"	"	24	362	64,385	RF	"	1.99	1.77	0.53	1.59	
52	"	K41	"	116	18	65,470	剥片	チャート	1.16	1.22	0.19	0.26	
53	"	"	"	139	205	65,095	"	"	5.63	9.07	2.00	118.40	
54	"	"	"	288	60	65,260	土器片						⑫
55	"	K42	"	233	40	64,800	剥片	チャート	5.38	6.27	1.33	36.72	
56	"	"	"	187	72	64,475	UF	"	1.64	1.50	0.63	1.38	
57	"	"	"	373	377	64,580	剥片	サヌカイト	0.80	1.08	0.13	0.10	
58	"	K41	"	150	130	65,095	"	"	0.57	0.93	0.16	0.10	
59	"	"	"	258	220	64,895	"	"	(1.70)	(1.95)	(0.45)	(1.01)	
60	"	K42	"	155	138	64,490	"	チャート	1.77	(1.53)	0.33	(0.59)	
61	"	"	"	153	205	64,340	"	サヌカイト	(2.37)	2.05	0.53	(1.90)	
62	"	"	"	233	240	64,370	土器片						
63	"	"	"	292	200	64,490	剥片	サヌカイト	1.03	1.60	0.12	0.19	
64	"	"	"	384	193	64,500	土器片						⑬
65	"	"	"	163	355	64,145	剥片	サヌカイト	(1.31)	(1.38)	(0.15)	(0.27)	
66	"	"	"	152	375	64,215	"	"	2.15	1.15	0.30	0.81	
67	"	J41	II	270	378	64,970	石鏝	"	2.18	1.41	0.34	0.60	58
68	"	K41	III	164	138	65,025	剥片	"	2.45	(1.98)	0.39	(1.32)	
69	B-II	I44	II	120	19	64,150	"	チャート	0.69	0.93	0.14	0.10	
70	"	J44	"	38	49	64,000	"	サヌカイト	1.01	1.85	0.13	0.31	
71	"	"	"	110	215	63,980	"	チャート	2.55	2.83	0.70	3.32	
72	"	"	"	185	170	63,955	"	サヌカイト	2.01	1.15	0.15	0.35	
73	"	"	"	142	315	63,985	土器片						
74	"	H44	III	352	20	64,015	石鏝	サヌカイト	(1.91)	(1.51)	0.30	0.62	52
75	"	H43	"	100	328	64,085	剥片	チャート	3.03	2.57	1.92	12.48	
76	"	"	"	198	396	64,105	RF	サヌカイト	2.05	3.92	0.66	4.69	
77	"	I44	II	33	133	63,070	剥片	"	0.92	1.82	0.23	0.42	
78	"	"	"	43	152	63,030	"	"	1.76	1.46	0.31	0.54	
79	"	H44	"	360	330	63,905	"	頁岩	4.01	3.92	3.88	36.84	
80	"	I44	"	157	66	64,075	土器片						

第5-2表 B地区出土遺物一覧表 2

整理No.	地区	グリッド	層位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器種	石質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図No.
81	B-II	I44	II	45	158	63,965	剥片	サヌカイト	1.47	1.75	0.15	0.40	
82	"	"	"	235	327	63,950	楔形石器	チャート	1.71	1.18	0.38	1.06	
83	"	I43	III	382	186	63,955	剥片	"	4.93	4.59	1.24	22.67	
84	"	J43	"	213	334	63,915	"	サヌカイト	1.41	1.17	0.23	0.25	
85	"	J44	II	186	20	63,940	"	チャート	(2.16)	2.05	0.49	(2.04)	
86	"	"	"	363	224	63,920	UF	"	(2.38)	(2.61)	(0.58)	(2.10)	
87	"	J43	III	356	385	63,900	楔形石器	サヌカイト	3.98	6.85	0.85	15.59	
88	"	I44	II	312	117	63,930	石鏃	"	1.95	1.51	0.34	0.57	51
89	"	J44	III	239	267	63,880	剥片	チャート	1.87	1.14	0.83	1.24	
90	"	"	"	247	269	63,890	"	"	1.67	1.88	0.33	0.89	
91	"	"	"	343	320	63,855	削器		3.89	3.75	1.00	17.55	14
92	"	"	"	277	350	63,850	剥片	サヌカイト	1.23	1.31	0.20	0.20	
93	"	"	"	250	375	63,830	"	"	1.76	1.56	0.39	0.74	
94	"	I44	"	370	357	63,775	土器片						
95	"	I45	"	265	60	63,695	"						
96	"	H44	"	296	400	63,670	剥片	チャート	1.18	1.96	0.46	0.81	
97	"	"	"	205	400	63,655	"	"	2.70	2.64	1.01	5.78	
98	"	"	"	200	350	63,695	"	サヌカイト	0.82	1.16	0.16	0.17	
99	"	H45	"	210	83	63,760	石核	チャート	3.62	2.57	2.83	17.42	
100	"	K41	II	139	205	65,260		?					
101	"	"	"	288	60	65,095		?					
102	"	I43	"	393	5	64,095	土器片						㊦
103	"	H43	III	306	327	63,945	楔形石器	チャート	3.12	3.61	1.13	11.04	
104	"	"	"	156	118	64,130	RF	粘板岩	(5.77)	4.08	0.90	(27.40)	
105	"	K43	"	332	226	64,030	楔形石器	サヌカイト	2.48	1.12	0.53	1.51	76
106	"	"	"	385	170	64,030	剥片	"	(2.13)	1.43	0.33	(0.63)	
107	"	"	"	395	230	64,020	"	チャート	(1.54)	(2.73)	(0.89)	(3.63)	
108	"	"	"	365	285	63,970	"	"	3.43	2.63	0.80	5.53	
109	"	"	"	358	302	63,960	"	サヌカイト	(1.50)	(0.93)	(0.23)	(0.27)	
110	"	"	"	385	364	64,015	土器片						
111	"	"	"	290	302	64,000	剥片	チャート	5.38	5.42	2.51	57.45	
112	"	"	"	287	292	64,030	RF	サヌカイト	2.06	2.12	0.73	1.67	
113	"	"	"	298	363	63,905	剥片	"	1.75	1.00	0.19	0.37	
114	"	"	"	260	397	63,890	"	チャート	2.45	3.83	0.69	6.57	
115	"	"	"	337	380	63,955	"	"	5.19	4.49	1.54	35.37	
116	"	"	"	154	295	63,995	"	サヌカイト	2.98	2.50	0.58	3.43	
117	"	K44	"	329	127	63,870	"	頁岩	2.26	4.15	1.42	12.53	
118	"	"	"	325	125	63,860	"	チャート	1.87	1.53	0.61	1.35	
119	"	"	"	325	115	63,855	"	サヌカイト	1.62	2.05	0.47	1.56	
120	"	"	"	256	139	63,900	"	チャート	2.90	1.57	1.37	5.46	

第5-3表 B地区出土遺物一覧表 3

整理No.	地区	グリッド	層位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器種	石質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図 No.
121	B-II	K44	III	190	150	63,890	土器片						
122	"	"	"	360	279	63,880	楔形石器	サヌカイト	1.66	1.29	0.58	1.06	
123	"	H44	"	290	143	63,835	剥片	"	1.85	1.62	0.31	0.64	
124	"	"	"	258	136	63,835	"	チャート	(4.56)	(2.64)	(0.93)	(10.30)	
125	"	K44	"	355	312	63,805	石鏃	サヌカイト	(1.53)	1.62	0.22	(0.50)	48
126	"	J44	"	244	223	63,860	土器片						③
127	"	I44	"	392	366	63,750	RF	頁岩	4.34	5.72	2.11	38.30	
128	"	K43	"	276	282	63,945	剥片	サヌカイト	1.23	1.65	0.25	0.44	
129	"	"	"	363	260	63,960	"	"	1.12	1.51	0.16	0.32	
130	"	"	"	372	270	63,980	"	"	2.05	3.50	0.79	3.62	
131	"	"	"	400	290	63,990	石鏃	チャート	2.05	1.78	0.41	0.82	59
132	"	"	"	278	323	63,920	剥片	サヌカイト	1.65	1.16	0.15	0.25	
133	"	"	"	319	326	63,920	石鏃	チャート	2.65	1.85	0.54	2.12	55
134	"	"	"	277	360	63,910	剥片	サヌカイト	1.42	1.12	0.12	0.20	
135	"	"	"	285	378	63,880	"	チャート	1.88	2.40	0.50	1.87	
136	"	"	"	330	382	63,930	"	"	2.12	1.00	0.41	0.74	
137	"	K44	"	316	170	63,880	RF?	サヌカイト	2.22	1.44	0.49	1.21	
138	"	"	"	142	326	63,780	剥片	"	0.75	1.08	0.12	0.10	
139	"	K43	"	356	242	63,940	石鏃	"	(1.67)	(1.62)	0.27	(0.61)	47
140	"	I44	IV	379	345	63,680	剥片	"	1.54	1.94	0.27	0.50	
141	"	"	"	329	302	63,675	土器片						
142	"	J44	"	184	242	63,830	UF?	石英	4.83	4.38	1.44	19.68	
143	"	"	"	211	365	63,820	剥片	サヌカイト	2.97	2.17	0.52	2.25	
144	"	"	"	295	283	63,760	"	チャート	3.45	1.82	0.82	3.04	
145	"	"	"	299	215	63,730	楔形石器	"	2.08	1.86	0.55	1.92	
146	"	"	"	330	232	63,800	土器片						②
147	"	"	"	344	270	63,590	剥片	サヌカイト	1.78	1.68	0.26	0.89	
148	"	J45	III	16	47	63,660	"	"	(1.96)	(2.46)	(0.49)	(1.81)	
149	"	J44	"	127	380	63,680	石鏃	チャート	(2.19)	(2.05)	(0.41)	(0.98)	60
150	"	"	"	325	344	63,680	石核	"	5.66	4.90	3.77	105.7	
151	"	H44	"	390	45	63,855	削器	サヌカイト	(5.82)	(4.72)	(1.06)	(19.22)	17
152	"	L45	III上	315	130	63,600	剥片	"	1.18	1.95	0.32	0.69	
153	"	"	III	45	49	63,745	"	"	2.04	4.01	2.06	17.89	
154	B-III	J45	II	75	376	63,755	"	チャート	1.54	1.03	0.20	0.32	
155	"	"	"	10	390	63,745	"	サヌカイト	2.01	2.35	0.35	1.62	
156	"	I45	"	320	360	63,725	"	"	1.23	1.44	0.24	0.39	
157	"	J46	III	110	220	63,700	"	"	2.07	1.95	0.20	0.65	
158	"	J47	II	18	116	63,585	"	硬砂岩	3.39	2.43	0.33	2.76	
159	"	J46	III	150	350	63,685	"	サヌカイト	1.16	0.86	0.18	0.15	
160	"	I47	"	192	10	63,465	"	チャート	1.25	2.48	1.11	3.26	

第5-4表 B地区出土遺物一覧表 4

整理No.	地区	グリッド	層位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器種	石質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図No.
161	B-III	J46	III	256	394	63,690	剥片	チャート	3.87	1.98	0.83	6.00	
162	"	J47	"	318	10	63,705	"	サヌカイト	2.41	4.47	1.34	11.88	
163	"	J46	"	332	366	63,705	"	"	0.91	0.84	0.12	0.07	
164	"	J47	"	350	9	63,675	"	"	1.15	1.13	0.15	0.13	
165	"	H45	II	65	260	64,560	"	チャート	3.69	4.40	1.29	20.95	
166	"	"	"	115	230	64,635	"	"	3.73	4.29	2.14	30.64	
167	"	"	"	210	243	64,580	石核	"	4.11	6.93	4.29	1.08	
168	"	I47	III	100	120	63,340	剥片	サヌカイト	1.14	1.29	0.33	0.63	
169	"	I46	II	300	167	63,590	土器片						
170	"	J45	"	153	342	63,700	剥片	粘板岩	4.02	1.91	2.60	15.55	
171	"	J46	"	300	137	63,655	"	サヌカイト	1.21	1.10	0.41	0.38	
172	"	"	"	288	142	63,670	"	"	1.41	1.46	0.23	0.45	
173	"	I46	III	337	372	63,490	楔形石器	"	1.49	1.66	0.50	109.4	
174	"	"	II	75	345	63,440	剥片	チャート	5.08	3.55	1.41	23.13	
175	"	H46	III	14	140	63,330	"	石英	2.25	1.79	0.74	1.75	
176	"	H47	"	174	28	63,210	楔形石器	チャート	1.92	1.90	0.61	2.04	
177	"	"	"	330	14	63,280	剥片	"	1.44	1.63	0.32	0.82	
178	"	"	"	287	75	63,230	石鏃	"	(1.59)	1.64	0.44	(0.86)	45
179	"	H46	"	26	360	63,235	剥片	"	3.93	3.08	1.08	11.48	
180	"	H47	"	118	114	63,190	"	頁岩	4.96	5.15	1.44	25.20	
181	"	"	"	215	180	63,200	楔形石器	チャート	3.22	2.36	0.85	6.31	
182	"	H46	"	38	356	63,240	剥片	"	4.11	3.66	1.88	29.58	
183	"	J46	II	380	5	63,740	"	"	2.82	2.51	0.57	4.15	
184	"	I46	IV	205	245	63,435	"	"	3.52	3.25	1.44	17.42	
185	"	"	"	150	96	63,435	土器片						
186	"	I47	"	100	18	63,235	剥片	チャート	1.27	2.19	1.00	1.52	
187	"	"	"	52	94	63,200	土器片						
188	"	H46	III	60	223	63,265	剥片	チャート	1.92	1.90	0.78	2.04	
189	"	H47	"	291	103	63,180	"	"	1.76	2.71	0.89	3.52	
190	"	"	"	269	181	63,170	"	石英	3.38	2.27	1.48	14.64	
191	"	"	"	330	123	63,175	磨石	?	8.80	6.87	3.92	381.2	
192	"	"	"	149	123	63,165	剥片	サヌカイト	1.33	1.40	0.34	0.60	
193	"	H45	"	146	301	63,455	"	チャート	0.97	0.79	0.15	0.13	
194	"	"	"	165	280	63,470	"	"	5.74	8.86	2.72	157.0	
195	"	"	"	158	237	63,480	剥片	"	4.05	5.04	1.17	17.39	
196	"	I47	IV	155	96	63,220	"	"	2.14	2.00	1.07	2.63	
197	"	H45	III	343	370	63,460	"	"	1.55	4.42	1.41	8.40	
198	"	"	"	62	247	63,465	"	"	1.22	1.12	0.23	0.36	
199	"	I47	"	392	104	63,455	石鏃	サヌカイト	1.82	1.06	0.29	0.41	
200	"	J46	IV	331	304	63,595	土器片						①

第5-5表 B地区出土遺物一覧表 5

整理No.	地区	グリッド	層位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器種	石質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図No.
201	B-III	J47	III	315	30	63,550	RF	サヌカイト	1.45	2.70	0.32	1.14	
202	"	J46	IV	88	75	63,640	剥片	チャート	1.92	1.36	0.43	0.81	
203	"	J47	III	172	73	63,585	"	"	(2.16)	(2.00)	(0.88)	(2.73)	
204	"	K46	"	205	113	63,620	"	"	3.03	3.59	0.72	4.71	
205	"	"	IV上	133	336	63,665	楔形石器	"	1.84	2.16	0.53	2.33	
206	"	"	"	90	288	63,695	剥片	サヌカイト	1.27	1.77	0.29	0.55	
207	"	K47	III	116	19	63,655	"	砂岩	3.96	2.54	0.45	5.06	
208	"	"	"	75	127	63,620	"	サヌカイト	3.29	5.68	1.53	21.20	
209	"	K45	IV上	177	352	63,810	土器片						⑩
210	"	"	"	266	290	63,830	剥片	チャート	1.06	2.26	0.43	0.94	
211	"	"	"	235	245	63,790	"	サヌカイト	0.69	1.43	0.34	0.33	
212	"	K47	"	83	114	63,580	楔形石器	"	2.14	1.43	0.41	1.39	
213	"	I46	III	215	369	63,290	剥片	チャート	3.98	5.00	1.06	19.32	
214	"	I47	IV	102	18	63,210	"	"	4.33	5.10	3.37	65.51	
215	"	J46	III	5	171	63,545	土器片						㊸
216	"	H47	"	162	53	63,130	石鏃	チャート	2.67	1.51	0.48	1.67	72
217	"	K46	"	168	167	63,655	剥片	"	1.47	2.71	1.46	1.74	
218	"	"	"	95	200	63,660	"	サヌカイト	(1.93)	(1.28)	0.18	(0.34)	
219	"	"	"	134	208	63,650	"	チャート	7.03	7.94	2.30	139.7	
220	"	"	"	108	230	63,655	楔形石器	サヌカイト	1.73	1.81	0.51	1.47	
221	"	I45	IV	182	337	63,425	土器片						㊹
222	"	I46	"	102	195	63,330	剥片	チャート	1.78	2.05	0.36	1.13	
223	"	"	"	115	303	63,060	"	"	2.22	2.17	0.52	1.33	
224	"	"	"	98	315	63,115	"	"	(1.39)	(1.57)	0.23	(0.51)	
225	"	"	"	128	321	63,015	"	"	1.42	0.80	0.16	0.25	
226	"	"	"	120	354	63,065	"	"	1.47	2.92	0.33	1.06	
227	"	"	"	100	366	63,055	土器片						
228	"	"	"	121	396	63,130	"						
229	"	I47	"	99	32	62,675	剥片	サヌカイト	1.88	4.24	0.53	3.18	
230	"	"	"	118	88	62,675	"	"	1.07	2.20	0.37	0.89	
231	"	"	"	80	152	62,640	土器片						
232	"	K46	III	140	285	63,650	剥片	チャート	2.94	3.92	0.49	5.93	
233	"	K47	"	86	21	63,555	"	"	(3.26)	3.32	0.61	(6.24)	
234	"	"	"	92	33	63,585	楔形石器	サヌカイト	2.55	2.85	0.99	7.10	
235	"	"	"	160	65	63,560	剥片	チャート	1.81	1.56	0.25	0.73	
236	"	"	"	123	77	63,555	"	"	2.15	4.99	1.61	12.67	
237	"	"	"	125	102	63,540	"	サヌカイト	2.29	2.20	0.66	3.18	
238	"	I46	IV	170	198	63,135	"	"	2.66	3.44	0.61	3.99	
239	"	"	"	158	270	63,090	土器片						④
240	"	"	"	234	359	62,990	RF	チャート	2.49	2.19	0.83	3.77	21

第5-6表 B地区出土遺物一覧表 6

整理No.	地区	グリッド	層位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器種	石質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図No.
241	B-III	K45	III	186	360	63,635	剥片	サヌカイト	0.84	1.69	0.20	0.19	
242	"	K46	"	159	94	63,635	"	?	1.02	0.95	0.14	0.11	
243	"	"	"	139	169	63,620	UF	チャート	2.40	1.96	0.42	1.04	
244	"	"	"	194	315	63,575	剥片	サヌカイト	1.69	1.42	0.24	0.54	
245	"	"	"	164	348	63,570	"	"	1.60	2.21	0.39	0.80	
246	"	"	"	141	385	63,565	楔形石器	"	2.84	1.63	0.82	3.53	79
247	"	"	"	209	363	63,610	剥片	チャート	3.32	3.75	1.30	9.42	
248	"	K47	IV上	75	275	63,415	UF	サヌカイト	4.80	6.04	1.21	27.83	
249	"	J47	III	188	109	63,420	剥片	チャート	1.26	1.49	0.23	0.32	
250	"	"	"	235	224	63,225	"	"	3.60	2.33	0.97	7.46	
251	"	"	IV	308	223	63,260	"	"	3.31	5.76	1.08	18.70	
252	"	"	"	230	177	63,285	"	"	2.67	4.21	0.73	6.92	
253	"	I46	III	288	136	63,395	"	サヌカイト	1.84	3.39	0.73	3.25	
254	"	"	"	313	235	63,370	"	チャート	2.90	1.31	0.62	1.87	
255	"	"	"	299	202	63,340	"	サヌカイト	1.40	1.84	0.15	0.45	
256	"	I47	"	302	245	63,065	UF	頁岩	3.65	2.94	1.29	9.82	
257	"	J48	SK10底	380	183	62,980	石鏃	サヌカイト	(1.17)	(0.95)	0.26	(0.22)	41
258	"	"	"	368	184	62,980	楔形石器	"	(2.90)	1.40	0.40	(1.87)	
259	"	"	"	317	241	63,125	石鏃	"	1.58	1.13	0.37	0.46	62
260	"	L45	III	161	256	63,555	剥片	チャート	2.57	2.31	0.98	5.02	
261	"	H47	"	378	105	62,535	"	"	6.63	4.45	2.39	66.86	
262	B-IV	"	II	20	302	63,125	RF	サヌカイト	2.79	1.88	0.48	1.72	
263	"	I48	"	25	103	63,175	剥片	チャート	3.32	2.95	2.00	16.60	
264	"	-	"	-	-	-	"	"	4.04	4.60	1.91	19.69	
265	"	H48	"	313	72	63,145	"	"	(1.84)	(1.84)	0.70	(1.72)	
266	"	"	"	175	154	63,045	"	"	3.11	2.74	0.83	6.47	
267	"	I48	"	10	180	63,100	"	"	2.26	3.91	0.80	8.51	
268	"	J48	"	45	7	63,520	"	"	(3.13)	(2.24)	0.76	(4.09)	
269	"	H48	"	251	197	63,050	土器片						
270	"	J48	"	134	28	63,545	剥片	チャート	1.81	1.83	0.37	0.93	
271	"	"	"	282	112	63,415	"	"	3.43	2.59	0.61	7.54	
272	"	"	"	270	116	63,440	"	"	3.84	5.45	1.52	25.79	
273	"	I48	"	135	287	63,090	楔形石器	"	2.37	1.47	0.62	2.30	
274	"	"	"	190	268	63,145	土器片						
275	"	"	"	304	155	63,270	剥片	チャート	1.63	2.22	0.29	0.74	
276	"	I49	"	155	39	62,990	"	"	2.35	2.61	1.42	9.46	
277	"	H49	"	398	56	62,920	"	"	(1.00)	(1.75)	(0.33)	(0.69)	
278	"	"	"	333	152	62,845	"	頁岩	3.90	4.33	0.92	14.31	
279	"	"	"	359	159	62,835	"	チャート	2.06	2.13	1.89	5.13	
280	"	H48	"	128	336	62,860	磨石	砂岩	(7.36)	(5.14)	(2.96)	(124.6)	81

第5-7表 B地区出土遺物一覧表 7

整理No.	地区	グリッド	層位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器種	石質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図No.
281	B-IV	H49	II	30	15	62,775		チャート	1.84	2.28	1.21	5.62	
282	"	H48	"	270	358	62,920	剝片	サヌカイト	1.34	0.89	0.15	0.13	
283	"	H47	"	235	305	63,235	"	チャート	2.25	2.45	0.65	2.24	
284	"	I49	"	45	155	62,880	"	"	2.30	1.68	0.39	0.95	
285	"	"	"	140	130	62,925	"	"	4.58	(2.45)	1.01	(6.32)	
286	"	"	"	245	103	62,940	"	"	1.57	1.71	0.27	0.75	
287	"	"	"	260	162	62,940	"	"	2.43	3.04	0.98	6.50	
288	"	"	"	337	198	62,960	"	"	2.30	3.75	1.07	10.98	
289	"	J49	"	212	270	62,960	"	"	4.45	6.25	1.97	34.78	
290	"	"	"	323	69	63,140	"	サヌカイト	(2.52)	1.96	0.83	(2.87)	
291	"	I48	"	297	289	63,165	土器片						
292	"	J48	"	90	3	63,540	剝片	チャート	2.09	2.10	0.40	1.40	
293	"	I47	"	400	367	63,415	UF	"	3.82	2.73	0.98	4.85	
294	"	"	"	198	365	63,275	石匙	サヌカイト	(4.81)	2.56	0.84	(12.27)	74
295	"	I48	III	170	135	63,175	剝片	チャート	3.20	2.17	0.52	3.92	
296	"	"	"	299	224	63,205	"	"	1.08	1.16	0.17	0.20	
297	"	J48	"	92	203	63,305	"	"	2.36	3.56	0.85	6.46	
298	"	"	IV	262	236	63,320	"	"	4.36	4.00	1.49	20.86	
299	"	"	III	323	213	63,345	"	"	(1.15)	(1.44)	(0.20)	(0.24)	
300	"	J49	"	159	31	63,125	"	"	1.63	1.48	0.94	2.21	
301	"	"	"	217	103	63,090	"	"	3.11	3.28	1.34	8.90	
302	"	J48	"	82	323	63,180	"	"	1.39	1.72	0.39	0.71	
303	"	I49	"	154	24	62,955	"	"	2.75	3.04	0.73	5.95	
304	"	I48	"	87	250	63,055	"	"	1.43	2.21	0.50	1.33	
305	"	"	"	20	134	63,100	楔形石器	頁岩	2.96	3.96	2.24	16.73	
306	"	H48	"	379	77	63,135	土器片						55
307	"	"	"	390	360	62,890	剝片	チャート	6.76	4.56	1.11	44.57	
308	"	"	"	336	298	62,940	"	"	1.23	1.25	0.63	0.80	
309	"	"	"	277	151	63,025	"	"	1.26	1.47	0.33	0.46	
310	"	"	"	50	0	63,010	"	"	2.24	2.73	1.45	8.40	
311	"	I49	"	142	56	62,900	磨石	?	5.68	5.12	3.75	161.5	
312	"	"	"	103	172	62,820	土器片	チャート	2.51	1.26	0.40	1.36	
313	"	"	"	36	126	62,785		"	4.09	6.49	2.73	51.52	
314	"	"	"	0	66	62,820	UF	"	2.78	2.94	0.95	2.17	
315	"	H49	"	350	158	62,725	剝片	サヌカイト	1.68	1.73	0.37	0.84	
316	"	H48	"	182	130	62,955	"	石英	1.63	1.21	0.37	0.94	
317	"	H49	"	337	134	62,705	"	チャート	(1.97)	(3.37)	(0.52)	(2.29)	
318	"	J47	"	200	304	63,675	UF	?	(5.12)	2.46	0.52	(1.59)	
319	"	"	IV	375	328	63,470	異形部分磨製 石器	チャート	6.05	2.13	0.63	7.95	73
320	"	"	"	347	345	63,485	剝片	サヌカイト	2.92	2.08	0.55	2.47	

第5-8表 B地区出土遺物一覧表 8

整理No.	地区	グリッド	層位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器種	石質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図No.
321	B-IV	J48	IV	350	33	63,375	剝片	チャート	2.51	3.08	1.03	8.23	
322	"	"	II	320	185	63,270	"	"	1.94	3.02	0.73	4.02	
323	"	"	"	397	173	63,310	"	"	(1.39)	(1.30)	(0.33)	(0.62)	
324	"	J47	IV	144	356	63,410	"	"	3.04	2.09	0.40	2.42	
325	"	J48	"	98	22	63,326	"	"	7.40	3.16	1.79	37.52	
326	"	J47	"	54	380	63,335	楔形石器	サヌカイト	1.90	2.14	0.48	1.66	
327	"	J48	II	77	112	63,225	剝片	チャート	1.65	2.64	0.78	3.65	
328	"	"	"	55	122	63,230	石核	"	2.91	5.53	3.03	56.54	
329	"	"	"	112	198	63,225	剝片	サヌカイト	2.38	4.58	0.49	2.91	
330	"	I48	III	385	7	63,280	"	チャート	1.93	2.06	0.37	1.15	
331	"	"	II	340	283	63,105	土器片						
332	"	"	"	317	261	63,095	"						
333	"	"	"	355	365	63,060							
334	"	J48	III	155	237	63,175	剝片	チャート	3.54	10.04	2.77	102.2	
335	"	"	II	294	314	63,190	"	"	1.56	2.25	1.29	3.90	
336	"	J49	"	345	25	63,020	"	"	1.60	1.34	0.36	0.66	
337	"	J48	"	143	383	63,020	尖頭器	チャート	(1.91)	(2.01)	(0.80)	(1.85)	2
338	"	"	"	53	348	63,045	剝片	"	(1.89)	(2.45)	(0.48)	(1.85)	
339	"	I48	"	335	368	63,030	"	サヌカイト	1.76	1.10	0.38	0.50	
340	"	"	"	213	155	63,085	"	チャート	1.41	2.03	0.49	1.45	
341	"	"	"	131	160	63,020	土器片						
342	"	"	"	113	147	63,090	剝片	頁岩	1.88	1.32	0.40	0.70	
343	"	J49	"	298	185	62,890	"	サヌカイト	2.21	2.58	0.63	2.39	
344	"	"	"	210	188	62,835	"	?	3.01	2.51	0.59	4.41	
345	"	K48	"	110	160	63,425	RF	サヌカイト	1.72	1.49	0.27	0.92	
346	"	K49	"	115	28	63,180	剝片	"	1.33	1.40	0.32	0.54	
347	"	"	"	197	147	63,070	"	チャート	3.73	3.92	1.32	20.10	
348	"	"	"	204	152	63,060	土器片						
349	"	K47	III	117	399	63,485	細石刃?	サヌカイト	(1.37)	(0.53)	(0.15)	(1.14)	26
350	"	K48	"	168	240	63,355	RF?	チャート	(2.38)	(1.56)	(0.44)	(1.21)	
351	"	"	"	100	295	63,160	RF	"	2.73	1.70	0.85	3.91	25
352	"	J49	"	135	209	62,840	剝片	サヌカイト	(2.10)	2.25	0.58	(3.00)	
353	"	"	"	35	124	62,880	UF	チャート	2.86	3.05	0.86	5.54	
354	"	I48	"	232	240	63,025	剝片	"	4.61	4.81	1.53	40.79	
355	"	I49	"	226	225	62,765	"	"	1.92	2.47	0.39	1.50	
356	"	"	"	122	67	62,790	土器片						
357	"	J49	"	62	235	62,820	剝片	チャート	2.08	2.63	0.47	2.30	
358	"	I48	"	162	108	63,045	土器片						
359	"	"	"	10	43	63,035	剝片	チャート	4.84	4.36	1.46	34.11	
360	"	I47	"	12	340	63,070	石核	"	4.39	4.93	4.47	112.1	

第5-9表 B地区出土遺物一覧表 9

整理No.	地区	グリッド	層位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器種	石質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図No.
361	B-IV	I 48	III	393	322	63,115	R F	チャート				2.75	
362	"	I 49	"	173	239	62,735	剥片	"	2.41	1.30	0.86	2.15	
363	"	H48	"	281	101	62,960	"	"	6.12	9.02	3.80	207.9	
364	"	"	"	260	63	62,945	"	"	(2.59)	1.75	1.01	(3.16)	
365	"	H47	"	30	318	62,975	"	"	1.16	0.81	0.80	0.04	
366	"	H48	"	62	208	62,765	"	"	(3.92)	(3.51)	(1.29)	(10.3)	
367	"	H49	"	150	244	62,550	"	"	6.20	10.26	3.06	192.5	
368	"	K48	"	153	130	63,315	楔形石器	サヌカイト	1.63	1.81	0.83	2.48	
369	"	K49	"	116	135	62,910	剥片	チャート	2.15	1.79	0.54	2.02	
370	"	K48	"	163	125	63,310	"	サヌカイト	1.22	1.64	0.18	0.33	
371	"	J 48	"	256	67	63,320	削器	"	(6.45)	(7.42)	(1.30)	(12.2)	18
372	"	"	"	350	225	63,170	尖頭器	チャート	(3.45)	(4.24)	(1.49)	(14.6)	6
373	"	"	"	48	0	63,270	剥片	"	(2.30)	(1.26)	(0.50)	(0.90)	
374	"	"	"	270	268	63,150	"	"	(3.77)	(2.56)	(0.72)	(7.55)	
375	"	"	"	205	316	63,075	"	?	(4.77)	4.70	0.70	(8.96)	
376	"	"	"	175	325	63,030	"	サヌカイト	0.99	1.64	0.46	0.38	
377	"	"	"	285	374	63,025	"	頁岩	(2.34)	(4.07)	1.20	(8.62)	
378	"	"	"	75	372	62,960	"	サヌカイト	1.43	1.16	0.16	0.24	
379	"	"	"	285	374	63,015	"	"	1.48	(1.18)	0.14	(0.21)	
380	"	"	"	22	229	63,070	"	チャート	6.30	1.93	1.44	12.57	
381	"	I 48	"	182	132	62,985	土器片						
382	"	"	"	227	200	62,970	剥片	サヌカイト	4.88	3.52	0.71	8.15	
383	"	"	"	76	156	62,950	土器片						㊸
384	"	"	"	57	106	62,990	"						㊹
385	"	H48	"	392	141	62,965	R F	サヌカイト	1.51	1.94	0.35	0.93	
386	"	I 47	"	18	360	63,060	剥片	チャート	0.85	1.22	0.28	0.24	
387	"	I 48	"	182	300	62,910	土器片						
388	"	"	"	122	348	62,835	剥片	チャート	1.97	2.53	0.57	2.60	
389	"	"	"	37	239	62,905	R F	サヌカイト	5.32	4.63	1.95	37.65	
390	"	"	"	29	227	62,895	剥片	チャート	2.77	4.55	1.91	15.51	
391	"	H48	"	364	240	62,860	土器片						
392	"	"	"	260	145	62,875	剥片	チャート	1.57	1.58	0.48	1.05	
393	"	J 49	"	328	75	62,895	"	頁岩	1.26	2.48	1.12	3.85	
394	"	"	"	306	69	62,905	"	チャート	(6.13)	3.88	2.37	(46.45)	
395	"	"	"	84	221	62,765	"	サヌカイト	1.00	1.22	0.15	0.19	
396	"	I 49	"	272	172	62,730	"	チャート	2.34	2.42	0.86	4.84	
397	"	H49	"	328	45	62,660	"	サヌカイト	1.09	1.62	0.18	0.20	
398	"	I 49	"	97	34	62,790	"	"	2.02	1.55	0.32	0.72	
399	"	I 48	"	63	324	62,850	石鏃	"	1.83	(1.62)	0.27	(0.62)	34
400	"	"	"	238	346	62,900	剥片	チャート	1.32	1.64	0.31	0.68	

第5-10表 B地区出土遺物一覧表 10

整理No.	地区	グリッド	層位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器種	石質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図 No.
401	B-IV	H48	III	188	22	62,935	剥片	サヌカイト	1.10	1.80	0.26	0.53	
402	"	"	"	197	45	62,940	"	チャート	1.85	1.40	(0.46)	(0.83)	
403	"	H49	"	228	68	62,590	"	チャート	0.93	1.07	0.18	0.13	
404	"	J49	"	147	276	62,705	"	"	3.44	2.57	0.68	5.34	
405	"	"	"	94	272	62,700	"	サヌカイト	1.42	1.02	0.17	0.17	
406	"	K47	IV	90	392	63,335	"	チャート	2.92	2.53	0.84	5.47	
407	"	K48	"	130	153	63,240	"	サヌカイト	1.31	1.58	0.26	0.46	
408	"	"	"	165	204	63,240	"	チャート	4.02	4.41	1.27	17.05	
409	"	"	"	196	285	63,150	楔形石器?	サヌカイト	2.40	1.80	0.46	1.68	
410	"	K49	III	126	68	62,920	剥片	チャート	(0.69)	(1.15)	(0.15)	(0.09)	
411	"	I47	"	52	368	63,025	"	"	1.18	1.64	0.27	0.59	
412	"	"	"	53	387	63,035	UF	サヌカイト	3.27	2.25	0.53	1.88	
413	"	I48	"	53	40	63,005	剥片	"	1.79	1.94	0.31	0.60	
414	"	"	"	6	70	62,985	"	安山岩?	2.77	5.26	1.01	12.28	
415	"	"	IV	242	136	63,005	"	チャート	4.27	3.93	1.91	28.82	
416	"	"	"	92	248	62,835	"	"	1.46	(1.53)	0.22	(0.43)	
417	"	"	III	180	28	62,895	"	"	3.67	1.85	0.66	4.19	
418	"	"	"	200	80	62,875	"	"	3.62	3.23	1.48	20.49	
419	"	"	"	170	40	62,900	"	サヌカイト	1.23	1.77	0.27	0.49	
420	"	"	IV	60	237	62,475	UF	チャート	2.42	2.59	0.54	3.00	
421	"	"	"	109	211	62,460	剥片	"	1.22	1.74	0.31	0.50	
422	"	"	"	86	267	62,395	"	"	(1.24)	(2.29)	(0.25)	(0.42)	
423	"	"	"	60	310	62,450	"	"	2.12	2.00	0.98	3.73	
424	"	"	"	158	312	62,460	"	"	2.84	3.55	1.06	9.84	
425	"	J47	"	331	312	63,290	土器片						㊟
426	"	"	"	310	366	63,305	剥片	?	(4.05)	(2.84)	0.42	(4.14)	
427	"	"	"	348	386	63,320	"	チャート	2.20	4.28	1.37	17.04	
428	"	J48	"	376	25	63,280	"	"	1.81	3.29	0.93	5.03	
429	"	"	"	362	40	63,305	"	"	3.31	3.43	1.02	9.41	
430	"	K48	III	13	157	63,250	RF	"	3.06	2.34	1.06	7.62	
431	"	J48	IV	233	118	63,180	剥片	"	2.75	5.56	2.15	23.12	
432	"	"	"	398	113	63,200	"	サヌカイト	1.83	1.22	0.29	0.48	
433	"	K48	III	16	33	63,190	"	チャート	1.79	(1.87)	0.30	(0.77)	
434	"	J48	"	212	150	63,155	"	"	2.58	4.17	0.95	11.06	
435	"	"	"	227	173	63,180	楔形石器	頁岩	2.38	1.88	0.71	3.16	75
436	"	K48	IV	106	200	63,100	石核	"	5.75	5.56	3.89	78.95	
437	"	"	III	90	228	63,090	剥片	"	2.16	3.59	0.76	3.99	
438	"	"	IV	35	147	63,165	"	チャート	(2.54)	(2.96)	(1.40)	(8.81)	
439	"	I47	"	354	276	63,265	UF	頁岩	5.13	4.13	1.07	24.27	
440	"	"	"	301	339	63,210	剥片	チャート	2.27	3.02	0.70	4.31	

第5-11表 B地区出土遺物一覧表 11

整理No.	地 区	グリッド	層 位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器 種	石 質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図 No.
441	B-IV	J 48	IV	119	3	63,230	剥片	チャート	(1.64)	1.98	0.43	(1.37)	
442	"	J 47	III	49	385	63,160	尖頭器	"	(5.62)	(2.97)	(1.29)	(20.37)	8
443	"	K47	"	74	236	63,305	UF	"	5.63	6.15	1.44	41.46	
444	"	J 48	"	303	230	62,940	剥片	サヌカイト	4.50	4.49	0.73	14.38	
445	"	K48	"	57	328	63,360	"	チャート	2.83	2.28	1.53	9.10	
446	"	I 49	"	128	290	62,530	R F	サヌカイト	2.92	5.35	0.62	6.08	
447	"	J 48	"	220	220	62,930	剥片	チャート	3.72	3.05	1.11	9.79	
448	"	I 48	"	388	40	63,060	"	"	4.29	5.09	2.03	29.39	
449	"	J 48	"	275	33	63,085	R F	頁岩	3.76	3.22	1.25	13.59	
450	"	J 47	"	185	382	63,140	剥片	チャート	2.35	1.37	0.63	1.29	
451	"	I 48	"	282	0	63,015	"	"	3.81	5.00	1.44	31.22	
452	"	K48	"	84	170	62,970	"	"	1.80	1.81	0.48	1.05	
453	"	J 49	"	390	298	62,510	"	サヌカイト	2.48	2.26	0.48	2.09	
454	"	K49	"	45	267	62,560	"	?	3.63	1.83	0.54	2.63	
455	"	J 49	"	384	30	62,705	"	チャート	2.46	1.39	0.55	2.35	
456	"	H47	"	190	322	62,820	"	"	2.58	4.04	1.05	9.58	
457	"	"	V上	65	390	62,745	"	サヌカイト	1.65	2.82	0.66	3.20	
458	"	H48	"	126	234	62,620	"	チャート	2.86	1.65	0.50	1.96	
459	"	"	IV	382	261	62,455	"	"	1.93	3.48	1.90	9.88	
460	B-V	J 50	II	164	49	62,815	"	サヌカイト	1.25	0.86	0.15	0.21	
461	"	"	"	135	110	62,810	土器片						
462	"	"	"	130	113	62,810	"						
463	"	"	"	171	273	62,730	剥片	チャート	1.92	1.39	0.31	0.59	
464	"	"	"	195	340	62,680	石鏃未製品	"	2.69	2.30	0.74	4.09	
465	"	"	"	129	362	62,650	剥片	"	0.55	1.19	0.24	0.12	
466	"	J 51	"	131	75	62,585	土器片						
467	"	"	"	223	102	62,580	剥片	チャート	1.47	2.03	0.93	3.07	
468	"	"	"	212	207	62,540	"	"	1.64	1.77	0.58	1.35	
469	"	"	"	197	225	62,520	"	"	0.92	0.56	0.11	0.06	
470	"	"	"	156	192	62,505	"	サヌカイト	1.07	1.19	0.16	0.22	
471	"	"	"	116	360	62,405	"	チャート	2.50	1.85	0.65	3.68	
472	"	I 50	"	269	34	62,740	"	"	2.96	1.78	0.50	2.18	
473	"	"	"	166	40	62,695	"	サヌカイト	1.45	1.19	0.32	0.43	
474	"	"	"	100	60	62,670	"	チャート	2.77	2.30	0.75	6.11	
475	"	"	"	55	193	62,580	"	サヌカイト	0.90	1.03	0.13	0.09	
476	"	"	"	196	246	62,630	"	"	1.54	1.22	0.49	0.62	
477	"	H50	"	314	120	62,555	"	チャート	(2.41)	1.99	0.38	(2.06)	
478	"	"	"	300	210	62,500	土器片						
479	"	"	"	265	203	62,510	剥片	チャート	1.88	2.32	0.44	1.25	
480	"	"	"	248	102	62,555	UF	"	3.51	5.11	2.31	23.97	

第5-12表 B地区出土遺物一覧表 12

整理No.	地区	グリッド	層位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器種	石質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図 No.
481	B-V	H50	II	225	220	62,490	剥片	チャート	0.62	1.32	0.54	0.45	
482	"	"	"	43	288	62,345	"	石英	2.61	1.53	0.70	2.57	
483	"	"	"	120	337	62,365	"	サヌカイト	2.13	1.32	0.27	0.68	
484	"	"	"	58	348	62,320	"	チャート	1.00	0.92	0.15	0.15	
485	"	"	"	175	297	62,400	"	サヌカイト	0.64	0.64	0.05	0.04	
486	"	"	"	210	328	62,415	"	チャート	1.24	1.84	0.30	0.64	
487	"	"	"	263	348	62,415	"	"	0.98	1.14	0.37	0.40	
488	"	"	"	157	383	62,330	土器片						
489	"	H51	"	50	69	62,240	剥片	チャート	1.20	0.77	0.10	0.13	
490	"	"	"	107	72	62,240	"	"	2.51	2.80	1.25	4.53	
491	"	"	"	161	109	62,250	"	サヌカイト	1.64	1.80	0.16	0.49	
492	"	"	"	165	138	62,240	"	チャート	1.48	1.70	0.23	0.45	
493	"	"	"	68	184	62,215	"	サヌカイト	1.07	1.35	0.14	0.13	
494	"	"	"	214	216	62,265	"	"	1.65	1.34	0.17	0.36	
495	"	"	"	276	43	62,345	"	"	4.07	5.91	0.82	9.96	
496	"	"	"	187	300	62,245	"	チャート	1.61	2.53	0.81	2.78	
497	"	"	"	201	318	62,235	"	サヌカイト	1.32	1.27	0.14	0.24	
498	"	"	"	304	355	62,245	"	"	0.71	1.16	0.15	0.10	
499	"	"	"	300	290	62,260	"	チャート	0.85	1.11	0.19	0.17	
500	"	"	"	340	161	62,355	"	サヌカイト	0.58	0.91	0.07	0.03	
501	"	"	"	387	171	62,365	"	チャート	(1.16)	(2.00)	(0.48)	(1.21)	
502	"	H50	"	378	355	62,475	"	サヌカイト	1.09	1.39	0.19	0.23	
503	"	I 50	"	47	364	62,500	土器片						
504	"	"	"	63	335	62,510	剥片	サヌカイト	0.80	0.87	0.11	0.07	
505	"	I 51	"	87	152	62,405	"	"	2.28	1.09	0.44	1.07	
506	"	"	"	100	183	62,400	"	チャート	(1.00)	(1.43)	0.16	(0.22)	
507	"	"	"	77	245	62,340	"	サヌカイト	(1.07)	1.32	0.31	(0.34)	
508	"	"	"	170	256	62,325	"	"	1.07	1.02	0.14	0.13	
509	"	"	"	175	260	62,320	"	チャート	1.07	1.48	0.17	0.28	
510	"	H51	"	103	333	62,180	"	"	1.30	0.85	0.11	0.12	
511	"	I 51	"	273	212	62,395	"	サヌカイト	1.95	1.58	0.16	0.40	
512	"	"	"	320	257	62,395	?	砂岩	(8.58)	(5.86)	(1.92)	(140.2)	
513	"	J 51	"	2	256	62,435	剥片	サヌカイト	1.48	2.31	0.40	1.00	
514	"	"	"	120	257	62,475	"	"	1.54	1.84	0.20	0.68	
515	"	"	"	396	188	62,510	R F	"	(4.20)	(2.34)	(1.54)	(9.10)	24
516	"	J 50	III	381	44	62,660	剥片	"	2.23	3.53	0.43	2.39	
517	"	"	"	217	77	62,665	"	チャート	5.13	5.00	1.80	57.36	
518	"	"	"	252	149	62,640	"	頁岩	9.43	7.59	3.46	197.9	
519	"	"	"	230	262	62,645	"	サヌカイト	1.51	1.56	0.20	0.33	
520	"	"	"	150	130	62,630	"	チャート	2.82	3.63	1.77	19.49	

第5-13表 B地区出土遺物一覧表 13

整理No.	地区	グリッド	層位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器種	石質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図 No.
521	B-V	J50	III	168	43	62,770	?	チャート					
522	"	"	"	0	56	62,645	剥片	"	2.37	1.36	0.47	0.82	
523	"	"	"	58	196	62,580	削器	頁岩	2.87	3.65	0.78	8.83	
524	"	I50	"	252	86	62,585	剥片	サヌカイト	1.33	1.01	0.11	0.14	
525	"	"	"	188	3	62,625	"	"	(1.42)	(1.48)	0.23	(0.32)	
526	"	"	"	166	3	62,610	"	チャート	2.62	2.21	0.53	4.16	
527	"	"	"	324	154	62,585	"	サヌカイト	1.07	1.48	0.20	0.32	
528	"	"	"	283	239	62,605	"	チャート	2.18	1.95	0.37	1.40	
529	"	"	"	171	115	62,590	"	サヌカイト	1.70	1.15	0.13	0.27	
530	"	"	"	174	130	62,595	"	"	0.98	0.70	0.10	4.11	
531	"	"	"	298	293	62,545	石鏃?	"	2.74	(2.32)	0.45	(2.09)	
532	"	"	"	331	255	62,520	剥片	"	1.17	1.14	0.15	0.16	
533	"	"	"	159	262	62,510	石核	チャート	6.75	9.78	5.90	465.2	
534	"	"	"	133	293	62,565	?	"					
535	"	J50	"	128	315	62,550	剥片	"	2.39	1.27	0.70	2.30	
536	"	"	"	30	340	62,520	撮器	サヌカイト	6.21	(4.20)	1.10	(24.66)	12
537	"	"	"	61	369	62,525	剥片	チャート	(3.01)	(4.43)	(0.95)	(14.15)	
538	"	J51	"	173	66	62,535	"						
539	"	"	"	13	30	62,453	撮器	サヌカイト	6.20	4.80	1.31	36.67	11
540	"	J50	"	228	306	62,570	剥片	チャート	3.40	3.54	1.28	14.80	
541	"	J51	"	262	100	62,475	"	サヌカイト	2.49	2.83	0.72	3.94	
542	"	"	"	165	77	62,500	"	チャート	6.79	6.62	3.73	147.1	
543	"	"	"	78	78	62,440	"	サヌカイト	(1.13)	(2.00)	0.21	(0.41)	
544	"	"	"	18	124	62,420	石鏃	"	(1.77)	(1.36)	0.36	(0.55)	49
545	"	"	"	65	154	62,405	剥片	チャート	(1.15)	(1.12)	(0.52)	(1.16)	
546	"	"	"	304	192	62,415	"	サヌカイト	1.53	2.36	0.26	0.94	
547	"	"	"	277	229	62,390	"	チャート	3.51	3.13	0.76	8.38	
548	"	J51	"	68	197	62,380	"	サヌカイト	2.33	2.22	0.27	1.06	
549	"	I51	"	151	4	62,455	"	チャート	1.58	2.51	0.41	1.98	
550	"	I50	"	123	142	62,545	"	サヌカイト	1.37	1.42	0.13	0.17	
551	"	J50	"	112	387	62,510	"	チャート	1.83	1.66	0.46	1.05	
552	"	I51	"	144	61	62,380	UF	"	(1.60)	(2.29)	(0.72)	(2.17)	
553	"	I50	"	30	187	62,485	剥片	"	(2.34)	(2.28)	(0.61)	(1.15)	
554	"	"	"	4	191	62,495	"	"	(1.79)	2.20	0.21	(0.99)	
555	"	I51	"	120	159	62,375	土器片						
556	"	J51	"	128	302	62,320	RF	チャート	(3.53)	3.53	0.46	(4.84)	
557	"	"	"	366	352	62,440	楔形石器	サヌカイト	2.50	2.52	0.97	5.46	
558	"	I51	"	274	263	62,290	剥片	"	1.44	1.21	0.19	0.28	
559	"	H50	"	349	101	62,475	"	"	2.87	2.58	1.03	4.27	
560	"	"	"	260	148	62,420	土器片						

第5-14表 B地区出土遺物一覧表 14

整理No.	地区	グリッド	層位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器種	石質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図No.
561	B-V	H50	Ⅲ	196	160	62,480	RF	チャート	2.66	3.14		4.77	
562	"	"	"	314	286	62,375	剥片	"	2.14	1.80	0.62	1.79	
563	"	"	"	310	330	62,385	土器片						
564	"	H51	"	260	75	62,225	剥片	サヌカイト	3.12	2.83	0.48	4.90	
565	"	"	"	268	90	62,225	RF	チャート	3.15	1.92	1.04	6.29	
566	"	"	"	366	350	62,180	撮器	硬質頁岩	5.31	2.74	1.16	18.14	82
567	"	"	"	238	375	62,210	剥片	チャート	4.47	2.60	1.50	12.28	
568	"	"	"	207	255	62,155	"	"	3.35	2.72	1.42	12.74	
569	"	"	"	17	350	62,070	"	"	1.29	1.73	0.17	0.32	
570	"	"	"	66	262	62,110	"	サヌカイト	2.44	1.79	0.98	2.85	
571	"	"	"	25	309	62,080	"	"	1.23	1.14	0.11	0.16	
572	"	"	"	128	147	62,115	"	"	1.10	1.31	0.15	0.32	
573	"	"	"	125	123	62,135	"	チャート	2.07	0.98	0.56	2.72	
574	"	"	"	60	99	62,125	有基尖頭器	"	5.99	(2.22)	1.19	(13.47)	1
575	"	"	"	14	41	62,260	剥片	頁岩	3.11	3.26	1.12	6.48	
576	"	H50	"	104	367	62,225	RF?	サヌカイト	2.74	1.31	0.42	1.27	
577	"	H51	"	202	20	62,225	剥片	チャート	2.05	3.62	0.91	5.79	
578	"	H50	"	236	80	62,275	"	"	3.22	2.40	0.85	4.14	
579	"	J51	"	0	78	62,430	石鏃	頁岩	(1.65)	(1.35)	0.26	(0.21)	35
580	"	"	"	18	72	62,435	剥片	"	4.54	2.96	1.61	14.07	
581	"	"	"	328	148	62,430	"	サヌカイト	2.43	1.87	0.61	1.57	
582	"	I50	"	173	27	62,600	"	"	1.85	1.28	0.24	0.38	
583	"	H50	"	260	49	62,465	"	"	0.81	1.42	0.52	0.29	
584	"	J50	"	335	155	62,555	RF	チャート	2.52	1.45	0.73	2.08	22
585	"	"	"	292	80	62,545	剥片	サヌカイト	2.21	2.14	0.62	2.74	
586	"	"	"	253	130	62,560	RF	チャート	4.27	5.77	1.77	35.21	
587	"	"	"	205	165	62,545	剥片	サヌカイト	3.61	3.00	0.83	5.82	
588	"	"	"	150	97	62,510	"	チャート	4.83	3.98	1.60	26.98	
589	"	"	"	129	44	62,540	"	サヌカイト	2.32	1.29	0.27	0.71	
590	"	"	"	91	143	62,525	"	"	2.77	3.12	0.40	2.64	
591	"	"	"	93	105	62,520	"	"	1.37	1.20	0.15	0.21	
592	"	J51	"	137	75	62,340	"	チャート	1.68	3.18	1.48	8.38	
593	"	"	"	114	48	62,360	"	サヌカイト	2.41	2.50	0.56	1.61	
594	"	K50	"	138	270	62,590	"	チャート	1.24	1.73	0.53	1.12	
595	"	K51	"	100	173	62,385	"	"	1.87	2.80	0.60	3.11	
596	"	I50	"	202	70	62,530	"	砂岩?	3.75	2.34	0.47	4.11	
597	"	"	"	212	165	62,460	RF	チャート	(2.17)	(2.92)	(0.71)	(4.72)	23
598	"	"	"	104	175	62,400	UF	"	4.67	5.72	1.33	31.52	
599	"	"	Ⅳ	86	42	62,465	楔形石器	"	2.90	1.59	0.72	3.64	77
600	"	H50	Ⅲ	339	195	62,340	剥片	"	2.63	2.32	0.57	2.01	

第5-15表 B地区出土遺物一覧表 15

整理No.	地 区	グリッド	層 位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器 種	石 質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図 No.
601	B-V	H50	III	338	200	62,340	剥片	チャート	1.37	1.47	0.41	0.56	
602	"	"	"	254	83	62,440	RF	"	3.00	3.43	1.12	7.54	
603	"	"	"	214	127	62,320	剥片	サヌカイト	1.93	2.03	0.28	0.61	
604	"	"	"	208	124	62,320	RF	チャート	2.94	4.22	0.91	11.33	
605	"	I50	"	165	204	62,420	剥片	"	1.34	2.81	0.57	1.63	
606	"	J51	"	255	200	62,330	"	サヌカイト	1.39	1.20	0.32	0.48	
607	"	"	"	275	375	62,225	"	"	3.45	3.66	0.30	3.08	
608	"	I51	"	155	190	62,220	土器片						
609	"	"	IV	122	13	62,340	剥片	チャート	2.27	1.96	0.27	1.12	
610	"	H51	V上	300	48	62,200	"						
611	"	"	"	290	75	62,185	"	チャート	(2.17)	1.98	0.37	(1.48)	
612	"	"	"	215	177	62,075	"	"	2.25	3.23	1.12	6.03	
613	"	"	III	178	360	62,040	土器片						
614	"	J50	IV	206	112	62,420	RF	サヌカイト	2.31	2.75	0.65	3.75	
615	"	"	"	160	128	62,415	剥片	"	1.34	1.60	0.20	0.35	
616	"	"	"	338	188	62,260	"	チャート	1.68	3.36	0.59	4.01	
617	"	K50	III	26	318	62,300	"	サヌカイト	(1.64)	2.65	0.50	(1.79)	
618	"	J51	V上	86	20	62,345	"	"	1.73	2.98	0.78	2.30	
619	"	I50	III	398	327	62,360	"	"	0.96	1.03	0.17	0.32	
620	"	I51	V上	320	338	62,085	"	"	1.61	1.06	0.17	0.24	
621	"	"	"	366	18	62,315	石鏃	"	(2.28)	(1.81)	0.28	(0.90)	54
622	"	"	"	263	80	62,270	剥片	"	1.04	1.20	0.11	0.13	
623	"	J50	"	218	223	62,190	"	"	1.30	1.00	0.12	0.13	
624	"	"	"	323	300	62,150	"	"	1.12	0.91	0.15	0.14	
625	"	I50	"	234	186	62,395	"	チャート	(0.66)	(0.92)	(0.14)	(0.09)	
626	"	"	"	248	190	62,390	"	サヌカイト	1.29	1.27	0.20	0.28	
627	"	"	"	284	115	62,385	"	"	1.08	0.72	0.12	0.04	
628	"	"	"	331	64	62,450	"	"	0.95	1.28	0.15	0.18	
629	"	"	"	317	105	62,400	"	"	0.57	0.94	0.19	0.09	
630	"	"	III	384	285	62,400	"	"	1.61	0.90	0.11	0.14	
631	"	"	V上	288	327	62,270	"	"	0.96	0.91	0.12	0.07	
632	"	J50	III	24	184	62,440	"	チャート	2.54	2.56	0.49	2.12	
633	"	H50	V上	118	372	62,090	"	サヌカイト	2.76	2.39	0.17	0.86	
634	"	H51	"	43	78	61,995	"	チャート	2.26	1.68	0.34	1.12	
635	"	I50	IV	88	15	62,275	"	サヌカイト	5.32	3.33	1.57	19.92	
636	"	J51	"	300	77	62,300	"	"	1.59	2.42	0.45	1.93	
637	"	J50	III	209	170	62,490	"	"	2.38	1.27	0.15	0.36	
638	"	I50	"	338	0	62,480	"						
639	"	I51	"	336	400	62,360	"	チャート	2.79	2.22	0.55	3.27	
640	B-VI	H52	II	18	130	62,060	"	サヌカイト	3.62	1.29	0.34	1.57	

第5-16表 B地区出土遺物一覧表 16

整理No.	地区	グリッド	層位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器種	石質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図No.
641	B-VI	H52	II	40	155	62,040	石鏃	チャート	1.68	1.35	0.40	0.80	36
642	"	"	"	188	125	62,095	剥片	サヌカイト	1.23	1.49	1.15	0.13	
643	"	"	"	186	195	62,075	"	"	1.33	1.26	0.24	0.29	
644	"	"	"	197	200	62,080	"	"	1.12	0.87	0.11	0.09	
645	"	"	"	190	255	62,035	"	"	(0.90)	(0.90)	0.11	(0.11)	
646	"	"	"	198	302	61,995	"	チャート	1.34	1.37	0.23	0.32	
647	"	"	"	180	360	61,965	"	"	6.09	5.75	3.02	98.34	
648	"	"	"	275	335	61,970	"	"	3.23	4.09	0.71	7.78	
649	"	"	"	292	135	62,130	"	"	2.69	(4.25)	0.56	(5.18)	
650	"	"	"	250	274	62,035	"	サヌカイト	1.41	1.84	0.24	0.52	
651	"	"	"	280	248	62,080	尖頭器	"	(1.32)	(1.29)	(0.35)	(0.44)	3
652	"	"	"	333	205	62,090	剥片	チャート	(2.24)	3.05	0.88	(3.18)	
653	"	I 52	III	82	115	62,180	土器片						
654	"	H52	"	385	302	62,070	剥片	サヌカイト	2.24	1.16	0.24	0.57	
655	"	I 52	"	90	240	62,090	"	"	1.67	3.67	0.62	1.82	
656	"	"	"	95	325	62,090	"	チャート	1.85	1.73	0.84	1.73	
657	"	"	II	240	152	62,195	"	"	2.63	1.59	0.21	0.81	
658	"	J 52	III	7	115	62,215	"	"	1.82	3.39	0.90	4.93	
659	"	"	II	213	126	62,145	土器片						
660	"	"	"	330	310	62,010	剥片	チャート	1.37	1.87	0.67	1.44	
661	"	H53	"	215	58	61,905	石鏃	サヌカイト	(1.40)	(1.08)	0.26	(0.21)	42
662	"	"	"	75	155	61,880	剥片	チャート	1.61	2.40	0.56	1.49	
663	"	"	"	116	190	61,880	"	"	1.66	(2.55)	0.49	(2.49)	
664	"	"	"	198	220	61,825	有基尖頭器	"	5.99	(2.22)	1.19	(13.47)	1
665	"	"	"	74	275	61,785	剥片	"	3.32	3.54	1.29	11.75	
666	"	"	"	148	343	61,725	"	"	2.71	1.91	1.91	13.91	
667	"	"	"	84	383	61,680	撮器	"	(2.33)	(2.33)	(1.66)	(10.49)	10
668	"	I 53	"	186	200	61,880	石鏃	サヌカイト	1.41	1.23	0.35	0.51	31
669	"	"	III	100	255	61,905	砥石	?	(3.36)	(3.06)	(2.14)	(40.5)	
670	"	"	"	248	172	61,890	土器片						
671	"	J 53	II	115	188	61,835	剥片	チャート	1.94	1.76	0.47	1.16	
672	"	"	"	175	165	61,870	"	"	3.78	4.78	0.64	9.74	
673	"	"	"	148	225	61,815	"	"	1.81	1.27	0.38	0.72	
674	"	H52	III	345	112	62,130	"	"	(2.88)	(3.86)	0.76	(7.79)	
675	"	J 53	II	278	180	61,780	"	サヌカイト	1.49	2.25	0.39	0.92	
676	"	J 52	III	330	162	62,080	"	"	2.19	1.81	0.39	1.05	
677	"	"	"	93	297	62,020	"	チャート	1.97	1.17	0.19	0.44	
678	"	I 52	"	359	270	62,060	"	サヌカイト	1.61	2.53	0.42	1.52	
679	"	"	"	259	189	62,090	"	チャート	0.72	1.11	0.88	0.14	
680	"	"	"	140	348	61,955	"	サヌカイト	1.55	1.61	0.24	0.56	

第5-17表 B地区出土遺物一覧表 17

整理No.	地区	グリッド	層位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器種	石質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図No.
681	B-VI	I 52	III	68	351	61,930	剥片	チャート	(0.95)	(1.72)	0.20	(0.31)	
682	"	I 53	"	388	89	61,865	土器片						⑨
683	"	"	"	348	177	61,795	剥片	チャート	(1.98)	(2.38)	(0.68)	(2.95)	
684	"	"	"	353	235	61,770	"	サヌカイト	1.30	0.65	0.80	0.10	
685	"	H52	"	225	400	61,995	"	チャート	2.83	2.67	0.91	7.01	
686	"	"	"	194	254	62,025	"	サヌカイト	1.59	1.20	0.12	0.34	
687	"	"	"	305	117	61,990	"	"	0.80	1.11	0.17	0.11	
688	"	"	"	382	218	62,000	"	"	(1.32)	0.95	0.23	(0.36)	
689	"	"	"	399	256	61,980	"	チャート	3.06	2.81	0.71	6.53	
690	"	I 52	"	8	280	61,970	"	"	2.15	(1.94)	0.24	(0.97)	
691	"	I 53	"	159	207	61,785	"	"	(2.08)	(3.26)	0.36	(2.08)	
692	"	"	"	21	180	61,805	"	"	5.05	4.52	1.97	36.75	
693	"	"	"	362	321	61,730	"	サヌカイト	1.68	2.19	0.30	1.08	
694	"	"	"	160	365	61,700	"	チャート	2.71	(2.58)	0.42	(2.61)	
695	"	"	"	73	347	61,770	"	サヌカイト	1.18	1.89	0.15	0.29	
696	"	I 54	"	41	5	61,720	"	チャート	2.50	4.03	0.88	9.83	
697	"	H53	"	340	271	61,735	"	サヌカイト	1.60	(3.38)	0.20	(1.36)	
698	"	"	"	344	238	61,750	"	チャート	(1.97)	(2.54)	0.33	(1.66)	
699	"	"	"	297	312	61,720	"	"	(1.15)	(1.55)	0.15	(0.23)	
700	"	"	"	292	310	61,375	"	"	2.11	1.85	0.31	0.92	
701	"	"	"	290	386	61,715	土器片						
702	"	"	"	255	339	61,715	剥片	チャート	1.52	1.91	0.86	1.99	
703	"	"	"	346	312	61,685	"	"	(2.59)	2.73	0.39	(1.94)	
704	"	"	"	238	320	61,690	"	サヌカイト	2.16	3.32	1.07	6.48	
705	"	"	"	278	147	61,775	"	チャート	1.05	0.98	0.32	0.33	
706	"	H52	"	80	310	61,880	"	サヌカイト	4.34	5.52	1.19	29.72	
707	"	"	"	204	400	61,945	"	チャート	2.72	2.28	0.90	2.90	
708	"	"	"	140	365	61,835	"	"	2.03	1.65	0.43	1.18	
709	"	"	"	25	183	61,905	"	サヌカイト	1.32	1.19	0.10	0.16	
710	"	H53	"	34	331	61,605	"	チャート	1.57	2.55	0.75	2.24	
711	"	"	"	120	400	61,605	"	サヌカイト	1.65	2.79	(0.50)	(1.96)	
712	"	I 52	"	394	150	62,105	尖頭器	チャート	(1.82)	(2.10)	(0.54)	(1.95)	5
713	"	"	"	365	242	62,050	剥片	サヌカイト	1.55	1.52	0.15	0.36	
714	"	I 53	"	372	366	61,665	"	"	0.83	0.84	0.10	0.07	
715	"	J 53	V上	375	364	61,520	"	"	1.01	1.03	0.19	0.19	
716	"	J 54	"	195	20	61,500	"	チャート	1.15	1.75	0.65	1.16	
717	"	J 53	"	98	372	61,535	"	"	1.39	1.65	0.41	0.80	
718	"	I 53	IV	376	156	61,670	土器片						
719	"	"	"	318	137	61,700	剥片	チャート	2.07	2.54	0.47	2.07	
720	"	"	"	318	170	61,685	土器片						

第5-18表 B地区出土遺物一覧表 18

整理No.	地区	グリッド	層位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器種	石質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図No.
721	B-VI	I53	IV	285	237	61,650	剥片	チャート	1.55	1.73	0.70	1.03	
722	"	"	III	166	367	61,610	"	サヌカイト	1.43	1.11	0.34	0.52	
723	"	"	"	14	246	61,630	"	"	1.85	1.44	0.15	0.37	
724	"	H52	"	322	106	61,895	"	"	0.95	1.14	0.16	0.15	
725	"	"	"	252	203	61,810	"	"	0.74	1.34	0.16	0.16	
726	"	"	"	198	143	61,835	"	"	1.14	1.19	0.22	0.20	
727	"	"	"	99	395	61,780	"	チャート	2.35	1.25	0.63	1.64	
728	"	"	"	7	262	61,745	"	"	6.98	7.81	4.25	274.4	
729	"	"	"	284	105	61,890	"	サヌカイト	1.03	0.93	0.16	0.16	
730	"	H53	"	263	5	61,710	"	チャート	2.97	3.11	2.17	15.24	
731	"	H54	"	125	20	61,530	"	サヌカイト	1.03	1.55	0.38	0.49	
732	"	"	"	25	4	61,530	"	"	1.13	1.97	0.17	0.38	
733	"	I53	V上	340	21	61,785	"	"	2.15	1.99	0.26	1.09	
734	"	H52	III	272	148	61,850	石鏃	"	1.80	1.48	0.33	0.78	71
735	"	"	"	328	253	61,815	剥片	"	1.12	1.23	0.19	0.27	
736	"	"	"	214	280	61,770	"	チャート	1.20	2.31	0.79	1.89	
737	"	"	"	73	101	61,810	"	"					
738	"	H53	"	360	385	61,530	"	チャート	2.44	2.52	1.16	6.10	
739	"	I53	"	12	223	61,620	"	サヌカイト	1.25	0.98	0.08	0.08	
740	"	"	"	25	210	61,630	"	"	1.30	1.22	0.29	0.53	
741	"	"	"	376	141	61,690	"	チャート	2.29	3.28	1.05	5.34	
742	"	"	"	288	152	61,625	"	サヌカイト	1.82	2.15	0.22	0.84	
743	B-VII	G54	II	330	225	61,565	土器片						
744	"	H54	"	45	225	61,540	剥片	頁岩	2.42	2.53	0.92	4.07	
745	"	"	"	83	263	61,540	土器片						
746	"	"	"	15	330	61,445	剥片	チャート	10.95	7.77	6.52	810.0	
747	"	"	"	100	330	61,495	"	サヌカイト	1.75	1.47	0.27	0.33	
748	"	G54	"	328	327	61,470	土器片						
749	"	"	"	287	355	61,390	剥片	サヌカイト	3.21	1.72	0.93	4.54	
750	"	G55	"	302	20	61,375	石核	チャート	2.10	1.85	2.29	9.77	27
751	"	"	"	397	157	61,305	剥片	"	3.21	2.40	0.79	4.59	
752	"	H55	III	60	295	61,290	土器片						
753	"	"	"	237	211	61,335	剥片	チャート	(1.49)	(2.21)	0.15	(0.56)	
754	"	I56	II	0	16	61,300	"	"	3.22	2.90	3.25	41.49	
755	"	H54	III	154	270	61,560	"	サヌカイト	1.50	1.88	0.18	0.30	
756	"	"	II	160	395	61,445	"	チャート	3.45	3.82	1.11	17.33	
757	"	"	"	182	378	61,445	土器片						
758	"	"	III	346	254	61,580	剥片	サヌカイト	1.13	1.63	0.11	0.18	
759	"	H55	II	355	48	61,415	"	"	1.11	0.95	0.24	0.22	
760	"	I55	"	0	141	61,380	"	チャート	2.40	3.01	1.62	13.28	

第5-19表 B地区出土遺物一覧表 19

整理No.	地区	グリッド	層位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器種	石質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図No.
761	B-VII	I 55	II	112	314	61,365	剥片	サヌカイト	1.33	1.81	0.23	0.55	
762	"	"	III	124	80	61,455	"	"	1.27	1.32	0.10	0.14	
763	"	I 54	II	237	236	61,535	土器片						
764	"	J 54	"	16	258	61,535	剥片	サヌカイト	1.46	2.10	0.38	0.86	
765	"	G 55	"	213	24	61,395	"	チャート	2.72	5.02	1.52	16.49	
766	"	J 55	"	287	117	61,390	"	サヌカイト	0.83	1.35	0.20	0.14	
767	"	"	"	234	180	61,320	"	"	1.48	1.35	0.29	0.53	
768	"	I 56	III	178	110	61,255	"	チャート	1.22	1.47	0.56	0.80	
769	"	"	II	330	93	61,120	"	サヌカイト	1.28	2.46	0.30	0.75	
770	"	J 56	"	35	107	61,075	"	"	0.78	1.59	0.12	0.14	
771	"	G 56	III	302	122	61,095	石鏃	"	1.85	0.96	0.27	0.32	64
772	"	I 55	II	147	212	61,325	剥片	チャート	3.25	2.50	0.80	4.77	
773	"	J 55	III	170	79	61,355	土器片						
774	"	"	"	214	112	61,295	剥片	サヌカイト	1.24	0.91	0.15	0.13	
775	"	I 56	"	332	24	61,190	"	"	1.34	1.28	0.17	0.20	
776	"	J 55	"	126	20	61,345	"	"	1.81	1.26	0.17	0.43	
777	"	"	"	111	288	61,240	土器片						
778	"	"	"	156	304	61,200	剥片	サヌカイト	1.41	1.11	0.80	0.15	
779	"	"	"	365	206	61,185	"	"	1.12	0.86	0.17	0.15	
780	"	"	"	339	324	61,120	土器片						
781	"	"	"	106	391	61,160	剥片	サヌカイト	1.38	1.61	0.19	0.36	
782	"	I 55	"	290	364	61,205	"	"	1.09	1.75	0.17	0.32	
783	"	"	"	193	91	61,385	細石刃の可能性ある剥片	"	2.30	0.84	0.23	0.31	
784	"	H 54	"	313	333	61,410		チャート					
785	"	H 55	"	205	28	61,340		サヌカイト	1.71	1.31	0.25	0.31	
786	"	"	II	160	24	61,325	土器片						
787	"	H 54	III	90	352	61,445	剥片	サヌカイト	1.25	1.30	0.20	0.32	
788	"	"	"	63	207	61,420	"	"	1.43	1.73	0.25	0.61	
789	"	H 55	"	43	0	61,335	"	"	1.63	2.15	0.38	1.22	
790	"	"	"	39	11	61,340	"	"	1.76	1.92	0.71	2.14	
791	"	"	"	41	23	61,320	"	"	1.61	1.66	0.17	0.51	
792	"	"	"	49	56	61,295	石核	頁岩	2.73	4.06	3.30	35.30	
793	"	G 54	"	218	284	61,410	剥片	サヌカイト	0.59	1.44	0.16	0.12	
794	"	G 55	"	358	10	61,365	石鏃	"	1.37	1.62	0.20	0.21	39
795	"	"	"	320	95	61,315	剥片	サヌカイト	0.66	1.17	0.12	0.09	
796	"	H 55	"	128	164	61,255	"	"	1.51	1.53	0.13	0.33	
797	"	"	"	196	131	61,305	"	チャート	1.41	1.14	0.19	0.33	
798	"	"	"	288	133	61,290	土器片						
799	"	G 55	"	313	238	61,220	"						
800	"	"	"	209	312	61,125	剥片	?	2.54	1.92	0.43	1.86	

第5-20表 B地区出土遺物一覧表 20

整理No.	地区	グリッド	層位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器種	石質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図 No.
801	B-VII	G55	III	218	322	61,150	剥片	チャート	1.18	1.72	0.32	0.61	
802	"	G56	"	339	4	61,175	"	サヌカイト	1.72	0.90	0.13	0.20	
803	"	"	"	393	54	61,170	"	"	2.08	1.13	0.31	0.34	
804	"	H55	"	155	342	61,225	"	"	1.78	0.93	0.17	0.26	
805	"	J55	"	46	272	61,265	"	"	1.12	1.17	0.13	0.17	
806	"	H55	"	327	31	61,350	"	"	0.82	1.23	0.18	0.17	
807	"	H54	"	251	308	61,400	"	チャート	1.12	1.89	0.24	0.51	
808	"	"	"	200	395	61,405							
809	"	H55	"	379	323	61,240	"	チャート	5.15	7.84	3.19	110.6	
810	"	J55	V上	224	52	61,230	"	サヌカイト	1.30	0.91	0.51	0.67	
811	"	"	"	130	17	61,255	"	"	1.35	2.05	0.60	1.02	
812	"	"	"	132	27	61,250	"	"	1.75	3.01	0.65	2.26	
813	"	"	"	323	260	61,090	"	"	2.19	3.25	1.26	6.90	
814	"	"	"	167	254	61,115	"	"	2.03	3.14	1.02	3.57	
815	"	"	"	155	310	61,065	楔形石器	"	3.62	2.23	0.90	7.29	
816	"	"	"	111	389	61,050	剥片	チャート	1.94	1.47	0.23	0.61	
817	"	"	"	48	352	61,075	"	サヌカイト	1.16	1.93	0.34	0.68	
818	"	"	"	34	364	61,100	"	"	1.65	1.45	0.27	0.66	
819	"	H54	"	224	340	61,310	"	"	1.62	0.86	0.19	0.23	
820	"	G54	"	329	214	61,100	楔形石器	"	2.79	1.83	0.62	3.40	78
821	"	H55	III	263	30	61,235	土器片						
822	"	H56	V上	350	45	61,010	"						
823	"	I55	"	33	394	60,910	"						㊦
824	B-VIII	G56	II	220	342	60,950	削器	サヌカイト	(2.06)	2.67	0.53	(2.36)	16
825	"	H56	"	0	308	61,020	剥片	チャート	2.26	2.07	0.75	4.58	
826	"	G57	"	250	80	60,910	"	砂岩?	5.37	7.75	1.40	71.60	
827	"	"	"	245	165	60,880	"	チャート	1.70	2.79	1.38	5.28	
828	"	"	"	278	222	60,830	"	サヌカイト	1.93	1.89	0.55	1.65	
829	"	H57	"	65	66	60,940	"	"	0.90	0.84	0.23	0.19	
830	"	"	"	145	78	60,895	"	チャート	2.75	1.55	0.64	2.87	
831	"	"	"	197	6	61,015	撮器	サヌカイト	5.12	3.19	1.05	18.51	13
832	"	"	"	130	334	60,795	剥片	チャート	2.52	2.50	1.30	4.97	
833	"	"	"	135	375	60,770	"	"	1.60	1.81	0.33	0.74	
834	"	I57	"	5	378	60,755	土器片						
835	"	H57	"	326	142	60,890	石鏃	チャート	1.65	(1.49)	0.27	(0.50)	33
836	"	"	"	382	152	60,890	剥片	"	1.96	2.40	1.65	5.47	
837	"	I57	"	34	195	60,875	"	"	2.67	3.62	1.30	7.95	
838	"	"	"	291	80	60,900	"	"	5.88	5.41	1.22	30.35	
839	"	"	"	350	20	60,915	"	サヌカイト	1.03	1.99	0.21	0.37	
840	"	G57	"	370	237	60,855	土器片						

第5-21表 B地区出土遺物一覧表 21

整理No.	地区	グリッド	層位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器種	石質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図 No.
841	B-Ⅷ	G57	Ⅱ	317	300	60,795	剥片	サヌカイト	2.07	1.35	0.37	1.29	
842	"	"	"	362	298	60,825	土器片						
843	"	H57	"	182	297	60,810	剥片	チャート	2.22	4.04	0.75	7.30	
844	"	I 58	"	117	60	60,655	楔形石器	サヌカイト	2.44	3.00	0.92	6.91	
845	"	I 57	"	335	245	60,790	剥片	"	2.47	2.26	1.21	3.75	
846	"	H58	"	140	166	60,475	R F	"	1.57	2.28	0.44	1.31	
847	"	"	"	205	34	60,545	剥片	チャート	5.68	6.19	1.62	78.69	
848	"	G58	"	256	5	60,500	"	サヌカイト	0.78	0.68	0.11	0.05	
849	"	"	"	339	182	60,420	石鏃	"	(1.77)	(1.21)	0.32	(0.48)	50
850	"	"	Ⅲ	315	210	60,410	剥片	チャート	5.24	6.40	2.45	90.31	
851	"	H58	"	43	245	60,390	石鏃?	"	1.62	1.04	0.25	0.47	
852	"	"	"	50	176	60,490	楔形石器	サヌカイト	2.25	2.13	1.17	4.15	
853	"	"	"	210	315	60,300	剥片	"	2.15	1.85	0.27	0.62	
854	"	"	"	258	388	60,305	"	チャート	2.64	6.22	1.02	20.96	
855	"	"	"	68	327	60,290	"	"	1.43	1.32	0.24	0.59	
856	"	G58	"	328	165	60,545	"	サヌカイト	2.22	1.18	0.35	0.92	
857	"	"	"	308	135	60,515	土器片						
858	"	G56	"	225	336	60,800	剥片	チャート	3.55	4.98	1.56	21.50	
859	"	"	"	259	388	60,820	"	"	6.50	3.79	1.52	42.59	
860	"	"	"	343	389	60,850	"	"	1.25	1.28	0.61	0.94	
861	"	G57	"	300	39	60,810	石核	"	4.69	4.37	3.66	57.93	
862	"	"	"	316	50	60,835	剥片	"	4.54	4.52	1.66	30.80	
863	"	"	"	226	56	60,765	"	サヌカイト	1.40	1.75	0.68	1.29	
864	"	"	"	218	73	60,765	石核	頁岩?	3.98	4.00	3.74	61.08	29
865	"	"	Ⅳ上	359	220	60,825	剥片	チャート	3.49	4.70	1.76	22.47	
866	"	"	"	250	310	60,620	"	サヌカイト	2.88	1.31	0.32	0.60	
867	"	"	"	259	388	60,625	"	チャート	3.84	2.03	1.33	7.21	
868	"	"	"	298	387	60,675	"	砂岩	3.50	2.70	0.90	6.09	
869	"	H59	Ⅲ	34	49	60,320	楔形石器	サヌカイト	(3.70)	2.74	1.09	(13.26)	
870	"	G59	"	240	10	60,295	石鏃	"	2.29	1.32	0.42	0.69	65
871	"	"	"	245	170	60,220	剥片	"	1.75	1.21	0.28	0.57	
872	"	H59	"	290	67	60,390	R F	"	4.72	(4.09)	1.38	(21.41)	
873	"	H57	Ⅱ	78	123	60,770	剥片	"	2.01	1.62	0.36	1.23	
874	"	"	Ⅲ	169	89	60,760	"	?	2.03	2.08	0.56	2.26	
875	"	H58	"	320	16	60,530	"	チャート	5.34	5.97	4.20	140.9	
876	"	I 58	Ⅱ	209	47	60,515	"	砂岩?	5.92	4.35	1.58	32.18	
877	"	H57	"	295	240	60,670	"	サヌカイト	1.22	0.89	0.13	0.12	
878	"	I 56	"	262	380	60,810	楔形石器	"	1.52	1.65	0.52	1.24	
879	"	I 57	Ⅲ	145	344	60,545	剥片	"	0.95	1.39	0.29	0.18	
880	"	H58	Ⅱ	371	50	60,675	"	"	0.71	1.15	0.22	0.12	

第5-22表 B地区出土遺物一覧表 22

整理No.	地区	グリッド	層位	W→E (cm)	N→S (cm)	海拔高度 (m)	器種	石質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	図No.
881	B-Ⅷ	J56	Ⅱ	210	376	60,755	剥片	チャート	1.35	1.66	0.58	1.06	
882	"	H58	Ⅲ	168	256	60,531	土器片						
883	"	H56	V上	141	386	61,725	剥片	チャート	8.27	4.76	1.25	30.03	
884	"	G57	Ⅳ上	353	100	61,680	"	頁岩	3.51	3.56	2.25	15.52	
885	"	G58	Ⅳ	315	249	61,350	"	サヌカイト	1.73	2.22	0.99	3.11	
886	"	G59	Ⅲ	282	103	60,015	石核	"	2.04	3.83	1.60	14.10	
887	"	"	Ⅳ	339	205	59,940	剥片	"	1.44	1.66	0.59	1.06	
888	"	G57	V上	261	26	60,550	RF	"					
889	"	G58	"	400	320	60,150	剥片	"	1.91	0.79	0.89	1.32	
890	"	"	Ⅳ	286	220	60,270	楔形石器	頁岩	3.21	3.03	1.08	8.16	
891	"	G59	"	248	60	60,050	剥片	サヌカイト	1.41	1.92	0.36	0.76	

①表中の層位欄Ⅰ～Ⅴは次の層を示す。

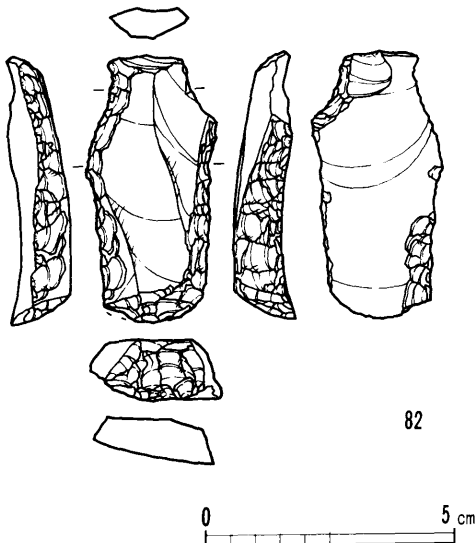
- Ⅰ……淡褐色砂質土（表土）
- Ⅱ……黄褐色砂質土
- Ⅲ……褐色土
- Ⅳ……黒褐色土
- Ⅴ……橙色粘質土

②表中の機種欄の略字は以下のとおり。

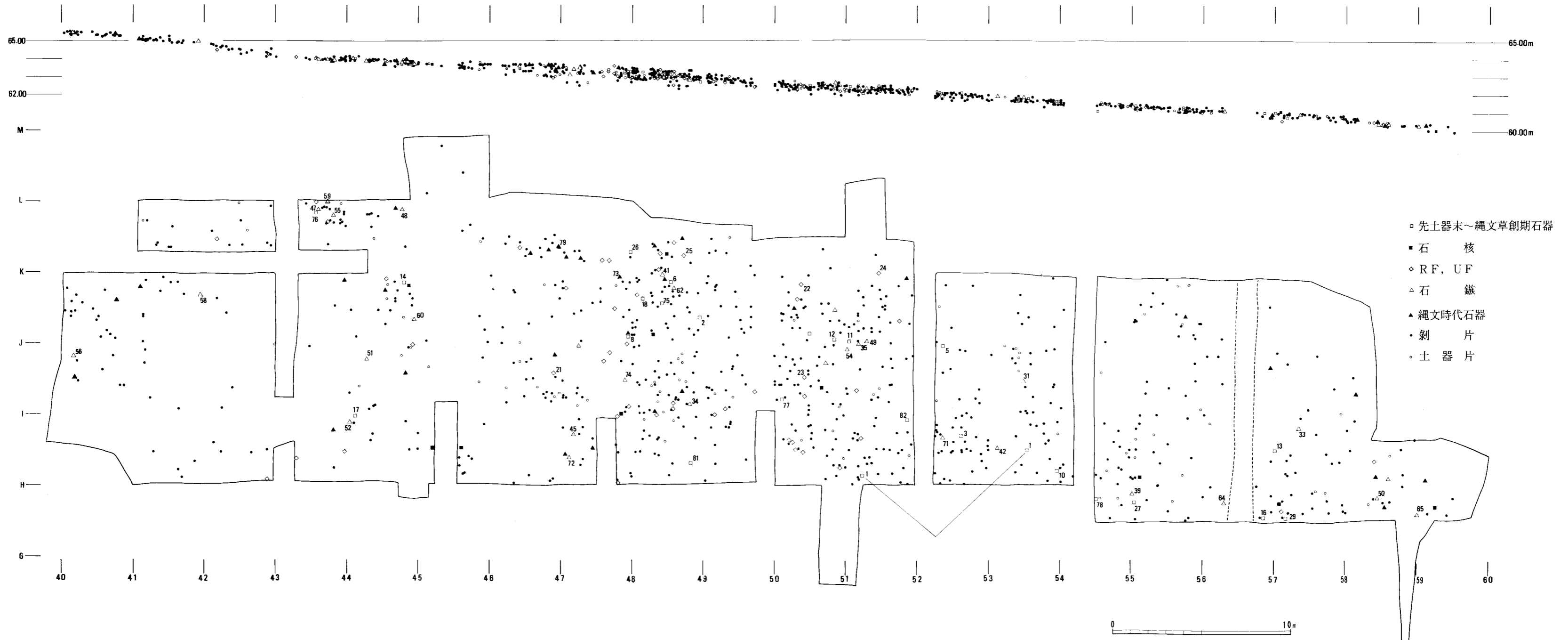
- RF……二次加工のある剥片
 - UF……使用痕のある剥片
- ※剥片には碎片も含む。

第5-23表 B地区出土遺物一覧表 23

追加資料



搔器 (82) 硬質頁岩製。刃部をわずかに欠損するがほぼ完形。縦長剥片の基部を折り取りさらに打瘤を取り除くように腹面側に剥離を加え、腹面左上部にやや内湾ぎみに急用度の調整を加えている。腹面右下部にはやや緩角度の剥離を加えている。そのうち背面両側縁に急角度の調整を加え、端部に刃部を作出している。図表面左側縁上部はやや内湾ぎみの調整となった。両側縁は直線的で、刃部は弧状の平面感をもつ。腹面中央部に光沢を有する。



第5-17図 B地区遺物分布図 (1:200)

3. 平安時代の遺構と遺物

2基の土坑墓がある。うち1基は火葬墓、他は木棺墓である。

SX1 B-I区の中央部で検出。一辺約1mの隅丸方形の掘形で、南辺がややふくらむ。検出面からの深さは25~30cmで、壁面はよく焼けており幅3~5cmほどの焼土帯となっている。

中央部付近には10~30cm大の石が2個、底部からやや浮いた状態で検出され、石の間から土師器杯(1)が出土した。この石を中心として0.7×1mほどの範囲の埋土は、炭化物が多く混った黒色土であった。しかし人骨の出土はなかった。

〔出土遺物〕

土師器杯(1) SX1中央部の石の間から割れた状態で出土したものである。約2分の1残存するが、推定口径13.4cm、器高3.1cmである。口縁部はやや外反気味に外へ開き、端部は若干内弯気味に収まる。

磨耗が著しいため調整技法等が不詳ながら、底部外面はヘラケズリ、口縁部内外面はヨコナデと考え

られる。

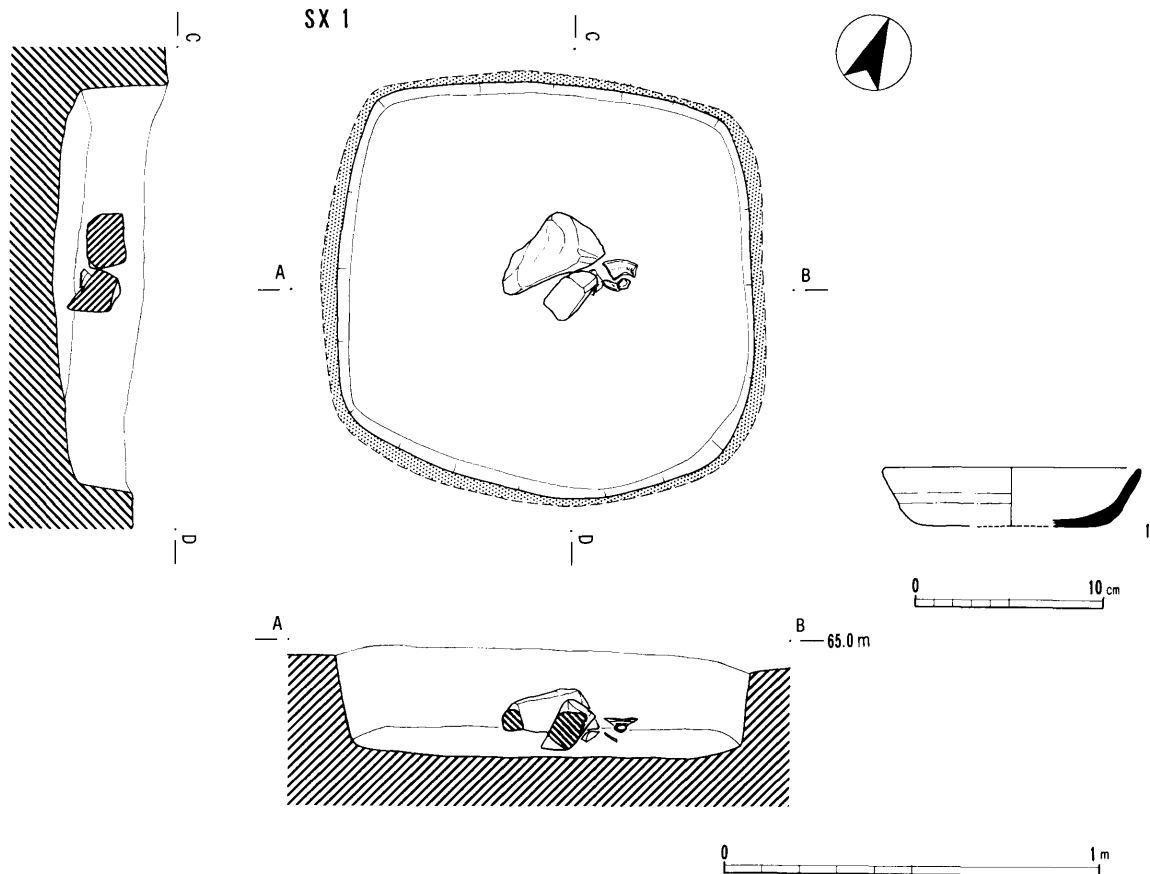
胎土は精良、若干の砂粒を含むが焼成は良好で、淡橙色を呈する。齋宮編年^⑩によればSK1445出土土器に類似し、平安時代初期に比定できよう。

SX14 B-II区の南端にて検出。掘形は東西1.35m、南北2.95mの長方形を呈し、検出面からの深さは深いところで35cmほどで、底面はほぼ平坦である。遺構埋土は暗黄褐色土で、底面にほぼ接して4カ所から棺材と思われる木質の付着した釘が検出された。これら釘の出土位置から推定される木棺の大きさは長さ約2.0m、幅約0.5~0.6mとなる。

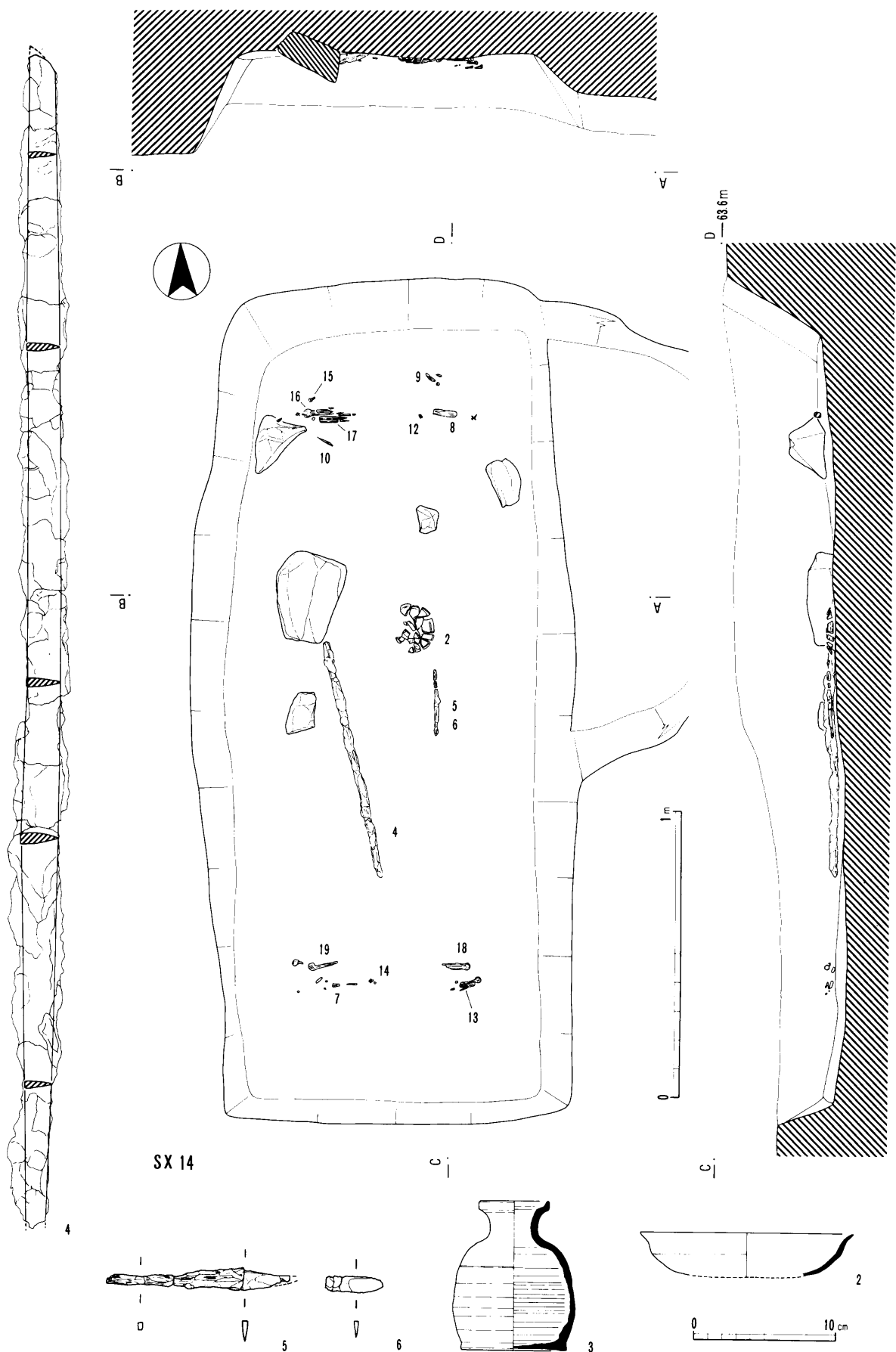
棺内中央部付近で西側に現存長83cmの直刀(4)、東側に現存長22cmの刀子(5.6)、中央部北寄り土師器杯(2)が出土した。また埋土掘削中に北の小口付近のかなり上部の位置から須恵質の壺(3)が出土したが、出土状態、位置をおさえることはできなかった。

〔出土遺物〕

土師器杯(2) SK14のほぼ中央部床面に伏せた状態で検出されたものである。かなり歪みがあり正



第5-18図 SX1実測図(1:20)、出土遺物実測図(1:4) 網目は焼土



第5-19图 SX 14实测图 (1:20) 出土遺物实测图 (1:4)

確な口径は出しにくいですが、約15cmである。器高は3.1cm、器壁は2～3mmと薄い。磨耗のため調整技法等は不詳。口縁部はヨコナデされ外反する。底部はユビオサエされ凸凹が残る。胎土は精良、砂粒を含み焼成は良、淡橙褐色を呈する。

斎宮編年^⑩のSK2650（平安時代前II期）ないしはSE3134（平安時代中期）に比定できる。

須恵系壺（3） 北部中央付近の埋土から完形で出土したものである。出土状況は不明であるが、副葬品のひとつと考えられる。

口径4.8cm、器高10.4cm、体部最大径8.6cmで徳利のような形の小型壺である。口縁部は受口状を呈し、短い頸部から肩部へは緩やかに張り出す。体部の最大径は底部近くにある。平底の底部には糸切り痕が見られる。ロクロ回転方向は不明。

胎土は精良、砂粒をほとんど含まない。焼成は不良で土師器のように軟質で、非常に磨耗しやすくもろい。器表は淡灰色、断面内部は淡褐色を呈する。

直刀（4） 現存長82.5cmの直刀である。錆化がひどく遺存状況は悪い。

切先、茎尻ともに欠く。錆のため刃部の長さは不明であるが、幅2.6cm、刃背部幅0.6cmで断面は二等

辺三角形をなす。

刀子（5・6） 刃部を一部欠くが、現存長12.9cmの刀子である。残存する刃部は長さ3.3cmで、幅1.4cm、刃背部の幅0.4cm、二等辺三角形の断面をなす。

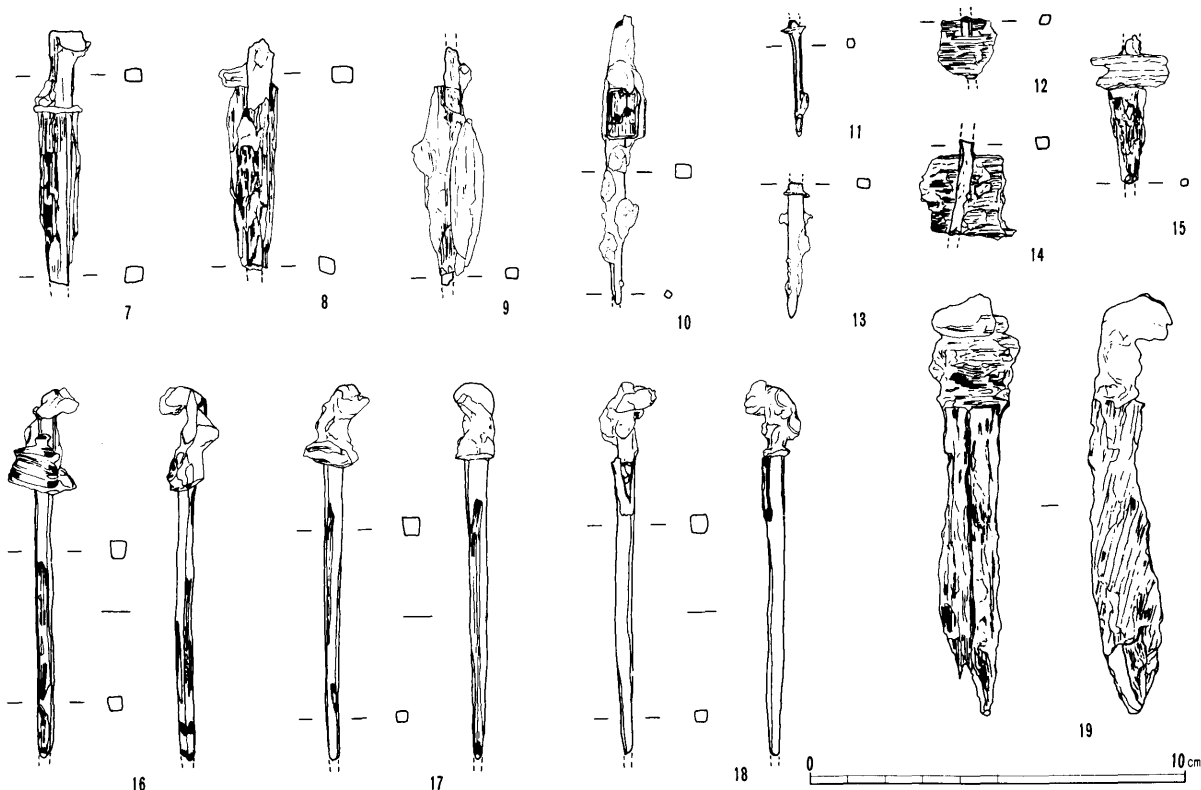
（6）が切先に近い部分と思われる。

茎部は長さ9.6cmで木質が付着する部分がある。茎の断面は4mm×5mmの長方形をなす。

釘（7～19） すべて鉄製の角釘である。棺材の木質が遺存していたために錆化が進まず、良好な遺存状態で出土したものがある。

（7～10）・（16～19）は同じ規格の角釘で、敲打部は折り曲げられているが、長さ2.5cmほどである。身部は先端がごく少し欠損していると思われるが、（16～18）はほぼ完存する例である。長さ7.9cm、一辺が4～5mmの正方形ないしは台形の断面形をなす。（19）は木質に覆われて釘が観察できないが、（16～18）と同一のものである。

その他（11～15）のように1mm～2mm前後の細いものがある。



第5-20図 SX14出土遺物実測図（1：2）

5. 結 語

上ノ広遺跡は櫛田川を望む標高60～74mの中位段丘上に営まれた、先土器時代終末期から縄文時代にかけての遺跡である。縄文時代については、出土した少量の土器からみると、早期末の条痕文土器が多くを占めるが、他の各時期のものも断片的に出土しており、ほぼ全時期にわたって断続的に細々とした生活の痕跡を留めている。また、平安時代には墓地としての利用があった。

出土遺物の大半は先土器時代終末期ないし縄文時代草創期に属する石器群と、縄文時代に属する石鏃を主とした石器群である。接合作業等が十分でないため、詳細な検討や考察が加えられないが、ここでは今後の課題を提起することにした。

先土器時代末期～縄文時代草創期の遺構・遺物

各時期の遺物が混入しているため、この時期に属することが明確な遺構は検出されなかった。

遺物実測図（石器）番号（1）～（29）が、この時期に属すると考えられる遺物であるが、（26・27・29）については先土器時代末期のものと考えられることから、他の石器群とは分離して考えたい。

これらの遺物はプライマリーな遺物包含層が認められず、原位置を保っているとは考えられないものである。出土地点の平面分布においても特に集中するような地点はなく、調査区全域から出土している。強いて言うなら調査区の中央部付近に多いと言えよう。

出土遺物のなかで注目されるのは、いわゆる神子柴型石斧と呼ばれる局部磨製石斧の出土であろう。

県内での神子柴系石斧は12遺跡22点が確認されているが、発掘調査での出土例としては1964年に南山大学が調査した牟山遺跡（多気郡多気町相可）、1982年の多気町教育委員会による第4次河田古墳群（多気町河田）の調査に次いで3例目となった。

今回出土した2点のうち1点は凝灰岩製、他の1点はホルンフェルス化した粘板岩製と考えられる。県内出土例では石神遺跡（多気郡勢和村色太）例がサヌカイト製である以外は、ことごとく軟質の凝灰岩を使用している点で共通性がある。

この局部磨製石斧が、大型で比較的丁寧な調整のものから、小型化し調整の粗雑なものへと形態的に退化していくと考えると、本例は局部磨製石斧の中でも新しい時期に属するものと考えられる。また厳密には共伴とは言えないにしても、有茎（舌）尖頭器、円形搔器など縄文時代草創期に属する遺物の出土等から、本例は草創期に属するものであろう。

ところで、今回の調査では当該時期に属すると考えられる隆起線文土器等の、明確なものについては確認することができなかった。

県内での最古の土器は、坂倉遺跡（多気町東池上）や大鼻遺跡（亀山市太岡寺町）で微量出土している表裏に縄文を施す土器を除けば、大鼻式あるいは大川・神宮寺式の押型文土器であり、草創期の土器の様相は全く不明の状態である。

しかし、押型文土器の出土遺跡数は県内において85カ所の多くを数え、その大部分が大川・神宮寺式系のネガティブな楕円押型文を出土する。また有茎（舌）尖頭器の出土も県内で約85遺跡ほど確認されており、今後各種開発が次第に山間部にも及ぶことから、草創期の土器も近い将来の出土が期待される。

縄文時代早期以降の遺構・遺物

縄文時代と考えられる土坑、集石土坑、溝等が検出されたが、明確な時期比定のできる遺物が出土した遺構はほとんどない。

土坑のほとんどは時期不詳の縄文土器細片や石鏃、剝片が出土したにとどまる。

S K 16は直径が約3～3.5mの浅い皿状の円形土坑で、柱穴や炉跡は確認されなかったが、竪穴住居跡の可能性はある。

集石土坑S K 11は、土坑の石に焼けたものを含むことや、焼土は確認されなかったが微細な炭化物を多く含むことなどから、炉跡の可能性が高い。

S K 8は浅い不定形な土坑であるが、鱗状のサヌカイト碎片が多数出土した。石器製作跡と考えられる。

S D 3からは溝底面近くから山形押型文土器片（4）が出土している。

ところで、縄文時代の出土遺物として多数を占めるのは、さまざまな形態や大きさを有する石鏃がある。各時期のものが混在するようであるが、剝片等も含めてその出土分布をみると、出土は調査区（B区）全域に及んでいるものの、黒色土が薄いながら遺存していた調査区中央部付近にやや集中する傾向がみられる。

石鏃に使用された石材はサヌカイト^⑩（27点）、チャート（15点）、頁岩（1点）である。

トトロ石器と呼ばれる異形部分磨製石器の出土も、発掘調査によるものとしては初例である。出土土器片数の割合からみると、早期末条痕文土器の方

が多く当遺跡の盛期と考えられるが、本例は高山寺式期に属するものと考えたい。

また楔形石器の出土が多いことも注目せねばならない。これについても整理、観察が不十分であるため、考察を加えられなかった。今後の課題としたい。

平安時代の遺構・遺物について

平安時代に属する土坑墓が2基検出された。それぞれの時期に違いがあるが、1基は火葬墓、他は木棺直葬であった。県内での当該時期の土坑墓の検出例はさほど多くはなく、この時期の葬制を知る一つの手がかりを提供した。

（田村 陽一）

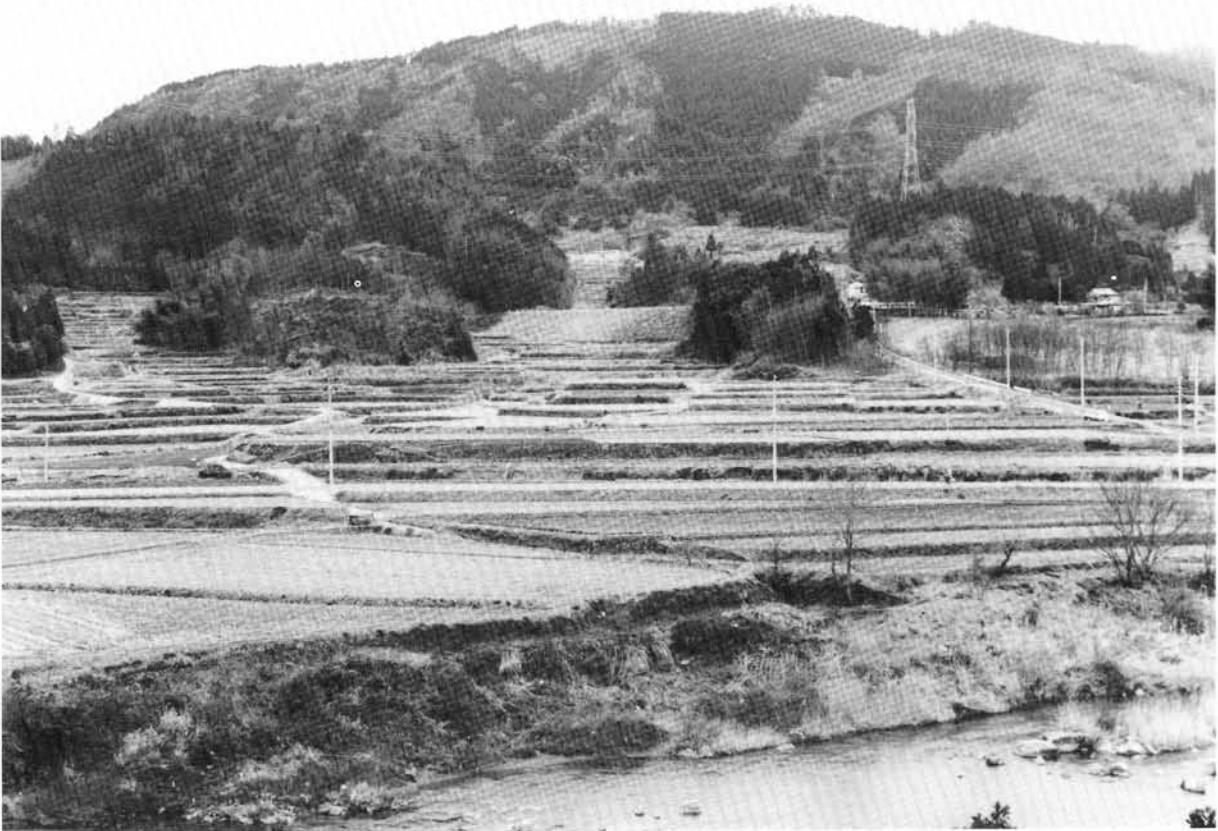
〔註、参考文献〕

- ① 奥 義次 「王子広遺跡」『松阪市史』第二巻考古編 1978
- ② 1989年度に面的な調査が予定されている。
- ③ 野田健次氏の採集品。
- ④ 奥 義次 「大原堀遺跡」『松阪市史』第二巻考古編 1978
- ⑤ 奥 義次氏の採集品。
- ⑥ 奥 義次 「多気町内の遺跡めぐり ⑩」『広報たき』 多気町 1976
- ⑦ 下村登良男、奥 義次 「上寺遺跡発掘調査報告書」 松阪市教育委員会 1981
- ⑧ 押型文土器については奥義次氏のほか山田猛氏にも多くのご教示を得た。
- ⑨ 奥 義次 「原始社会」『大宮町史 歴史編』大宮町 1987
- ⑩ 「斎宮跡の土師器」『三重県斎宮跡調査事務所年報1984』三重県斎宮跡調査事務所 1985
- ⑪ ⑩に同じ
- ⑫ 奥 義次 「三重県の先土器時代関連遺跡地名表」『上地山遺跡発掘調査報告書』 玉城町教育委員会 1985
- ⑬ 奥 義次 「河田古墳群C支群（東谷C遺跡）出土の先土器・縄文時代遺物について」『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』 1985
- ⑭ 早川正一・奥 義次 「三重県石神遺跡出土の石器群」 考古学雑誌50巻3号 1965
- ⑮ 岡本東三 「神子柴・長者久保文化について」 『奈良国立文化財研究所研究論集V』 1979
- ⑯ 三重県教育委員会編 「一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅲ」 1987
- ⑰ 奥 義次氏のご教示による
- ⑱ ⑰に同じ
- ⑲ サヌカイト石材の搬入ルートとして、高見峠越えの櫛田川ルートが指摘されている。
- ⑳ ⑰に同じ
- ㉑ その他の参考文献
 - ・ 小林達雄 「有舌尖頭器」『歴史教育』9-3 1961
 - ・ 藤沢宗平・林 茂樹 「神子柴遺跡——第1次発掘調査概報」『古代学』9-3 1961
 - ・ 芹沢長介 「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」『東北大学日本文化研究所研究報告』第2集 1966
 - ・ 大場範久 「三重県出土の有舌尖頭器」『古代文化』20-8・9 1968
 - ・ 森島 稔 「神子柴型石斧をめぐっての試論」『信濃』20-4 1968
 - ・ 大参義一 「酒呑ジュリナ遺跡（2）」『名古屋大学文学部研究論集』L 1970
 - ・ 森島 稔 「神子柴型石斧をめぐっての再論」『信濃』22-10 1970

- ・ 白石浩之 「先土器終末から縄文草創期前半の尖頭器について（上）・（下）」『考古学ジャーナル』126・127 1976
- ・ 津田守一 「神滝遺跡出土の異形局部磨製石器について」『歩跡』第3号 1976
- ・ 田中英司 「縄文時代における剝片石器の製作について」『埼玉考古』16号 1977
- ・ 阿部朝衛 「ピエスエスキュー（楔形石器）」『峠下聖山遺跡』 1979
- ・ 田中英司 「縄文時代の剝片石器製作」『風早遺跡』1979
- ・ 加藤晋平・鶴丸俊明 「図録石器の基礎知識Ⅰ—先土器（上）」 1980
- ・ 鈴木次郎・白石浩之 「寺尾遺跡」 1980
- ・ 増田一裕 「有舌尖頭器の再検討——本州四国の出土例を中心として——」『旧石器考古学』22 1981
- ・ 岡村道雄 「ピエスエスキュー、楔形石器」『縄文文化の研究7』 1983
- ・ 岡本東三 「トトロ石器考」『人間・遺跡・遺物』 1983
- ・ 高橋 敦 「斜状平行剝離をもつ有舌尖頭器について」『人間・遺跡・遺物』 1983
- ・ 栗島義明 「有基尖頭器の形式変遷とその伝播」『駿台史学』62 1984
- ・ 中東耕志 「土器出現期における局部磨製石斧の一様相」『群馬県立歴史博物館紀要』第6号 1985
- ・ 山田昌久 「縄文時代における石器研究序説——剝片剝離技術と剝片石器をめぐって」『論集日本原始』 1985
- ・ 桑野一幸 「先土器から縄文時代をつなぐ石器——有基（舌）尖頭器の動き——」『大阪湾をめぐる文化の流れ——もの・ひと・みち——』 1987
- ・ 栗島義明 「神子柴文化をめぐる諸問題——先土器・縄文の画期をめぐる問題（一）」『研究紀要』第4号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1988
- ・ 白石浩之 「縄文文化の起源を求めて」『大和のあけぼのⅡ』 1988
- ・ 土肥 孝 「縄文人の道具箱」『古代史復元3 縄文人の道具』 1988
- ・ 竹岡俊樹 『石器研究法』 1989
- ・ 白石浩之 『旧石器時代の石槍』 1989
- ・ 中井 均編 『磯山城遺跡』 米原町教育委員会 1986
- ・ 形原遺跡発掘調査会 『形原遺跡発掘調査報告書』 蒲郡市教育委員会 1982
- ・ 山下勝年ほか 『先苜貝塚』 南知多町教育委員会 1980
- ・ 下村晴文ほか 『神並遺跡Ⅱ』 東大阪市教育委員会・東大阪市文化財協会 1987

図 No	器 種	石 質	遺物番号	長 cm	幅 cm	厚 cm	重 g
1	尖頭器	チャート	B-V, No125 B-VI, No27	5.99	(2.22)	1.19	13.47
2	"	"	B-IV, No93	(1.91)	(2.01)	(0.30)	(1.85)
3	"	サスカイト	B-VI, No13	(1.32)	(1.29)	(0.35)	(0.44)
4	"	"	試合G10, No3	(4.10)	(2.15)	(0.65)	(4.49)
5	"	チャート	B-VI, No76	(1.82)	(2.10)	(0.54)	(1.95)
6	"	"	B-IV, No133	(3.45)	(4.24)	(1.49)	(14.60)
7	"	"	B-III, No112	(4.24)	(2.60)	(1.00)	(10.39)
8	"	"	B-IV, No205	(5.62)	(2.97)	(1.29)	(20.37)
9	搔器	チャート	B-V, SK9, No98	3.48	3.13	1.54	15.76
10	"	"	B-VI, No30	(2.33)	(2.33)	(1.66)	(10.49)
11	"	サスカイト	B-V, No85	6.20	4.80	1.31	36.67
12	"	"	B-V, No82	6.21	(4.20)	1.10	(24.66)
13	"	"	B-VII, No8	5.12	3.19	1.05	18.51
14	削器	チャート	B-II, No23	3.89	3.75	1.00	17.55
15	"	"	B-I, 黄褐色土	(3.25)	(2.86)	(0.78)	(7.84)
16	"	サスカイト	B-VII, No1	(2.06)	(2.67)	(0.53)	(2.36)
17	"	"	B-II, No89	(5.82)	(4.72)	(1.06)	(19.22)
18	"	"	B-IV, No132	(6.45)	(2.42)	(1.30)	(12.2)
19	斧形石器	粘板岩	B-V, 表土中No195	9.17	3.21	1.36	42.31
20	"	燧灰岩	A-III, No1	15.01	5.02	2.58	234.7
21	二次加工のある剥片	チャート	B-III, No89	2.49	2.19	0.83	3.77
22	"	"	B-V, No135	2.52	1.45	0.73	2.08
23	"	"	B-V, No149	(2.17)	(2.92)	(0.71)	(4.72)
24	"	サスカイト	B-V, No60	(4.20)	(2.34)	(1.54)	(9.10)
25	"	チャート	B-IV, No109	2.73	1.70	0.85	3.91
26	細石刃?	"	B-IV, No106	(1.37)	(0.53)	(0.15)	(1.14)
27	石核	"	B-VII, No8	2.10	1.85	2.29	9.77
28	"	頁岩	B-II, K44拡張区	1.96	3.34	2.31	13.10
29	"	"	B-VII, No42	3.98	4.00	3.74	61.09
30	石鏃	チャート	B-IV, No223, SD3	1.29	1.36	0.32	0.47
31	"	サスカイト	B-VI, No31	1.41	1.23	0.35	0.51
32	"	チャート	B-III, 拡張区No111	1.42	1.38	0.31	0.49
33	"	"	B-VII, No12	1.65	(1.49)	0.27	(0.50)
34	"	サスカイト	B-IV, No161	1.83	(1.62)	0.27	(0.62)
35	"	頁岩	B-V, No130	(1.65)	(1.35)	0.26	(0.21)
36	"	チャート	B-VI, No2	1.68	1.35	0.40	0.80
37	"	"	B-V, SK9, No201	(1.90)	(1.62)	(0.61)	(1.52)
38	"	"	B-IV, SD3, No224	(2.02)	(1.67)	0.32	(0.94)
39	"	サスカイト	B-VII, No55	1.37	1.62	0.20	0.21
40	"	"	B-V, SK9, No196	(1.58)	(1.56)	0.23	(0.33)
41	"	"	B-III, No106	(1.17)	(0.95)	0.26	(0.22)

図 No	器 種	石 質	遺物番号	長 cm	幅 cm	厚 cm	重 g
42	石鏃	サスカイト	B-VI, No24	(1.40)	(1.08)	0.26	(0.21)
43	"	"	B-II第4回掘り下げ	(1.39)	1.43	0.21	(0.33)
44	"	"	B-IV, SD3, No225	1.58	1.26	0.24	0.54
45	"	チャート	B-III, No26	(1.59)	1.64	0.44	(0.86)
46	"	サスカイト	B-V, SK9, No197	(1.54)	(1.28)	0.36	(0.41)
47	"	"	B-II, No75	(1.67)	(1.62)	0.27	(0.61)
48	"	"	B-II, No61	(1.53)	1.62	0.22	(0.50)
49	"	"	B-V, No90	(1.77)	(1.36)	0.36	(0.55)
50	"	"	B-VII, No27	(1.77)	(1.21)	0.32	0.32
51	"	"	B-II, No20	1.95	1.51	0.34	0.57
52	"	"	B-II, No6	(1.91)	(1.51)	0.30	0.62
53	"	チャート	B-II, 黄褐色土, No95	(2.05)	(1.33)	(0.39)	(0.87)
54	"	サスカイト	B-V, No174	(2.28)	(1.81)	0.28	0.90
55	"	チャート	B-II, No69	2.65	1.84	0.54	2.12
56	"	"	B-0, No3	(2.78)	(2.09)	0.68	2.87
57	"	"	B-I, No50	(1.41)	(1.33)	0.31	(0.38)
58	"	サスカイト	B-I, No48	2.18	1.41	0.34	0.60
59	"	チャート	B-II, No67	2.05	1.78	0.41	0.82
60	"	"	B-II, No87	2.19	2.05	0.41	(0.98)
61	"	サスカイト	B-V, SD3, No200	1.65	0.96	0.28	0.32
62	"	"	B-III, No108	1.58	1.13	0.37	0.46
63	"	"	B-VII, SK6, No73	1.78	1.30	0.21	0.33
64	"	"	B-VII, No30	1.85	0.96	0.27	0.32
65	"	"	B-VII, No50	2.29	1.32	0.42	0.69
66	"	チャート	B-II, No96	(2.69)	(1.61)	0.43	(1.20)
67	"	サスカイト	試験G4, No1	(3.39)	1.43	0.41	(1.37)
68	"	"	B-VII, 表採, No75	(1.50)	(1.64)	(0.29)	(0.50)
69	"	"	B-VII, SK5, No72	(1.74)	(1.95)	(0.25)	(0.26)
70	"	"	B-IV, SD3たまり	(2.00)	(0.99)	(0.22)	(0.22)
71	"	"	B-VI, No99	1.80	1.48	0.33	0.78
72	"	チャート	B-III, No65	2.67	1.51	0.48	1.67
73	トトロ石器	"	B-IV, No74	6.05	2.13	0.63	7.95
74	石匙	サスカイト	B-IV, No42	(4.81)	2.56	0.84	(12.27)
75	楔形石器	頁岩	B-IV, No198	2.38	1.88	0.71	3.16
76	"	サスカイト	B-II, No40	2.48	1.12	0.53	1.51
77	"	チャート	B-V, No151	2.90	1.59	0.72	3.64
78	"	サスカイト	B-VII, No82	2.79	1.83	0.62	0.62
79	"	"	B-III, No95	2.84	1.63	0.82	3.53
80	磨石	砂岩	B-V, 暗褐色土, No194	4.26	(4.03)	2.83	(59.90)
81	"	"	B-IV, No27	(7.36)	(5.14)	(2.96)	(124.6)
82	搔器	頁岩	B-V, No117	5.31	2.74	1.16	18.14

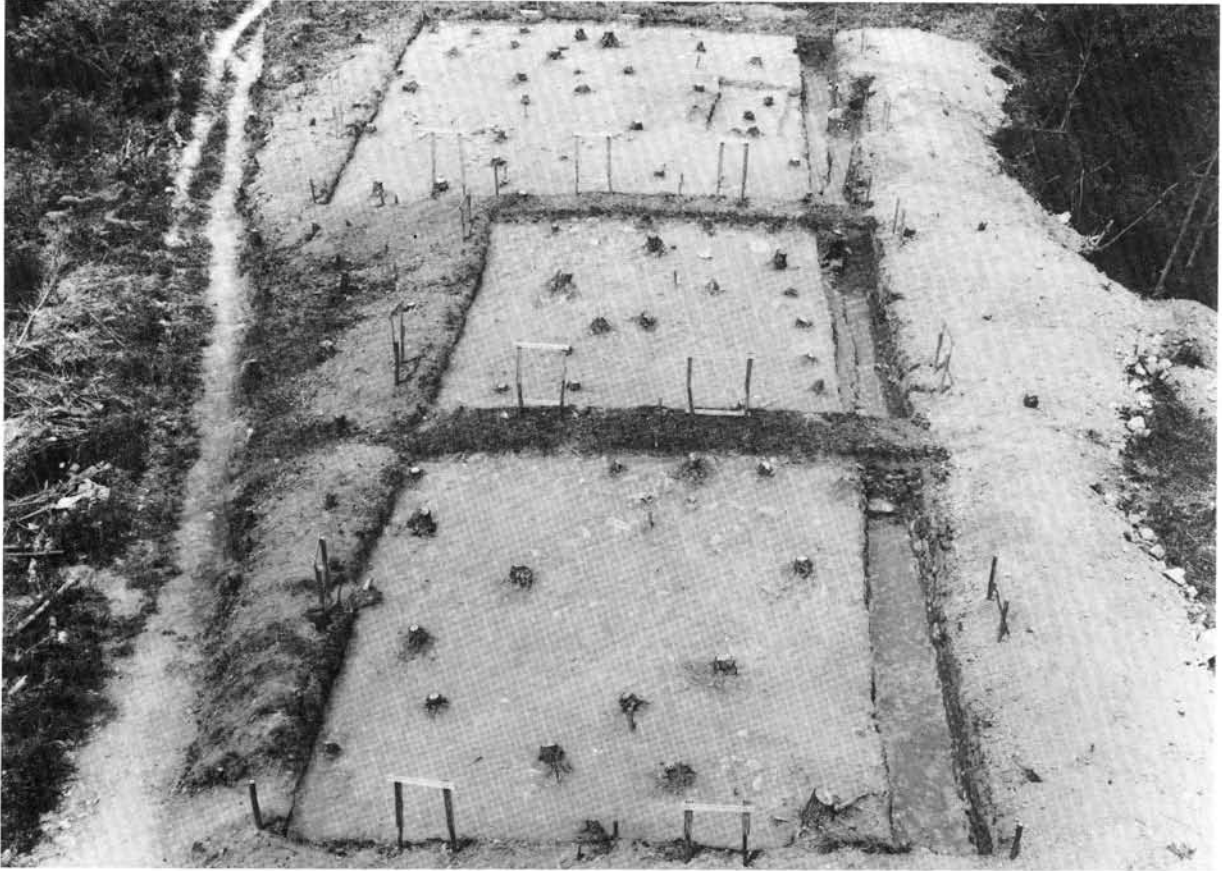


調査前遠景（南から、手前は櫛田川）

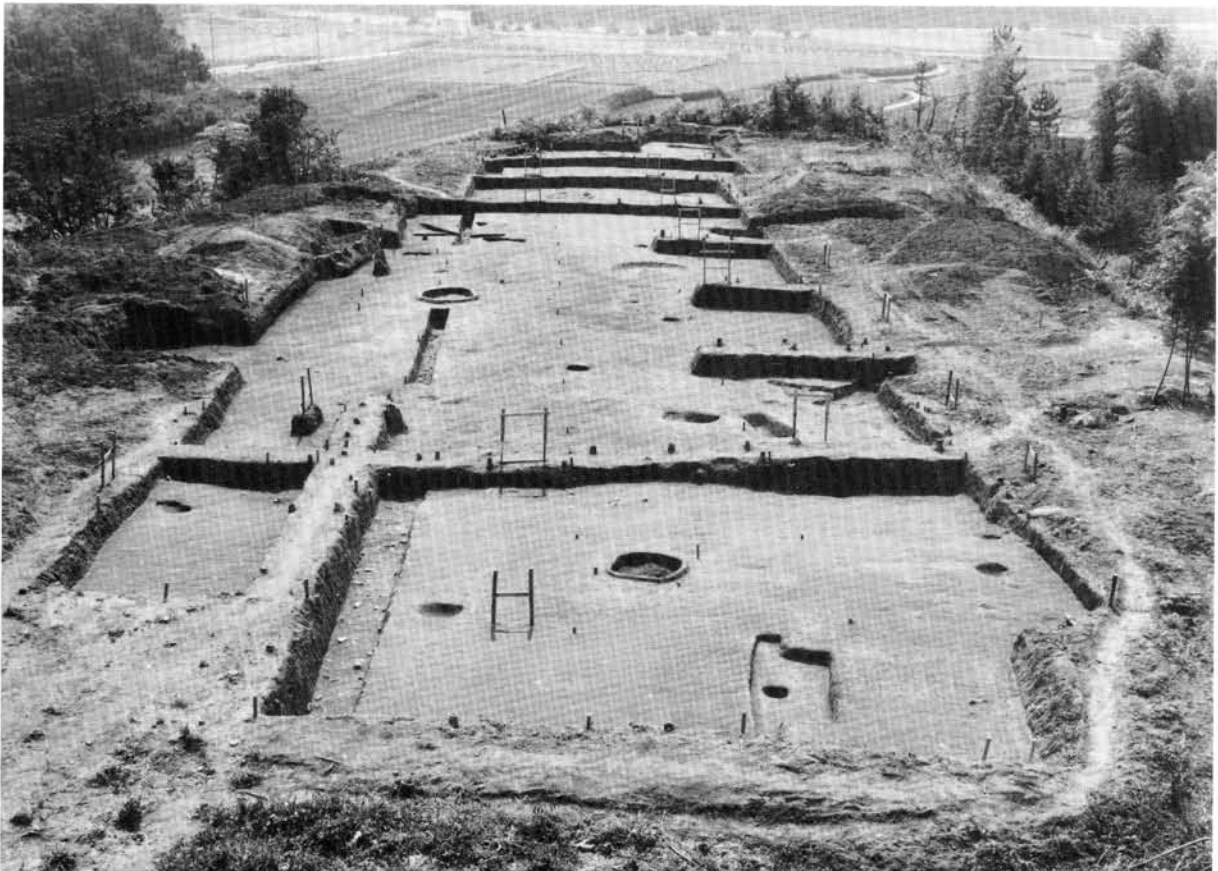


調査前遠景（南西上空から）

PL1-2



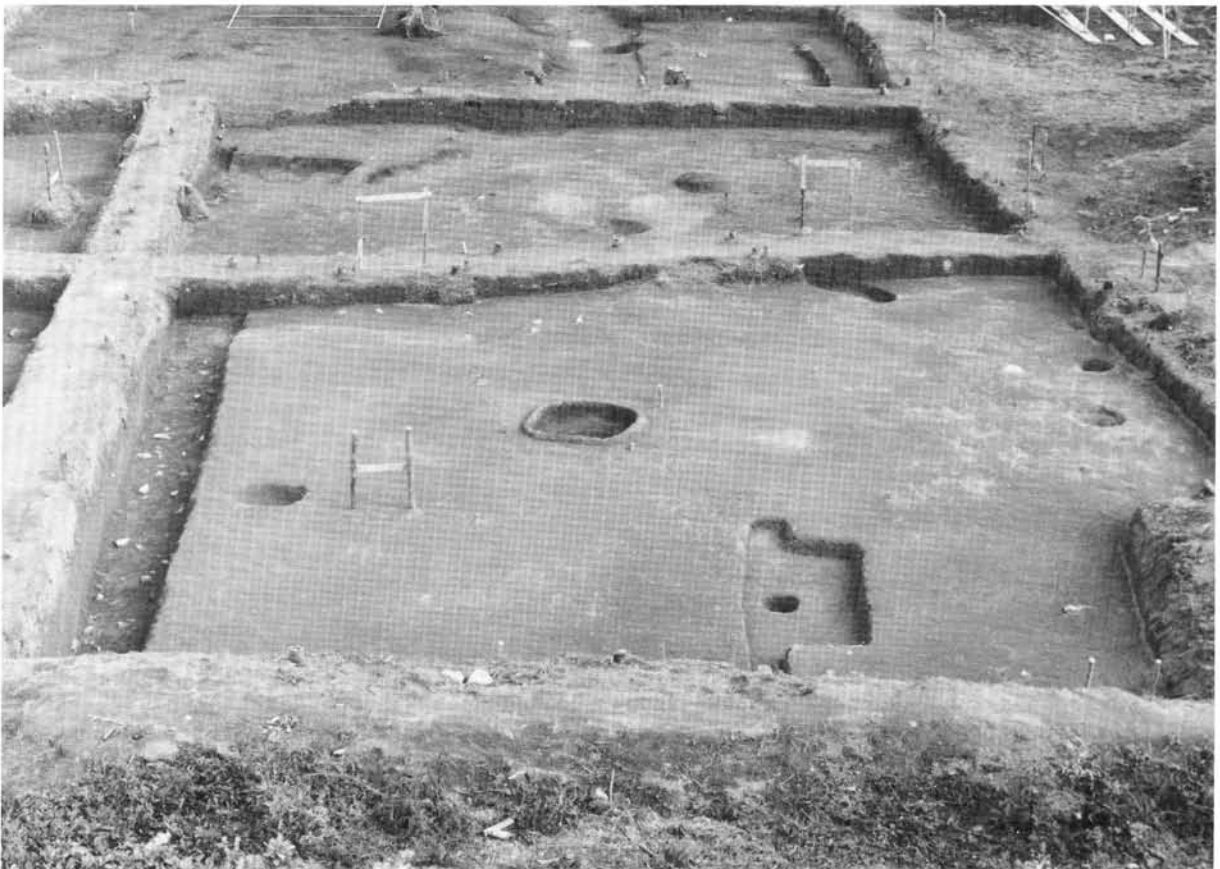
調査後A地区全景（南から）



調査後B地区全景（北から）

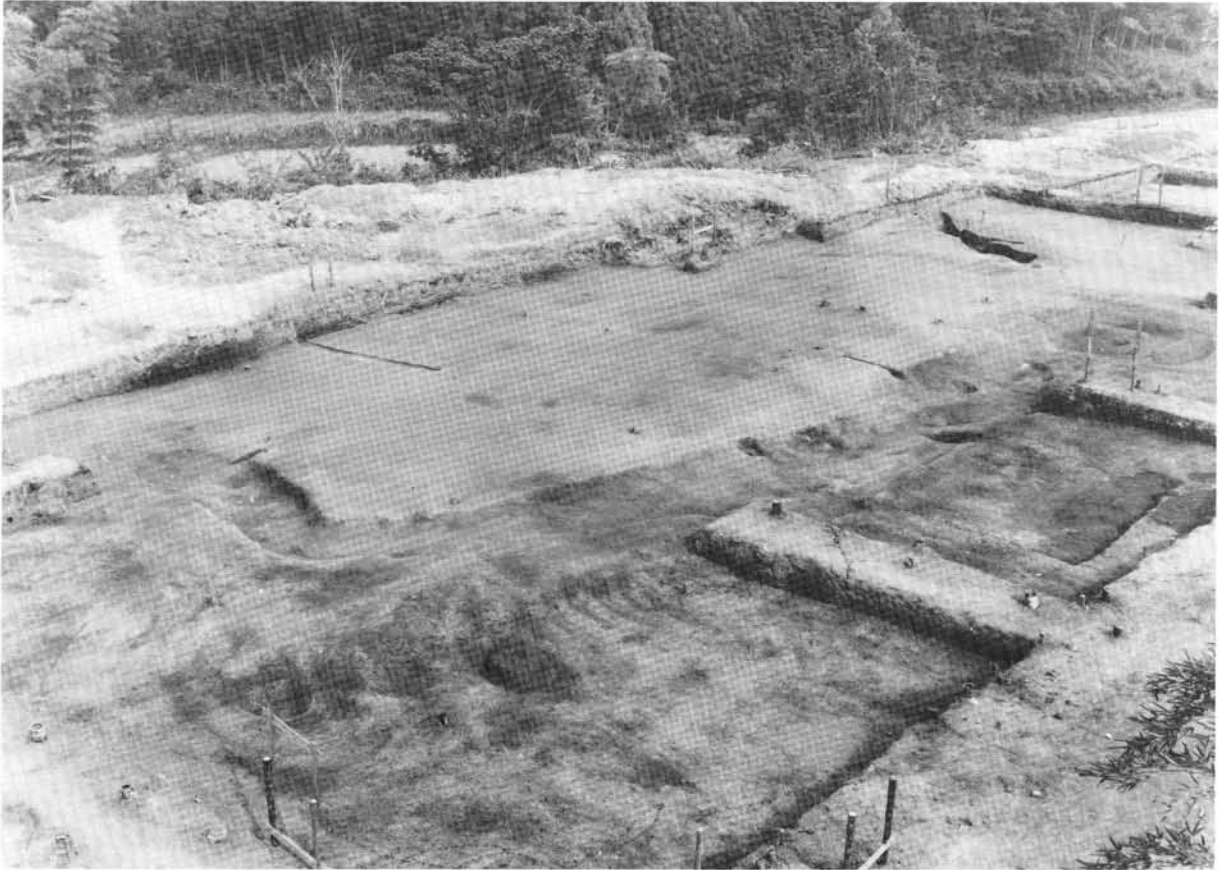


調査風景



B-I・II区近景（北から）

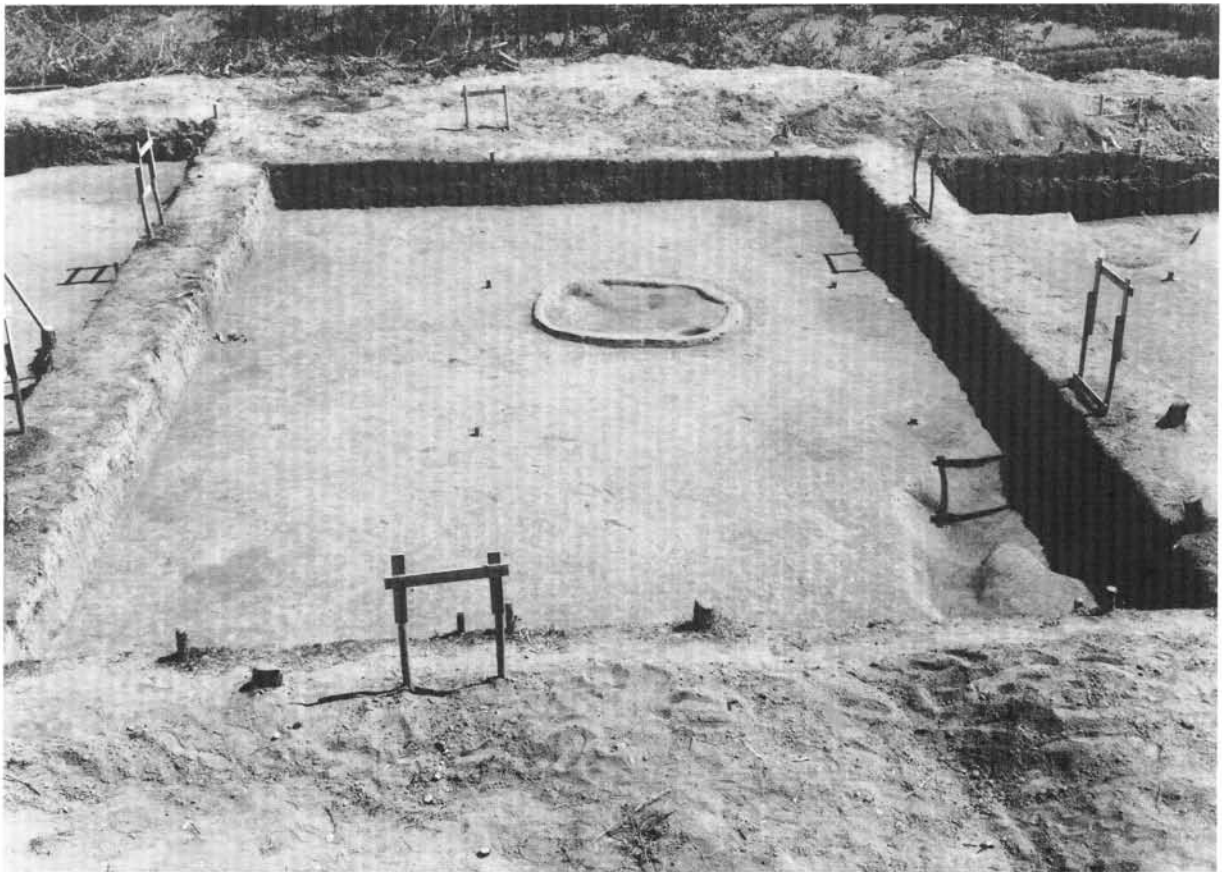
PL1-4



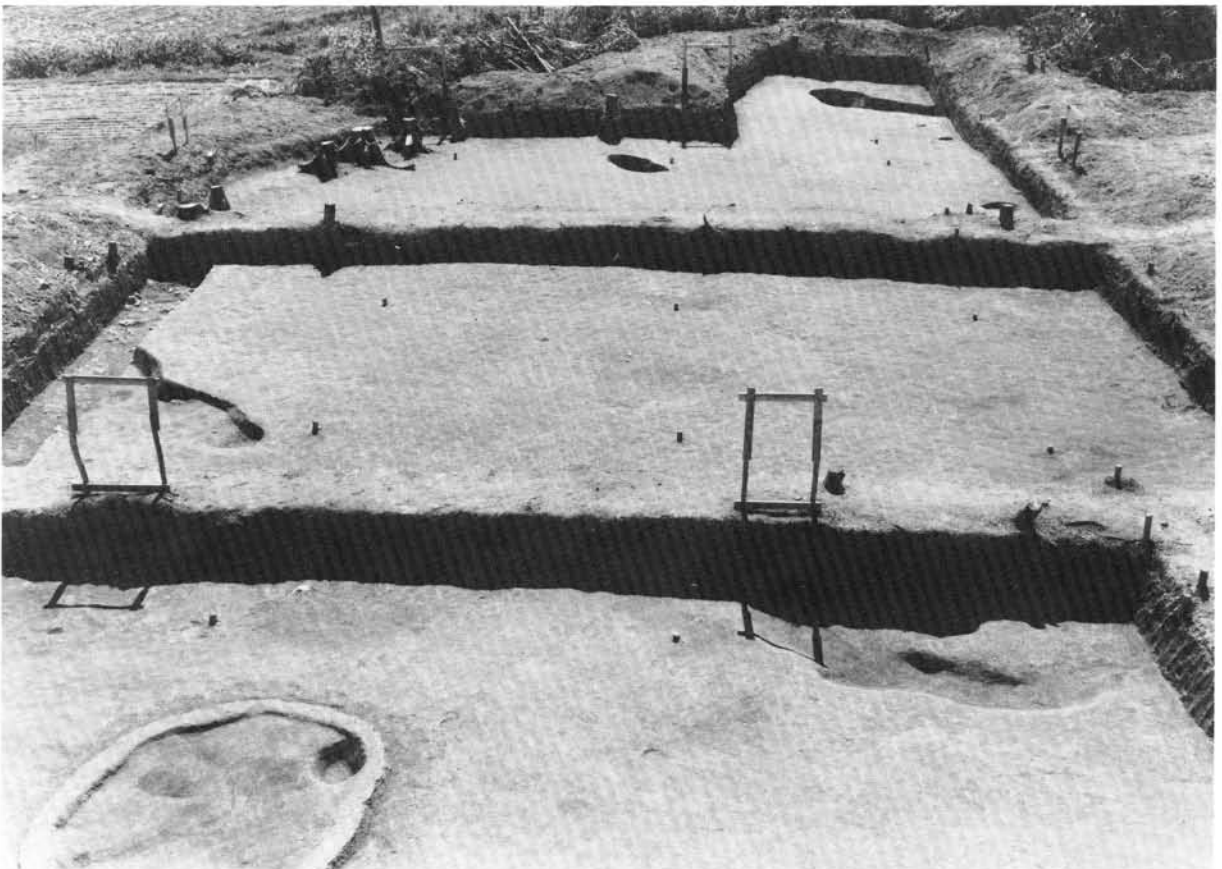
B-II・III・IV区近景（西から）



B-V区近景（南西から）



B-VI区近景 (南西から)

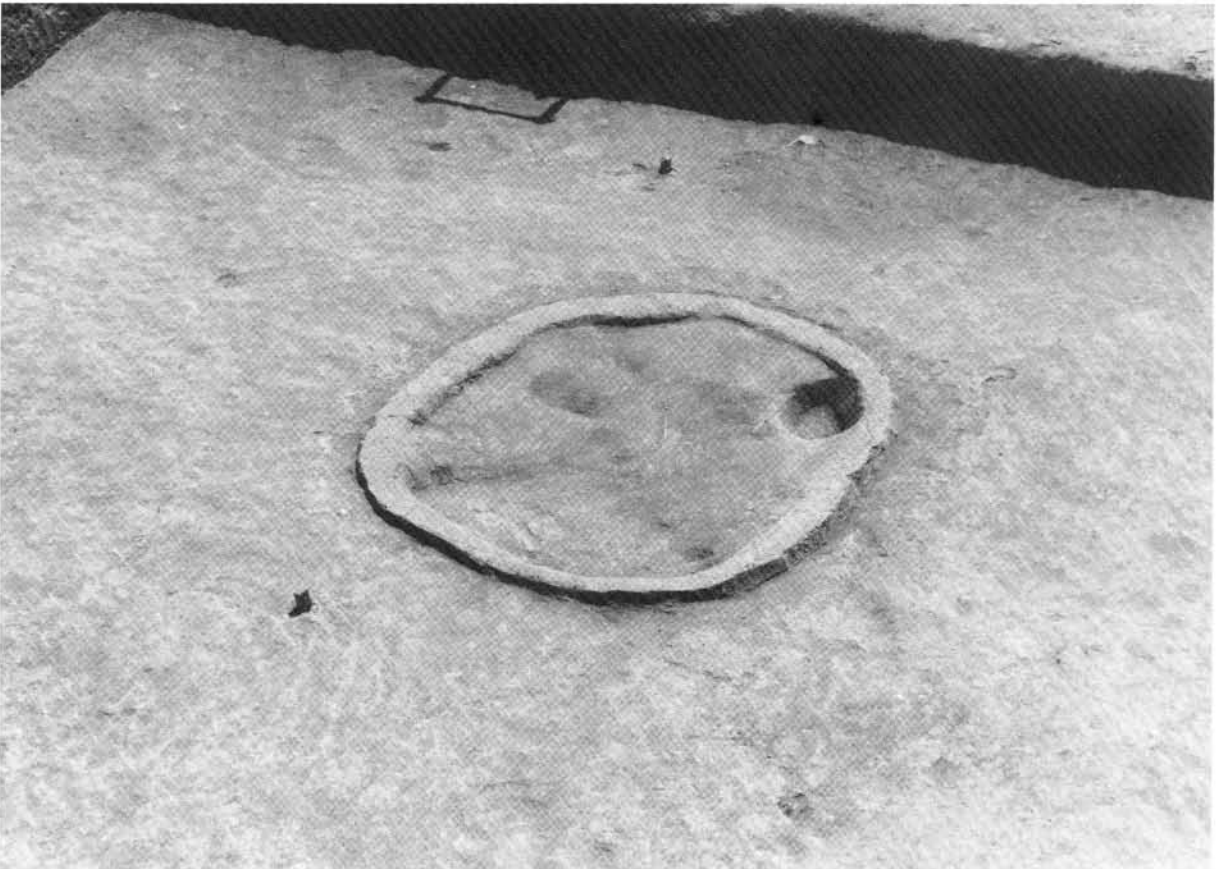


B-VII・VIII区近景 (北から)

PL1-6



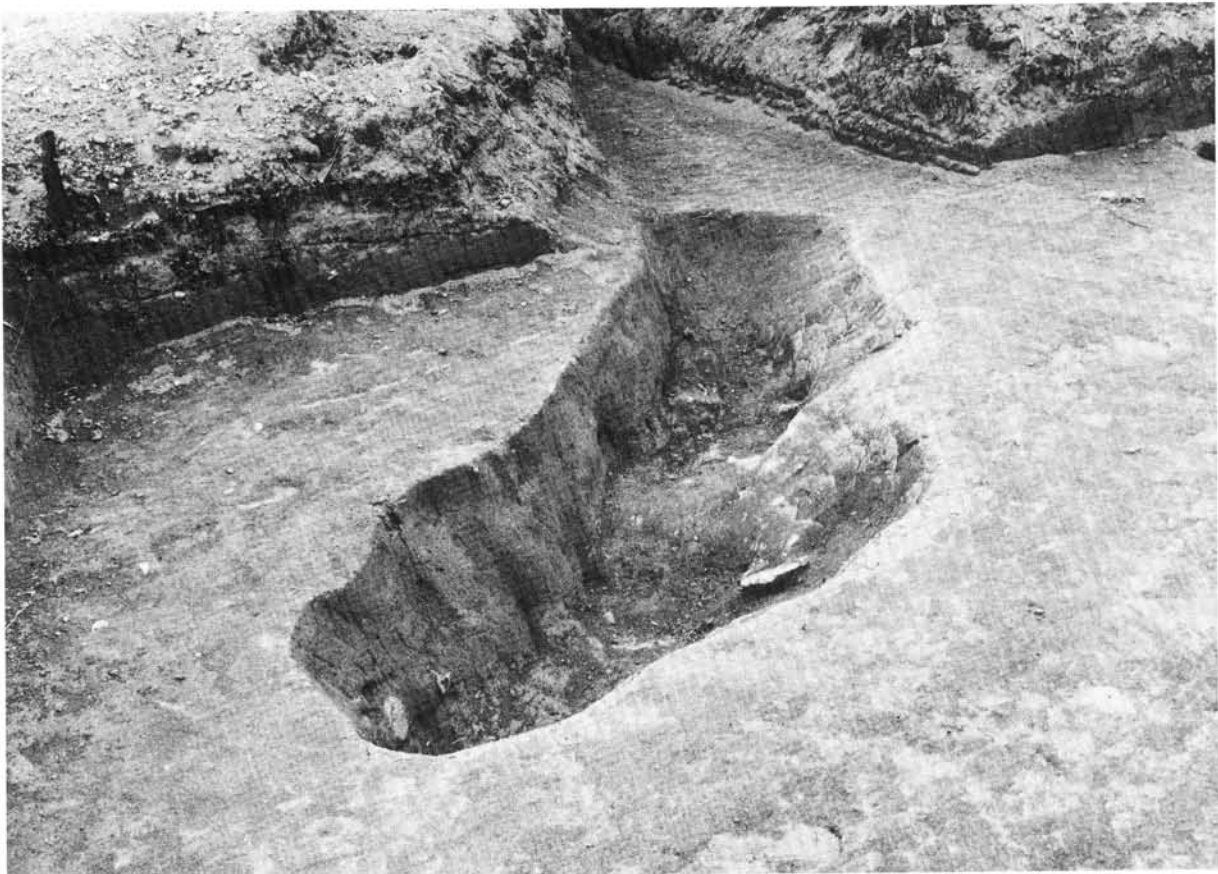
SK 2 (西から)



SK 4 (西から)



SK 5 (南東から)

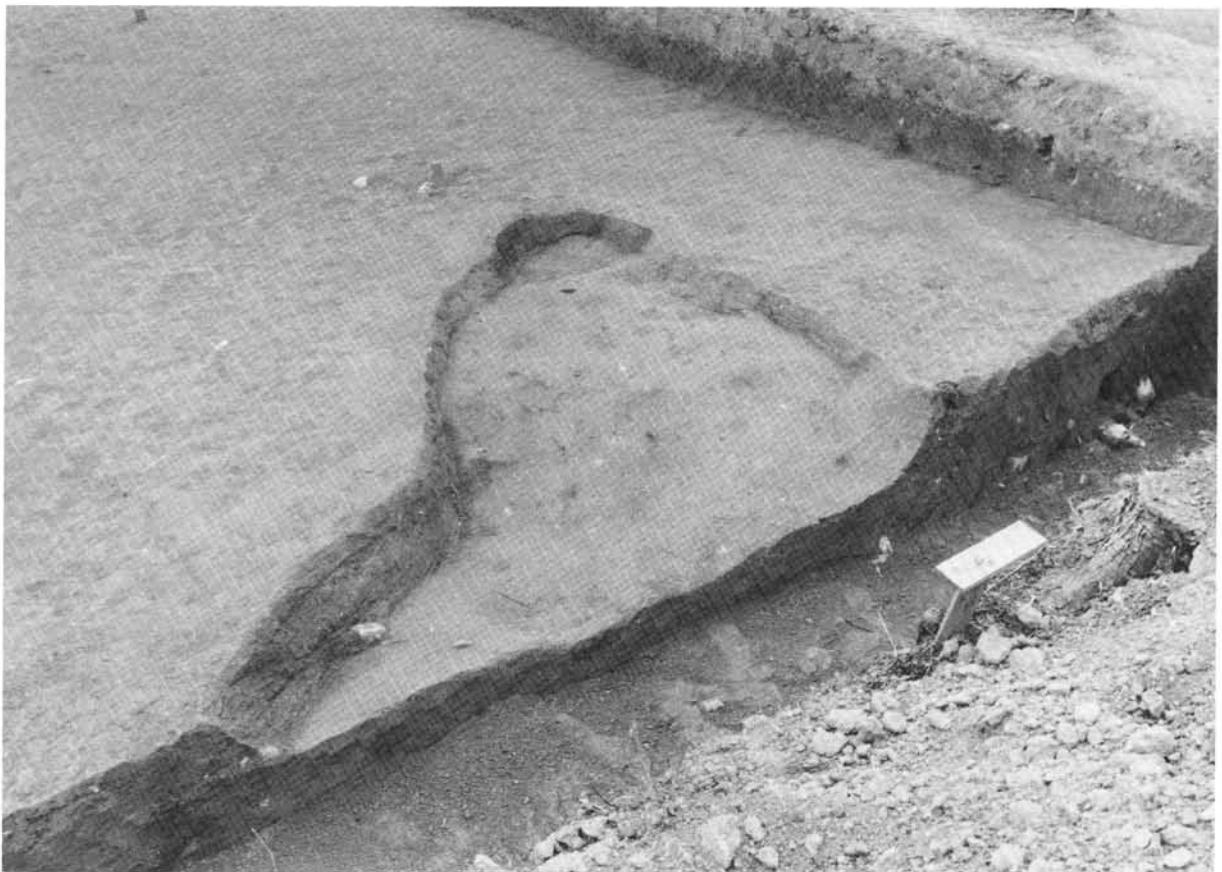


SK 6 (東から)

PL1-8



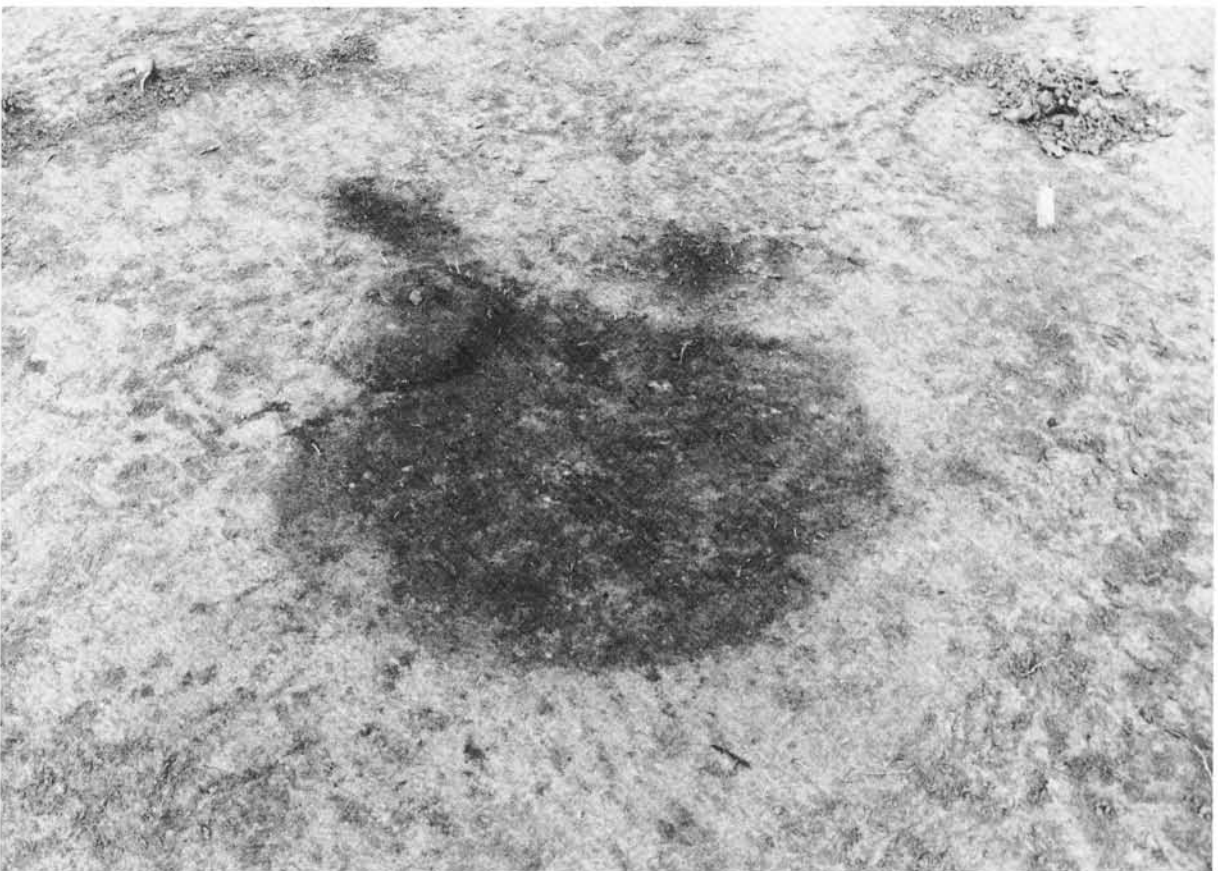
SK7 (東から)



SK8 (東から)

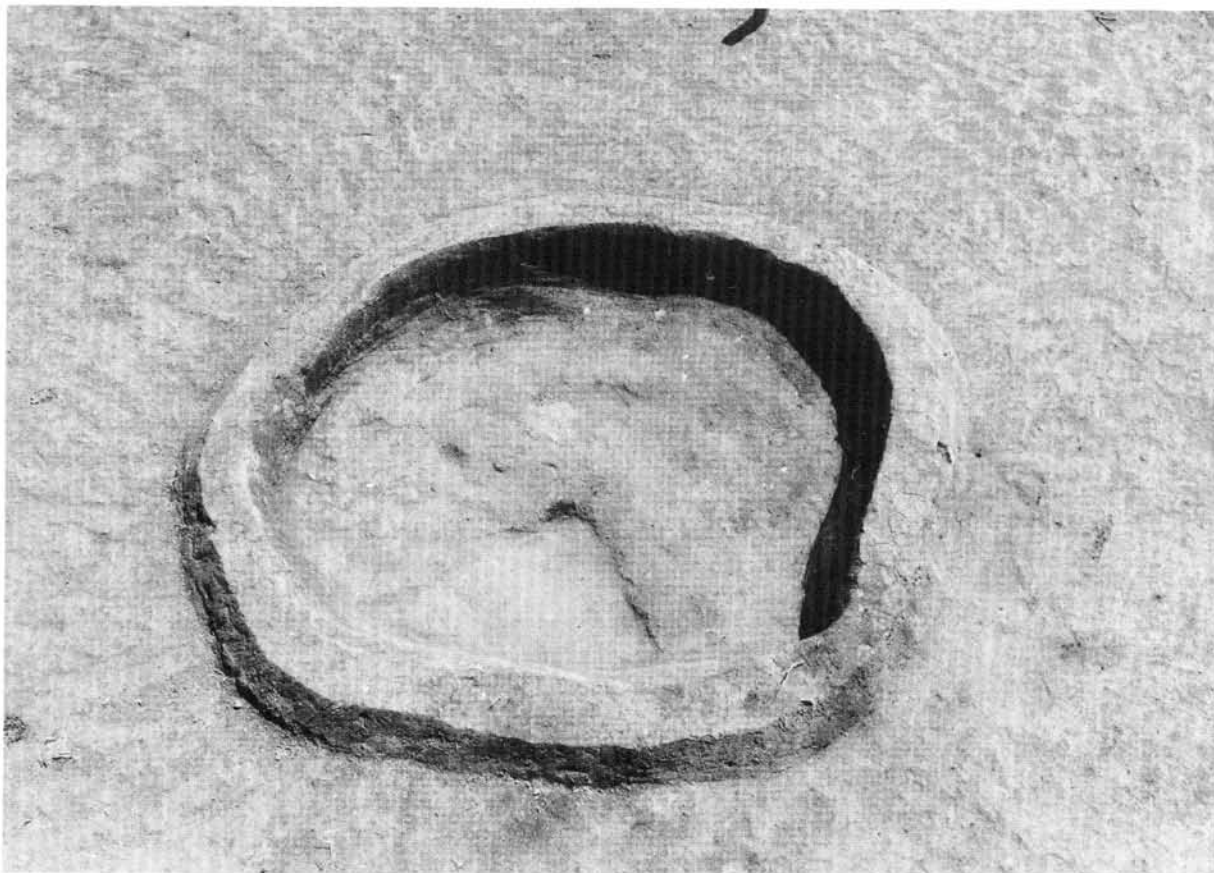


SK9 (東から)

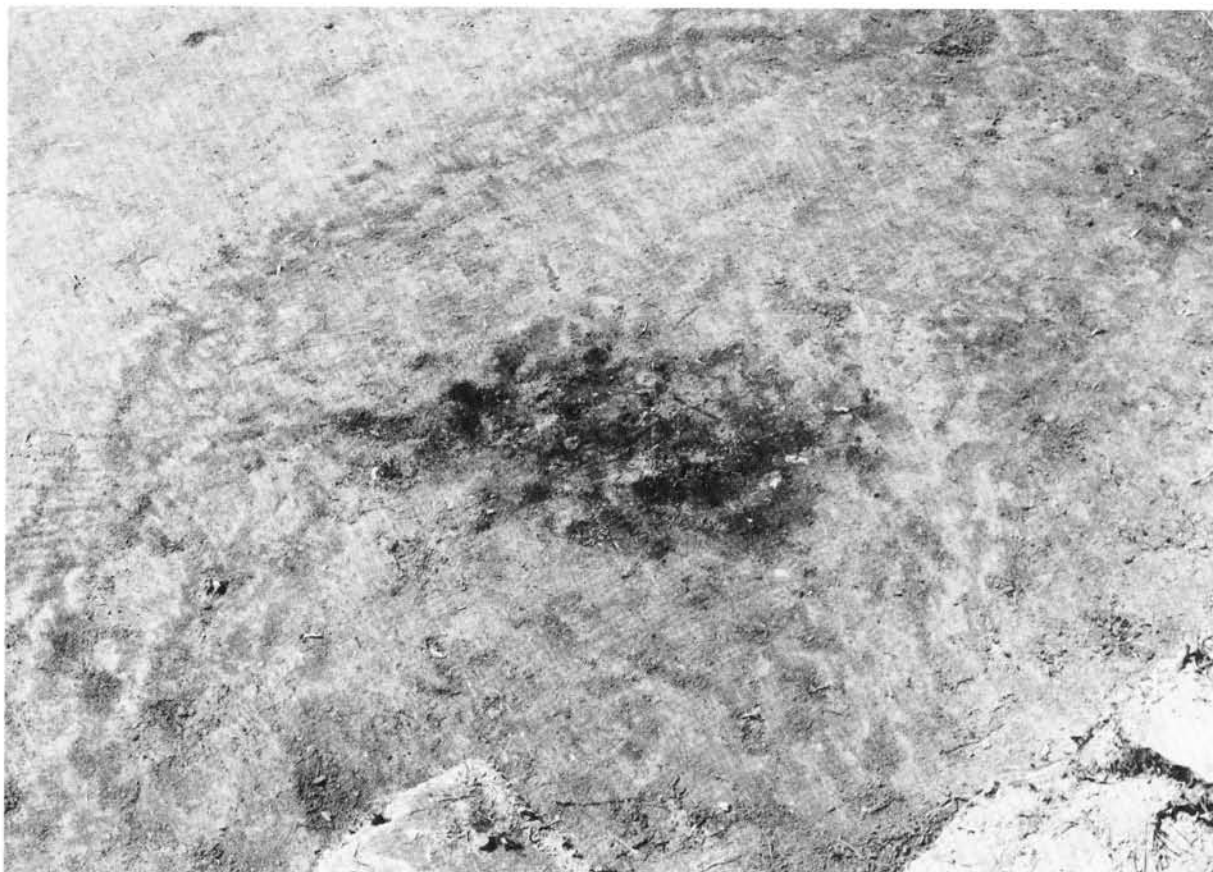


SK10検出状況 (東から)

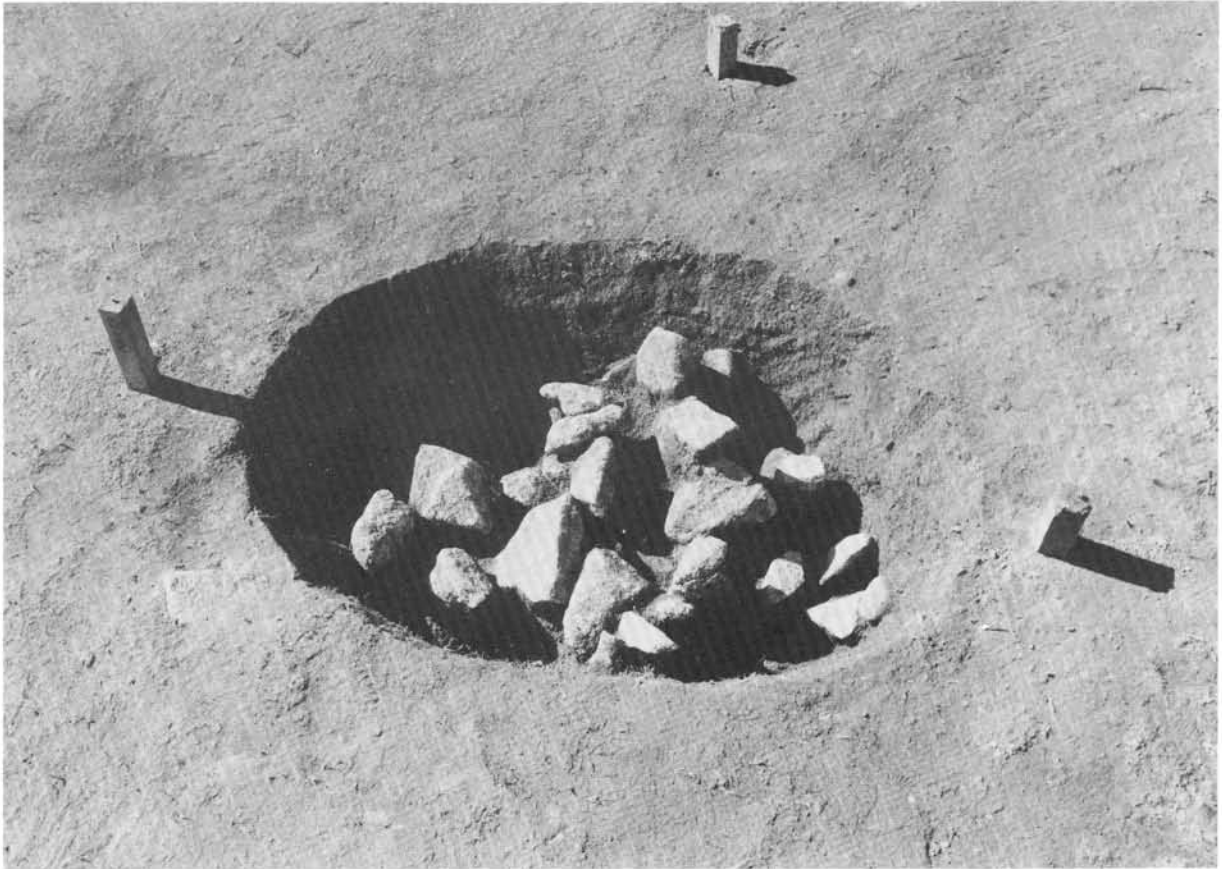
PL 1-10



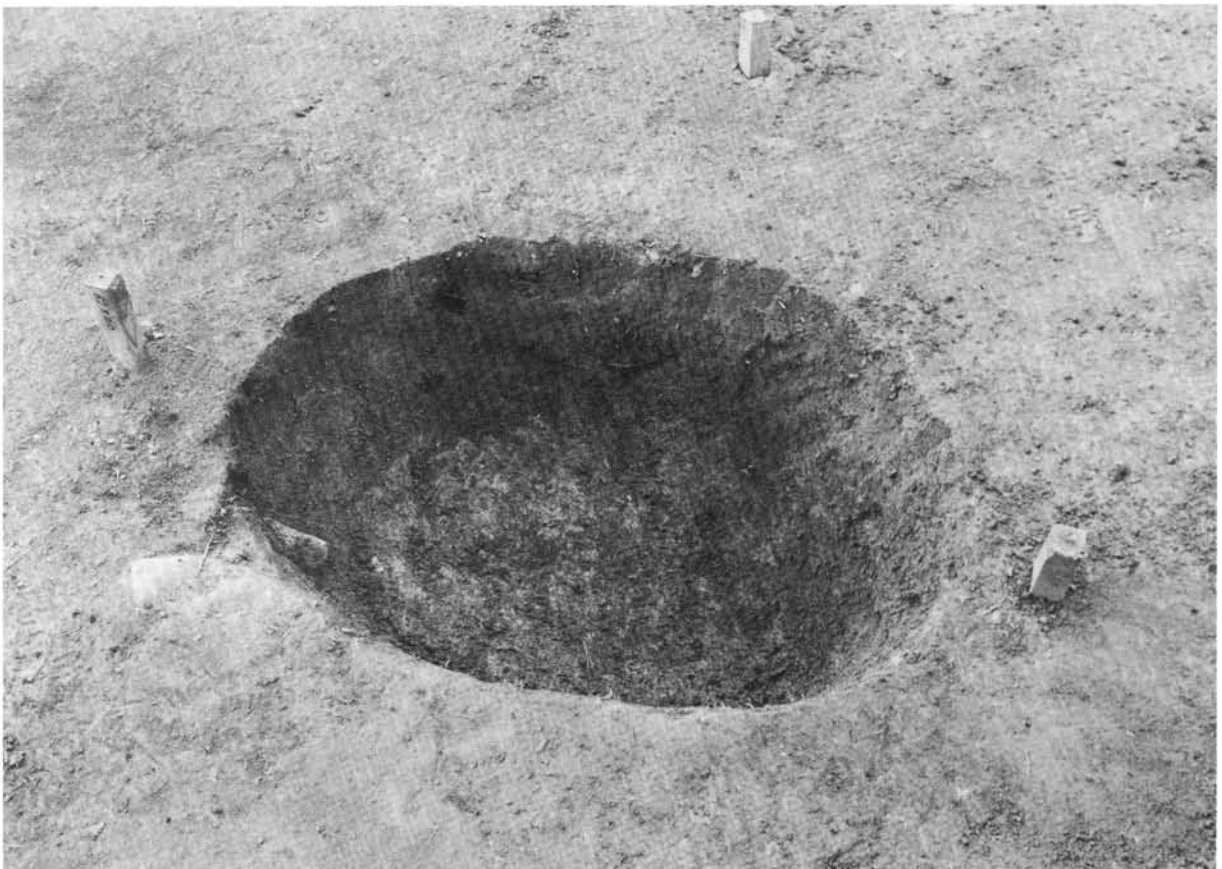
SK10 (西から)



SK11検出状況 (東から)



SK11 (東から)



SK11 (東から)

P L 1-12



SK12、13 (西から)



SK15 (西から)



SK16、SD3 (南から)



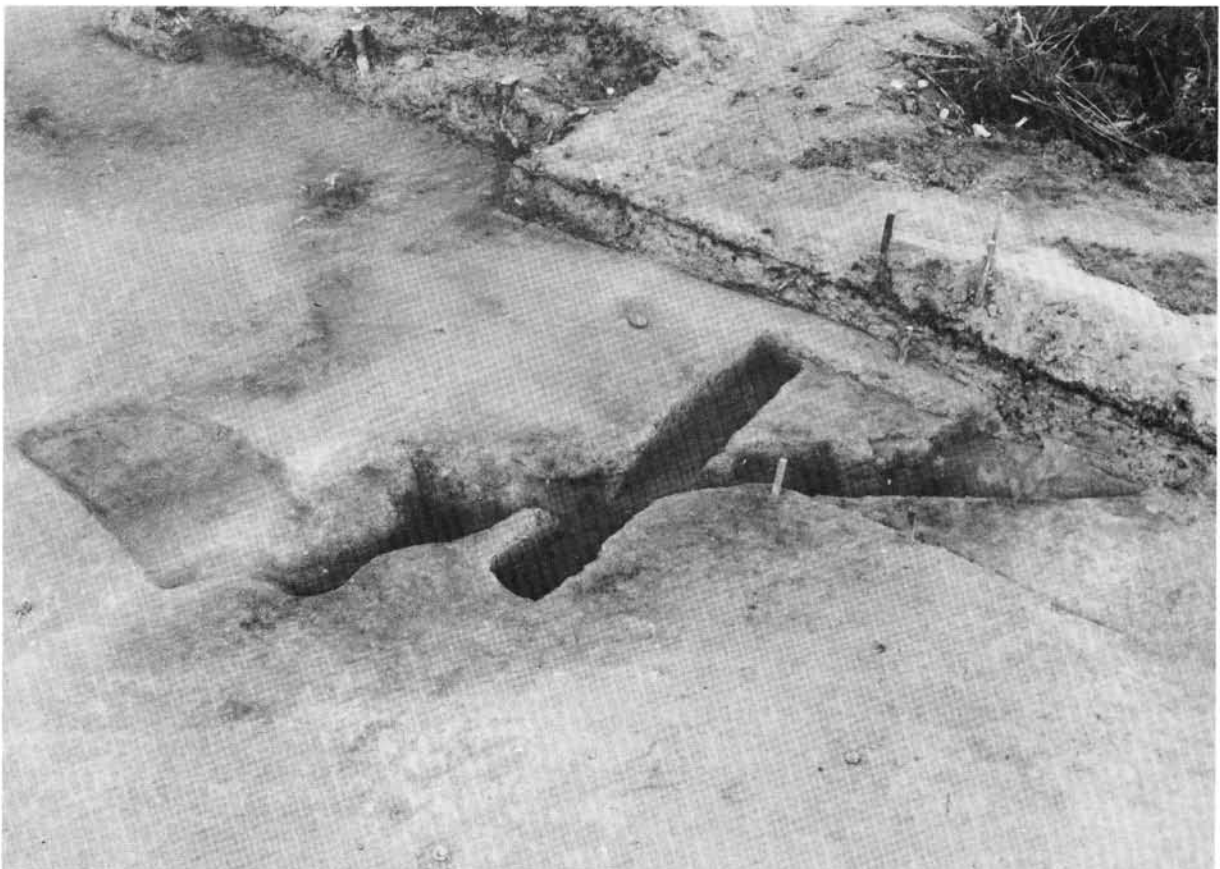
SD 3 北半部 (西から)



SD 3 南半部 (西から)



SD3 調査風景 (南から)



SD17 (南から トレンチは試掘時のもの)



局部磨製石斧出土状況（西から）



異形部分磨製石器出土状況（南から）



SX 1 (南から)

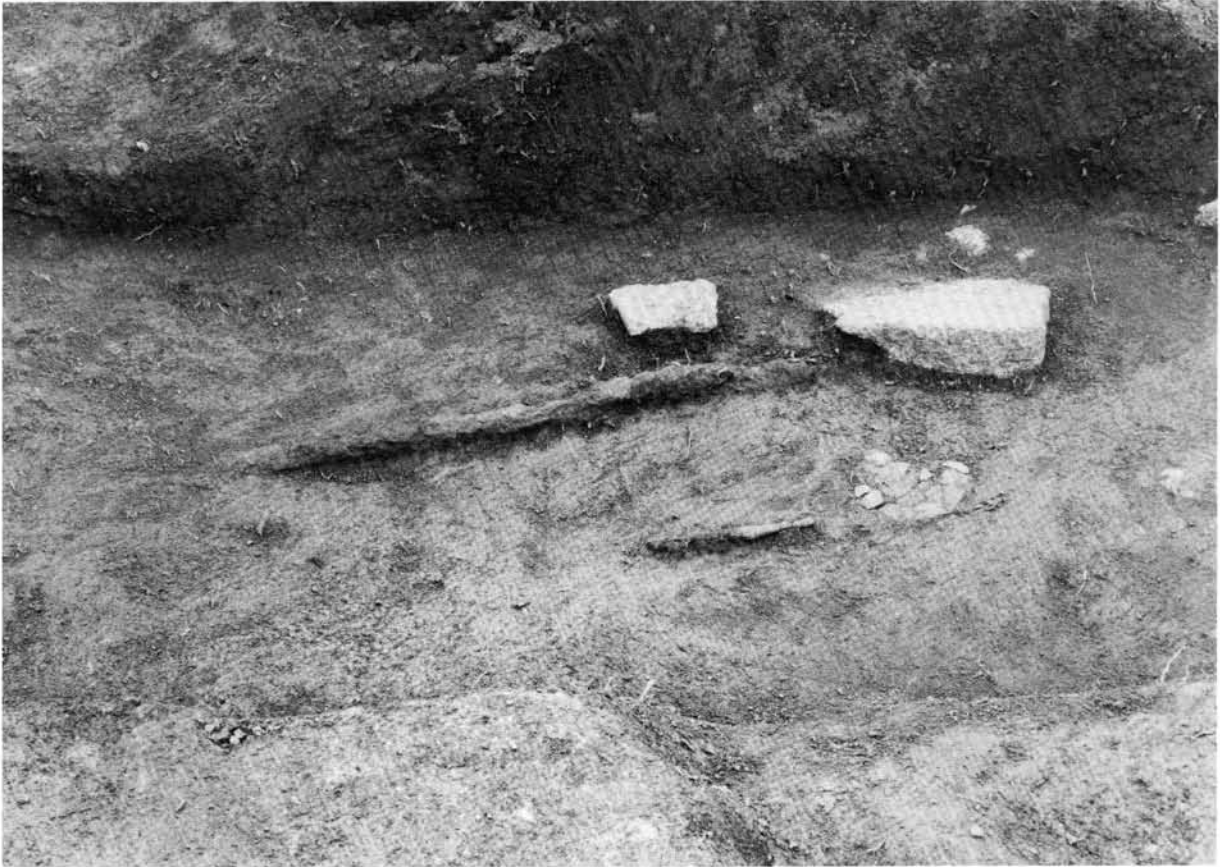


SX 1 遺物出土状況 (東から)

PL1-18



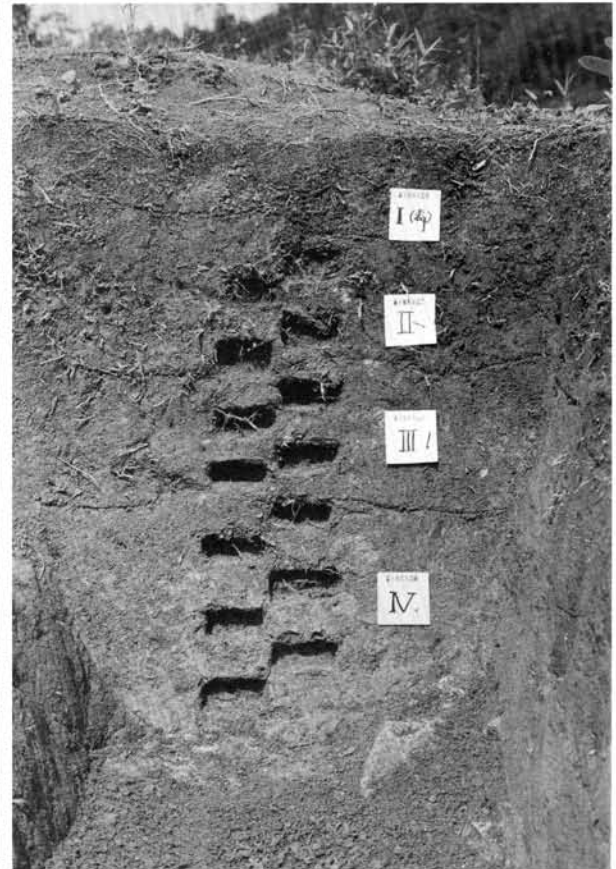
SX14 (南から)



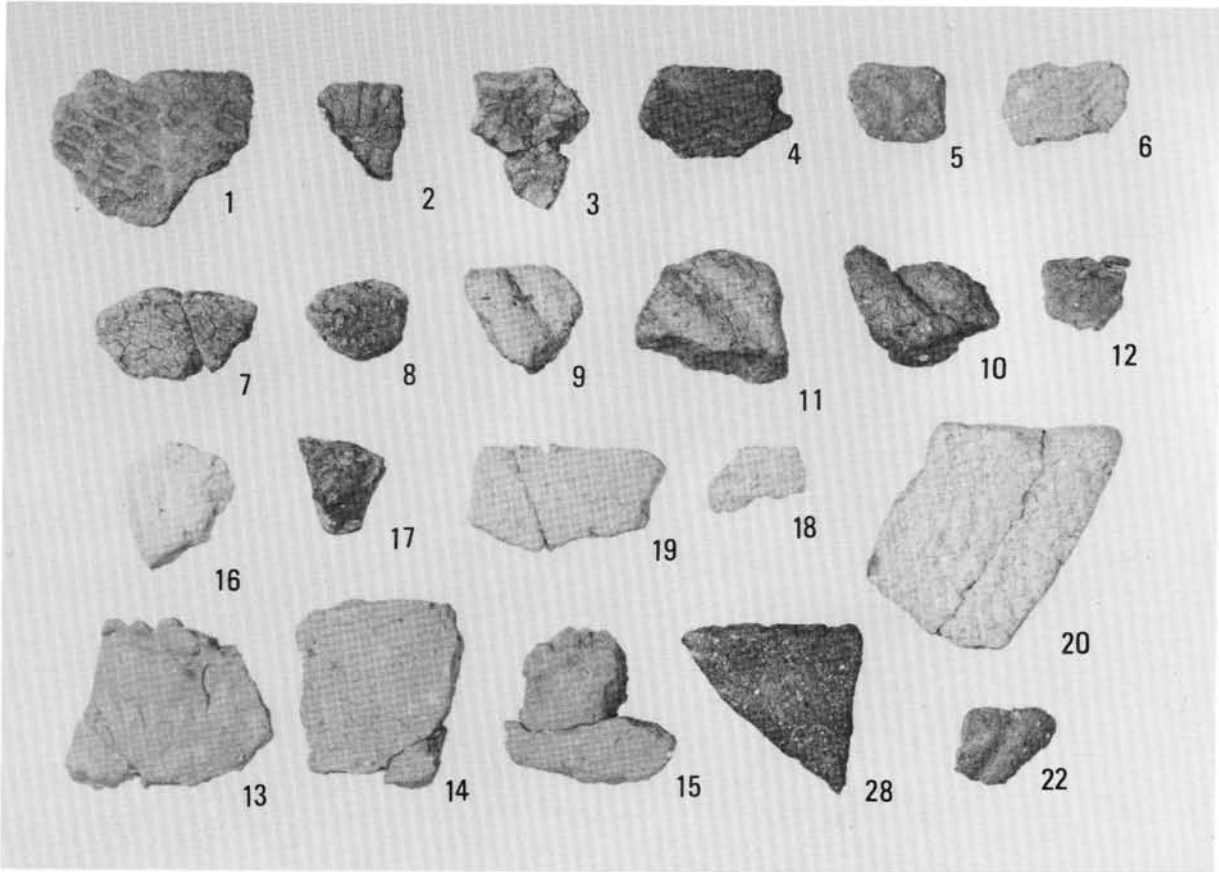
S X14遺物出土状況（東から）



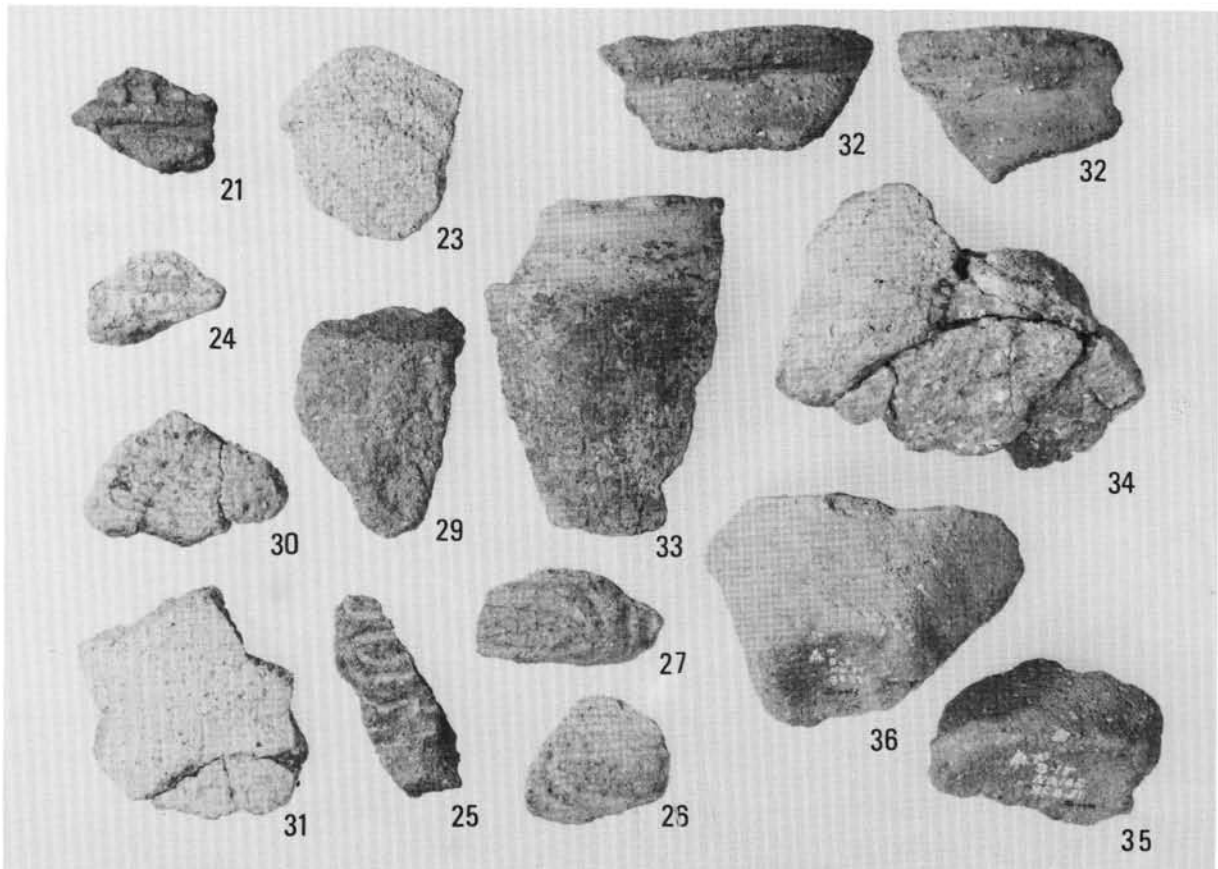
S X14遺物出土状況（北から）



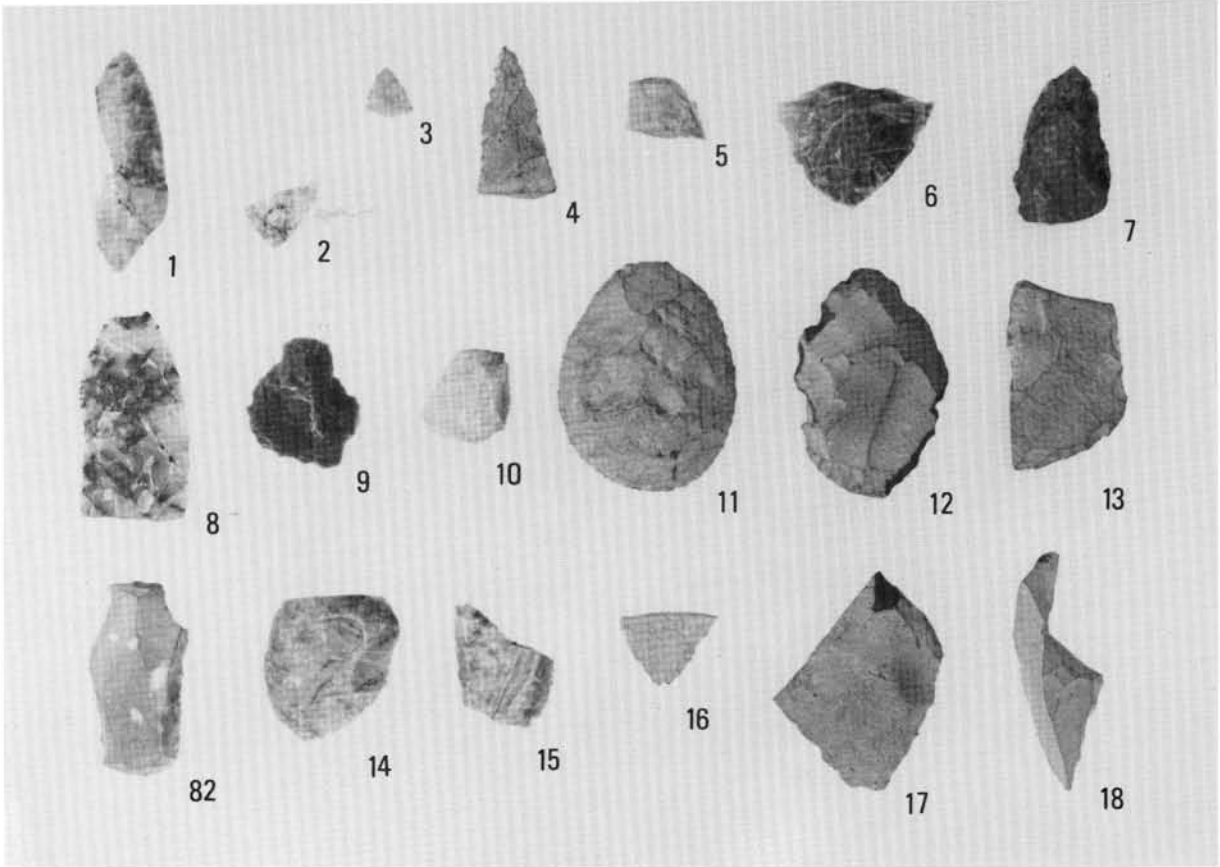
標準層序と土壌サンプル採取（B-O区北東隅）



縄文土器 (1 : 3) 4, 9~12は内面



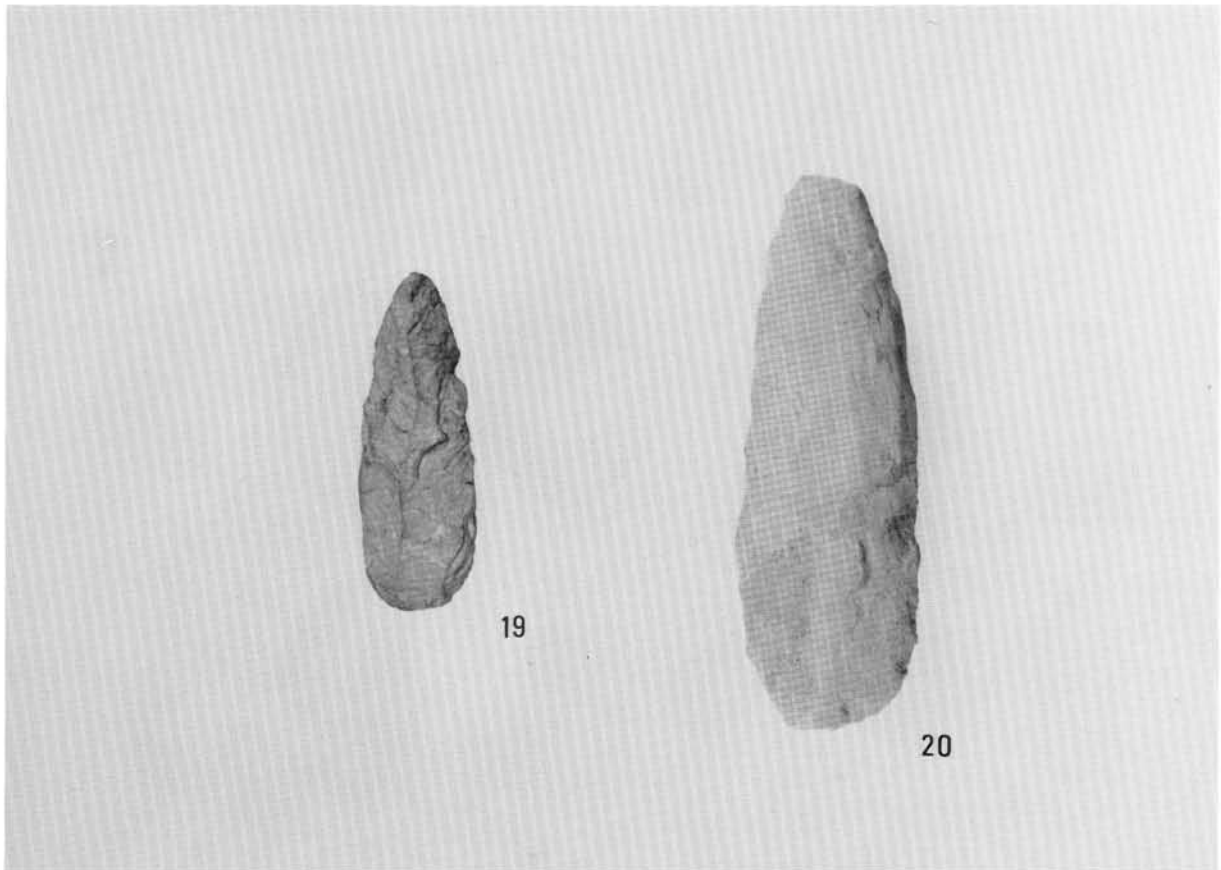
縄文土器 (1 : 3)



尖頭器、搔器、削器〈表面〉 (1 : 2)



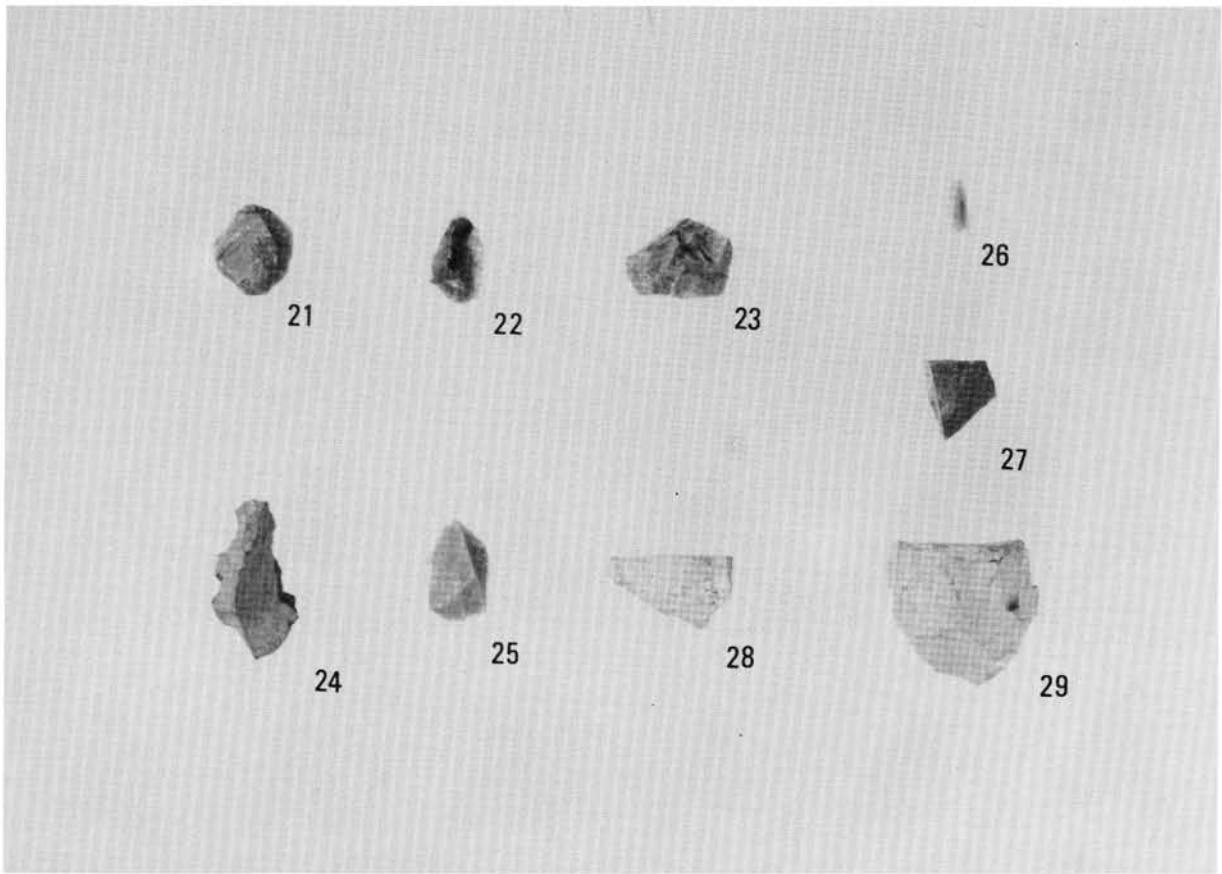
尖頭器、搔器、削器〈裏面〉 (1 : 2)



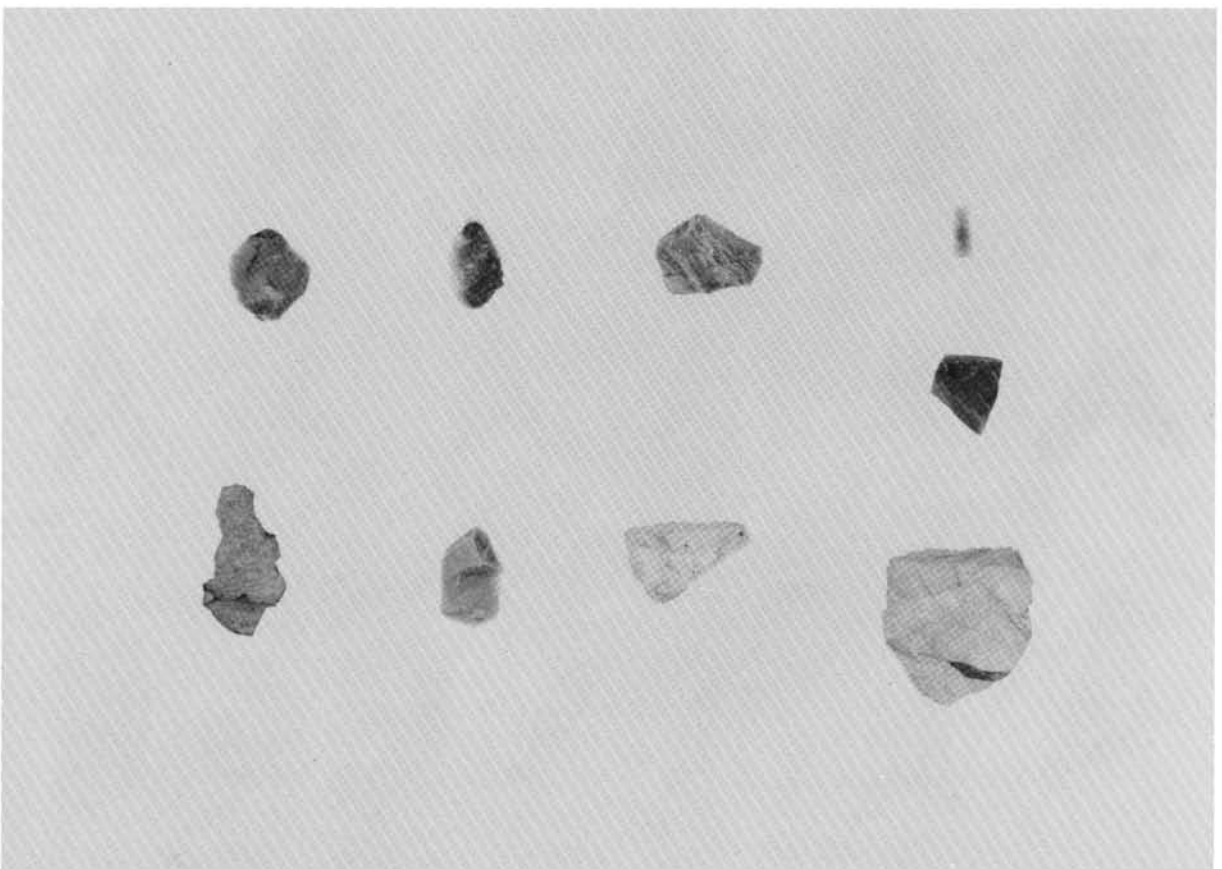
石斧〈表面〉(1:2)



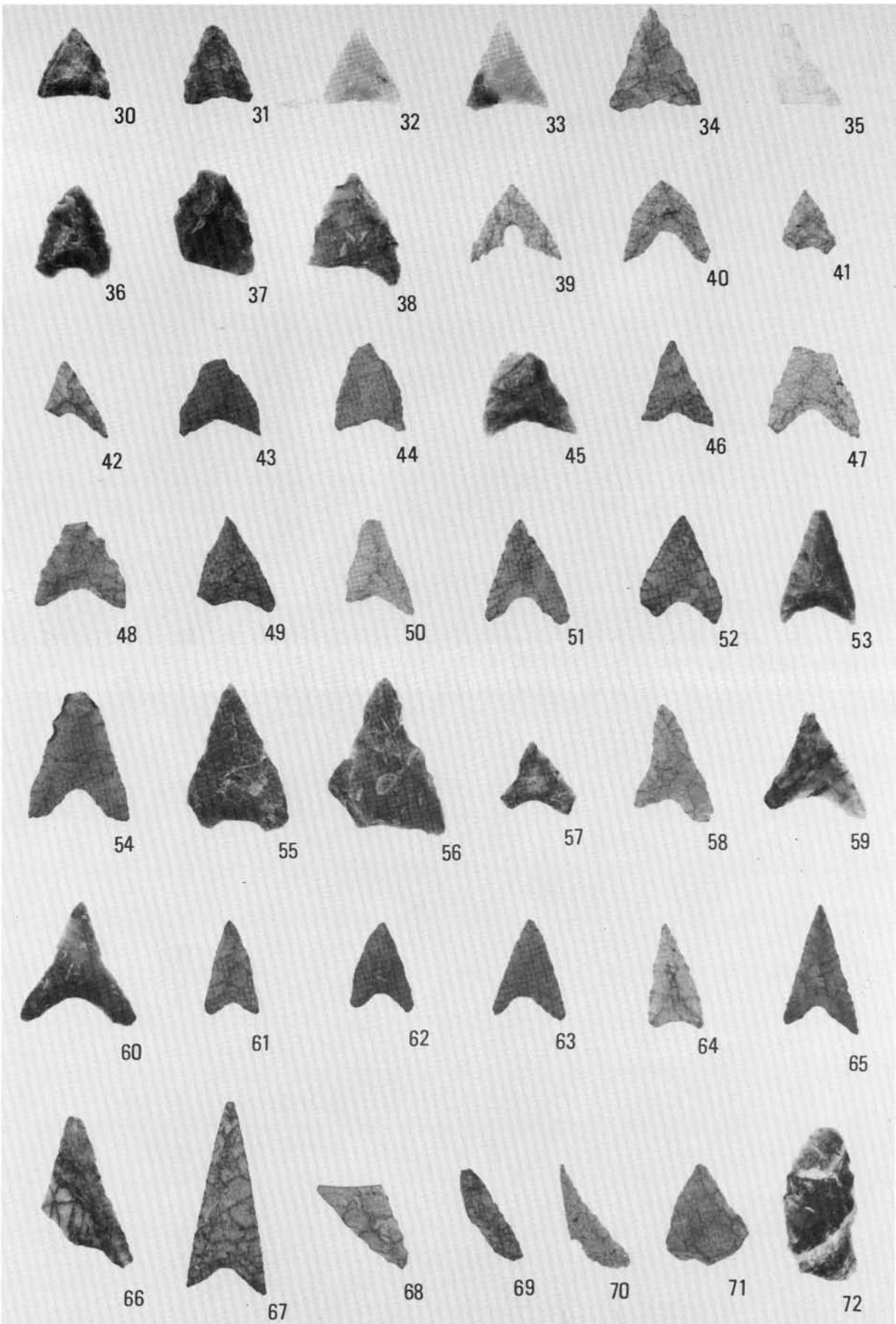
石斧〈裏面〉(1:2)



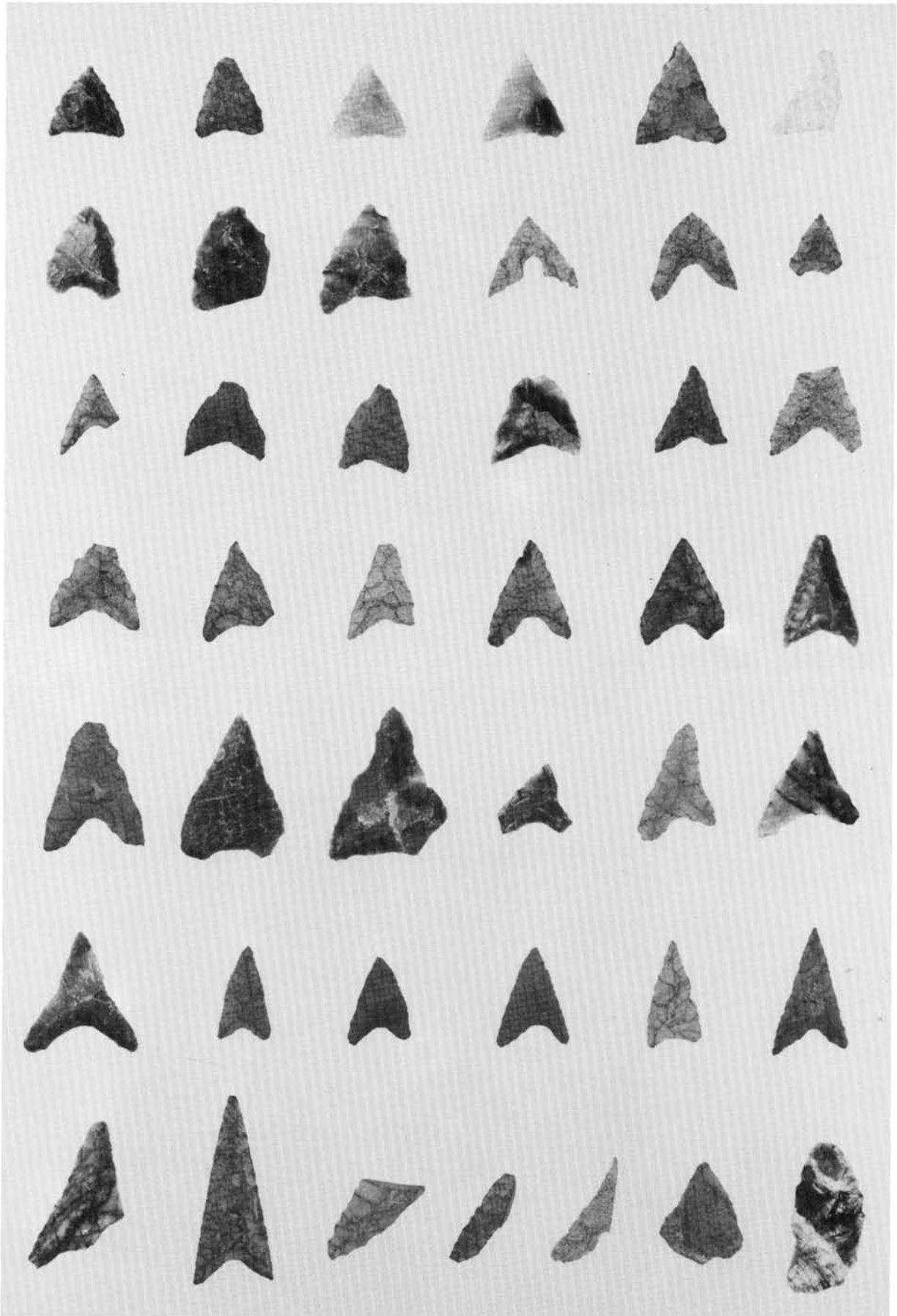
石核ほか〈表面〉 (1 : 2)



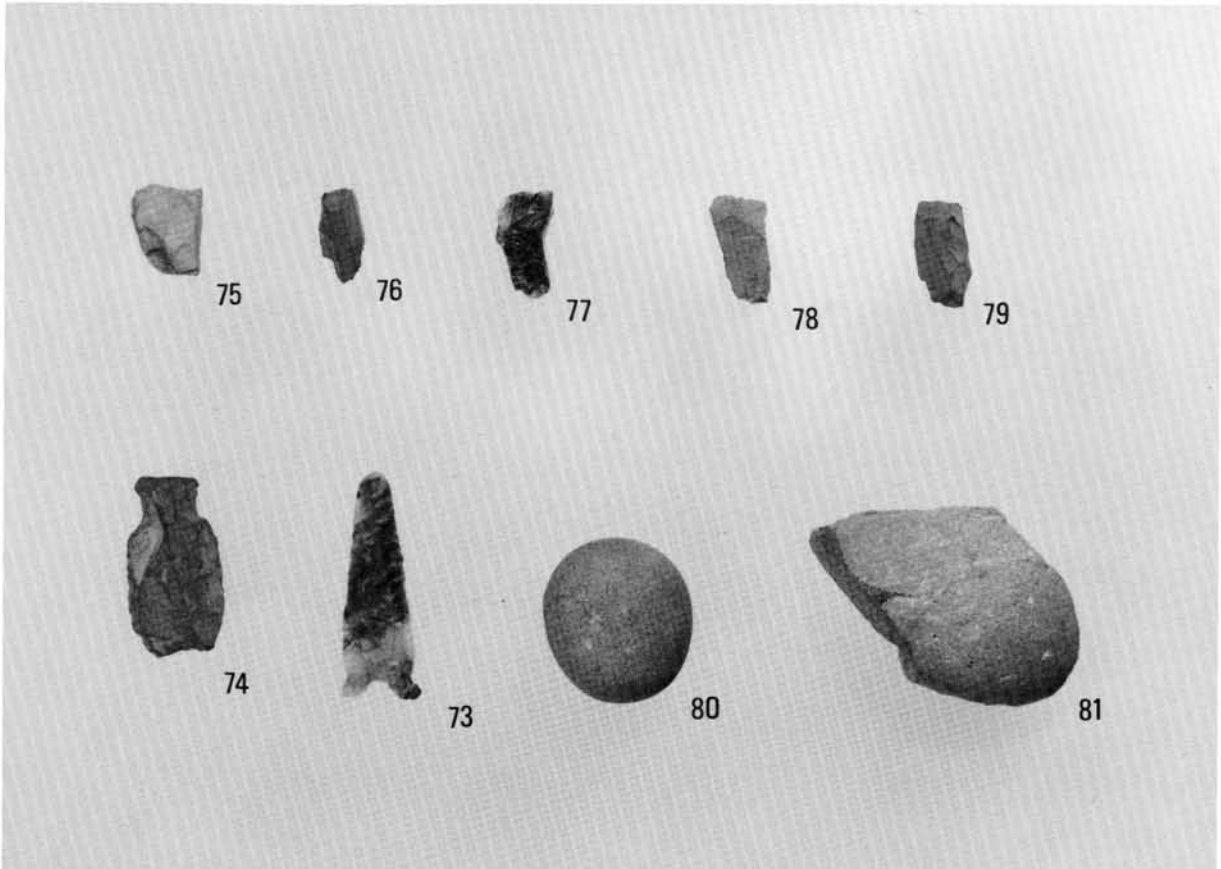
石核ほか〈裏面〉 (1 : 2)



石鏃〈表面〉 (1 : 1)



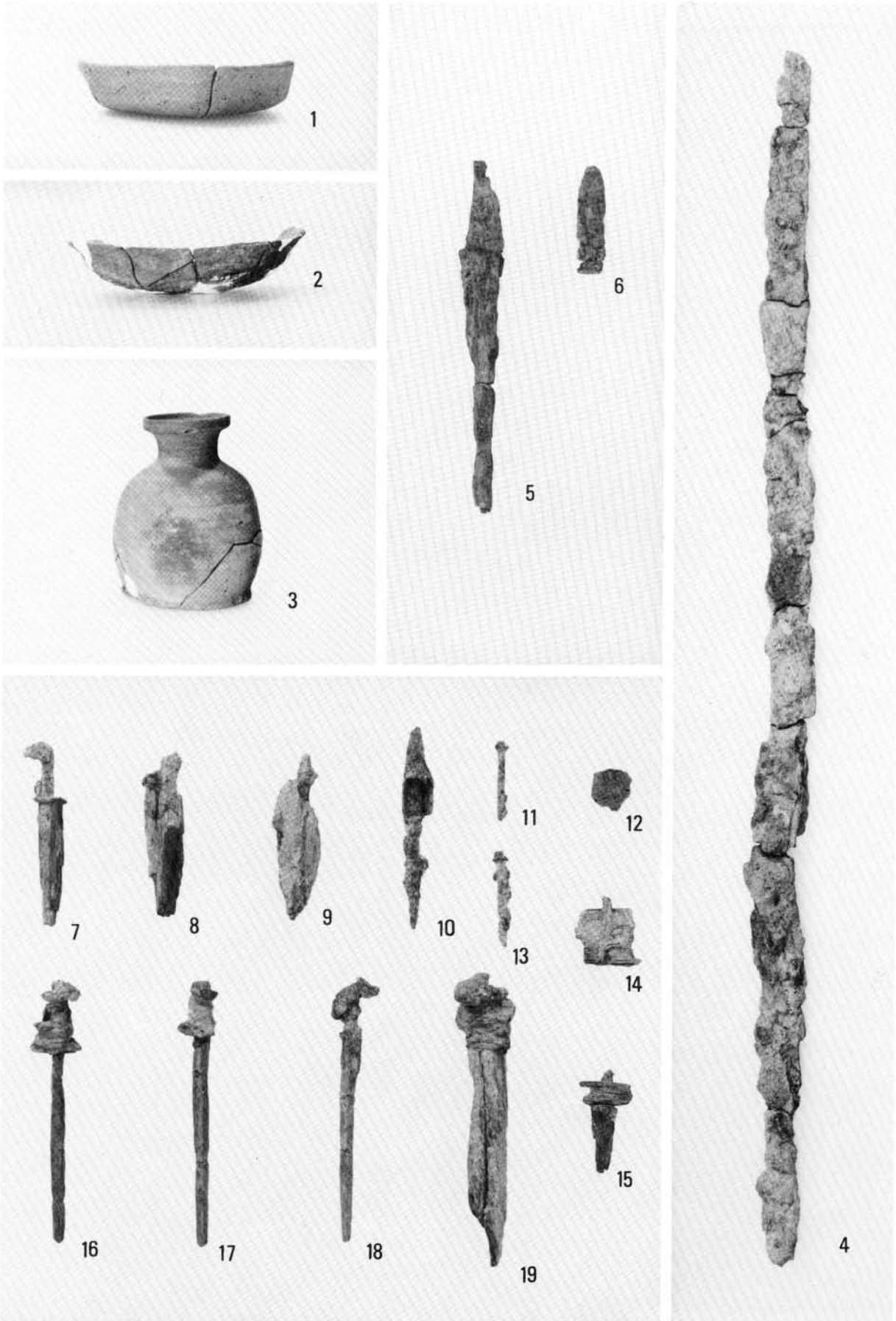
石鏃〈裏面〉(1:1)



楔形石器ほか〈表面〉 (1 : 2)



楔形石器ほか〈裏面〉 (1 : 2)



SX1, SX14出土遺物 (1:2, 1~3は1:3, 4は1:4)

多気郡多気町牧 ^{はなのき}花ノ木 (山崎) 遺跡 (28)

1. はじめに

飯南郡飯南町粥見付近から幾度か大きく曲流した櫛田川は、勢和村から多気町に入るあたりで北へ大きく曲流する。この曲流部に入り込むように、南東方の城山から延びる尾根が次第に高度を減じつつ延びてきている。花ノ木遺跡はこの尾根の先端部、櫛田川の滑走斜面側にあたる低位段丘面上に立地している。

この段丘面は標高約38mで、櫛田川河床面とは約7m前後の比高をもつが、現在は水田として利用さ

れている。行政的には多気郡多気町大字牧字花ノ木に所在する。当初は本遺跡を山崎遺跡と呼称していたが、山崎という字名は今回の調査地の西に隣接する字名であることが判明したため、遺跡名は本来の^①小字名をとり花ノ木遺跡と改称した。

さて、当遺跡の所在する段丘面上には、濃淡こそあれ前面に縄文時代から中・近世に至る土器片や石器等が散布している。当遺跡の範囲も今回の調査部分からさらに東へ広がり、奥ホリ遺跡^②(縄文後期)

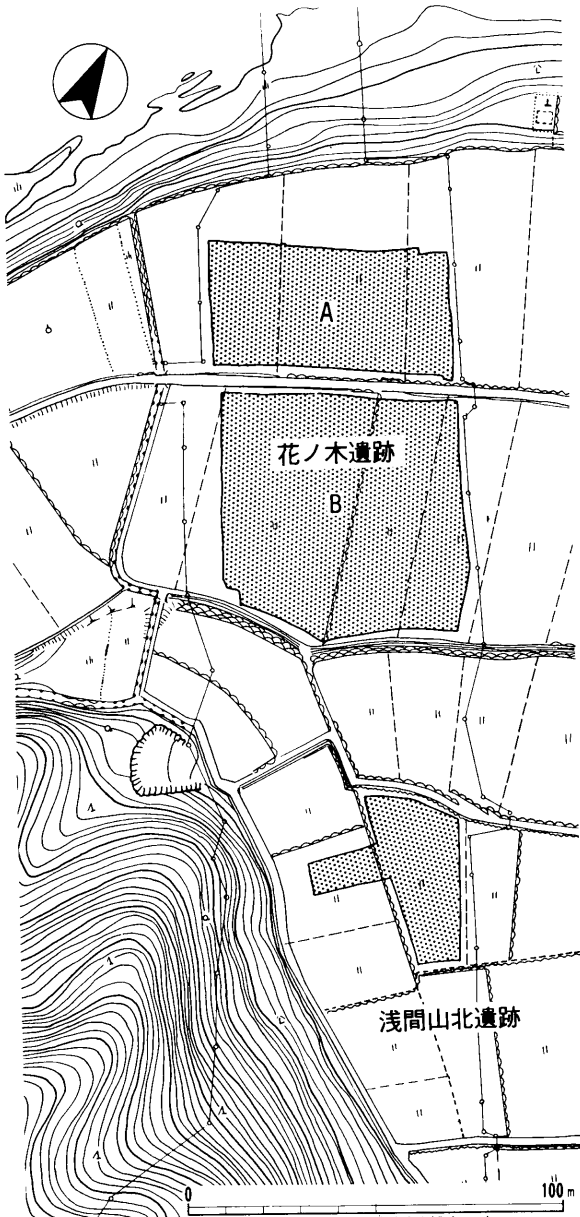


第6-1図 遺跡地形図 (1:5,000)

まで続くものと考えられる。

縄文時代の遺跡としては対岸の中段段丘上に早期押型文土器や石器類の出土した大原堀遺跡^③や、本書に報告した上ノ広遺跡^④、後期前葉の遺物が多く出土した王子広遺跡^⑤がある。右岸では浅間山南遺跡の第一次調査および牧1～3号窯調査時に中期の土器片とサヌカイト製搔器2点が出土している。

弥生時代の遺跡についてみると、櫛田川流域においては下流部に多くが立地するが、上・中流にも前期以降各時期の遺跡が小規模ながら点在する^⑥。しかし縄文時代遺跡の分布密度とは大きな隔りがある。一方古墳についても上流域は空白、中流域もほとんど確認されておらず、下流域に近い玉城丘陵の集中

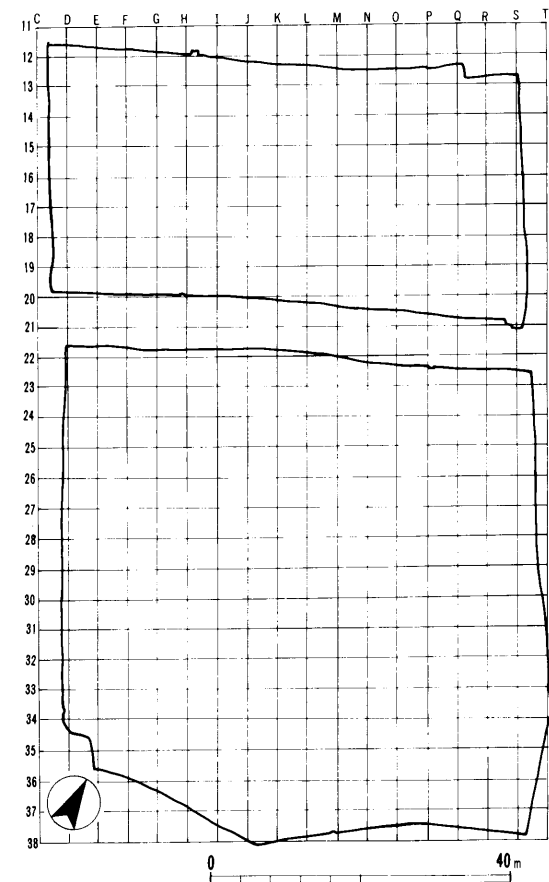


第6-2図 発掘区位置図 (1:2,000)

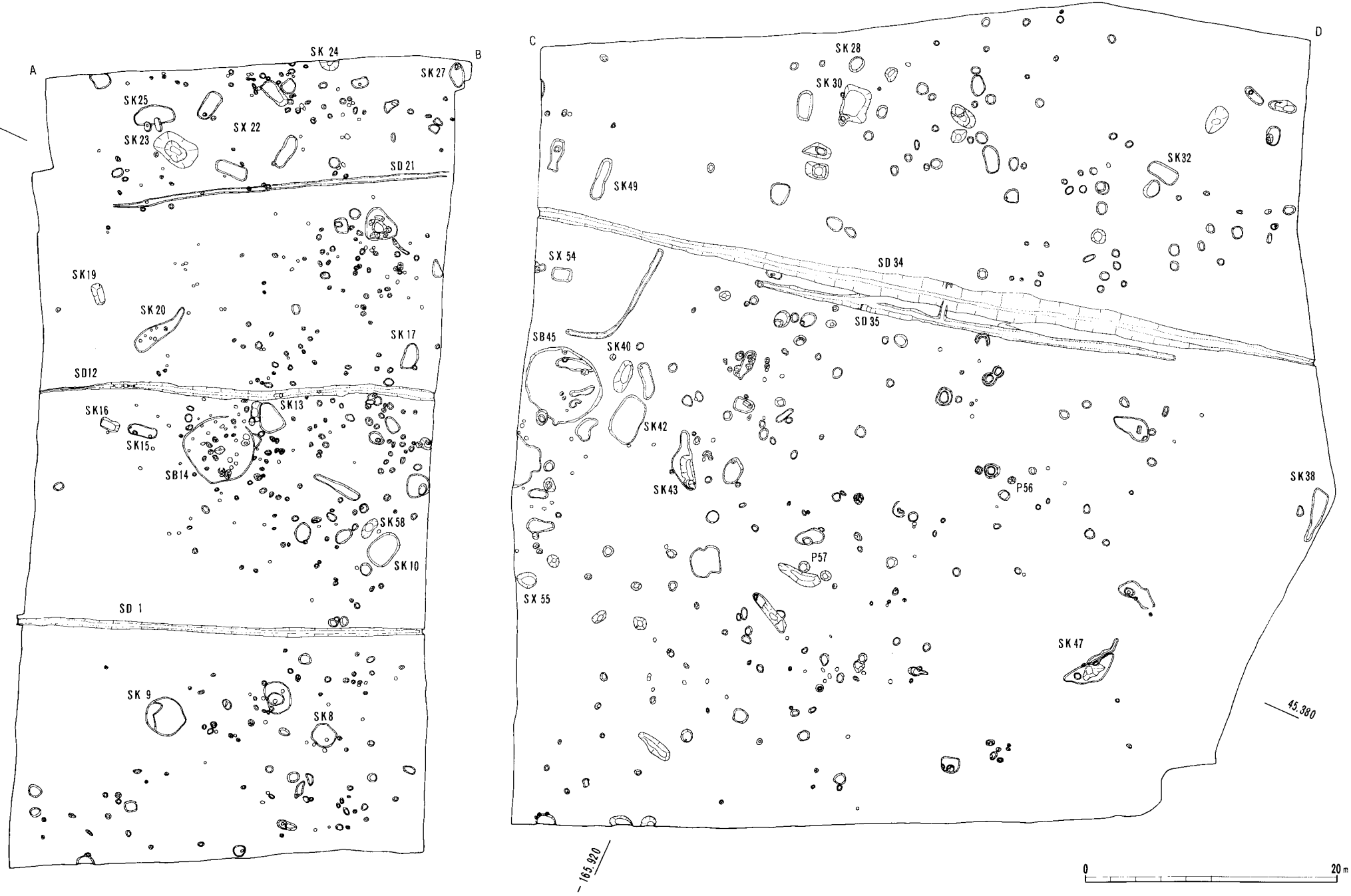
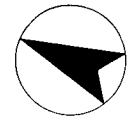
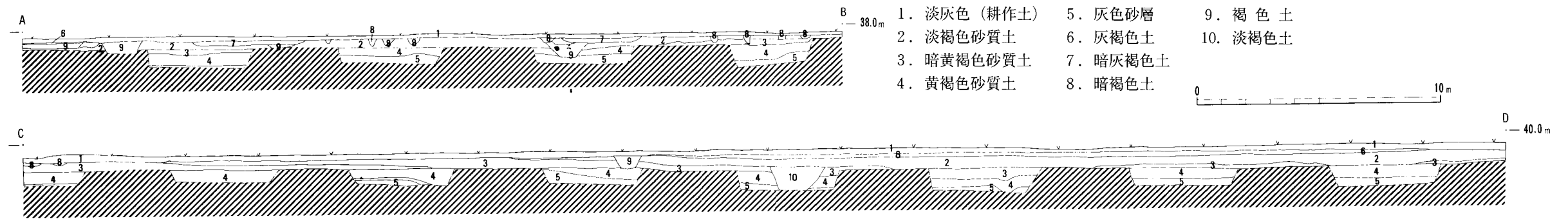
的な分布と極めて対照的である。歴史時代に入ると本書に報告する牧瓦窯跡群があり、対岸の御麻生園廃寺^⑦との関連が深い。中世の遺跡としては、本書に報告の積尊寺遺跡や鍬形中世墓群、牧城跡^⑧等がある。

昭和59 (1984) 年12月に第一次調査を行い、遺構・遺物の所在が確認されたため、約5,800 m^2 について第二次調査を実施した。昭和60 (1985) 年1月28日より開始し、年度末もおしこめた3月26日に現場での作業を終了した。

調査に際しての4mごとの地区割は、原則に従い西から東へアルファベット、北から南へ数字を与え、各グリッドの北西の杭をグリッド名とした。地区割の基準にはセンター杭が耕作等のため移動していたため、西側の幅杭を利用することにし、(A) STA 418+80の西幅杭と(A) STA 419+17の西幅杭を基準線Cとし、(A) STA 418+80の西幅杭をC-10とした。尚、遺構実測には空中写真測量を導入した。



第6-3図 発掘区地区割図 (1:1,000)



第6-4图 遺構平面図 (1:400)、東壁土層断面図 (1:200)

2. 層 序

花ノ木遺跡の層序は、基本的には5層からなる。第1層は淡灰色の耕作土で、一部には灰褐色の床土がみとめられる。この耕作土中には微量の弥生土器片や中世土器片が含まれていた。層厚は約20cm。第2層は淡褐色砂質土で層厚は約30cm、第3層はやや暗黄褐色の砂質土で層厚は約20~30cm、第4層は黄褐色砂質土である。第3層と第4層の境は漸移的である。第5層は灰色砂層の無遺物層である。

発掘区壁面の断面観察によると、遺構は表土直下の第2層上面から切り込んでおり、遺物包含層は削平されている。第2層上面で遺構検出に努めたが、

上層からの浸透による斑紋等のため困難で、第2層上面よりかなり掘り下げた面で検出した。

遺構の埋土には褐色を呈するもの（弥生時代の遺構）と暗褐色を呈するもの（平安時代~中世）とが見られたが、大部分は削平を受けているものと思われる、特に平安時代から中世にかけての遺構もそのためか調査区の一部にしか遺存していなかった。

調査終了後に下層の遺構の有無を確認するため、トレンチを設定し掘り下げてみたが、洪水堆積による粗砂層が広がっており、遺構、遺物とも検出されなかった。

3. 遺構と遺物

調査区の中央付近を東西に走る農道は、多気町津留方面の伊勢本街道から浅間山の尾根裾を通り、対岸の松阪市広瀬町から根木峠を越えて大河内方面へ通じる古道である。この農道によって今回の調査区は南北に二分される。そのため北側の櫛田川寄りをA地区、南側をB地区と呼称した。

B区の南端は比高約3mの段丘崖ぎりぎりまで調査した。調査の結果、縄文時代の土坑、弥生時代中期中葉の竪穴住居跡2棟、方形周溝墓1基、土坑多数を検出したほか、古代末から中世にかけての土坑、土坑墓、溝、ピット等を検出した。

出土遺物は整理箱（54×34×15cm）に約30箱と、調査面積に比べ概して少ない。

出土遺物の大半を弥生時代中期のものが占めるが、縄文時代早期、中期~晩期の土器片も少量ながらある。また歴史時代の遺物としては土師器、製塩土器山茶碗、土錘、フイゴ羽口、刀子、釘等がある。

以下、各遺構について出土遺物とともに記述し、その後包含層出土の遺物について述べる。

1. 縄文時代の遺構と遺物

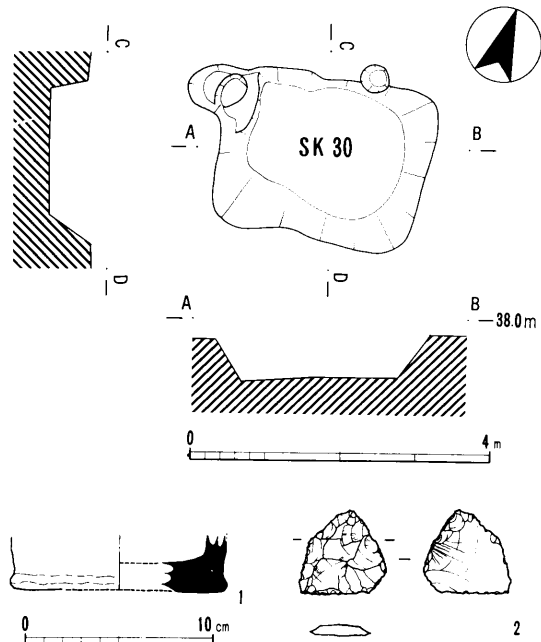
当遺跡では少量の縄文土器片が出土し、そのうちの一部は次に述べる土坑から出土したものもあるが、大部分は弥生時代の遺構に混入していたり、包含層

から出土したものである。しかし、遺物が出土しなかった土坑などの中にも縄文時代に属するものがあると思われる。

A. 土坑

SK30 B区東端中央部付近で検出、東西2.8m、南北2.1mの隅丸長方形を呈し、深さが50cmである。埋土は褐色砂質土である。

埋土中より縄文土器底部片、石鏃が出土した。



第6-5図 SK30実測図（1:100）出土遺物（1:4ただし2は1:2）

[出土遺物]

深鉢（1） 深鉢形土器の底部片である。平底の底部から体部がほぼ垂直に立ち上がる深鉢である。推定底径は11.2cmで、底部全体の約4分の1ほど残存している。底部の円板の外側に体部の粘土を貼りつけ、内部にも接合のため粘土を貼り両側から指でおさえて接合した後ナデ仕上げしている。中期ないしは後期に属するものであろう。

胎土は並ないしやや粗、1～3mmの砂粒を多く含む焼成は良い。淡い明褐色を呈する。

石鏝（2） サヌカイト製で平基無茎の石鏝である。薄い剝片の周縁に粗雑な二次調整を施している。調整は片面で裏面はほとんど調整されていない。平面形は五角形の不定形なものである。

最大長2.2cm、最大幅2.3cm、最大厚0.3cm、重量18.5g。

[包含層出土の遺物]

出土量は微量であるが、土器では早期・中期・後期・晩期のものが出土した。

深鉢（3～29・31・32） いずれも小片で全体の器



第6-6図 包含層出土縄文土器（1：3）

形のわかるものはない。

(3~5)は早期に属するもの。(3)はいわゆるポジティブな楕円押型文土器の体部片である。器壁は14mmほどあり厚く、大型の深鉢と考えられる。楕円の粒は4×5mm程度で、ややくずれたものである。内面はていねいなミガキが施される。

胎土は並、砂粒および繊維を含み焼成は良である。色調は淡褐色を呈する。

(4)は口縁部に近い部分の破片である。外面には粒子の粗大な扁平なポジティブ楕円文が施されるが、粒子は形がくずれたものである。一方、内面には口縁端部から右下りに施された斜行沈線が見られる。この原体は半截竹管と考えられる。

胎土は良だが焼成は悪い。暗褐色を呈する。(3・4)は高山寺式に比定できる。

(5)は竹管もしくは棒状具の押し引きと考えられる太く浅い沈線が施される。沈線は多重の三角形に施され、中心には棒状具の刺突が施される。

胎土は粗くザラザラした感じで特徴的である。焼成は良好で黒褐色を呈する。高山寺式の直後くらいに比定できるもので、鶴ヶ島台式ないし茅山下層式にあたるものであろうか。

(6)は細片でしかも磨滅も激しいため詳細は不明である。器表は条痕調整と思われる。早期末のものであろうか。胎土は並で砂粒、繊維を含む。焼成は不良、暗褐色を呈する。

(7)は口縁部につけられた突起の一部と考えられる。左右が対称形をなさず上部に剝離痕が残ることから細い小突起がついていたと思われる。正面中央上部が最も厚く、左右および下部へ薄くなる。左右の面に1個ずつ刺突文がある。また右上部には幅の広い面があり二条の沈線が施されている。中期のものであろう。

(8)も細片で時期等の判断に苦しむ。器表に細い粘土を貼った微隆帯らしきものと、その間に結節沈線らしきものが見られるが、いずれも確証はない。そのように考えるならば中期前~中葉の勝坂式くらいが考えられよう。なお、結節沈線としたものは縄文とも考えられる。

(9~29)は後期初頭の中津式と考えられる破片である。いずれも小片あるいは細片であるため文様

構成等のわかるものはない。磨消縄文あるいは沈線で帯状に区画された内部に縄文を充填したものが主で、沈線のみのもものが7点ある(19・22~24・26~28)。また縄文のみ施されるものが1点ある(29)縄の撚りはLRが5点(9~11・14・17)、RLが6点(12・13・16・17・20・21)あるが、磨耗の著しいものもあり特定しがたいものもある。

(9)は鉢もしくは浅鉢と考えられる以外は深鉢片と思われる。

胎土は全般的に粗い傾向があるが焼成は良好で、淡黄褐色ないし淡褐色のものが多い。

(31・32)は無文で、いずれも内外面とも横位のミガキが認められる。胎土は並、砂粒を若干含むが焼成は良で、淡褐色を呈する。

浅鉢 (30・33) (30)は浅鉢の体部片と考えられる。最大径部分に縦位のヘラキザミが施され、その上部に一条、下部には沈線が二条確認できる。

胎土は良で細砂、金雲母を含み焼成は良である。暗褐色を呈する。中・後期に該当しそうなものがなく、晩期前半のものであろうか。檀原式に近いかもしれない。

(33)は浅鉢の底部と思われる。底径は4cmで全体に磨耗が著しく、ローリングを受けている。底部は浅い凹状である。

胎土は並、砂粒を多く含む。砂粒には長石、黒雲母が目立つ。

石鉢 (34~38) 石鉢は遺構出土のものも含めると全部で9点出土した。使用石材ではサヌカイト製が6点、チャート製が3点を占める。また平面形態は凹基が6点、平基2点、凸基1点である。これらはすべて縄文時代のもと考えられる。したがって弥生時代の遺構から出土したものについては混入と考えられる。

ここでは包含層より出土した石鉢について述べる。

(34)はA地区中央部南端付近で出土したものである。凹基無茎のサヌカイト製で脚部を一部欠失。最大長2.5cm、現存最大幅1.8cm、最大厚0.5cm、重量は1.16gである。均整のとれた形態をなし、両面からていねいな調整が施されている。

(35)はB地区東半部の出土である。凹基無茎のチャート製。先端部を欠失するが現存最大長1.3cm、

最大幅1.2cm、最大厚0.3cm、重量0.42gと本遺跡出土石鏃の中で最小のものである。良質で半透明な灰色チャートを使用しており、表裏面ともにていねいな調整が施されている。

(36)はB地区東端付近の出土。凹基無茎でサヌカイト製。最大長2.9cm、最大幅1.7cm、最大厚0.3cm、重量1.31gである。

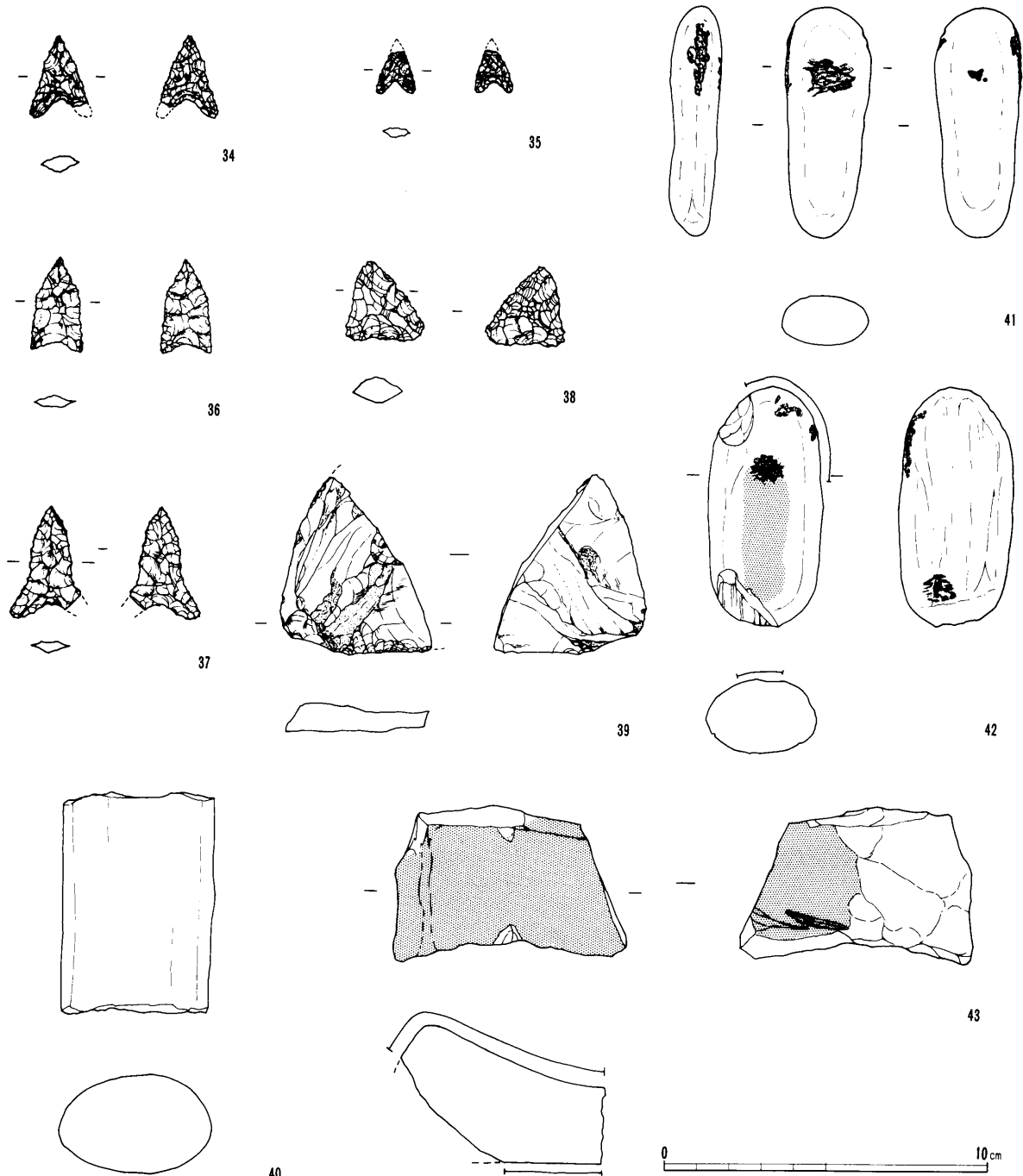
やや肩の張る長五角形を呈するが、薄いサヌカイト剥片を使用し、両面にやや粗いが入念な調整がな

されている。

(37)はB地区南端のSK47付近で出土したものである。凹基無茎のサヌカイト製である。

片脚を一部欠失する。最大長3.4cm、現存最大幅2.2cm、最大厚0.3cm、重量1.7gと薄手ながら本遺跡出土石鏃の中で最大のものである。均整のとれた逆Y字形で、薄い剥片が使用されている。両面ににていねいな調整がなされている。

(38)はA地区北西部で出土したもので、平基無



第6-7図 包含層出土石器(1:2ただし41・42は1:4)

茎のチャート製石鏃である。

最大長2.5cm、最大幅2.5cm、最大厚0.8cm、重量3.8gである。不定形な三角形を呈し、中央部が厚い。褐色の良質なチャートを使用し、両面から入念な調整が施されている。

搔器 (39) A地区西端にて出土したものである。欠損しているため全体の形状は不明であるが、現存最大長4.7cm、最大幅5.4cm最大厚0.9cm、重量21.5gである。

灰色チャートの板状の剝片を使用し、最も鋭い側縁部分に連続的な片面調整を施し、刃部を形成している。

石棒 (40) A地区SK19付近で出土した粗製の石棒である。上下を欠失するが、現存長6.5cm、断面形が4.5cm×3.0cmの楕円形を呈する。重量は179gである。

石材は石英片岩を使用し、全面に敲打痕が残っている。

敲石 (41・42) いずれも河原石を利用したものである。(41)は中世の溝SD1の混入品である。最大長14cm、最大幅5.3cm、最大厚3.1cm、重量337gで、石材は砂岩である。

下半部の幅が上半部よりやや小さくなっており、握り部分と考えられる。上半中央部の表裏両面と、両側面に打痕が残る。

(42)はA地区西端付近の出土。最大長14.6cm、最大幅7.1cm、最大厚4.6cm、重量738gである。

石材はホルンフェルス化していない粘板岩が使われている。表裏両面および上部側面に打痕が残る。また表面では中央部やや上方に残る打痕部分から下の、約3cm×9cmの範囲に磨痕が見られる。

砥石 (43) B地区中央部付近で出土した。欠損しているが現存最大長7.2cm、最大幅4.7cm、最大厚2.9cm、重量140gである。石材は砂岩。

表裏面の全面と側面の一部に磨痕が見られる。また裏面には断面がV字状の溝状の磨痕も見られる。

断面形から推測すると中央部がかなり凹むものと思われる、破損した石皿片を砥石に転用したものかもしれない。

以上に記述したもののほかに縄文時代に属すると

考えられる石製遺物が、弥生時代の遺構から出土している。それらは混入品として各遺構の出土遺物の記述の中で述べることにする。

2. 弥生時代中期の遺構と遺物

当遺跡で検出された遺構と遺物の大半がこの時期のものである。

A. 竪穴住居

S B 14 A地区のほぼ中央部で検出された住居跡である。東西5.7m×南北5.5mの不整形を呈するが、西半は弧状とならずやや直線的で、角張る部分も見られる。掘形は10~20cm程度の深さしか遺存していない。床面は平坦で、貼床は認められなかった。柱穴については4本の主柱穴と思われるピット(P1~P4)があるが確証はない。あるいは7~8本の柱から成るものであるかもしれない。主柱穴と思われるピットは直径25cm~30cmの円形ないしは楕円形の掘形で、深さには10cm(掘り足りないものか?)~55cmとバラツキが見られる。また住居跡内の北半には、壁面近くに約1m間隔で直径20cm程度のピットが並ぶ。壁柱穴とも考えられるが、南半部には見られない。

焼土は住居跡内の2か所で確認されたが、いずれも薄く攪乱されたものであった。むしろ中央部にある50×75cm、深さ約20cmの摺鉢状を呈する小土坑状のピット(P5)が地床炉かもしれない。内部には焼土は見られなかったものの、炭化物を多く含んだ暗褐色土が埋まっていた。

このS B 14の埋土中からは少量の弥生土器が出土した。

[出土遺物]

出土した弥生土器^⑨について、本書では壺、甕について下記のように分類した。

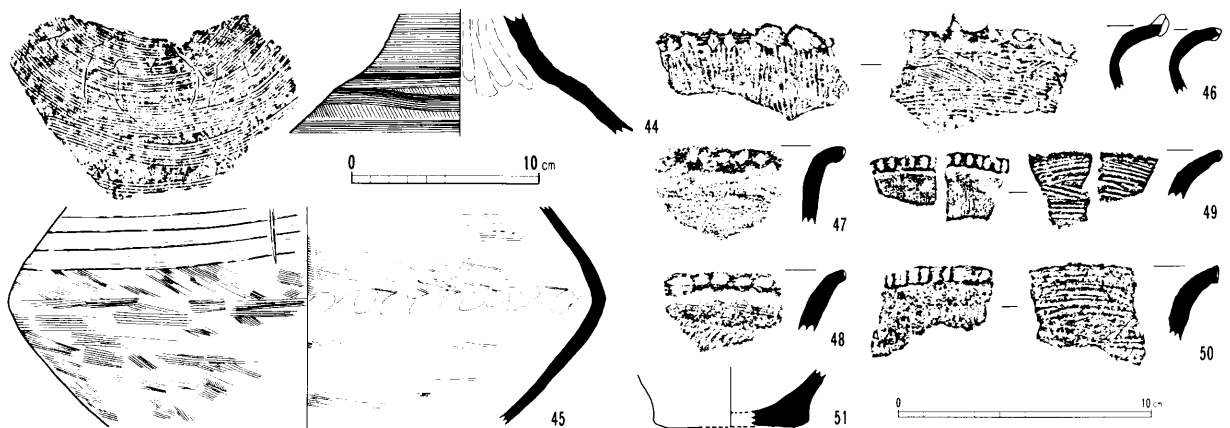
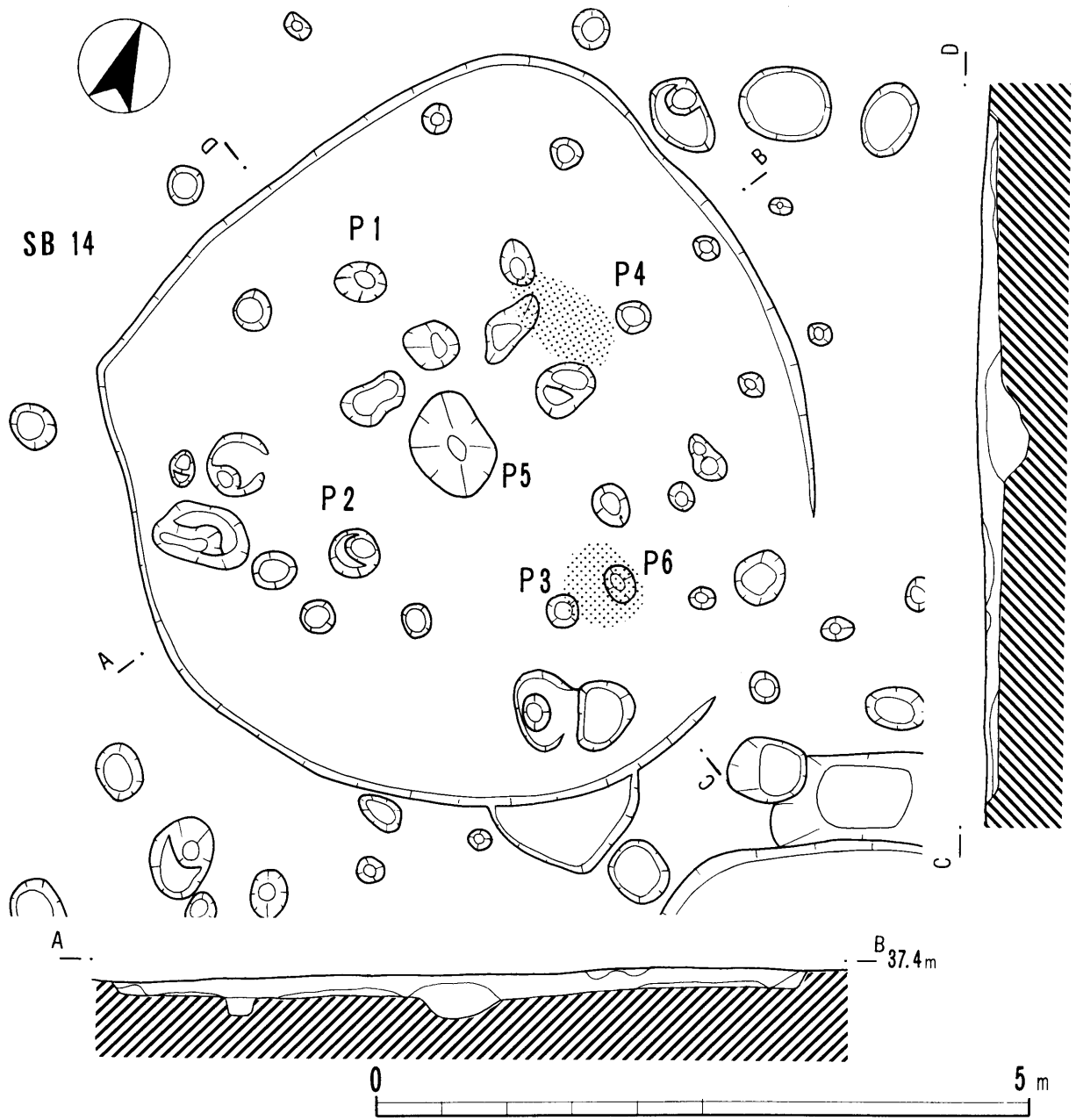
壺については施文具によりⅠ~Ⅲ類に、器形とくに口頸部の特徴によりA(細頸壺)、B(太頸壺)に細分した。ⅠからⅢ類は次のように分けられる。

壺……Ⅰ類(櫛描文を施すもの)

Ⅱ類(縄文を施すもの)

Ⅲ類(条痕文を施すもの)

また甕は体部の調整技法からⅠ類(刷毛目調整)とⅡ類(条痕調整)に分類した。



第6-8図 SB14実測図(1:50) 出土遺物(44・45・51は1:4、他は1:3) 網目は焼土

壺Ⅰ類 (44・45) いずれも口縁部を欠く。(44)はⅠ-A類に属する頸部から肩部の破片である。6本/cmの刷毛目調整後に、原体幅1.2cmで8本の櫛描横線を施す。頸部は複帯構成をとるが、肩部以下は単帯構成になるものかもしれない。横線間には刷毛目調整痕の残る無文帯が見られる。実測図にはあらわれないが拓影では下から2段目の横線が、左端で下方へ曲線を描いているのがわかる。これは流水文となるのかもしれない。

頸部内面には粘土のシボリ痕と指圧痕が残る。器壁は頸部で10mm、体部でも9mmと厚手である。胎土は精良で若干の砂粒を含み、焼成は良で色調は淡灰黄色、内面は灰黒色を呈する。黒斑を有する。

(45)は床面直上で出土した体部破片である。算盤玉状の体部で最大径がやや底部寄りになるものであろう。内外面とも7本/cmの刷毛目で調整した後、外面を粗くヘラミガキしている。このミガキが雑なため、ほとんど刷毛目が残っている。

体部屈曲部より2.5cm上部までは刷毛目が残りに、それ以上には竹を割ったような板状工具を使用し、ヨコナデしたような横線風の文様が見られる。またこの部分には縦に1本沈線が入っている。櫛描文ではないが櫛描の手法に共通するものでありⅠ類に含めた。

推定体部最大径32cmで器壁は6mmである。胎土は良、砂粒を含み焼成は良。色調は淡黄橙色を呈する。**甕Ⅰ類** (46~50) いずれも口縁端部に刻み目をもつものである。(46)は口縁端部上端と下端に刷毛原体による刻みが施され、残存する範囲では2ヶ所が下方(口縁部外面)から強く押圧され、小波状を呈している。刷毛目は原体幅1.4cmで8本を数え、外面は口縁端から縦位に、内面は横位に直線と波状に施される。

口縁内面に波状文をもつ甕は、近江地域を主として山城、伊賀、伊勢北部、尾張に分布し、従来より近江系^①と呼ばれてきたものである。

(47)は短い口縁部が外方へ強く屈曲する。(48~50)はゆるやかに外反するものである。(49・50)は口縁部内面にも刷毛目が見られる。

胎土は(46・48・50)が良で焼成も良く堅緻。(47・49)の胎土は粗、焼成は良いが磨耗が著しい。

色調は(46)がにぶい橙色、(47)が褐色、(48)がにぶい黄橙色、(49)が明褐灰色、(50)が淡褐色である。

底部(51)全体に磨耗が著しく調整などについては不明である。胎土は良で砂粒を多く含む。砂粒は石英および長石粒が多い。焼成は良、色調は橙色を呈する。

S B 45 B地区北端中央部で検出された東西5.5m、南北6.5mの長円形を呈する竪穴住居跡である。S B 14からは南東約25mに位置する。

掘形は20~25cm程度の深さしか残存しておらず、しかも床面が粗砂層中にあるためか、柱穴は確認できなかった。

住居跡内部には炉跡や焼土は認められなかった。埋土中より多量の土器片と石器、石片が微量出土した。

[出土遺物]

壺Ⅰ類 (52~82)

このなかでⅠ-A類に属するのが明確なのは(62)、Ⅰ-B類に属するのが明確なものは(52~54、63~65)で、他は破片のため不明である。

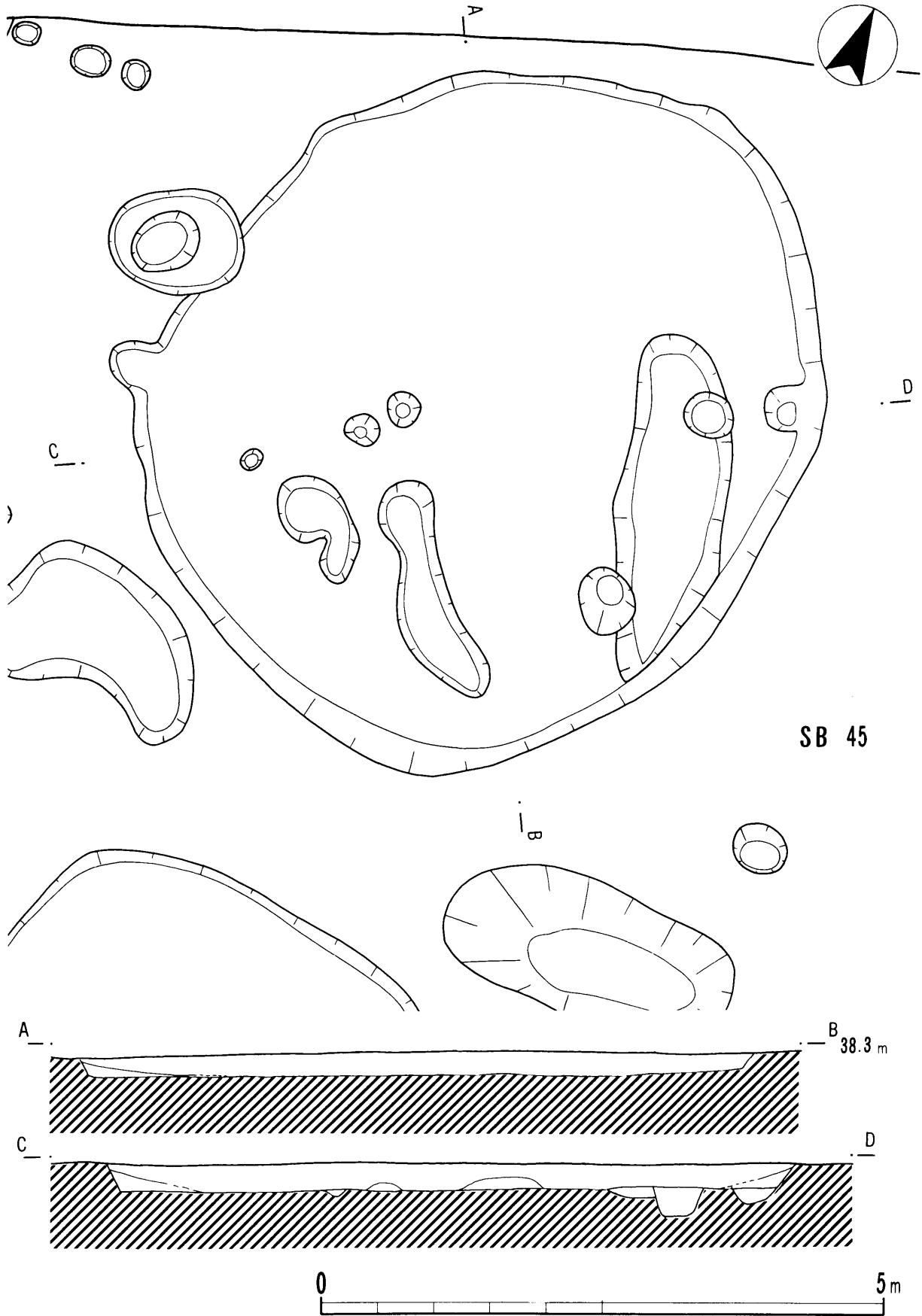
(52~54)は同一個体と考えられる大型太頸壺の破片である。口径は28cm程と考えられ、やや肥厚しながら外方へ開く口縁端面には3本/cmの波状文が描かれ、上下両端には刷毛原体による刻みが施される。口縁内面には粗い刷毛目が残るが、ヘラミガキ調整されている。

(53)は複帯構成の横線が施される頸部、(54)は頸部から肩部にかけての破片である。肩部には刷毛刻みの施された突帯が三条めぐる。

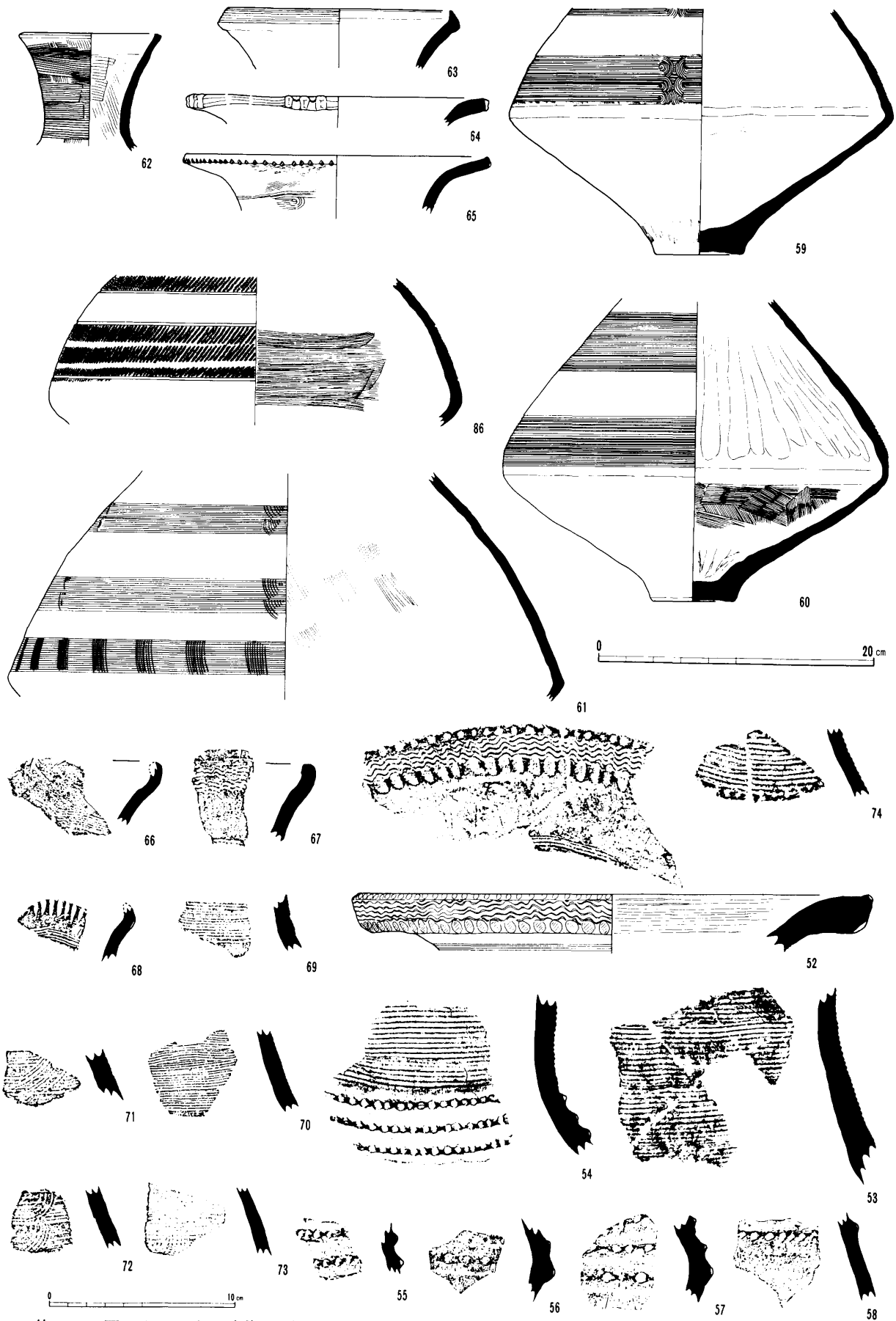
口縁端面の波状文および頸部の横線文の原体は、櫛状工具ではなく貝殻を使用しており、この壺は中期初頭の朝日式に比定される。

胎土は粗く砂粒を含み焼成は良、色調は暗褐色を呈する。

なお、(55~57)もこの壺と同一個体と思われる破片である。(56・57)は体部最大径付近のく字状に屈曲する部分で、少なくとも三条の有刻突帯をもつ。突帯の断面形は頂部が丸味をもつ三角形で、突帯間はヨコナデされる。また内面には8本/cmの刷毛目が残る。



第 6 - 9 图 SB45 实测图 (1 : 50)



第6-10図 SB45出土遺物1 (1:4, ただし52~58・66~74は1:3)

(58) は器壁が薄く別個体とも考えられるが、同類に属すると考えられる。以上 (52~58) は S B 45 出土土器の中で最も古く、混入品と考えられる。

(59~61) はいずれも体部の最大径がやや下半部にある算盤玉状の体部をもつ。

(59) は推定最大径28cmで、最大径部から上半は下半部が直線的であるのに対して、やや内弯気味に外へ膨らむ。

体部上半の文様は、原体幅1.1cmで8本の櫛状工具を使用し、三帯で構成する横線を施した後に擬似流水文を施している。この流水文は残存する約4分の1の破片から推定すると、全周で5ヶ所以内に施されていたものと考えられる。この流水文帯は3.7cmほどの無文帯において上部にも見られ2段の文様帯を構成する。なお、文様帯と無文帯の境に沈線は施されていない。

無文帯および最大径部より下は底部近くまでヘラミガキが施され、器面調整時の縦位の刷毛目をほとんど消し去っている。底部付近に残る刷毛目は9本/cmと細かなものであるが、内面にはやや粗い刷毛目の痕跡がのこっている。またく字状に屈曲する部分には、粘土の接合痕や指頭痕が残る。

底径は6.2cm、やや上げ底気味のため外周付近が使用のため磨耗している。胎土は良で3~4mm大の細礫を含み、焼成は良である。色調は褐灰ないし暗褐灰色を呈する。

(60) は最大径28cm、底部6.0cmで器形とともに(59) とよく似ている。

体部上半の文様は、複帯構成の櫛描横線文帯と無文帯から成るものである。全体の3分の1ほど残る体部には(59) のような流水文は見られない。¹

(59) と同様に、2段に配される文様帯間が無文帯で、下半部はとともにていねいなヘラミガキが施されている。

内面は最大径部より上半には指頭圧痕が、下半には原体幅が2.8cmで24~25本を数える細かな刷毛目調整が施されている。

底部も(59) と同様に、やや上げ底気味である。胎土は並、焼成は良、色調は淡い赤灰色を呈し、体部外面に一部付煤が見られる。

(61) は大型壺の体部上半の比較的大きな破片で

ある。(76) も同一個体であるが磨耗が著しく、遺存状態は悪い。

体部は算盤玉状であるが、上半はやや外方へ張るものである。最大径は40cm程度と考えられる、体部には2帯構成の櫛描横線文帯が三段に配置される。そのうち上の二帯は同じ原体による擬似流水文が、下の二帯には比較的間隔を密に縦直線もしくはゆるやかな弧線が施される。原体は幅1.5cmで9本である。

無文帯は磨耗のため不詳であるが、ヘラミガキと思われる。また内面には若干の刷毛目が残る。

胎土は良いが砂粒をやや多く含む。焼成は良、色調はにぶい橙色ないし黄褐色で、外面に煤が付着する。

(62) は細頸壺である。口縁部から頸部にかけて4分の3ほど残存している。頸部からゆるやかに外反しながら上方に開き、口縁端部はやや外側を向き面取りされている。

口径は10.5cmで、外面は縦位の刷毛目を施したのち、原体幅1.1cmで10本を数える櫛状工具による複帯構成の横線文が施されるが、施文は雑である。

口縁部内外面はヨコナデ、頸部内面に刷毛目がわずかに残る。

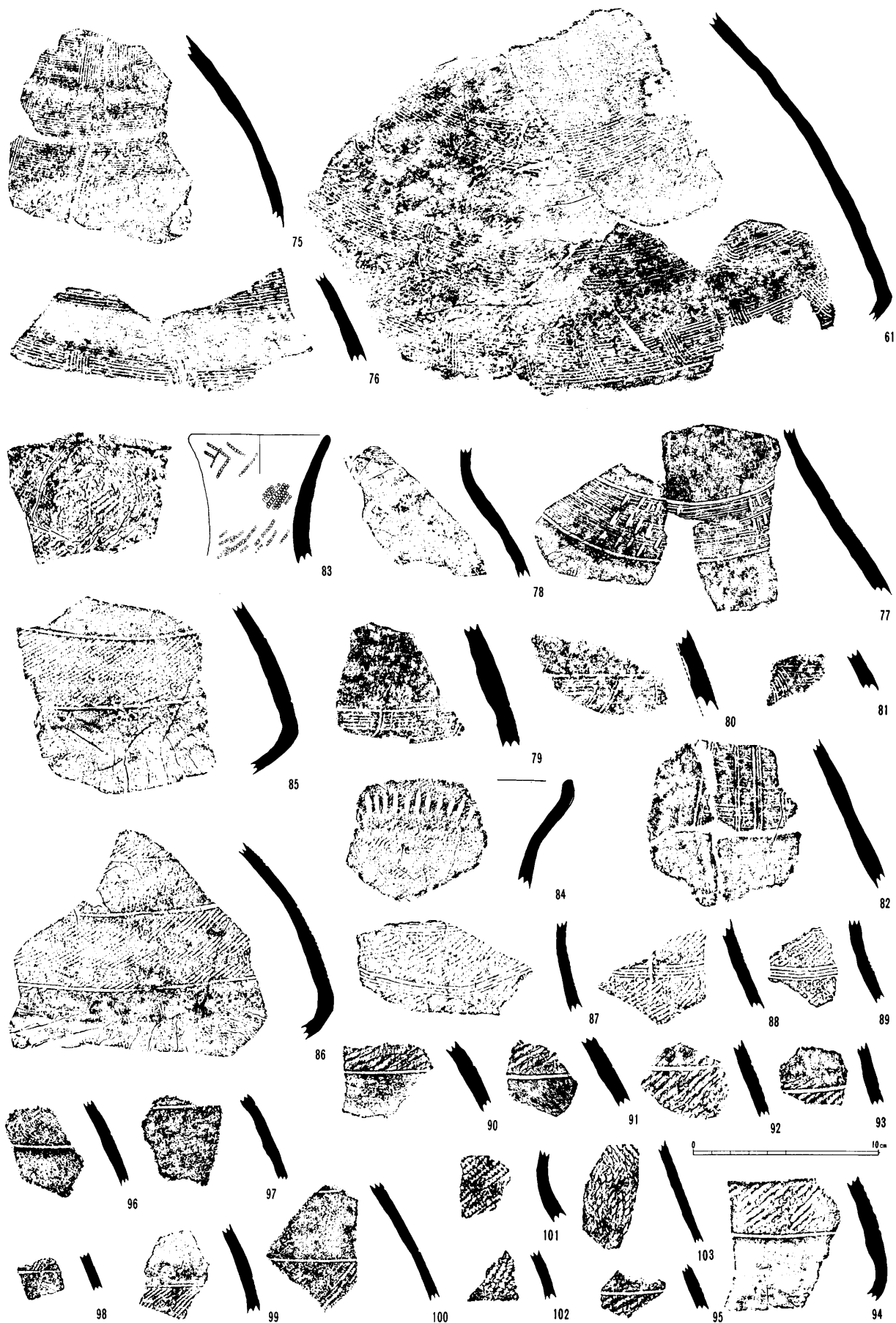
胎土はやや粗く砂粒を含む。焼成は良く明黄褐色を呈する。内外面の一部に付煤が見られる。

(63~65) は太頸壺である。(63) は推定口径16cmで口縁部が受口状にやや内傾するもの。口縁部の断面形は三角形に先端が尖る。そのため口縁端面が広くなり、4本/cmの刷毛目が施されている。

胎土は良で砂粒をほとんど含まず、焼成も良い。淡褐色を呈する。

(64) は推定口径が22cmで、頸部から大きく外反した口縁部は端部で丸味をもった面をもつ。そこには浅い1本の沈線が入り、丸棒状工具の押圧による凹線が3本で1単位を構成して施される。小片のため全周に何カ所施されるかは不明である。

(65) は推定口径22cmで、面取りされる口縁端面の下端には小さな刻みが施される。内外面ともヨコナデされるが、外面には8本/cmの横位の刷毛目が残る。頸部には櫛描の擬似流水文が見られる。(59) とよく似た色調、文様であるところから同一個体か



第6-11图 SB45出土遺物2 (1:3)

もしれない。

胎土は粗く砂粒を含む。焼成は良く灰褐色を呈す。本個体にS B45から北西約9 mに位置するS K17出土の口縁部片が接合した。

(66~68)は口縁部が受口状にやや内折するもので、端部は丸味をもつ。いずれも小片のため口径や器形の推定ができない。(66・67)は口縁部外面に波状文、頸部に横線文が施される。(68)は波状文は見られず、屈曲部にヘラ刻みが施される。なお、(67)の波状文の施文具は二枚貝と思われる。

(69~74)はすべて体部上半の小破片である。(69・70)は複帯構成の櫛描横線文が、(71)は横線文に縦弧線が、(72・73)は擬似流水文が施される。

(74)は長頸壺の頸部と考えられ、三河や遠近江方面の系統をひくものであろう。粗い櫛状工具による太描きの横線文と下端には刺突文が見られる。

胎土は粗く焼成は良い、淡褐色を呈しザラザラした感じである。他の土器と胎土が異なり、搬入品かもしれない。

(75)は原体幅1.2cmで9本を数える櫛状工具が使用され、2ないし3帯をもって横線文帯としている。そして無文帯と交互に配されるが、太い沈線をもって文様帯が画されることはない。二段が確認できる櫛描横線文帯には位置を違えて縦直線が施される。この縦直線は横線文と同じ原体を使用し、やや間隔をあけて施された2帯で1組をなすようである。

全体に磨耗が著しく、器面調整も判別できない。内面には指頭圧痕が残る。胎土は粗く、5 mm大の礫も含まれるが焼成は良い。にぶい褐色を呈し、外面に付煤が見られる。

(76)は(61)と同一個体である。

(77)は頸部直下から体上部の破片である。

縦位の細かな刷毛目調整(14本/cm)の後、頸部から約4 cmの無文帯において、幅約3.5 cmの複帯構成の櫛描横線文を施す。その上に櫛状工具の端部を使用したものであろうか、短沈線を縦位に3段、横に5列ほど施している。この文様は約5 cm間隔をあけてもう1組確認できる。なお、横線文帯の上下はやや太いヘラ描沈線で無文帯を画している。

無文帯はヘラミガキされるものの、一次調整の刷

毛目が残る。内面には肩部に粘土の絞り痕、体部には8本/cmの刷毛目が残る。

胎土はやや粗、砂粒を含み焼成は良い。色調はにぶい褐色を呈し、一部に黒斑が見られる。

(78)は頸部にわずかに櫛描横線文が見られ、以下が無文部の破片である。

(79・80)は同一個体。無文帯を画する沈線のない櫛描横線文帯には同じ工具による縦弧線が見られる。

(81)は擬似流水文であろうか。

(82)は器面の磨耗が著しく文様が不鮮明であるが、幅約5 cmの複帯構成の櫛描横線文に、原体幅5 mmで3本を数える櫛描縦直線が、約1~1.5 cmの間隔をもって4本施される。これは横線文帯を縦位区画するものであるが、全周を何単位に区画したものであるのかは不明である。

胎土は粗く砂粒をやや多く含み、焼成は良い。色調はにぶい黄褐色を呈する。外面に付煤。

壺Ⅱ類 (83~103)

(83)は(62)とよく似た形態を持つ。器壁は頸部でやや厚く口縁部へと次第に薄くなり、端部はやや丸味をもつ。推定口径は7.3 cmである。

口縁部直下には縄文が間隔をあけて矢羽状に押圧される。その下の頸部には剝離により不鮮明ではあるが、縄文が回転施文されているのが確認できる。縄の撚りはLRである。胎土は粗く砂粒を含み、焼成は良である。暗褐色ないし黒褐色を呈する。

(84)は受口状の口縁をもつ破片である。口縁部外面の屈曲部に刻目が施される。器面には外面全面にLRの細かな縄文が施されている。

胎土はやや粗、砂粒を多く含み焼成は良い。褐色を呈する。内外面とも磨耗が著しい。

(85・86)は同一個体である。また(96~100)も細片のため不明確なものもあるが、同一個体と考えられる。

(86)から推定される体部の最大径は約31 cmで、最大径が体部下半にくる下ぶくれの器形である。体部上半はゆるやかに膨らみながら頸部へと続く。体部には2帯の文様帯が確認できる。この文様帯は長さ約2 cmのLRの細かな縄を横に3段回転させたうえ、上下端にヘラ描沈線を施し文様帯を画している。

無文帯および体部下半はヘラミガキである。

内面には横位の刷毛目が若干残る。胎土は粗く砂粒をやや多く含み、焼成は良、色調は明赤褐色ないし橙色を呈し、黒斑を有する。縄文や胎土がよく似ていることから、(84)がこの個体の口縁部の可能性もある。

(87~89)は同一個体。いずれも体上部から頸部にかけての破片で、LRの縄文を横位に回転施した後、櫛描横線を単帯で施す。

(90~95)も同一個体。いずれも体上部片で、ヘラ描沈線で画された縄文帯と無文帯が見られる。縄文は堅い繊維を撚った無節の縄(L)を横位回転させたものである。無文部はヘラミガキ。

胎土は粗、石英・長石の砂粒を多く含み、焼成は良である。にぶい赤褐色を呈する。

(101~103)も頸部あるいは体部の小片で、縄文が施されるものである。

壺(104~107) (104・105)は同一個体であるが、施文原体が櫛状工具である点では壺I類に属するものである。大型の壺形土器の体部片であろうと思われるが、あまり例をみない文様が施される。

文様は体部に約7cmの間隔をもって沈線を横に描き、上下の沈線に接するように波状沈線を描く。そして原体幅が1.1cmで4本を数える櫛状工具を用い

て連弧文を描いている。上方の沈線に接するものは二帯で構成され弧も大きい、下方のものは単帯で弧も小さい。この文様帯の上にも同様の文様が施されているようである。

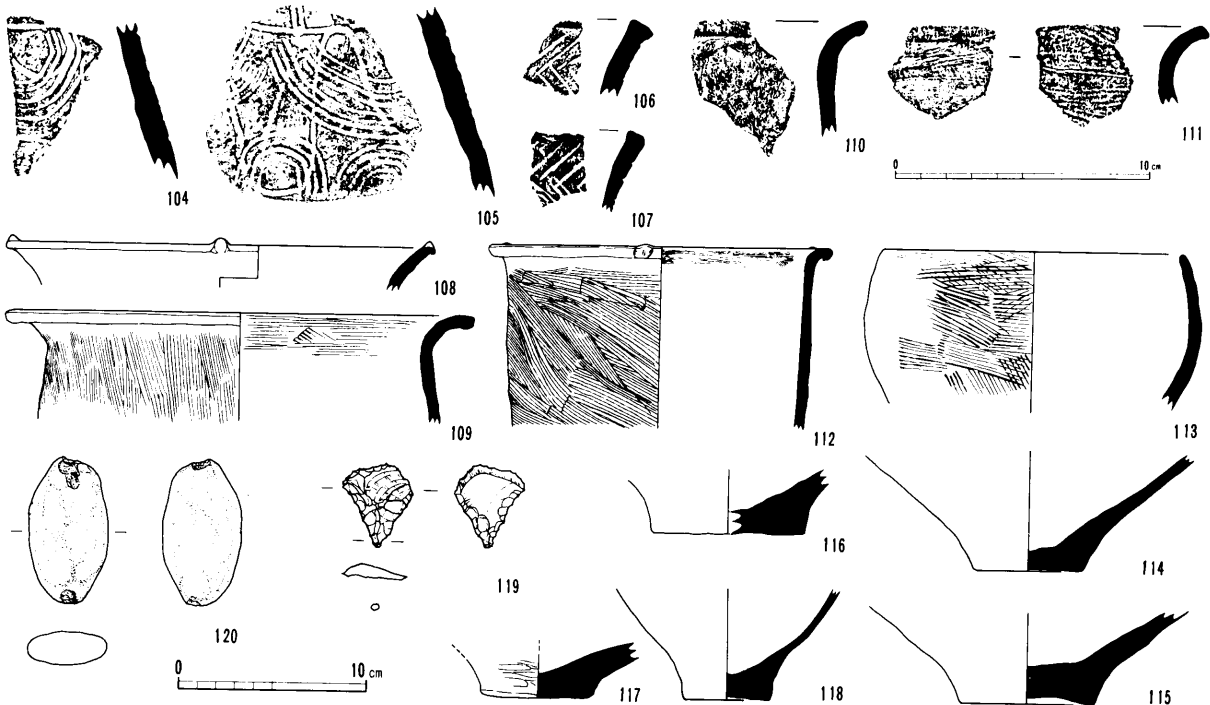
胎土は粗く砂粒を含む。焼成は良く色調は褐色を呈する。県内での類例を知らないが、四日市市永井遺跡SD2出土の渦巻状沈線文を有する鉢(弥生時代前期)がやや近いものである。

(106・107)は口縁断面形や色調が異なるが同一個体である。いずれも小片のため正確な器形の復元は不可能であるが、口縁部がやや外側へ開く壺形土器であろう。口縁端部に面をもち、外面にはヘラ描の横位羽状沈線が施されている。

甕I類(108~111) 甕の出土量は壺に比して非常に少量で、しかもほとんどが小片であるため全体の器形のわかるものはない。

甕I類は刷毛目調整の施される甕である。(108)は推定口径が22.8cm、頸部があまりくびれず直線的な口縁部が斜め上方へ開く形態のものである。口縁部は内外面ともヨコナデされる。また丸棒状工具の押圧が口縁端面に見られる。

(109)は推定口径が25.4cm、口縁部は強く外反し端面は丸くおさめられる。内外面に3本/cmの粗い刷毛目が残る。刷毛目は外面が縦位に、内面が横



第6-12図 S B45出土遺物3 (104~107・110・111は1:3、108・109・112~118は1:4、119・120は1:2)

位に施される。胎土は並で砂粒を含み、焼成は良である。褐色を呈する。外面に付煤。

(110・111) はともに小片で(110)はゆるく屈曲した短かめの口縁部で、端面は丸味を帯びる。(111)は内外面に刷毛目が見られるが、面取りされた口縁端部にも斜位の細かな刷毛目が見られる。

甕Ⅱ類 (112) 器面を条痕調整する甕で、1個体だけ出土した。口径は18.2cmで、強く外反する口縁部は丸くおさめられ、端部には全周の3カ所に押圧による圧痕が残る。

頸部から体部にかけてはほとんどくびれず、体部がやや外に張る。二枚貝条痕が横位ないし右下りに施されている。また口縁部には成形時の細かな刷毛目が若干であるが残っている。

胎土は並、砂粒を含み焼成は良で、にぶい橙色を呈する。

鉢 (113) 推定口径は16cmで内傾する口縁部で球状の体部をもつ鉢形土器である。口縁端部は丸く仕上げられている。外面には5本/cmの刷毛目が、横位ないし右下りに施される。内面は口縁部付近がヨコナデ、以下は乱ナデである。

胎土はやや粗く砂粒、特に石英粒を多く含み焼成は良い。淡灰黄色を呈する。

底部 (114~118) (115)は大型の太頸壺(52~54)の底部であろう。底径7cmでやや上げ底の底部はていねいにナデられている。つづく体部はヘラミガキがなされている。赤褐色を呈する。

(114・116・117)は壺形土器の底部であろう。

(118)は甕形土器の底部である。底径は4.5cmで底部は厚いが体部は約4mmの厚さしかなく薄い。全体に磨耗が著しく、調整技法等は不明である。

胎土は粗、砂粒を含み焼成は不良である。暗赤褐色を呈し、外面に付煤が見られる。

石製品 (119・120) (119)はサヌカイト製の石錐である。先端部をやや欠失するが、最大長2.2cm、最大幅1.9cm、最大厚0.4cm、重量1.28gである。

薄い剝片の二側縁にやや粗い両面調整が加えられている。

(120)は偏平な楕円礫の両端を打ち欠いた石錘である。最大長7.8cm、最大幅4.2cm、最大厚1.9cm、重量87g、石材は砂岩である。

B. 方形周溝墓

S X 22 S B 14の東北東25mに位置し、周溝の四隅が切れる形態の方形周溝墓である。隅丸の長方形ないしは長楕円形で底面が平坦な浅い土坑が四基、相對して配置されているかのようである。

周溝があまりに短い点や、遺物の出土状況等からすると若干の疑問も残るが、ここでは方形周溝墓として扱う。

平面形態としては四隅に陸橋部を有するタイプに入るが、削平を考慮に入れてもやや陸橋部が広い。各周溝は幅約2.0~2.4m、長さ5.0~5.7m、深さ7~25cmでよく似たものである。

台状部は東西12.6m、南北12.5mで、盛土および主体部は検出されなかった。

出土遺物は少量ではあるが出土した。西周溝からは壺底部や甕などが底面より若干浮いた状態で出土した。この西周溝出土の甕(191)は、約2m北方に隣接するS K 23出土の破片と接合し、両者の関係が興味深い。

[出土遺物]

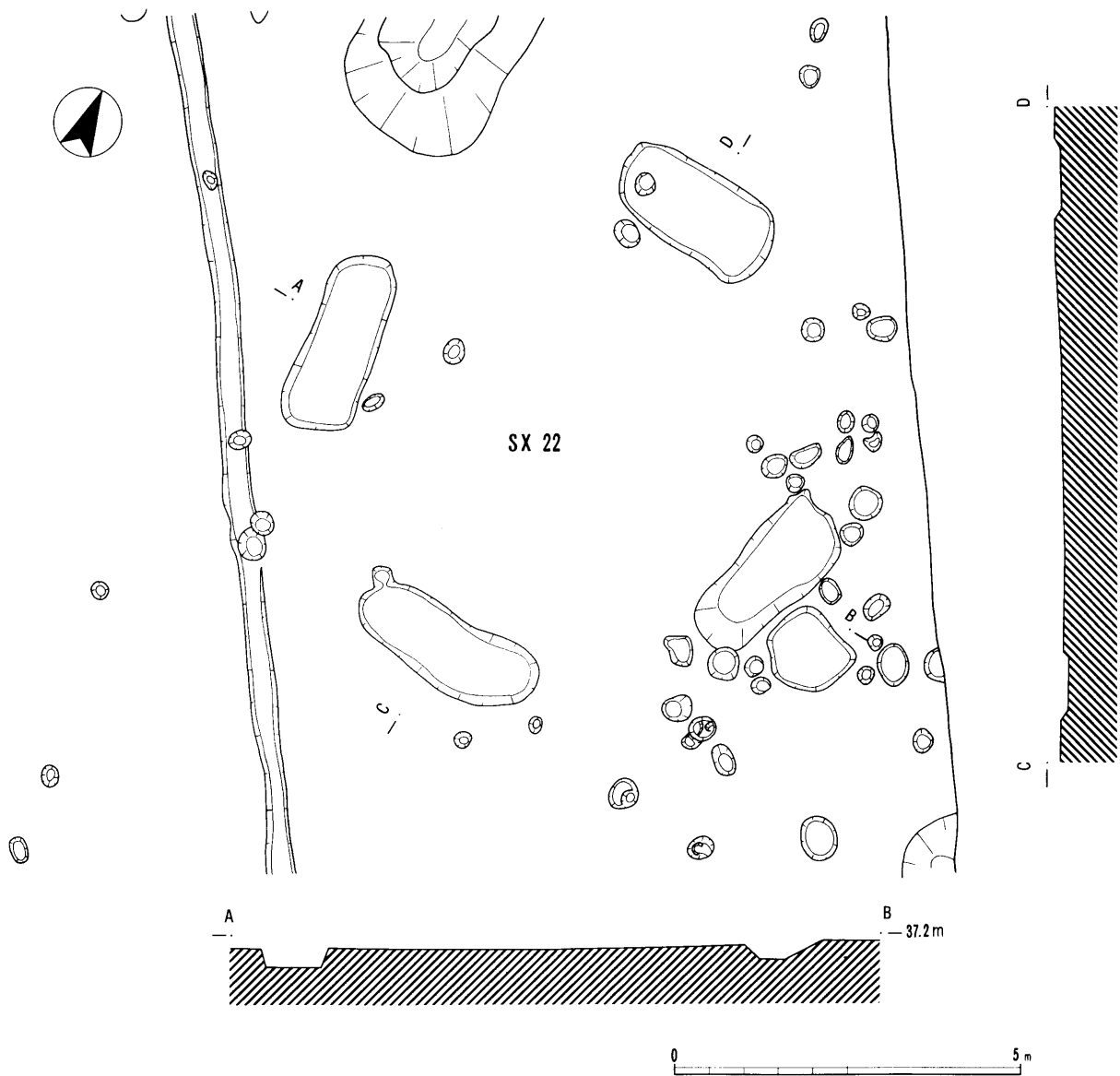
壺Ⅰ類 (121~124) すべて小片であるが、(121)はやや外傾する直口の口縁をもつ壺で、口縁端部に面をもつ。その端面および内面はていねいにヨコナデされるが、外面には5本/cmの櫛描横線文が口縁部直下から施される。胎土は並、砂粒および4mm×6mm大の礫を含む。焼成は良、外面は暗褐色、内面はにぶい黄橙色を呈する。

(122~124)は体部上半の破片である。上下を沈線で区画された櫛描横線文帯に、(122)は擬似流水文を、(123)は櫛描縦直線を施している。(124)は区画内に櫛描波状文を施している。磨耗が著しい。

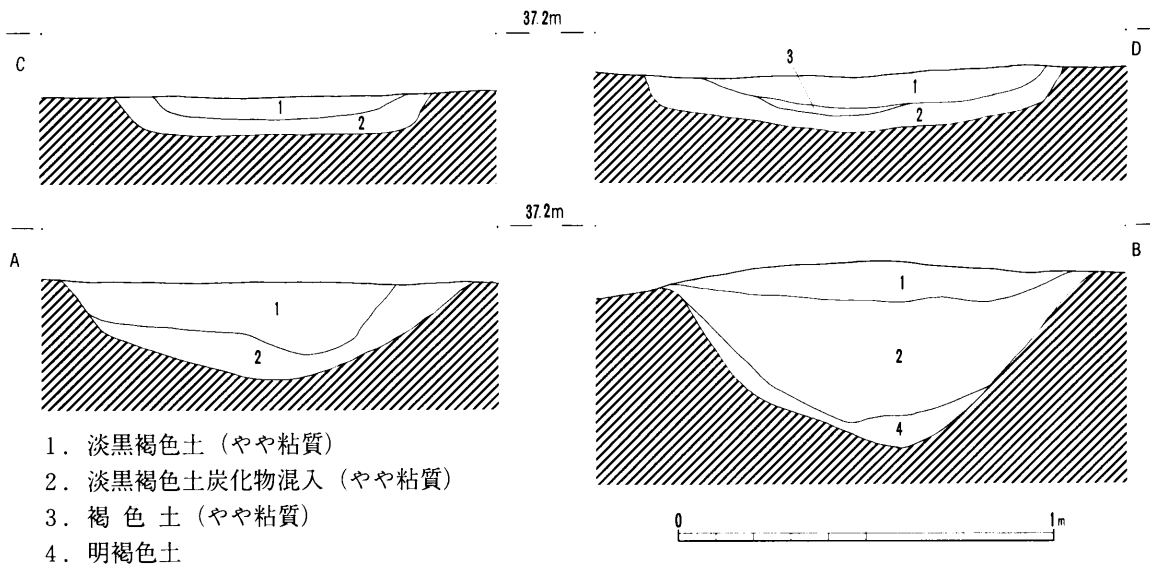
壺Ⅱ類 (125) 体部上半の破片である。沈線で区画された文様帯に縄文を回転させたもの。縄原体は長さ約2.4cmで撚りはLRである。施文順序としては縄文を施したのち沈線を描いている。無文帯はヘラミガキ。

胎土はやや粗、砂粒を含み焼成は良、橙褐色を呈する。

甕Ⅰ類 (126~128) 前述の甕(191)はS K 23の項で図示し記述する。



第 6 - 13 図 SX 22 実測図 (1 : 100)



第 6 - 14 図 SX 22 周溝断面図 (1 : 20)

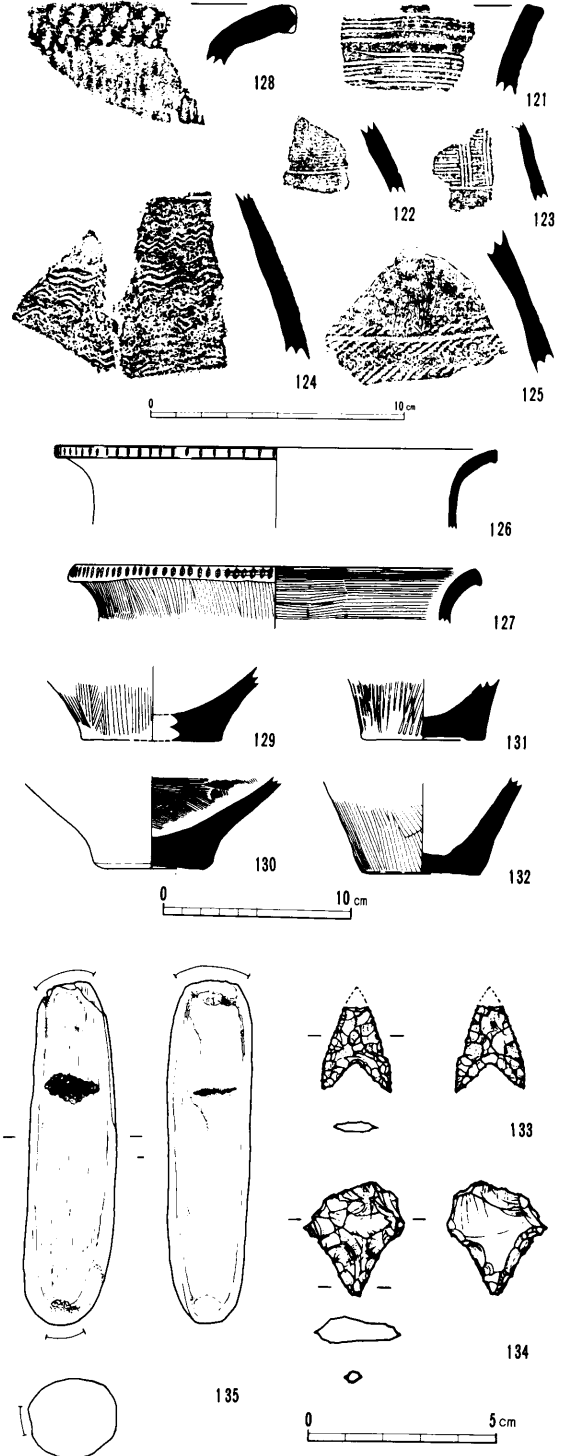
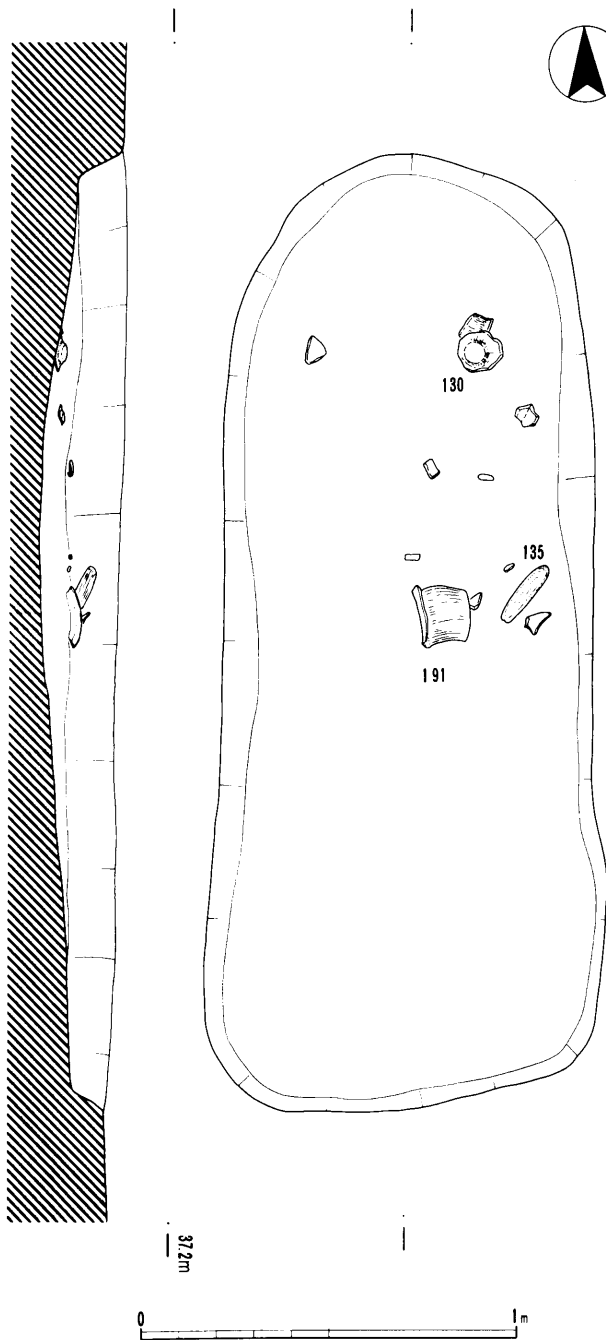
(126) は口縁端部に垂直な面をもち、6～8mm 間隔で縦位のヘラキザミが刻される。口縁部内外面ともヨコナデ。外面に厚く煤が付着している。

(127) は口縁端部にやや丸味を帯びた面をもち、端面がやや垂下する。この端面に刷毛目原体による刻目が見られる。刷毛目は6本/cmを数え、口縁部内面は横位、外面は縦位に施される。外面には煤が

付着する。

(126) は小片であるため推定口径に問題があるかもしれない。(127) は推定口径21.4cm。

(128) は口縁部の小片である。口縁端面の上下にハケキザミが施され、外面には粗い刷毛目が残る。底部(129～132) (129・130) は壺の底部と思われる。(130) は完存しているが、底径5.6cmで底面



第6-15図 S X 22西周溝遺物出土状況(1:20)、およびS X 22出土遺物(121~125・128は1:3ただし126・127・129~132は1:4, 133~135は1:2)

は乱ナデ、底部周縁はヨコナデ、体部外面はヘラミガキされる。内面には8本/cmの刷毛目が残る。

胎土は並、砂粒を多く含む。焼成は並で明褐色を呈する。

(131・132)は甕の底部である。いずれも4～5本/cmの刷毛目が縦位に施されている。

石製品 (133～135) (133)は先端部を欠失するサヌカイト製石鏃である。現存最大長2.3cm、最大幅1.8cm、最大厚0.3cm、重量0.99gである。

凹基無茎で基部両側の先端が鋭く尖る。

(134)はサヌカイト製の石錐である。先端をやや欠失する。現存最大長3.0cm、最大幅2.7cm、最大厚0.7cm、重量5.4gである。2側縁にやや粗い両面調整を施している。

(135)は敲石である。最大長18.3cm、最大幅4.7cm、最大厚4.2cm、重量638gである。石材は絹雲母を含む石英片岩。表面中央部やや上方に打痕が見られるほか、左側面にわずかな打痕がある。また上端は敲打により著しく磨滅している。これら石製品は縄文時代に所属するものであろうか。

C. 土坑

SK 9 A地区西半中央部付近で検出された直径約3mの不正円形の浅い土坑である。深さは検出面より5～8cmで、北の約3分の1ほどはそれより5cmほど深くなる。底面は平坦で、埋土中より微量の弥生土器が出土したにすぎない。

[出土遺物]

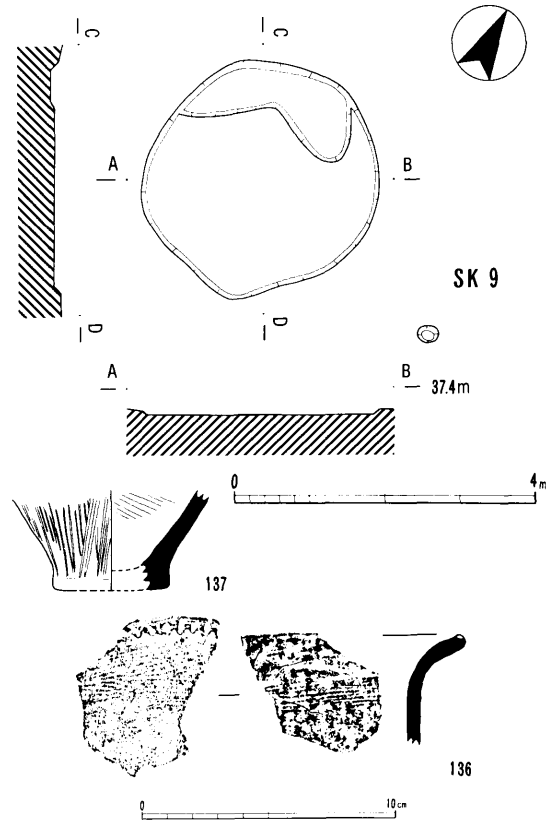
甕I類 (136・137) (136)はゆるく外反する口縁部の上端面にヘラによる刻目を有するものである。外面は頸部に横位の刷毛目(原体幅1cmで7本)が残る。内面は斜位と横位に施される。外面に煤が付着している。

(137)は粗い縦位の刷毛目が底部近くまで残っている。

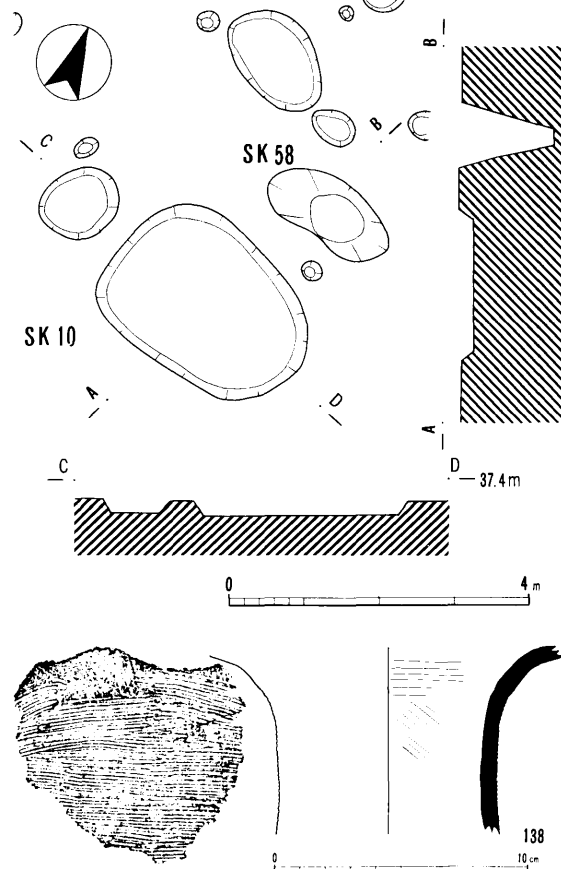
SK 10 SB14の南6mに位置する。東西2.8m、南北2.1m、検出面からの深さ20～25cmの土坑である。微量の弥生土器片が出土した。

[出土遺物]

壺I類 (138) 図示できるものは1点のみである。口縁部を欠くが、広口壺の頸部である。複帯構成の



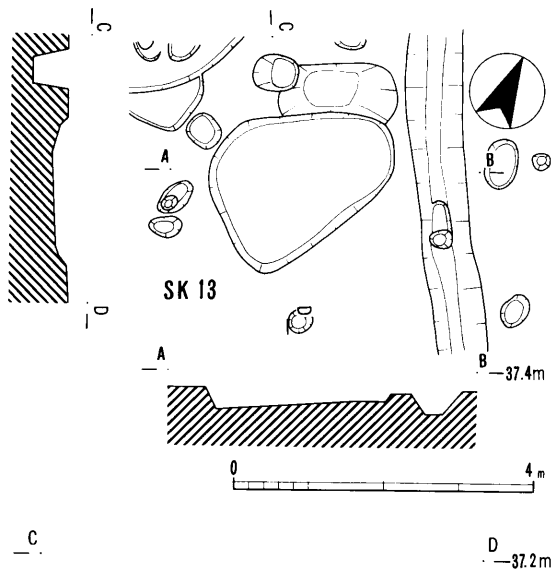
第6-16図 SK 9実測図(1:100), 出土遺物(1:3)



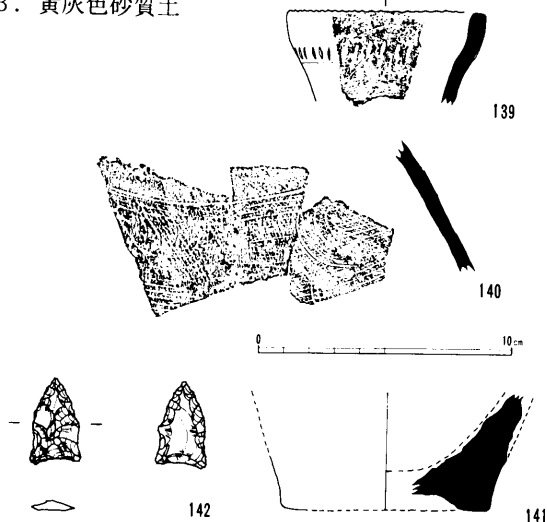
第6-17図 SK 10実測図(1:100), 出土遺物(1:3)

櫛描横線文が施される。施文原体は7~8本/cmのものである。内面には3本/cmの粗い刷毛目が、横および右下りに施されているのがわずかに残っている。胎土は並、砂粒を含み焼成は良い。褐色を呈し、外面に付煤が見られる。

SK13 SB14の南東1mに位置し、東西1.9m、南北2.5mで隅の丸い二等辺三角形の平面形をなす。検出面からの深さは24~28cmで、底面は皿状で中央部がややくぼむ。埋土中より少量の弥生土器片、石鏃が出土した。



1. 淡黒褐色砂質土
2. 黄灰色砂質土 (炭化物混入)
3. 黄灰色砂質土



第6-18図 SK13実測図 (1:100), 出土遺物 (141は1:4, 142は1:2)

[出土遺物]

壺 (139・140) (139)は推定口径8cmでやや受け口状の口縁をもつ細頸壺である。

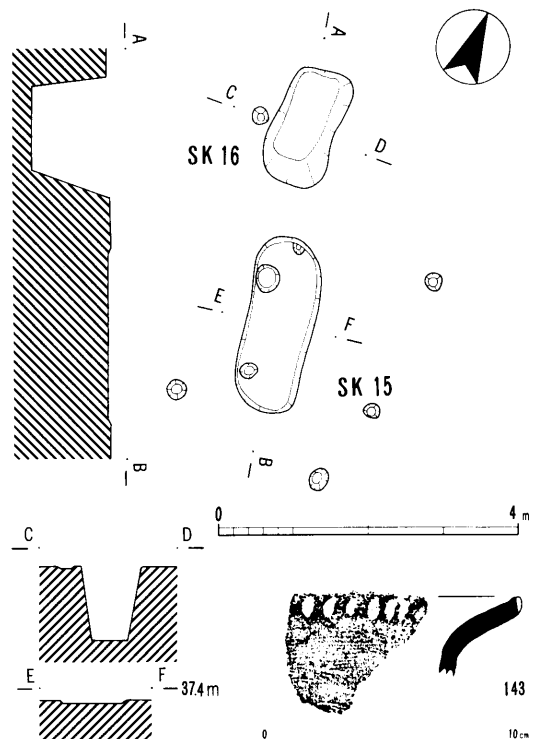
口縁部外面の受け口状に屈曲する部分にヘラによる刻目が見られる。また口縁端部には水平な面があり、ここには小竹管の側面を連続的に押圧したと考えられる刻目がある。口縁部内外面はヨコナデ、刻目以下の頸部には板状の工具をあててヨコナデしたような痕跡が見られる。これも櫛描施文の範疇に入ると考えると壺I-A類に入れられよう。

胎土は粗、砂粒を含む。砂粒には特に石英粒が多い。焼成は良く淡橙色を呈する。

(140)は体部上半の破片である。体部上半に何帯が配される横位文様帯と無文部の一部にあたる。施文が非常に浅い擬似流水文が施されているが、一次調整時の右下りの刷毛目が明瞭に残っていることと、櫛描施文が雑で浅いため、特に左側の弧線が判りにくい。なお、櫛状工具は幅1.6cmで7本のものが使われている。

底部 (141) 甕の底部である。全体に磨耗、剥落が著しい。

石鏃 (142) サヌカイト製の凹基無茎の石鏃である。基部の挟りは少なく平基式に近く、肩部にやや



第6-19図 SK15・16実測図 (1:100), 出土遺物 (1:3)

稜があり長五角形に近い。

最大長2.3cm、最大幅1.4cm、最大厚0.3cm、重量0.78gである。裏面はややくぼんでいるため一次剝離面が中央部に広く残るが、両側縁ともていねいな二次調整が施されている。縄文時代のものであろう。

S K 15 S B 14の北2mに位置する。東西0.9m、南北2.3m、検出面からの深さ約5cmの底が平坦で浅い土坑である。

埋土中より微量の弥生土器片が出土した。

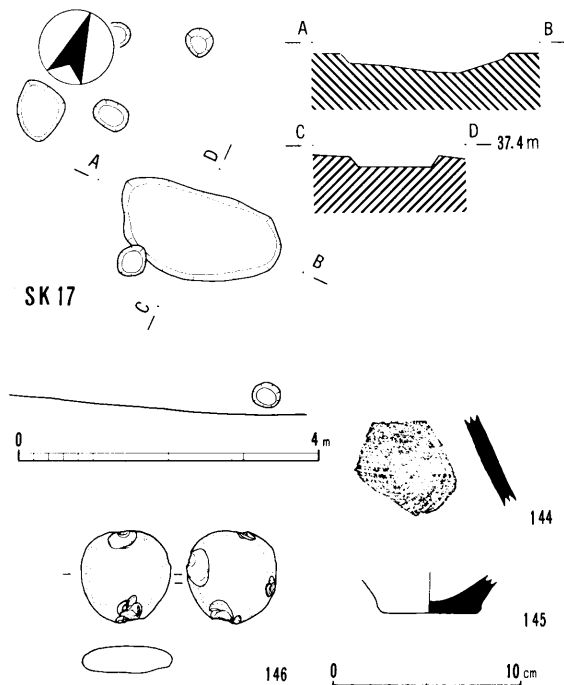
なお、北に隣接するS K 16は東西が0.9m、南北が1.6mの隅丸長方形で、検出面からの深さが約1mの深い土坑である。出土遺物がなく時期は決め難いが、縄文時代のものかもしい。底面には小ピットなどは検出されなかった。

[出土遺物]

甕I類(143) 図示できたのは1点のみである。ゆるく外反する口縁端部は丸味をもっておさめられ、ヘラによる深い刻目がある。口縁部内外面とも横位の刷毛目がわずかに残る。

S K 17 S B 14の東南東13mに位置する。東西2.3m、南北1.1m、検出面からの深さ30cmほどで、中央部が皿状に深くなる。

埋土中より弥生土器片および石製品が微量出土した。



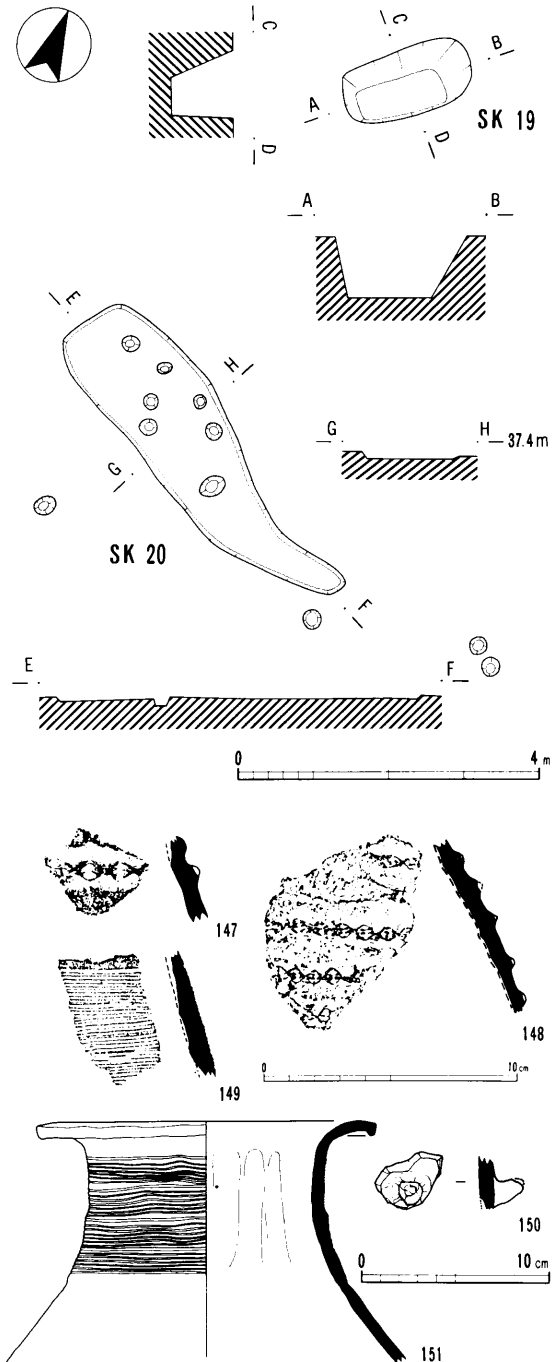
第6-20図 S K 17実測図(1:100),出土遺物(1:3ただし145は1:4, 146は1:2)

[出土遺物]

壺I類(144) 体部上半の小破片である。櫛描の擬似流水文が見られる。

底部(145) 推定底径5cmの壺形土器底部である。外面にはていねいなミガキ調整が施され、極めて平滑である。胎土は並だが砂粒をあまり含まず、焼成は良である。褐灰色を呈する。

石製品(146) 偏平な円礫の4点を打ち欠いた石錘である。最大長4.9cm、最大幅4.8cm、最大厚1.4cm、



第6-21図 S K 19・20実測図(1:100) 出土遺物(1:3ただし150・151は1:4)

重量52.6g、石材は砂岩である。

S K 19 S B 14の北約12mに位置し、長軸1.8m、短軸0.9m、検出面からの深さ80cmの隅丸長方形の掘形をもつ土坑である。他の弥生時代の土坑に比して、壁面の傾斜が急で深いのが特徴である。S K 16とよく似た土坑である。

遺物は微量であるが弥生土器片が出土している。

[出土遺物]

壺 (147~149) いずれも体部上半の小片である。(149) はヘラミガキによる無文部と、複帯構成の櫛描横線文帯とが見られ、壺 I 類に属するものである。器壁の傾きはもう少し内傾するものである。

(147・148) は櫛もしくは刷毛の原体による刻み目をもつ隆帯を、体部上半に横位多条に貼りつけたものである。土器片が小さいため上下関係には問題があるかもしれない。

把手付土器 (150) 小片のため器形等不明であるが、鉢形の土器の体部に小さな把手を付けたものであろうか。胎土は精良で砂粒を含み、焼成は並である。黄褐色を呈する。

S K 20 S B 14の北東7.5mに位置し、東西に細長い不定形な土坑である。東西5m、南北が最大で1.3mで、東半分はすぼまり気味となり、東端で0.5mである。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは7~11cmと浅いものである。

底面より若干浮いた状態で太頸壺 (151) が出土したほか、サヌカイトの剥片が若干出土した。

[出土遺物]

壺 I 類 (151) 図示できるものはこの1点のみである。太く短めの頸部から強く外反した口縁部は水平方向に広がり、端部はやや下り気味で垂直方向に面をもつ。推定口径は18.2cmで、壺 I - B 類に属する。

太い頸部には原体幅1.5cmで7本を数える櫛描横線文が4帯構成で施され、肩部以下には縦位の刷毛目がわずかに残る。

胎土は精良だが砂粒を多く含む。焼成は良で色調は灰白色を呈する。磨耗が著しい。

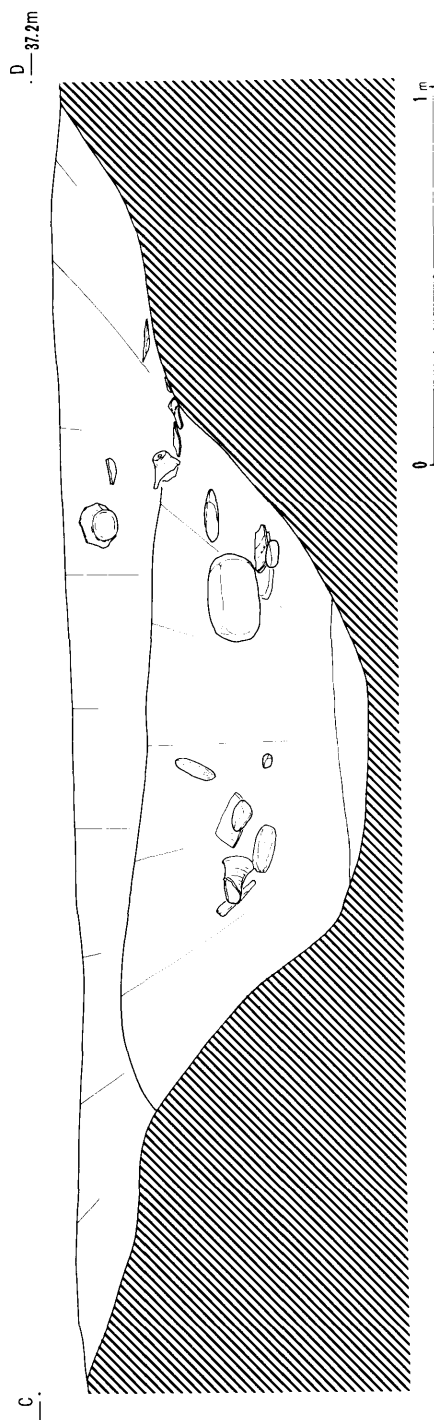
S K 23 S X 22の北西に隣接する東西2.3m、南北3.5mの隅丸長方形に近い形の土坑である。検出面から30cmほどまではゆるやかに深くなり、そこから急

に深くなり84cmほどの深さとなる。

遺物は20cm以上浮いた状態で、河原石などと混在して出土した。つまり、土層断面図の第4層と第3層が堆積した後に、遺物が投棄されたものと思われる。

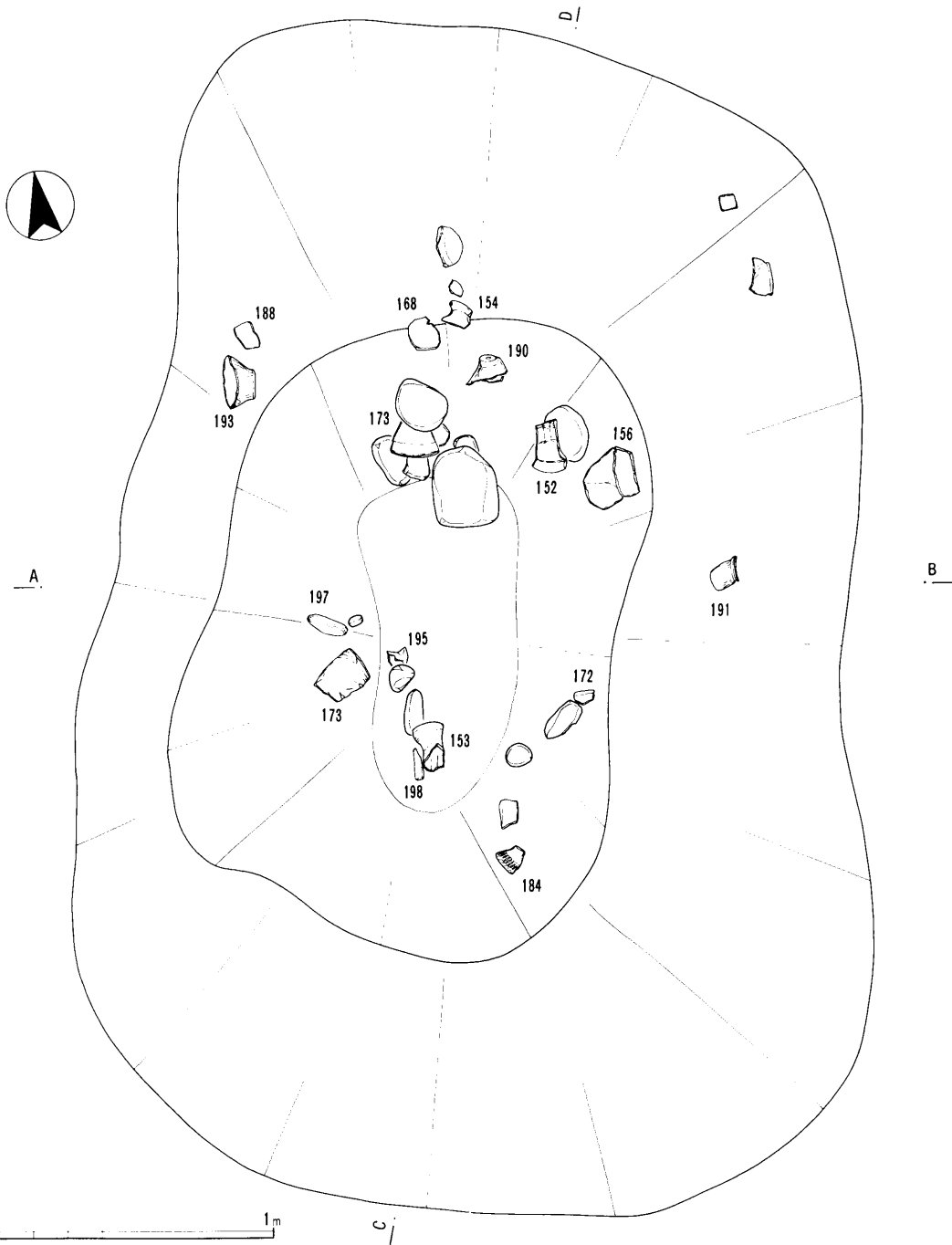
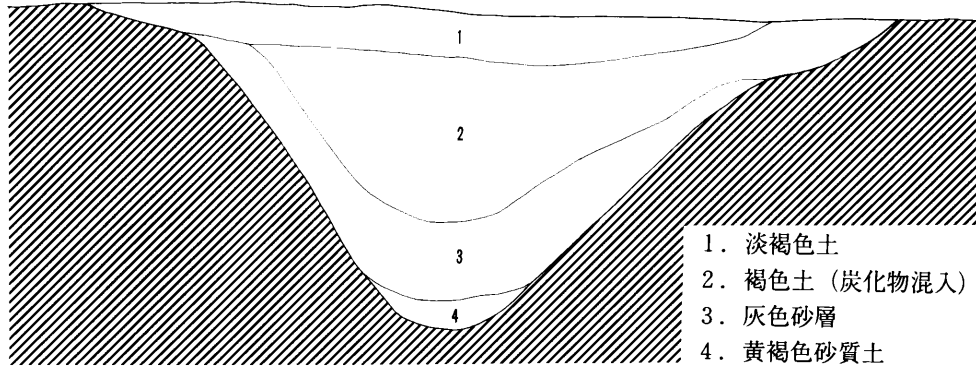
出土した土器片には大きな破片も見られるが、完形に復元できるものはほとんどなかった。

遺物中には底部穿孔された甕があり、甕としての



A —

B — 37.2m



第6-22図 SK23実測図 (1:20) 左頁は断面見通し図。図中の番号は遺物実測図番号を示す

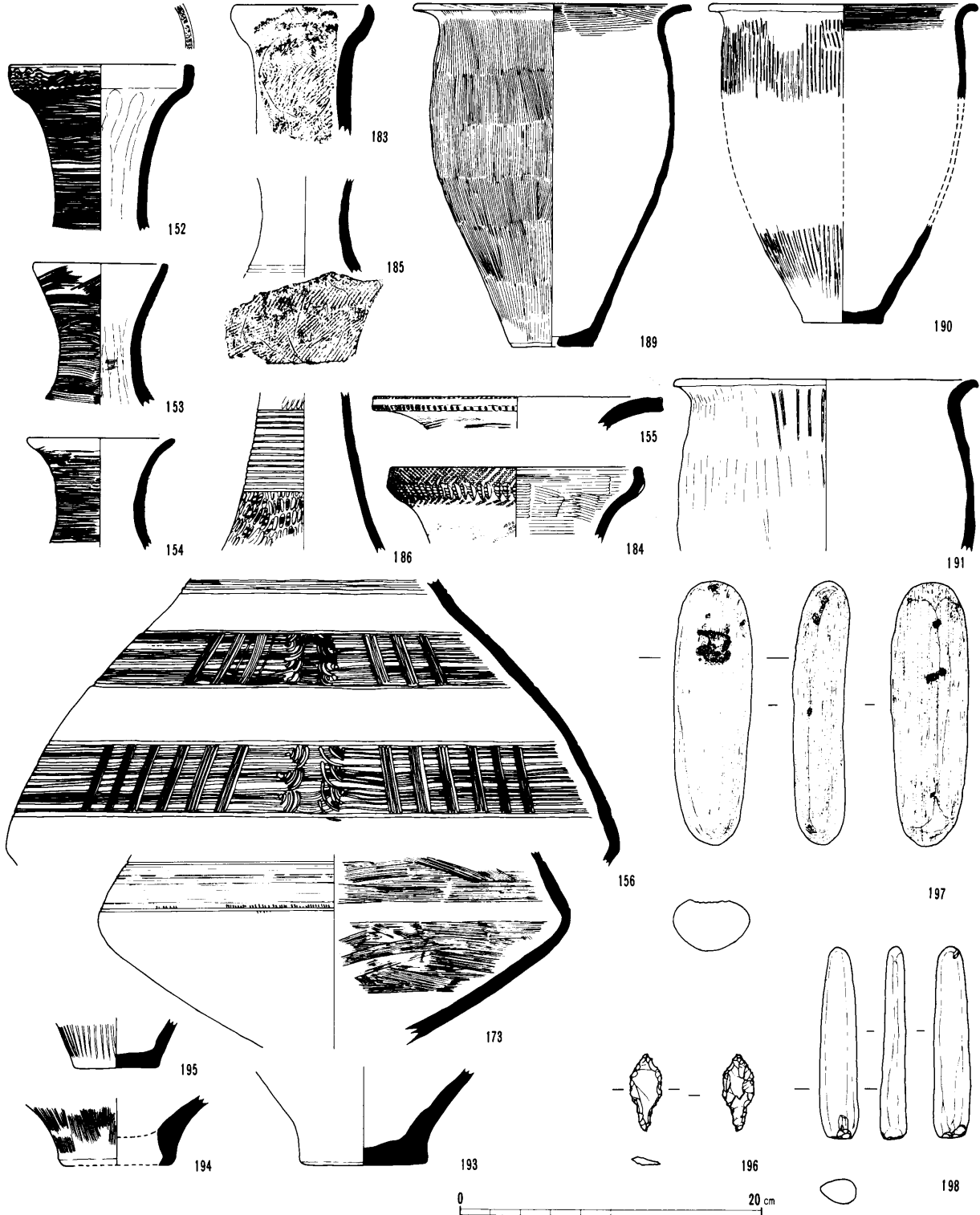
利用がうかがえる。隣接するS X22出土の甕破片と、当土坑から出土した破片が接合するなど、S X22との関連が注目される。

[出土遺物]

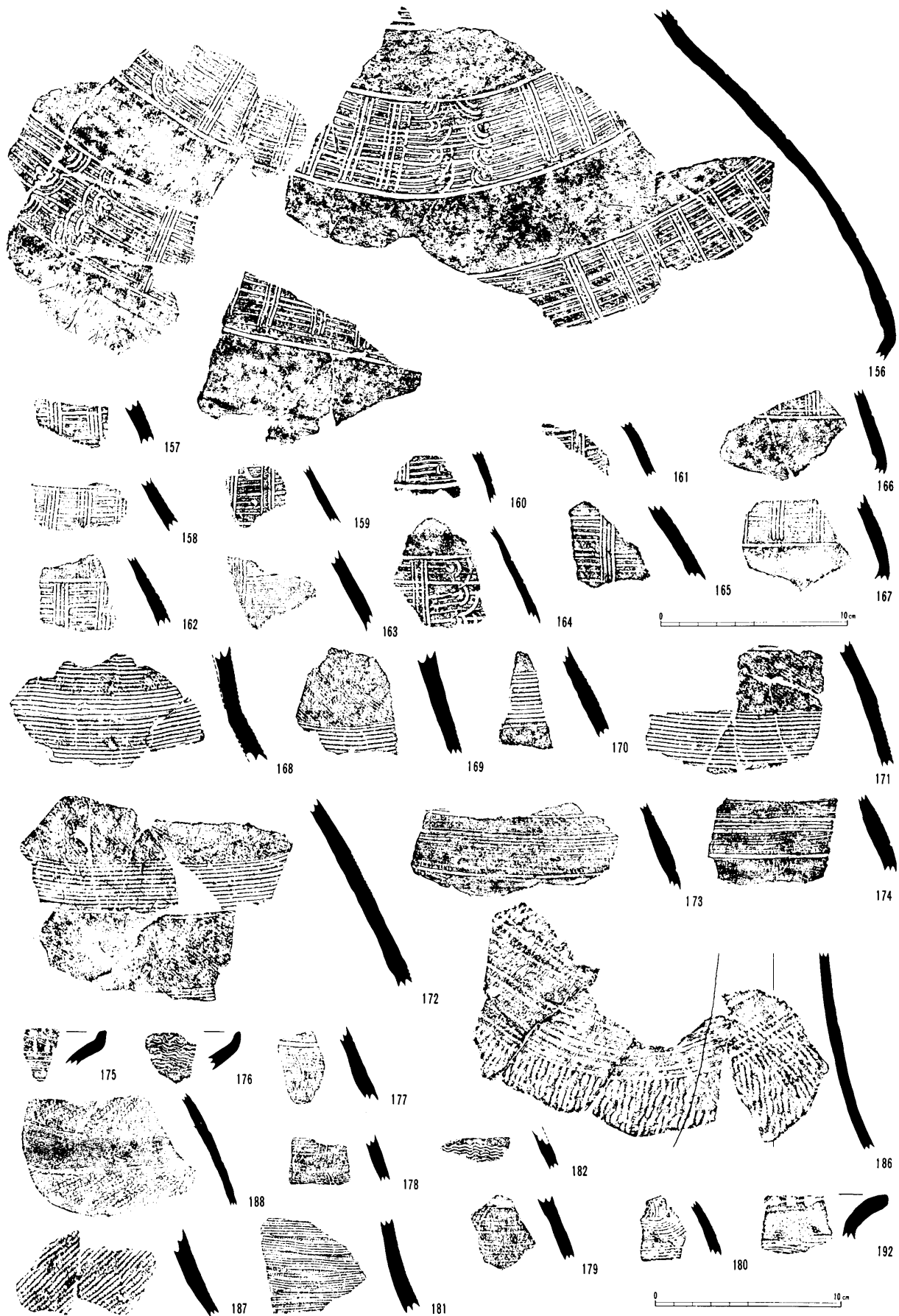
S K23からは比較的多くの資料が得られたが、大多数は小片である。

壺I類 (152~182) 全部で11ないし12個体出土した。うち口縁部は6点ある。(152~154)はI-A類、(155)はI-B類にあたる。

(152)は口縁部から頸部がほぼ完存している。口径は12cmで受口状口縁の内面はくびれ部までヨコナデにより整形されている。口縁端部は水平な面を



第6-23図 SK23出土遺物1 (1:4ただし196は1:2)



第6-24图 SK23出土遺物2 (1:3)

もち、刷毛工具による小さく浅い刻目が全周に施されている。口縁部外面には櫛描波状文が、頸部には複帯構成の横線文が施されている。櫛状工具の原体は幅が7mmで4本を数える。

胎土はやや粗、砂粒を含み焼成は良、赤褐色ないし暗赤褐色を呈する。

(153)は頸部から直線的に外反し、口縁端部でやや内弯気味におさまる。端部は水平な面をもつ。

口径は8.2cm、口縁部は内外面ともヨコナデで、外面は端部より約1.3cmほど下から櫛描横線文が施される。櫛状工具の原体は幅6mmで5本を数え、全周を4回ほどで描き継いでいるが、施文は雑に行われている。

胎土は良、砂粒を含み焼成は良い。黄褐色を呈し、頸部に黒斑を有する。口縁部から頸部完存。

(154)は(153)に似るが頸部がやや太く短い。ゆるやかに外反しながら外へ開く口縁部は、端部で面をもたず丸くおさまる。推定口径は9.8cm、口縁部外面に雑な櫛描横線文が施される。

胎土は精良、砂粒を若干含み焼成は良い。色調は褐色を呈する。

(175・176)は口縁部の細片である。受口状口縁部外面に櫛描波状文が施されるもので、(175)は口縁端部と頸部へ屈曲する部分に刻目を有する。

(176)も口縁端部に刻目がある。

(155)はI-B類に属する広口の太頸壺である。推定口径19cmで、約2分の1が残存している。太い頸部から強く外反した口縁部は、端部で垂直な面をもち上下端に小さなヘラキザミが密に施される。頸部には櫛描文がわずかに確認できる。

胎土は粗く砂粒を多く含む。焼成は良好で淡褐色を呈する。

(156~167)は体部最大径が約40cmのやや大型の壺の破片である。最大径は体部中央よりやや下にあり、算盤玉状の体部となる。

体部上半にはそれぞれ二帯ずつの無文帯と櫛描文様帯が見られる。無文帯は上が3.5cm幅、下が5.5cmの幅を有しヘラミガキ調整で平滑である。

二帯の文様帯は原体幅1.3cmで5本のもので使用され、横位に4条で一帯を構成する横線を描く。次に原体の1点を中心に回転させた弧線文を対向する

形で4段配し擬似流水文としている。全周に何か所この流水文が配されるかは、残存する破片からは確定できない。

流水文部以外の部分には櫛描縦直線が1.3cmほどの間隔で描かれる。そしてこの縦直線は流水文間に最低6本は施される。

横線と流水文、縦直線が施された後、文様帯の上下端に太い沈線が施され、無文部と区画される。この文様帯は頸部にも一帯がわずかに認められるが、流水文や縦直線が施されるかどうかは定かでない。

体部内面には細かな刷毛目痕とともに、指頭圧痕が見られる。胎土は粗、砂粒を含み焼成は良、色調は淡褐色を呈する。

(168~172)は同一個体の破片である。(168)は頸部、(169~172)は体部上半の破片で、右下りの6本/cmの刷毛目調整の後に二枚貝の側縁を原体とした横線文が施されたものである。(172)によると、横線文帯の幅は2.9cm、無文帯の幅は3.3cmほどである。

内面は剝落が著しいが、非常にていねいにナデ仕上げされている。胎土は精良だが砂粒を多く含む。特に長石粒の多いのが目立つ。焼成は良く、橙色ないし橙褐色を呈する。黒斑が見られる。

(173・174)は同一個体で、体部上半の一部と下半部がほぼ完存する。

算盤玉状の体部は最大径が、31.4cmである。屈曲部から1cmほど上に、上下を沈線で区画された櫛描横線文帯が見られる。この横線文帯は幅が約3.5cmほどあるが、櫛状工具は凹凸のはっきりしない板状のものようで、明確な平行沈線が見られない。

文様帯以外の体部上半無文部および体部下半は、刷毛目調整の後ヘラミガキされ平滑にされる。内面には横位ないし斜めの刷毛目(幅9mm7本)が残るが、屈曲部は強いヨコナデのため消されている。

胎土は並、砂粒を含み焼成は良である。褐色ないし橙褐色を呈する。

(177~182)はいずれも小片である。(177~180)には櫛描擬似流水文が、(181)の頸部片には原体幅7mmで6本の櫛描横線文が複帯構成で、(182)には櫛描波状文が施されている。

壺Ⅱ類(183~188) (183・185・186)は細頸壺で

I-A類に、(184)は太頸壺でI-B類に分けられる。

(183)は円筒形の頸部と受口状の口縁をもつもので、推定口径は9.2cmである。口縁端部に面はもたず、丸味をもって尖る。口縁部内外面はヨコナデ、頸部には撚りの弱い細い縄を押しもしくは回転させた縄文が見られる。胎土はやや粗、砂粒を含み焼成は良で淡橙褐色を呈する。

(185)は口縁部を欠き頸部のみ残存するもの。肩部に沈線が一条見えるので、それ以下の体部の横位文様帯もしくは無文帯を画するものであろう。

残存する頸部においては長さ約2.5cmほどのLRの縄文が、横位に3段回転施文されている。

内面はヨコナデ、器面の剝落が見られる。胎土は粗、砂粒を含み焼成は良。灰褐色を呈する。

(186)は長頸壺の頸部。磨耗が著しく文様等もわかりにくい、強く撚った無節の縄を全面に押しし回転施文し、その上に幅約5.5cmにわたって粗い櫛描横線を施したものである。櫛描文というよりむしろ沈線文と呼ぶべきような横線である。

(184)は受口状口縁の太頸壺である。推定口径は16.8cm、口縁端部に水平な面をもつ。口縁部外面にはLRの縄文が横位に施され、屈曲部には刷毛目原体による刻目が、頸部には一部無文部があるが縄文が施される。一方内面は4本/cmの粗い刷毛目調整の後ヨコナデされる。

胎土はやや粗く砂粒を含む。焼成は良く淡褐色ないし淡橙褐色を呈する。(187)はこの口縁部と同一個体と思われる頸部の破片である。

(188)は磨耗が著しいが、沈線で区画された横位文様帯の内部にLRの縄文を転がしたものである。文様帯が2帯と無文帯1帯が見られる体部上半の破片である。胎土は精良、砂粒はあまり含まない。焼成は良で淡黄褐色ないし淡橙褐色を呈する。

甕I類 (189~192) 刷毛目調整の甕である。SX22の項ですでに述べたが(191)はすぐ南に隣接するSX22西周溝出土の破片と接合した。このほか(187・189・190)も同様の結果となった。

(189)は完形に復元できた唯一のもので、口縁部から底部まで連続して全体の約2分の1が残存する。推定口径は20cm、器高は22.6cmをはかる。底径

5.4cmの平底の中心部には、直径約8mmの焼成前の穿孔が見られる。甕としての利用が考えられる。

底部からやや内弯気味に立ち上った体部は、あまり強く肩を張らずに頸部で少しくびれ、強く外反して口縁部に至る。口縁端部に明確な面はもたないが、やや面をなし、口縁部内面から施された刷毛目が見られる。

器面調整は外面が頸部から底部まで縦位の刷毛目(6~7本/cm)、口縁内面が横位の刷毛目である。なお、口縁部内外面は刷毛目調整の後、ヨコナデされる。胎土は並、焼成はやや良で淡黄褐色を呈する。内外面の一部に黒斑を有する。

(190)は(189)によく似た器形である。口縁部がごく一部と底部全部が残存する。破片が小さいため推定口径には問題が残るが、約20cmと考えられる。(189)に比して口縁端部が丸くおさまられるのと、体部外面の刷毛目が粗い。刷毛目は4本/cmであるが、口縁部内面に横位に施される刷毛目は10本/cmと細かなものである。SX22西周溝出土の破片と接合した。

胎土は精良、砂粒を含む。焼成は良く淡褐色を呈する。

(191)は口縁部がほぼ残っている。口径は20.2cmである。短かくてあまり強く外反しない口縁部は、端部で丸味をもちながら、やや垂下する。また頸部のくびれも弱く、体部も強く張らない。

体部の調整は板状工具で縦位にナデたような痕跡を残している。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面には指頭圧痕が残る。

胎土は精良で砂粒をあまり含まない。焼成は良、色調は淡黄灰色を呈する。外面に煤の付着が見られる。(195)がこの土器の底部かもしれない。

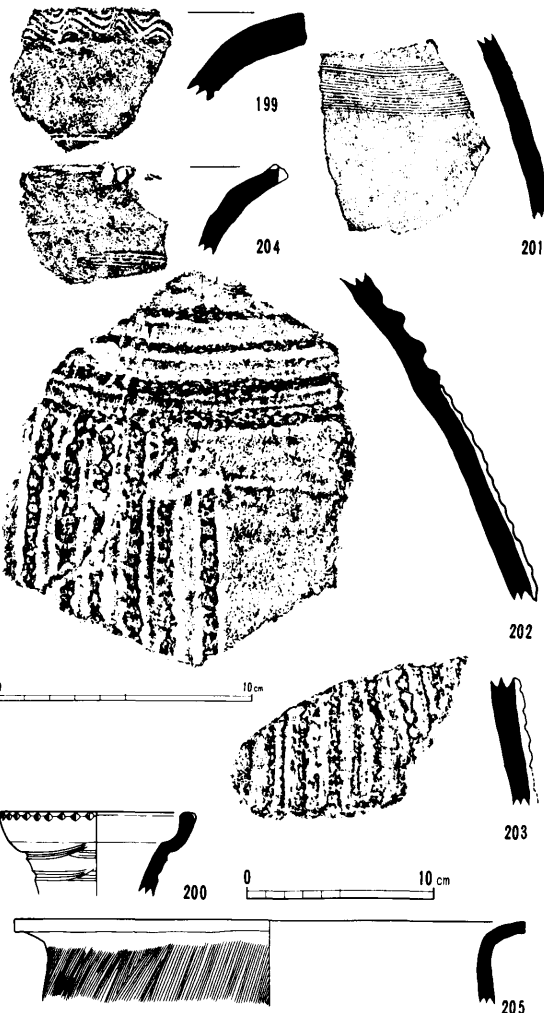
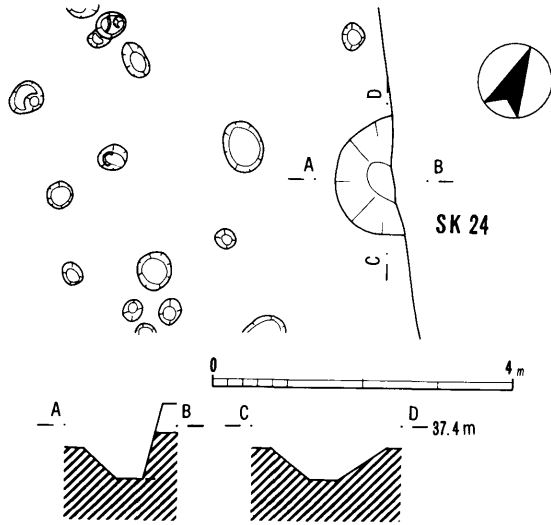
(192)は小片である。口縁端面に刻目、頸部に横位の刷毛目が見られる。

底部 (193~195) (193)は底径が8.4cmのやや大型の壺の底部と考えられる。底面はていねいに乱ナデされ平滑に仕上げられているほか、体部にかけてもていねいに磨かれている。

胎土は並、砂粒を含み焼成は良いが磨耗が著しい。淡橙褐色ないし淡褐色を呈する。(156)の底部かもしれない。

(194) は残存部分が小さく、底径の推定にやや無理がある。体部外面に細かな刷毛目が残る。

(195) は甕の底部である。全体の4分の1程度しか残存しないが、推定底径5.6cmである。底面は乱ナデ、体部には3本/cm粗い刷毛目が縦位に施さ



第6-25図 SK 24実測図 (1:100), 出土遺物 (1:3ただし200・205・206は1:4)

れる。

胎土は並、砂粒を多く含み焼成は良。淡褐色を呈する。(191)の底部の可能性はある。

石製品 (196~198) (196)はサヌカイト製の凸基有茎式の石鏃である。最大長2.6cm、最大幅1.1cm、最大厚0.2cm、重量は0.74gである。両側縁に細かな両面調整が施されている。縄文時代に属するものであろうか。

(197・198)は敲石である。(197)は最大長17.5cm、最大幅5.2cm、最大厚3.4cm、重量469gである。石材は絹雲母の入った石英片岩である。表面および裏面に若干の打痕が見られる。

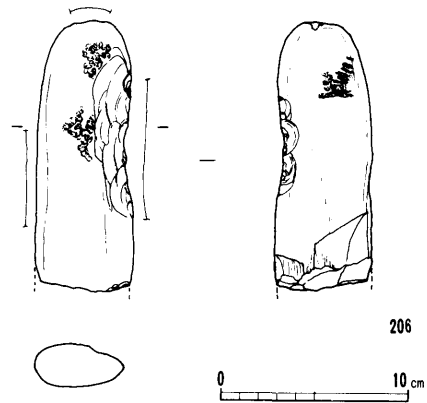
(198)は最大長12.6cm、最大幅2.4cm、最大厚1.7cm、重量75.4gである。緑色片岩を使い、下端面に打痕が見られる。以上(197・198)も縄文時代に属するものであろうか。

SK 24 A地区東端部に位置する。SX 22東周溝より4m東にあって、一部は発掘区外へ延びるため規模、形状は不明である。検出面からの深さは40cmで摺鉢状をなす。底面よりかなり浮いて弥生土器片や河原石が出土した。発掘壁面の断面を見ると、検出面よりかなり上から切り込んでいることがわかった。

〔出土遺物〕

壺 (199~203) 小片が多く器形のわかるものはない。(199)は大型の広口壺の口縁部片で、端部に垂直方向に面をもち、櫛描波状文が施される。頸部にもわずかに櫛描横線文が見られる。

(200)は推定口径10.4cmの受口状口縁をもつ頸壺である。口縁端部はやや肥厚し水平な面をもつ。



端部外面にヘラキザミが施される。

口縁部内面は強くヨコナデされ凹んでいる。そのため頸部との境には稜ができています。頸部には小竹管によると思われる沈線が右回りで二条施されている。

胎土は並、砂粒を含み焼成は並、黄褐色を呈する。東日本的な土器である。

(201) は体部上半の破片で、原体幅 8 cm で 6 本を数える櫛状工具による横線文が施される。この横線文帯は三帯で構成され、上下には区画の沈線は見られない。無文部はていねいなヘラミガキが施されている。

胎土はやや粗、金雲母、砂粒を含み焼成は良。褐色ないし明褐色を呈する。

(202・203) は同一個体で大型壺の体部上半の破片である。刻目を有する隆帯を横位に 4 帯、1 cm ほどの間隔をあけて貼りつけ、その上下に縦位に隆帯を貼りつけている。この縦位の隆帯は残存する破片からは 6 帯が確認できる。隆帯の刻目は刷毛原体によるものと思われる。

胎土は並、石英・長石の多い砂粒を含み、焼成は良である。淡褐色を呈する。

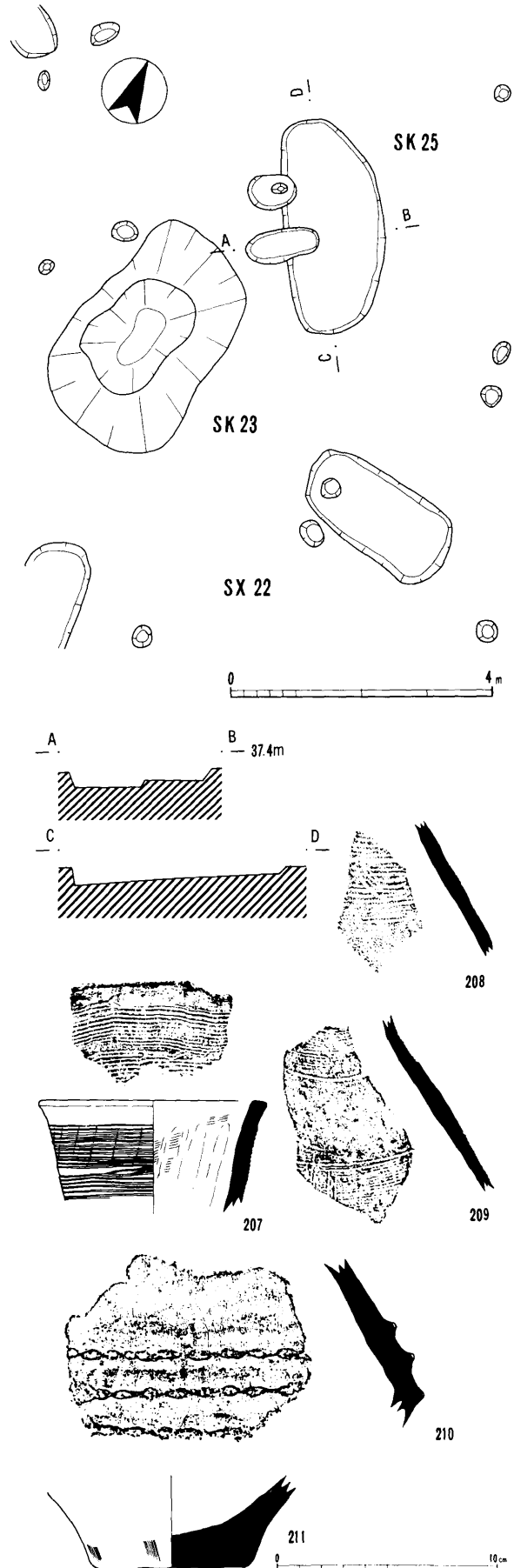
県下でもあまり類例を見ない土器である。

甕 I 類 (204・205) (204) はやや厚手の口縁部片である。端部に面をもち刷毛原体によると思われる刻目を有する。口縁部内外面はヨコナデ、頸部外面には刷毛目が見られる。外面に煤が付着する。

(205) は推定口径 27 cm、強く外反する口縁部は端部で垂直な面をもつ。この端面には刷毛原体による波状文が施された痕跡があるが、ヨコナデによってほとんど消されている。体部には 4 本/cm の刷毛目が左下りに施される。口縁部内面は横位の刷毛目の後ヨコナデ。

胎土は粗、砂粒を含み焼成はやや良。外面は暗褐色、内面は明褐色を呈する。

石製品 (206) かなり風化の進んだ緑色片岩を使用した敲石である。表裏面に打痕、右側面に敲打による剝離面が見られる。両側面と上端部に敲打痕が見られる。下半が欠失するが、残存部分の最大長は 14.2 cm、最大幅 5.2 cm、最大厚 2.3 cm、重量 285 g である。



第 6-26 図 SK 25 実測図 (1 : 100), 出土遺物 (1 : 3)

S K 25 S K 23の北に隣接する3.2m×1.5mの長楕円形の土坑である。検出面からの深さは20~30cmで、底面は平坦である。

埋土中から少量の弥生土器が出土した。

〔出土遺物〕

壺 (207~210) 櫛描文を施す (207~209) はI類に入るが、(210) は不明である。

(207) は推定口径が10.4cm、頸部から斜上方に開く直口の細頸壺である。口縁端部はほぼ水平な面をもち、内外面はヨコナデされる。頸部には二枚貝による横線が複帯構成で施される。原体の二枚貝の幅は2.0cmで、描き継ぎか意図的かは不明であるが、約1cm間隔で施文を一時止めた二枚貝の腹縁圧痕が見られ、ちょうど簾状文のように見える。

頸部内面には指頭圧痕が残る。胎土は粗、砂粒を含み焼成は良。明褐色を呈する。

(208) は櫛描横線文に櫛描波状文が施された体部片である。

(209) は複帯構成の櫛描横線文帯と無文帯が見られる体部片である。器表全体に縦位の細かな刷毛目を施した後、横線文を施したうえ縦直線を施す。その後、無文部をヘラミカキし、横線文帯の上下をヘラ描沈線で区画している。

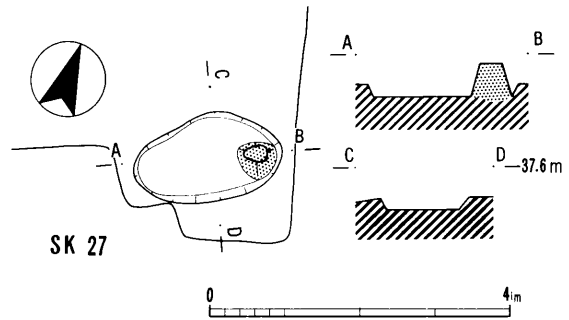
胎土は良、砂粒を含み焼成は良である。黄褐色を呈する。

(210) は体部上半の最大径付近の破片である。三帯の有刻突帯が横位に貼り付けられている。刻みはヘラ状の工具であろうか。突帯間はいねいにヨコナデされている。

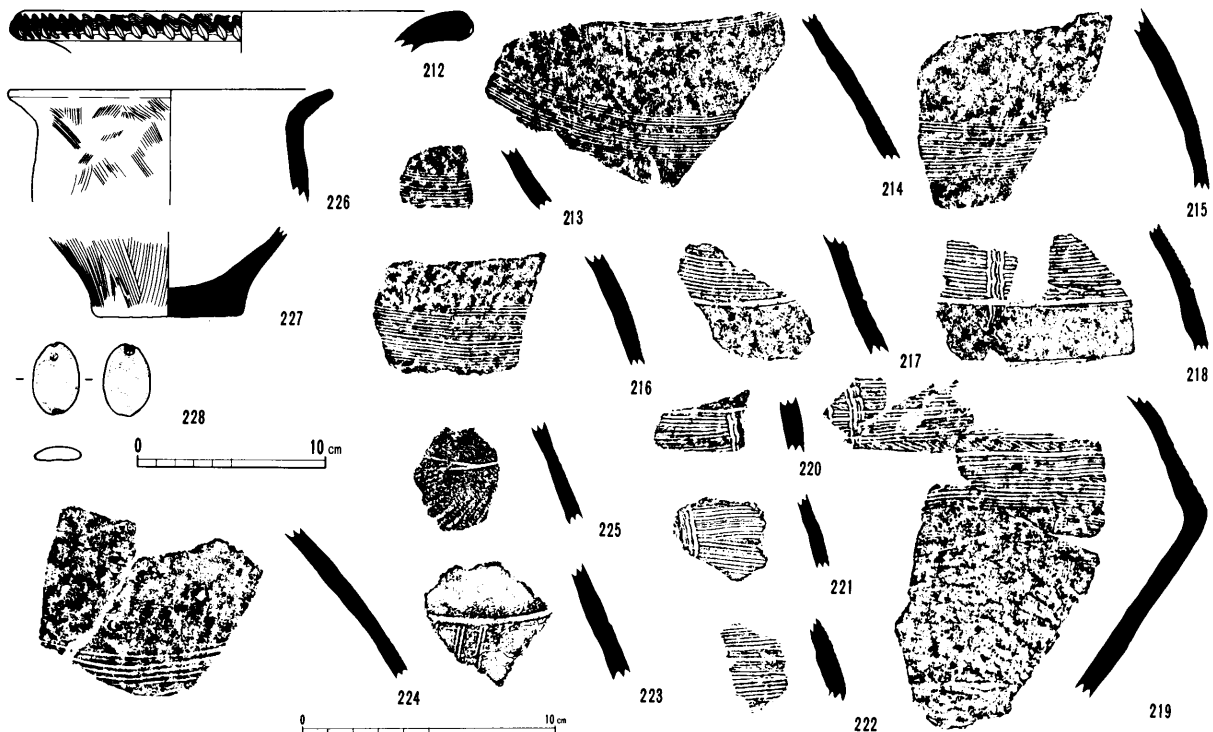
胎土は並、砂粒を含み、焼成は良である。表面は暗褐色ないし褐色、内面は暗褐色を呈する。

底部 (211) 壺の底部である。推定底径は7.0cmである。底部外面は剝落が著しい。体部外面には7本/cmの刷毛目がわずかに残るが、ほとんどヘラミカキで消されている。胎土は並、砂粒を多く含む。焼成は良、淡黄褐色を呈する。

S K 27 A地区東南端にて検出。2.0m×1.1mの楕



第6-27図 S K 27実測図 (1:100) 網目は焼土



第6-28図 S K 27出土遺物 (1:3ただし212・226・227は1:4, 228は1:2)

円形をした浅い土坑である。検出面からの深さは約20cmである。北東隅に焼土が見られたが、攪乱された薄いものである。埋土中より若干の弥生土器および石器が出土した。

〔出土遺物〕

壺Ⅰ類 (212~224) 全部で5個体ある。(212)はⅠ-B類に入る大型の太頸壺の口縁部片で、推定口径は24cm。強く外反した口縁部はやや肥厚して丸くおさまられる。刷毛目を施した後に端部下半にヘラミガミが施される。内外面ともヨコナデ。

胎土は粗、砂粒を若干含み、焼成は良く硬い。橙褐色ないし暗褐色を呈する。

(213~216)は同一個体。いずれも体部上半の破片で、原体幅8cmで6本の櫛描横線文3帯で構成される横線文帯と無文帯から成る。横線文帯の上下を画する沈線はない。無文部はヘラミガキされるが、一部に第一次調整の縦位の細かな刷毛目が見られる。

胎土は良、金雲母、砂粒を若干含む。焼成は良、明褐色を呈する。

(217~222)は同一個体である。算盤玉状の体部が残存する。(217)は頸部から肩部にかけての破片で、沈線で区画された櫛描横線文帯が見られる。

(218)は体上部の横線文帯と無文帯が見られ、横線文帯には櫛描の縦波線が施される。

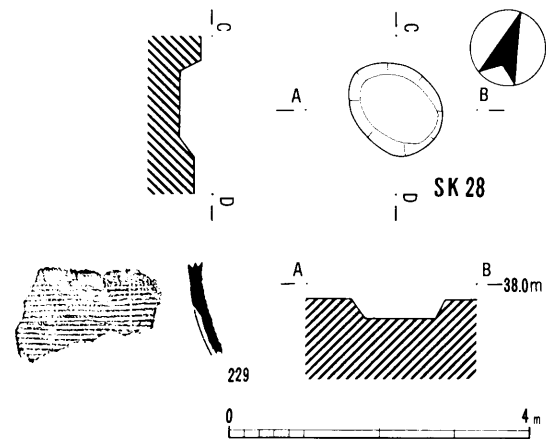
(219)は体部最大径部を挟んで上半部と下半部が残る。横線文帯は2帯が確認できるが、その間の無文帯は非常に狭く、その間隔はわずかに5mmである。そのためかヘラミガキがなされておらず、右下りの刷毛目が残っている。また最下段の文様帯は屈曲部まで達しているためか、文様帯の下端を区画する沈線は見られない。なお、屈曲部以下の外面はヘラミガキされる。一方、内面は体部下半に5本/cmの刷毛目が横位に施されている。

胎土は並だが砂粒を多く含み、金雲母も含まれる。焼成は良く灰褐色を呈する。

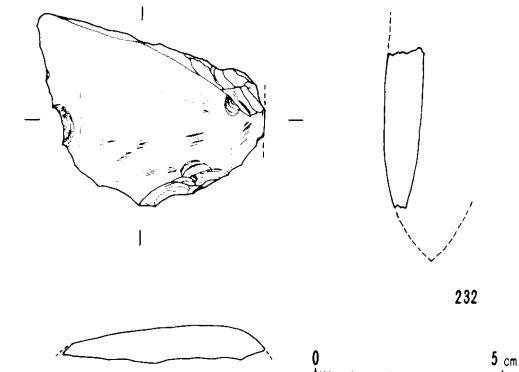
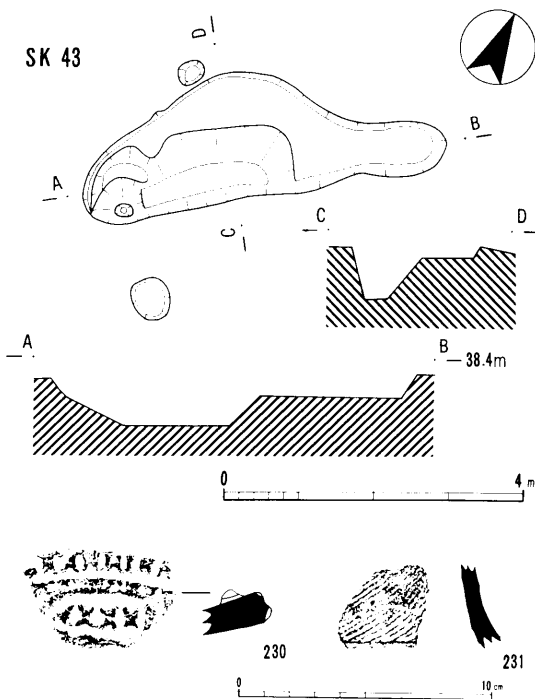
(223)は櫛描横線文帯に縦直線を施し、沈線で文様帯の上下端を区画するもの。(224)は沈線で区画しない横線文帯をもつものである。

壺Ⅱ類 (225) 小片が1点出土している。体部上半の破片で、沈線で区画された文様帯の内部に縄文を転がすものである。

甕Ⅰ類 (226) 全体にシャープさのない刷毛目調整の甕である。頸部は9mmほどの厚さがあり、ゆる



第6-29図 SK 28実測図 (1:100), 出土遺物 (1:3)



第6-30図 SK 43実測図 (1:100), 出土遺物 (1:3ただし232は1:2)

く外反する口縁部は細くなり、端部は丸くおさめられる。口縁部外面はヨコナデ、内面は頸部までヨコナデ。頸部から体部にかけて外面は7本/cmの刷毛目が多方向に施されている。

胎土は並、砂粒はあまり含まず焼成は良で堅緻。橙褐色を呈する。

底部 (227) 甕の底部であろうか。4分の1ほど残存している。推定底径は8cmで底面近くまで5本/cmの刷毛目が残っている。

石製品 (228) 最大長3.8cm、最大幅2.5cm、最大厚0.8cm、重量13.3gの石錘である。石材は緑色片岩を使い、上下端に若干の打ち欠きを施している。

S K 28 B地区東壁中央部付近で検出。東西1.3m、南北1.1mの長円形の土坑で、検出面からの深さは約30cmほどである。埋土中より微量の弥生土器片が出土した。

〔出土遺物〕

壺 I 類 (229) 図示し得た遺物は1点のみである。頸部の破片で、縦位の刷毛目調整の後、原体幅1.3cmで7本を数える櫛描横線文が複帯構成で施される。内面には凹部に微量の赤色顔料が付着している。

胎土は良、砂粒を含み焼成は良。淡灰褐色を呈する。

S K 43 S B 45の南44mに位置する。4.9m×1.7mの不定形な土坑である。検出面の深さは30~70cmである。底面はテラス状の平坦な部分と、一部はそれからさらに深くなる。埋土中より微量の弥生土器片が出土した。

〔出土遺物〕

壺 (230・231) いずれも小片である。(230)は口縁部片で端面の上下端にヘラキザミが施され、口縁部内面に長さ3cmの粘土紐を貼り付け、ヘラで刻んで3個の瘤状突起のようにしている。

(231)は縄文の施された頸部片である。縄の撚りはLRで長さは2cmほどのものである。

石製品 (232) 磨製石斧の小破片である。研磨面は非常に平滑に仕上げられている。石材はやや軟質な砂岩を使用している。

その他の弥生時代遺構

これまでに述べてきた遺構以外に、図示できる破

片が出土しなかった遺構がいくつかある。

S K 8 A地区の南端近くに位置する。東西1.7m、南北2.0mの略円形で、検出面からの深さは10cmほどの浅い土坑である。

S K 32 B地区東端付近に位置する。東西1.3m、南北2.5mの隅丸長方形に近いプランで、検出面からの深さは10~14cmほどの土坑である。

S K 40 S B 45の南東に隣接する。東西2.6m、南北1.1mの長楕円形の土坑である。検出面からの深さは40cmで、壁面の傾斜はゆるやかである。微量の弥生土器片のほかに、チャートの剝片が10点ほど出土している。

S K 42 S B 45の南に隣接し、S K 40にも近い。東西3.6m南北2.3mの不整形な土坑で、検出面からの深さは17cmほどで、底面はやや凹凸はあるがほぼ平坦である。

S K 47 B地区南端付近に位置する。東西が4.5m、南北が1.8mの東西に細長く中央部が幅広で深い土坑である。検出面からの深さは、最も深い中央部で100cmほどである。上面で石鏃(37)が出土したほか、微量の弥生土器片が出土している。

S K 49 S B 45の東方約12mに位置する。東西3.5m、南北0.9mの細長い土坑である。検出面の深さは17~30cmである。

以上の土器片が出土した土坑のほか、土器片の出土しなかった土坑やピットでも、埋土が同じものがほとんどであり、同時代のものと思われる。

〔遺物包含層出土の土器〕

壺 I 類 (233~238) いずれも体部上半の破片である。(233)は複帯構成の櫛描横線文帯のみ、(234)は櫛描横線文帯に縦弧線が、(235)は対向する縦弧線、(236)は縦短線が、(237)はやや弧状の縦直線が施される。(238)は横位の刷毛目が施された後、櫛描縦弧線が施される。この破片には横位文様帯は見られない。

壺 I 類 (239) 体部最大径部の屈曲部上部の破片で、ヘラミガキの無文部とLRの縄文が施された文様帯が見られる。

以上のほか(240・241)がある。(240)は横位の有刻突帯が四条見られる。刻みは刷毛原体による。

(241) は最大径部に近い。ヘラキザミの有刻突帯が一条見られる。

甕 I 類 (242・243) (242) は推定口径20.4cmの甕である。ゆるく短かめに外反する口縁部は丸味をもっておさめられ、ヘラキザミが施されている。内外面刷毛目調整。

胎土は、砂粒を含み焼成は良。黄褐色を呈する。(243) も同様な破片であるが、口縁端面の上下端に

刻目がある。内面は横位の、外面は縦位の刷毛目が施されている。

底部 (245・246) (245) は推定底径4.4cm、外面には細かい刷毛目が残る。(246) は第一次調査時に出土したもので、S B14に近い試掘坑で出土している。底径は7.2cm、内外面に細かな刷毛目が残る。胎土は並で砂粒を含み、焼成は良好である。橙色ないし橙褐色を呈する。壺の底部であろう。

3. 歴史時代の遺構と遺物

弥生時代以降の遺構には、若干の土坑と溝、土坑墓、ピット等がある。平安時代前期から室町時代にかけての遺物が出土している。

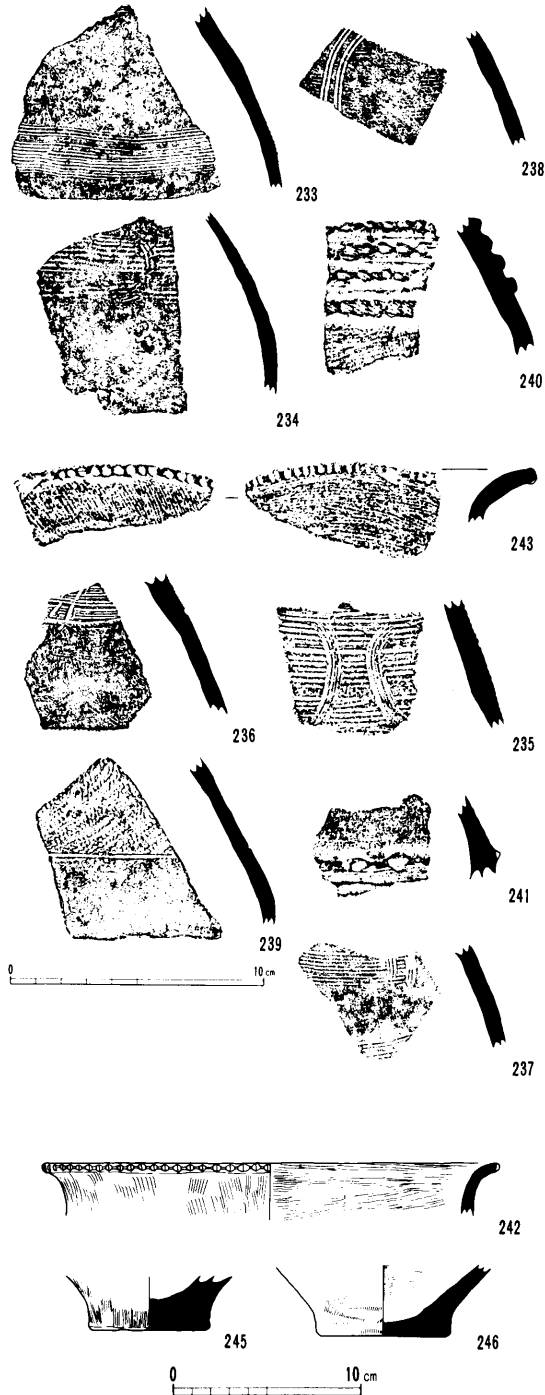
A. 土坑墓

S X54 S B45の北東5.5mに位置する。南北1.5m、東西1.0mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは20cmである。底部には横三列に川原石が配されている。河原石は10数cmから30cm程度のものが一列に3～4個使用され、その間に20cm×30cm程の石が落ち込んでいる。中央部やや北寄りて土師器小皿(247)が伏せた状態で検出された。そのほか釘の破片が数点出土した。これらのことからS X54は箱形の木棺を使用したものと考えられる。また被葬者が大人であるとしたら、掘形の規模がやや小さいことから屈葬が考えられよう。そして土師器の出土状況や、掘形の長軸方向がN14.8° Wであることから、北頭位が推定できよう。なお、人骨の出土はなかった。

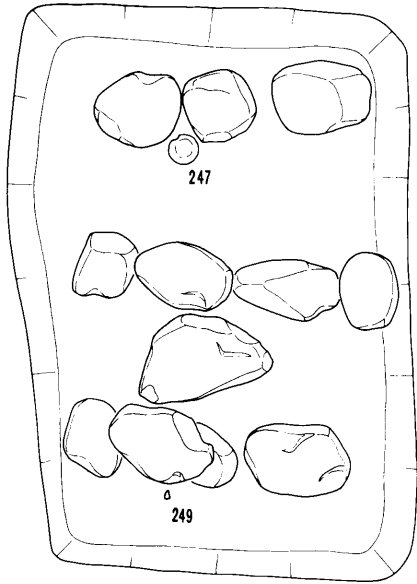
〔出土遺物〕

土師器皿 (247) 底面に棺台として置かれた川原石の上面とほぼ同じレベルで、伏せた状態で出土した。口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形である。口径は8.2cm、器高は1.3cmである。ユビオサエにて成形されており、口縁部内外面は若干ナデ調整されるものの、ほとんど未調整である。器壁は底部で3mm、体部で4mmとやや厚い。口縁部はやや尖り気味となっている。胎土は良、焼成も良く淡褐色を呈する。室町時代後半もしくは近世に入るのであろうか。

釘 (248～251) 鉄製の角釘である。太さにくつか種類が見られるが、いずれも敲打部は折り曲げられている。

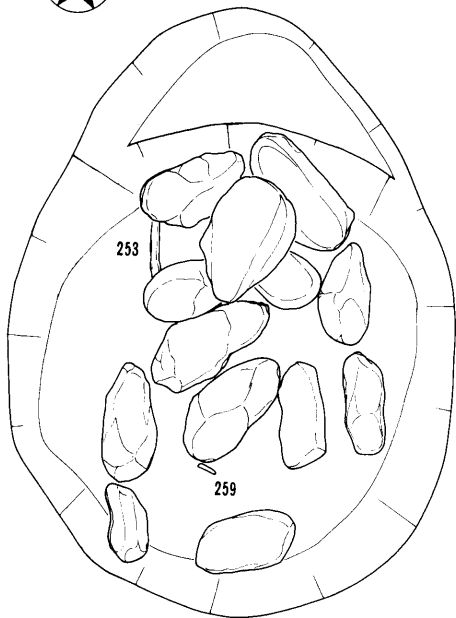
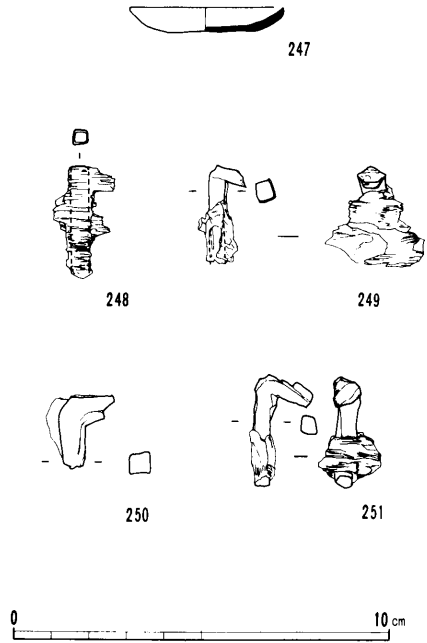
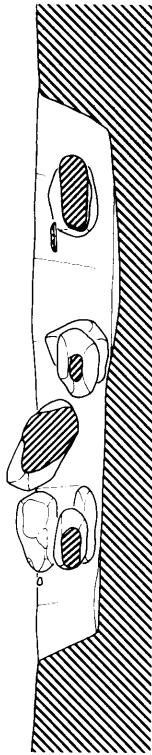


第6-31図 包含層出土弥生土器 (1:3ただし242・245・246は1:4)



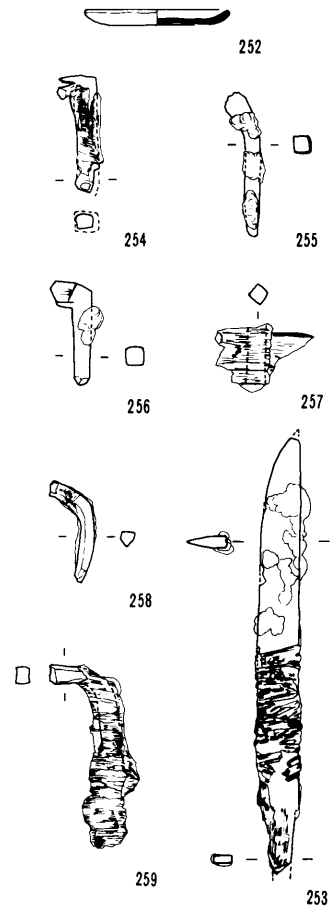
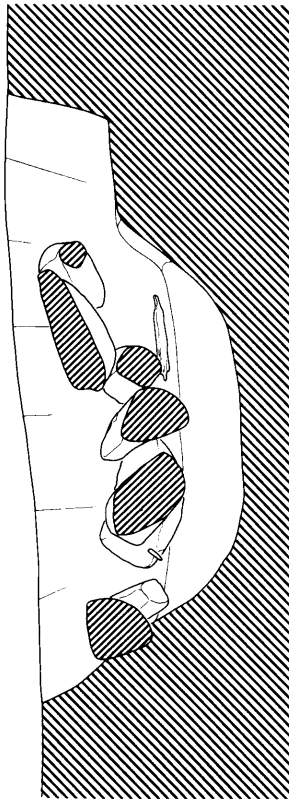
SX 54

38.0 m



SX 55

38.4 m



第6-32図 SX 54, 55実測図 (1 : 20) 出土遺物 (247・252・253・は1 : 4、他は1 : 2)

(248・249・251) には棺材の木質が付着している。

S X 55 S B 45の西南西約13mに位置する。東西1.2m、南北1.6mの楕円形の掘形である。掘形内北部に一部分平坦部がある。

検出面からの深さは約60cmで、底面は中央部がゆるやかに凹む。底面から約15cmほど浮いたレベルで、20~30cm大の川原石が落ち込んだ状態で検出された。この川原石の下面が棺底部に近いものと考えられよう。

底部に接して刀子(253)が、石の間から土師器皿(252)と釘が出土した。しかし人骨は出土しなかった。掘形の長軸の方向はN8.2°Wである。

S X 54と異なる平面形態ではあるが、釘の出土から木棺墓であったことがわかる。この木棺は桶棺の形態が考えられ、S X 54と同時期のものであろう。

〔出土遺物〕

土師器皿(252) 棺内に落ち込んだと考えられる川原石の間から、割れた状態で出土した。口径が7.5cmで器高が0.8cmの浅い小皿である。ユビオサエにより成形され、若干のナデ調整は認められるが、ほとんど未調整である。器壁は底部で2.5mm、体部から口縁部までがやや厚く4mm、口縁端部はそのまま

で丸味をもっておさめられる。

胎土は良、焼成も良で、淡い乳褐色を呈する。

刀子(253) 切先と着柄部の端部を少し欠失する。現存長は23.2cm、幅2.3cm、刃渡り20.5cmである。

刃部のおよそ半分ほどには葛のような繊維が巻かれている。また柄部には若干の木質が残存する。

釘(254~259) 鉄製の角釘である。太さは4mm前後である。(258)は断面が三角形に近く、先端部であろう。

敲打部は折り曲げられており、(254・257・259)には棺材の木質が付着している。

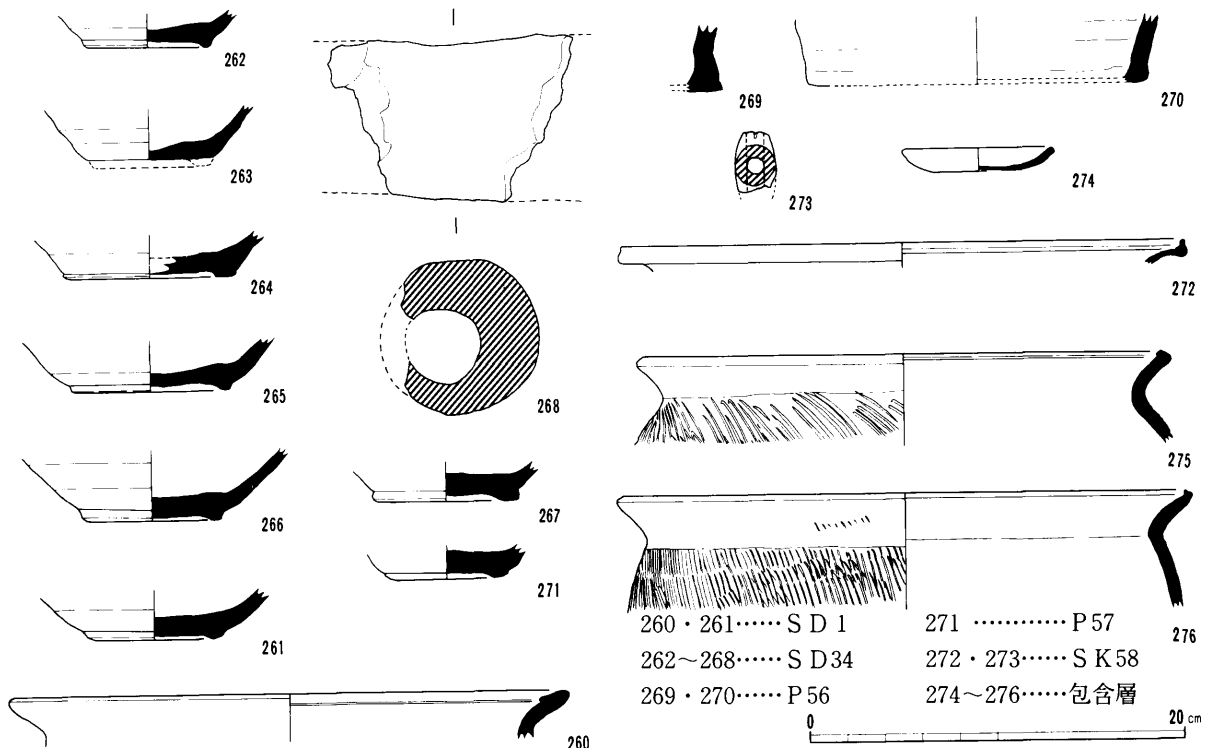
B. 溝

S D 1 A地区西半の中央部で検出されたもので、幅0.6m、深さ40cmで断面が逆台形の溝である。

発掘区の南壁から北壁まで直線的に続いている。北は発掘区外へも真直ぐ伸びている。一方、南はB地区では延長が確認されなかったところから、未掘の道路部分まで掘削されていたものと思われる。埋土は暗褐色土で、埋土中より土師器鍋(260)や山茶碗片(261)、弥生土器片などが出土した。

〔出土遺物〕

土師器鍋(260) 小破片からの推定復元のため口径に問題があるかもしれないが、およそ30cmで、ゆ



第6-33図 その他の遺構および包含層出土遺物(1:4)

るやかに外反する口縁部は内側に折り曲げられ、ヨコナデされている。器厚は7mmとやや厚い。

胎土は並、石英粒を多く含み焼成は良、淡黄褐色ないし淡橙色を呈する。

山茶碗 (261) 底部の約2分の1が残存する。底部には粉殻痕のない低い高台がつく。高台内側はヨコナデ、また底部中心部も丸くナデられる。ナデ残された部分には糸切り痕が残る。胎土はやや粗、焼成は良いが軟質で磨耗しやすい。淡灰色を呈す。

以上SD1出土の土器2点は平安時代末期～鎌倉時代の所産と考えられる。

SD12 A地区のほぼ中央部に位置し、SD1と約19mの間隔でほぼ平行する。調査区の南北とも発掘区外へ延びるが、南はB地区までは延びない。溝幅は北壁付近で狭くなり0.2m、中央部から南で0.7m、深さは11～34cm、断面形は逆台形である。

埋土はSD1と同じ暗褐色土で、遺物としては混入と考えられる弥生土器片が微量出土したにとどまる。しかし埋土等の状況からSD1と同じものと考えられる。

SD21 A地区の東部中央付近に位置する浅い溝である。削平のためであろうか、調査区の南北で途切れる。SD12とは北端部で約15m、南端部で約18mの距離で概ね平行する。溝幅は0.4m、深さ4～10cmは断面は逆台形である。

埋土はSD1、SD12と同様の暗褐色土で、やはり混入と考えられる弥生土器片が微量出土した以外はない。しかし埋土等の状況からSD1、SD12と同時期のものと考えられる。

SD34 B地区の中央部やや東寄りを南北に延びる大溝である。南北とも発掘区外へ延びるが、北はA地区のSD21とは若干のズレがあり続かないようである。また南もすぐ段丘崖が迫り、それ以上南へ延びるものではない。

検出した範囲での溝幅は0.6～2.2m、深さは40～100cmで中央部が幅、深さとも最大である。断面は逆台形である。南から北へ流れるようである。

暗褐色の埋土中から山茶碗片およびフイゴの羽口、混入と考えられる弥生土器片などが少量出土した。これらの遺物からSD34の時期として平安時代末期～鎌倉時代が考えられる。

〔出土遺物〕

山茶碗 (262～267) 全部で6個体出土したが、すべて破片で完形に復元できるものはない。いずれも低くつぶれた高台が付くものである、(263)は高台がはがれてしまって不明だが(265)を除くすべてに粉殻痕が見られる。(262)は胎土が粗く、砂粒を多く含み他のものやや異なる印象をうける。また高台の粘土紐も他に比べ細く、産地が異なるものかもしれない。藤沢編年のⅢ段階⁹5ないし6型式。

フイゴ羽口 (268) 直径8cm、残存部分の長さ12cm、空気孔径3.4cmである。内外面ともよく焼けており、外面は黒灰色、内面は明褐色になっている。

胎土は粗、砂粒を多く含んでいる。

SD35 B地区の大溝SD34中央部で西側に接して平行に延びる、全長33.6mの溝である。

溝幅は0.7～0.9m、深さは24～40cmである。一部SD34と重複する部分があるが、埋土が非常によく似ているため、切り合い関係も判断に誤りがあるかもしれないが、SD35の方がSD34よりも古い。

この溝からは遺物の出土はなかった。

C. ピット

P56 B地区中央部にて検出されたものである。直径60cm、検出面からの深さ48cmでほぼ円形を呈するピットである。

埋土中より志摩式製塩土器が出土した。

〔出土遺物〕

製塩土器 (269・270) いずれも小片で、口縁部を欠く。(270)は推定した口径に問題があるかもしれない。胎土は精良だが最大3mmまでの砂粒を多く含む。この砂粒は円磨がやや進んでいるもので、長石粒が目立つ。

なお、このほかにB地区中央部の当該時期包含層が残る部分から、約20片の製塩土器小片が出土している。

P57 B地区のほぼ中央部、SB45の南約20mに位置する。直径90cmの円形を呈し、検出面からの深さは40cmである。埋土中より山茶碗底部(271)が出土した。

〔出土遺物〕

山茶碗 (271) 磨耗および部分的破損が著しい。低くつぶれた高台が貼りつけられ、粉殻痕が見られ

る。胎土はやや粗。焼成は良いが磨耗しやすく、ザラザラした質感である。

D. 土坑

S K 58 A地区のS B 14の南約10mに位置する。すぐ南には弥生時代の土坑S K 10がある。東西1.9m、南北0.9mの長楕円形を呈し、検出面からの深さは130cmである。底面は平坦で直径約0.6mの円形である。埋土中より土師器鍋(272)、土錘(273)が出土した。

室町時代後半以降^⑧のものであろう。

〔出土遺物〕

土師器鍋(272) 口縁部の一部が出土した。推定口径は30cmで、内側へ折り返された口縁部は強くヨコナデされ、つまみ上げられている。内外面ともヨコナデ。胎土は精良、焼成は並、褐色ないし淡褐色を呈する。外面には煤が付着する。

土錘(273) 下部を欠損する。現存長3.0cm、最大幅2.2cm、中空部径0.9cm、重量6.5gをはかる。上端部に浅い溝状の磨耗痕がある。しばられた綱糸の痕跡であろう。胎土はやや良、砂粒を含み焼成は良である。淡褐色を呈する。

〔包含層出土の遺物〕

歴史時代の包含層はB地区中央部付近にしか残存していなかったため、出土量は極少量であった。平安時代から近世初頭頃のものまでが出土した。

土師器皿(274) B地区出土の小皿である。ユビオサエにより成形され外面は未調整で凹凸が残る。内面はナデられている。口径は7.8~8.2cmとややゆがみがある。器高は1.3cmである。手法などはSX55出土の土師器皿に近く、室町時代後半以降、あるいは近世に入るものであろう。

土師器甕(275・276) いずれもB地区中央部付近から出土の小破片である。

推定口径は(275)が27.6cm、(276)が30cmである。く字形に外反する口縁部は端部で内側上方へつままれ、端部は若干の面をなす。口縁部内外面ヨコナデ。体部には(275)は2~3本/cmの、(276)は3本/cmの粗い刷毛目が施される。

胎土は(275)がやや粗、(276)は良、焼成はいずれも良好である。(275)が淡黄褐色、(276)が黄褐色を呈する。斎宮編年^⑨の平安時代前Ⅱ期のものであろう。

4. 結 語

花ノ木遺跡は、櫛田川中流域の低位段丘面上に営なまれた弥生時代中期中葉を盛期とする遺跡である。

今回の調査は道路予定地内だけの限られた部分だけの調査ではあったが、該期の竪穴住居跡や方形周溝墓、土坑などが検出され、小規模な集落が営なまれていたことが判明した。また明確な遺構は検出されなかったが、縄文時代早期、中期、後期、晩期の遺物が少量ながら出土したほか、平安時代から鎌倉、室町時代あるいは近世初頭頃まで、断続的な生活の痕跡が検出された。

このうち、検出された遺構・遺物の大半を占める弥生時代の遺構・遺物を中心に、若干のまとめをしたい。

1. 弥生時代の遺構について

円形プランを有する竪穴住居跡が2棟検出された。櫛田川流域においては、本遺跡例を最も上流として、

約6km下流左岸の上寺遺跡^⑩で1棟、約12km下流右岸の古里遺跡C地区^⑪で1棟のほか、古里地区における国史跡斎宮跡^⑫の発掘調査で4棟の弥生時代中期に属する竪穴住居跡が検出されている。その他、周辺地域においては度会郡玉城町上地山遺跡^⑬、伊勢市中ノ垣外遺跡^⑭、松阪市堂ノ後遺跡^⑮、一志郡嬉野町午前坊遺跡^⑯、同郡一志町鳥居本遺跡^⑰などでの検出例がある。

今回の調査において検出された2棟の住居跡は、出土遺物から中期中葉の古い段階と考えられる。古里遺跡C地区S B 1や上寺遺跡S B 21がこの時期に近いと思われるが、出土遺物が微量のため詳細なことはわからない。平面プランについてみると、本遺跡では円形であるが、上寺遺跡例は長方形、古里遺跡例は円形であった。県内での大まかな傾向としては円形を基調として、長方形ないし方形のものがかなりある。これは中期中葉を境として方形プランが円形プランにとって変わってゆく状況を示しているの

であろう。

それが伊勢湾西岸地域、あるいは本遺跡の属する南勢地域において、中葉のどの時期に画期が求められるのか、またいかなる理由で変化するのか現時点においては検討が不十分であり、今後の課題のひとつとしたい。

ところで、今回検出した住居跡ではいずれも柱穴は不明確であった。しかしSB14では第6-34図に示すようにP1~P4を支柱穴と想定できる。しかし確証はなくP6なども考えられよう。

またSB14では中央部床面に炉穴と考えられる炭化物混りの小土坑が検出された。この土坑は壁面や底面が赤変しておらず、この土坑に灰を入れ、その上で火を焚いたものであろう。

次に方形周溝墓SX22についてであるが、平面形態としては四隅の切れるタイプのもので、石黒立人氏の分類のA4型にあたる。ただ各周溝が余りに短いことや遺物の出土状況等から、方形周溝墓とするのに若干の疑問は残るが、削平等のことも考え合わせ、方形周溝墓と判断した。

このSX22は発掘区東壁に近いので、単独のものであるか、それとも何基かの方形周溝墓が調査区外へ広がって接続して群をなし、墓域を形成するのかが明らかにできなかった。このことはSX22が住居跡SB14やSB45に接近して営まれていることと関

連して、居住域と墓域との関係がどのようなものであったかという集落構造追求の面で興味深い。

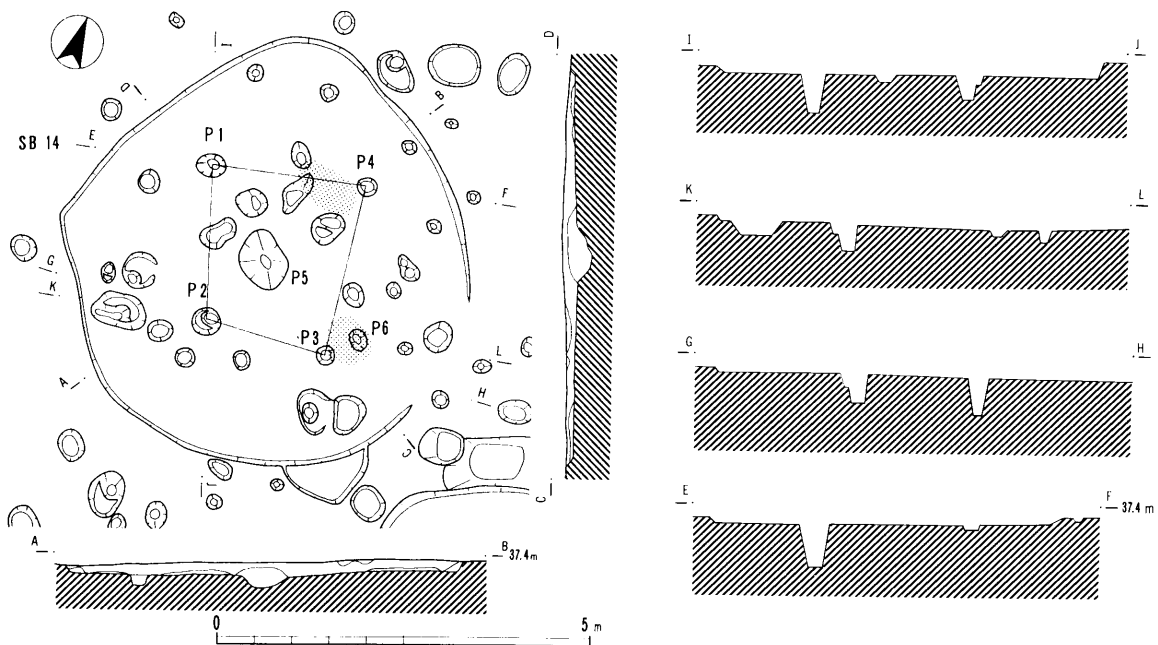
ところで、このSX22出土の遺物は、すぐ北に隣接するSK23出土の遺物と4個体の土器(壺1、甕3)が接合した。それぞれの遺構の性格をどのように考えるかも問題である。ただSK23の遺物の出土状況は、破損した土器や石を投げ込んだような状態で、完形もしくはほぼ完形に復元できるような土器はなく、土坑墓の性格は考えにくいのではなかろうか。

その他の土坑等の遺構についてはここでは述べないが、今回検出した弥生時代中期の遺構・遺物については、さほどの時期差はないものと思われる、短期間の間に営なまれ廃棄されたもののものであろう。

2. 弥生時代の遺物について

本遺跡から出土した弥生土器はすべて中期に属するものである。中でも中期中葉の古い部分のものが多く、一部前葉のものを含んでいる。

これらの土器は尾張南西部地方と共通の特色を有する、きわめて東海的な土器であり、中葉後半に畿内の土器が盛行するのと好対称をなす。一部に前葉の朝日式が認められるが(52~58・207)、その他は貝田町式の古段階に相当するものである。中には前型式の要素を残すものもみられ、古相を帯



第6-34図 SB14実測図(1:100)

びたものも多く、朝日式と貝田町式の間的位置、もしくは貝田町式最古段階の土器群として把握できそうである。

当該時期の遺物については、県内でも出土量が乏しく、しかも散発的なものであったことなどから、研究は進んでいない。今回の資料はかなりまとまったものとして好資料となろう。

出土した器種には壺形土器、甕形土器、鉢形土器があり、高杯形や蓋形の土器は出土していない。壺形土器には広口壺、太頸壺、細頸壺、長頸壺等がある。櫛状工具や二枚貝腹縁を用いた櫛目文で器面を飾る。ヘラ描沈線文や条痕文は見られない。微妙に上半と下半のカーブが異なる算盤玉状の体部をもつ器形は、最大径部で強く屈曲するものが多く、前型式の器形の特徴を残すものもある。また貝田町式に特有のやや下ぶくれながら微妙なバランスを保つ細頸壺も一般的である。

またもうひとつ貝田町式の壺に特有の、縄文を施すものも比較的目につく。体部もしくは口頸部のわかる全74個体のうち、櫛描文が56個体、縄文施文が16個体、その他2個体となり、縄文施文の占める割合が21.6%である。そして、ほとんどの個体で縄を回転させて施文している。これは従来言われているような、転がした縄文はまれで、ほとんどが縄の押圧や櫛刺突で、しかも櫛刺突が多いこととは異なる在り方を示している。

壺形土器の中で縄文施文が2割ほどを占めることが、比率的にどうなのか、また器形との何らかの関連があるのか等、今は検討不足で論じられない。県内他遺跡や尾張地方での比較検討を通して、追求してゆかねばならないだろう。

壺形土器でもうひとつ注目すべきは、肩部や体部の最大径付近などに有刻突帯を貼りつける例が多いことである。特に(202)などのように、体部上半に縦横に多条の突帯を貼りつける例など、他にあまり例をみないものもあり、伊勢地方の在地色を示すものかもしれない。この有刻突帯は前型式の朝日式の中にも若干みられ、さらに前段階の前期土器の名残りと考えたい。

一方、甕形土器はタテハケ調整を主とした畿内的な甕であり、尾張地方とは異なっている。ただSB45出土甕の中には二枚貝による条痕調整の甕が1点(112)ある。

また従来「近江系」と呼称してきた甕(46)も出土した。これについても問題提起がなされている。三重県地方では伊賀や北勢に多く分布をみるが、最近では南勢地方でも出土例が増加してきており、その位置づけ等の詳しい分析と検討が必要であろう。

以上、本遺跡で検出された遺構、遺物のまとめ及び今後の課題等を述べてきた。本報告では前進的な考察を加えることができなかった。今後の課題としたい。
(田村 陽一)

〔註、参考文献〕

- ① 昭和47年作成の『三重県埋蔵文化財包蔵地カード』は位置図の精度の問題から、櫛田川沿いの3つの遺跡名をまちがえている。つまり本遺跡には西隣の小字名である山崎がつけられ、東接する奥ホリ遺跡に花ノ木の小字名がつけられ、さらに東の遺跡に奥ホリの小字名があてられている。
- ② 奥 義次 「多気町内の遺跡めぐり ②」『広報たき』多気町 1976
- ③ 奥 義次 「大原堀遺跡」『松阪市史』第二巻考古編 1978
- ④ 奥 義次 「王子広遺跡」『松阪市史』第二巻考古編 1978
- ⑤ 奥 義次 「原始」『飯高町郷土史』 1986
- ⑥ 下村登良男 「御麻生園廃寺」『松阪市史』第二巻考古編 1978

- ⑦ 奥 義次 「牧城」『三重の中世城館』 三重県教育委員会 1977
- ⑧ 縄文土器については、度会町教育委員会奥 義次氏より種々のご教示を得た。
- ⑨ 石器の石材については、三重県立津西高等学校磯部克氏より種々のご教示を得た。
- ⑩ 弥生土器については、(財)愛知県埋蔵文化財センター石黒立人氏より種々のご教示を得た。
- ⑪ 佐原 真 「畿内地方」『弥生式土器集成』本編2.1968
- ⑫ 小玉道明ほか 「永井遺跡発掘調査報告」 四日市市教育委員会 1973

- ⑬ 藤沢良祐 「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要1』瀬戸市歴史民俗資料館 1982 による第Ⅲ段階5型式ないし6型式にあたる。
- ⑭ 注⑬に同じ
- ⑮ 新田 洋 「平安時代～中世における煮炊用具——「伊勢型」鍋——に関する若干の覚え書」『三重考古学研究1』三重考古学談話会 1985
- ⑯ 注⑮および「斎宮跡の土師器」『三重県斎宮跡調査事務所年報1984』三重県斎宮跡調査事務所 1985
- ⑰ 下村登良男 「上寺遺跡発掘調査報告書」松阪市教育委員会 1981
- ⑱ 山沢義貴ほか 「古里遺跡発掘調査報告書——C地区——」三重県教育委員会 1973
- ⑲ 第36次調査で2棟、第58—4次調査で1棟、第72—4次調査で1棟検出されている。
- ・『三重県斎宮跡調査事務所年報1981』三重県斎宮跡調査事務所 1982
 - ・『三重県斎宮跡調査事務所年報1985』三重県斎宮跡調査事務所 1986
 - ・『三重県斎宮跡調査事務所年報1987』三重県斎宮跡調査事務所 1988
- ⑳ 大西素行、奥 義次、御村精治 「上地山遺跡発掘調査報告書」玉城町教育委員会 1985
- ㉑ 高見宜雄、岩中淳之 「中ノ垣外遺跡」『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1984
- ㉒ 「堂ノ後遺跡・深長古墳」現地説明会資料 三重県教育委員会 1986
- ㉓ 増田安生 「午前坊遺跡」『三重県埋蔵文化財年報16』三重県教育委員会 1986
- ㉔ 近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』三重県教育委員会 1988
- ㉕ 都出比呂志 「住居の構造と集落の形態」『世界考古学大系日本編補遺』天山舎 1987
- ㉖ 石黒立人 「伊勢湾周辺地方における方形周溝墓出現期の様相」『マージナルNo.7』愛知考古学談話会 1987
- 鈴木克彦 「三重県の弥生墓制資料」『第9回三県シンポジウム東日本の弥生墓制』群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究会 1988
- ㉗ 大参義一 「弥生式土器」『環状2号線関係朝日遺跡群第一次調査報告』愛知県教育委員会 1975
- ㉘ 鈴鹿市東庄内B遺跡、明和町古里遺跡がかなりまとまった資料であるが、他は散発的な出土。
- ㉙ 石黒立人 「貝田町型細頸壺雑考」『マージナルNo.4』愛知考古学談話会 1984
- ㉚ 飯尾恭之 「朝日遺跡群の土器」朝日遺跡群保存会 1971
- ㉛ 石黒立人 「伊勢湾地方から見た近江系土器」『年報 昭和62年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1988
- ㉜ 注㉙に同じ
- ㉝ そのほか参考にした主な文献を次にあげる。
- ・石黒立人 「伊勢湾周辺の弥生中期土器に関する覚書'86」『第7回三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器』北武蔵古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究所・群馬県考古学談話会 1986
 - ・石黒立人 「阿弥陀寺遺跡出土の中期弥生土器について-1」『環状2号線関係埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ』(財)愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部 1984
 - ・石黒立人 「阿弥陀寺遺跡出土の中期弥生土器について-2」『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』(財)愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部 1985
 - ・『朝日遺跡』愛知県教育委員会 1982
 - ・久永春男 「弥生文化の発展と地域性——東海」『日本の考古学Ⅲ、弥生時代』河出書房 1966
 - ・紅村 弘 「弥生土器——中部、東海西部——」『考古学ジャーナル』116 1975
 - ・仲見秀雄ほか 「上箕田 弥生式遺跡第二次調査報告」鈴鹿市教育委員会 1970
 - ・小玉道明ほか 「東名阪道路埋蔵文化財調査報告」三重県教育委員会 1970
 - ・伊藤久嗣 「納所遺跡」三重県教育委員会 1980
 - ・谷本鋭二ほか 「金剛坂遺跡発掘調査報告」明和町教育委員会 1971
 - ・久永春男ほか 「瓜郷」豊橋市瓜郷遺跡調査会 1963
 - ・紅村 弘 「東海先史文化の諸段階」1975
 - ・『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要Ⅰ』【同Ⅱ】三重県教育委員会 1987, 1988

せんげんやまきた
多気郡多気町牧 浅間山北遺跡 (29)

当遺跡は花ノ木遺跡の南に隣接し、地元で通称「せんげんさん」と呼ばれている浅間山の北麓、標高43mの水田に位置する。

昭和59(1984)年12月に第一次調査を実施したところ、土坑、小穴等の遺構が検出され、土師器、山茶碗、灰釉陶器、常滑甕、天目茶碗片の破片が少量出土した。この結果をもとに第二次調査を、昭和60(1985)年1月28日より2月23日まで実施した。調査面積は約1,000㎡である。

発掘区の基本的な層序は、第Ⅰ層：暗灰色土(表土)、第Ⅱ層：暗褐色土(包含層)、第Ⅲ層：黄褐色土(地山)である。

遺構検出は第Ⅲ層上面で行なった。その結果、発掘区の北東隅において焼土を含む不定形な土坑状の遺構(SX1)を検出した。しかし調査区外へ延びるため全容は把握できず、遺構の性格等は不明である。

この他、小穴を多数検出したものの、規則的な配列はみられず、掘立柱建物としてまとまるものはない。また、発掘区中央部を北西から南東に延びる幅約4mの旧河道と思われる砂礫層がある。

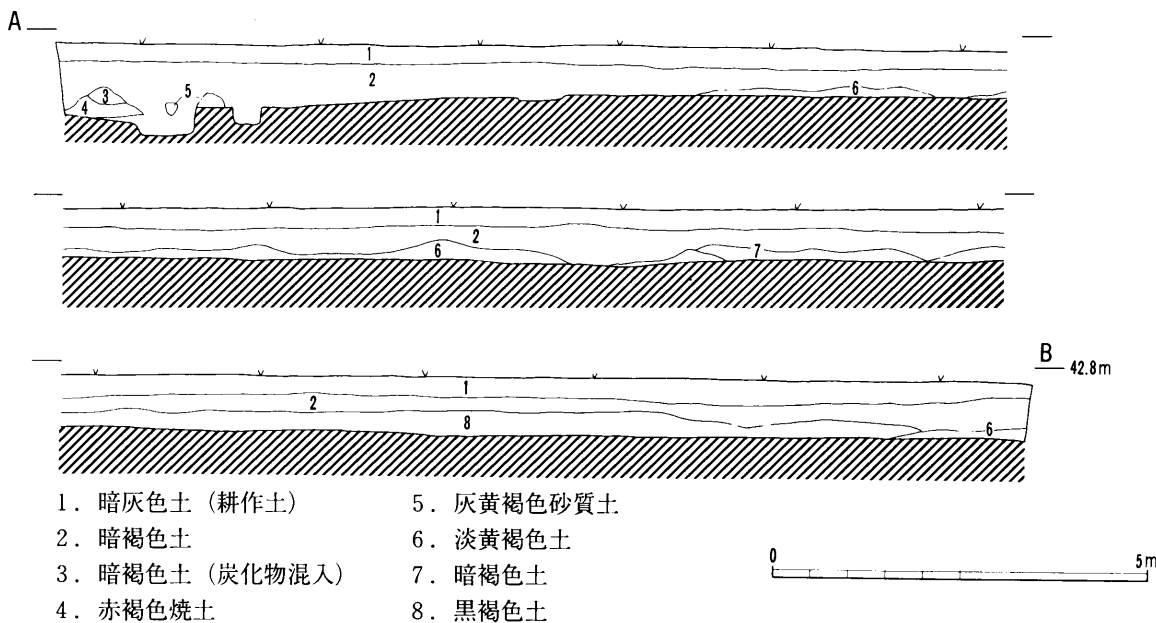
これらはいずれも出土遺物がなく、明確な時期決定

が難しい。

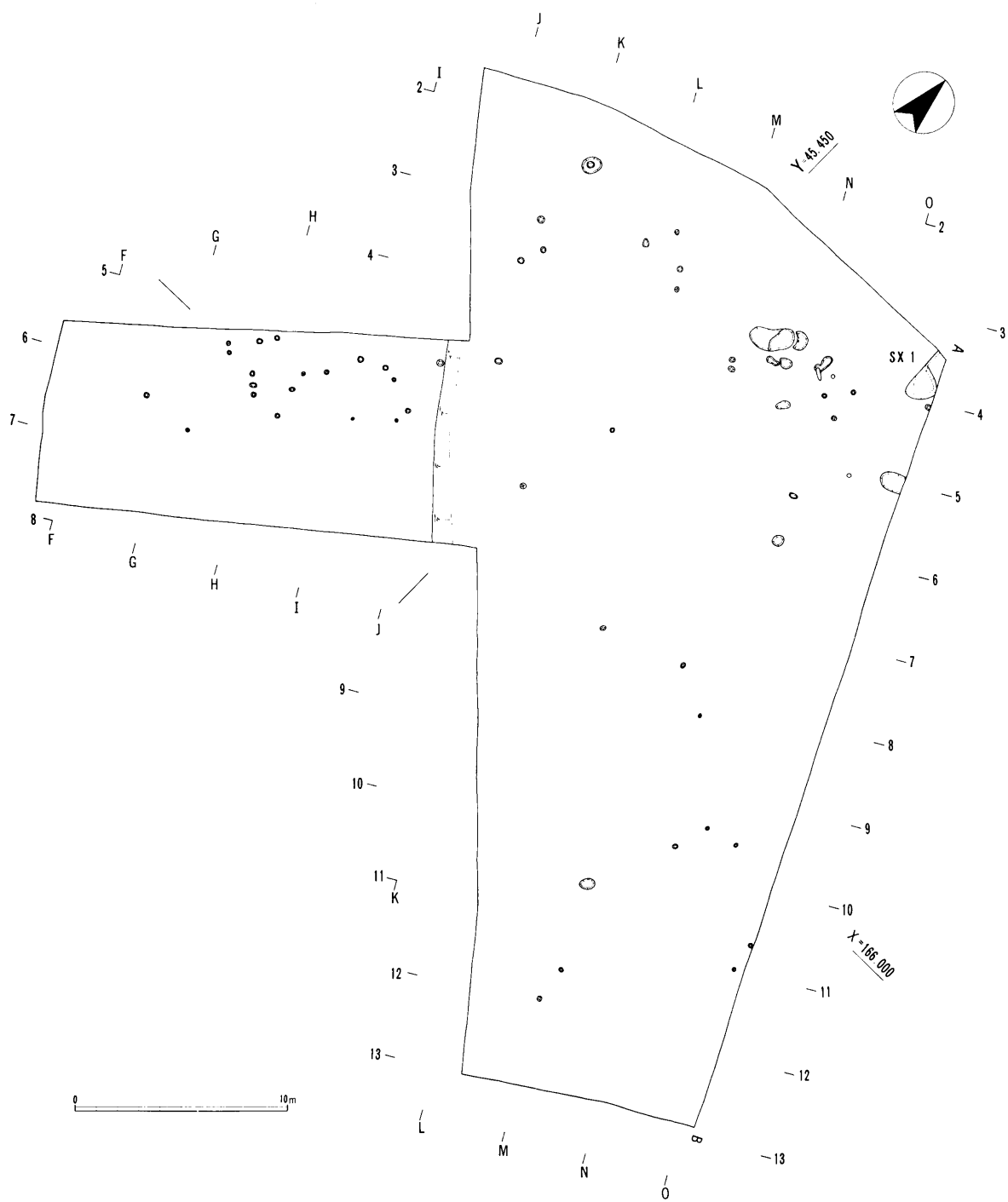
出土した遺物は微量である。弥生土器片、土師器片、山茶碗片、天目茶碗片、灰釉陶器片、施釉陶器片等があり、今回の調査地は中世集落の周辺部と考えられる。



第7-1図 発掘区位置図(1:2,000)



第7-2図 発掘区東壁土層断面図(1:100)



第7-3図 遺構平面図 (1:300)



調査前遠景（東から）



調査後遠景（南西上空から）

PL2-2



調査区全景（南から）



B地区全景（北から）

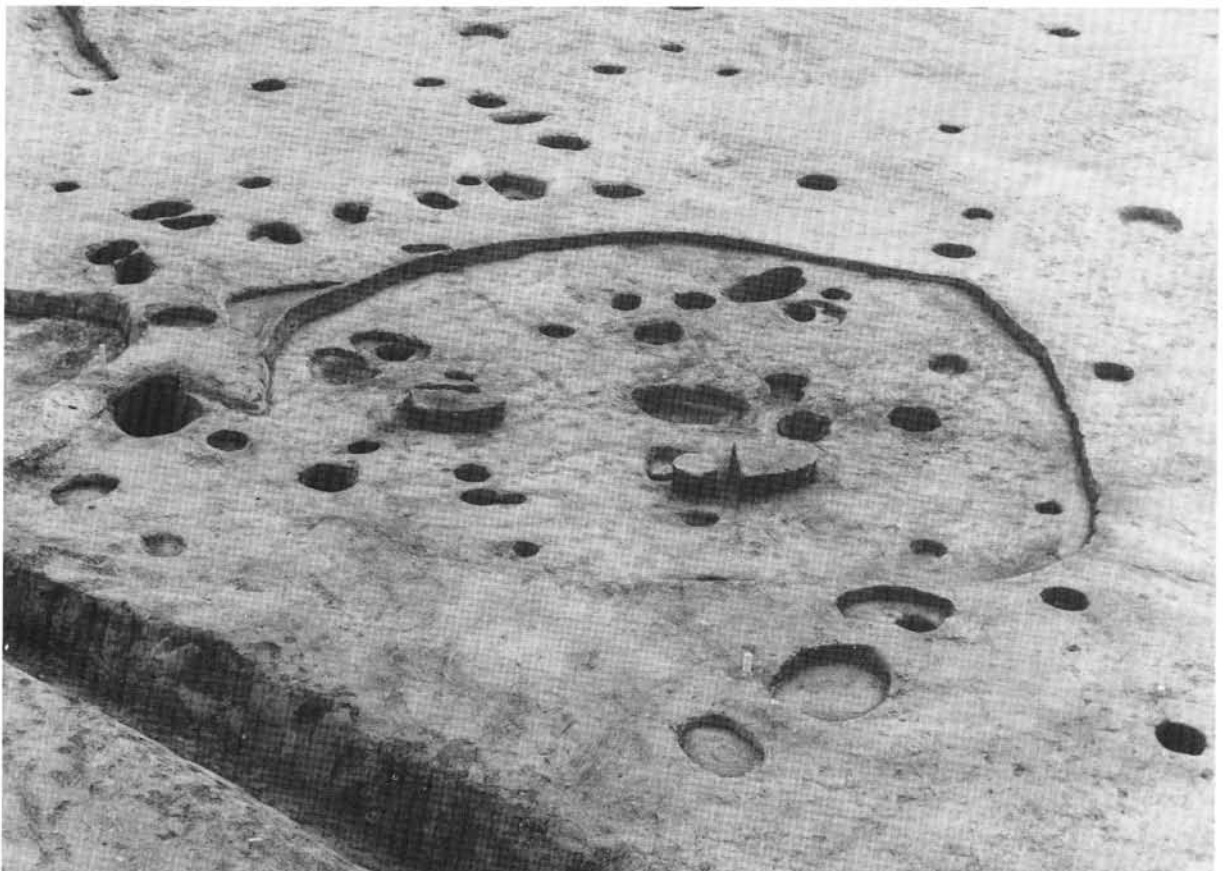


主要遺構空中写真

PL 2-4



S B14検出状況 (南西から)



S B14 (北から)



S B45 (南東から)



S B45完掘 (北東から)

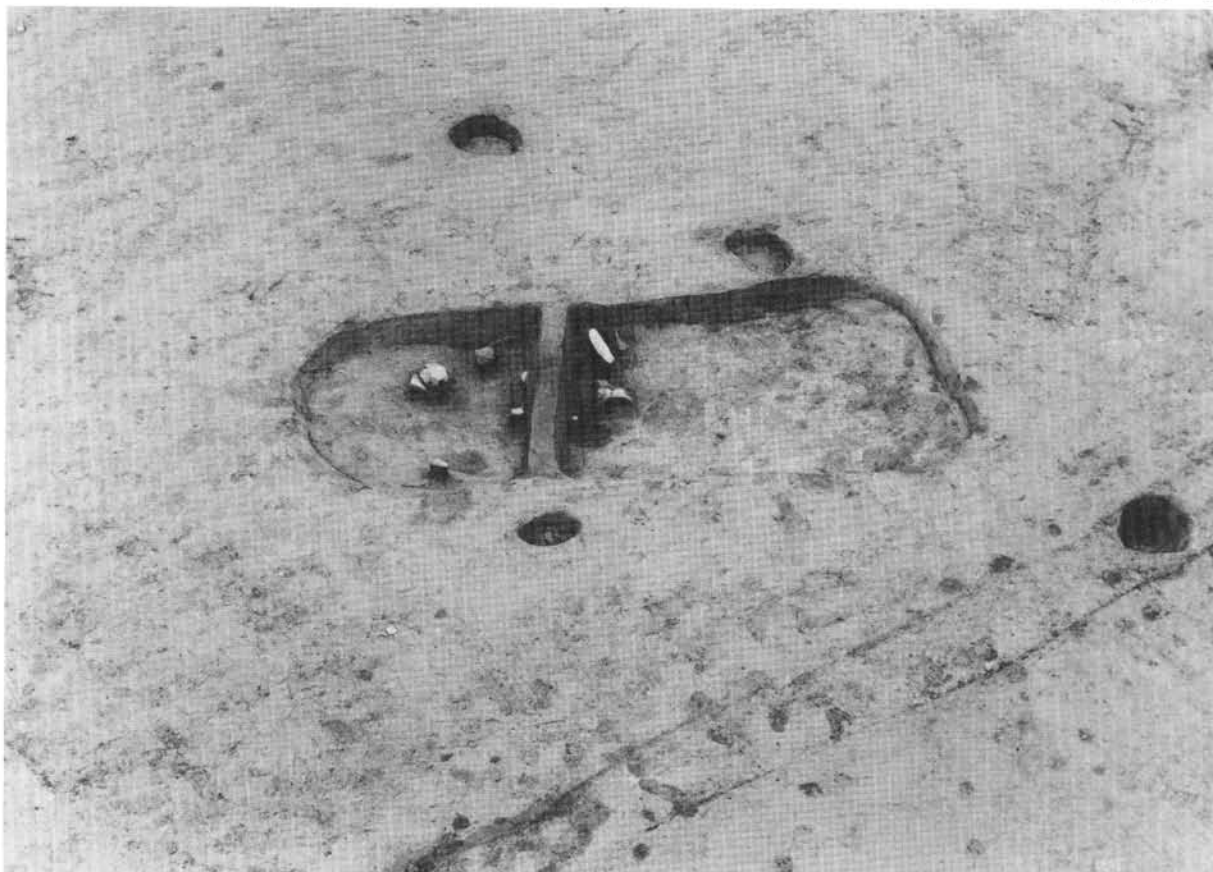
PL2-6



S X22 (西から)



S X22完掘 (西から)



S X22西周溝 (西から)

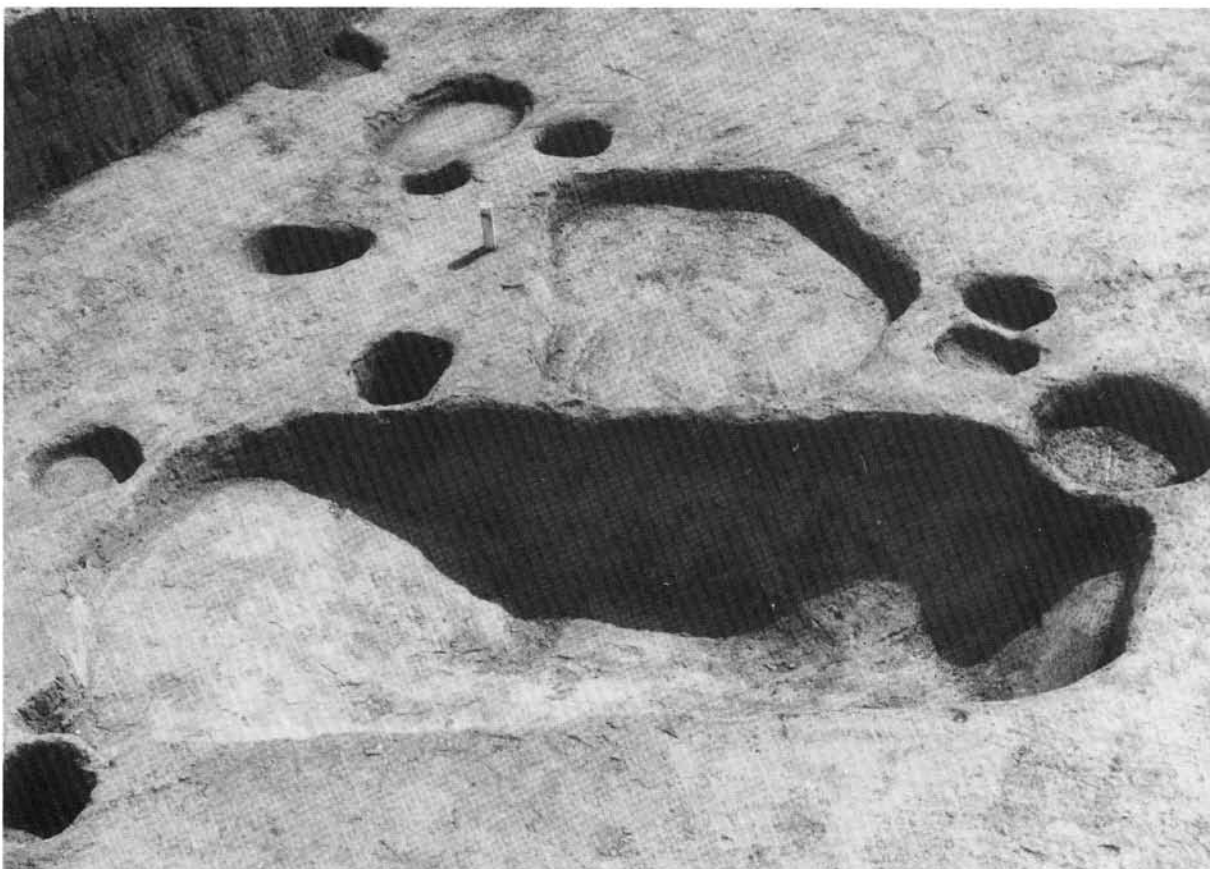


S X22南周溝

PL 2-8



S X 22東周溝 (西から)



S X 22北周溝 (北から)



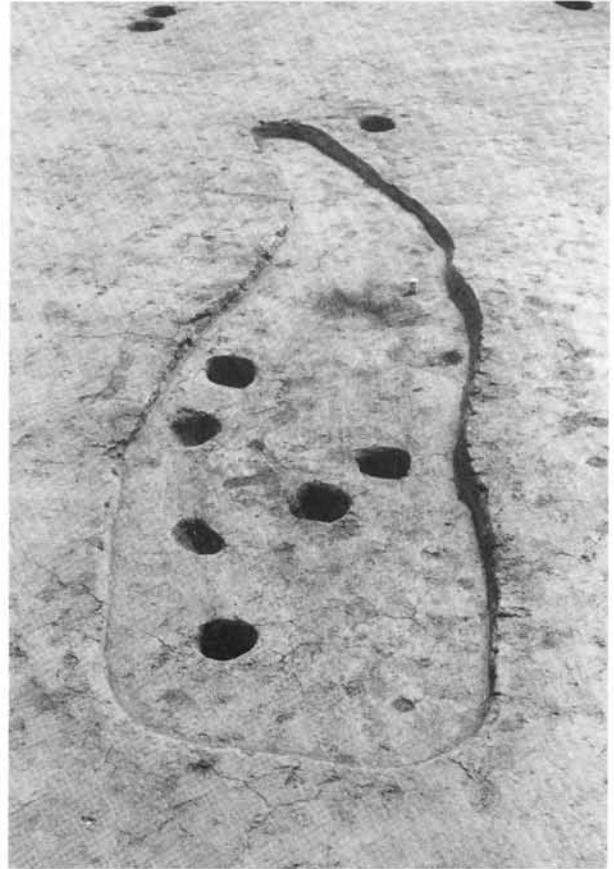
SK10 (北から)



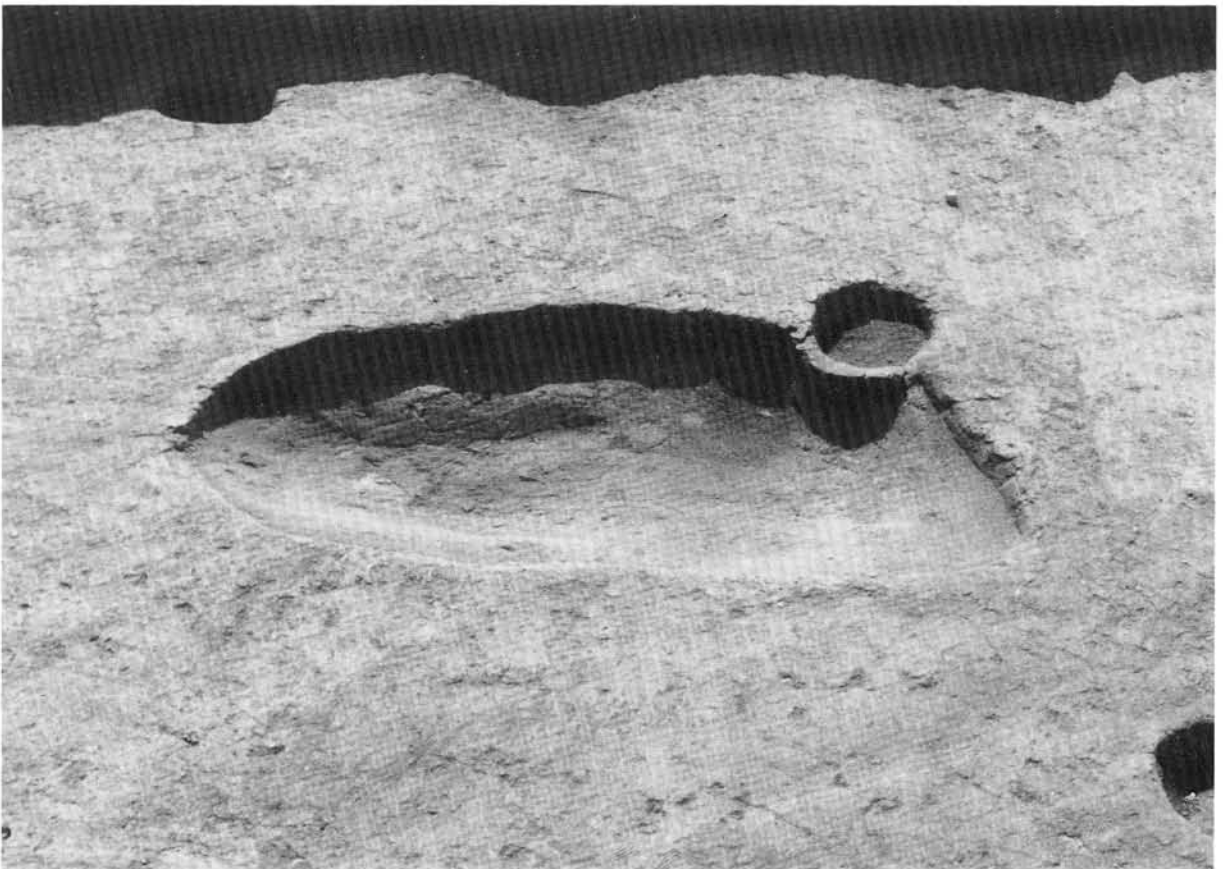
SK13 (南西から)



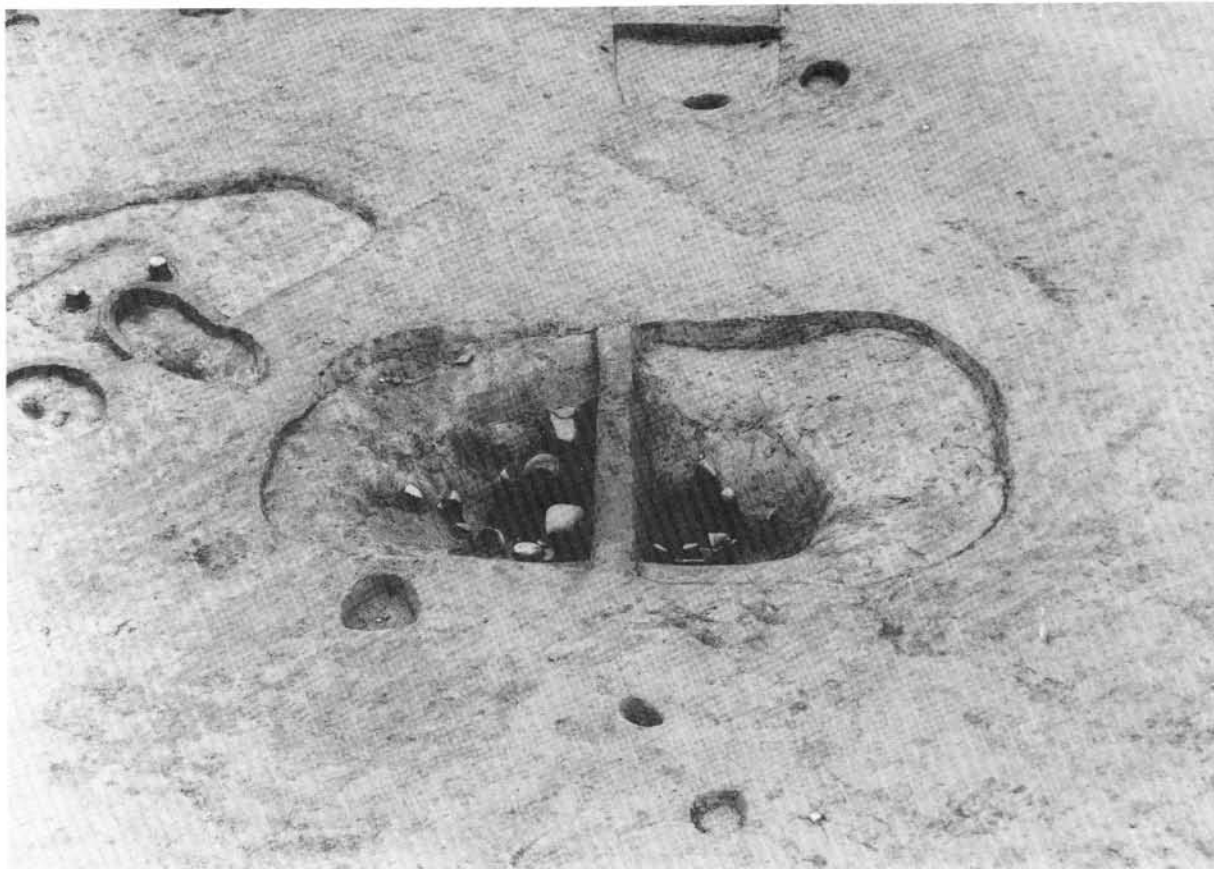
SK15、16 (北から)



SK20 (西から)



SK17 (北から)



S K 23 (西から)



S K 23遺物出土状況 (北から)

PL 2-12



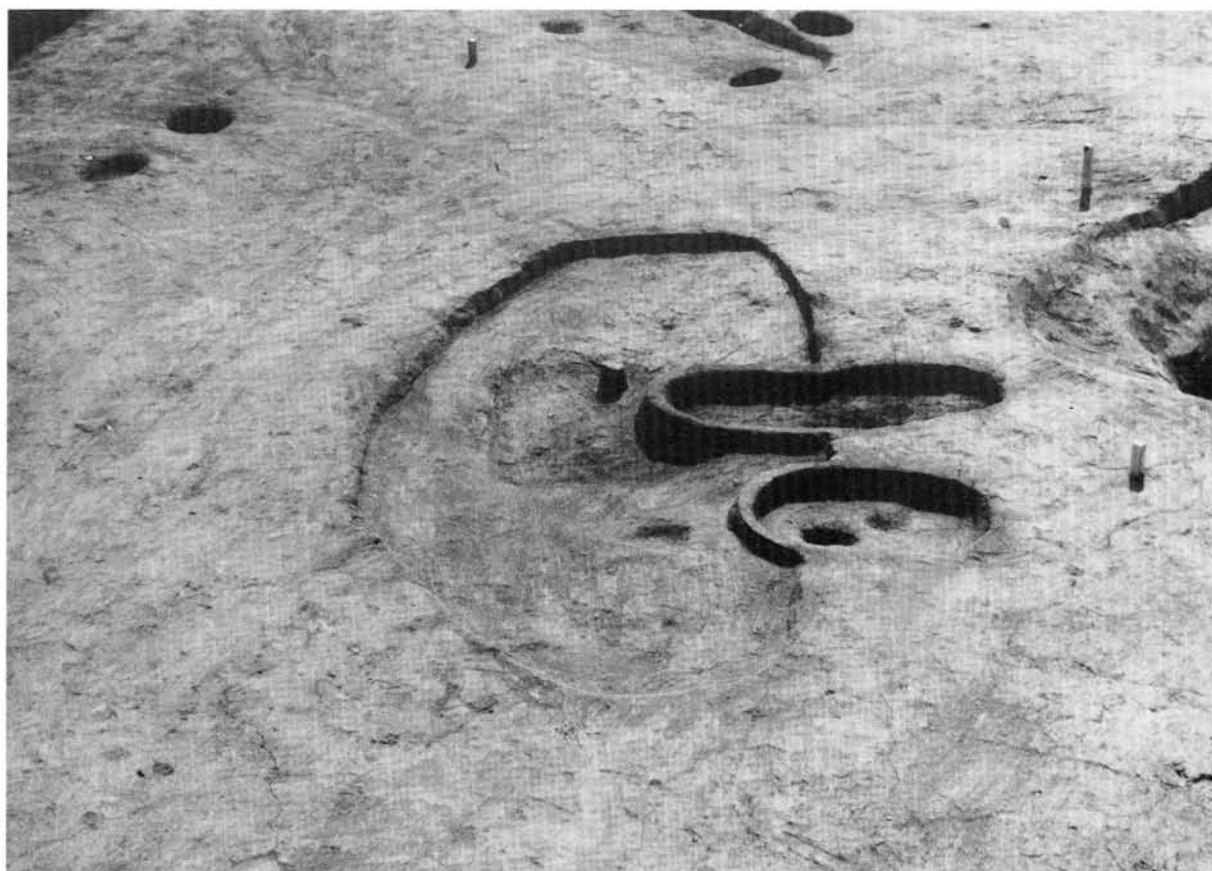
SK23遺物出土状況（東から）



SK23完掘（南から）



SK24 (南から)



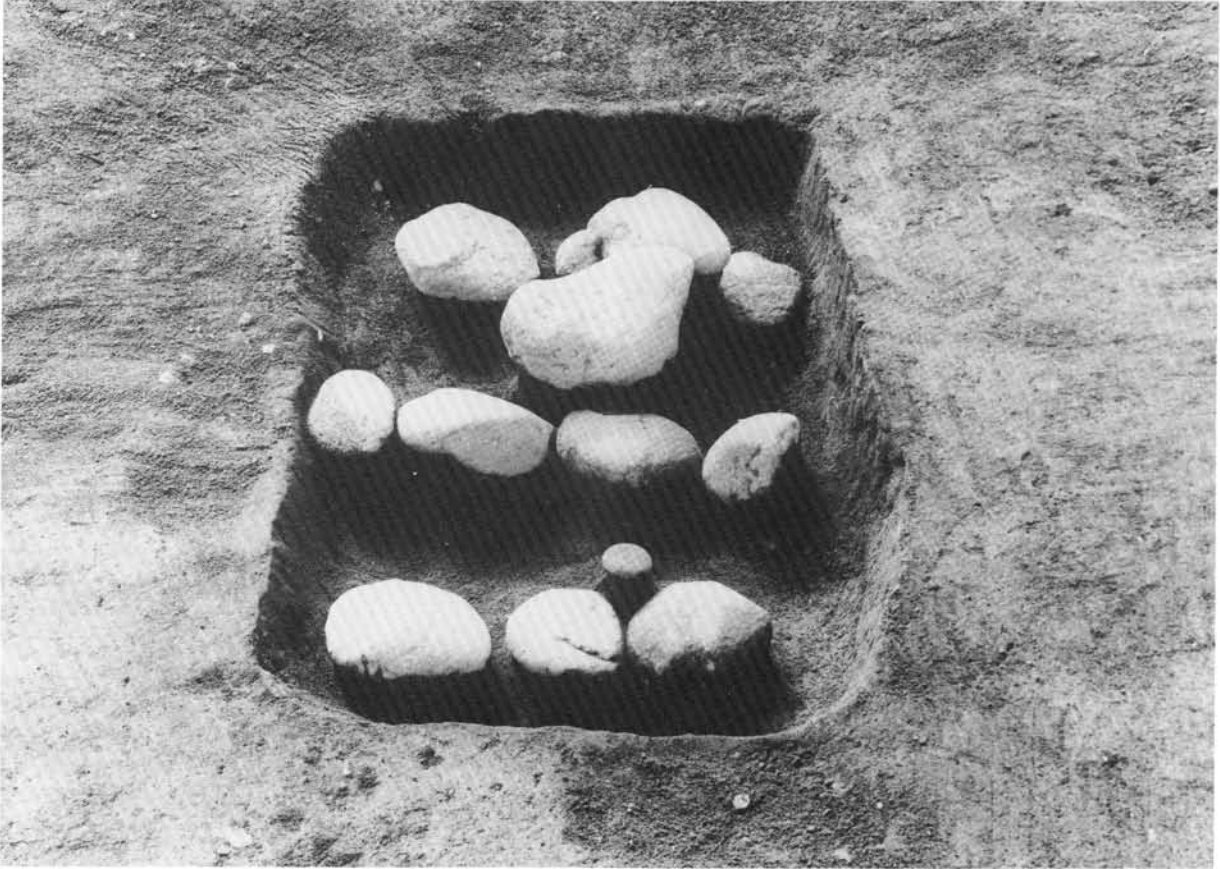
SK25 (北から)



SK27 (北から)



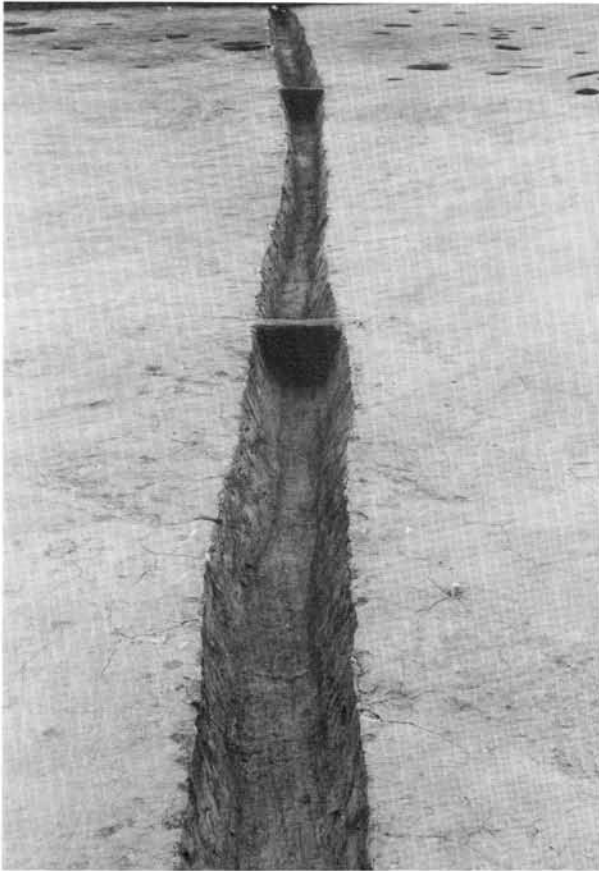
調査風景



S X 54 (北から)



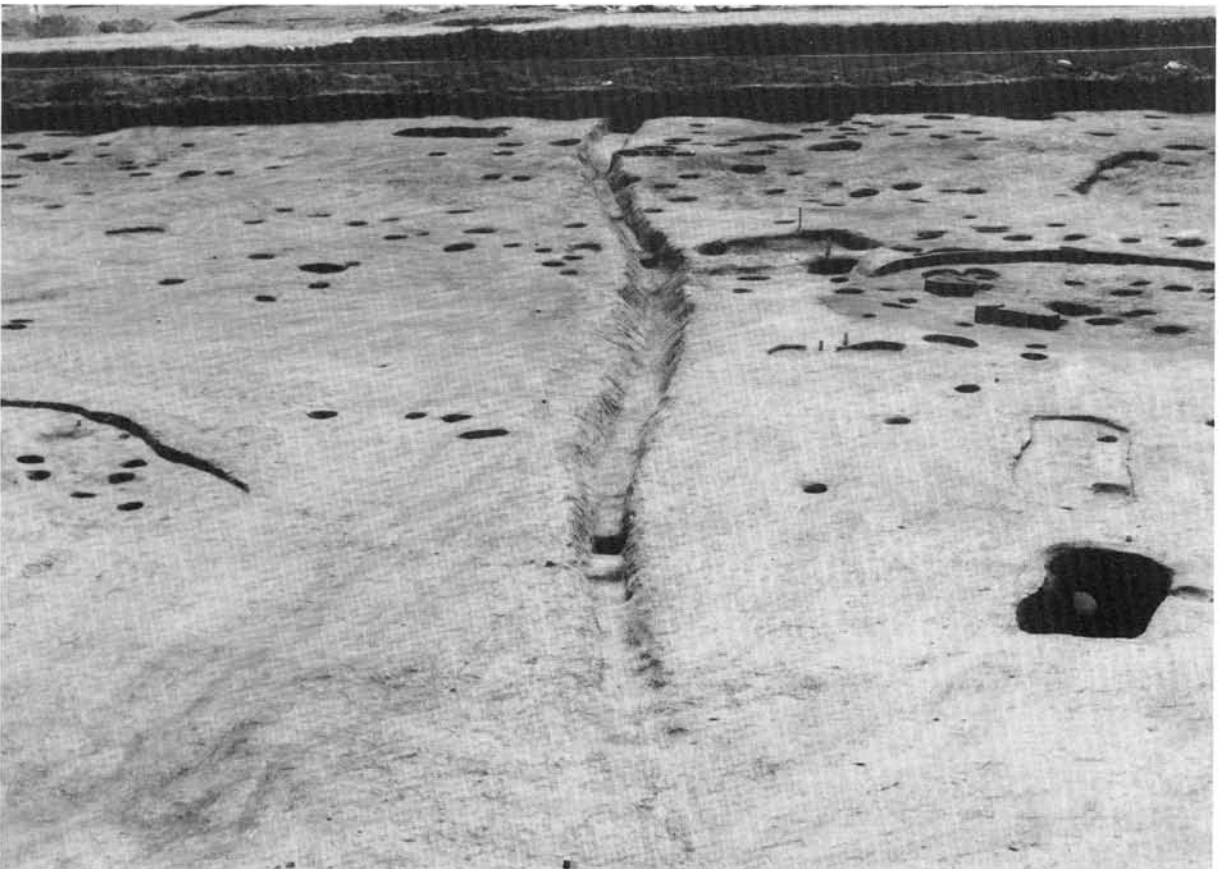
S X 55 (西から)



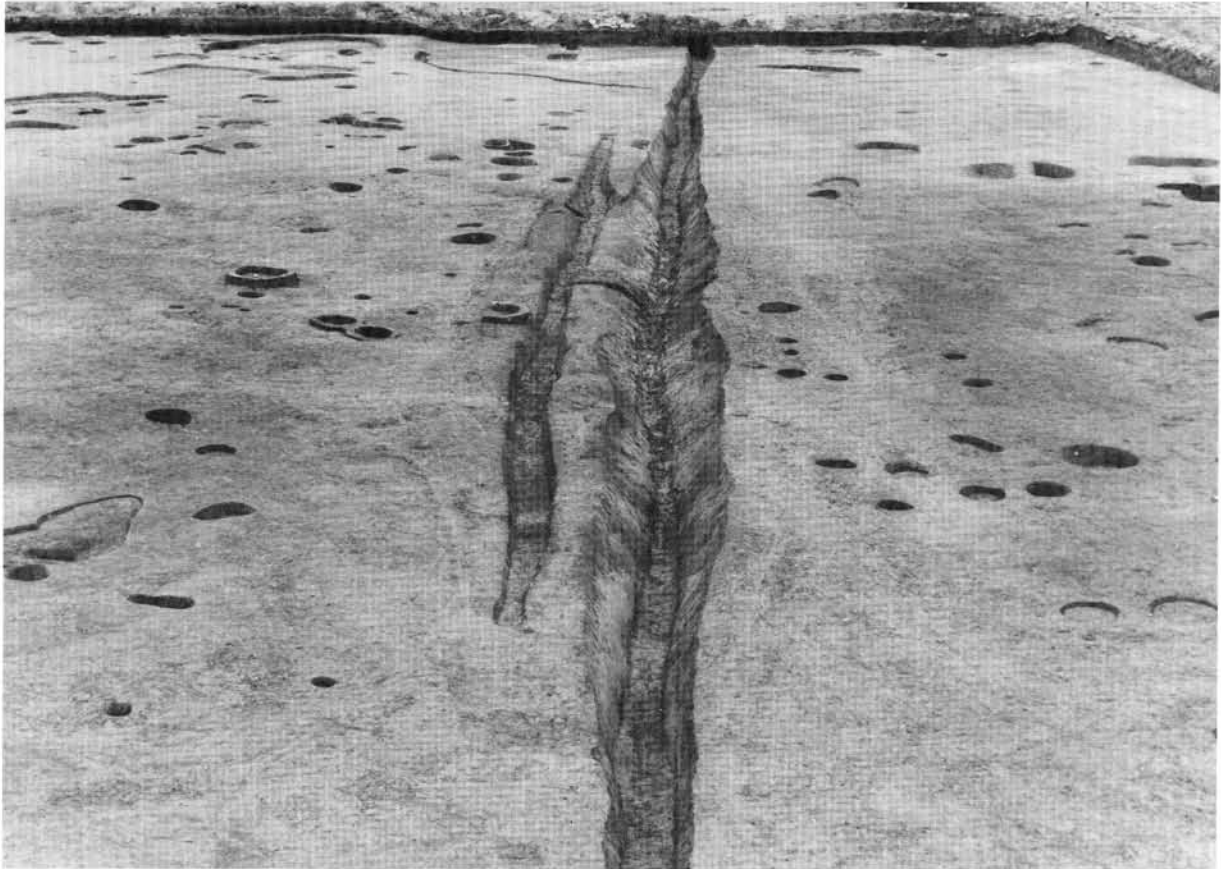
S D 1 (北西から)



S D 21 (北西から)



S D 12 (北西から)



S D34、35 (南から)



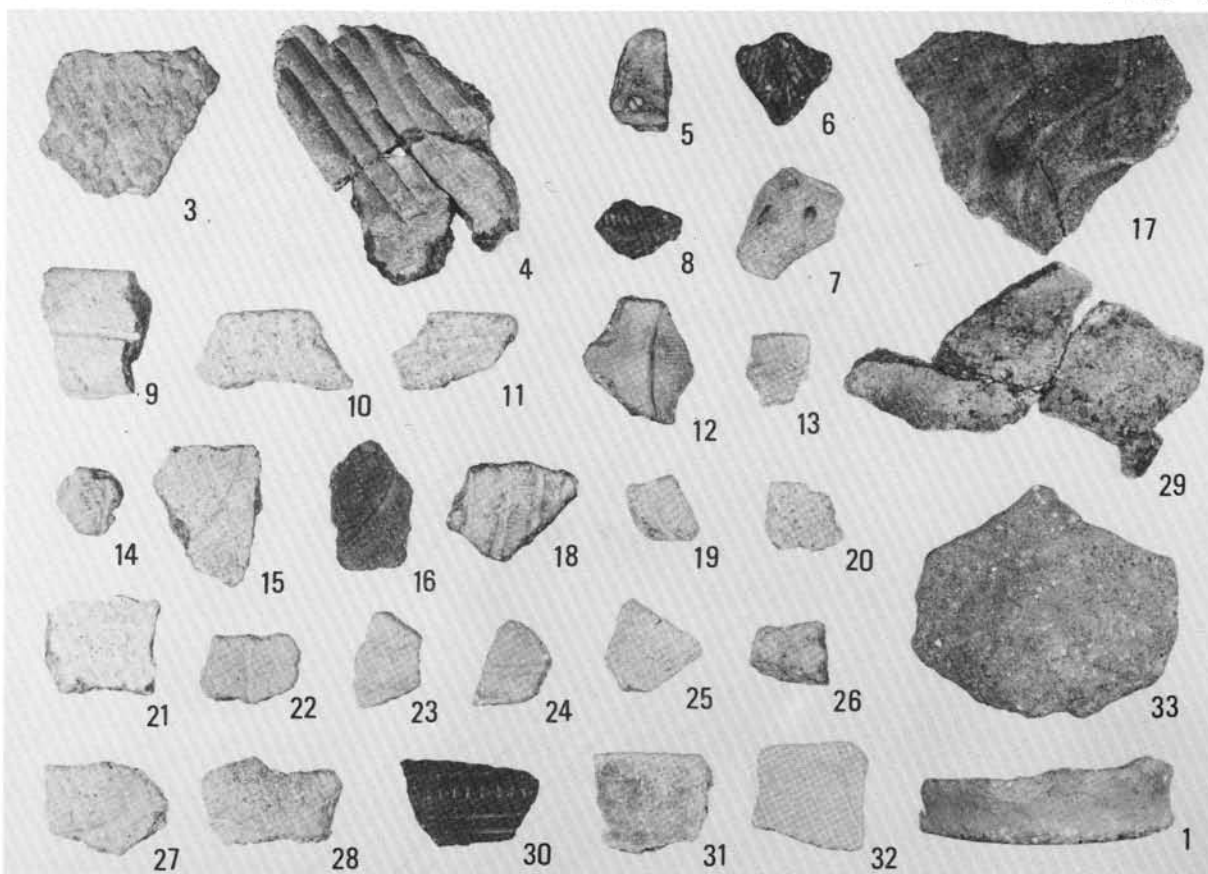
S D34、35断面 (北から)



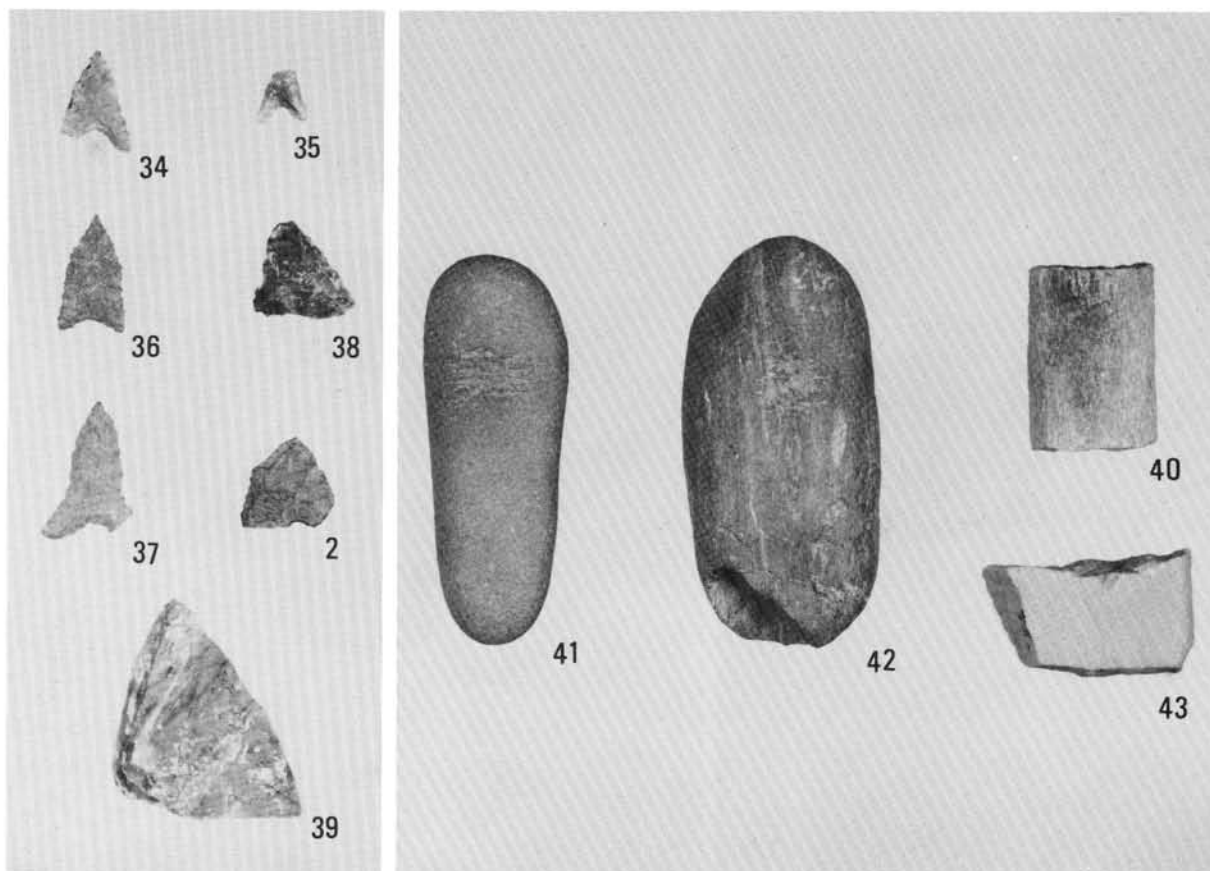
浅間山北遺跡 遠景（東から）



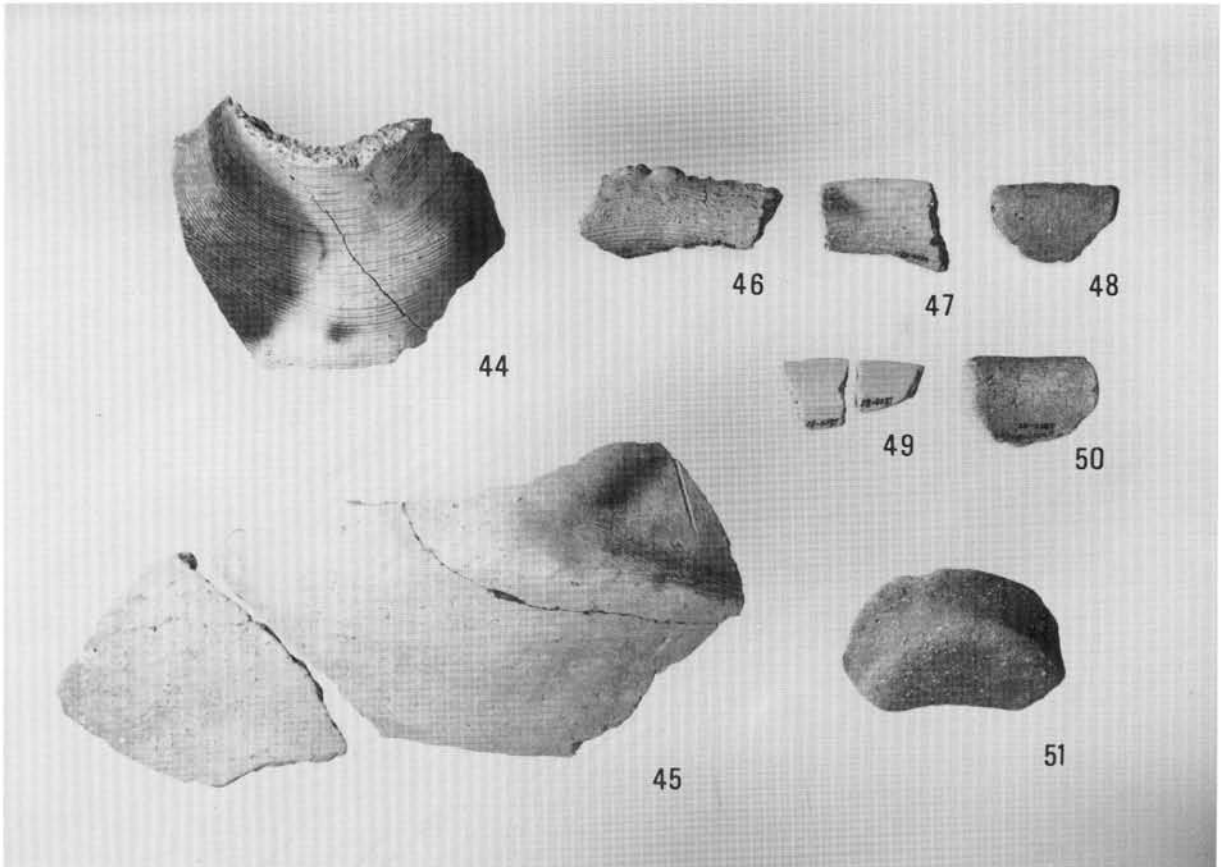
浅間山北遺跡、調査後全景（東上空より）



包含層出土繩文土器 (1 : 3)



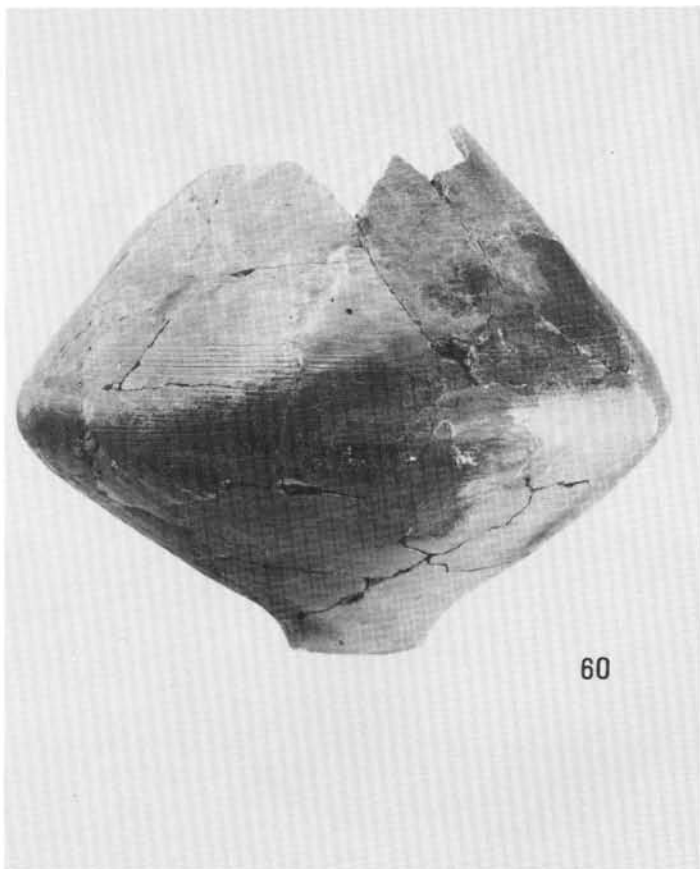
包含層出土石器 (左1 : 2, 右1 : 3)



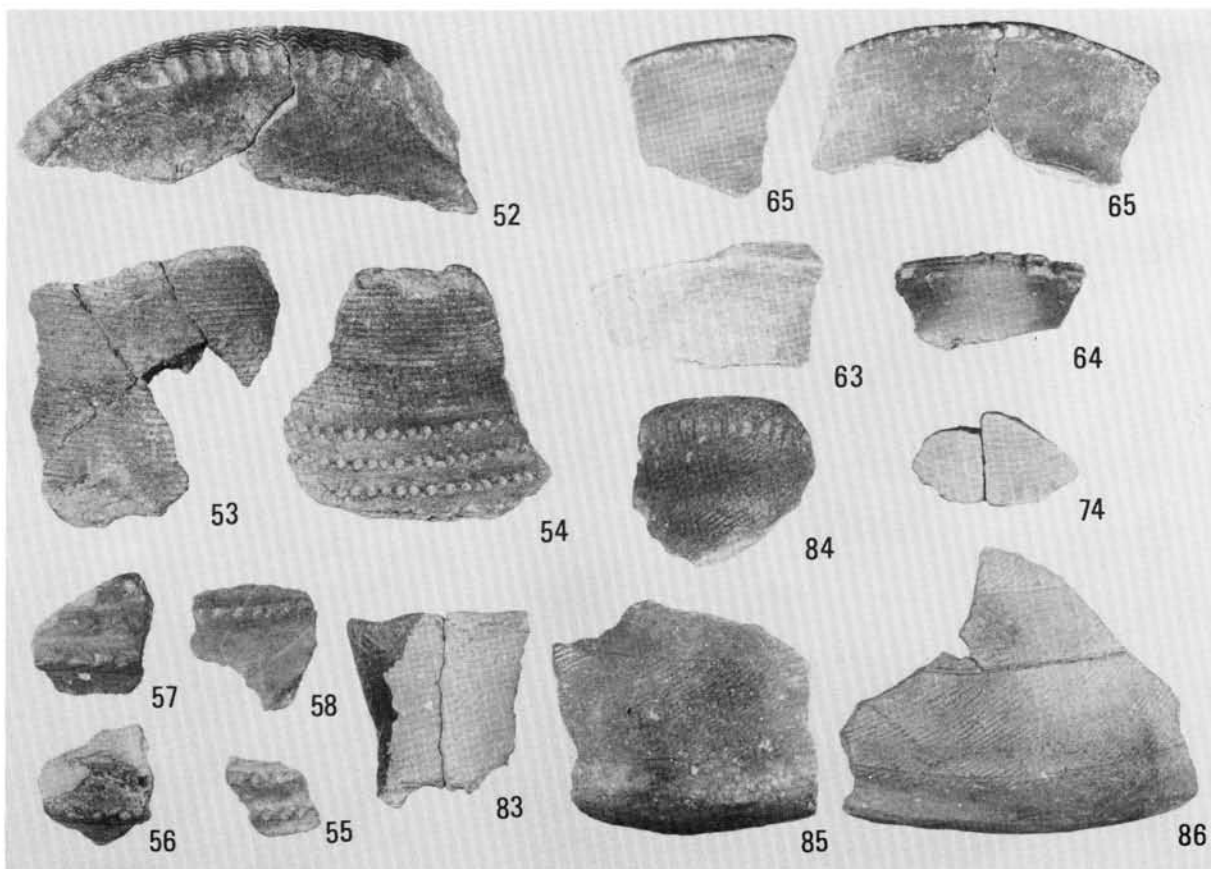
S B14出土遺物 (1 : 3)



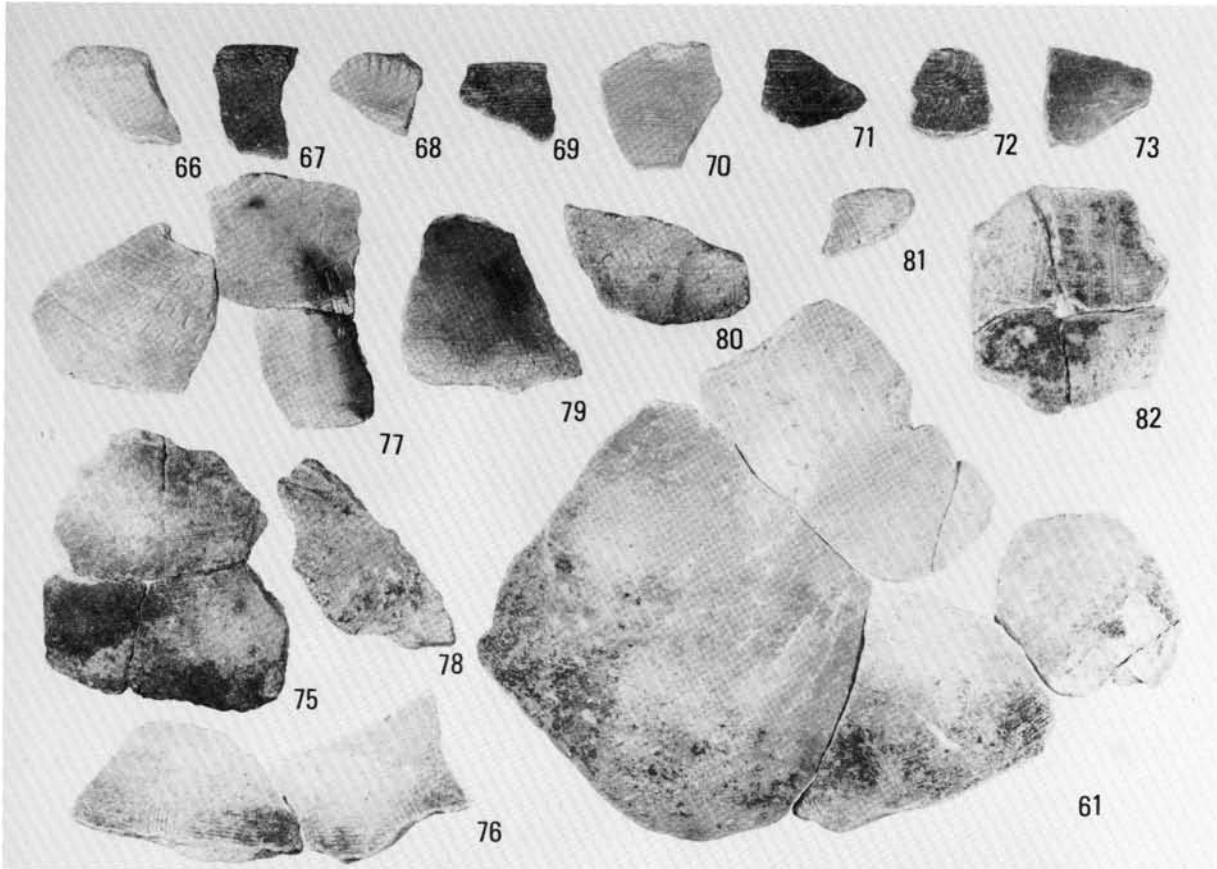
S B45出土遺物 (1 : 3)



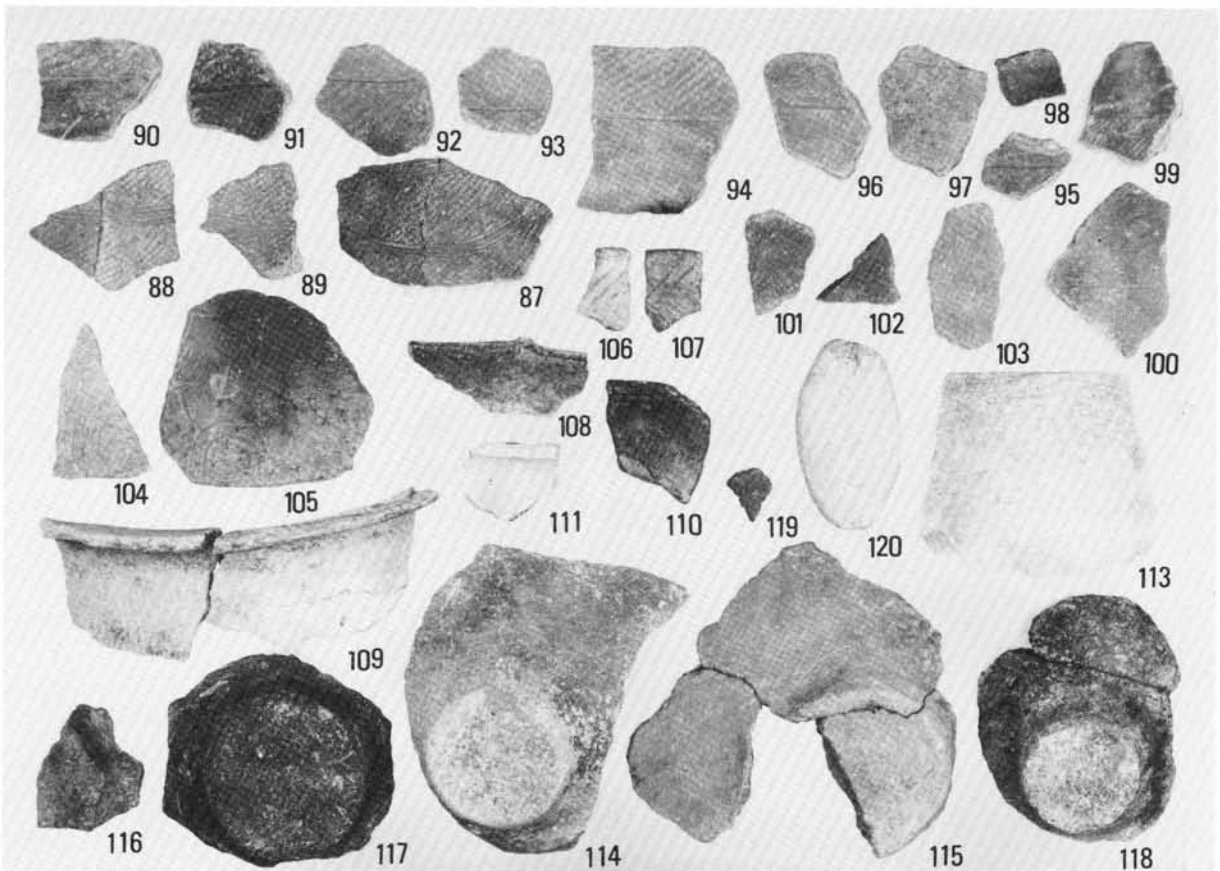
S B45出土遺物 (1 : 3)



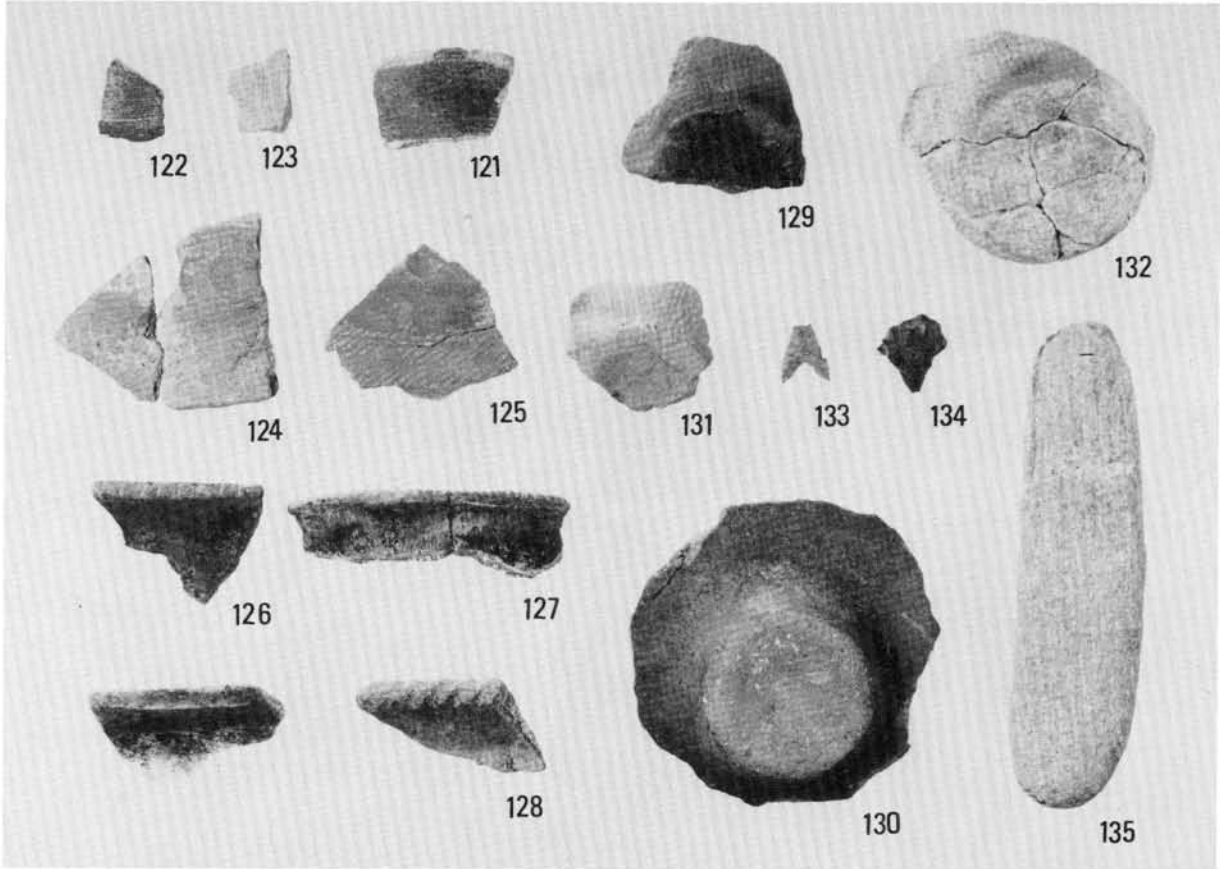
S B45出土遺物 (1 : 3)



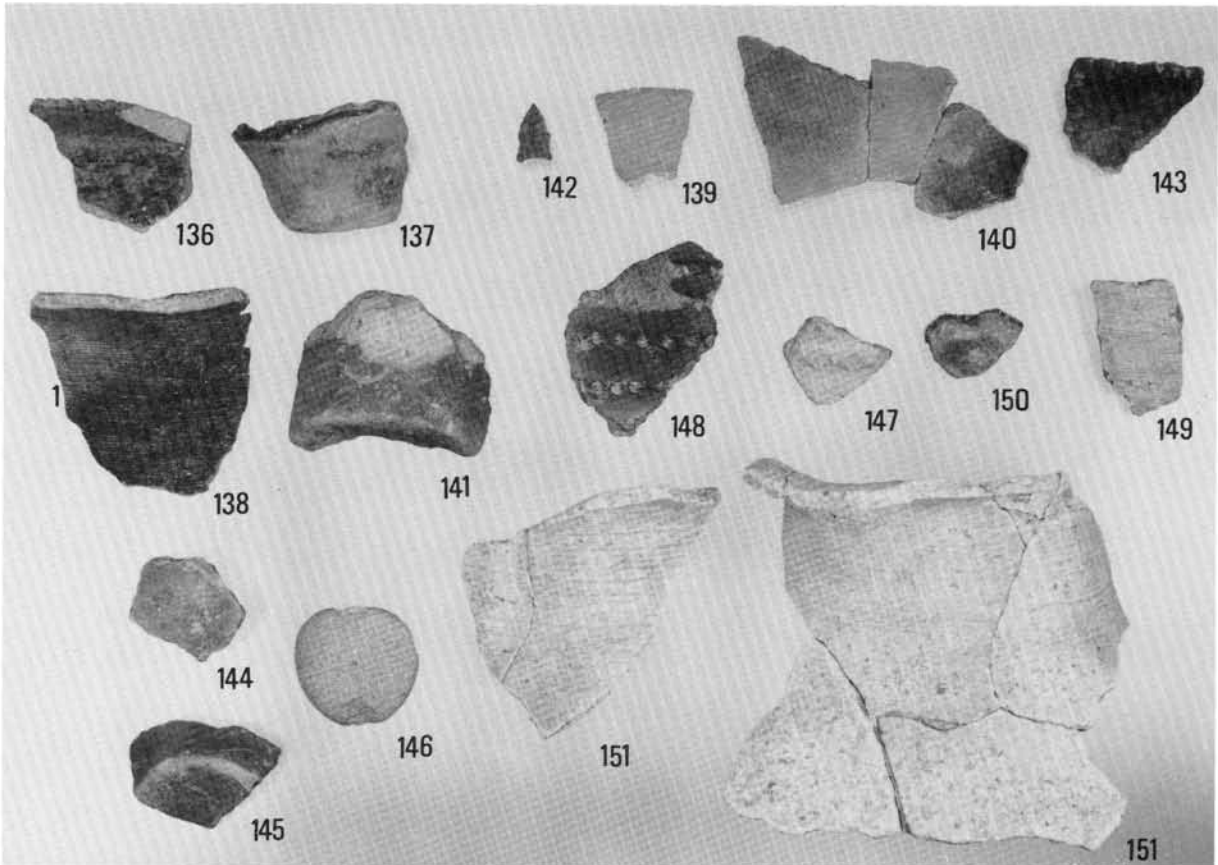
S B45出土遺物 (1 : 3)



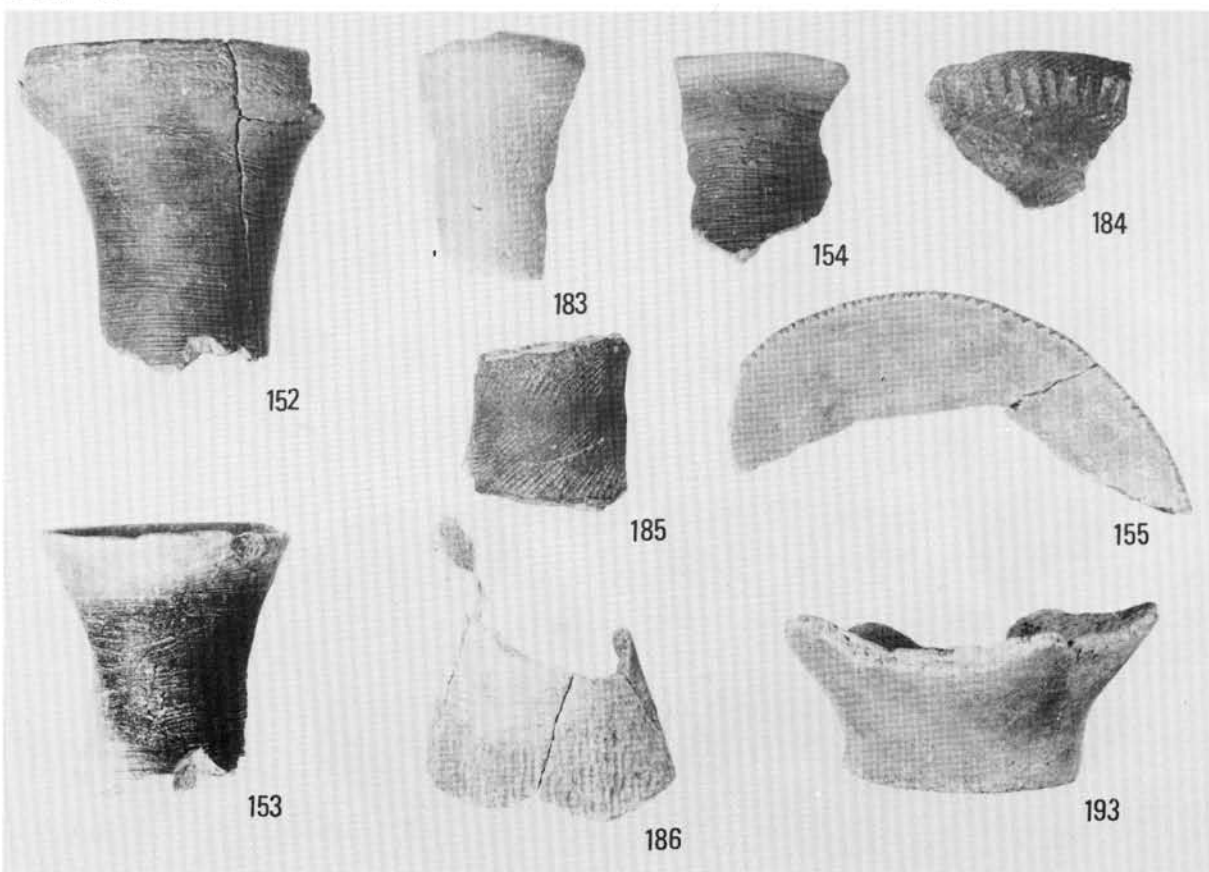
S B45出土遺物 (1 : 3)



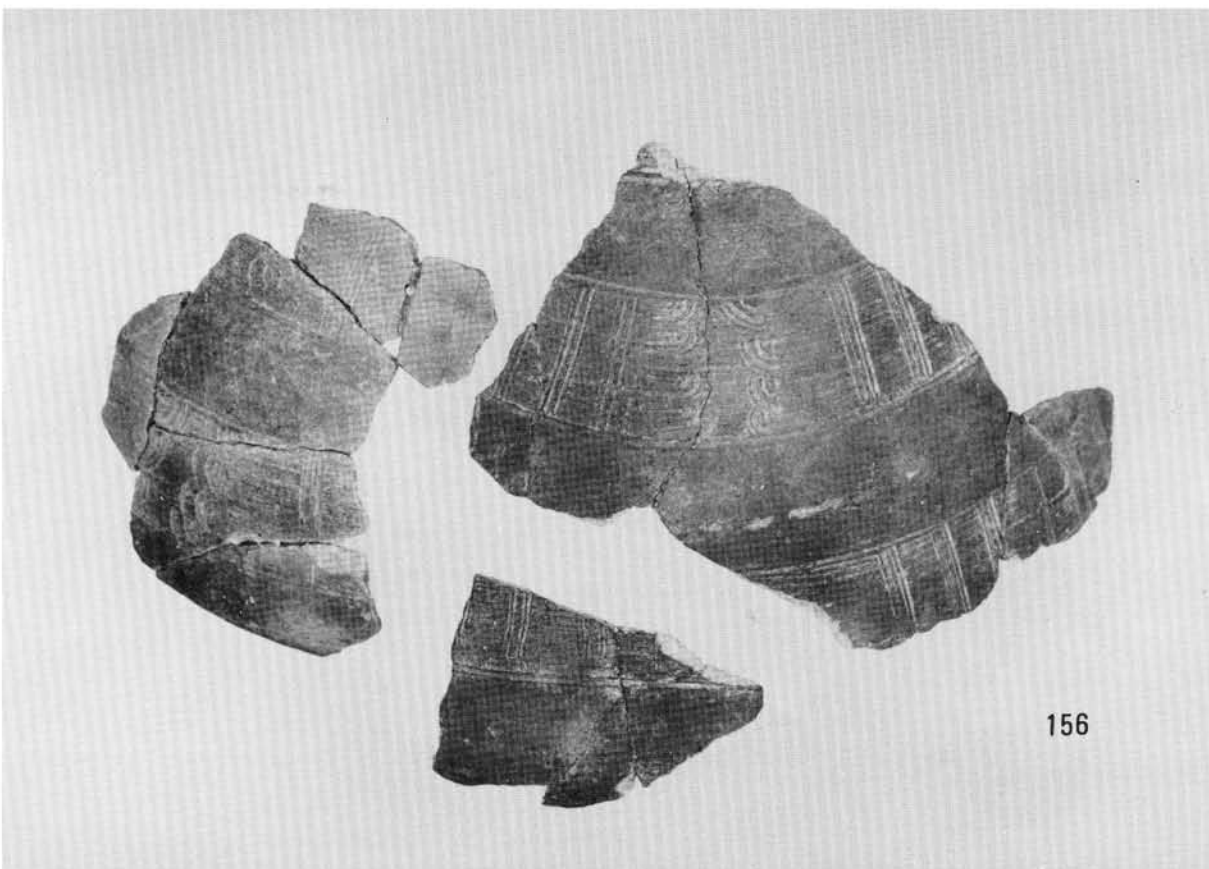
S X 22出土遺物 (1 : 3)



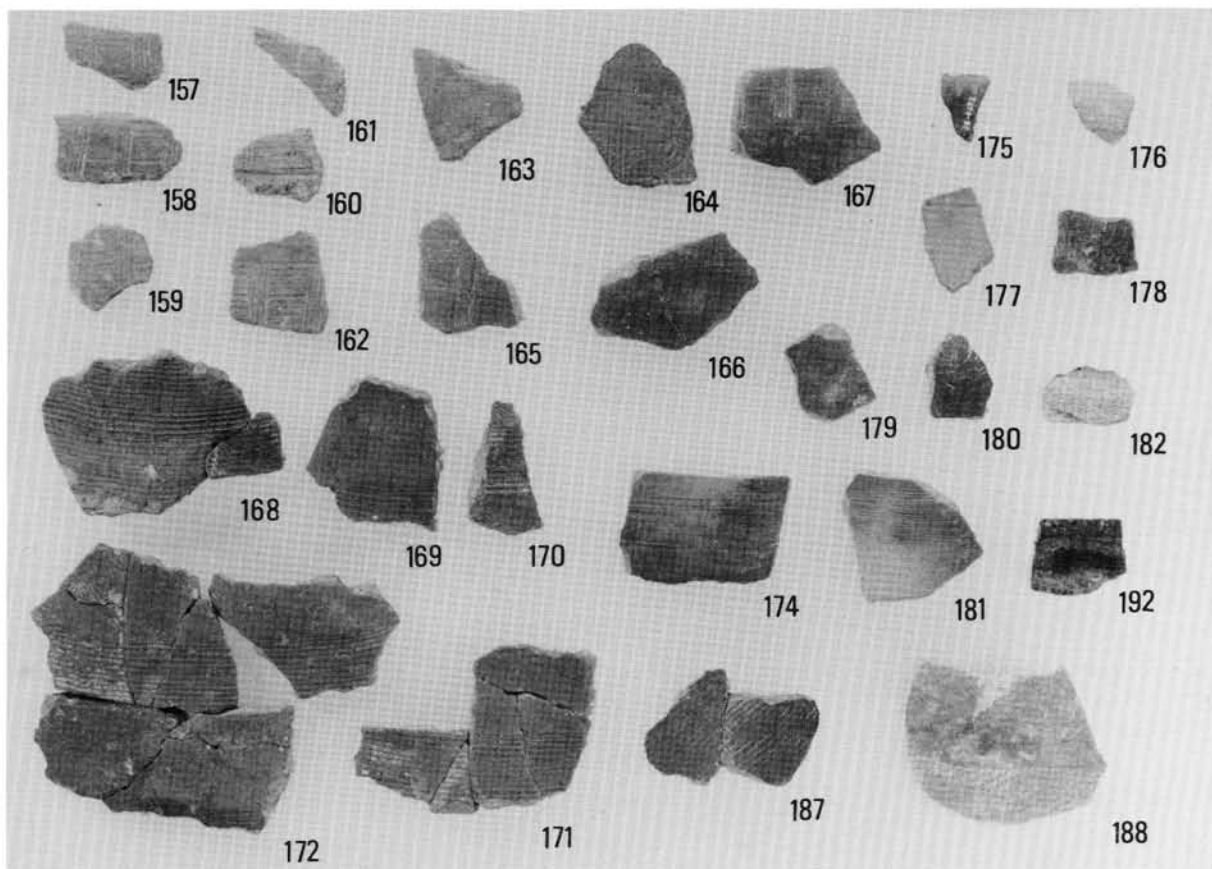
S K 9, 10, 13, 15, 17, 19, 20出土遺物 (1 : 3)



S K 23出土遺物 (1 : 3)



S K 23出土遺物 (1 : 3)



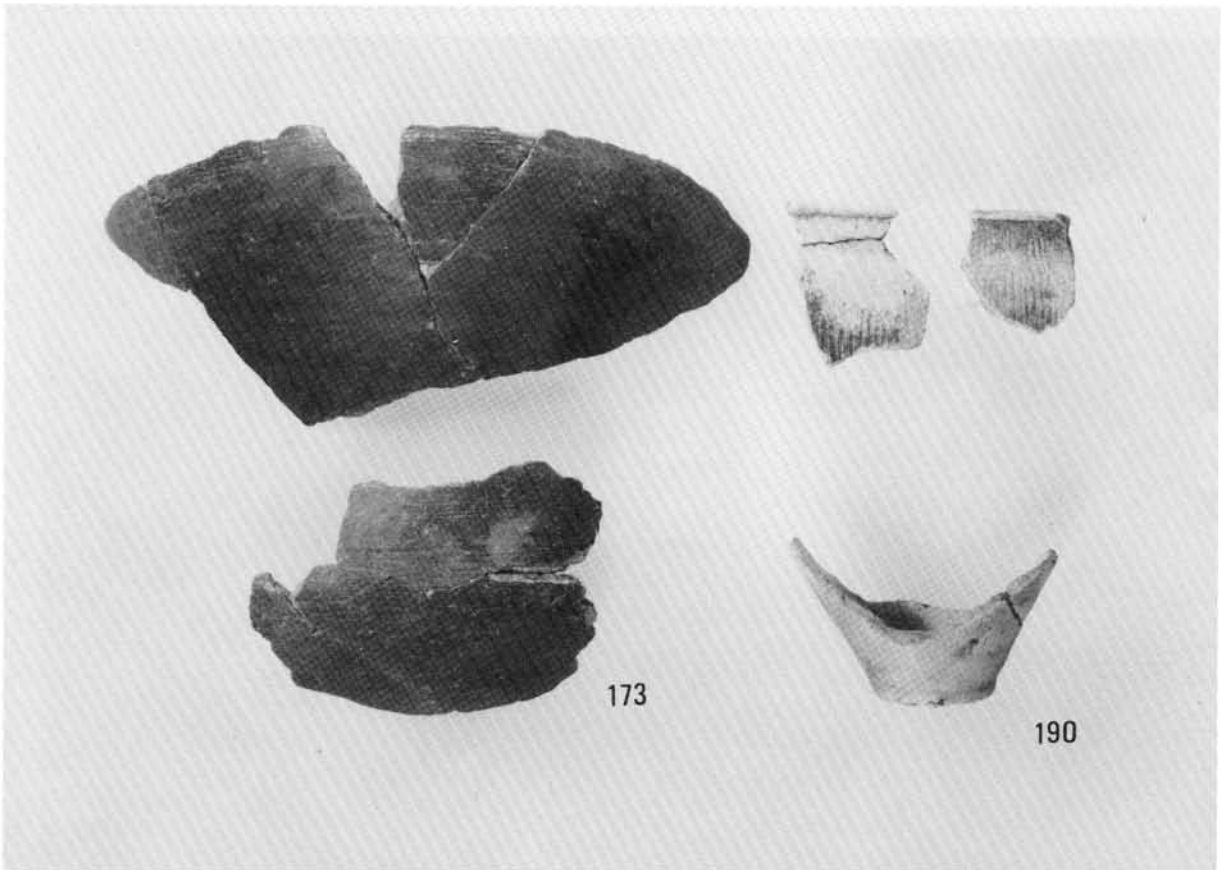
S K 23出土遺物 (1 : 3)



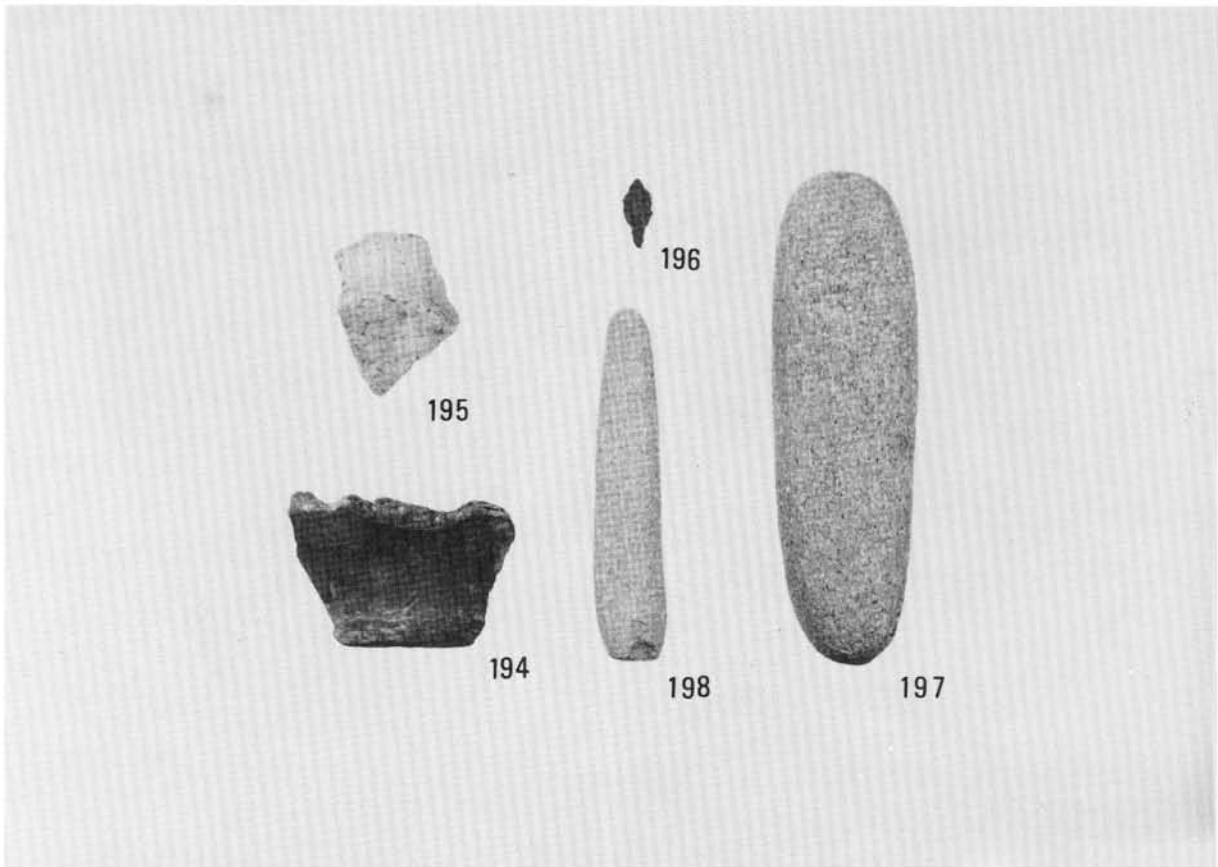
S K 23出土遺物 (1 : 3)



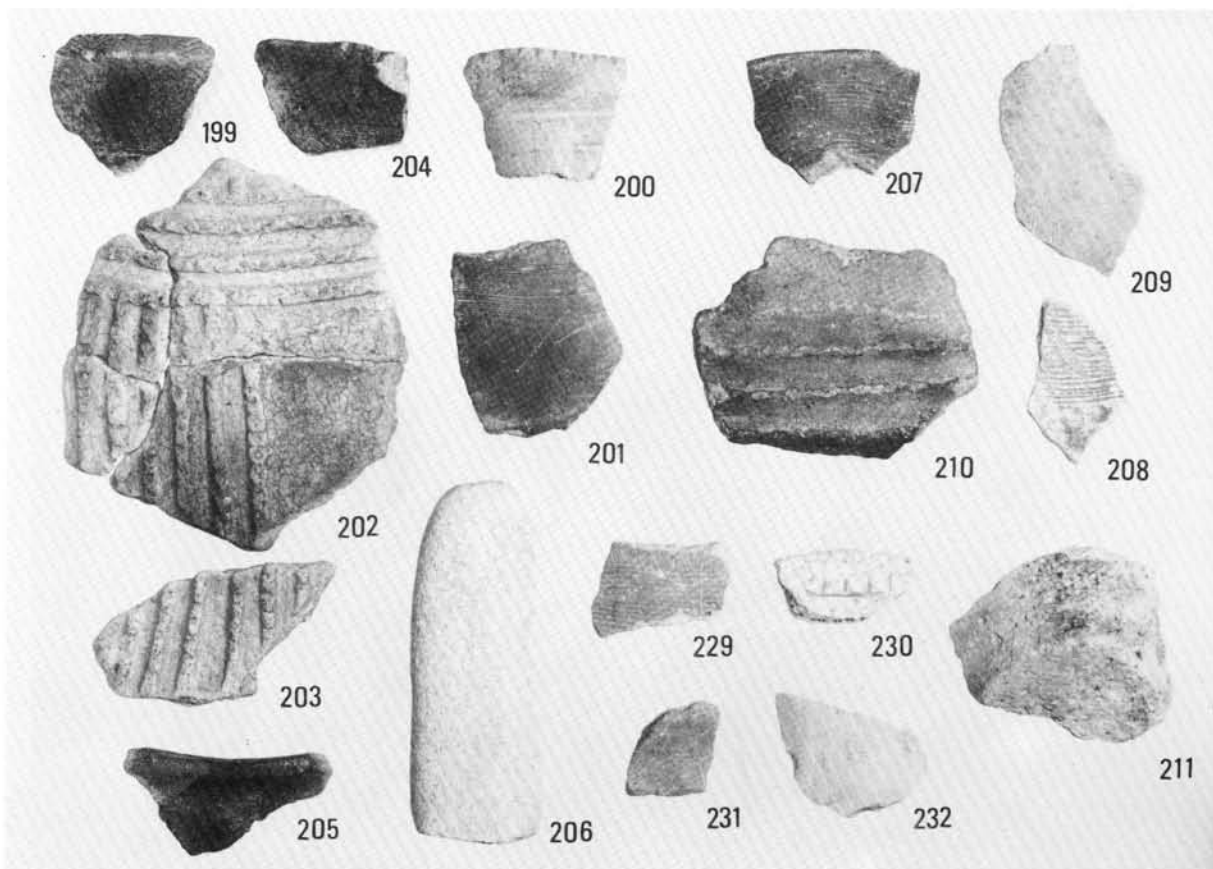
189



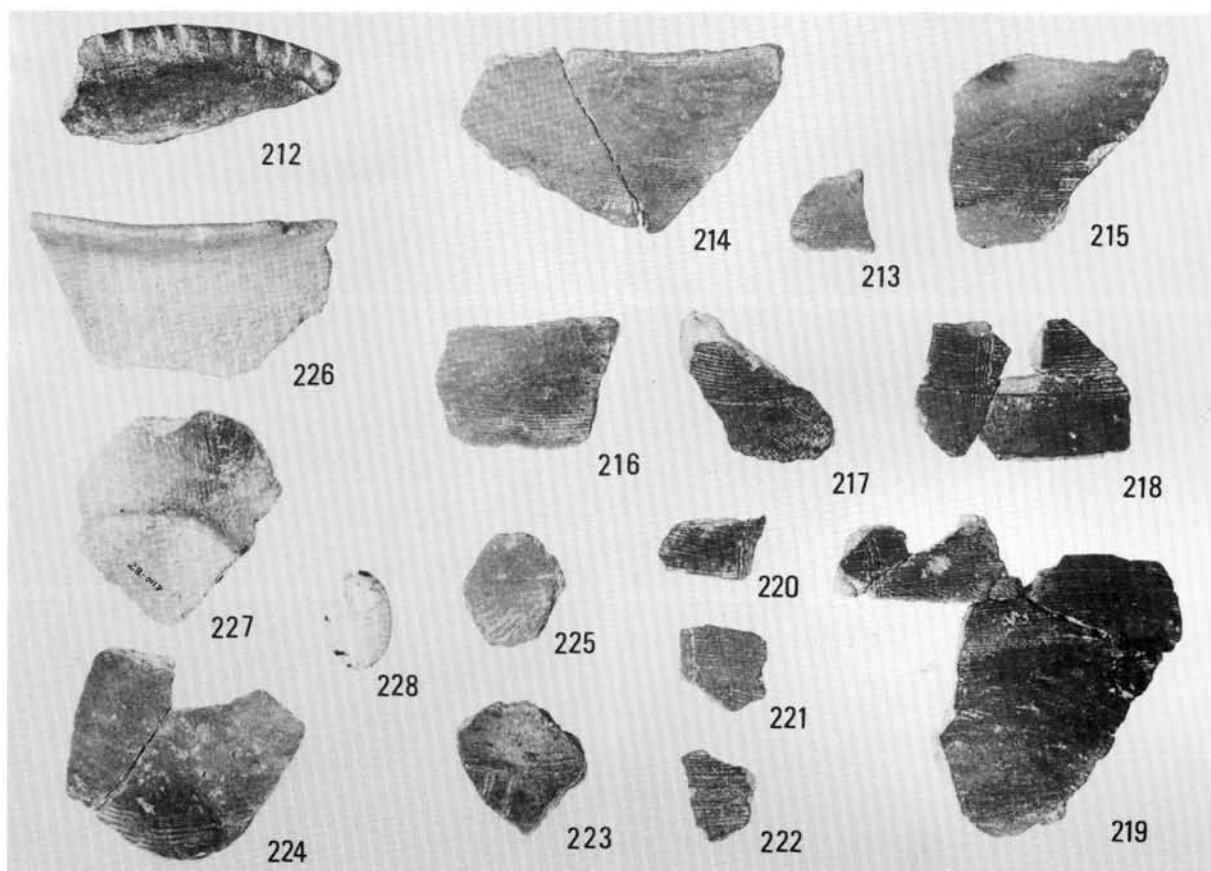
S K 23出土遺物 (1 : 3)



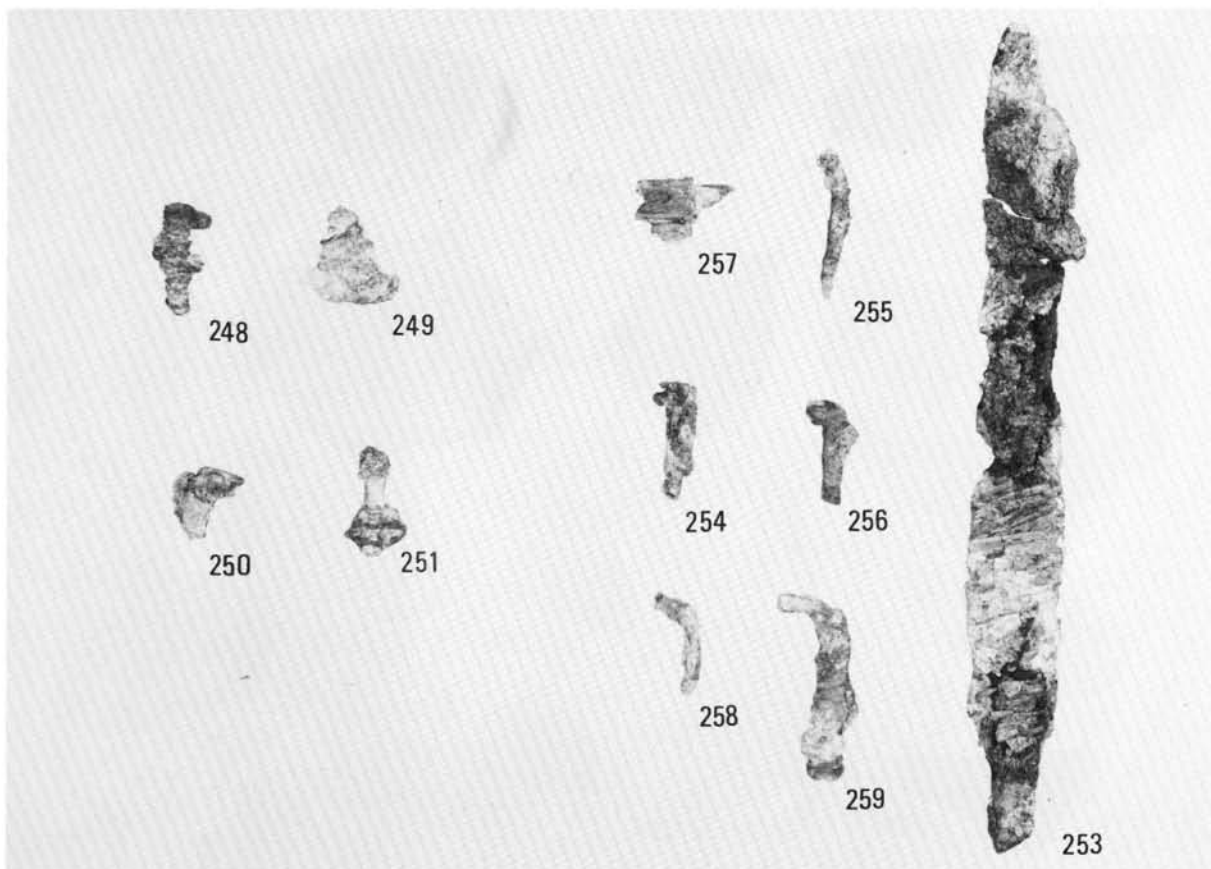
S K 23出土遺物 (1 : 3)



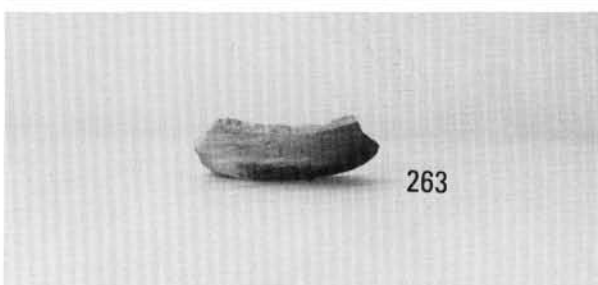
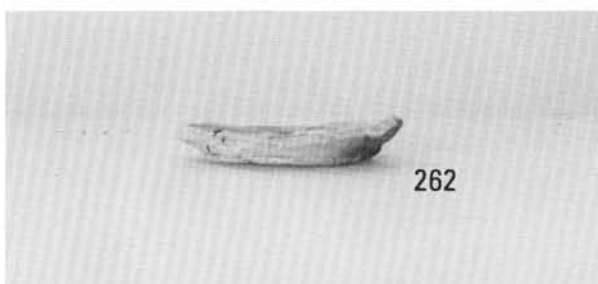
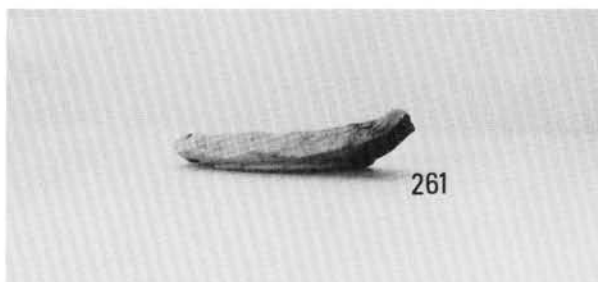
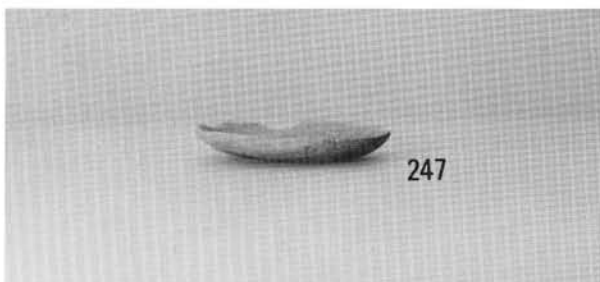
S K 24, 25, 28, 43出土遺物 (1 : 3)



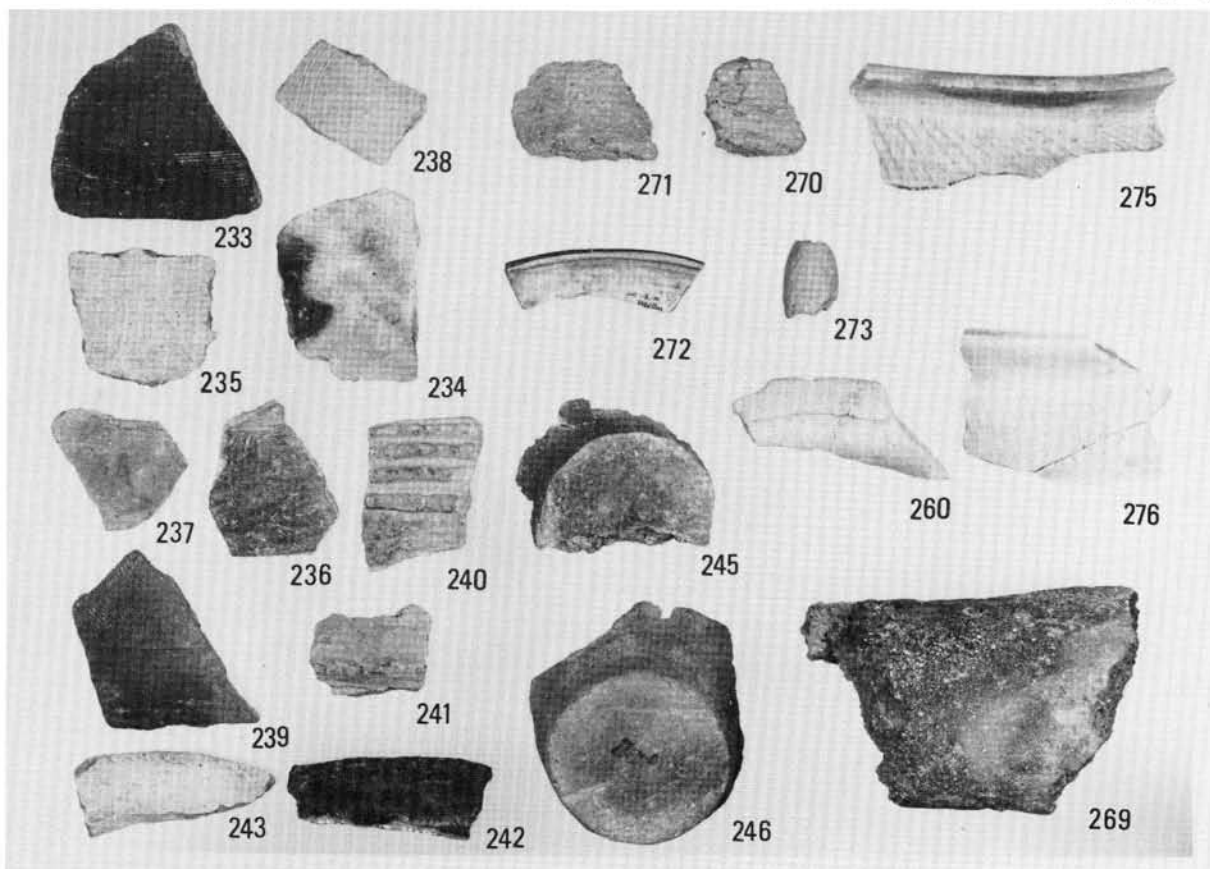
S K 27出土遺物 (1 : 3)



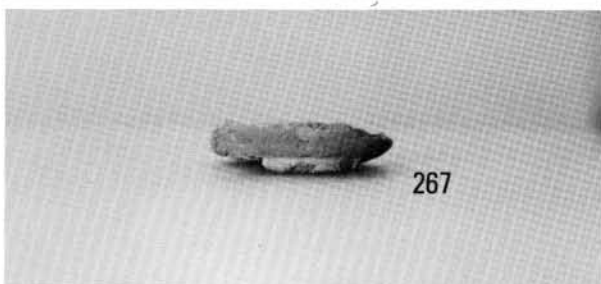
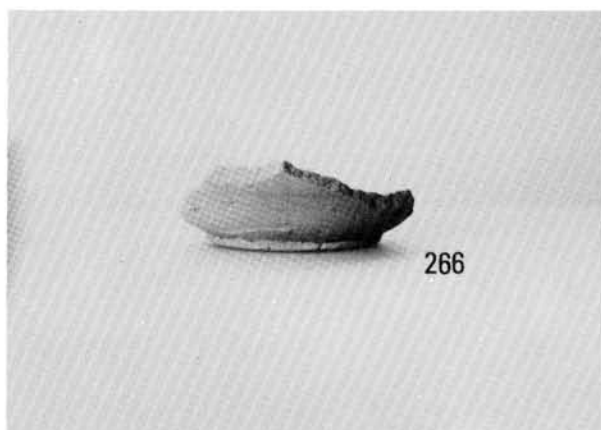
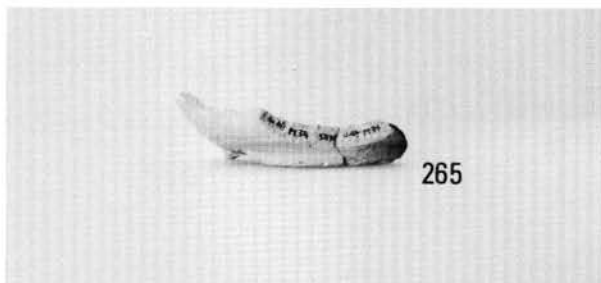
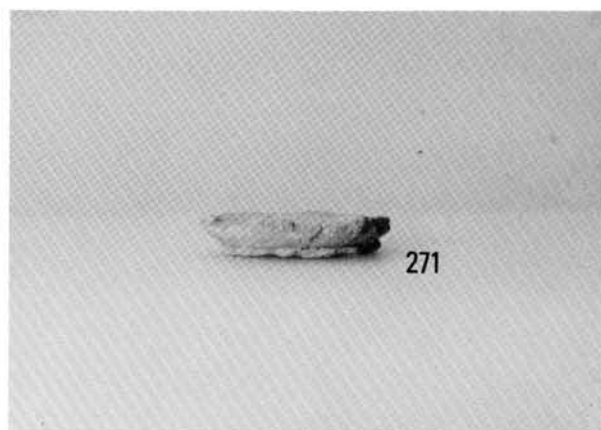
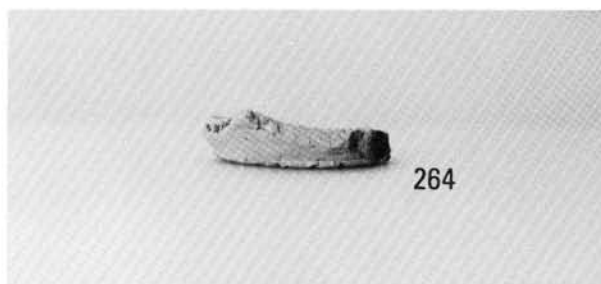
S X54, 55出土遺物 (1 : 2)



S X54, 55, 包含層出土遺物 (1 : 3)



包含層出土遺物 (1 : 3)



包含層出土遺物 (1 : 3)

多気郡多気町 しゃくそんじ 积尊寺 (中牧) 遺跡 (32)

1. はじめに

櫛田川が下流に近くなり最後に大きな曲流をみせる多気町牧地区には、南東約2.5kmの城山(280m)から延びてくる丘陵がこの曲流部に入り込んできている。

旧伊勢本街道として、近世には南大和方面からの多くの伊勢参宮の人々が通行したのが、現在の県道勢和・兄国・松阪線である。古くから重要な地位を占めたこの街道は、丘陵の鞍部(鍋倉峠)をほぼ東西に走っている。

丘陵東麓には県道を挟んで南北に牧瓦窯跡群が存在する。

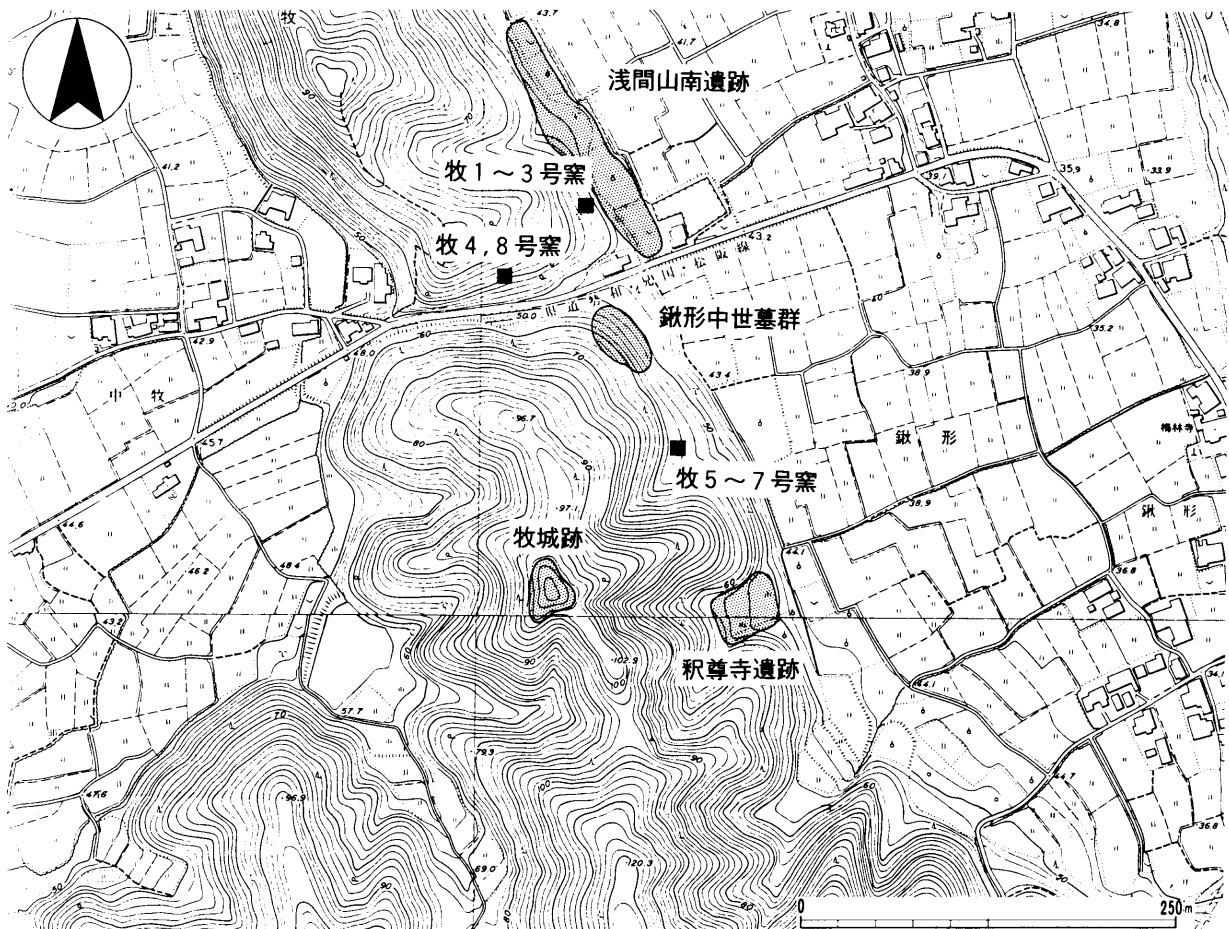
県道の南方約100mに位置する牧5・6・7号窯

から、さらに南へ約100m、尾根ひとつ隔てた小谷に积尊寺遺跡は位置している。行政区画上是多気郡多気町 积尊寺^①に属する。

この小谷は東方に開き、北・西・南には丘陵が迫るため狭小ではあるが、背後の丘陵から供給された花崗岩の風化土の堆積が顕著である。またこの小谷は盛土・整地がなされているため、平時には水流はなく割合に高燥で日照も良好な平坦地となっている。

この平坦地は東西約40m、南北約30mほどの広がりがある。調査前には梅林および畑地となっていた。標高は約51mである。

当遺跡の周辺では発掘調査の行われた遺跡がなく、

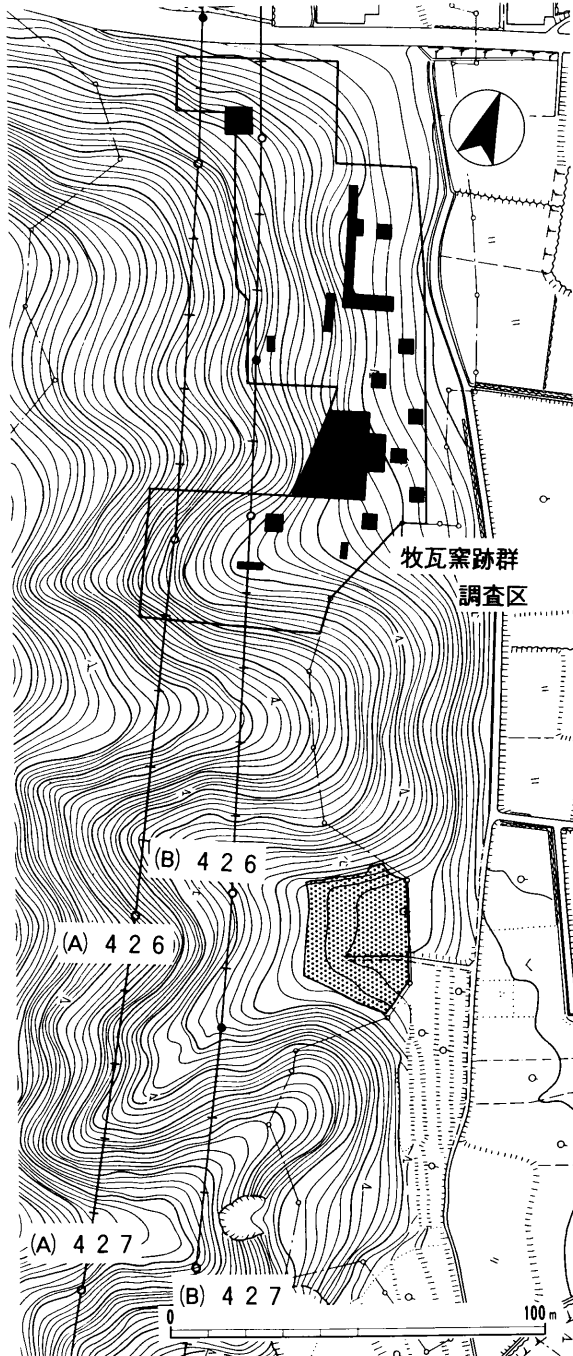


第8-1図 遺跡地形図(1:5,000)

周辺の遺跡についても表面採集の資料から、遺跡の内容が推定されるにとどまっていた。そのため周辺地にも遺物の散布は確認できるものの、詳細な内容については不明となっている。

当遺跡に関係する時期の遺跡としては、背後の山頂や尾根に、中世城館の牧城^⑧の一部と思われる空堀状の溝や平坦地が見られるが、牧城については文献資料等はなく、実態は全く判っていない。

また、今回の一連の調査において、牧瓦窯跡群の調査中に新たに発見され調査が実施された鋳形中世



第8-2図 調査区位置図 (1:2,000)

墓群がある。当遺跡の北約200mに位置し、河原石で区画された内部から石製五輪塔や蔵骨器が出土した。この中世墓群は南の牧5~7号窯付近まで帯状に広がっていた可能性があり、比較的規模の大きなものであったと考えられる。

その他に周辺には中世土器片の散布する遺跡として前山遺跡(鋳形)、堂ノ前遺跡、川ノ上遺跡、宮谷遺跡(いずれも中牧)などが知られている。

昭和60(1985)年11月に第一次調査を実施したところ、遺構・遺物を検出したため、同年12月5日から翌昭和61(1986)年2月28日までの間、約1,000m²について第二次調査を実施した。

調査に際しての4mごとの地区設定は、原則に従い西から東へアルファベットを、北から南へ数字を与え、各グリッドの北西杭をグリッド名とした。

地区割の基準線は道路センター杭(B)STA426+00と(B)STA426+40を結ぶ線を南北基準線とし、グリッドの呼称については(B)STA426+00をJ-16とした。

2. 層 序

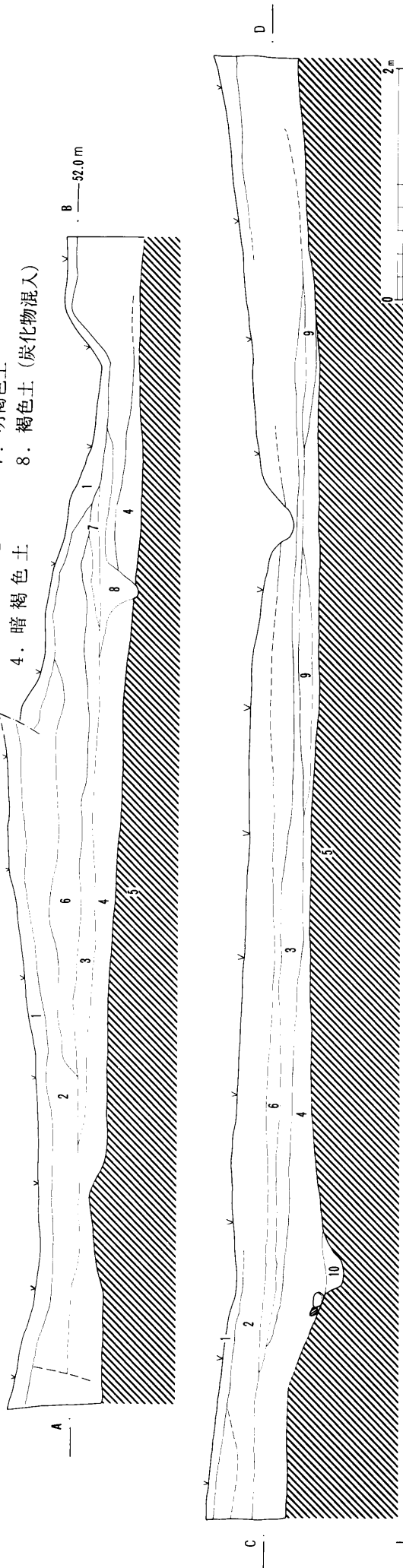
発掘区北壁での基本的な層序は次のとおりである。
第1層：暗褐色土(表土)、第2層：暗黄褐色砂質土、第3層：褐色土、第4層：暗褐色土(遺物包含層)第5層：花崗岩風化砂を含む褐色土(地山)

また部分的には風化して簡単に崩れてしまう花崗岩が介在したりしている。この北壁は丘陵斜面裾に位置するため、斜面からの堆積物が厚いが、発掘区中央部では耕土直下に第4層の遺物包含層がみられ、遺構面は浅い。

第一次調査時に遺構面を掘り抜いたグリッド壁面を観察すると、遺構面以下の土層中にも磨滅した土師器の細片等がみられ、盛土あるいは整地がかなりの厚さで行われているようであった。その盛土層は少なくとも60cmはある。

遺構は第5層上面で検出したが、調査終了後に盛土層にもトレンチを設定して下層遺構の確認作業を行ったが、遺構は確認されなかった。

- 1. 暗褐色土
- 2. 暗黄褐色砂質土
- 3. 褐色土
- 4. 暗褐色土
- 5. 花崗岩風化砂含む褐色土
- 6. 風化花崗岩
- 7. 明褐色土
- 8. 褐色土 (炭化物混入)
- 9. 極粗砂
- 10. 淡褐灰色粘質土



3. 遺構と遺物

道路建設用地内の平坦地全面を調査したが、発掘区の北東半に遺構、遺物が集中した。そしてさらに東の用地外へ広がる様相をみせるが、調査開始時にはすでに削平されていた。なお、この削平工事の際に、多量の遺物が出土したということであった。

検出した遺構には掘立柱建物2棟、柵列、土坑、石列、性格不明の配石、集石などがある。

遺物は整理箱(54×34×15cm)に約20箱程度出土したが、大半が室町時代のものである。

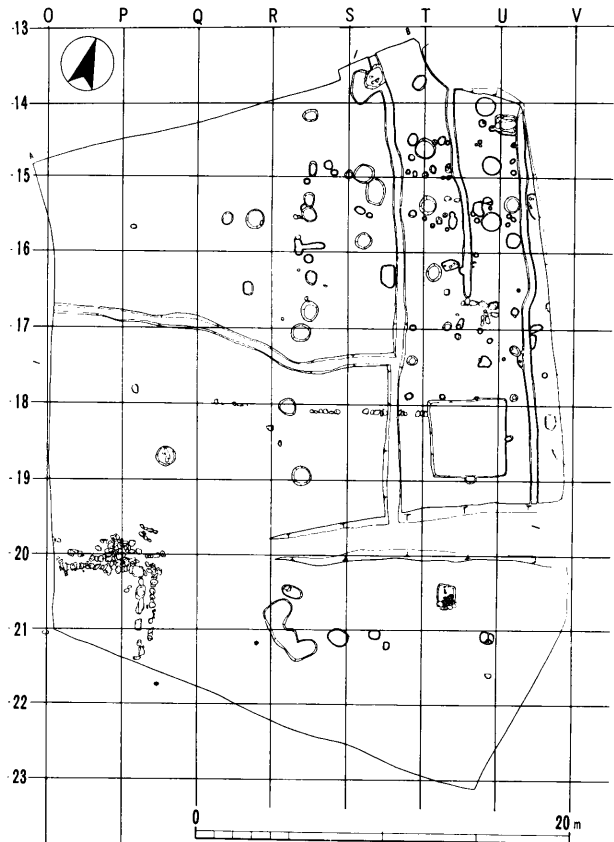
出土遺物には土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦質土器、瓦などがある。

以下、検出した遺構、遺物について述べる。

掘立柱建物

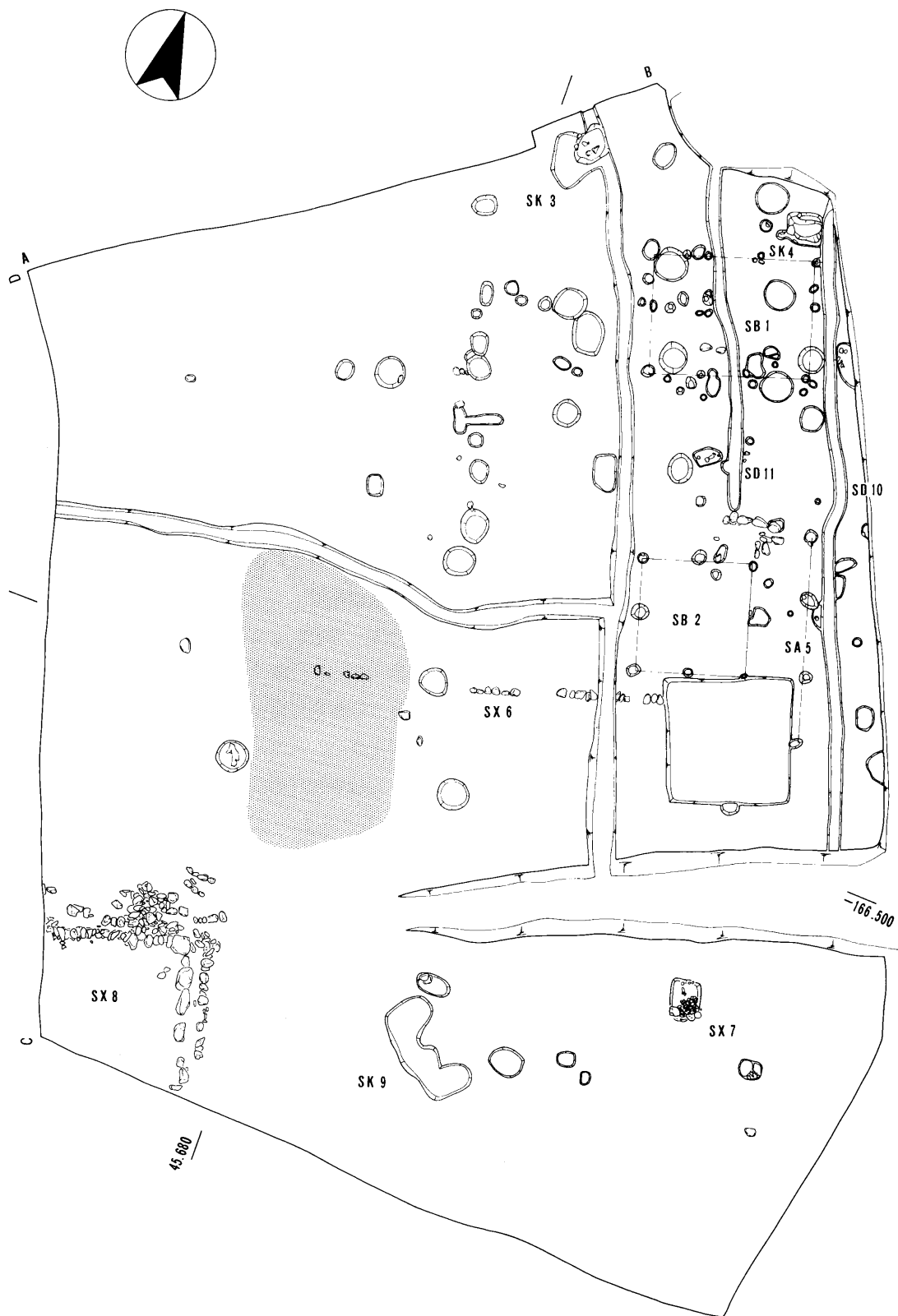
S B 1 発掘区の北東部に位置する2間×3間の東西棟の掘立柱建物である。

柱穴の掘形は直径25~40cmの円形で、30cm程度のものが多い。検出面からの深さは14cmから30cmである。北端の柱穴のみ直径10cmほどの偏平な河原石を



第8-3図 発掘区地区割図(1:400)

←第8-4図 発掘区北壁、西壁土層断面図(1:50)



第8-5図 遺構平面図 (1:200)

利用した礎石がみられた。

柱通りはN71.5° Eである。また柱間は北側の桁行で1.8mの等間、南側の桁行で1.8m+1.5m+1.9mと不揃いである。梁行は西側が1.7m+2.1m、東

側で1.5m+2.2mである。

柱穴の埋土には炭化物を多く含み、焼土の微小な粒が混じっていた。埋土中から土師器皿の小片、鍋の体部片、陶器片が出土した。

〔出土遺物〕

土師器皿（1） 小片のため復元した口径に問題は残るが、口径7.4cm、器高1.4cmの小皿である。

口縁部はほぼ直立し、器面調整は外面がユビオサエ後ナデ、口縁部内面はヨコナデされる。

胎土は精良、焼成は良く淡黄褐色を呈する。

播鉢（2） 口径の推定もできない小片である。口縁端部がやや肥厚し、特に上部はつまみ出されたように上方へ尖る。また口縁端面には浅い溝が入る内面に卸し目はないが、使用による磨耗痕が見られる。

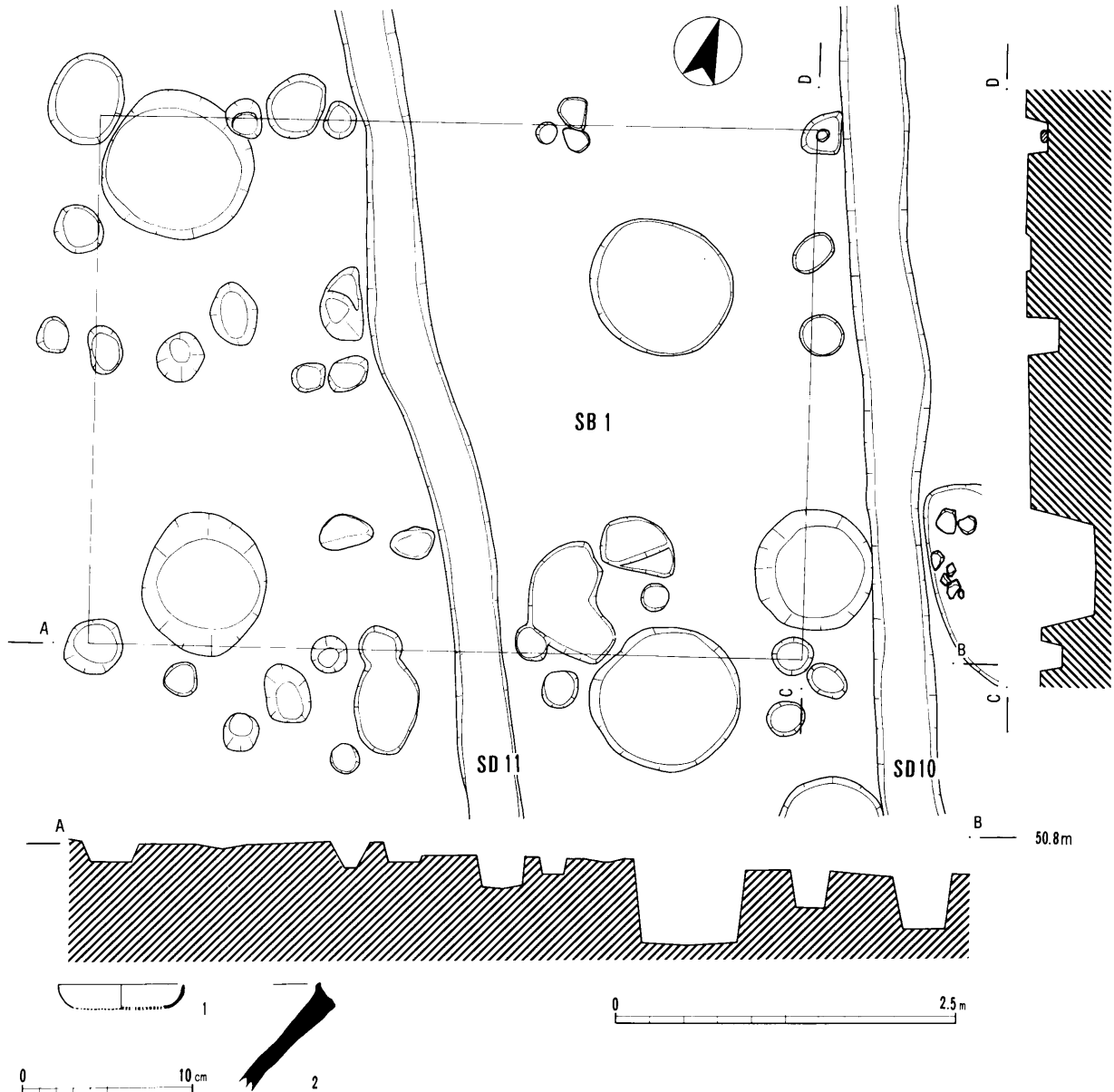
胎土は並で砂粒はさほど含まない。焼成は良く、にぶい赤褐色ないし橙色を呈する。

常滑産と思われる。

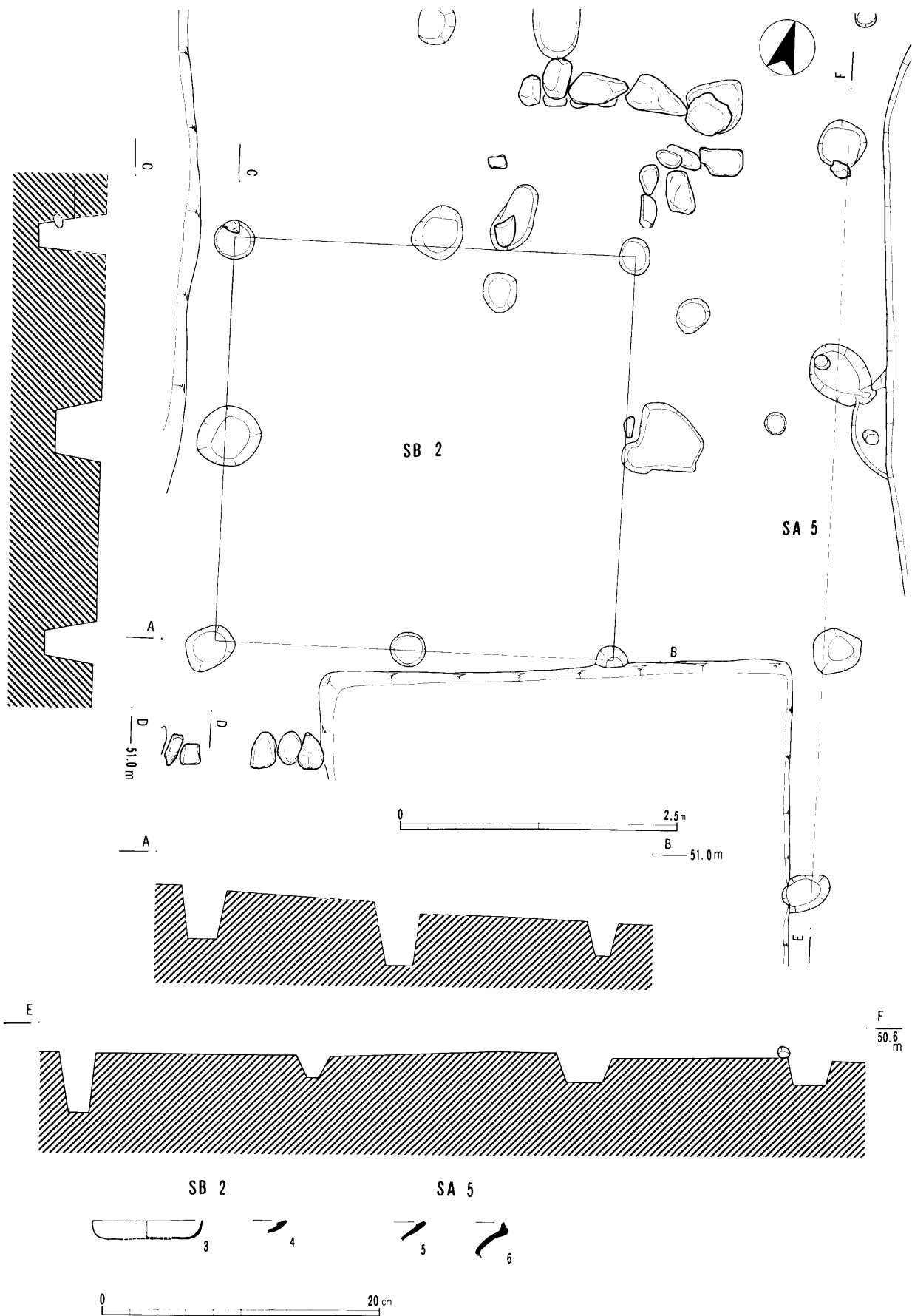
SB 2 SB 1の南6mに位置する2間×2間の堀立柱建物^③である。西側梁をSB 1に揃え、棟方向も同じであることから同時併存の建物と思われる。柱堀形は直径30~50cmの円形で、検出面からの深さは東側梁中央の柱穴を除いて約45cm前後あり、しっかりしたものである。

柱間はいずれも1.8mの等間である。屋外の北側に若干の石列が検出されたが、この建物に付属するものであろうか。

柱穴の埋土にはSB 1と同様に炭化物、焼土粒が多く混っていた。細片ばかりであるが土師器皿や鍋



第8-6図 SB 1実測図（1：50）、出土遺物（1：4）



第8-7図 SB 2、SA 5実測図(1:50)、出土遺物(1:4)

が出土した。

〔出土遺物〕

土師器皿 (3) 推定口径8 cm、器高1.4cmの小皿で、底部は若干上げ底になるものである。外面はユビオサエで整形され、口縁部内面はヨコナデ。

胎土は精良、焼成はやや良で淡黄色を呈する。

土師器鍋 (4) 口縁部の細片である。折り返された口縁部はヨコナデされて密着している。口径の推定は不可能であるが、薄手の小型鍋である。

胎土は精良、焼成も良く淡黄色を呈する。

柵列

SA5 SB2の東1.8mに位置し、SB2の柱通りと方向を揃える柱穴列である。

柱穴は直径40~51cmのほぼ円形を呈するもので、検出面からの深さは40~55cmである。

柱間は2.1+2.5+2.1mである。SB1、2と同様に埋土には炭化物と焼土粒を多く含む。柱穴からは土師器細片が微量出土した。屋敷地の東を限る塀のような施設であろう。

〔出土遺物〕

土師器鍋 (5・6) いずれも口径の推定が不可能な細片。(5)は折り返した口縁部が密着するもの、(6)は上方へつまみ上げられるものである。(5)は胎土精良で焼成も良く、にぶい黄褐色を呈する。(6)は胎土は精良だが焼成が悪く、表面はにぶい黄橙色を呈するが内面は黒灰色である。

石列

SX6 SB2の南約0.9mのところから西へ約12mほど連続する石列である。欠失部分もあるが概ね現状のような状態で並んでいたものと思われる。

石は20~30cmほどの河原石が使用され、積んだ形跡は認められなかった。

この石列はSB2の柱通りとほぼ平行である。そして、石列の石端からさらに約5mほど西には、40~50cm大の石が1個あり、またさらに北へ折れて約9.5mのところにある石と結べば、屋敷地を囲う石列と想定することもできよう。

以上のことから、SB1、SB2、SA5、SX6は相互に関連性があり、同時併存した可能性が高い。

土坑

SK3 発掘区北端付近に位置する土坑である。1.5×2.0mの不整形なプランで、土坑の北東部は新しい時期の畑の排水路によって切られ、攪乱を受けている。

検出面からの深さは25~35cmで、底面はほぼ平坦であるが、北寄りの部分では1.0×1.1mほどの範囲が一段深くなっている。

埋土には炭化物が多く含まれ、割り石も混入している。埋土中より土師器の鍋、羽釜、皿および陶器などが多量に出土した。なかでも土師器鍋、小皿の多量の出土が特筆される。そしてそれらには、煤の付着しないものが目立ったことも注目される。

〔出土遺物〕

土師器皿 (7~10) いずれも口径が7.6~7.8cmで器高も1.6~1.8cmとよく似ており、規格性が窺える。

(7)は口縁部がやや内弯する。口縁端部は尖り気味で丸くおさめられている。底部には指頭痕が残り、口縁部内外面はヨコナデ。

胎土は精良土で、焼成は良好、色調は淡黄褐色を呈する。図示したもの他に小片が多数ある。

土師器鍋 (11~19) 鍋についても小皿と同様に法量に規格性が窺える。すなわち復元口径が20~25cm程度の小型のものと、口径が30~40cmほどの大型のものが認められる。

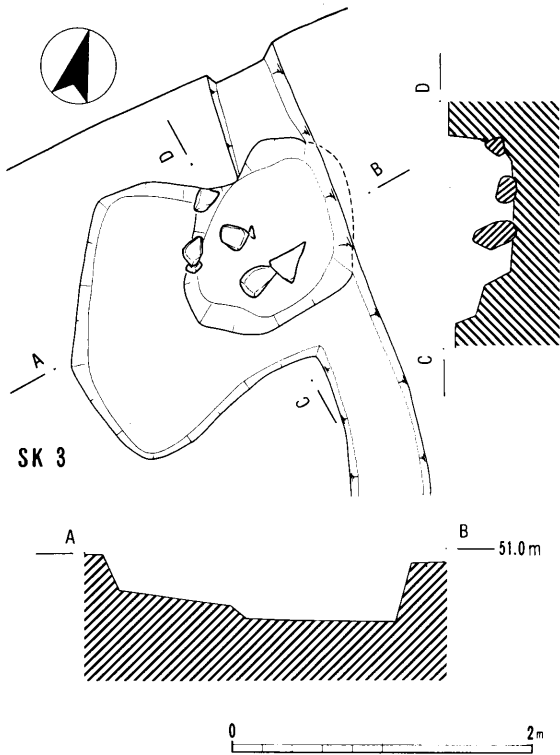
器壁は小型のもので3~4mm、大型のもので4~5mmと薄く仕上げられている。

口縁部の外反度の強いもの(14~16)と、さほどでないもの(11~13、17~19)とがある。また体部も強く張るもの(8・11)と、ほとんど張らずにくびれ部が体部の最大径となるもの(9・10)も見られる。

口縁端部の形態には、折り返してつまみ上げないもの(11)、折り返して口縁内面にヨコナデによる凹線をもち、水平もしくは斜め上方につまみ上げられるもの(12~15)と、上方につまみ上げられて断面が三角形を呈するもの(16~19)がある。

器面調整は体部外面上半が横位ないし右下りの刷毛目調整で、(16~19)では縦位にも刷毛目を施している。

一方、体部下半は残存する個体が少ないが、(11



第8-8図 SK 3実測図 (1:50)

~13) のようにヘラケズリされているものがほとんどを占める。また体部内面下半もヘラケズリされるのが一般的であるが、それが明確に判るのは (12) である。

図示したもの以外にもかなりの破片があるが、煤が付着したものはあまり認められない。

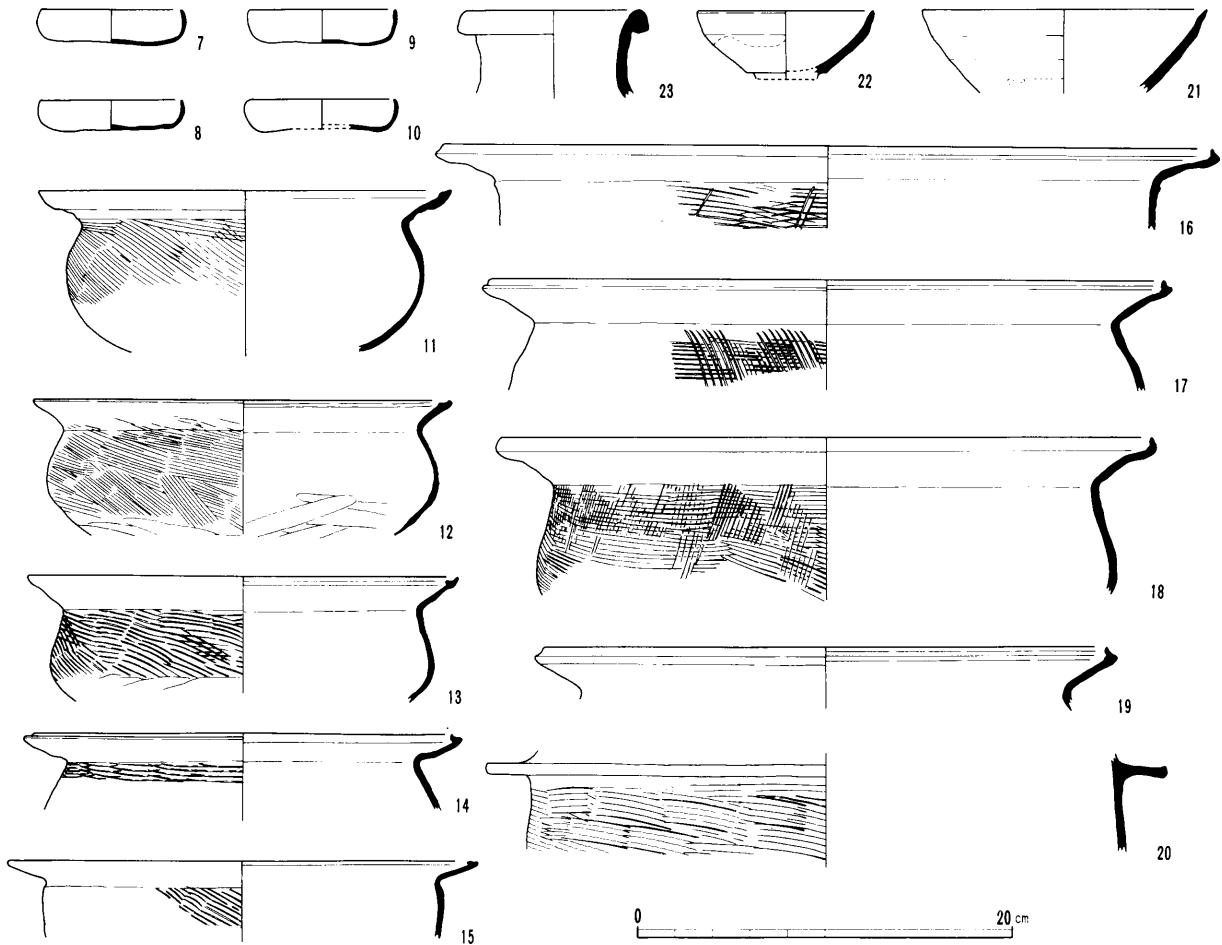
大型品には胎土にやや粗いものも含まれるが、ほとんどが精良で砂粒を含まないものである。焼成は良いものが多く、乳白色を呈するものから黄褐色までいろいろある。

土師器羽釜 (20) 口縁部を欠失するが、鏝の部分が残存する。小片のため推定した径には疑問が残る。

鏝は水平よりやや下がり気味でつく。鏝以下の体部外面には横位の刷毛目が施される。

灰釉平碗 (21) 推定口径15.2cmの平碗である。口縁端は尖り気味に仕上げられ、漬け掛けによる灰釉が底部付近にまで施されている。

胎土は良で焼成良く堅緻、淡い灰緑色を呈する。



第8-9図 SK 3出土遺物 (1:4)

瀬戸産で15世紀前半に位置づけられる。

鉄釉小碗 (22) 推定口径9.2cm、同器高が3.7cmの小碗である。暗赤褐色の鉄釉が内面全体と体部外面上半に、漬け掛けにより施される。

底部は残存しないが、削り出しによる高台がつくものである。

胎土は良ながら若干の細砂が混じる。焼成は良、色調は淡灰褐色を呈する。瀬戸産で15世紀前半のものであろう。

灰釉壺 (23) 推定口径9.2cmの四耳壺と考えられる口縁部片である。

口縁部は外側に折り返され、玉縁状の口縁となる。外面には全面に灰釉がかかる。

胎土は良、焼成は並、色調は淡黄灰色を呈する。瀬戸産で他の遺物よりやや古く、13世紀後半から14世紀にかかる頃のものと思われる。

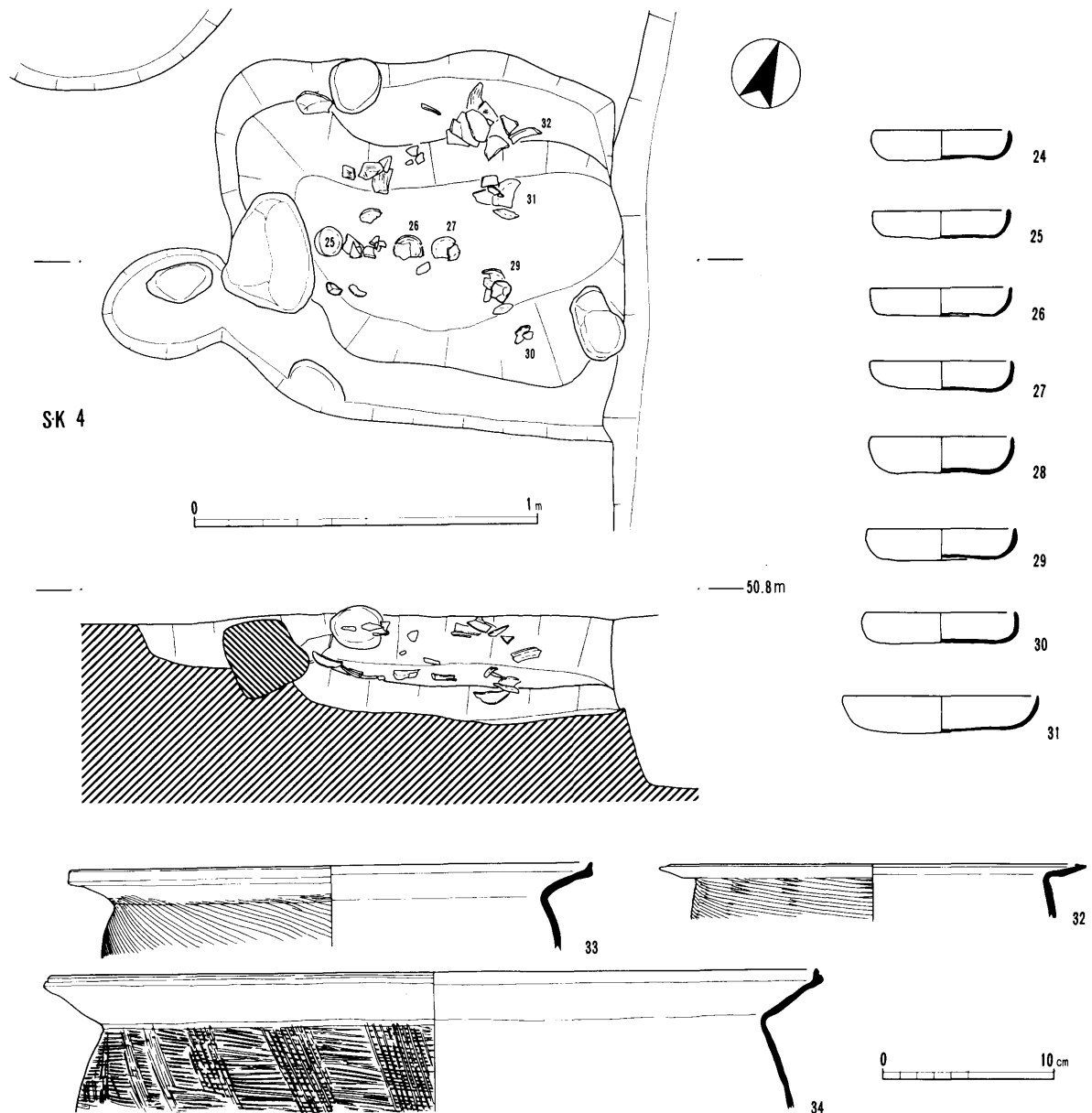
SK 4 SK 3の東方約7mに位置し、SB 1の北に隣接する。1.0×1.1mの隅丸長形状の平面プランを有するが、東部はSD10に切られている。

検出面から約10~14cm落ち込んで平坦面があり、中央部はさらに楕円形に窪んでいる。最深のところ検出面から約30cmである。

埋土中に粗砂、炭化物、灰を含む。完形を含む土師器皿や鍋の破片が出土した。

〔出土遺物〕

土師器皿 (24~31) SK 3出土のものと大差ない。



第8-10図 SK 4実測図 (1:20)、出土遺物 (1:4)

口径が7.8~8.8cm、器高が1.6~1.8cmの小皿（24~30）と、それよりやや大きな皿（31）の二種に分けられる。

（31）は口径11.4cm、器高が2.1cmである。

これら皿の器壁はいずれも2~3mmと薄い。

胎土はいずれも精良で砂粒を含まない。焼成は、表面はよく焼けているものの内部が灰黒色のものもみられる。淡い乳褐色ないし黄褐色を呈する。

土師器鍋（32~34） いずれも破片だが3個体出土した。

（32）はSK3出土の（15）によく似る。推定口径約24cmで、体部から口縁部への屈曲部はほぼ直角に強く外反する。先端の折り返し部はほとんどつまみ上げられず、水平に近い面をもつ。体部には横位の刷毛目が施される。

（33・34）は口縁端部が上方へつまみ上げられて、断面が三角形をなすものである。

（33）は推定口径約30cmで、右下がりの刷毛目が施される。（34）は推定口径約44cmの大型品である。

体部には横位の刷毛目調整の後、縦にちかい右下りの刷毛目が間隔をおいて施される。体部下半は内外面ともヘラケズリ。

胎土はいずれも良で焼成も良好である。また口縁部外面から体部にかけて煤が付着している。

色調は淡褐色である。

SK9 発掘区の南中央部付近で検出された東西が

約3.4m、南北が約1.2~1.6mの不定形な平面形を呈する土坑である。検出面からの深さは約30cmである。埋土中より土師器、陶器片が微量出土した。

〔出土遺物〕

土師器皿（35） 小片であるため復元した口径には問題が残るが、口径11cm、器高1.7cmの小皿である。口縁部は内外面ともヨコナデされる。

胎土は良、焼成も良で淡黄~灰白色を呈する。

土師器鍋（36） これも細片で口径の推定は不可能。折り返された口縁部は密着している。

胎土は良、焼成も良で淡黄色を呈する。

灰釉小皿（37） 比較的大きな破片である。ロクロ水挽きにより形成され、体部から口縁部にかけては器壁がやや厚い。底部はほとんど残存していないが、糸切り痕がわずかに認められる。

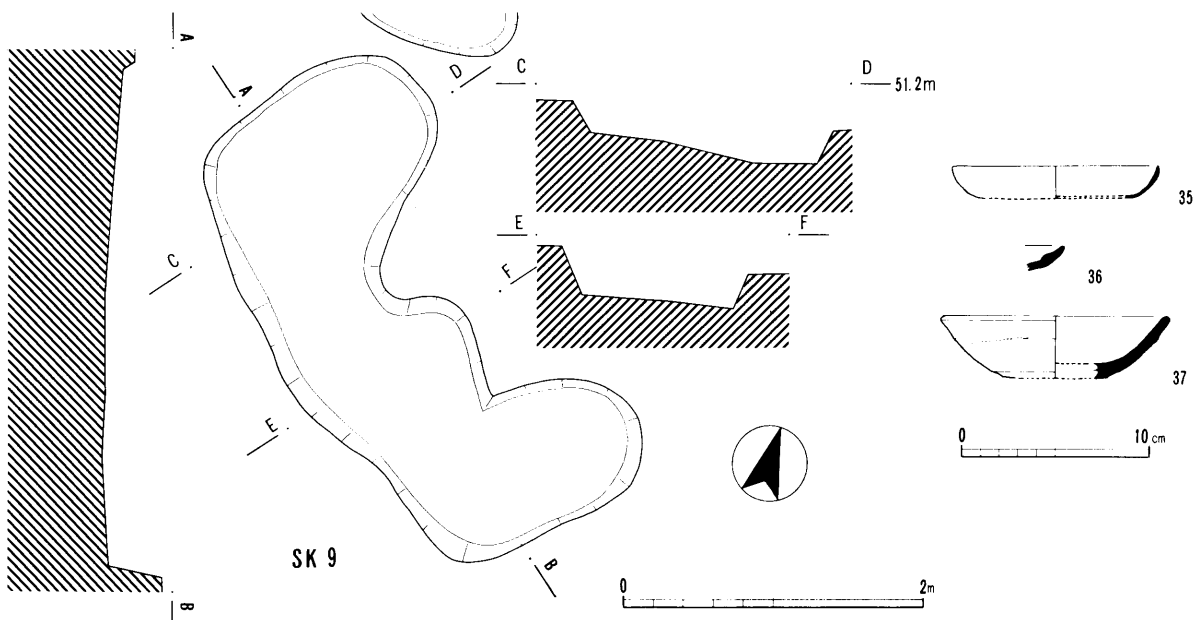
淡緑黄色の灰釉を内面に刷毛塗りした後、口縁部3分の1ほどを内外面に漬け掛けする。

胎土は並、焼成は良で灰黄色呈する。瀬戸産で15世紀初頭頃のものである。

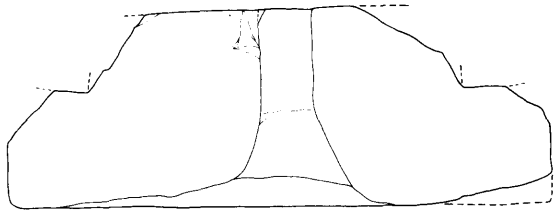
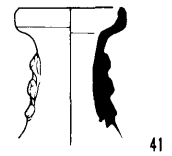
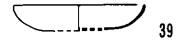
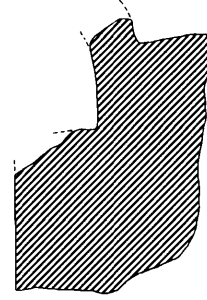
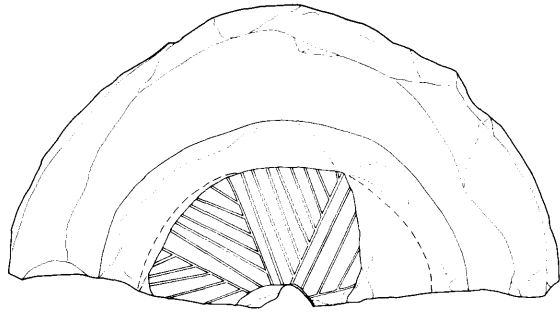
配石遺構

SX8 発掘区南端で検出されたもので、大小の石を二重にL字状に配した石列である。

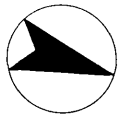
東側の石列は内側に大きな石を用いているが、地山のレベルが高いためか、抜き取られているようである。また最南端の石の据えられた方向が、東側石列と直交することから、南側の石列とも考えられよ



第8-11図 SK9実測図（1:50）、出土遺物（1:4）



42



第8-12図 SX 8実測図 (1 : 50) 出土遺物 (1 : 4)

う。もしそうであれば東辺は5mとなる。

一方、北側の石列は内側のものが上下に3~4段積み上げられている。

発掘区の西壁で断面を観察すると、石列は発掘区外へとさらに延びるようである。この西壁面までの北側石列の長さは4.8mである。

北石列の外側にある石の集中箇所については、石の配置に規則性は認められなかった。

このようにSX8は、何かを区画する石組みであろうと考えられるが、内部には構築物等の痕跡は検出されなかった。しかし、一部に石が集中している箇所があり、その中には半割された茶臼(42)があった。

〔出土遺物〕

石組み内と石列によって区画された内部から、微量の遺物が出土した。

土師器皿(38・39) いずれも口径が6.8~7cm、器高が1.2~1.3cm、器壁の厚さが1.5~2mmの小皿

である。

(38)は全体の約2分の1ほど残存するものであるが、口縁部に油煙痕があり、灯明皿として使用されたものであろうか。(39)にも同様な油煙痕が見られる。

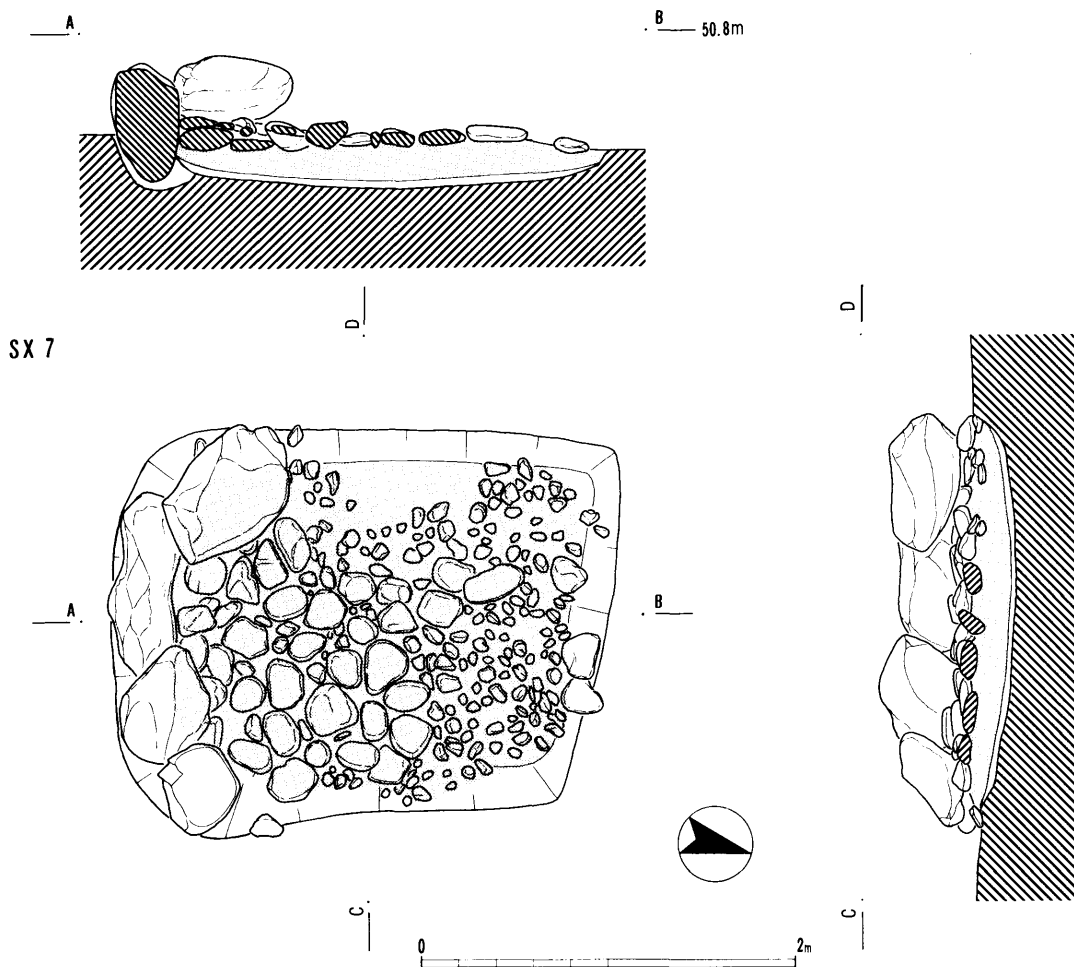
いずれも胎土は精良、焼成は良く淡褐色を呈する。
陶器甕(40) 常滑産大甕の口縁部の小片である。N字に折り返された縁帯部が頸部に密着する。

胎土は並、焼成は良いがややもろい感がある。色調は暗赤褐色を呈する。

花瓶(41) 受口状の口縁をもつ花瓶の口縁部から頸部にかけての破片である。頸部には2カ所に装飾の耳が貼りつけられている。

口径は5.4cmである。胎土は良、焼成も良く堅緻で灰白色を呈する。器面全体に暗褐色の鉄釉が施される。瀬戸産で15世紀後半に位置づけられる。

茶臼(42) 茶臼の下臼部分で、半分が残存する。粉受け用の皿部をもつが、欠損していて形態は不明



第8-13図 SX7実測図(1:20)

網目は小石の敷きつめられた範囲を示す。

である。

白面も周辺部はほとんど欠損しており正確な直径を計ることはできないが、およそ16cm程度と推定される。底面の直径は約29cm、高さ10.5cm、芯木孔径が約2.8～3cm程度と考えられる。

白面は7～9溝の8分画と推定され、目の断面形はV字形に近い浅い丸溝で、周縁まで切つてある。白面から皿の内面にかけてはよく研磨されているが、皿部外面や底部などにはノミによる荒仕上げが施されたままである。

茶臼の県内の出土例としては、檀・柏原遺跡^⑤（名張市）、下り合遺跡^⑥（上野市）、丹生川上城^⑦（員弁郡大安町）などがある。

S X 7 発掘区の南東部で検出された長辺1.3m、短辺1.0mの隅丸長方形を呈する集石遺構である。

検出面から約10cmほど掘り下げられた浅い土坑に明褐色の砂質土を薄く敷き、その上に2～10cm程度の小石を一面に敷きつめ、さらにその上に8～15cm大の扁平な河原石を全面に敷いている。

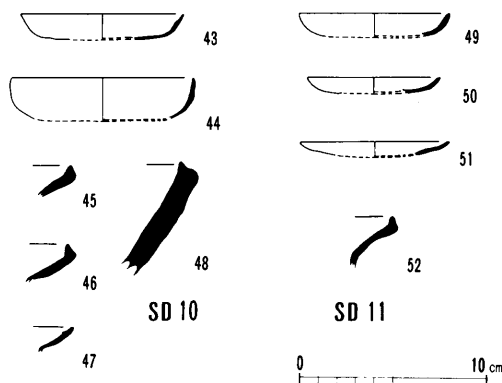
周囲には20～40cm程度の石を埋めて全体を囲ったらしいが、南側に4個しか残っていない。また他の石の抜き取り痕は明確には把握できなかった。

遺物としては土師器の極細片が出土したのみで、所属時期や性格等は不明である。

溝

S D 10 発掘区の東端で検出。幅40～50cmで検出面からの深さは24～46cmであった。溝の断面は逆台形を呈する。この溝は北から南へむかって低くなっている。

埋土中より土師器皿、鍋、陶器片が出土した。しかし、これらの遺物は混入品と考えられ、埋土の埋



第8-14図 S D 10・11出土遺物（1：4）

り具合などの状況から判断すると、この溝はより新しい時期のものかもしれない。

[出土遺物]

土師器皿（43・44） 推定口径8.6cm、器高1.3cmで体部内面がやや肥厚する（43）と、推定口径9.6cm、同器高2.3cmでやや深いもの（44）がある。

土師器鍋（45～47） 口縁端部を上方へつまみ上げるもの（45・46）と、折り返し部分が口縁部内面に密着するもの（47）がある。（47）は非常に薄手の小型鍋である。

3点ともすべて細片である。胎土は精良、焼成は良く淡黄色を呈する。

播鉢（48） 口径の推定もできない小片である。使用によるためか口縁端部も磨滅している。内面は端部から約7cm以下の部分に使用による磨耗痕が見られる。卸し目はない。

胎土はやや粗く砂粒を含む。焼成は良く、にぶい褐色ないし淡橙色を呈する。

常滑産でS B 1出土の（2）よりも古く、15世紀前半に位置づけられるものである。

S D 11 S D 10の西約3mに位置し、S D 10に併走する。しかし北半分のみにはしか検出されず、南半には延びない。

幅は40～50cm、検出面からの深さは18～29cmで断面は逆台形である。埋土もS D 10と同じであるところから、同時期のものと考えられる。

埋土中より微量の遺物が出土した。

[出土遺物]

土師器皿（49～51）（49）は推定口径8.0cm、器高1.2cmでやや厚手のもの、（50・51）は推定口径7.1～8.0cmで器高が0.9cmと低いものである。この浅い小皿は薄い粘土板を指で押し広げて成形したもので、粗雑な作りである。

胎土は精良、焼成も良で淡黄褐色を呈する。いずれも細片である。

土師器鍋（52） 口縁端部を上方へつまみあげるものである。細片である。

[包含層出土の遺物]

弥生土器（53） 1点のみ出土した。推定口径16cmの甕で、強く外反した口縁部は非常に短く、端部は垂直方向に面をもつ。

体部には4~5本/cmの刷毛目が右下りに施される。口縁端部から内面にかけてヨコナデ、内面には粘土接合痕が残る。

胎土は良だが砂粒を含み、赤褐色を呈する。やや摩滅しており、盛土の際に他所から運び込まれたものであろう。

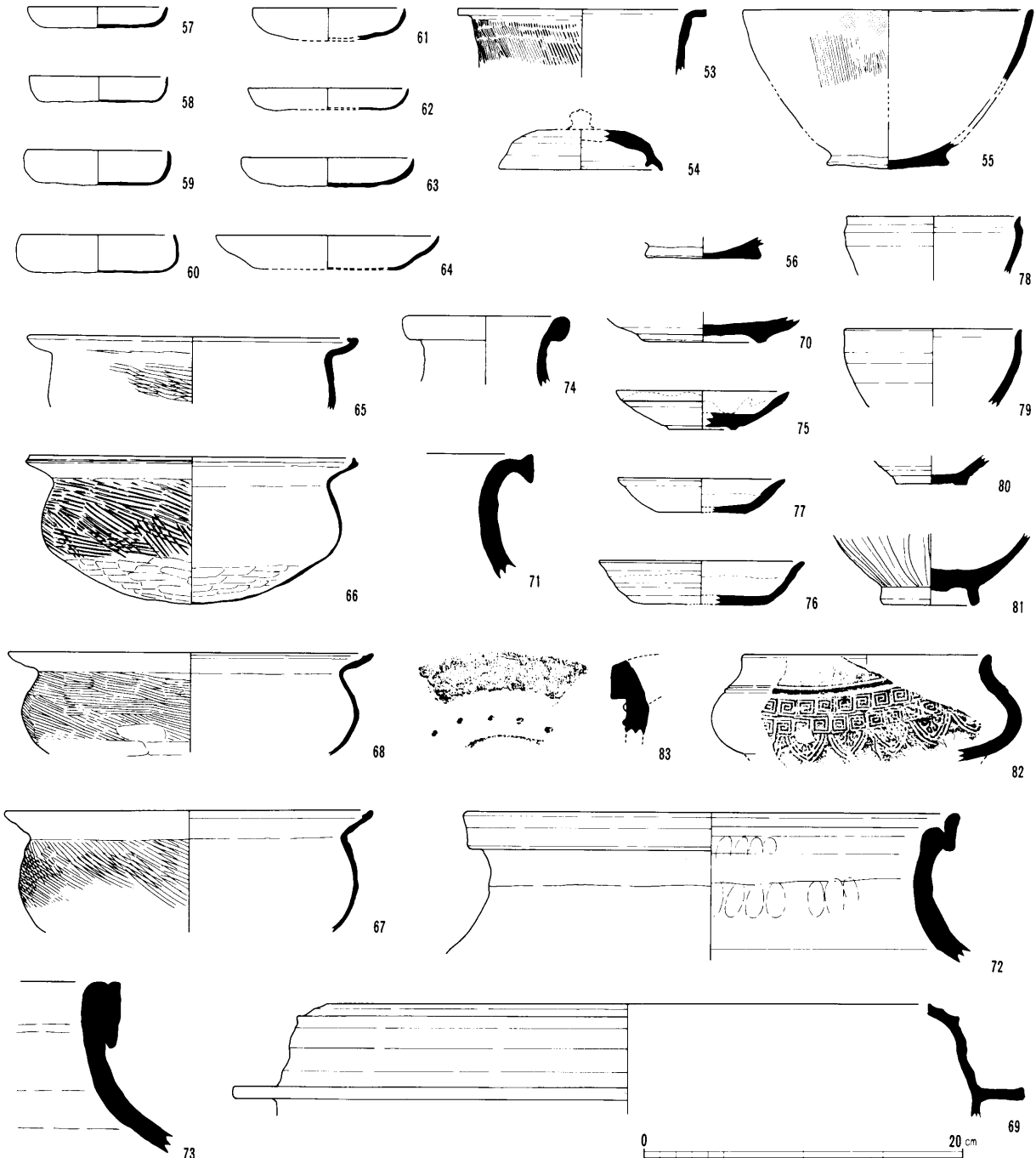
弥生時代中期に属するものである。

須恵器杯蓋 (54) 第一次調査時にS X 7に近いグリッドから出土したものである。全体の4分の1ほ

ど残存するが、推定口径10.2cm、天井部までの高さは2.6cmである。宝珠つまみがつくものであるが欠損している。天井部およそ半分強がヘラケズリ。ロクロの回転方向は不明。

胎土は良、焼成は良で堅緻。暗灰色を呈する。器表には自然釉がかかる。須恵器は他に1点小片が出土したにすぎない。

土師器椀 (55・56) 推定口径18cmの井形の碗である。体部外面に6~7本/cmの刷毛目が残っている。



第8-15図 包含層出土遺物 (1:4)

この刷毛目は口縁部付近はヨコナデのため一部にわずかに残る程度である。口縁端部は丸くおさめられている。また底部は直径7.6cmの平底である。この底部は乱ナデによって平滑に仕上げられている。

北に隣接する鋳形中世墓群に関連すると思われる遺物中に類例^⑧があるほか、松阪市の横尾墳墓群出土資料中にも類例^⑨がある。この横尾例は口縁端部が肥厚し最も厚くなっているほか、底部は平底の中心部がやや突出しており座りが悪くなっている。そして底部外面にも刷毛目が施されるといった特徴がある。器形や胎土などは本遺跡例とよく似ている。

胎土は精良、焼成も良く淡灰褐色を呈する。なお(56)も同様の椀底部である。

土師器皿 (57~64) 推定口径8.6cmのもの(57)から10.6cmのもの(64)までである。器高は(57)の1.3cmから(60)の2.4cmまでである。やはり小型のものと、やや大きめのものがあるようであるが、口縁部の立ち上りの形状に差がみられる。つまり、内弯気味に斜め上方へ立ち上るもの(57・61~63)、内弯気味にはほぼ垂直に立ち上るもの(58・59)、内傾するもの(60)に分けられよう。

(64)は推定口径14cm、器高2.1cmの大型の皿である。全体をユビオサエにより成形し、口縁部は内外面ヨコナデされる。体部下半はユビオサエがきつく、口縁部付近にくらべると内側へくぼみ段をなしている。

器壁は2~3mmと薄手で、口縁端部は尖り気味に仕上げられている。

胎土はやや良~並、焼成は良く黄褐色を呈する。この形態の皿は本例のみである。

(57~63)の皿はすべて均質な精良土を胎土に使用しており、焼成も良好で淡い乳褐色ないしは黄褐色を呈する。

土師器鍋 (65~68) いずれも口径が20cm程度の小型の鍋である。口縁部の形態はSK3出土のものと同様の三つのタイプがある。

(66)は底部まで残存する例であるが、体部外面上半を横位ないし右下りの刷毛目、下半をヘラケズリしている。また内面も下半はヘラケズリされ、器壁を薄く仕上げている。他のものも同様の手法によると考えられる。

土師器羽釜 (69) 小片のため復元した口径に誤りがあるかもしれないが、口径58cmほどの大型の羽釜である。口縁部は内傾し、端部は垂直方向に面をもつ。

鏝は口縁端より6.5cmほど下にほぼ水平につく。約2.8cmほど張り出し、端部は面をもつ。鏝部から口縁端部までの外面には凹凸がみられる。

胎土は並、2mm程度の砂粒を多く含み焼成はやや不良、淡褐色を呈する。内面には煮焦げの炭化物が付着、外面は剥落が著しい。

山茶碗 (70) 本遺跡で出土した2点の山茶碗片のうちの1点である。第一次調査時に出土したもので、底部約3分の1が残存している。

底径は7.8cmでやや低めではあるが割合しっかりした高台がつく。高台の断面は台形を呈する。

胎土は良、焼成も良く淡灰褐色である。

常滑産と考えられる。13世紀代の所産であろう。

陶器甕 (71~73) いずれも常滑産の甕である。(71)は口縁部が明確にN字状に折り返されるものではなく、強く外反させ口縁部を肥厚させて端面を広くとっている。小片のため口径は不明。

胎土は並、焼成は良く明褐色を呈する。灰緑色の自然釉が厚くかかる。14世紀前半のものであろう。

(72)はN字状に折り返された口縁部が直立して広い縁帯をなす。内径部より約1cmほど高い。

推定口径30.6cm、胎土に8mm前後の礫が混じるが焼成は良く褐色を呈する。自然釉が斑点状にかかっている。14世紀後半のものであろう。

(73)は大型の甕の口縁部片である。N字状に折り返された口縁部はほとんど頸部に密着し、下端部がわずかに開いている。

胎土は並、焼成は良好で褐色を呈し、自然釉がかかる。15世紀後半代のものであろう。

灰釉壺 (74) 推定口径9.8cm、外に折り返された口縁部が頸部に密着して玉縁状をなす壺である。

瀬戸産で四耳壺と考えられるものである。二次的な火熱を受けている。13世紀後半のものと考えられる。

灰釉皿 (75~77) 推定口径10.8cm、器高2.5cmの小皿で削り出しの高台が付く。ロクロ水挽きにて成形されるが、底部は非常に厚い。口縁部内外面に

灰釉が漬け掛けされる。口縁部外面の施釉部直下のところにヘラによる鋭い沈線がみられる。

胎土は並、焼成も並で淡褐色を呈する。15世紀後半のものである。

(76)は推定口径12.8cm、器高2.8cm、(77)は推定口径10.4cm、器高が2.1cmである。ともにロクロ水挽き、底部に糸切り痕が残る。釉は漬け掛けて(77)は口縁部外面の約3分の1、内面の約2分の1に施される。(76)は内外面ともほぼ2分の1まで施される。(76)の胎土は良、焼成も良で淡灰白色を呈する。また(77)の胎土は良、焼成も良で淡い灰色を呈する。(76)は15世紀前半代、(77)は同後半代のものであろう。ともに瀬戸産である。**天目茶碗**(78~80) 口縁部の遺存する(78・79)はいずれも小片のため、推定口径に疑問が残るが(78)は10.8cm、(79)は11cmほどである。

ロクロ水挽きにより挽き上げられた口縁部は、斜め外上方に尖り気味となる。(78)は口縁部のナデが強いためか、く字状に屈曲する。いずれも残存部分にはすべて暗赤褐色の鉄釉が施されるが、口縁部付近は褐色である。

いずれも瀬戸産で(79)は14世紀後半に、(80)は15世紀前半に位置づけられる。

(80)は底部のみであるが回転ヘラケズリによる削り出し高台である。高台の脇部分に水平部分はない。内面には暗赤褐色の鉄釉が施されるが、外面には見られずヘラケズリの痕跡が認められる。15世紀初頭に位置づけられる。

4. 結 語

当遺跡は低丘陵を開析した小谷の平坦地に営まれた遺跡である。居住空間の広さからみても大きな集落とは言い難い。

すでに削平工事によって遺跡は壊滅していたが、遺跡の中心は今回の発掘区の北東部から発掘区外へもひろがっていたと推定される。

ところでこの遺跡の立地についてみると、遺跡の中心部分、すなわち居住跡の検出されたところは、冬期においても最も日照条件の優れたところである。

今回の発掘調査は厳冬の1月から2月にかけて実

青磁碗(81) 体部下半から底部が残存するもので、底径は6.2cmで高い高台が貼り付けられる。

体部外面には形のくずれた蓮弁が線刻され、内外面全面に淡青緑色の釉が施される。底部外面の高台内側の釉は中心部分を除き削り取られている。

瓦質香炉(82) 瓦質の香炉片である。推定口径は15.4cmで、底部には脚の剥離痕が認められる。おそらく三足の脚がつくものであろう。

体部は強く張り、内弯しながら立ち上り口縁部は外反する。口縁部から頸部は無文で、ていねいに磨かれる。肩部にはヘラによる沈線と低い削り出し突帯がつく。その下に二段にわたり雷文が、その下に蓮弁状の文様が施される。

胎土はやや粗く焼成は良、淡黒灰色を呈する。

軒丸瓦(83) 瓦当部分の一部が出土した。破片が小さいため瓦当部の直径も推定が難しいが、およそ15.2cmほどと考えられる。周縁は無文で平滑、幅が約2cmである。

外区に珠文が配置され、内区には右巻きの三巴文が配されるのであろう。長い足の一部が残る。

胎土に細砂含み焼成は良だが磨耗している。色調は淡褐灰色を呈する。

これら図示したもののほか平瓶、太平鉢、瓦質火舎等の破片がある。尚、青磁片、天目茶碗片は各々十数片程度、香炉が2個体ほど出土している。

これらの遺物は弥生土器と須恵器を除けば、概ね13世紀から15世紀末までの幅がある。

施されたが、太陽高度の低いこの時期でも太陽は西の丘陵には隠れず、比較的長い日照時間が得られることを体感した。それがこの狭小な谷間に遺跡を立地せしめた要因のひとつであろう。

また、丘陵斜面からの土砂の供給量が多く扇状地化していた地形上に盛土を行ない平坦地をつくるなど、かなり原地形の改変を行なっている。このような多大な労力を費してまでこの地に住居を営まねばならなかったのか、その背景になるような事実は明らかにできなかった。ただ、今回の調査地内には

かつて小祠が建てられており、懸仏^⑧が祀られていたという。その小祠は用地買収に伴って用地外へ移され、コンクリート製の小祠が今回の調査地のすぐ東側に再建されている。

出土遺物をみると、土師器鍋、皿類の日常生活用具が多数を占めるが、一部に青磁、天目茶碗、花瓶、香炉など日常的でないものも含まれており、小字名や前述の懸仏などとも関連して、修験道に関連した中世寺院が関係する遺跡ではないかと考えられる。

またすぐ西側丘陵頂部に所在する牧城に関連した人物の居住地であるとも考えられる。

牧城に関しての文献等の資料類は、現在のところ何も確認されておらず、今後の発見や発掘調査に待たねばならないだろう。

さて、今回検出された遺構であるが、堀立柱建物2棟（S B 1・2）、柵列（S A 5）、石列（S X 6）については同時併存した一連の施設と考えられる。柱穴から出土した遺物から15世紀後半代の時期が考えられよう。

S K 3からは多量の土師器類に伴って若干の陶器類が出土した。やや時期幅があるが15世紀前葉から

中葉頃と考えられよう。またS K 4についても同時期と考えてよからう。その他の土坑等も概ね15世紀代におさまるものであろう。

S X 7は極細片ではあるが出土した土師器鍋や皿から、S X 7は中世の遺構と考えたい。

S X 8からも若干の遺物が出土しているが、やはり15世紀後半代の時期が考えられる。

この遺構の性格は不明ながら、敢えて推測を述べるならば、発掘区内から移転した小祠の故地ではなからうか。

本遺跡の性格に関しては、この小祠の関わりが見逃せないと思われるが、本報告ではこれらの検討が果たせなかった。別の機会に譲ることにしたい。

このほか、発掘区のほぼ中央部で約5×10mの範囲に焼土面が検出されたが、整地土層中に摩滅した土師器片等が含まれることなどから判断して、火災を受けたため整地し、その上に住居を構築したことが考えられる。このようなことから、本遺跡は概ね15世紀代を通して人間の営みがあったといえよう。

（田村 陽一）

〔注、参考文献〕

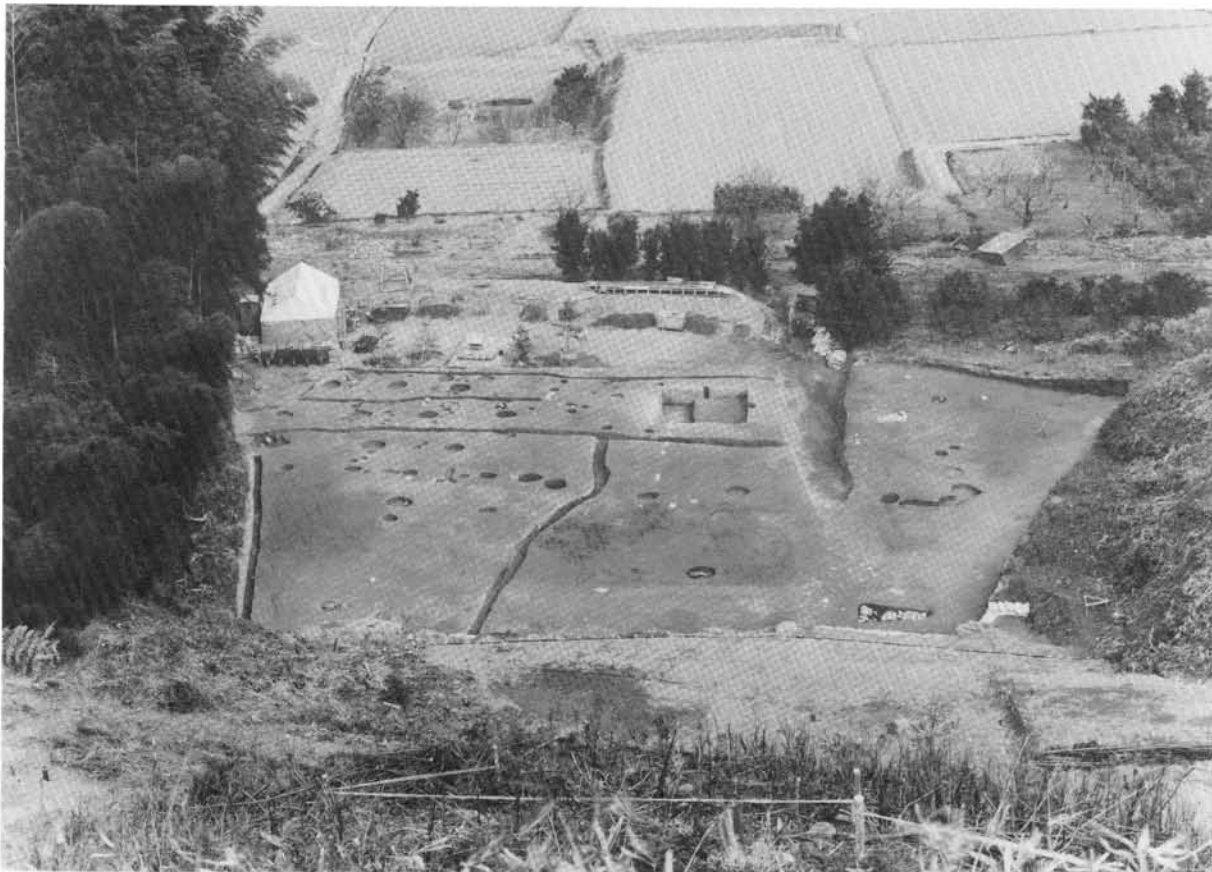
- ① この字は多気町役場所蔵の地籍図（明治年間作成のもの）によれば、字の範囲は今回の調査区をほぼ東限とし、西・南・北の丘陵の一部に限られる。
- ② 『三重の中世城館』 三重県教育委員会 1977
- ③ 『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』 三重県教育委員会 1986では2間×3間の堀立柱建物としたが、詳しく検討した結果本書のように改める。
- ④ 新田洋「中・南勢における中世土師器——特に「在地系」皿——の変遷と地域色解明への一視点『マージナル』No.9 愛知考古学談話会 1988の中で少し触れられているように、皿の法量の規格性の背後には「内型づくり」の存在が十分考えられる。
- ⑤ 田阪仁「檀・柏原遺跡」『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1984
- ⑥ 山田猛「下り合遺跡」『昭和55年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1981
- ⑦ 久志本鉄也、杉谷政樹「丹生川上城跡発掘調査報告」 三重県教育委員会 1985
- ⑧ 本報告書第1分冊2参照。
- ⑨ ③に同じ。P.27参照。
- ⑩ 旧土地所有者で多気町鋳形在住の松本貞己氏が所蔵する。



遺跡遠景（東から）



調査前全景（西から）



調査後全景（西から）



調査後全景（南から）

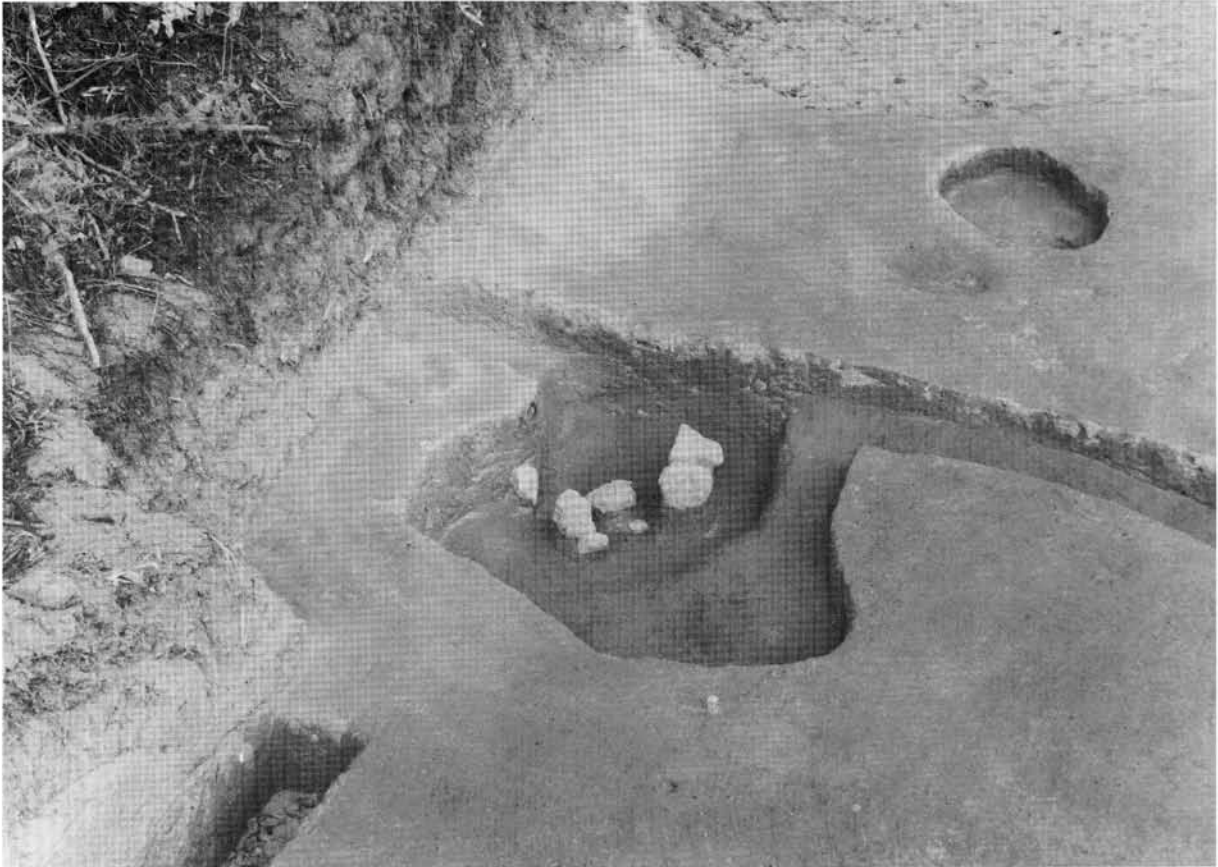


SB1 (西から)



SB2・SA5 (北から)

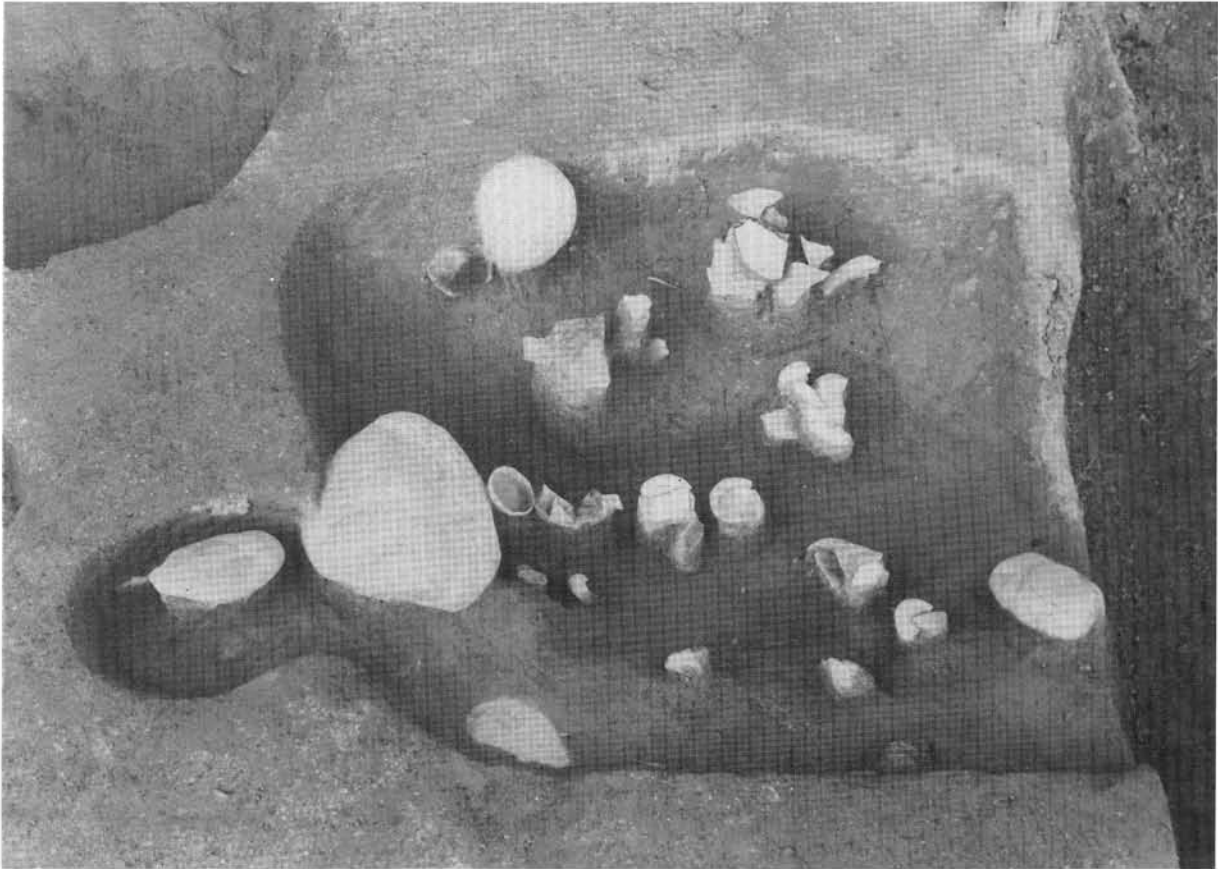
PL 3-4



SK 3 (南西から)



調査風景



SK 4 (南から)

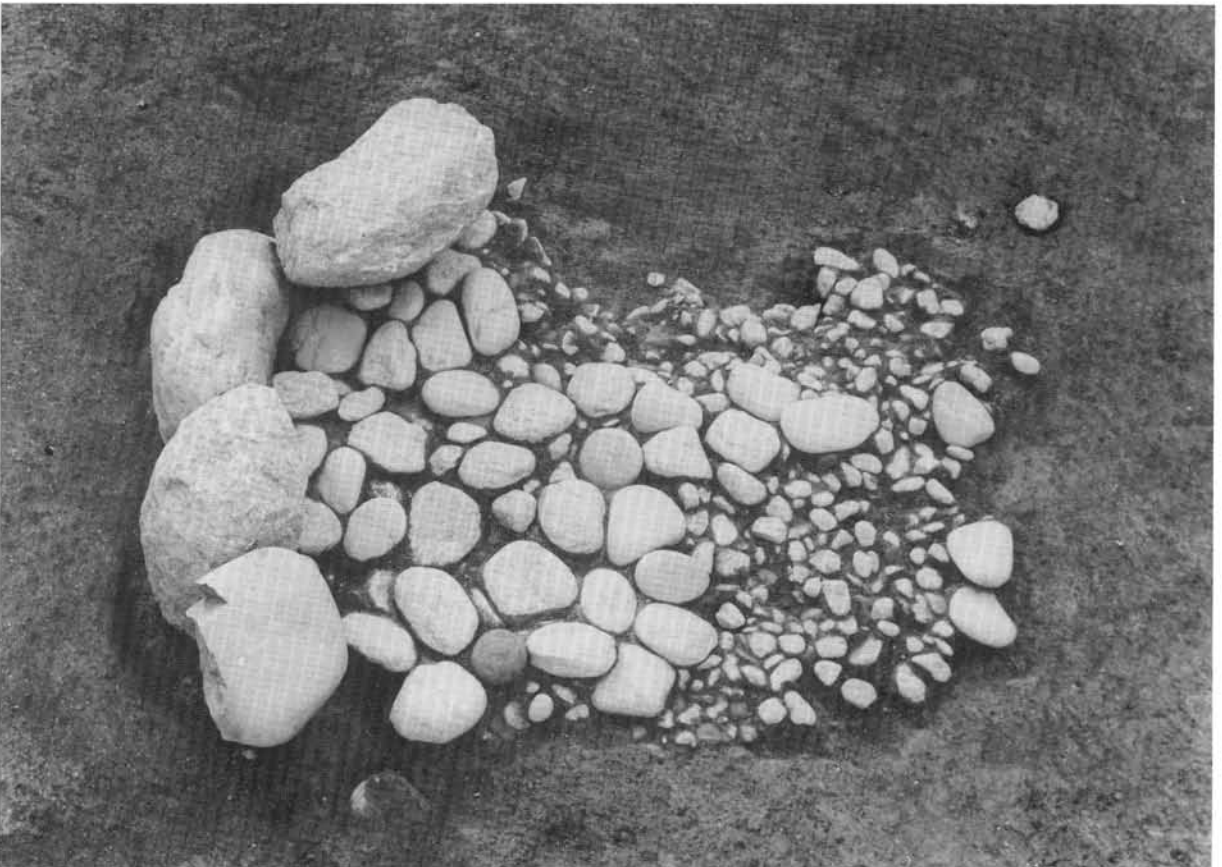


SK 4 (西から)

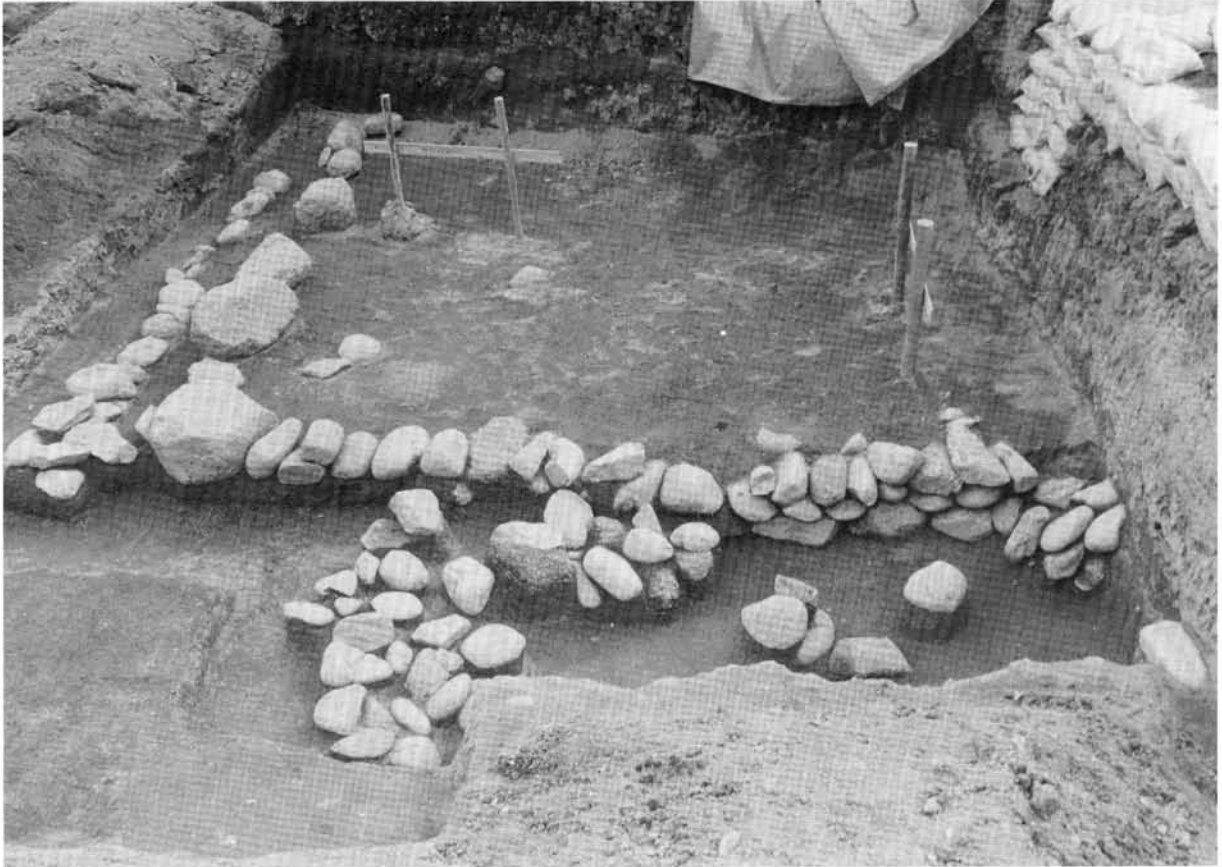
PL 3-6



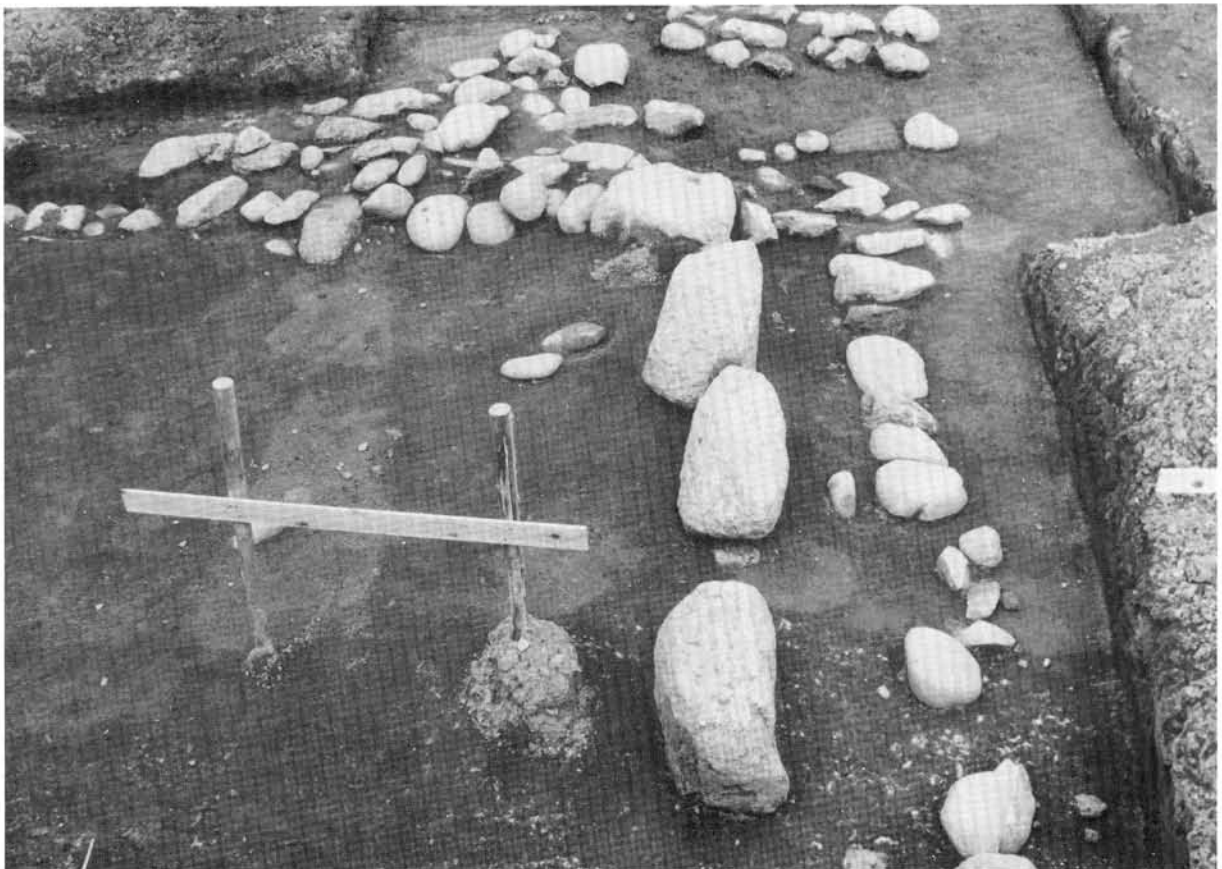
SX 6 (南から)



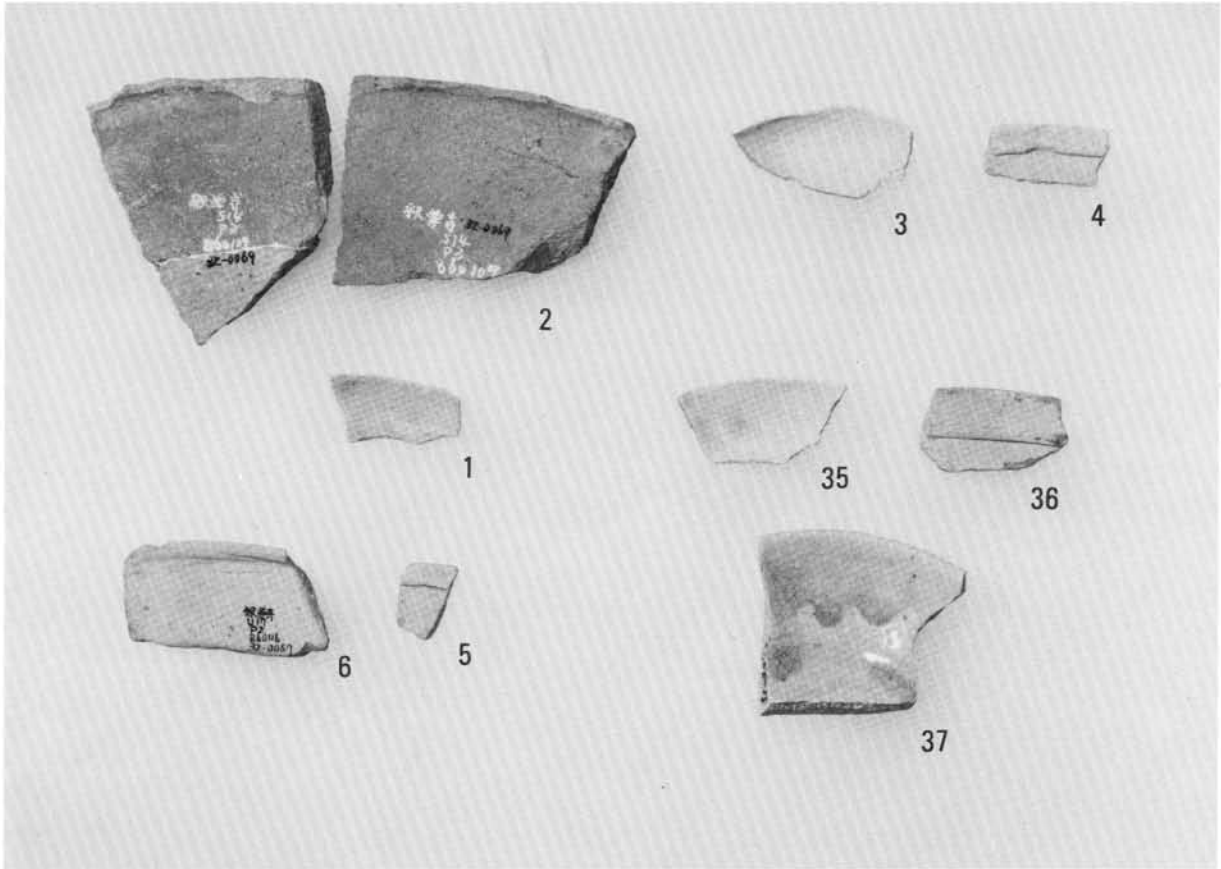
SX 7 (東から)



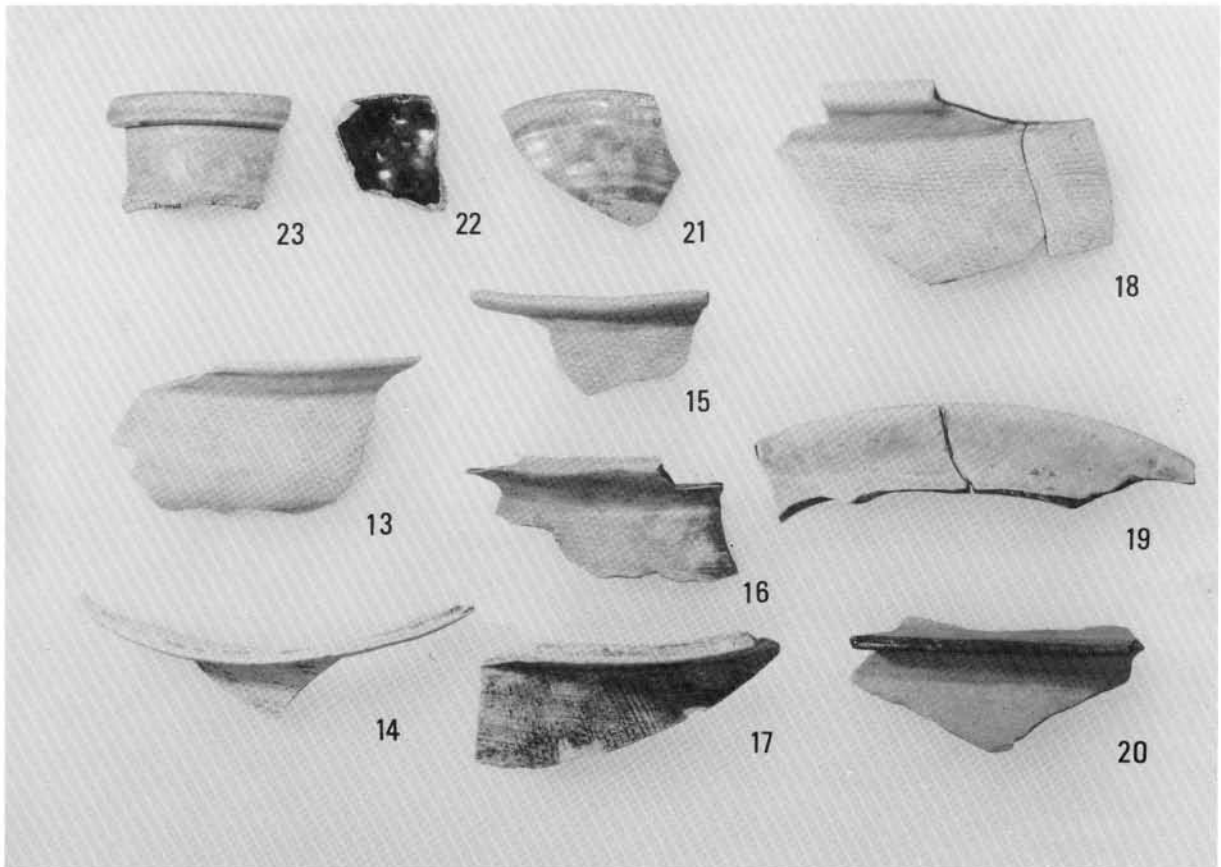
SX 8 (北から)



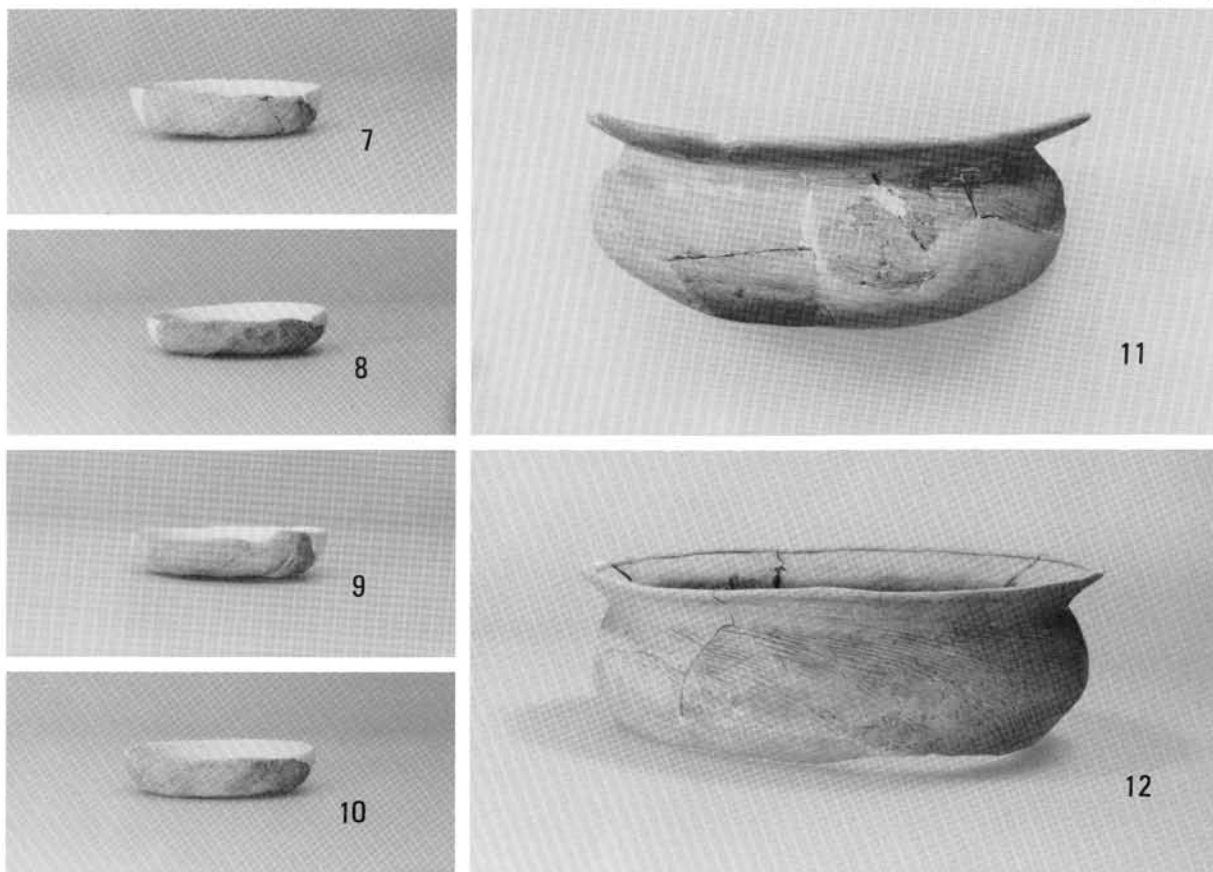
SX 8 (南から)



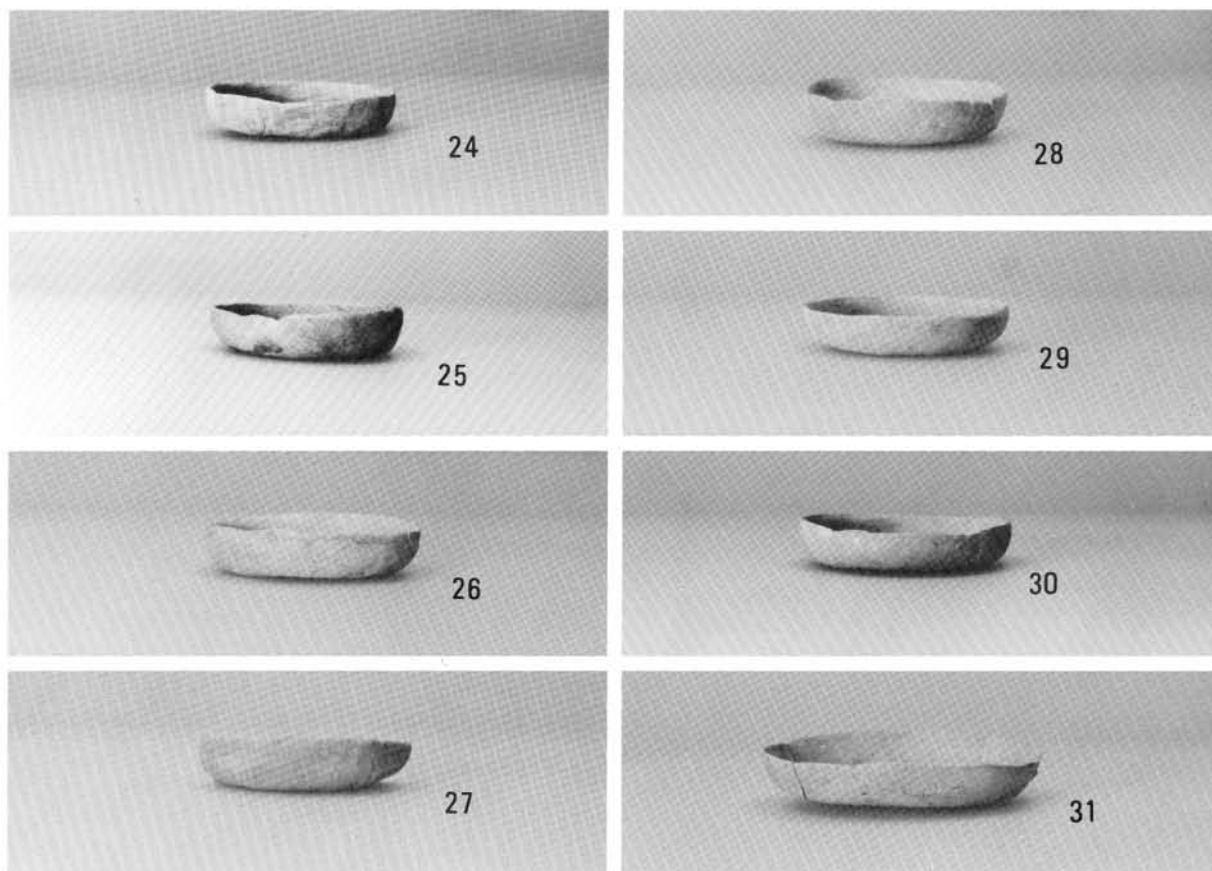
SB 1, 2, SA 5, SK 9 出土遺物 (1 : 2)



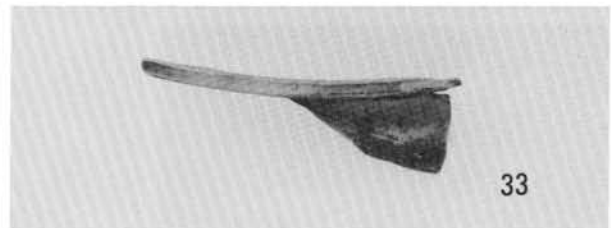
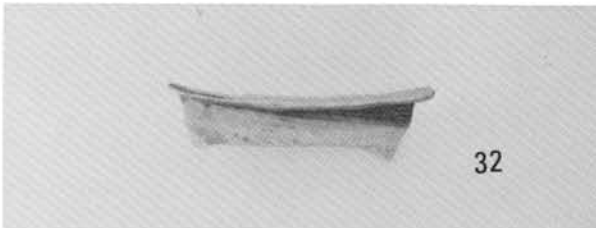
SK 3 出土遺物 (1 : 3)



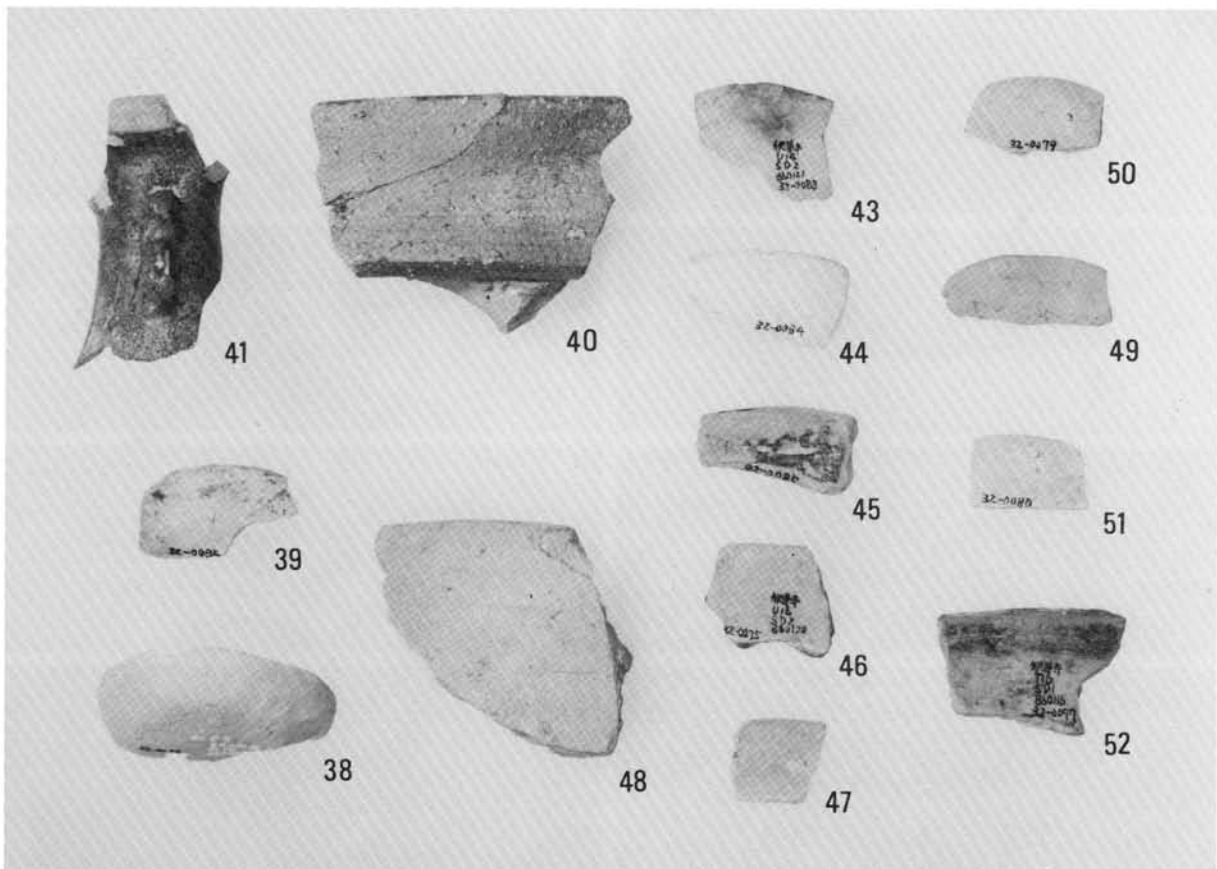
SK 3 出土遺物 (1 : 3)



SK 4 出土遺物 (1 : 3)



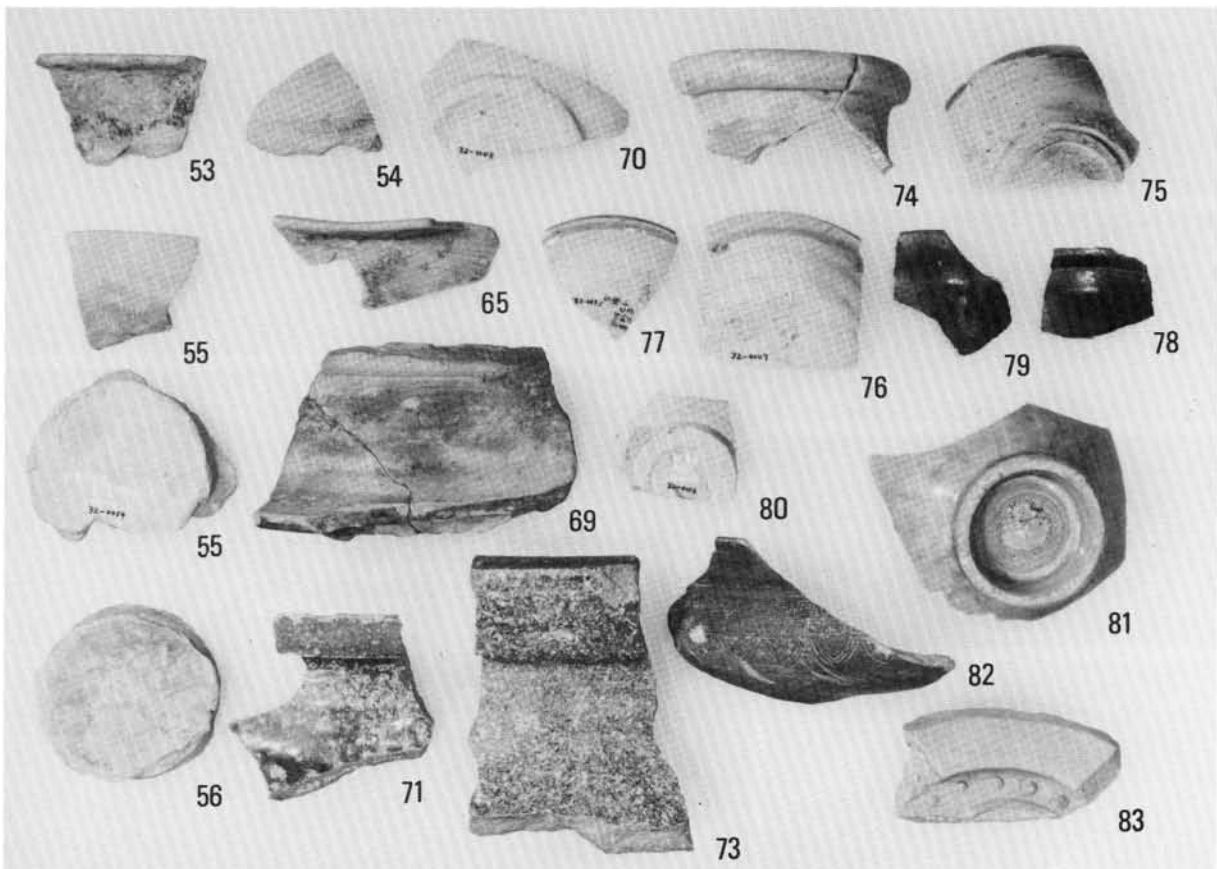
SK 4 出土遺物 (1 : 3)



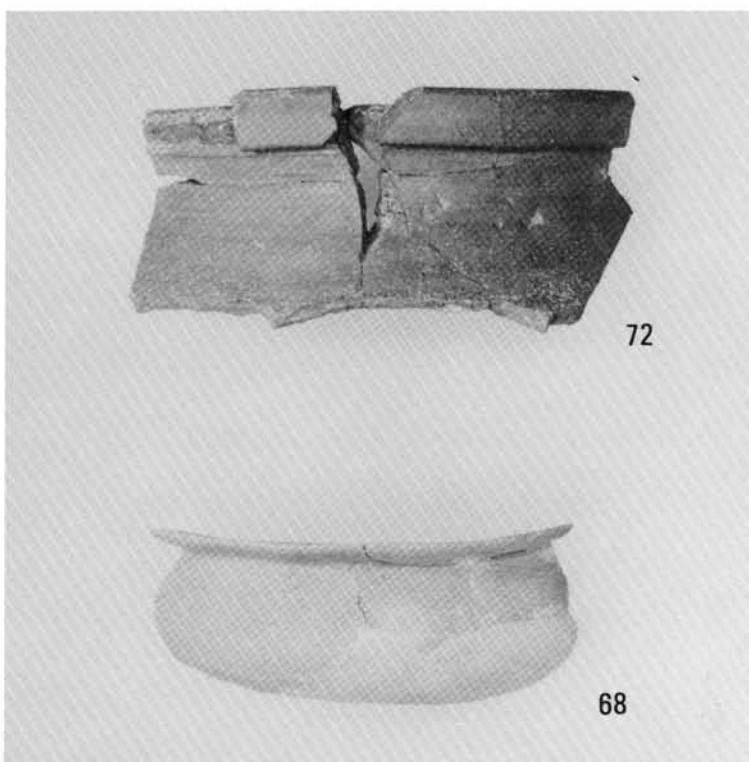
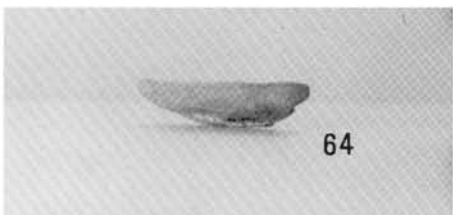
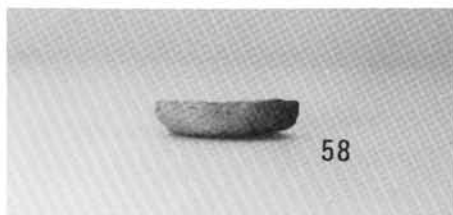
SX 8, SD10・11出土遺物 (1 : 2)



S X 8 出土遺物



包含層出土遺物 (1 : 3)



包含層出土遺物 (1 : 3)

多気郡勢和村 下村 A 遺跡 (33)

1. はじめに

下村 A 遺跡は、櫛田川中流右岸の小規模な扇状地上に位置し、東側の丘陵地には小さな谷が入りこんでいる。現況は水田で、調査区の標高は約50~60mである。行政区画上是多気郡勢和村大字丹生字下之町に所在するが、字名は地元では下村と通称されている。

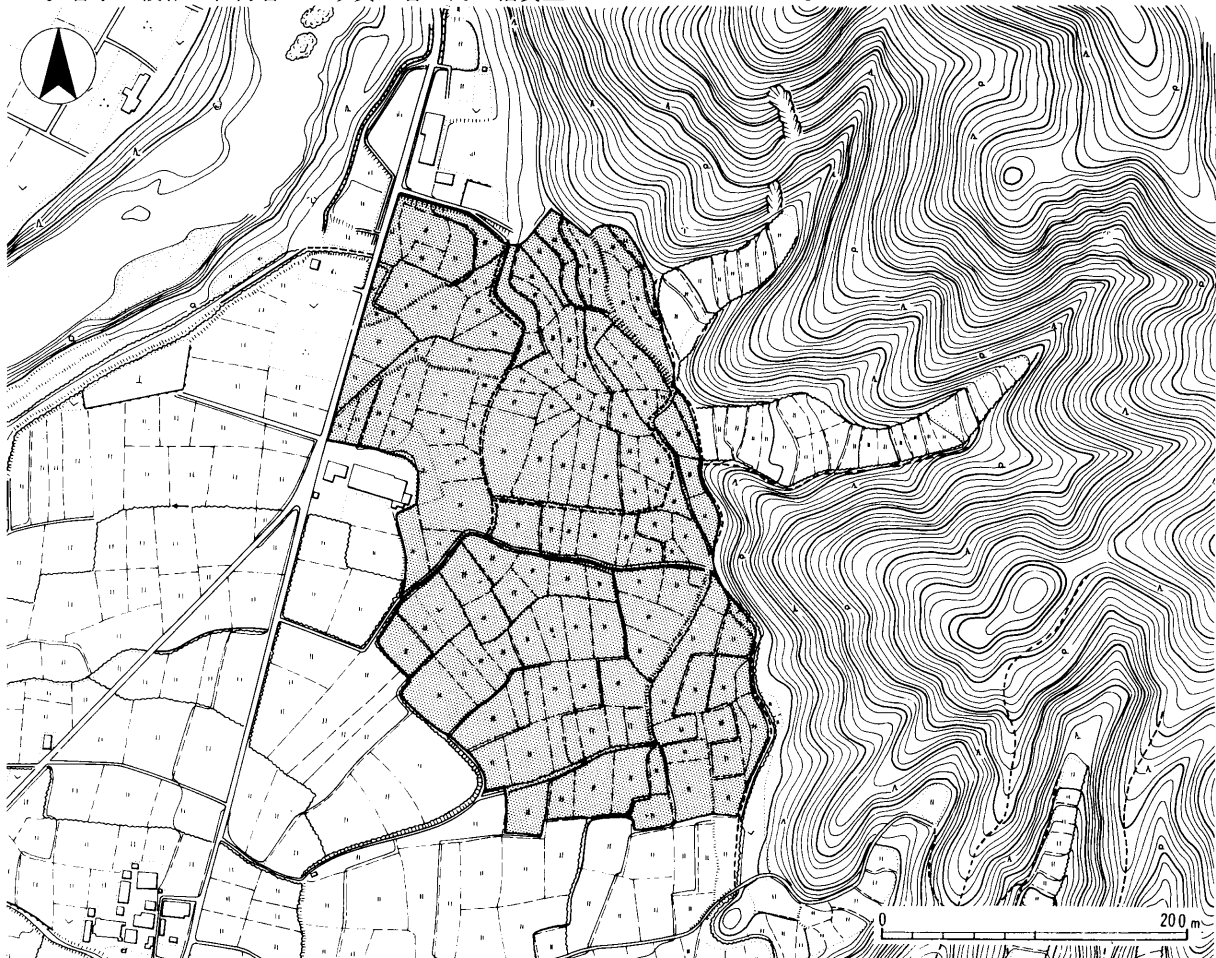
発掘調査は当初約14,000㎡について対象とする必

要があると考えられていたが、第一次調査（試掘調査）の結果、遺物の出土状況からA~Fの6カ所の地区に分けて、約7,500㎡について本調査を行うこととなった。各地区の調査面積は、A地区700㎡、B地区900㎡、C地区1,100㎡、D地区1,400㎡、E地区1,000㎡、F地区2,400㎡である。

2. 層序および遺構

A~Fの各地区とも耕作土・床土の下は、砂質土が基本となるが、深いところでは6層約1.7mになる。層序は複雑で、何層かの砂質土層の間に粘質土

層あるいは砂層が錯綜してみられる。とりわけ谷の延長部分では地下水を含んでおり、非常に不安定になっていた。



第9-1図 遺跡地形図 (1:5,000)

遺構は調査前の予想に反して非常に少ない。A～E地区からは遺構は検出されず、F地区南端で1.8

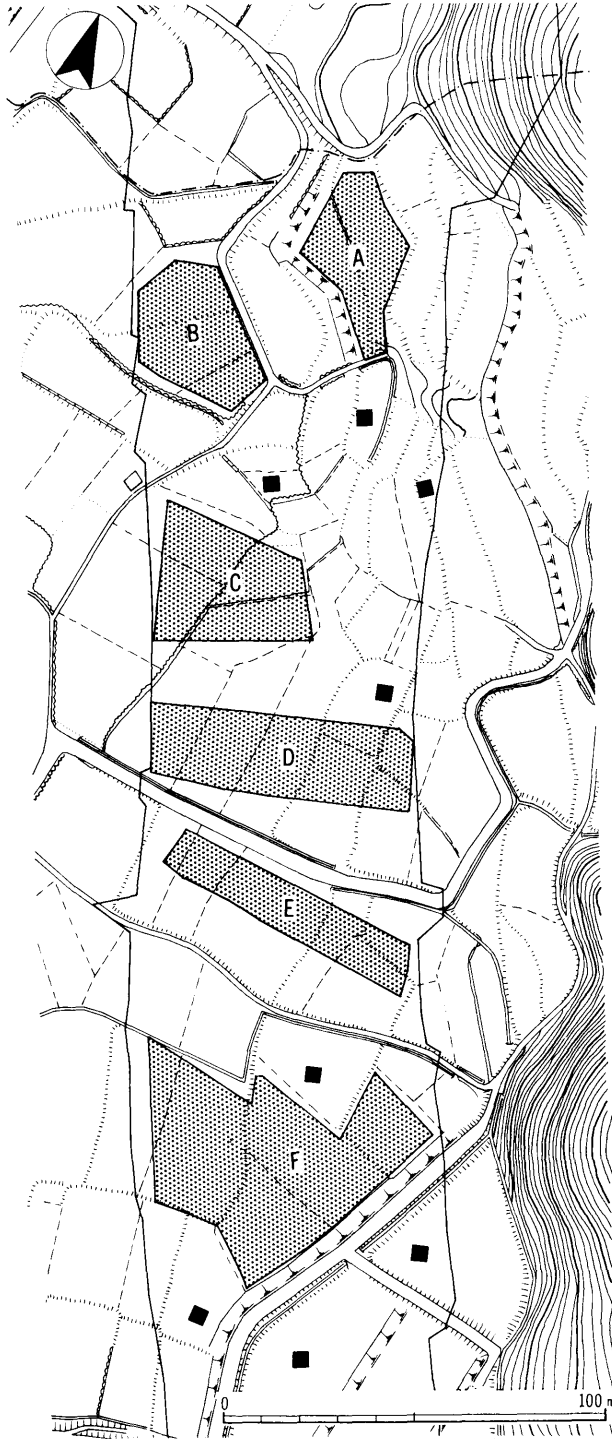
m×1.4mの楕円形の焼土面を1基検出したにすぎない。

3. 遺物

A地区

1. 陶器

天目茶碗 (1) 推定口径約11cmで、口縁部は直立



第9-2図 発掘区位置図 (1:2,000)

気味に立ち上がり、端部はやや外反する。色調は灰褐色で、胎土は堅緻、焼成は良好である。黒色および褐色の鉄釉が施される。

B地区

1. 縄文土器

縄文土器 (2) 外面は縄文地に隆帯を貼りつけ、C字形の爪形文を施す。内面は口縁部に縄文を施す。色調は外面褐灰色、内面淡黄色で、胎土には砂粒を多く含む。中期前葉、船元Ⅱ式^④と思われる。

2. 土師器

甕 (3) S字状口縁甕の脚部である。脚部端部を内側に折り返しており、外面はハケメ調整である。

小皿A (4) 推定口径約10cm、器高1cmの小皿で、口縁部をヨコナデする。底部外面は未調整である。

小皿B (5～8) 口径8～10cm、器高2cm前後で、体部が直線的に外傾するロクロ製の小皿である。底部には糸切痕が残る。

杯 (9) 推定口径約14cm、器高4.5cmである。口縁部はヨコナデされ、以下は未調整で、体部から底部にかけて指頭圧痕がみられる。

皿 (10・11) 推定口径約15cm、底径6～7cm、器高4.5cmである。ロクロ製で、体部が直線的に外傾しており、底部外面には糸切痕が残る。

甕 (12～16) いずれも口縁部の小片であるため、口径は推定復元である。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は肥厚するが、(15・16)は内側に折り曲げる。調整はいずれも口縁部をヨコナデしており、(14)の内面には11～12本/cmのハケメが、(16)の胴部外面には指頭圧痕がみられる。

3. 瓦器

皿 (17) 口径9.5cm、器高1.8cmで、口縁部をヨコナデし、底部外面には指頭圧痕がみられる。内面は、底部にジグザグ暗文が、口縁部にはヘラミガキが施される。

椀 (18～20) 推定口径約15cmで、体部は丸みをもつ

て立ち上がり、口縁はそのまものびるもの(18)と、
 端部で外反するもの(19・20)がある。口縁部内面
 の沈線は端部よりやや下に位置する。内外面ともヘ
 ラミガキが施される。色調は黒灰色で、胎土は(18)
 は密であるが、(19・20)には砂粒を少量含む。焼
 成はいずれも良好である。

4. 灰釉陶器

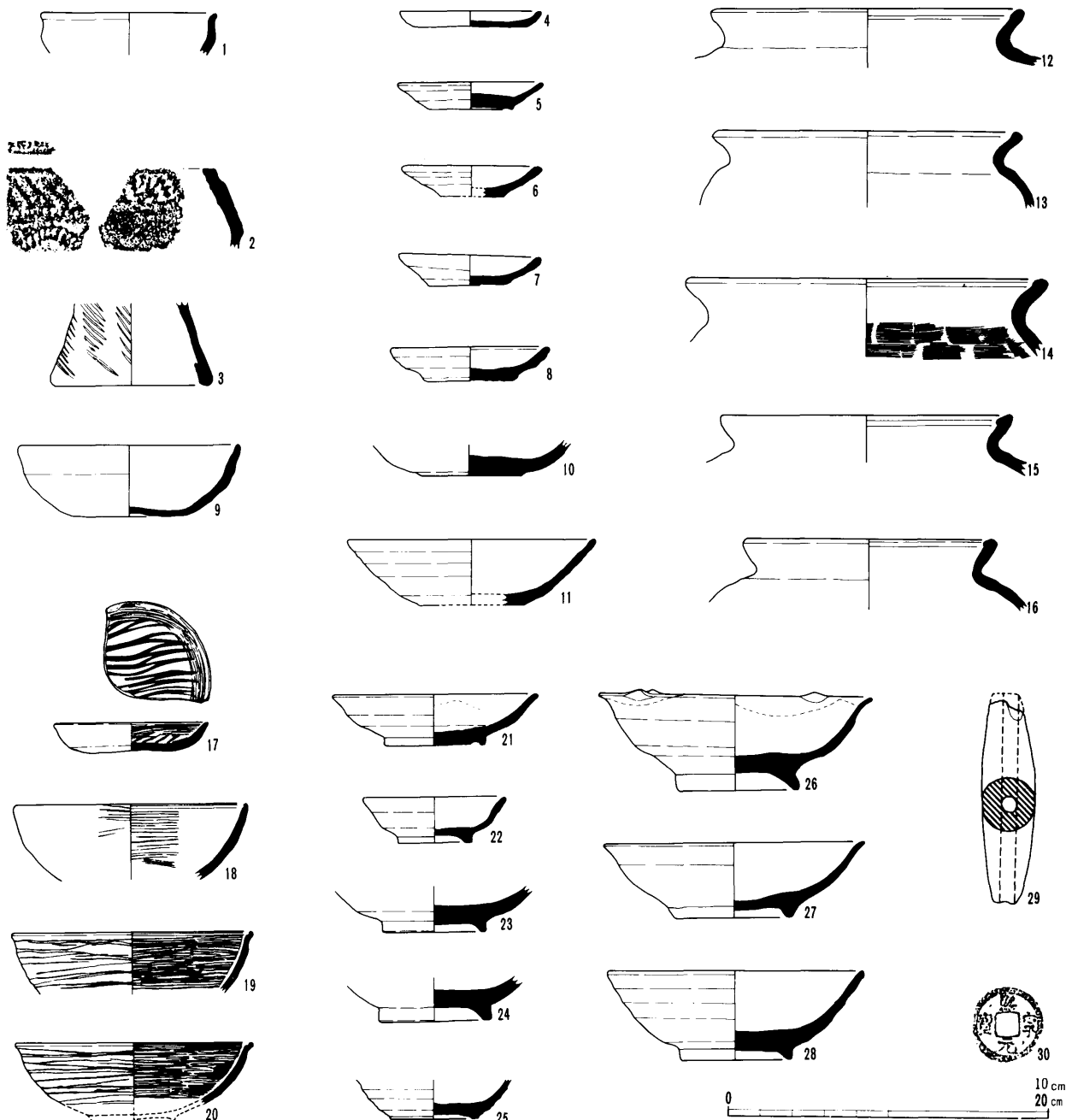
皿(21) 推定口径約13cm、底径約6cm、器高約
 3cmである。底部内面には径2.5cm程の輪状の沈線
 が浅くめぐる。底部外面は糸切り後、ナデており、
 高台には柘殻痕がみられる。口縁部には白色の灰釉

が漬け掛けされるが、内面のみ残存しており、外面
 は剥落している。色調は灰白色、胎土は精良で、焼
 成も良好である。

5. 山茶碗

山皿(22) 推定口径約9cm、器高2.8cmで、高
 台は逆台形をしている。体部内面には自然釉がみら
 れる。

山茶碗(23~28) (23~25) は体部下半から底
 部にかけての破片である。(23・24)は強く外傾し
 た高台をもつが、(25)の高台は低く退化している。
 (26~28)については、それぞれ形態が異なる。



第9-3図 A・B地区出土遺物実測図(1:4ただし29・30は1:2)

(26) は口径約17cm、器高約6cmで、高台は強く外傾する。体部は内弯し、口縁部は強く外反して輪花をもつ。口縁部内外面には、漬け掛けによる緑灰色の灰釉がみられる。(27) は口径16.4cm、器高4.7cmとやや低い。高台は断面三角形で、体部は内弯、口縁部は外反しており、底部の器壁は薄い。内面には重ね焼き痕、および自然釉がみられる。(28) は口径16.0cm、器高5.5cmである。高台は断面三角形であるが、体部からのびる口縁部はそのまま丸くおわる。体部内面には自然釉がみられる。

6. 土製品

土鍾 (29) 残存長6.4cm、最大径1.7cm、残存重量17.2gで、灰白色を呈する。

7. 銭貨

熙寧元宝 (30) 1056年初鑄の北宋銭で、径2.2cm重量2.0gである。

C地区

1. 石器

石匙 (31) 残存長3.8cm、最大幅3.0cm、最大厚0.8cmの縦型石匙で、材質はサヌカイトである。

2. 縄文土器

縄文土器 (32) 外面には、節が細く長い羽状縄文を施す。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。前期、北白川下層式^②と思われる。

3. 土師器

皿 (33) 推定口径12~13cm、口縁部をヨコナデする。

4. 山茶碗

山茶碗 (34) 高台径約7cmで、高台は外傾するが、低く退化し、初殻痕がみられる。底部外面は糸切後、ナデる。

D地区

1. 石器

石鏃 (35) 凹基無茎石鏃で、残存重量は0.7g、材質はチャートである。

2. 磁器

青磁碗 (36) 底部2分の1程の破片である。ロクロ回転は逆時計廻りである。釉は灰緑色を呈し、底部内面には草花文がみられる。高台部畳付およびその内部は露胎で、胎土には細かい砂粒を含む。

E地区

1. 土師器

杯 (37) 推定口径12~13cmで、器壁は薄い。口縁部をヨコナデし、底部は未調整である。

2. 山茶碗

山茶碗 (38) 口縁部の破片である。体部は内弯し、端部は外反する。口縁部の内外面には漬け掛けによる灰釉がみられる。

3. 土製品

土鍾 (39) 残存長4.3cm、最大径1.3cm、残存重量6.9gで、淡黄色を呈する。表面採集遺物である。

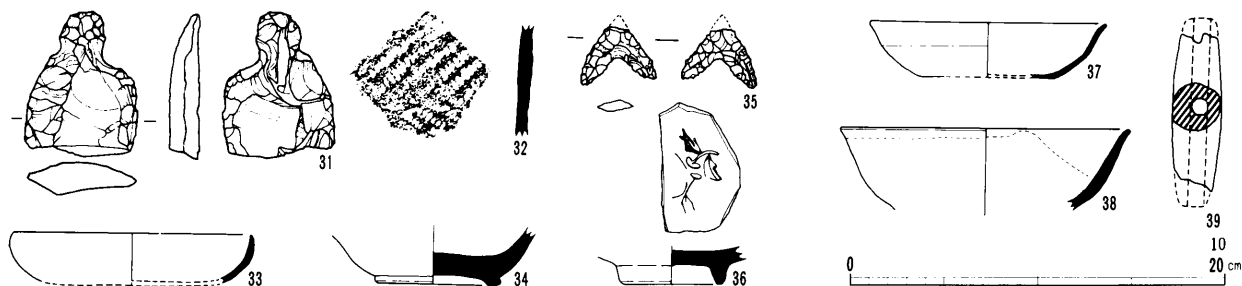
F地区

1. 土師器

杯 (40) 推定口径約12cm、器高2.5cmで、器壁は薄く、口縁部はやや外反する。口縁部はヨコナデし、底部外面には指頭圧痕が残る。

皿 (41) 推定口径約12cmで、器壁は薄い。口縁部をヨコナデする。

甕 (42~44) (43) は焼土、(42・44) は包含層出土である。三点とも小片であるため口径は推定であるが、いずれも16~17cm程である。口縁は「く」の字状に外反するが、端部は(42)は上方につまみあげ、(43・44)は内側に折り曲げる。いずれも外



第9-4図 C・D・E地区出土遺物実測図 (1:4ただし31・32・35・39は1:2)

面には縦位のハケメが、内面は(42)のみ横位のハケメがみられる。

鍋(45) 推定口径19cm程で、口縁端部は内側につまみあげる。口縁部はヨコナデをしており、外面には煤が付着する。

2. 灰釉陶器

灰釉陶器(46~48) いずれも底部のみ残存しており、高台径は7~8cmである。高台の断面形は(46)は退化した三日月形、(47)は低く外傾、(48)はやや高いがほぼ直立している。調整技法は(46・47)はロクロナデで、(48)は体部外面をロクロケズリをしている。(48)の体部内面には灰緑色の施釉がみられる。

3. 山茶碗

山茶碗(49・50) 推定高台径は7cm程であるが、高台は(49)は逆三角形に外傾し、(50)は低く退化している。底部外面はともに糸切後、ナデられており、内面には自然釉がみられる。

4. 陶器

天目茶碗(52) 推定口径約11cm。体部はほぼ直

線的に外傾し、口縁部は直立し、端部は外反する。体部外面下方はロクロケズリする。高台部周辺を除く全面に褐色の鉄釉を施す。

蓋(51) 推定口径約8cm、器高約2cmで、内面中央につまみを有する落とし蓋になると思われる。外面はロクロケズリで、回転は時計廻りである。内面全面に黒釉が施される。

試掘・その他

1. 土師器

甕(53) S字状口縁甕の脚部と思われる。外面には5本/cmのハケメ調整を施す。

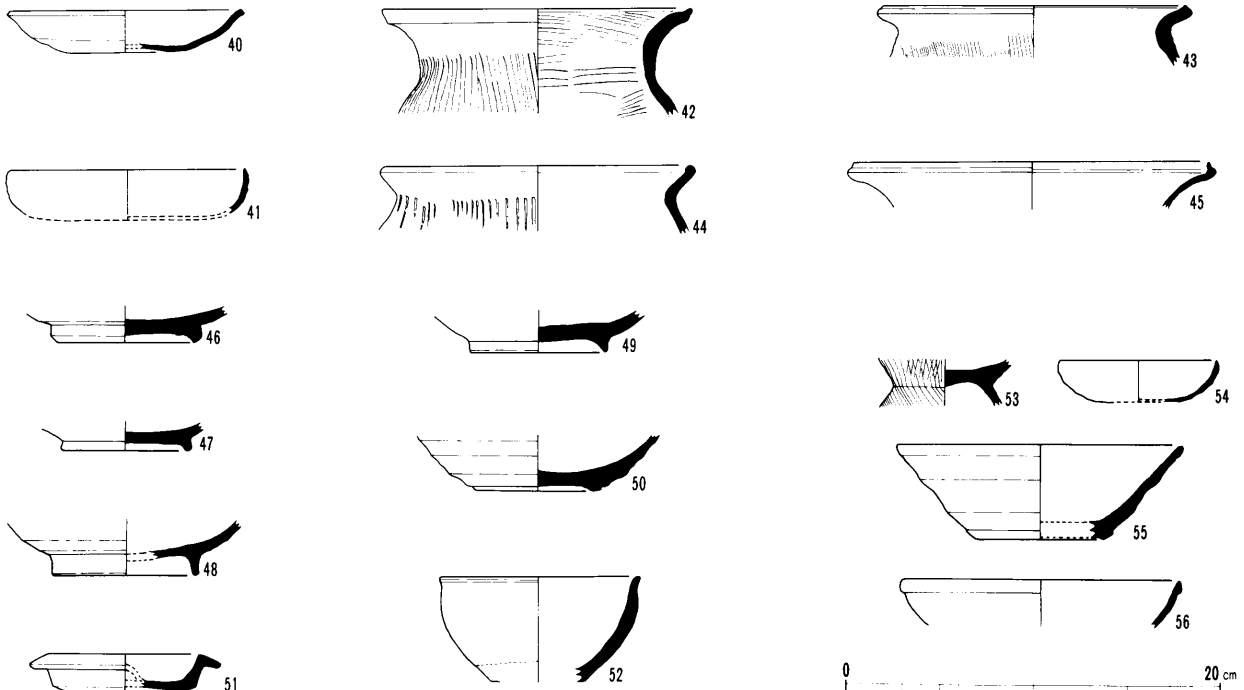
皿(54) 推定口径は約8cmで、器壁は薄い。口縁部をヨコナデする。

2. 山茶碗

(55) 推定口径は約15cmで、体部は直線的に外傾し、高台は低く退化して、粉殻痕を残す。色調は灰色を呈し、胎土には砂粒を含む。

3. 磁器

白磁碗(56) 推定口径約15cmで、口縁は玉縁状である。灰白色の釉が薄く施されている。



第9-5図 F地区その他出土遺物実測図(1:4)

4. 結 語

1. 立地と遺構

調査区は急斜面で入りくんだ丘陵地の裾に立地しており、集落が立地しがたい条件である。遺構はほとんど検出されなかったことから出土遺物は流入としか考えられないことと、調査区の東側の丘陵地にも通常の集落が立地する余地は考えがたく、もし存在するならば一般の集落以外の性格をもつ遺跡の所在を考慮する必要があることは、すでに指摘した^③。しかしながら近辺に集落の存在を想定するならば、むしろ調査区の西側に広がる平坦地に求める方が可能性が高いと思われる。いずれにせよ今回の調査では下村A遺跡全体の性格をつかむことはできなかった。

2. 遺物

出土遺物は調査面積に比して少量であるが、時代は広範にわたる。古い順に①縄文時代の土器、石器、②古墳時代の土師器、③平安時代の土師器、瓦器、灰釉陶器、山茶碗、銭貨、④中世の土師器、山茶碗、陶器、磁器、⑤近世の陶器などである。

このうち量的に多いのは平安時代の遺物である。以下この時期の遺物の年代観を略述しておきたい。

灰釉陶器(46・47)は折戸53号窯式^④があるいはそれより若干後出に、(21)は東山72号窯式^⑤に比定できる。山茶碗では(49)は藤沢編年^⑥の第Ⅱ段階第3型式に、(26)は第Ⅱ段階第4型式に、(27)は第Ⅲ段階第5型式にそれぞれ比定できる。瓦器碗は(18)が山田編年^⑦の第Ⅰ段階第1～2型式に、(19・20)が第Ⅰ段階第2～3型式に比定できる。一方、ロクロ製土師器皿(10・11)、小皿(5～8)がB地区から出土しており、これらは齋宮編年^⑧によれば平安時代後期から末期のものであり、土師器甕(12～16)も新田編年^⑨にしたがえば、この時期に比定できそうである。以上概観した灰釉陶器、山茶碗、瓦器、土師器の編年観からすれば、これらの遺物は10世後葉から12世紀後葉にかけての時期である。

なお、伊勢国では出土例が比較的少ない瓦器が出土したことは、量的には多くないとはいえ、当遺跡の性格を考える上で、あるいは当時の商品流通を考える上で重要な遺物であることはすでに指摘しているとおりである^⑩。

(河北 秀実)

〔註、参考文献〕

① 度会町教育委員会 奥義次氏の御教示による

② 註①に同じ

③ 『近畿自動車道(久居～勢和間)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』三重県教育委員会 1985

④ 瀬戸市歴史民俗資料館 藤澤良祐氏の御教示による。他に下記の文献を参考にした。

・樽崎彰一『愛知県猿投山西南山麓古窯跡群分布調査報告(Ⅰ)』愛知県教育委員会 1980

・樽崎彰一『愛知県猿投山西南山麓古窯跡群分布調査報告(Ⅱ)』愛知県教育委員会 1981

・斎藤孝正『猿投窯における灰釉陶の展開』『考古学ジャーナル211号』1982

・樽崎彰一 斎藤孝正『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)』愛知県教育委員会 1983

・前川要『猿投窯における灰釉陶器生産の最末期の諸様相』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅲ』1984

⑤ 註④に同じ

⑥ 藤澤良祐『瀬戸古窯址群Ⅰ』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』瀬戸市歴史民俗資料館 1982

藤澤良祐『穴田南窯址群発掘調査報告』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅱ』瀬戸市歴史民俗資料館 1983

⑦ 山田猛『伊賀の瓦器に関する若干の考察』『中近世土器の基礎研究Ⅱ』日本中世土器研究会 1986

⑧ 『齋宮跡の土師器』『三重県齋宮跡調査年報1984』三重県齋宮跡調査事務所 1985

⑨ 新田洋『平安時代～中世における煮炊用具——「伊勢型」鍋——に関する若干の覚書』『三重考古学研究Ⅰ』1985

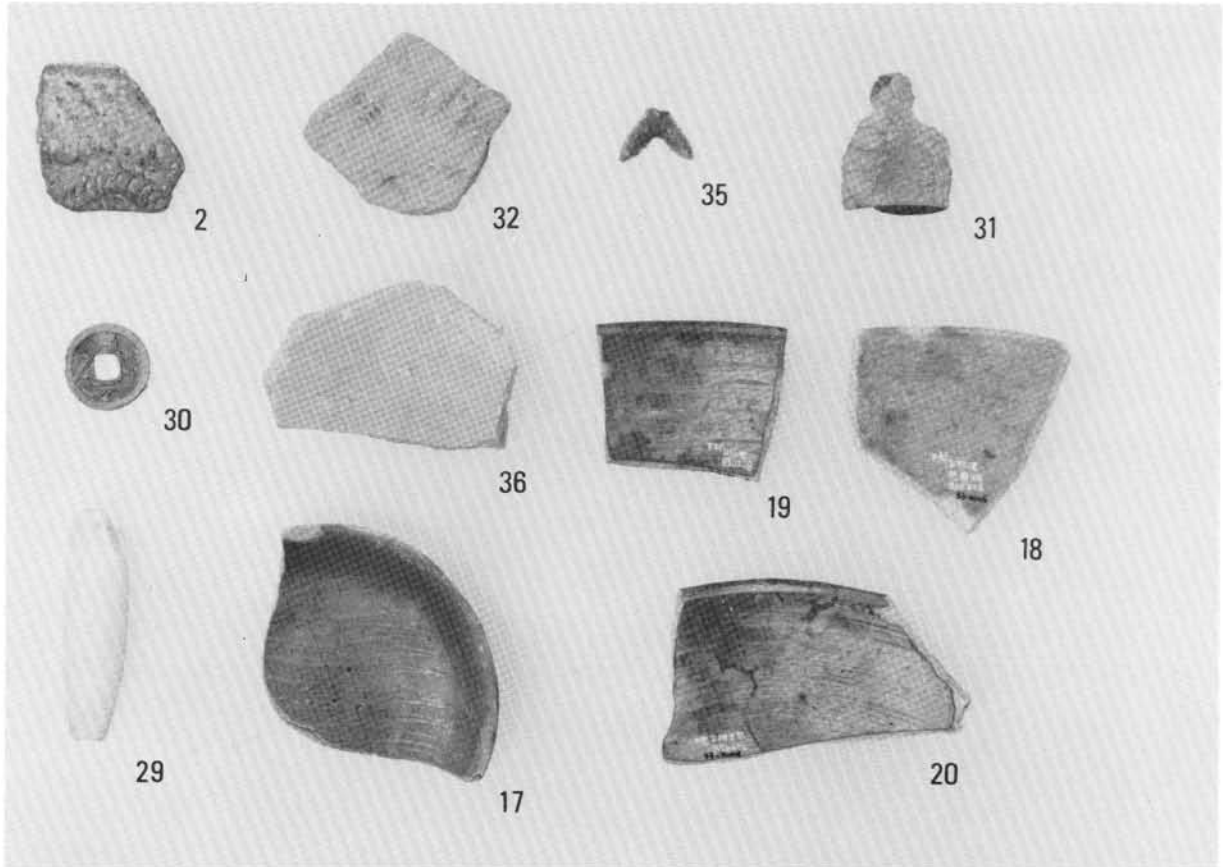
⑩ 註③に同じ



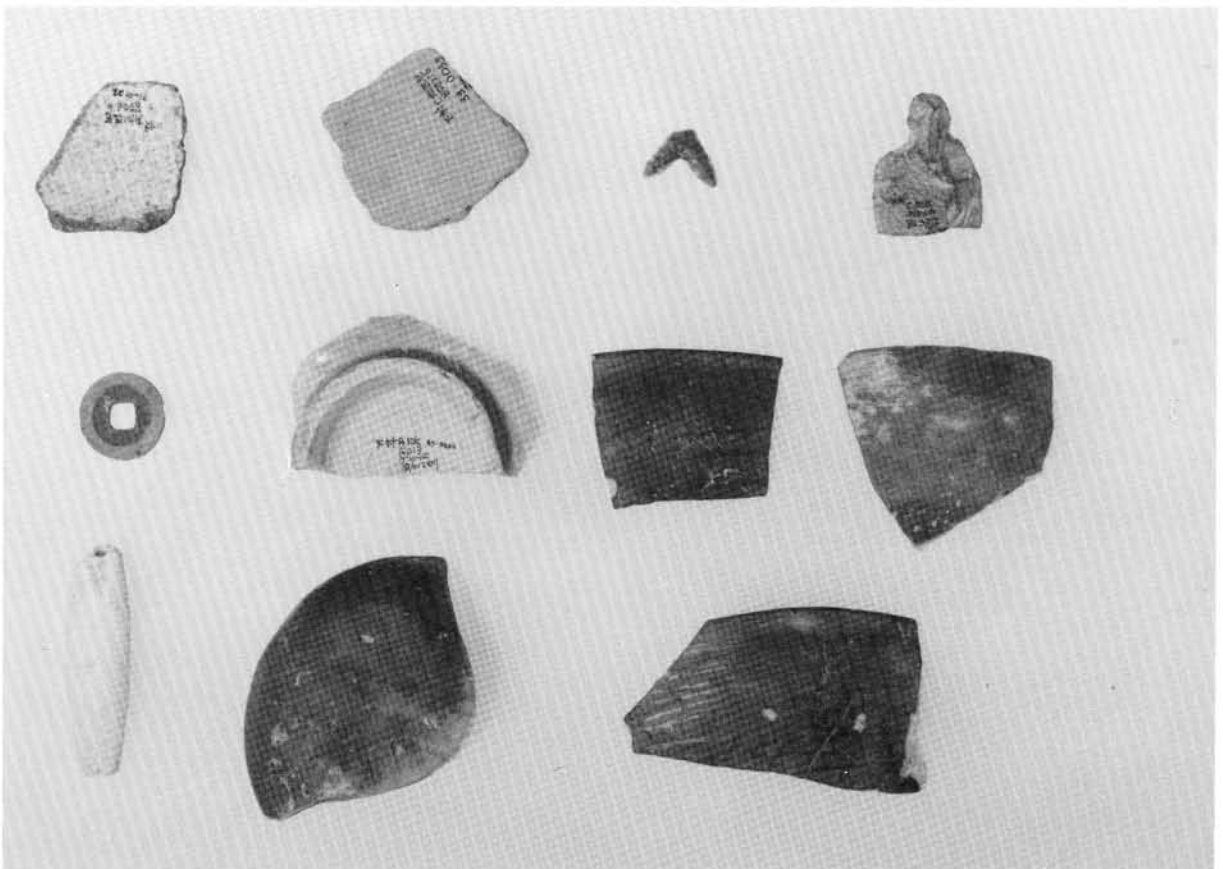
調査後遠景（西空から）



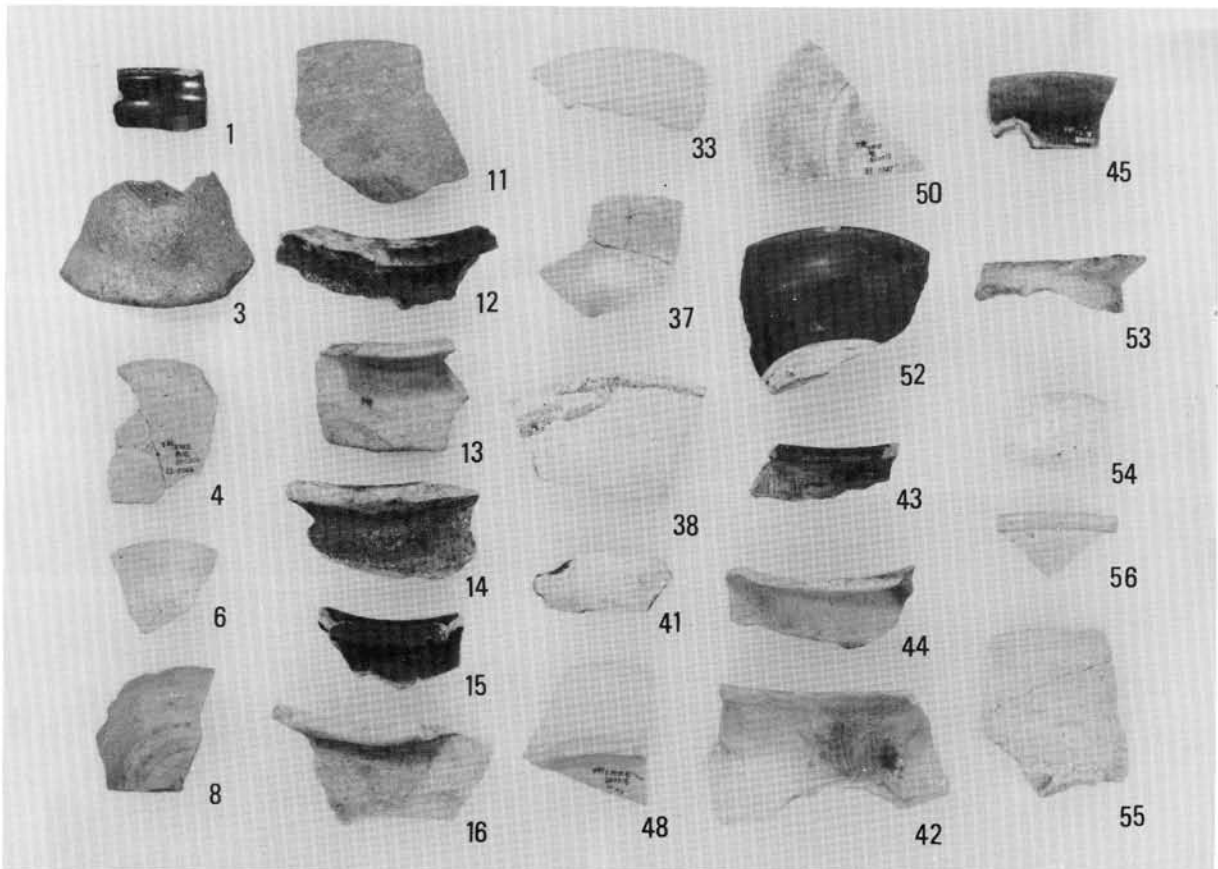
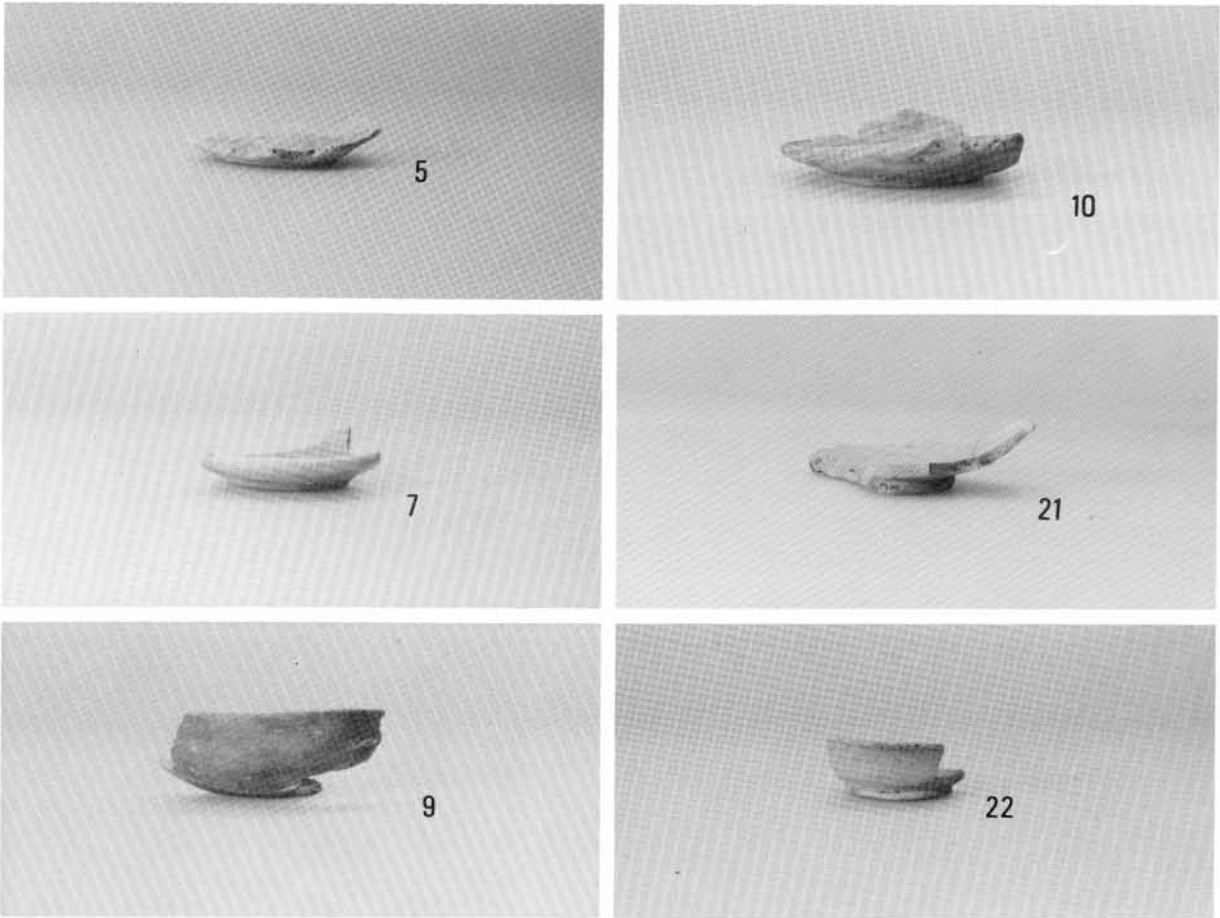
調査後全景（西上空から）



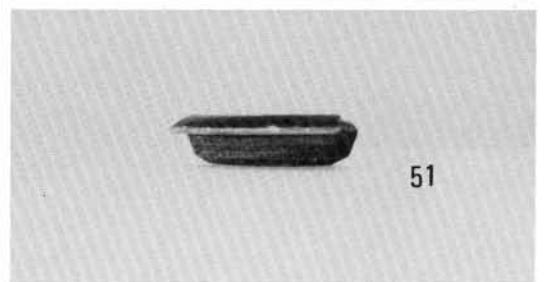
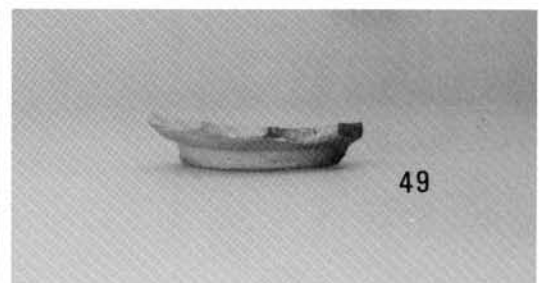
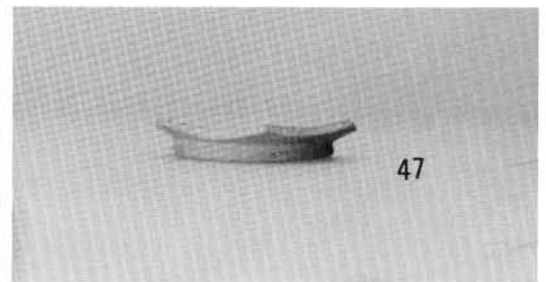
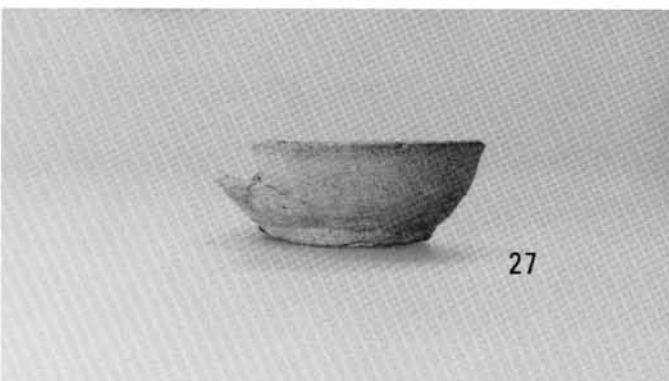
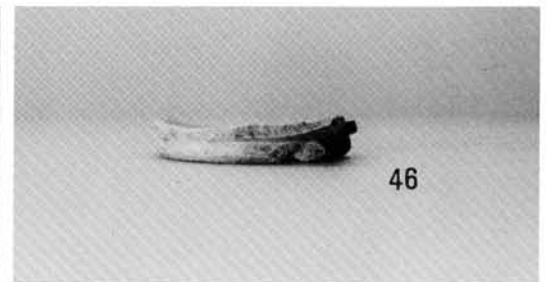
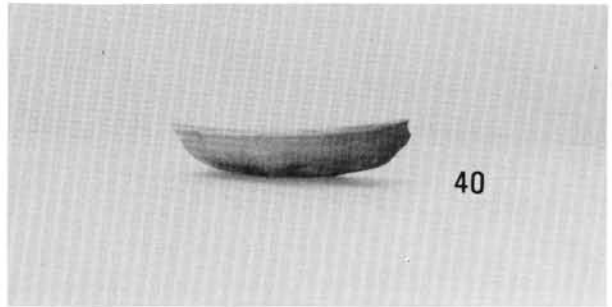
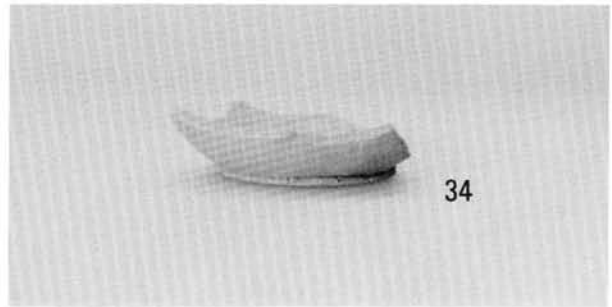
出土遺物 (1 : 2)



出土遺物 (1 : 2)



出土遺物 (1 : 3)



第一次調查遺跡

松阪市広瀬町 おおはらぼり 大原掘遺跡 (27)

上ノ広遺跡から東方約100mの中位段丘先端部の緩斜面には、大川・神宮寺系のネガティブな押型文土器片等が出土^①した大原掘遺跡がある。その遺跡範囲は根木峠を越えて大河内町方面へ向う道路以南の部分にも及んでいる。

道路建設予定地はこの遺跡末端部にあたるが、遺構の広がりや考えられたため、用地内の雑木林1カ所と水田内8カ所に4m×4mの試掘坑を設定して第一次調査を実施した。

調査は昭和60(1985)年10月28日より31日までの4日間実施した。調査地は行政上は松阪市広瀬町大原掘に属する。その結果、段丘末端部の雑木林内に設定した試掘坑では、遺物包含層に相当する黒色土(黒ボク)が厚く堆積していることが判明したものの、遺構・遺物とも認められなかった。

また水田内の試掘坑では、二次堆積の黒色土は見られたが、西を流れる小谷の氾濫や土石流などによる土砂、礫の堆積が著しく、遺構・遺物ともほとん

ど検出されなかった。

この結果により、大原掘遺跡は道路建設予定地内まで遺跡範囲は及んでいないことが判明し、本調査には至らなかった。

出土遺物で図示できるものは、山茶碗の底部破片1点のみである。

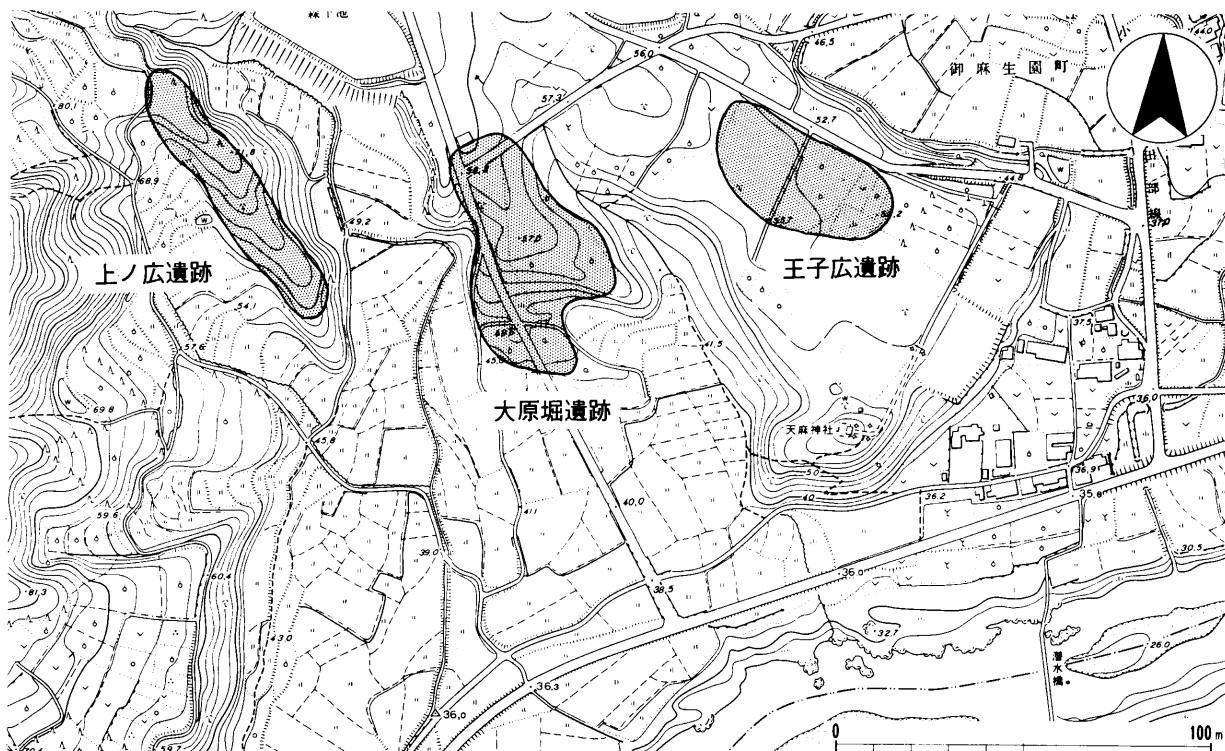
底部が約2分の1残存する。断面が台形のしっかりした高台が付く。底部には糸切り痕が残る。胎土は良く焼成も良で淡灰色を呈する。

藤沢編年の第Ⅲ段階第5型式^②に比定できよう。

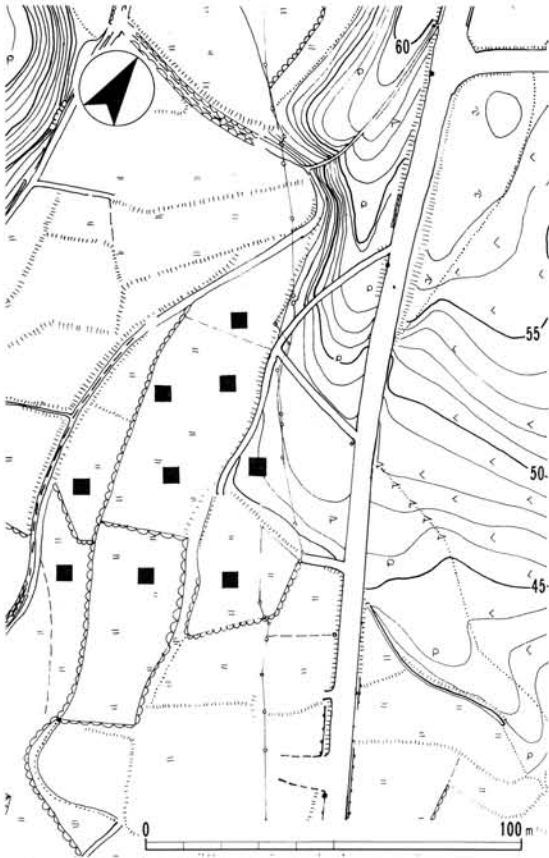
(田村 陽一)

〔註、参考文献〕

- ① 奥義次 「大原掘遺跡」『松阪市史 史料編考古』 松阪市 1978
- ② 藤澤良祐 「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』 瀬戸市歴史民俗資料館 1982



第10-1図 遺跡地形図(1:5000)



第10-2図 試掘坑位置図 (1 : 2,000)



第10-3図 出土遺物 (1 : 4)



出土遺物 (1 : 2)



調査前遠景 (上ノ広遺跡から)

せんげん やまみなみ
多気郡多気町牧 浅間山南遺跡 (30)

本遺跡は浅間山の南東斜面裾に細長く広がる崖錐上に、石器の剥片や中世の土器片が散布する遺跡として知られていた。

県道に近い斜面裾部には牧1～3号瓦窯が築かれている。

第一次調査を昭和60(1985)年3月25日から3月31日までの間、浅間山の東山麓に沿って4m×4mの試掘坑を15カ所設定して実施した。

調査地は行政上は多気町大字牧字浅間山に属する。

調査途中で新たにトレンチも設定して遺構・遺物の確認をめざしたが、遺構・遺物ともほとんど検出されず、本調査には至らなかった。

出土遺物には牧1～3号瓦窯の遺物である瓦片が少量出土した以外には、図示した縄文土器(1・2)のほか、サヌカイト製搔器(3・4)、弥生土器(5～7)、ロクロ製土師器(8)等がある。また中世陶器片や土師器片も微量出土した。

縄文土器(1・2)は同一個体で、他に体部片もあるが、牧1～3号瓦窯のトレンチ調査時から出

土した深鉢形土器。全体に磨耗が著しいため調整技法などは不明であるが、頸部から外反した口縁部は内折してく字形に近いキャリパー状の形態をなす。隆帯で長方形の区画をつくり、内部には断面が四角の棒状具による刺突文が、縦三段に配されている。

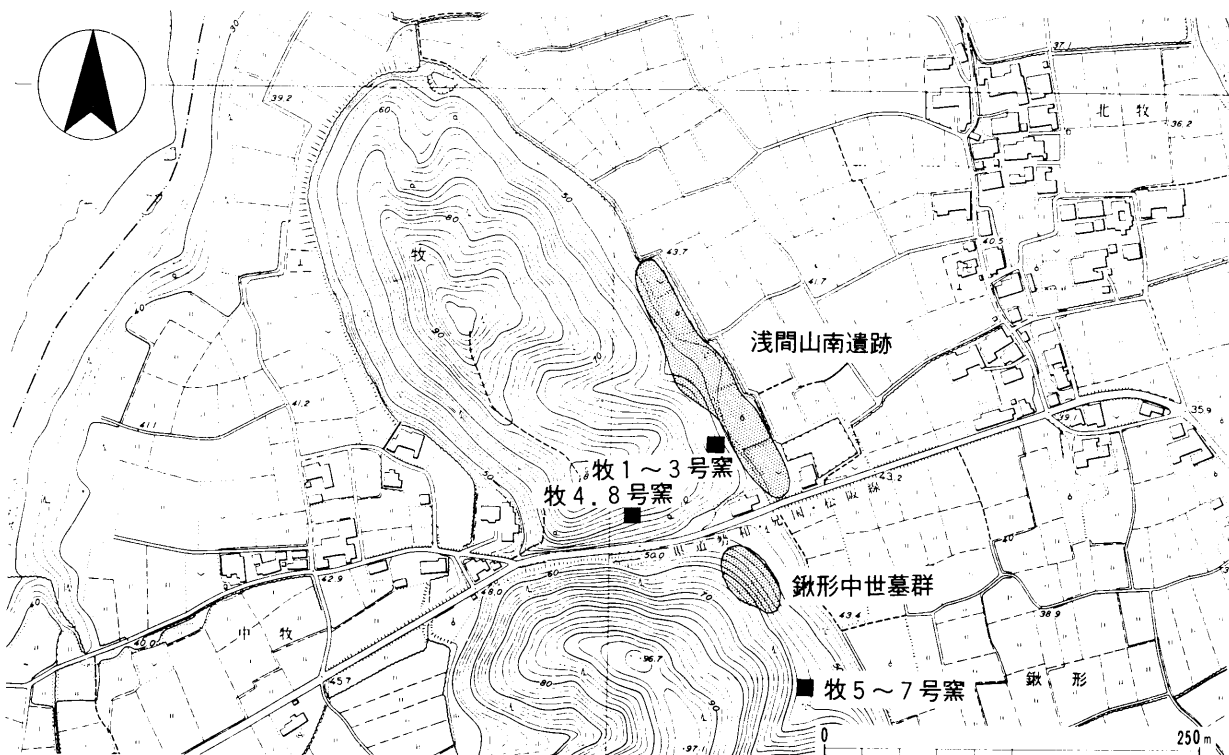
底部は平底であるが、体部の粘土接合時に、底部内側周囲を強くヨコナデしたせいであろうか底部内面中心部分が非常に厚くなっている。

胎土は良、砂粒を若干含み焼成は良、橙色を呈する。縄文時代中期中葉のもので、愛知県知多郡師崎町咲畑貝塚に類例^①がある。

(3・4)はおそらく上述の深鉢形土器と関連するものであろう。(1・2)の出土地点の崖錐直下で出土したものである。

いずれもサヌカイト製で、(3)は横長剥片を素材とし、長く弧状に張る側縁の片面(一部は両面)に細かな調整を施し刃部を作り出している。また他の二側縁にもそれぞれ片面に調整がなされている。

(4)は欠損しているが、刃部は比較的粗いタッチ



第11-1図 遺跡地形図(1:5,000)

の調整が両面に施されている。

(5) は表面採集品であるが、試掘坑からも同一個体の破片が2点出土した(6・7)。これは弥生時代前期中段階くらいの壺の体部片と思われる。ヘラ描沈線が二条見られる。

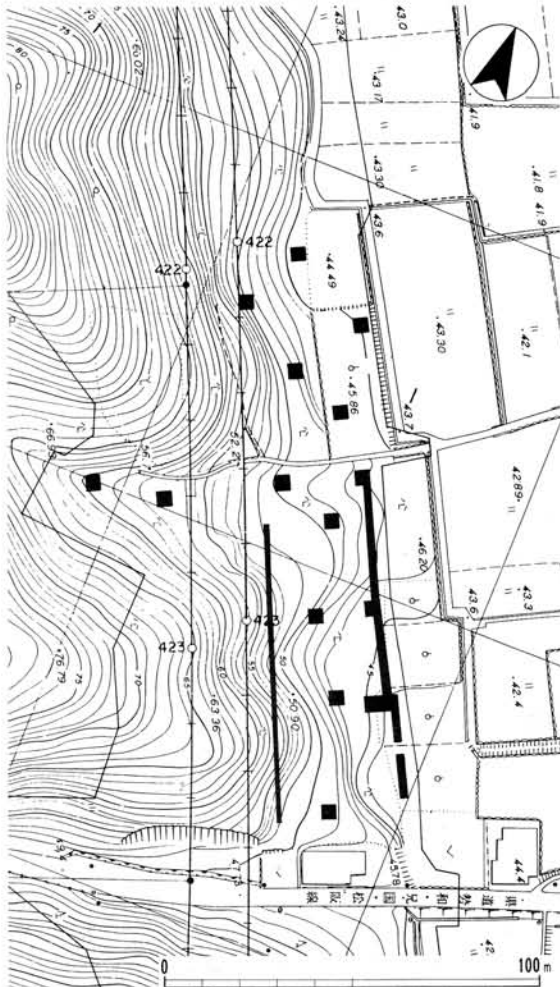
(6) は頸部に近い部分であろうか、沈線は 条確認できる。また(7)は無文部で体部片であろう。胎土は良いが砂粒を含み、焼成は良好。淡い黄褐色ないし褐灰色を呈する。

(8) はロクロ製土師器の底部である。器形は皿と思われる。磨耗のため底部外面に見られる糸切り痕さえ確認が困難である。

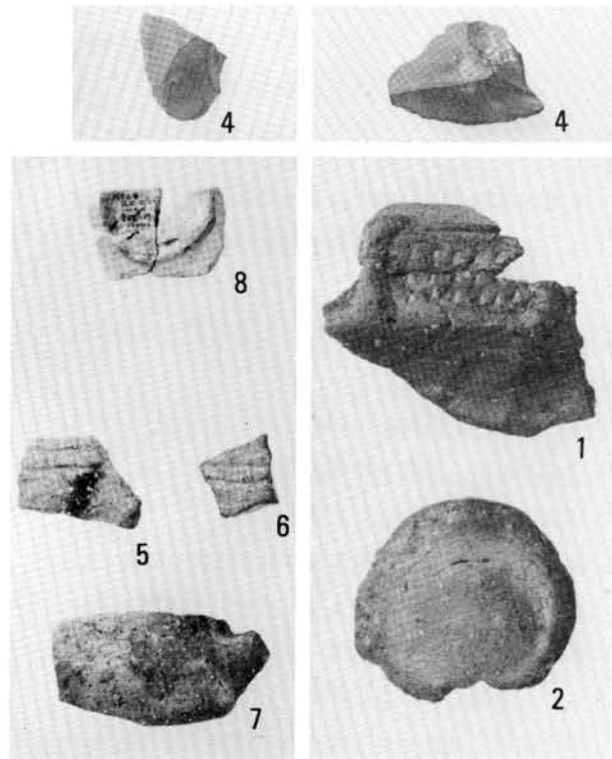
底径は4.6cmで胎土は良、焼成は良いがもろく磨耗が著しい。淡い乳褐色を呈する。(田村 陽一)

〔註〕

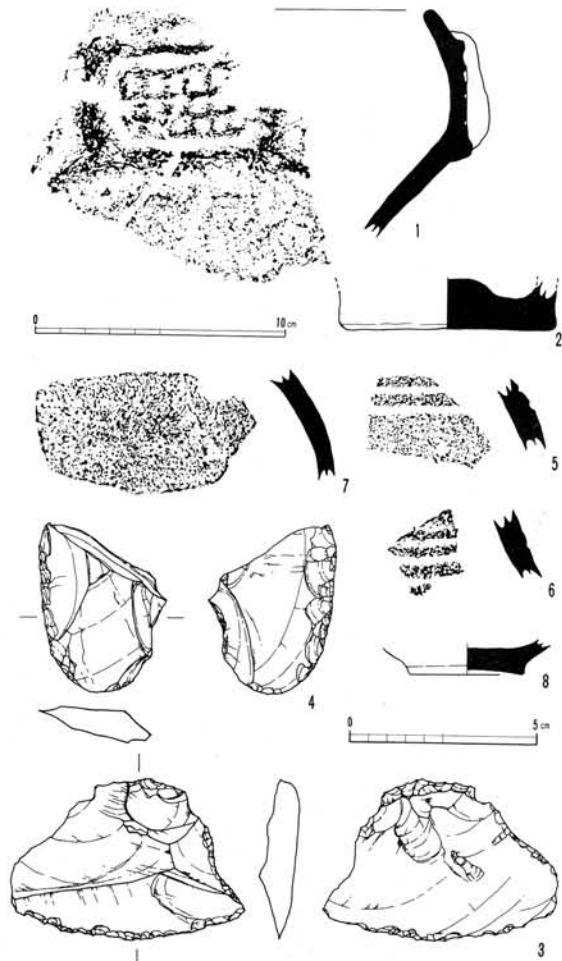
- ① 磯部幸男ほか 『咲畑貝塚』 師崎町立師崎中学校 1960
- ② 伊藤久嗣氏の御教示による。



第11-2図 発掘区位置図 (1:2,000)



出土遺物 (1:3)



第11-3図 出土遺物 (1:3ただし3・4は1:2)



遺跡遠景（北西から）



調査後全景（南東から）

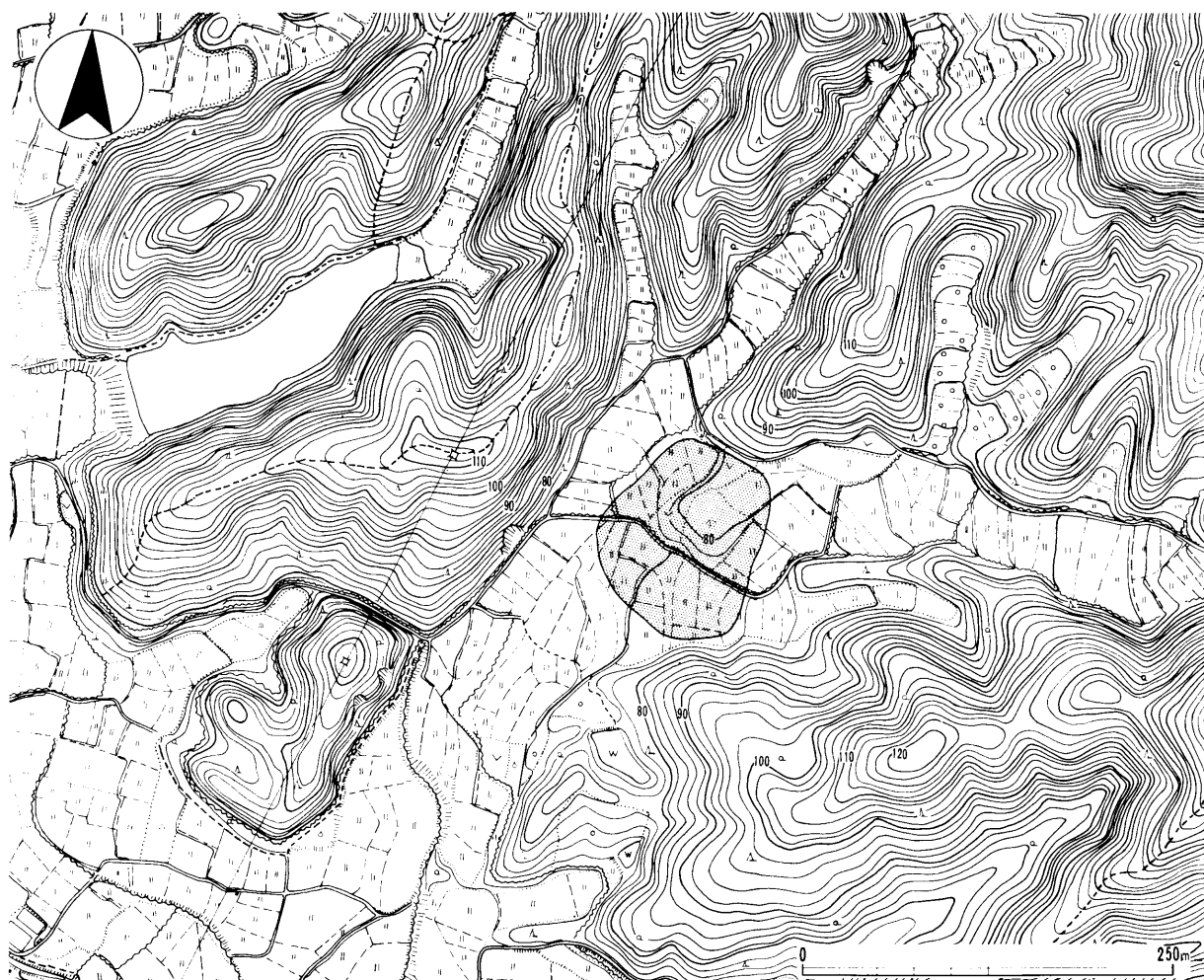
多気郡勢和村 下村 B 遺跡 (34)

本遺跡は下村 A 遺跡の南東約500mの山間部の小谷にひらけた水田、及び畑地に位置する。行政上は勢和村大字丹生^{はまだに}字長谷谷に属する。

昭和55年の踏査によって、石器剥片等の遺物が採集されていたため、第一次調査を実施した。調査は昭和59年12月8日～9日まで行われ、2m×2mの

試掘坑を11カ所設定した。石器剥片の採集されたとと思われる畑地は道路予定地外で、そのやや高い微高地は斜面しか用地にかからなかったこともあり、遺構・遺物は全く検出されず、本調査には至らなかった。

(田村 陽一)



第12-1図 遺跡地形図 (1:5,000)



第12-2図 試掘坑位置図 (1 : 1,000)



遺跡遠景 (北東上空から)

三重県農林水産部提供

櫛田川中流域の地質と岩石

三重県立津西高等学校

磯 部 克

1. 概 要

本地域は、三重県のほぼ中央に位置し、伊勢平野の西部で、北は松阪市矢津町から、南は多気郡勢和村古江に至る南北約10km、東西約6kmの範囲である。本地域の中央には、櫛田川が東西に大きく蛇行して流れている。又、北部は阪内川の上流が含まれる。

周辺一帯は扇状地や段丘・台地・山地があり、山地は標高800m余である。段丘面は、標高50~100mぐらいで、高位~中位段丘が形成され、集落や畑地となっている。

本地域における地質の特徴は、南辺の多気郡勢和村古江付近で、東西に中央構造線が存在することである。そして、その北側の内帯では、花崗岩を源岩とする領家帯が中央構造線に沿ってほぼ帯状に分布し、北方に向かうに従って、その変成度は弱くなっている。又、中央構造線より南側、すなわち、外帯は三波川帯と称する結晶片岩帯が分布し、内帯とは大いに趣を異にしている。

2. 地質と岩石

本地域に分布する地質は図-1に、又、近畿自動車道の地質断面図は図-2に示した。層序区分は表に示した。以下これに沿って、主として岩石面から述べる。

(1) 沖積層

新生代第四紀完新世は図-1において、北部阪内川周辺と櫛田川流域に分布し、水田として利用されている。厚さ2~数mで、未固結の土、砂、礫から成っている。

(2) 更新世堆積物

○低位段丘層

松阪市矢津町の八雲八柱神社の東面では、10m内外の砂礫層(図-3)が見られる。シルト約15%、砂40%、礫40%、その他で構成されている。この地層は、阪内川の南側にも見られる。なお、荒木慶雄、北村治郎によると、八雲八柱神社西側に崖錐がある

と報告しているが、小規模なので、本論では省略する。

○扇状地堆積物

櫛田川北岸の御麻生園に分布し、厚さ20数mある。上部数mは30%がシルト、40%が砂、その他で構成され、その下部数mでは、10数%がシルト、60数%が砂、10数%が礫、その他となっている。なお河岸では、厚さ10m内外の低位段丘堆積物が認められるが、図-1では省略した。

なお、本地域には、新第三系の奄芸層群、一志層群は分布しない。

(3) 和泉層群

勢和村朝柄を中心に、中央構造線南側、帯状に和泉層群は介在する(図-1のNo.8付近)。ただし、No.8では小規模の為、図中では省略した。

この層群は、後期(上部)白亜系で、一般的には中央構造線に沿う断層運動により変形し、圧碎されている。露出も悪く、その層理面の測定は困難な場合が多いが、測定可能な場合には、東西に近い走向で、北傾斜を示すと報告されている。

勢和村下出江のNo.8地点では、役場前南側の川の

時 代		標 準 区 分	伊勢寺・松尾地区・松阪市南部	
新 生 代	第 四 紀	完新世	-(沖積面)- 沖積層	
		更 新 世	-(低位段丘面)- 低位段丘堆積層	-(射和面)- 射和礫層
			-(中位段丘面)- 中位段丘堆積層	-(伊勢寺面・中馬面)- 伊勢寺礫層・中馬礫層
			-(高位段丘面)- 高位段丘堆積層	-(駅部田面)- -(五輪峠礫層)- 高位礫層
	新 第 三 紀	鮮新世	鮮新統(奄芸層群下部) 岩内口層	
		中新世	中新統(一志層群中下部) 鳥戸層 松尾層 大河内層	
	中 生 代	後期白亜紀	和泉帯	
		白亜紀	領家帯	
		ジュラ紀	三波川帯	

層序区分表

北岸に層理面を示す露頭が認められる。全体に茶色～灰色でもろい。内部の新鮮な面は、灰色でやや層状をなし、細粒である。

鏡下でもその構造を示し、明らかに圧砕されていることがわかる。図-4の中央部分、帯状のものは堆積時の泥質部の名残りである。粒状のものは石英がほとんどで、波動消光を示す。まれにひずみをうけた黒雲母が緑泥石化しているのが認められる。

(4) 領家帯

ア. 君ヶ野花崗閃緑岩帯

本調査地域では、松阪市矢津町、松阪市辻原町に囲まれる地域に分布する。一志郡美杉村君ヶ野を模式地とする花崗閃緑岩である。松阪市矢津町の八雲八柱神社より川に沿って、西へ200m登った河原に露頭がある(図-1のNo.1)。

等粒状組織、完晶質で、表面は茶褐色であるが、新鮮な部分では優白色をした中粒の花崗岩である。鏡下では、石英は著しい波動消光は認められない。一方、石英の中に斜長石を取り込んだポイキリチック構造やミルメカイト構造が見られる。有色鉱物では黒雲母が大半で、角閃石は認められない。ジルコンや珪線石が少量認められる。全体に、やや黒雲母が一定方向に並んだ、いわゆる片麻状組織も認められるが、この岩石は中粒花崗岩である。従って、領家帯に属するといえども、場所によっては、ほとんど変成していない岩石も存在することを示すものである。

荒木慶雄・北村治郎は、この岩石を含む地帯を花崗岩と報告しているが、領家帯研究グループは、君ヶ野花崗岩帯としている。この地域では、先に述べたように変質していない岩石も認められるが、後述するNo.2、No.3をみると、やや変質を受けている部分も認められるから、君ヶ野花崗閃緑岩帯とした。

No.2地点は、No.1より山1つ南に隔てた阪内川支流の上流に位置する。直線距離にして、西北西約1kmである。

外観はやや有色鉱物がNo.1より多く見られ、又、黒雲母の縞状組織が認められる。つまり、片麻状組織が認められる。

鏡下では、No.1より黒雲母が多くなり、一定配列を示す。又、斜長石にはアルバイト双晶が見られる

が、やや風化している。少量の斜方輝石が見られる。さらに同地点では、時に黒雲母を多く含むハンレイ岩様のゼノリス(捕獲岩)が見られる。石英には波動消光が見られ、黒雲母は一定配列をなし片麻状組織を呈する。斜長石はやや風化し、汚れが見られる。

松阪市勢津町のNo.3地点は、大広の西方1kmの同町勢津橋北露岩である。角閃石・黒雲母が等量に含まれ、黒っぽく見えるが、著しい片麻状組織は見られない。石英・長石の他、粒状のジルコン・磁鉄鉱や長柱状の珪線石がみられる。細粒・完晶質で、かなり新鮮な閃緑岩である。なお、この場所では同成分で、やや粗粒の閃緑岩(No.784)も露出する。

イ. 美杉トータル岩帯

本岩は、松阪市辻原町(No.4)の国道166号線の道路際に見られる。君ヶ野花崗閃緑岩帯のものと違って、この道路から南側では、正長石をほとんど含まない石英、斜長石が多くなるトータル岩帯となる。

外観は粗粒で黒雲母が目立つ。鏡下では、黒雲母は曲げられ、一部、角閃石や黒雲母は緑泥石化したり石英や斜長石が破碎されているのが認められる。荒木慶雄・北村治郎はこの岩石を圧砕岩としているが断層に伴う、やや圧砕性を帯びた角閃石・黒雲母トータル岩とした方がよい。

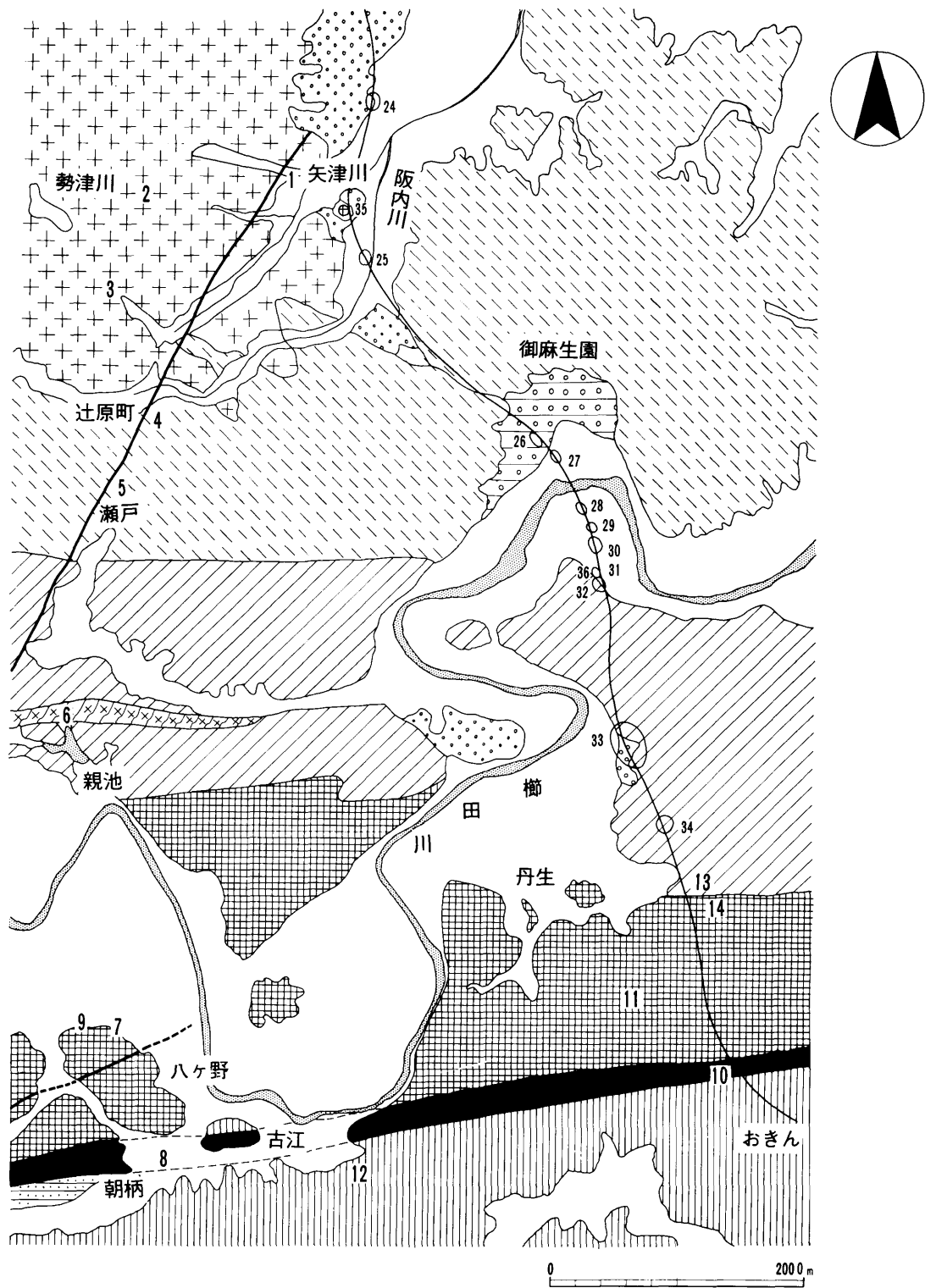
○トータル岩

松阪市辻原町瀬戸のNo.5地点は、瀬戸バス停より少し南にある。表面はかなり風化して茶褐色となり、その節理をわずかに残している。新鮮な面では、片麻状組織が見られる。その片麻状に沿って、長石・石英がポーフィロクラストとなり、白色だ円形として認められる。いわゆる鹿塩片麻岩である。No.4地点付近の岩石から見ると、片麻状組織は一段と進んでいて、完全な片麻岩といえる。

ウ. 畑井トータル岩帯

○圧砕岩

No.6の地点は、国道166号線沿いの親池付近である。国道東側の露頭はほとんど風化して、かなり粘土化が進んでいる。深部の所でやや緑色を帯びた中に白斑状のものを見たが、輝緑岩の名残りを示すものかと思われた。しかし、国道の西側、親池の北方、この池への流入口付近で、半ば風化した露頭がある。一見、粘板岩風に見え、褐色で、辛うじて節理を残



- | | | |
|----------|-----------|-----------|
| 沖積層 | 美杉トータル岩 | 三波川結晶片岩 |
| 低位段丘層 | 圧砕岩 | 断層 |
| 和泉層群 | 畑井トータル岩 | 近畿自動車道と遺跡 |
| 扇状地堆積物 | ミロナイト化片麻岩 | |
| 君ヶ野花崗閃緑岩 | 鹿塩ミロナイト | |

図-1 松阪市南西部及び勢和村付近地質図 (1 : 50,000)

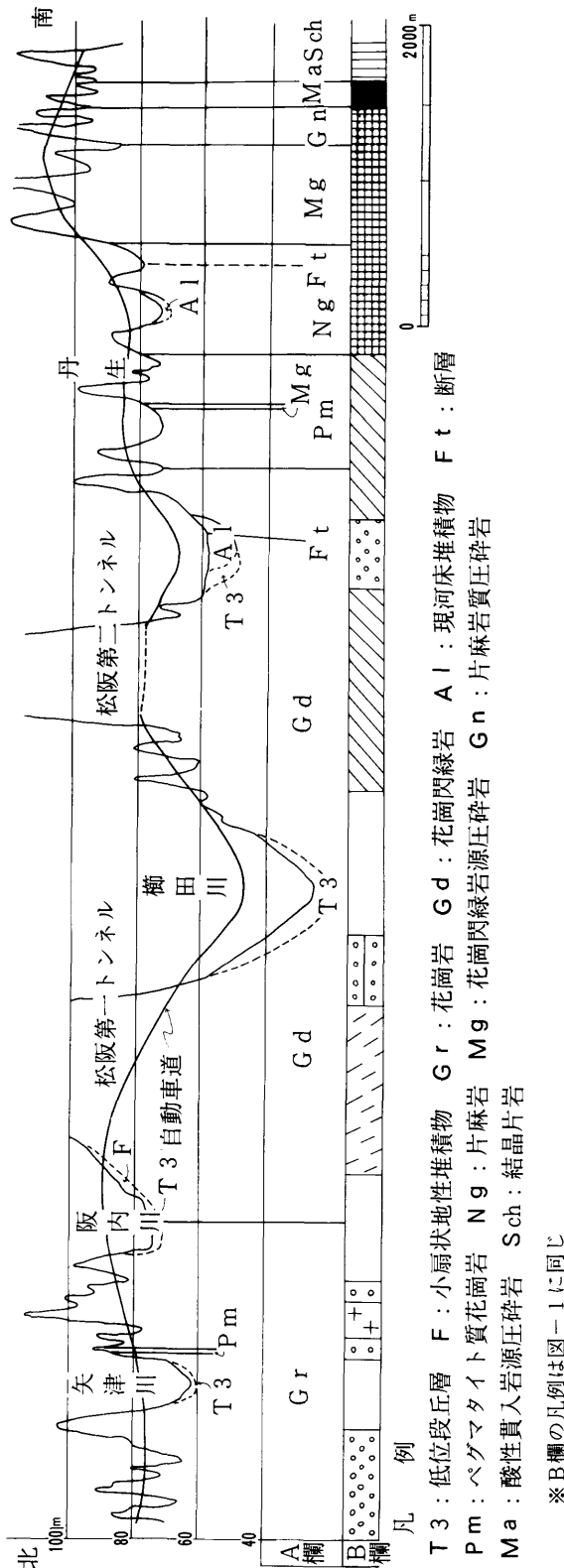


図-2 地質断面図 (A棟: 道路公団 B欄: 筆者)

している。新鮮な部分を見出すのが困難なくらいである。やや緑がかった灰色の岩石中に、1mm以下の細粒状の斑晶が見られる。

鏡下で見られる白色粒状のものは、細粒状となった石英・斜長石の集合体である。又、有色鉱物状に見えるものは黒雲母が風化し、緑泥石化したものである。黒雲母と角閃石とが、かなりはっきりした形が認められることから、源岩は花崗閃緑岩と断定できる。従って、領家帯研究グループの変輝緑岩と称するよりも、荒木慶雄・北村治郎のいう圧砕岩の方が適当であろう。変輝緑岩なら、短冊状の斜長石が認められるはずであるから。

畑井トータル岩と先的美杉トータル岩との違いは見掛上ほとんど区別はつかないが、鏡下では、美杉トータル岩より片麻状組織が全体に進んでいる事がわかる。すなわち、美杉トータル岩帯が比津花崗岩帯を経て畑井トータル岩帯となった場合と、経ないで直接畑井トータル岩帯を形成した場合とがある。No.13の丹生から長谷へ抜ける道路付近では、明らかに片麻状組織が認められる。なお、その近くの櫛田川岸には粗粒の黒雲母・角閃石の発達した片麻岩の露頭がある。

エ. ミロナイト化片麻岩帯

勢和村のNo.7、No.9地点は、近畿自動車道の下を抜けて東側にまわると、淡緑色を帯びた粗粒優白色岩の露頭がある。領家帯研究グループは畑井トータル岩帯と称し、荒木慶雄、北村治郎は花崗閃緑岩と称した。しかし、高木秀雄はミロナイト化片麻岩と称し、筆者もこれが適当と考える。それは、圧砕作用をかなりうけながらも、まだ片麻状組織が残っている岩石であるからである。これは、中央構造線上の鹿塩ミロナイトと明瞭に区別できる。勢和村入ケ野のNo.7、No.9地点では、優白質の眼球状ミロナイトで、有色鉱物はほとんどなく、ややもろくなっている。微斜長石や石英が大部分を占め、部分的には粘土を生じている。

オ. 鹿塩ミロナイト帯

この岩石は酸性貫入源圧砕岩と呼ぶ人もいる。No.10地点は、国道42号線から北へ約1km入った所である。これと同じものが、勢和村古江の櫛田川河原でも見られる。荒木慶雄・北村治郎は、これを赤ミロ

と称した。全体が茶褐色で、濃褐色の縞状が見られる。かなり圧砕され、風化の為に鉄分が生じ、このような褐色を呈するものと思われる。この新鮮なものは緑色をなし、一見、閃緑岩～輝緑岩風に見え、しかも、前者に比べて、かなり固結度も高い。

鏡下では、斜長石がほとんど粘土化し、汚れて見え、又、石英は少量認められる。粘土化した斜長石や石英の隙間には、圧砕作用で生じた微粒方解石の集合体がところどころに見られる。

カ. 三波川帯

三波川帯は中央構造線より南、すなわち外帯に分布する泥質起源の石墨千枚岩や、擬灰岩質起源の緑色片岩（緑泥片岩、緑簾片岩等）である。中央構造線付近では特に石墨千枚岩が分布し、片理面はE-W方向であり、南へ行くに従って、 $N60^{\circ} \sim 65^{\circ} W$ 、 $N40^{\circ} \sim 90^{\circ}$ の走向、傾斜をそれぞれ示す。大台町栃原付近では、緑色片岩が目立つようになる。又、勢和村古江から色太に通じる旧道上に用水路が通っている付近では、赤鉄鉱石英片岩（図-12）が見られる。度会町の森添遺跡では、この岩石で造られた石棒が出土している。

3. 鉱物

(1) 自然水銀 Hg

○勢和村丹生鉱山日の谷坑……水銀鉱脈中に、辰砂、鶏冠石を伴い、少量産する。

(2) 黒辰砂 HgS

勢和村馬場……ミロナイト化片麻岩中の粘土脈に鶏冠石・方解石を伴い、少量産する。

勢和村丹生鉱山……辰砂の仮晶で、黒色 a (100) 面を主とし、しばしば小さい O (111)、 O_1 (111) 面が発達し、水銀鉱脈中に鶏冠石、辰砂を伴い、径 1 mm 以下のものを少量産する。

(2) 辰砂 HgS

勢和村丹生鉱山……アプライト（半花崗岩）の粘土脈に沿う暗色・玉髄質の微細脈中、又は、母岩中に鉱染し、黒辰砂・鶏冠石を伴う。赤朱色、概ね鶏冠石の少ない部分に豊富。

度会町、森添遺跡から出土した土器に塗られた辰砂は、ここの産地か。

(3) 鶏冠石 As_4S_4

勢和村丹生新亀……鉱染した辰砂の為に、うす桃

色を呈するカオリン質の鉱石に、鶏冠石が幅約 3 cm の脈をなして貫いていてその一部に見られる晶洞に美しい結晶が族生する。赤色透明ないし、橙赤色不透明で、良晶は透明度が高い。結晶は短柱状で、長さ 2～3 mm ぐらいのものが普通であるが、大きいものは 5 mm に達する。面の発達により、次の 3 種の晶相がある。

ア. m、l、b 端面に、z、n、e、x、r が認められ、x は最大で n がこれに次ぎ、r、c、e、z の順で小となる。c は他のものに比較するとやや大きく、この晶相の特徴と思われる。z、e は小さく、z は反射不良である。この試料は他の 2 者と異なり、q が認められない。

イ. m、l 及び、x を主とし、これに w、b、n、e、r、q、y を伴うもので、時に細い a を伴う。x は特に大きく発達し、柱帯の面は除けば n がこれに次ぎ、r、e、q、y の順である。y は極めて小さく、w も細く、かつ一面のみ認められる。柱面上には、(001) に平行な条線が見られる。本試料として不完全なものであるが、図には理想的にあらわした（図-4）。

ウ. a、m、l、b、z、c、n、e、x、r、q よりなり、a は細いが、イよりは大きく発達し、c は極めて細い。この型は、前 2 者と異なり [100] が大きくなり、[100] に属する面と [101] に属する面とがほぼ同大に発達しており、又、z がやや大きく発達する。本鉱山産の鶏冠石の特徴は、[101] が大きく発達し、かつ、c が認められることである。

勢和村丹生鉱山……鉱脈中に辰砂と共に産し、又単独に母岩中に細脈をなして産する。通常、極めて美しい結晶をなしており、普通は、長さ 3～5 mm ぐらいの柱状結晶を示すが、時には、径 1 cm、長さ 2.5 cm に達することがある。

勢和村馬場……片麻岩中の粘土脈に黒辰砂、方解石を伴い、長さ 1.5 cm、径 7 mm 以下の橙赤色の美晶を産する。

勢和村出江……櫛田川右岸の圧砕岩中に、表面、橙黄色をなして、すじ状に産する。新鮮な面は橙紅色を示す。

(5) 石黄（雄黄） As_2S_3

勢和村丹生鉱山……水銀鉱脈の酸化帯に、黄色、

ないし橙黄色塊状のものを少量産するが、時に微細な柱状結晶を認めることがある。

(6) 輝安鉱 Sb_2S_3

勢和村丹生鉱山……水銀鉱脈中に辰砂を伴い、少量産する。

(7) 白鉄鉱 FeS_2

勢和村丹生鉱山……水銀鉱脈中に、小塊状のものを少量産する。

(8) ルチル (金紅石) TiO_2

松阪市茅原町……雲母片岩中に産する。

(9) 方解石 $CaCO_3$

勢和村丹生鉱山……水銀鉱脈中に鶏冠石を伴い、白色ないし、淡褐色半透明、又は、不透明の径1cmに達する結晶を産する。

勢和村馬場……ミロナイト化片麻岩中の粘土脈に鶏冠石、黒辰砂等に伴い産する。

(10) 水晶 SiO_2

勢和村丹生鉱山……水銀鉱脈中に鶏冠石を伴い、両端面のある無色透明の小結晶 (最大長さ1cm、径2mm) を少量産する。

4. 応用地質

(1) 旧丹生鉱山

鉱床は、優白質のミロナイト化片麻岩中に胚胎するE-W系、及びN-S系の2方向の鉱脈から構成されている。旧坑に見られる多くの鉱脈は、鶏冠石を多量に伴う石英・辰砂脈で、N20~25°W、50~60°Wの走向、傾斜のものである。灯籠旧坑と呼ばれているものでは、鉱脈の規模は、延長40~60m、

上下に40m以上、脈幅60~150cmで、1つの富鉱体は、上下に10~15m程度といわれている。E~W系は粘土脈を主体とするもので、規模もN-S系のものに比べてやや大きいようである。辰砂は普通、黒色~紫紅色を呈することが多く、俗に准辰砂と呼ばれている。鉱石の品位は0.4~0.6%前後、富鉱部で数%程度のもので、この地域には、まだ未採掘の富鉱部がある。

鉱床の成因や時期は、中央構造線の北側の領家帯の変成岩類・深成岩類を母岩とする浅成鉱脈鉱床であり、その生成時期は瀬戸内区 (新第三紀以降の地質区=第三紀鮮新世後半から第四紀完新世半ば) にかける新期の室生火山岩類の活動時期に関連していると考えられる。

(2) 丹生大師湯 (丹生鉱泉)

古くは「勢陽考古録」(1815) に登場し、「潮之井」「潮沢」「塩加伎場」「塩坪」と呼ばれてきた場所が、丹生大師北方約1kmの櫛田川河岸にある。この河岸のものと同じ水脈と思われるものが、現在、丹生大師の北西100数10mにあり、大師湯として親しまれている。大師湯は説明によると、成分・効能は次のとおりである。

「鉱泉試験成績」

溶存ガス (酸素、窒素)、硫酸、塩素、重炭酸、遊離炭酸、全炭酸

「主治効能」

慢性関節、筋肉リュウマチ、慢性婦人生殖器病、各種神経痛、腺病症、肺疾患、殊に傷一切等。

〈参考文献〉

- 堀 純郎 (1953) 本邦の水銀鉱床 地調報告 No.154 地質調査所
- 山田敬一 (1968) 水銀のはなし③ 地質ニュース No.162 P. 7~8 実業公報社
- 荒木慶雄・北村治郎 (1968) 紀伊半島中部の中央構造帯 三重重大紀要38
- 杉山隆二他 (1973) 紀伊半島の中央線に沿う地帯の地質図 中央構造線 東海大出版
- 北村治郎・荒木慶雄 (1977) 松阪市の地質 松阪市 (自然編) 第一巻
- 伊藤 誠 (1978) 三重県粥見地域の花崗岩類と圧砕作用 M T L No.3 P.99~102
- 大平芳久 (1982) 紀伊半島中央部、高見山北方地域の領家帯の地質 地質雑巻88 No.6 P.467~481
- 端山好和 (1982) 近畿地方東部の領家帯の地質一特に花崗岩の岩体区分と相互関係 地質雑巻88 No.6 P.461~466
- 今井敏夫 (1983) 近畿自動車道伊勢線松阪-勢和地区 第二次土質調査 日本道路公団名古屋建設局
- 高木秀雄 (1985) 紀伊半島東部粥見地域における領家帯の圧砕岩類 地質雑巻91 No.9 P.637~651
- 磯部 克 (1986) 三重県地質図集 三重県高等学校理科研究会
- 磯部 克 (1988) 三重県「古典地学」資料集 三重県高等学校理科研究会
- 磯部 克 (1981) 顕微鏡下でみた「三重の石」
- 磯部 克・田畑 茂 (1986) 三重県鉱物誌一付、三重県地質学文献目録 三重県高等学校理科研究会

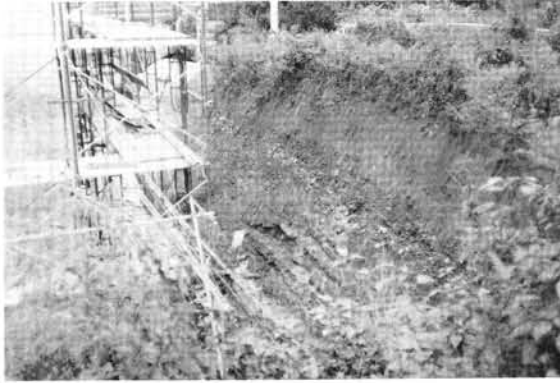


図-3 低位段丘層 松阪市矢津町八雲八柱神社東

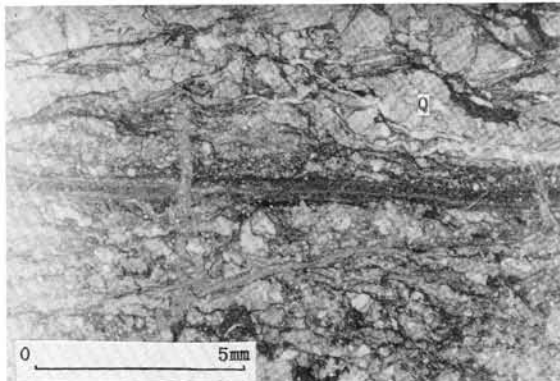


図-4 和泉砂岩 勢和村下出江No.8地点(789) オープンニコル、Q:石英

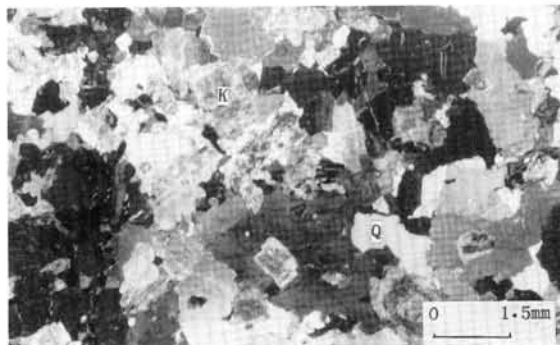


図-5 花崗岩 松阪市矢津町No.1地点(780) クロスニコル、Q:石英、K:カリ長石

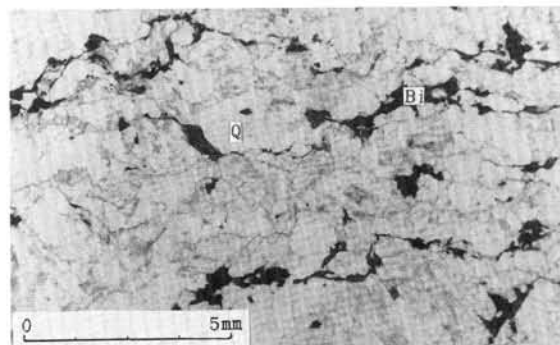


図-6 片麻岩 松阪市矢津町No.2地点(782) オープンニコル、Q:石英、Bi:黒雲母

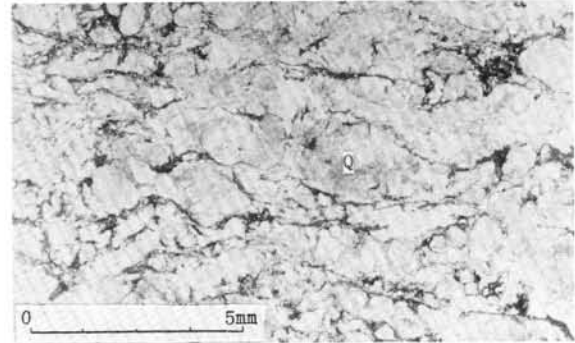


図-7 片麻岩 松阪市辻原町No.5地点(786) オープンニコル、Q:石英

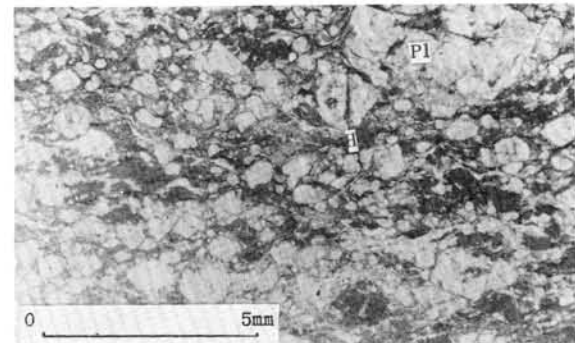


図-8 圧砕岩 松阪市小片野町親池北No.6地点(787) オープンニコル、H:角閃石、Pl:斜長石

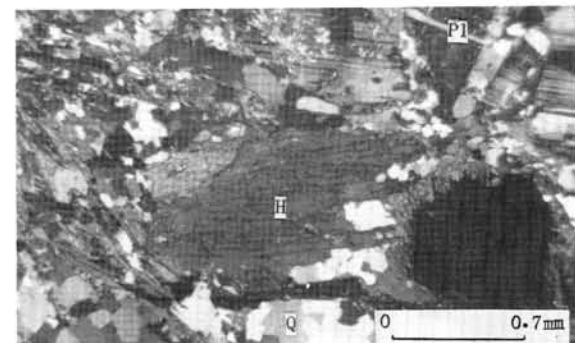


図-9 ミロナイト化片麻岩 勢和村入ヶ野No.7地点(734) クロスニコル、Q:石英、Pl:斜長石、H:角閃石

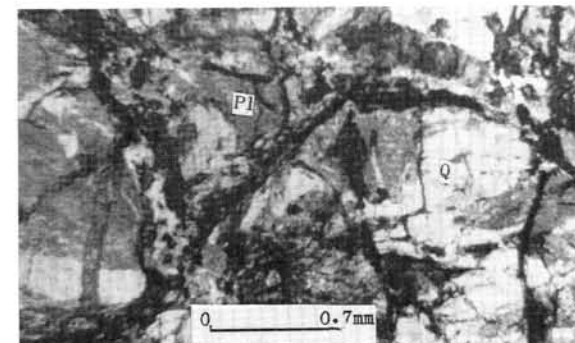


図-10 圧砕岩 勢和村おきんNo.10地点(625) オープンニコル、Q:石英、Pl:斜長石



図-11 No.10地点における中央構造線、図右上から左下にかけて見られる。走向：東西、北70～80傾斜の逆断層、図で上部が鹿塩ミロナイト帯の 圧砕岩下部は三波川帯の結晶片岩である石墨千枚岩

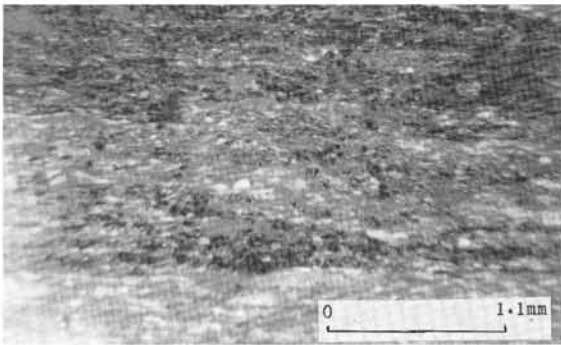


図-12 赤鉄鉱石英片岩 勢和村古江No.12地点 (035) クロスニコル、粒状黒点部が赤鉄鉱、他は石英

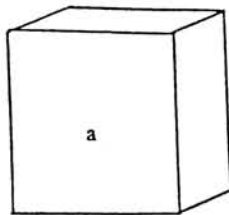


図-13 黒辰砂 勢和村丹生鉱山

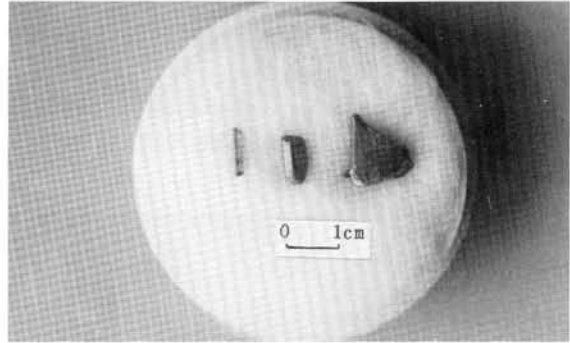
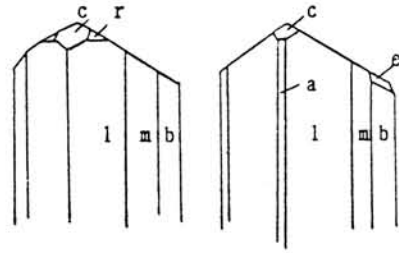


図-14 鶏冠石とその結晶図 勢和村丹生鉱山



図-15 旧日の谷坑 勢和村丹生 (昭和63年12月27日撮す)



図-16 大師湯 (丹生鉱泉)

平成元(1989)年3月に刊行されたものをもとに
平成17(2005)年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告87-1

近畿自動車道(久居～勢和)
埋蔵文化財発掘調査報告
—— 第1分冊1 ——

1989(平成元)年3月31日

編 集 行 三重県教育委員会

印 刷 光出版印刷株式会社
